川柳 上巻

近世文藝叢書第八

近世文藝叢書第八　川柳一

緒言

文政年間小石川養生所の肝煎なりし小川又右衛門顯道は、もと醫家なれど政道にも用意ありし者なり。其隨筆『塵塚談』において川柳點の狂句を論じて曰く、俳諧に六玉川、前句附に柳樽といふ雙紙あり。人の擧動、心のよしあし、尊卑の人情、上下の人心の有樣、其外世の中の事情をされ句にいへるもの也。されどなぞの類に似たる事ありて、早速は解しがたき事多くあり。奉行頭人は人の邪正、事變人情を辨知する事專務なれば、此の雙紙の句どもすら〳〵と解す人をよしとすべし云々と云へりしは、能く其の當時の奉行頭人の情弊を察したる言といふべし。今も猶、裁判官警察官などの中に、まれまれには世情人情に疎く、たゞむなしく法文になづみて苛酷に失す

るやうの憾なしとはいふべからず。事態は文政文化の頃といたく變りたれど、人情はさして異なることなし。人事詩など立派なる稱を得て、今日盛んに川柳點風の狂句の行なはるゝは、なまじいの俳句倒れよりは、興ありてまた益ありといふべし。左れど此の狂句も、下女と居候を當の敵としてより卑猥に傾むき、穿ちと隱し題に凝りては誠に謎のごとくまたあて物のごとくなり、有のまゝ過ぎては言葉をなさぬ程に下りたるは慨くべき事にて、柳樽も初代川柳點の頃は、居候を詠みても「物にかゝりが篳篥の稽古する」杯と上品なり。父兄の勘當をうけて他家によるを、掛り人または物にかゝりといひしにて、篳篥を吹くなど借上の體、其人物を顯して、父兄も勘當すべく、またこれを同居さする者の迷惑の情も察せられたり。これが居候と改名すると共に、同居人を侮辱すること其極に達し、下女と居候より、狂句を見ること仇敵の如くなりしは、をかしくもま

た氣の毒の事なり。又バレ句あるひは大尾と唱へて、只管をかしき事を云はんと爭ひて猥雜を極めたるは此道の外道惡魔にて、それが爲に川柳點の品位を墜し、狂句など士君子のもてあつかふ者に非ずとまで斥けられたり。これらの弊を刈り除き、川柳點の旨とする、人情の微、世態の細を穿ち、今の世の養生所施藥院の肝煎たる小川顯道其人のごとき具眼者に玩味せられたきものなり。元祿寶永前句付盛んの頃「傾城にするとて親は產み付ず」といふ付句は、どの宗匠も一度ははめられしとか。「孝行のしたい時分に親はなし」などは、子養はんとすれば親いまさずの古語其まゝの如くなれど、したい時分といふに無量の妙味あり。前句によらぬ一句立の狂句は、人人平常心におもひて、いまだ云出さゞるところをとらへて、其まゝにいふが手柄なり。小川顯道はすら〳〵と解す人と云ひしが、其の當時にありては、世情に通じたる者には、すら〳〵とも解されしな

らんが、今にして柳樽を讀みては、なか〳〵すら〳〵ところにあらず、特に明治前後の隔ての關門、守り嚴しく、手形免狀鷄のそら音、左樣な事にて通り難し。我等も二十餘年のむかし、大久保紫香氏のもとに會し、一人一枚通解し得る者は功の座に直して酒盛る事をして遊びしが、なか〳〵難關苦戰にて、果は曲解のみ多くして、一人半枚に願ひ下げたることもありけり。傳へていふ「天人が小田原町をのぞいて居」といふ句を宗匠解しかね、一夜考へ通しても考へ得ず、我も立机して判者たるに、此句が分からぬとありては面目なし。此上は神佛の利生によらんものと、淺草の觀世音に參詣し、祈念をこめて立歸らんとして、不圖上を仰ぎ見てハタと手を打ち、これ目前の御利生と悅びしとか。作り事なるや知らねど、まことに手近さうに見えて、倚判じかねる句のなか〳〵に多し。これを解し得て興味あるのみならず、江戸の風俗を曉り知る事につきて大に益あり。此

の川柳には木卯の名を以て判者の側にも立ちし柳亭種彦は、古俳諧に依て慶長より元祿頃の風俗を硏究したるが、今は柳樽により て寶暦天明より文政文化度の江戸の風俗を硏究考證すべし。たしかに硏究考證の一科目ともすべき價あるものなり。

此篇柳樽初篇より六十篇までを集め、これを分ちて二冊となしぬ。甚しく卑猥なる句を削り去り、落丁また板木磨滅のところは異本を以て補へり。これが校訂につき岡田法學博士和田文學士の藏本を借覽して大に益を得たれば、こゝに附記して謝意を表す。

明治四十四年二月

饗庭篁村識

初代川柳肖像

(原本二十四篇所載)



近世文藝叢書第八

川柳一

俳風柳多留初篇

序

さみだれのつれ〴〵に、あそこの隅こゝの棚より、ふるとしの前句附のすりものをさがし出し、机のうへに詠むる折ふし、書肆何某來りて此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり安きを擧げて一帖となしぬ、なかんづく當世俳風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す、

于時明和二酉仲夏　　淺下の麓呉陵軒可有述

五番目は同じ作でも江戸產れ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
上るたびいつかごしめて來る女房
古郷へ廻る六部は氣のよわり
ひよ〳〵の內は亭主にねだりよい
伴頭は內の羽白をしめたがり
鍋いかけすてつぺんからたばこにし
人をみなめくらにごぜの行水し
米つきに所を聞けば汗をふき
すつぽんに拜まれた夜のあたゝかさ
齋日の連れは大かた湯屋で出來
入髮でいけしやあ〳〵と仲の町
百兩をほどけば人をしさらせる
じれつたく師走を遊ぶ針とがめ
九郎介へ代句だらけの繪馬を上げ
使者はまづ馬からおりて鼻をかみ
梅若の地代は宵にさだまらず
なげ入の干からびて居る間の宿
かる石も一つまぢつて義をたてる
法げんのすゝめで四本木をうへる

結つねは椿の花のさかりなり
闘場所で禿といへば逃て行く
雀形たゝいて雪のちうしんし
日本勢一人りは伽羅の目利もし
脇差をもどせば茶屋はかのを出し
寒念佛鬼で目をつく切り回向
大つゞみ茶食の胴をぶつ潰し
町内の佛とらへて猿田彦
はねむしる鴨に手の込む長局
つまむ程道陸神に箔を置き
おはぐろをつけ／＼禿にらみつけ
今以て大津の燒物すゝめかねる
四郎兵衛もひやうひやく交り暇乞
なんの手か知れぬ夜更の硯ぶた
佐渡の山けんしの前でぶらつかせ
紙花もしばしの内の金まわし
上下で歸る大工はとりまかれ
前だれで手をふく下女の取廻し
跡乘の馬は尾ばかりふつて居る
疝氣をも風にして置く女形

ぬり桶はいつち化よい姿なり
寒念佛みり／＼とあるくなり
衣類迄まめで居るかと母の文
向ふから硯を遣ふ懸り人
まよい子のおのが太鼓で尋られ
豚所を見せてたて板申すやう
上下を着て文旨な酒をのみ
半兵衛雛の頭から心がけ
喰つみがこしやくに出來て一分めき
捨子じやと坊主禿をなで廻し
藪入をなまものじりにしてかへし
流星の內に座頭はめしにする
禿よくあぶない事を言はぬなり
客分といはるゝ女立のまゝ
くわいらいし十里程來た立すがた
鷄の何か言ひたひ足づかい
杖つきの醉はれた所に盛直し
婚禮を笑つて延ばす使者を立
すつぽんをりやうれば母は舞をまい
むく鳥が來ては格子をあつがらせ

ふり袖は言ひそこないの盞に成り
せめて色なれば訴訟もしよけれど
よし町へ羽織を着ては派が利かず
壁のすさむしりながらの實ばなし
國の母生れた文を抱あるき
鹽引の切殘されて長閑なり
江戸者でなけりやお玉が痛がらず
お袋をおどす道具は遠い國
菅笠で犬にも旅のいとまごい
めし焚に婆を置て鼻あかせ
うしろから追はれるやうな榊がき
正直にすりや橙は乳母へ行
護國寺を素通りにする風車
雪見とはあまり利口の沙汰でなし
寒念佛千住のふみをことづかる
松原の茶屋はいぶるが景になり
ぼた餅を氣の毒そうに替て喰ひ
落て行く二人が二人帶がなし
親分と見えてへッつい惣かな具
日傘さしてをつとの內へ行き

縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり
藪入りにうすく一きれ振廻れ
根ぞろへの横にねぢれて口をきゝ
庵の戸へ尋ねましたと書て置
隅ッこへ來ては禿の腹を立て
小座頭の三味線ぐるみ邪魔がられ
舌打ちで振廻水の禮はすみ
義貞の勢はあさりをふみつぶし
だい〳〵は年神さまの疝氣所
合羽箱どろ〳〵〳〵とかしこまり
定宿を名乘てひどい塲をのがれ
井戸がへに大屋と見へて高足駄
立臼に天狗の家をきりたをし
禪寺はひがんの錢にふりむかず
おそがれに出て行く男尻知らず
隣から戸をたゝかれる新世帶
うりものと書て木馬の面ラへ張り
むかしから湯殿は智惠の出ぬ所
神代にもだます工面は酒が入り
盃にほこりのたまる不得心

跡月をやらねば路次もたゝかれず
指の無い尼を笑へば笑ふのみ
鉢巻も頭痛の時は哀れなり
ぼた餅の精進落はいのこ也
穴ぐらで物いふやうな綿ぼうし
急度して出る八朔は寒く見え
三神はなぶるとよみし御すがた
頂いて受けべき菓子を手妻にし
緋の衣着れば浮世かおしくなり
太神樂ばかりを入れて門を締め
附木突腰におどけた拍子あり
馬かたが居ぬと子供が藝をさせ
水がねでむねのくもりをといで置
袴着にや鼻の下迄さつぱりし
習ふよりすてる姿に骨を折り
無いやつの癖にそなへをでつかくし
國ばなしつきれば猫の蚤をとり
藪入りの綿着る時の手の多さ
武さし坊とかく支度に手間がとれ
勘當も初手は手代に送られる

五六寸かきたてゝ行くねずの番
新田を手に入れて立つ馬喰町
どこぞではあぶなき娘ゆふべ遣り
仕切場へ暑い寒いの御挨拶
鞠場からりつぱな形でひだるがり
初ものが來ると持佛がちんと鳴り
こわそうに鰯の升を持つ女
唐紙へ母の異見をたてつける
すてる藝はじめる藝にうらやまれ
新發意はたれにも帯をして貰ひ
内にかと言へばきのふの手を合せ
美しひ上にも欲をたしなみて
四五人の親とは見えぬ舞の袖
天人もはだかにされて地もの也
いつとても木遣りの聲は如才なし
身の伊達に下女が髪迄結て遣り
菅笠の邪魔に成まで遊び過
片袖を足すふり袖は人のもの
お初にと斗しうとめたてにとり
銅杓子かしてのろまにして返し

七種をむすめは一つ打て迯げ
赤とんぼ空を流るゝ龍田川
紅葉見の鬼にならねばかへられす
お内義の手を見覺えるぬいはく屋
泣がけも尊氏已後は最うくはず
しばらくの聲なかりせば非業の死
いせ島の内はゑんまを尊とがり
めつかちは大じ旨はむごくする
女房が有るで魔をさす肥立ぎわ
鑓持はむねのあたりをさし通し
白魚の子にまよふ頃角田川
帶解は濃おしろいのぬりはじめ
灯籠に甚だくらい言譯し
逆ヵ王を貰ひに出たる料理人
花守の生れがはりか奥家老
あかつきの枕にたらぬかるた箱
出てうしやうなんじ元來みかん籠
三箇國にたまつた用の渡りそめ
鼻紙で手をふく内義酒もなり
病上りいたゞく事がくせになり

まんぢうに成るは作者も知らぬ智恵
取揚婆屏風を出ると取まかれ
しかつてもあつたら禿炭を喰ひ
水茶屋へ來ては輪を吹日をくらし
ふんどしに棒つきのいる佐渡の山
主の緣一世へらして相續し
親ゆゑにまよふては出ぬ物狂ひ
能事を言へば二度び寄付ず
初會には道草を喰ふ上草履
喰つぶすやつに限つて齒をみがき
子が出來て川の字形りに寢る夫婦
取次に出る顏の無いすゝはらひ
煮うり屋の柱は馬に喰れけり
りやう治場で聞けば此頃おれに化
足洗ふ湯も水に成る旅戻り
まゝ事の世帶くづしがあまへて來
朝めしを母の後ろへ喰ひに出る
辨天の貝とはしやれたみやげもの
四辻へ來ると追人の氣がふえる
降參の顏をなぐさむ白拍子

山のいもうなぎに化る法事をし
五つ月を越すと近所へぎりをかき
白いのに其後あはぬ寒念佛
返事書く筆のじくにて王を逃げ
嬉しい日母はたすきでかしこまり
袂から口ばしを出す拂もの
醫者の門ほと〳〵打つはたゞの用
稲妻の崩れよふにも出來不出來
張ものを上手にくゞる高足駄
夜が明けて狩塲々々へ外科を呼び
恐悦を水としきみで申上げ
こそぐつてはやくうけとる遠目鏡
大黒の好きは大根のぶん廻し
江の島で一日雇ふ大職冠
上げ輿の當てにして置く地主の子
鰒買て餘所のながしへ持てゆき
女房は蚊屋を限りの殺生し
針仕事手のかるく成ほとゝぎす
物もふといはるゝ迄に成あふせ
樽ひろひあやうい戀の邪魔をする

御りんきのもう一と足で玄關迄
きめ所をきめた貳百はしやちこばり
言ひ出して大事の娘寄つかず
家老とは火をする顔の美しさ
店先へきつかけの有るうたが來る
藪入はたつた三日が口につき
かみさまと取揚婆が言ひはじめ
奥さまの加勢立臼なべのふた
腰縄の氣で母おやは苧をあづけ
ふがいない魂二つ番がつき
月ふけて下戸の哀はひだるがり
笑ふにも座頭の妻は向きを見て
のびをする手に腰元はついと逃げ
園はれの何を聞くやら陽陰師
ゆび切るも實は苦肉のはかりごと
十分一取におろかな舌はなし
ぶらつくを棹でまねいだ渡し守
棒の中めんぼくもなく醉は醒め
手付にて最う神木とうやまはれ
上下は我儘に着るものでなし

勘當をゆるすと菜を喰ひたがり
奥家老顏をしかめるものをふみ
寐て居ても團扇のうごく親心
すゝ掃の孔明は子を抱いて居る
松の內七つの星を能くおぼへ
見附からわさびおろしが出て呵り
大磯の落馬はすぐにたばこにし
唐人を入り込にせぬ地ごくの繪
日和見のみそげて傘を下て出る
丸山でかゝとの無いもまれに產み
きのじ屋は階子の口で人はらひ
法の聲受狀迄に行きとゞき
黑札の禮には馬鹿な顏で來る
藪入が來て母おやは遣り手めき
家持の次に並ぶが論語よみ
霜月の朔日丸は茶屋でのみ
新造のやつかいにする鼠の子
棧敷から人をきたないものに見る
藪入の內母おやは盃で喰ひ
やく拂出しなに一つやつて見る

丸藥を貰ふ座頭はちゞこまり
霍亂もごふか祭のばちあたり
伊豆ぶしも八代迄はだしがきゝ
半分はしきせで拜むゑんま堂
盃山は欠落らしい人ばかり
江の島へ硫黃の匂ふはけついで
棧敷から出ると男を先へたて
人の物たゞ遣るにさへ上手下手
能いむすめ年貢すまして旅へ立
藥の苦せない親仁は喧嘩の苦
屋かたから猪牙へ戀路のはしけもの
岩茸はぞんざいに喰ふものでなし
紫屋是も同じくうそッつき
春迄はふみこんで置く女ぶり
吉治が荷おろせば馬はかいて見る
萬歲の口ほどつゞみはたらかず
ごとくなる刀をぬいてせめる戀
小便に起て夜なべをねめ廻し
しうとめと逆ひ舅のいじりやう
あいぼれは顏へ格子の跡が付き

辻地藏山師仲間へ抱こまれ
目合ひ見てそつといふ程高く請
供船へお玉の類はゑり出され
耻かしさ知つて女の苦のはじめ
男じやといはれた疵が雪を知り
川止めの間太夫も麥をつき
夜そば切立聞をして三聲よび
草履取名殘の裏と開かじり
兩介は第一めしがうまく喰へ
仲條は手斗出して水を打
壹軒の口上で濟むくばり餅
景淸はお尋ものに能い男
綿つみはみかんの筋も肩へかけ
生醉はおどかすやうなおくびをし
ゑり元のうつとしそうな田舍馬
ふんどしをするが湯治のいとま乞
眞ッ黑な小刀遣ふ野老うり
蠟燭を消すに男の息をかり
太皷直出來てから出す火打筥
船頭の女房能い日にせんたくし

猿田彥坂際に來てかぎ廻し
追出されましたと母へそつと言ひ
夕立の戶はいろ〳〵にたてゝ見る
金持のくせに小粒にことをかき
松右衞門二言といはず酒をうけ
抱た子にたゝかせて見るほれた人
是切の小袖着て寢るたいこ持
網の目をくゞつてあるくよめの禮
くじ取て遣手が灸をすへて遣り
剃つた夜はゆふべの枕きたながり
あんどんは百と百との結び玉
いそがしくなると鹿島は襟へさし
いつちよく咲た所へ幕を打
病上り母を遣ふがくせに成り
五六町錢屋をたゝく戾り駕
是からは行斗じやと椾はらひ
三人で三分なくなる智惠を出し
迯たときや男の中で夜を明し
腰元は寢に行く前に茶をはこび
三めぐりを溜め小べんの揚場にし

猿廻し內へ戻てあごを出し
雪隠の屋根は大かた屁の字形り
よけの歌大屋の內義持歩行き
子を抱けば男にものが言ひ安し
草津の湯めうもんらしい人はなし
笑ひ止む迄灸てんを待て居る
櫻花兄は苔の有るをとり
江の島で鎌倉武士は片はたご
首取つた其日を急度精進し
かまたりへ眞つ裸でのいとま乞
若後家のふしやう／＼に子に迷ひ
羽子板を預けて帶を締なをし
おみさまの開あきをする祭前
外科醫者を祭の形りで呼びに行
尻持に和尚を持て地紙うり
そうごくに衣を着せる長屋中
ひま入と書て來たのは女房の手
男ならすぐに汲まふに水かゝみ
犬婆の心よく這ふ無常門
眞先でされぱぐらいは化かされる

長噺とんぼのとまる鐘の先き
ぬかみそにもしかも瓜の百一つ
舟嫌ひ一人りは川のへりを行き
太夫職百で四文もくらからず
佐野の馬扨首をたれ屁をすかし
浪一つあだには打たぬ玉津島
こま犬の貌を見合ぬ十五日
辨天の前では波も手をあはせ
御婚禮蛙の聲をみやげにし
けんとうし吹出しそうな勅をうけ
舟宿へ內のりちぎをぬいで行
藏の戸が鳴ると盃大きくし
家內喜多留ちいさい戀はけちらかし
蠅打てかき寄せて取る關手形
やわ／＼とおもみのかゝる芥川
風鈴のせわしないのを乳母と知り
鳥さしがかつぐと七つ過に成り
あいさつを內義は櫛で二つかき
女房は酔はせた人をにぢに行
傘かりに沙汰のかぎりの人が來る

本ぶりに成て出て行く雨やどり
張肱をしてもやう〳〵能い女郎衆
切落し氣の毒そうな乳をのませ
地紙うり母に逢ふのも垣根ごし
舞留を常にくゆらす草履取
品川は木綿の外は箱へ入れ
姑のつむじは尻に成て知れ
欠落もきようにすればおしがられ
懐中の杓子を出していたゞかせ
見に行てしめつぽく出る拂藏
すゝはきの顏を洗へば知た人
火もらいのふき〳〵人に突當り
旅戻り子をさし上げて隣まで
佐野の馬かんろのやうな豆を喰ひ
なぎの葉を芝居の留主に掃出され
仕事しの飯は小言を菜にして
さいそくも質屋のするはゆるかしい
猿田彦いつぱし神の氣であるき
御詠歌に預りものゝ娘あり
松が岡ちつとはじくが納所分

れんこんはこゝらを折れと生れ付
切見世はたんこぶ迄そうたがはれ
母おやはもつたいないがだましよい
けんぺきを打々戻る藏のかぎ
生ゞ物をかゝへた婆ぶにんそう
湯屋へ來て念頃ぶりは側へぬぎ
餅はつく是からうそをつく斗
色男四角な智恵で奥へよび
腹立てばやぼらしく成る十三日
押入の戸やきぬ張て人をよび
出女の鏡へうつる馬のつら
針ほどを棒とは母の二ばんばへ
あたらしくしてもやつぱり親仁橋
戻る猪牙だるまもあればねじやか有
珍らしひ神の名を賣る宮すゞめ
御てい主の留主で鰹を手負にし
料理人客に成る日は口がすぎ
請狀が濟と買たいものばかり
荒打に左官ばかりは本の貌
掛けひまは暇もくれず目もかけず

大屋をば尻にはさみしろんごよみ
大名は一年置に角をもぎ
別當は馬や狐で茶をわかし
生り初めの柿は木に有るうち配り
藪入の二日は顔を餘所に置き
御年貢を大部屋へ來てなし崩し
歌がるたにも美しい意地が有
匕でもるものとは見えぬ藥種船
初がつほ家内殘らず見た斗
辨天をのけると跡はかたわ也
神奈川の文（ふみ）は鰹の片便り
はたけからせんそく程の日をあまし
りちぎものまじり〳〵と子が出來る
しかられた禿たんすへ寄かゝり
針明のすわつた形りに灯がとぼり
百姓は金でせかせるものでなし
色男はしたに斗産をさせ
神樂堂迯たあしたは母が出る
ごぜ斗一艘につむ渡し舟
藪入の何かすねたか六あみだ

關守の聲を越るとまねて行き
墓桶を下げて見とれるかくし町
腰元は見越しの松に迯のこり
病犬をちつと追つてはたんと迯
事納め氣をつけられるあら世帯
祭から戻ると連れた子をくばり
まおとこを見出して耻を大きくし
團扇ではにくらしい程たゝかれず
髪結が替つてかわるあたま形り
大磯にきうせん筋の地藏あり
ひな棚の樋合ふさぐ楊枝さし
寒念佛ざらの手からも心ざし
居酒屋を止めた仔細は革羽織
檢校の供は旦那が片荷づり
よめの部屋這入ると漆くさい也
丸山へはまつて髭で蠅を追ひ
二三間飛げたの有るかざり柿
折ふしは小粒もあたる遣手の歯
方丈の手から一歩がはがして出
小謠で來る浪人は元手なし

一網に打たれた禿蚊にくわれ
若殿がめせばり丶しい紺の足袋
神馬牽市をつ丶つきつんまわし
外科殿の豚は死に身で飼はれて居
吉原の鰐が見入れて紙が散り
前髪へ白髮の交るうたい講
血の道もてんねき見える長局
うつちやつて看板にする紫屋
だきもりのわりなき無心鮒一つ
車座に紺の手の出る六夜待
櫻見に夫は貳丁跡から出
病み上り日本の人になぐさまれ
十露盤へしたむ小原のせわしなさ
燈籠の人を禿はむぐつて出
子を持てから三ヶ日をやつとぬり
居酒屋に馬と車の拂もの
寒念佛ころぶを見れば女也
母親の或はおごし手をあはせ
鼻聲で湯治の供を願ひ出し
出格子へ子をさし上て名をよばせ

女房を雪にうづめて炭をうり
先生と呼んで灰吹き捨させる
はやり風十七屋からひきはじめ
舞鶴に水をもらせる殿づくり
保昌は九條あたりへ迎ひに出
持參金疱瘡よけの守りにし
根津の客家のひづみに口が過ぎ
見のがしにすれば遣手も損はなし
狩人の子はそれ〴〵に雀罠
山門を下から拜む氣の古さ
初がつほふん込みの衆天窓わり
引越の跡から娘猫を抱き
蠟燭の灯ですい付て足袋をぬぎ
ちつとづつ能手へ渡る御菜が子
新そばに小判を崩す一さかり
はこの子の命をすくふ左利き
女房と相談をして義理をかき
だんぎ僧すはると顔を十しかめ
傾城はとつぱずしても恩にかけ
ふし見世は晝食の時尻をむけ

居酒屋で念頃ぶりは立てのみ
藥箱初にもたせてふりかへり
江戸を出て姿の出來るぬけ參
花なればこそ稀人の坊主持
色事に紺屋のむすめうそをつき
信濃へは地ひゞきがして日が當り
小腕でも長刀斗二本しめ
ぬけた齒に禿のこぞる片ッすみ
貰ひ乳にかはるきぬたのちから過
碁敵は憎さもにくしなつかしさ
若後家のこすいでみんな貸なくし
黑犬を挑灯にする雪のみち
一門のきなかと頼む能登守
迷ひ子が泣けば鐵棒ふつて見せ
産籠の內でていしゆをはゞに呼び
あだついた客ははしごでどうづかれ
さるだ彥角をはやして吸付る
撥貸て見に行けば咽なでて居る
汐くみに所望の浪が打て來る
年禮にもゝ引のいる緣を組み

髭ぬきの鏡に娘氣をへらし
雪打をおもの師斗ひたいで見
賣上は稻こきの齒にくわへさせ
此石がそだかといへば最う眞似る
よし町で客札貰ふ後家の供
子の內の支離に讓る水車
丸顔をみそにして居るかるゐ澤
指を切るからは九品の淨土まで
花聟の馳走にやぶる村法度
通盛は寐まきのうへゝ鎧を着
寐て居るは第一番の藥取
國者に屋根をおしへる中たんぼ
玄關番くさ〳〵とする下駄の音
岡塲所は湯の花くさい禿が出
粉のふいた子を抱いて出る夕凉
新發意の寄ると輪袈裟で首ッ引
辻番へもりが差圖のかしわもち
祝ひ日に疵のついたるねはん像
日のくれに高繩の戶はおしくたて
大瀧は一言も無いところなり

そこら中蓋を明け〳〵亭主ぶり
行燈で喰ふは大工も仕廻の日
京町へ來る鬼灯はえりのこり
張物によめはむすばぬほうかぶり
晝買て螢を闇へ持てゆき
あい〳〵といふたび締るかゝへ帯
小枕の締りかげんに目をふさぎ
仲人を地ものとおもやたいこ持
半人で仕廻ふ大工に菰を遣り
車引き女を見るといきみ出し
扇箱鳴らして見てはのしを付け
いろは茶屋客をねだつて富を付け
藪入の供へは母がのんでさし
手代共ねぶと盛りであんじられ
飯時といへばぬし屋はによつと出る
親類のもちあまされは麥を喰ひ
下戸の禮者に消炭をぶんまける
樽拾ひ目合ひを見ては凧を上げ
あの中で意地のわるいが遣手の子
御傳馬で行けばやたらに腹を立

生醉の琴をけなしてとふ〳〵寐
ぶちまけた跡は駕昇ゆげが立
中宿で先初手のから封を切り
四里四方見て來たやうな新茶賣
勞瘵に母はおどけてしかられる
ちつぽけな桶で鑄かけは手を洗ひ
ぬひものを少しよせるも禮義なり
樽拾ひとある小蔭ではごをしよひ
そうばんのひしげた所で御十念
草市はひだるい腹の人だかり
淺草の鏡に千のすがた有り
飼鶴は袴着て居る人へ行き
約束をちがへぬ紺屋哀れなり
和藤内一家の義理はかきごうし
夜そば切ふるへた聲の人だかり
惡筆と仕廻の方へ千話を書き
飛鳥山毛虫に成て見かぎられ
片棒をかつぐゆふべの鰒仲間
初鰹樂のやうにもりさばき
連に禮云ひ〳〵なまな封を切り

口近ひ化物で先づ一つけし
せん香が消てしまへば一人酒
つき合て行く深川は箸やすめ
のびの手でつかんではなす削かけ
入王と聞て火を引くりやうり人
通りもの羽織ほうるがくせに成り
油揚をさげた斗で夜をあかし
ぬり桶へ書てくごけば指で消し
座頭の坊せくと淺黃に目をひらき
醫心の有りて女房事にせず
桶ぶせの有て家内がせんそくし
金谷から臼ひき歌を覺えて來
下駄さげて通る大屋の枕元
その手代その下女晝は物言はず
竈締の內はめし焚かしこまり
藪入の出がけにものをかくされる
死に切つて嬉しそうなる顏二つ
土こねは手水を遣ひ幣を立て
三園のあたりから最うぶちのめし
大いそは欠落するにわるい所

田樂を面白く喰ふ座頭の坊
二かいから落たさいごの賑やかさ
ゆり若の弓はつぶしにふんで買
辻切を見ておはします地藏尊
初旅へ晩は是じやと二本出し
雪の夜は糊で付たる顏二つ
商賣も國と江戶とは雪と炭
地紙うり目につく迄は指をなめ
算盤を扣へたやうなだんご茶屋
おどり子のかくし藝迄してかへり
忍びごまなんぞいひたい姿なり
四日から年玉ぐるみ丸くなり
小力が有るで若後家じやれに成り
日本の狸は死んで屁おこし
芝居見の證據は女中先に立
錢なしの癖にいつでもざいをふり
あら世帶何をやつても嬉しがり
はつ雪に雀罠とははち知らず
雨やどり額の文字を能くおぼへ
あら打を遠くへ寄て目出たがり

江戸へ出る日には手作の髭を出し
齋日にあぶなくほめる海おもて
屋敷替白い狐の言ひおくり
蟻ほどに千疊敷の疊さし
見知りよいあたまは御所の五郎丸
腰帶を締ると腰は生きて來る
ぬか袋持つて夜伽の禮に寄り
闘寺で勅使を見ると犬がほへ
乳貰ひの袖につッぱる鰹節
これ小判たつた一と晩居てくれろ
琴やめて薪の大くべ引き給ふ
狀箱が來ればよばれる太夫坊
飯焚に百ほどたのむとうふの湯
めいわくな顏は祭りで牛斗
桶ぶせをはじいて通る日より下駄
親類が來ると赤子のふたを取
江の島を見て來た娘じまんをし
明星が茶屋を限りの柄ぶくろ
御自分も拙者も迯げた人數也
還俗をしても半分しゆしやう也

細見の鬼門へなをる遣り手の名
袖口を二つならしてよめをよび
ゆうれいに成てもやはり鵜を遣ひ
羽織着て居るお內儀にみなかたれ
けんぺいに投出して行質の足し
かごちんをやつて女房はつんとする
すゝ掃の下知に田中の局が出
棟上を名代の乳母の尻へ投げ
柏餅妹の乳母は手つだはず
箱王が雨のたもとに蟬の聲
横町に一つ宛ある芝の海
茸狩は紅葉狩より世帶じみ
蚊を燒いた跡を女房にいやからせ
長屋中手ごみにはかる田舍芹
花よめのあました平へ札を入れ
岡場所はくらはせるのがいとま乞
太神樂ぐるりはみんな油むし
冠をふみちがへたるみたをし屋
一人者のまぬかはりに貳朱がつき
降參が濟むと一度にひだるがり

おさらばを障子の內でたんと言ひ
秋がわき先七夕にかわきそめ
中川は同じあいさつして通し
おびんづる地藏の短氣笑つて居
二三步が買とうるさい程はなし
お袋はぶきな姿に雁を書き
あんまりな事と一人でふせて見る
御一門見ぬいたやうな銭遣ひ
このしろは初午ぎりの臺に乘り
祭前洗ひ粉持つて連れて行
隣へも格子の禮にあやめ葺き
天人へ舞とはかたひゆすりやう
御后のわる尻をいふ陰陽師
步と香車座頭の方は付木でし
御勝手はみなかつ命におよんで居
くろもじをかぎ〳〵禿持て來る
源左衞門鎧を着ると犬がほへ
仲人へ四五日のばすひくい聲
けいせいも淋しくなると名を替る
深川の土弓射習ふ草履取

黑木賣大事に跡をふりかへり
金の番とろ〳〵としてうなされる
おはぐろを俄につけてとがゝ知れ
よみの塲へ筆添て出す奉加帳
小間物屋箱と一所に年が寄り
太神樂赤い姿に見つくされ
鼻紙を口に預けて手を洗ひ
どつち風少しはすねた道具也
惣領は尺八をふく面に出來
翌日は店を追はるゝ年わすれ
今暮る日をけいせいにおちつかれ
あづさ弓下女の泪は土間へ落ち
たいこもち宗旨斗はまけて居ず
若後家の剃たいなどとむごがらせ
能笛はわすれたやうな勤めかた
一門はどふり〳〵とそうもんし
能い小紋着て紺屋迄引きづられ
病みぬいたやうに覺る四十過
年男うまい噺をさびししがり
關取のうしろにくらいあんま取

大門をそつと覗いてしやばを見る
煤掃に裝束過ぎて笑はれる
兩替屋のつぴきの無い音をさせ
寐こかしはどちらの耻と思し召
かまばらひひたいで鈴をふり納め
馬島での近づきならばうろ覺え
乳の黑み夫に見せて旅立たせ
盜人にあへばとなりでけなるがり
歌一首有るではなしにけつまづき
駿河町疊のうへの人通り
八まんはかんにんならぬ時の神
岡場所は遣手と女房どんぐるみ
手拭ではたいてせげんこしをかけ
裏門と家中の乳母は首ッ引
聞いてくりや命が有るといふ斗
淸盛の醫者ははだかで脈をとり
才藏はのみかねまじきつらッつき
道問へば一度にうごく田植笠
羽子板で茶を出しながら迯支度
さかおとしまでは判官ぬけ目なし

髮ゆひも百に三つはほねを折り
掛人寐言にいふが本の事
ひそ／＼と玉藻の前をふしんがり
母の氣に入る友だちは小紋を着
大勢の火鉢をくゞる禿の手
御局はそつと／＼の十三日
知盛はけんくわ過ての棒をふり
四郎兵衛を怖ろしがるが怖ろしい
朋輩いを寐しづまらせてくけて遣り
ふげんともなろふ四五日前に買ひ
乳母に出て少し夫をひづんで見
ひんぬいた大根で道をおしへられ
花よめのぶすいで無いのにくらしさ
妙藥をあければ中は小判也
留守の事啞は枕を二つ出し
化かされたあたまで直ぐに奉加帳
大門を出る病人の百一つ
手の甲へもちをうけ取るすゝ拂
新見世さいへばわづかな欲を買
樽買にむだ足させぬやうに明け

銅佛は拜んだ跡でたゝかれる
立臼に芽の出たやうな松かざり
畫過の娘は琴の弟子も取り
髮置に乳母も强氣な髱を出し
棟上の餅によごれぬそだてやう
藪入を霞に見そめ霧に出來
持なさい女は後にふけるもの
こぶ卷をくわせて置て傳授をし
米さしは舟宿にでも置ばよい
かんにんのいつちしまいに肌を入れ
初午は世帶の鍵の下げはじめ
庖丁をさびしく遣ふ藥喰ひ
言ひなづけたがいちがいに風を引き
淸水はついへな錢にたとへられ
おはぐろを醬油のやうにあてがはれ
木戸々々で角をもがれて行屋たい
新造に砂のふつたる物がたり
角兵衞獅子笛吹斗人らしい
がいぢんの日には生醉五百餘騎
すり鉢をおさへるものは五六人

引ばつた茶臺は客にもたせけり
吉日がこゝにも居るとこそぐられ
寐たふりで一度は埒を明けて遣り
借りの有る家へ挑灯紋盡し
靈棚の牛ははたけの鼻まがり
人參に親の秤の欲がはね
喰ふ程はおしへて天狗おつぱなし
山寺は祖師に頭巾をぬぐ斗
關とりの乳のあたりに人だかり
前帶で來ては朝から欲になり
紙びなはころぶ時にも夫婦連
一さかり身になる顏へ遠ざかり
五分々々にして店だてが二人り出來
留守たのむ人へ枕と太平記
若とうに役者の墓をさがさせる
綿ぼうし風をおさへて長ばなし
身揚りが來て墨壺をこぐらかし
座頭の坊おかしな金のかくし所
入れ智惠でていしゆはやぼな腹を立
鏡とぎぬすんだ女郎見出して來

歌がるた手ひどく乳母はいじかられ
船の子へ蟹なげてやる蜆とり
袂からけふは是じやと珠數を出し
しやうじんのうそを禿が引て來る
寐た形りで居るはきれいなりん氣也
姑の屁をひつたので氣がほどけ
生娘と見へて藥師を朝にする
勘當の訴訟のたしに髭がなり
一人者内へ歸るとうなり出し

俳風柳多留初篇終

俳風家内喜多留二篇

江都前句判者川柳
撰書并景物歌仙入

雪打の加勢に乳母の片手わざ
きよぶきに里の女は直をはなし
もし伊勢と思ふが親のちから草
つくだへも二人りぐらいは厄拂
按摩とりいびきをきくと手ぬきをし
若殿の痔ははへぬきのやまいなり
通りもの將棊をさすもあはれ也
供部屋へ禿が本をかしなくし
つみ髮の前やくらしい美しさ
ぎり仁義知つた男は七兵衛
すい付けてけむをいたゝくのがけ道
蚊の中に坊主禿のあはれなり
ぬい紋をさぐらせて見るごぜの母
こし帶を解き〳〵ぬるい茶を貰ひ
角田川ところの人はかもめ也
あふた日を覺て居るが女の氣
茶屋の嫁もゝ色程はのみならひ

突出しは七十五日客が來る
下女の髪二三度立てやつと結ひ
すげ笠を元直に賣て書て遣り
おさらばを宵にして置く宿下り
ふられては連にも物をいはぬ也
見つかつて馬盜人は乘て逃げ
盆おどりもうちつとのがおんど取
よし原は大坂ばかり他人にし
かんざしもさか手に持てば怖ろしい
丸合羽むねのあたりでふし拜み
女房はなんぞの時を待つて居る
母親の訴訟で鼠尾をもらい
かるたの繪我敷島の道ならで
能かける所で矢立は水をさし
うどんふみ本なわといふ立姿
玄關番のむ內御用待つて居る
ねこのめし入れ添て遣る花ざかり
屁のろんになくのもさすが女也
太平記もとが女の口ひとつ
草市にうろたへてなくきり〴〵す

茶屋斗深みへ行くを知つて居る
鰹うり名でよばれるはあたらしい
用のないわに口たゝく護符とり
尼に成る塲を氣でくつてよめに成り
才藏は村でもちつと口をきゝ
壹人者小腹がたつとくわずに居
よみ賣は箸一ぜんをわけて持ち
ごまめうり猫に一疋けいはくし
二代目は金だまの飛ぶ面白さ
おちやつぴい節句の禮に二三度來
壹文の事でふりむく黑木うり
土民とは公家惡のいふ言葉也
藤柄をかいこんで出る大庄屋
俗納所よく〳〵聞ばしうとなり
我寺に成ると遊行は追出され
しきみうりきつい船間を言習ひ
佐殿もいたしかゆしのふくみ狀
おふくろは只こつくりを願つて居
ひぜん迄二人り禿は對にかき
簪をはかりにかけるしぎと成り

折々は口書に乘る奈良の鹿
神子の穴ぶんまけて行くかま拂
色男ちとそろばんはにちう也
三歩だけ事げんじうに賣れ殘り
べつ甲屋くるつた所を繼いで遣り
茶ふるまい皆一人づつだいて來る
赤がしら靑びやうたんを抱あるき
かぐ鼻はまゆをひそめて言上し
あぶれたは遣手のかたをもんで遣り
ぬいはく屋五色に壁へ吹つける
神酒德利きやたつの上で振つて見る
つき米屋女を見るとつよくふみ
寐せ付けて亭主とかわる松の內
あたりからやかましくいふ年に成り
はかまかと隣のていしゆ聞に來る
ことそ袋嘉例のやうに八つを聞き
すり子木の鏡へうつる新世帶
玄關番びんぼうゆすりして咄し
奏聞も船へするのはぐわんせなし
たち入つた咄の多い御くら前

麥めしの馳走は和尙水かげん
見せず共よいに太刀賣ひらり拔き
渡し守手を遊ばせる人がのり
長つぼね一人か二人高まくら
座頭の坊みそ役人を言ひまかし
けいあんは文字か方かと聞て行き
とび石にするとも和尙の夢に見へ
四斗樽へ珠數の切れたを溜て見せ
里歸り玄關に杖とはなねぢり
子を持つた大工一足おそく來る
着かざつて乳母ははだかを追廻し
親類を見知ると嫁はもめんもの
一村をすいにして立つ旅芝居
太神樂見せる髮にはゆいとばし
金掘と井戶ほりの氣は十文字
迷ひ子の親はしやがれて禮を言ひ
產んだ乳のあてくらをする長局
出ぎらいといふ振袖はざた〳〵し
さいりやうの付いた車は廻りかね
ほうばいが亭主見るとて寄たがり

、三味線屋うしろぐらくも灸をすへ
百旦那もろこしをむくごとく也
料理人堀に居る内ならして見
よめのつまゑんやらやつと五寸明き
氣違ひのひざをそばからかけて遣り
くら宿に一人か二人うぢ〳〵し
町内でごんめうに知るかんおうじ
去り狀の跡へ紺屋が出かして來
片足を仕廻つて居酒のんで居る
のまぬ客ちよつちよと酌に時を聞き
玄關番さながらじゆずもくりがたし
煤掃に一人か二人ばかな形り
山寺はなま醉のいふ諷なり
門ちがひから幾春の御萬歲
どつちらの袋かしれぬ三丁目
ゑり人で鰹をりやうる長局
色娘をとこの顏へなんをつけ
花見から晝めしに來る下谷筋
とつさまと寐る髮置はやせつぼち
店ちんの早く濟むのがかこいもの

三河記をやわ〳〵とどくだんぎ僧
火ばしにてやぼめ〳〵と書いて見せ
隅田の景でんがく串であいさつし
寒念佛夫婦の中をさむがらせ
鳥の毛を捨るに風を見すまして
つくばつた噺は土へ何か書き
木戸番はあたじけないと首を振り
虫賣のむごつたらしいらうずが出
乳母のやく朝めし前に一廻り
座頭の坊しごく大事に芋をくひ
地ごくでも目あかしをする首二つ
懸り人むかしをいふとはりこまれ
のらへ出た留守に一人で產んで置き
すげ笠の内へ帶とくまこも莇
なま醉に安く分別かしてやり
せきばらひごせも少々にが笑ひ
おはぐろにじろりと禿にらめられ
うしろから能い顏の出るかゞみ磨
かりやからごうこの僧の笑つて出
夏大工はだかでたびをはいて居る

草の庵はいとりもちにきり〳〵す
俗の目を四角にふせぐうまい物
何かしら笑つて歸るあら世帶
後添は鼠が出てもびつくりし
のみ迯を木ぐすり屋へも言ひ聞せ
去つたあす物を探すにかゝつて居
御物見にあまつた首を塀へ出し
せいもんの度に水打つ初がつほ
新酒屋さして二階をおつぷさぎ
來るとまづ異見ごうしやは藏へ呼び
盃をさせば三みせん杖につき
あら世帶鋏氣のでんじゆ聞あきる
安珍は手前でいのる氣がつかず
右々と麥から顔を出していひ
米搗のなんにすねたか二はいくひ
松の内ちよつと來やれと母の聲
氣ちがひは繪に書く時は笹を持ち
ゆびの出る足袋が小歌の講がしら
能くしめて寐やと女房へつとめて出
市過は錢の入る事とろつぴやう

手の筋を見ると一筋けちをつけ
乞食能二三町づつかして行き
女醫者わたりがついてやめに成り
座頭の坊何を聞いたかにこ〳〵し
ふきげんな客舟宿の戸をたゝき
女房にせがまれて賣る石燈籠
居つゞけは二寸切られるかくご也
掃く先をやう〳〵とたつ物思ひ
むほんとは大層らしい一分なり
じゆず屋ではこしらへ上て一拜み
奉加帳御菜の内へおつゝける
子の祝ひ夫婦げんくわの一つ也
仲條を御菜は母でひき合はせ
宮芝居百石ほどの工藤が出
飯がわり眞木をむしつてさあと云ふ
座頭の坊手綱を持てにぢて居る
小間ものと地紙みそごい咄をし
玄宗はなき〳〵耳のあかをほり
うぶぞりにたすきはづして膳に付
ぬえ切りておけばよいのに哀也

色事にはねのはへたる淸水寺
やくばらひ御菜の内で手間がとれ
關守もとぎれた所ですねを出し
ぎり〱の所で常盤は色をかへ
神樂堂一人はさびぬものをさし
戀やみへ母の細工は猫じやらし
なぐさみに女房のいけん聞いて居る
しうとめのよめには氷孫にとけ
鳴り止んで折目をたゝむ普門ぼん
地女に毛むし二つで化けられず
出格子で鰹買ふ日は旦那が來
石尊で見れば山號甲を干し
ねぎつても人ぎきのよい石燈籠
紫を見ては京でもあきれべい
燒香を先へしたので後家と知れ
山入の笈に尊きものはなし
大工わろ左官に帶をしめて遣り
お物師のふきがら一つ氣が違ひ
ござの尻たゝけば無理な目を開き
井戸ばたで我おさらばを揃へて居

約束の戸は二つとはたゝかれず
算盤を二度手に取ると直が出來る
女中から夜の明けかゝる花の朝
口笛は何ンの氣も無い道具也
奥家老らせつしたのを鼻を懸け
雪なればよしとずつぷり引かぶり
四つの時至つてもまだ見世に居る
又一度手紙をひらく枕あて
ちんめんは遣手の遣ふさるぐつわ
なく時の櫛は巨燵を越して落ち
明星の茶屋からやめるむだッ口
戀むこの下着はみんな直しもの
懸り人寐言にいふがほんの事
しちりんへごつさりすはる病上り
じゆず袋よめのけいはくはじめ也
手習子かへると鍋をのぞいて見
福山はちとあやふやな傘もかし
風呂敷は雙六うりのほうかむり
料理人うす刄へのせてつまゝせる
巻ずるめたけた娘へちよいとなげ

お妾をねめ〳〵こぼすせんじがら
狐つき鼠と迄はのぞみかね
落武者は榎をうへぬ道をにげ
ぐち噺おくつて出ても小半町
立ひざで文を書くのもすがた也
笑ふにも座頭の母は遠慮がち
中の町はかま着たのはいたく見へ
孝行に持つ女房は年がたけ
小じうとめ母が歸るとそばへ寄
橋の番たしかになげた水の音
京だんとござあで九年いじり合
若い乳母くづして出たと嘘らしい
ほころびをのぞいてあるく花の山
中宿はぞうりにすみを付て遣り
山川につまづくやつがさいご也
おもしろい事を女はもちころし
本くじを取る山伏のすばらしさ
木曾殿は客をじやらして飯を喰ひ
くらやみで龍王湯をがぶりのみ
勾當はまだ氣のすまぬ杖をつき

上るりのてんねきまじる元結こき
言ひふせる氣でらうそくのしんを切
あね娘しめしを當てゝさづけられ
そこ意地のわるいも見へる六歌仙
うたゝ寐の枕四五冊引ぬかれ
むしつたをけんしの笑ふ小柴垣
團扇うり少しあふいで出して見せ
門松を取ると出て見る玄關番
下女が髮さし上て出てものを買
戀むこが來てうす紙を引ぺがし
料理人うなづきながら市へ立
客と行く棧敷は遣手まく工面
くわいらいし番町邊にからんで居
かたびらはかたみの中でうすい緣
たいこ持宗旨ばかりはまけて居ず
母親は居つゞけ迄もかさとかけ
百本の御てんへひやく御緣日
熊谷はまだ實の入らぬ首をとり
おはぐろに禿はらうかねつて來る
母親は百度參りのたち番し

風呂敷で引ッ越すうばは立のまゝ
あら切は一と夜さ切のはれに買
しばられたやうに髪結ひまで居る
夜たかそば心せわしく斗喰ひ
雷もすゞめがなけばしまいなり
夜講釈杖で來るのはけだいなし
船中の小便こうしや二人たち
筏のりばか〱しくも野を戻り
柱にも少し葉の有る旅芝居
いたゞいてのむもくやしき山歸來
石屋にも一つか二つ繪の具皿
お飾りをとなりへぬけるなづな賣
是むす子一ッぷん捨る氣は無いか
よめの顔目がねの外トでじろりと見
禪宗は坐ぜんが濟むとのみを取
江戸町へ戻れば初手の顔はなし
腰越でもの喰ふものは馬はがり
お座切といふのがよめのくせに成り
おどり子が來るとそばから碁を仕廻ひ
能いむすめ母もほれての數に入り

草もちの使はすぐにいとまごひ
二つほど引いてめし喰ふはたけ番
居續けへなまにんじやくな母の文
草の庵朝寢おこせばさるぐつわ
くらがへは遣手をねめてずつと出る
鐘の施主四五町先で音をためし
とこみせの將棊は一人腰をかけ
燈籠賣やんま追ひ〱かへるなり
通り者口から出して錢を買ひ
角力好き女房に羽織とわられ
役人のほねッぽいのは猪牙に乘せ
うち出しの頭あわ雪はくずをねり
うらの夜は四五寸近く來てすはり
伊勢よりも三河は顔がのごかなり
火の見番人のひろふを見た斗
よめの物かりて談義でなぶられる
小侍蜘と下水で日をくらし
月なみをのみ〱下女はぞんざへる
梶原と火鉢の灰へ書て見せ
よし盛へ鐔がとれておしよせる

時がりにちよつと五雨は大き過ぎ
年玉の茶わんをむいてごこく院
藪入に母はおめしの水を引き
足の毛を引くが女房の中直り
ふくろ持一生ひまがあかずに居
いくよ餅しなのゝ臼でつきたがり
深川のふみには二文添てやり
小便所談義で母へそうだんし
石山につくねんとしたうつくしさ
ひいて見て叉首ひねる三味線屋
女房になぶられて出る地がみ賣
おんびんな薬禮もする長つぼね
ぞうりとり禿へさして汗をふき
ふせ勢にえり殘されし笑ひ好き
にうり屋へなんだ〳〵と聞て寄り
ぬい箔屋のびをしてから飯を喰ひ
三めぐりの雨は小町を十四引
小便で盗人をしる西瓜ぶね
長生きをする足輕は馬に乘り
百番の外は風呂屋に縁がなし

月の座へまねけば月を振廻れ
やげん堀ごぶ板迄が一度なり
はやり目の一と側ならぶごふく店
そば切のあかりをかする夜蛤
四天王わたなべ斗紋が知れ
切見世へ這入らぬものは施主斗
油むし折々湯屋の桶をつみ
峯の寺小僧があればこそ笑ひ
中宿で衣をかへしあとふれば
どんじりに乘る唐人は算がたけ
角兵衛獅子全體無理な毛をはやし
紙雛に角力とらせる男の子
じゆずを切る時は姑がつけ聲し
屋形にも捨がなのつくりやうり舟
紋所にわたくしの有る長局
小判にてのめば居酒も物すごし
きも入も端女ぐらいは外トに置
には鳥は何さ〳〵でもらわれる
遠乘にそろばんのいる事も有り
ぼんござへ須田高橋はぶつかべり

土けむり中にまじ〳〵座頭の坊
すつと出て後ろを見せるだんぎ僧
二三ばいのむといばらさ頭痛がし
醫者へ豚はしたに見せるりびやう病
人代は是れも同じく役者にて
神樂堂蠅を追ふのがいとまごひ
あきらめて氣強い女房ごくりのみ
茶屋女日和足駄でとちぐるひ
三味線屋かたり出すかと思はれる
ほうづきは禿へはさむ水さかな
江のしまのまたは六十一日め
狐火の折々野路をほころばし
うつゝにも團扇のうごく蠅ぎちひ
山伏の内のちまきはすごく見え
木藥屋でつちぐらいは内でもり
はな紙へ蛙だきつくうばが池
母の名は親仁のうでにしなびて居
此部屋に一人寢ますと氣をもませ
見付番蠅をうつしてかはり合
追はぎにあふたもしるす旅日記

三味線屋ぢゝの代には外記でくい
仲條へめづらしものゝごぜがとれ
障子さへはれば女房をよぶものか
吉原へてんねき配る十七屋
藥取やつぴし犬に手をもらひ
あやめ葺ごじやう汁とは出來心
藥とり出來て一ぷくふみつぶし
居なりかとひなの使にきかれけり
無いもせぬ目をむき出してはたる也
車留きびしいすじを二つ引き
廿五と四十二で込むわたし舟
桶ぶせは元手のいつた耻をかき
一人づつ遣り手は嫁へ引合せ
通り町うろたへて來た蟬の聲
突出しのひつじほど喰ふ耻かしさ
牛かたのあきらめて行くにわか雨
町内でみんなきぶくの有る娘
料理人歸ると女房よめを聞き
やわ〳〵と引立てきくぶどうの直
兄弟の夜うちは紙帳目にかけず

寄合をつけてふられたうらに行き
姑のひなたぼつこは内を向き
ぼたもちをいさぎよく喰ふよめの里
ながつぼねなんたる願で納太刀
はしご賣ぬき身と聞いて屋根へ逃げ
御りんじう二月に虫の聲を聞き
川越しも日なたで石を手だまにし
男坂ゐこじに道はつけぬなり
正月はもみ手で路次のかぎをかり
たがかけに四五間先で犬がじやれ
わが物でたばこは人にしいられる
ぬりもの師表たゝずにひるねをし
おらくじやといへばあたまをなで廻し
きりもみはおさへた人がふいて遣り
かまばらひわれは乙女の氣であるき
掛り人ちいさな聲で子をしかり
いたゞひて仕着せのふそく舌を出し
髮を切る所をびくには髮をたて
辻番へあくる日へどの禮に行き
念佛のころがる内義やとわれる

さいそくも質屋はゆるり〳〵とし
おやぶんをたづねに這入る夜講釋
ひまで居るやかたにろくな事はなし
見ぬ顔をすれどちよつちよと針が止む
朝歸りもてたやつから噺し出し
連て來てくれなと一つどうづかれ
虎坊としこなして呼ぶ鶴の丸
おどりこをくよ〳〵と見る橋の上
御亭主が留守で南瓜の直が出來る
てつくわうちそのくせ妻は戀女房
御隱居をあま口に見てめしにつき
こわ色はむほん勝負の花見をし
神馬ひき武士のめしをも喰た貌
はごの子の干物を拾ふあやめふき
しきみうり一本出してふりを付け
我作の立聞きをする門ざへもん
髮さげの有るは巴が具足なり
ほころびの内ごたつから首が生へ
ならふならせめて文殊の無分別
瓜喰ふた所にわすれる柄袋

水引ではまぐりを釣るひな祭
つよい癪いけざるやうに人をつみ
おやぶんはのんし〳〵で制を言ひ
切れぶみにせめて使のむなづくし
御出入三人扶持で泣き寢入り
時分觸戾りに辛味さげて來る
平家方皆舟ばりでしやくをおし
忠のりはかつてをわるく取て投げ
日りんに迄つゝかゝる無法もの
女房が死ぬと夫はふみを遣り
地紙うりくされな文もことづかり
里のない女房は井戸でこわがらせ
光秀は扇子の形りに箔を付け
蟻一つ娘ざかりをはだかにし
氣遣ひに成つたてよめの理が聞え
花むこはよほどの頭痛おして起き
ふきがらを禿をよんでたづねさせ
降るならば一日むだにしよふぞへ
渡り初めおつかなそうに踏よごし
御さいの子もへぎの紐であやを取

てんば乳母切金入のお子を抱き
證文を淋しくたゝむ座頭の坊
門松にすがる禮者はきげん過ぎ
女房は先荷がつくと明けたがり
旅立は二度めのさらば笠でする
小さむらい質屋を出ると新むけん
ごせのかね口おしそふに見て貰ひ
かきたてた跡をつぶ〳〵つき通し
風の神せなかをながすすがた也
はげあたま能い分別をさすり出し
でんがくの口は遠くであいて行き
みす紙を寐なんしたかと下に置き
むごらしくもゝ立をとる赤がいる
女房は廣袖を着てうけに行き
車引かぢがはねるとぶらさがり
おはぐろを貰ひに行てわたを入れ
ふところでふんどし締る雨やどり
古着買米あげざるとしめしかど
ぬき樁に引つ立られる病み上り
下女の文ぼん字をひねるやうに書き

切張もはかまでするはきつとげび
けちな盆片荷へ入れるつくねいも
やうじ差持つた丁雅を問ひおとし
年明けはだ｜殼を喰ふきみが有
初かねはお茶ごう程に並べたて
もろ白髪迄はあぶなき女房なり
白拍子くせつの跡でわぼくをし
やせぎすはうばがじまんの亭主也
たばねのし釣鐘堂にのたを打ち
うなされて夜着の上からでつちられ
ぶんさんの禮にあるくは色男
いき物のやうにとらへるところてん
はゝおやの勘定高いさかおくび
ちらし書田舎へ行くとくもがおり
くり婆娘は二俵ふまへて居
めしびつをかわる夜伽へ引渡し
お局は日の暮れそふなうしろおび
御神馬にちよび〳〵じぎをさせて置
片足は四十二町の浪にぬれ
四天王金剛杖でいがをむき

大丸にむかしの殘るへんじ有り
お手がなりや互にひざをつゝき合ひ
角力場に氣のない男ほうづえし
猿廻しゐたいの知れぬ三味をひき
無理な首尾とはかんざしの弓で知れ
そり橋へ來るとかむろは對に成り
じゆずを持つ遣手は内が不首尾也
しこなして門ごめにあふ地紙賣
疵の無い人は通らぬふしみ町
御所下り此頃ものも買ならひ
藥箱むかふのさなだ取てやり
いそぐのは渡しの錢をにぎりつめ
二三人見物のあるごぜの灸
かし本屋おとし咄をして戻り
殿様にだかせて置いておかしがり
よめの琴ちかしい客へ馳走にし
勘當を麥で直して内へ入れ
松の内麻がみしもの袖だたみ
親の日にあたつた下女は二つかみ
五月女をすゝいでは出すかるゐ澤

錢買ふと禿はかりをなしに行き
きしばかりこがせたがるも女の氣
日待の夜紙を敷いたはよめのせに
大ぶくをのむ友達に留守をさせ
提灯をけせさいひ〳〵飛車をなり
お局もむかし御家へ土佐ですみ
さる廻し子はやつかんで跡を追ひ
乳母の名は請狀の時よむばかり
一升の酒で御用を供につれ
旅役者落馬でしよさの所をぬき
檢校のなりたちをいふ三味線屋
切見世は歌を通してひよつくり出
やかたから人と思はぬ橋の上
傾城は遣りぢからなき貰ひやう
まんざらな腰を禿はおしならひ
よし盛は世帶くづしを申うけ
ふみ使引つさく迄を見てかへり
醫者衆はじせいをほめて立れたり
たいこもち一はねはねてかへりけり
判とりは貢上げを切る時によび

あなぐらへ氣づよいよめは一人おり
うばどのを貸なさいへばあかんべい
長局ばいやつて見るびんかゞみ
黑木うりまけぬあたまを重くふり
本ぶくの元のごとくにしわくなり
本ぶくのびくには結つて見たく成り
料理人一つ出しては覗いて見
草市にはり合いのない月行事
大江山くらひものからつけこまれ
四五度め師匠はばちでごうを打
けいせいのくつ〳〵笑ふはした錢
つり臺の中へはな紙ほうり込み
米つきは一きねに首二つふり
げぢ〳〵は二疋ならんだやうな紋
綿ぼうしだけは佛師も心得て
泣出すとうばはたが屋と論判し
そうさくの内隱居所をくすぼらせ
口上を下女は尻からゆすり出し
見世さきへ出ては亭主を憎がらせ
ぼん過は袖をぬひこむ地がみうり

べに筆をかして迯たるけづりかけ
ひま入と書いた返事は女房の手
元日に御用はだるくかしこまり
いろは茶屋大こくの湯が藥鑵で來
惣仕廻いしゆがへしにはきれい也
たいことは是口をよくたゝくの義
こたつでは箱が這入るとさむく成り
ほうばいがいしやの娘で事にせず
懸り人勝てば内義にかりられる
梶原が塀にはざくを書ちらし
山伏が片寄せてふく火吹竹
けんぎやうの内義はだめな美しさ
茶屋女さしみ作るも申たて
むこのくせ妹が先へ見つけ出し
灸すへた子を明け番のひざへのせ
乳母が手へ渡ると羽子も二つ三つ
金持をうぐひすといふ音羽町
虫干をついに他人の手にかけず
傘をしづくで歸すりちぎもの
御かへりに雪おろしほど長局

欠落と見えて能い貌たゞ一人
花咲けば諏訪の親類遠くなり
一人もの行つて居やれと連れへ鍵
猿ぐつわ和尙をはじめたてまつり
かんきんの間うれしい顏二つ
三つまたは素人の死ぬ所でなし
宿下りとなりの内義ちよつとひき
口上のたびに手拭肩をかへ
在鄕うばなげきの中へかしこまり
抱いた子にたゝかせて見るほれた人
一旦那死んでよし町迄も知れ
おごつたを德にして居るまけ軍
團はれは鼠とらずを供につれ
ひあふぎであたまをはれば笏で請け
喰ひつみにめでたく地口言ひ始め
新造は茶わんでのんでついと迯げ
禿から目にもろ〳〵のつみを見て
名代のすまぬらうかに人だかり
病人は夜伽の穴を見つけ出し
手一本なくしてかゝるぬいはく屋

お内義はみこしと聞いて引こまれ
改元の日は片言を店へふれ
兄はわけ知らずに祝ふあづき飯
きのじ屋にとのめの禿邪魔がられ
五右衛門はなまにえの時一首よみ
髪を結ふ時に女は目がすわり
土手のかご宿へ上着をほうり込み
つねていのうそでは行ぬ大三十日
藏宿へ來て長髪のわりくどき
久しぶりたいこも一つどうづかれ
草津の湯とかく女房がふのみこみ
あいさつに女はむだな笑ひあり
髪ゆひの四五あしならす下駄の音
辻番にへそから下の屛風あり
ふし見世は手がつめたいと箱へ入
お妾をよく見て歸るひらざさし
楊弓場つれをまつ間のやりばなし
かこわれは隣で死ぬとこしたがり
大こくは五十にたらぬ餅を喰ひ
こしみのゝうへからつめる中納言

米つきはとりをかゝへて休んで居
手間取つた髪を姑じろ〳〵見
しわいやつあわれな酒に計酔ひ
合羽屋と紺屋と寄つて境ろん
むりいとまりきんだ男荷をかつぎ
時鳥聞かぬといへば耻のやう
尺八にむねのおどろくあら世帯
供部屋は五町の酒のうわさをし
扇子うりまけて戻つて戸をたゝき

當世の前句は俳諧の足代ともならんや、よつて六々の吟に川叟數さしこのめる景物を掻集結ふといへども同様の景物多きゆゑ、輪廻遁れざる所は見ゆるしあれかし、此道執心のかたへ景物を顯し知らすのみ、

呉陵軒可有

番船は風の手柄ぞ猿田彦
　三寸も目出たく見せ先の月
紫のねぢり服紗に露結ひて
　矢立の筆のどれも短し
晝の蚊に玄關の角みを追拂ひ

氣もかろげなる◉料理人也
初◉に逢ふ妾◉の癖を能く見つけ
隣に持て遠き◉仲條
悶象◉戯くれんかへして◉歩を尋ね
髪そよ〳〵と凄い山伏
旅◉芝居俄渡しの込合て
骨◉牌冥◉理に盡た世語
圍◉れの姑の無いがとり得なり
根◉津もいろはも樹々の下蔭
手にあたるものを◉道具に順◉の雜
間がな透がな検校を召す
最◉明寺殿の留守にも月や華
山葵の辛味御◉の字ぞかし
藪◉入の迎ひの傘の一とからげ
通りへ撥の落るよし◉町
そして又身をも崩さず掛り人
我好く菓子を◉天満る神
赤◉穗記も最四五枚に寫倦
年迄あてる座◉頭おそろし
十◉三日明かゝる夜の煤曇

看病されるやうな居◉續け
美◉しいのは追出して無◉禮講
食い辨◉慶の尻のおもたさ
衝立の月のこなたに◉藥取
片唾を呑んで菊の源平
山◉門に高雄の秋を配らせて
乳◉母も遣り手も鴛に◉嫌はれ
御◉菜とはいつか近しき色男
鶴◉の一と聲座◉敷牢止む
花催ひおの〳〵◉酒の四◉天王
凧にはたらく小侍かな

俳風
柳多留二篇 終

俳風柳多留三篇

川叟評明和元申年の頃秀逸の中より、俳かいにひとしき句躰を書抜、初篇に述しごとく題を畧して、俳風屋那支多留三篇とはなりぬ、
明和五の孟秋吉辰

だんの浦能州出やと笏でつき
內義へははしよらずに出る草履取
馬道具屋亭主と見へてかわに坐し
書かぬ嫁一ぺん通りせつながり
仲條はむごつたらしい藏をたて
物さしで雪をつゝつく日記づけ
橋のこも丁稚に見せてあれだぞよ
鐵棒で捨子のろんにきずを付け
若餅へ一と臼すける禮の供
鰹うりつるべを落し迯て行

料理人ひよいとほうつてかみ合せ
相馬公家おつこちそうな雲の上
まな板をたばこの時にけづらせる
大くせつ高がばい女と云ひつのり
次の間へつくろつて出す硯ぶた
お內義の手をおんのけるいわし賣
ふき売をじうといわせるちんこ切
惡方はあぶら見世など思ひきり
たいこ持がつかりとしてよめに逢ひ
愛そうにごぜはあやして泣出され
にえきらぬ娘を伯母へとまりがけ
青二から出るは正月ぎりのよみ
火吹竹持つてまき屋をしつ呵り
岡場所のありんすなどはづおふへい
鯵の聲日もしやうじんも落る頃
駕ぶとんかゝへて這入る玄關番
のびの手で髱へさわつて嗅で見る
げいの無い座頭は玄關から上り
よめの顔見い〳〵まきを一本引
中の能いよめはお經をよみならい

小豆がゆ家のけむりの立てはじめ
木綿うり乳母が見る内だいて居る
ひる見せはよく笑ふ子を借にやり
盃の時に何ンにもおつしやんな
傾城は一はぢかくとはやり出し
またの灸あつくないのは哀れ也
針明の折々くらいすそ廻し
たしなめば惣身のかゆい狐釣り
毛ぬきうり我のを一本ぬいて見せ
もうよめは貳把で五文を買ならひ
三味線をかりれば藝者なまへんじ
そゝり唄とかくに跡へとさをつけ
うら壁はとなりでかへす江戸の町
ぼんおどり子をしよつたのが頭分
新酒をば御用が出るとふつて見る
料理人まわらぬ舌でほめらるゝ
拍子木で捨子のまたをあけて見る
入聟が抱かふといふとべそをかき
藥とりきのふ餘つた噺をし
無盡茶屋一本か貳本杖も見へ

あらを煮て杓子果報にしろと出し
すぼまつて馬からおりる宿下り
今暮れる日にけいせいは拘わらず
ある時はころぶ程着る通りもの
年わすれ麻上下で禮を言ひ
屋根ふきは四五寸先きも一つうち
すゝはきに玄關で肴直が出來る
藏宿のよめはこゝろで笑止がり
ひつかいてとめかす賣はまけて行
よし原へしきみの元手かりに來る
生醉を少しあて身で引て行
總仕廻わづらふ禿またがれる
神樂堂ゑぼしを着たが聟と見え
大三十日首でも取つて來る氣也
國者は聞けば四五人居士に成り
沖の船どうにつかれる心もち
麥ばたけざわ〳〵〳〵と二タ人逃げ
すり鉢に舞をまわせるいくぢなし
今見ろよとは重盛が言ひはじめ
生垣のそばにすゝ竹小半年

借金をいさゞよくする祭まへ
下る乳母亭主にこ〳〵榧をしよい
若い者あたまかき〳〵かしこまり
愛想をよくふられたはせひがなし
女房を呵る時にはさらへおけ
ぬき足でめしびつを出す夜手習
神奈川の客は大方風できれ
小道具屋忘れたやうにまけて來る
是はさと佛のめしの中がへり
知れぬ字を砥へ書て聞くちんこ切
仲人も夜ふけて呼べば虫をやみ
笛うりは通り神樂をちつと吹き
うりたてに喰込みのたつゆでん栗
小便でつくだの藤を見てかへり
信濃をばお寺のやうに直をきわめ
新納所先づ靈膳へせこを入れ
あをむいて見ては米搗ひだるがり
根津の客髪結床からすつと行き
野雪隱地藏しばらく刀番
仲直り疵の有るのがのんでさし

おちやつぴい湯番の親父（おやぢ）言まかし
鳥の町不首尾なやつは屁もひらず
懸り人りつぱに出來る疊だこ
屁をひつておかしくも無い一人者
道中で霜よけらしい駕に乗り
物申にまごから顔が二つ三つ
口先で日和をくづす美しさ
紅葉狩どつちへ出ても魔所斗
よふかしな娘の所は袖ばかり
新ぞうはのむと力がつよくなり
うしろゆびさゝれた女郎天上し
御内義にさはれてつきや三つぶ喰
ふきげんを人に知られる鳴子引
盃の二つ來て居る座頭の坊
繼信をそんにして置く勝いくさ
うたゝ寢も上ひんなのは本を持ち
ねついごせ内ぶところにばち袋
木綿店戸をたてゝから隣也
かさもりのだんごは七日母がうり
飛鳥山淺黄の頭巾安いしやれ

三度迄産婦へ聞いてじれさせる
かし本屋何を見せたかどうづかれ
すつぽんの首を關守見て通し
團はれのきうじはしごを太義がり
すゝ拂ひけふのかたびらむね合ず
町人はぼう〳〵として年を取り
張物をいけどりにするにわか雨
振袖を出してきしやごを宛がわせ
けいせいのこたつは住所定らず
とい竹はまけて來る時肩を替へ
なり下りこし高抔へしやうゆのみ
供廻りかねつき堂を追ひ出され
夜だんぎを半座で母はつれてにげ
身揚りのこたつへやり手のめり込
煙管にて寄せる屏風のもどかしさ
こもそうの親はきうせん筋と見へ
首ぐるみ打まぜにする曲だいこ
ひやめしを見い〳〵內義米を出し
ねんねこの腰は左右へ少しふり
錢ついて殘り一文碁の手つき

永い日も二つに出來ぬよめのかみ
三聲めの賴みましよふはぞうり取
樽ひろい紋の付いたは新下り
鯉の直据風呂でする面白さ
亭主からものを言出す朝がへり
めしたきのうやまつて聞くかま拂
はづかしい時には袖をもちにつき
女房を持て朝寐にきづがつき
神樂獅子もぐさのやうな衿ッつき
しうとばゝどうじくねても年が無し
物さしでひるねの蠅を追つてやり
四百づつ折々母はたばかられ
江戸の伯母あてにはだなへ乘て來る
衣川さすが坊主の死にどころ
桶とはな提げて定紋見てあるき
御藏前かぞへて居てもかさぬ所
猪の早太齒をむき出しておどされる
舟宿で化けやれと師ののたまわく
棟上を手渡しにする病じやな子
根津のぎうさく料などと洒落て言ひ

しやば已來是は〳〵とそりかへり
起請とは裸にしよふといふ事か
小間物やりくつのよいは二人で來
水賣の一つか二つすゞ茶わん
世のよくの檻をだにもゑりかへじ
高枕母もむかしは覺えあり
二三日留袖に成るとまり客
兩袖をさがして後家は珠數を出し
生いわし見切に賣て水をまき
ことづかる文でほうなぞなでて見る
二三町女のはだし評がつき
綿の弟子歸ると母につまゝれる
守りをばゆこうへ懸るにさい客
せいせいの枕一つははぢの內
つれの名をふられたやつは生（しやう）で言ひ
氣をつけてざるを出させる新世帶
名を聞いて角（すみ）々へ書く地紙賣
かゞみとぎ今年もきつい御成人
若いごぜ壁をさぐつて一つぬぎ
たぬき汁化かされたのが一の客

御親父へ其めりやすがきかせたい
もてぬやつ舟宿へ來てわりを言ひ
五百雨いじかりまたにあるかせる
湯歸りを見すまして居る一さかり
棧敷番赤くないのは店を追ひ
禮もせぬくせに藪醫のなんのかの
鳴子引き子の愛相に一つひき
炭はねて引け四つ程にどつと立
いやがつて月に一筋つゝがのみ
壹人客給仕とはなし〳〵喰ひ
內のものよろしくなどと作を入れ
乘懸けに壹分そこらの床も見へ
朝路から戾り大根のこもを取り
五人張相手の出來ぬ見たをし屋
淀の舟車近くでゆりおこし
外科の供とかくいさいを聞たがり
傘で出る藪入はなぐさまれ
角大師寐させて大工水をもり
車引き橋ですいきやう者を待ち
いく世餅どく〳〵にして汲で出し

けだもの屋藪いしや程は口をきゝ
あいにくといひ〳〵飯をかりに來る
女房をこわがるやつは金が出來
用心に置かふと和尙けちな鑓
長い目でごろふじませとよめはいひ
女房はそれ見なさいと外科を呼び
そばの客將棊の駒で數をとり
どうこ庵人がらの能い買ぐらひ
念佛講死なねば根からそんのやう
裏茶屋はかの人斗來るところ
むさし坊水車程しよつて出る
一歩だけ遣り手は尻をごたつかせ
女房持山を見い〳〵鹿を追ひ
此村になんと酒屋はござらぬか
てんびんをたゝく手代の目がすわり
せいろうの禮は片肌ぬいで來る
大釜へ半分はいるなべいかけ
園はれも二三人程琴の弟子
新造も見よふ見まねにまげに遣り
夜る夜なか孫を泣せてしかられる

さりながらぶつにはましと甘い母
あらの出る長口上は鐘の銘
かわたびをさかい〳〵で賣つける
田舍うばかごで二三度へごをつき
豆いりをくい〳〵跡の數をきゝ
出入からしくじれがしの俗納所
かねやすは噺を書いてかべへ張り
雨替屋りつぱになわを引くわへ
うなづいた許りは心もとながり
乳母が宿一と針ぬきのそばふたつ
俳名の無いのを遣手うれしがり
すけつねは二度めの疵が深手也
里歸り夫びいきにもうはなし
のり物へきつい山師とゆびをさし
高山ではぢはかけども能い男
兄弟はさがみ女にくらい込み
しやうじん日肴が來ると時を聞き
狐つり衣を一つもふけたり
そん金の世間へ知れるせと物屋
藪入に旅立ほどのいとま乞ひ

談合は取付き安い顔へいひ
舟宿の訴訟で禿藏を出る
十八の暮に大事の客が切れ
やうじ見世ごへいでなぶる神馬引
大三十日爰を仕切つてこうせめて
やき物と小僧を一人ことづかり
茅場町手本よみ〳〵舟に乘り
供部屋で何か遣手は問ひおとし
菊水も能く〳〵見れば手前染
ゐり人でかん病に出る狐つき
茶屋女まんまと布子仕立たり
はなしやれと四五冊かくす貸本屋
とぶやうな舟でゐらふと問落し
ひしこの直つるさつてする縄すだれ
鋲打にのればつゝぱるたてゐぼし
祐天のにせなど貰ふ新世帶
藪入へ毎ばんそばのせしゆが付き
しんぞうの袖も思へばこわいもの
おやぶんにおふさ〳〵で引ずられ
丸綿をかぶせながらもいひふくめ

かんざしでつゝ突き廻す三世相
草市ではかなきものをね切りつめ
すい付てあつたら內義ふいて出し
盃を肩から渡すあんま取り
湯上るり着物を着るとけちな聲
百姓の茶屋に成る日はふりたがり
どつしりと置てからいふ臼の禮
通りものよみをうつのは病上り
師匠樣親類書の伯父に成り
れい〳〵と追人の中にむこの貌
かんな屑かみ〳〵大工といで居る
寐せつけるよめはこたつへ腰を懸け
いけ垣のうらの相手は旦那也
石燈籠ある夜うれたる夢を見る
大一座鳴りのしづまる急用事
手をあぶりながらほたけの禮を言ひ
土砂の入る往生をする衣川
ならべ行く人にくれ〴〵石の事
地がみ賣よし町已後はなどといひ
ふんごんですゝを取るのが旦那也

おふくろが切て廻すでのびるげな
犬を追ふ棒はなげるが仕廻也
自身番捨子が泣いて世帶めき
まゆ毛へも女六部は手を入れず
よしの山人のよくいふ地口也
八文が呑む內馬はたれて居る
新大屋後生大事に繩を持
みの市に出て里扶持を取て行
はりものゝ杭を舂屋が打て遣り
朝湯には一人か二人通りもの
鳥追は笠をちよつちよと撥で上げ
わんとはし持つて來やれと壁をぶち
玉のこし大きな殿のかつぎもの
緋の袴足のあまりもしづかなり
相傘をさびしく通す京の町
間夫のはだしはきつい不首尾也
藥迄春は目出たくのんでさし
ぶちまけて二タ足にげる炭俵
のろうやつごこぞかつらに申ぶん
ぬけ參り笠をばかぶるものにせず

名代はなだめつくして呼びに行く
品川でなげ入にする目黒花
芋の皮でもむかふかと邪魔に成り
切先で菱わら笠の直を付ける
文机たわけな夢を見るつもり
うしろ疵うけたで弟子は皆はなれ
お妾の剃てはじめるむごらしさ
升わなをいひ付けて出る狐釣
來た月を入れてはつ〳〵ぐらい也
女房のいけん一步がまきをつみ
歸るちよき赤とんぼうと行違ひ
つぶしたですまして常の飯を喰ひ
あつけない一步が螢飛びしまひ
夕顏は大工のたてぬ家に咲き
ほれ帳を九十九夜めにけして置
女房へ乳だ〳〵と押ッつける
はり物をはづすにごまのはねる音
田樂の二筋めにはこきあげる
野ばかまでこじりはねたが御用達
天神に廿五もんめおもしろし

張物に娘はにくい腰をいれ
せきぞろにつかれて乳母は泣出され
ふんどんをはり合もなくよめに取り
物思ひ藪入巳後の事と見へ
村で聞きや大僧正も血の餘り
料理人いつそ池だとつまだてる
來年の樽に手のつく年わすれ
こま犬にかぶせて拜む三度笠
小間物や少しよけいにかぎをさげ
樽代がすむと無用の札を張り
なまぬるい鉢卷をする錢車
金ふきはふりに成るのがしまひ也
夜講釋張飛びいきはほうかぶり
穴市の助言しに行くいしやの供
一寐入ねせて夕べのいけんをし
母おやもともにやつれる物思ひ
あるときは白く寐て居る通り者
夕あぢは丸でうちんでゑつて取り
三味せん屋高利の方はつき合ず
產あげく夫遣ふがくせに成り

座頭の坊久しぶりじやと丸められ
ばんあたりちつと來給へどれも下手
からかさは八日の手つけ十二日
いふ所でいふはと宿は下女をねめ
市過のよめ喰つみで引合せ
羽二重は弱いつよいの沙汰でなし
水を汲む音のきこえるわかれ酒
張物の大蛇に見へるつむじ風
軍學も紙帳でするはすばらしい
ぶら下げて首尾よく仕廻ふ年男
さる廻しつかんで出ると肩を出し
二三歩がすゝめを綱所買に出る
女房のかたうでになる茶をはうじ
よくどしい所でしめる小間物屋
乳母が灸そばに泣き人が付いて居る
寒念佛首じつけんの時もあり
桶ぶせに成るほど今はさがらせず
しんしうり御堅勝かとこしをかけ
髮置は乳母もどつちりものに成り
こしかけて仕立物する茶やのかゝ

乳母が宿齒をむき出して一分取り
宿下り供の呑むうちふみを書き
諷講仕廻いに文字をのぞまれる
木戸番は二タ重廻りのほうかむり
草市につるべた錢はとらぬ也
わが身迄もちあつかうに禿まで
宿引はあたま數程下げて來る
文覺は一生人の尻をもち
醫者殿が見切るとくつわからつかせ
女房の留守も中々おつなもの
尺八で五つたゝいておつぱなし
料理人とぐうち鯉をおよがせる
馬喰町ばきり／＼と手をたゝき
角田川あゆめ／＼と醉たおれ
拍子木でつゝついて見る醉だおれ
待て居る座頭はゆびのあかをとり
かきつばたぬすめば晝も蚊に喰れ
ゐをひろふやうに居眠る鳥甲
取揚婆みそづけ抔で一つのみ
草履取汐干の供が名殘り也

年わすれよろけて杭の穴へ落ち
本店の孫とたてつく隱居の子
髮結のだ口はほうきしよつて逃げ
虫干にくすんで見える男もの
能い年をしてとは事の不首尾也
踊子は一ばちぬいて蚊をはらひ
す見物其くせ念にねんをいれ
燈籠にしやばの女のかげはなし
ほうばつて置いて禿は下りんす
供部屋を手桶でふさぐ市の客
喰かけて下女はへんじをして貰ひ
出女のかいこんで行くやなぎごり
こうの物となりへ漬る一人もの
錢の無い非番はまごへ顏を出し
肴うり念頃ぶりはわたをぬき
けんくわして根こぎにされる切落し
ふり袖に似た山の有るかるい澤
おやかたの景圖を開けば樽ひろひ
辻番はへそをかき／＼湯屋へ來る
がら／＼と先づ二三ばい品定め

屋かた船袴着たのは京言葉
三みせんをかりる使を問ひつめる
青物の禮に廻るはにわか後家
おしい事八十七の能書なり
女には今でもまよふ紅葉がり
配當に隣おしえる氣の毒さ
此お子はなどゝ遣手の丁度請け
猿ぐつわまじり〳〵とぬすまれる
不二祭犬坊丸は忌中なり
小姓よくしんまくをするけさ衣
麥めしできたへ直してよめを取り
一通り座頭に噺すすゞりぶた
晝めしを乳母は張場へことづかり
井戸かへに出る簪は銀ながし
ねきらずに遣ればいたゞく榼賣
いんぎんに呵る女房は根からはへ
ゆもどりに赤木作りを百でぬき
日蓮はかきとぶどうにあき給ひ
車引つるべで呑んでしかられる
氣ばらしに廿四文は大きすぎ

にうめんに聲がわりするよそば賣
頭取の門で御詠歌三度あげ
山の神かい込んで出るよしの鉢
乳母がおや熊手の樣な手であやし
じやまに成る柱の多い夜講釋
通りものてうちんの火で床をとり
なげ込んでくんなと賴む下女が文
玄關番座頭に下駄をかりてはき
本能寺はしの步をつくひまはなし
御かご脇こじりをはねて何かいひ
その下女の晝は木で鼻おつこくり
出て居るとめつたに人がけつまづき
小千石程にがく屋のまごをあけ
ふじ土産舌ッたらずのきり〳〵す
お內義はおんまくじつて藏へにげ
まんぢうは女のちゑに大きすぎ
おやかたにはかまを着せる車引
むづかしく床をとらせるかたき持
とうめうを嫁は二タ人でけしに行き
年禮は二タ足跡で禮をいひ

はたし状泣くな〱と墨をすり
お内義は戸を横にして一はしり
かみさまは草の餅迄やき通し
女房にひげをぬき〱しかられる
あら打に目の光るのが素人也
妹のおかげで馬におぶつさり
ぬす人はほら貝をふく在郷寺
近づきをかんがへて居る雨やどり
梅干とふすまが寄て錢をなげ
汗とりであたまをつゝむやかた者
此しゆくの太夫おしゑるあんま取
藪入のちうしんに來る樽ひろい
不景氣といひ〱げいしや宿の月
其くせにろくな者をばつれてこず
藥箱いかして持つはわたり者
鳥のほねたゝいた禮に首をやり
すりこ木であひるを仕廻ふ鳥や見世
簪でかき〱よめはしちをかし
常念佛さもいやそうな後生也
此鈴でお出來と乳母は引て見せ

引おひの手代りつぱな男なり
若いものふるは〱と雨戸くる
男湯を女ののぞくきうな用
仲條へ五つ月置いて同じ顏
一二もく湯治がへりはつよく成り
ばかされたやうに日用は二本さし
はたし狀廻狀で出す春の雨
初夢を大師のつれにはんじさせ
居つゞけにはじめて見出す白あばた
あまだれを手へ受させて泣やませ
おはぐろはしく〱かぶる內につけ
下女の文二三度立つて書しまい
名代をこわ高にした耻かしさ
品川で見事な貝はみなにされ
わるい沙汰聞いてぬり桶下げに行き
取次の出る內ひだのしわをのし
こうまんな顏で來るのが妾の親
針うりに左の袖を內義見せ
あくる年雨具の屆くすみだ川
文使よつ程すいな氣ではなし

關寺であふても口はたつしや也
小兒いしや口をすつぱく豚を取
十許りあかるみへ出す夜蛤
やく年の座頭はたるに過言せず
參詣のたびにあこやとゝちぐるひ
むかい湯に來たりや寄りなと輕井澤
仕送りは不風雅斗あんじ出し
樊噲もたのみましよふと初手は言ひ
牛かたは三足戻つてくらわせる
閉口といひ〳〵しやべるたいこ持
兄弟の仕廻ひ仕ごとに大あたま
兩替や四粒ならべてくらわせる
添とげてのぞけばこわい淸水寺
油揚の使は泣を見てかえり
ひなの椀下女のしかられ納め也
わが内が見へて錢つく鶺の内
玄關番どつし〳〵と三つおり
圍はれは文の文句に米をいれ
近道を四五町送る草のあん
肴賣うつちやるゑらを見せあるき

からかさを半分かして廻りみち
にうり屋でのませてかへす文使
留女片袖もつてわびて居る
そうもして見ろと男の名を付る
いしやの供小一尺ほどうそをさし
門番はいやみを云つてまけさせる
水くみの念頃ぶりは茶をしかけ
とむらいの供は墓所でせみを取り
安珍ははした錢などおつことし
その氣味といふが師匠のにげ所
桶ぶせを出ると遣手をたておろし
地女のやうだと姉にいぢめられ
番附けの代門番にちよつとかり
寐所をへし折て置く一人り者
ころび合おふくろ樣のやうに見へ
さいづちで湯屋の男はうけこたへ
氣の毒さかいどう湯づけくふとむせ
かんざしをふところにして木戸を出る
らうがいは大ふり袖の病なり
御はらひへふたをするのは他人也

生酔は御慶にふしを付けていひ
すけつねは三國一の死にどころ
紙二帖寐まきのつまへ持添て
かん當をゆるして口が二つふえ
朝がへりすわると膳をつきつける
若いもの少しさつてついでのみ
餅花を二十九日の晝くばり
よし町のふらち御殿へぱつと知れ
手へうけて見て居續けの胴をすへ
早乙女は他領の方へ草をなげ
氣のもめる日は朝めしのまんま也
紅葉見に母は去年の異見をし
宿下りに母はどつとゝたき付ける
はやり風三つ井が見世に小半年
鋲打の先へしたゝかかしましい
光秀はあつかいぎりて繪がくさり
ほれて居るやつは一生しまかされ
葭町のいしゆで本寺にいじめられ
呉服屋はたより少ない下駄をはき
はや鐘に和尙を見ればさるぐつわ

かみさまは有るか〱と小間物や
かわきりが濟むと上るり本を出し
くじどりで芝居の供のろんがやみ
十四日時分にぎばはさじをすて
糸買ははかりのさやを相手どり
御さい迄とふ〱房を長くさせ
姉の産是れも二三歩いる出入
堀江町風しづまつてさつまいも
物もふに手間をとらせる眞ッ裸
居續けのばか〱しくも能い天氣
忠度はいつぱし締た氣でおさへ
髪結のぞうりはく日に手間を入れ
つぎぎせるくわえてあるく村のよめ
白拍子手がらをしなと着せて遣り
ごふしよふの相談を開く矢大臣
水くみの錢へつついの角におき
こし元は隱居に二十五もくおき
後の聟むじんのからもたんだへる
米つきを落城すると呼びに遣り
にげしなに覺て居ろはまけたやつ

下女一人あたりさわりで藏へねせ
湯のいしゆを水でかへすは源九郎
夜そば切ちよくで手水を掛て遣り
瓜ばたけ出てから鼻緒すげてはき
やらかしてくれろとはいる髪結所
柳原まくがおそいと石をなげ
樽ひろひさしもの乳母を云ひまかし
わんぼうはやると物見の松でいひ
きんたまをつかめ〳〵と長田下知
跡をおす亭主やごしのしまい也
へぼ瓜のやうにからげる一人ぶち
かゝみとぎ少し出したで顔がふえ
女中供ならんで行はなめたやつ
中宿で根津へ行くのは派がきかず
置つけぬやつが羽折にひぼを付け
たのもしの尻へ出るのがよめの里
おどり子の袖を手傳ふかごの者
田舍乳母口黑らしい乳を出し
女湯の方へはらせる血のくすり
こい取に一と杓たのむ花ばたけ

珍らしい內はよこねも出して見せ
据風呂のわきにしやがんで水を呼び
前だれで手をふきながら四百とり
脇僧はたばこぼんでもほしく見へ
かたみわけ始めてよめのよくが知れ
じやう樣をおい込んでたつ玄關番
尺八は衣裳の能いがいつち下手
はち卷で女房へ願ふむかい酒
うら口へよめの願ひは鬼すだれ
禿來て鼻からけむを出せといふ
あいそうに釣竿を出す濱屋敷
もろ白髪迄はうさんなていしゆ也
われ角力羽織のひぼをむすばせる
せんぴやうは後家の目ぶちのほくろ也
すゞめ形うぶ着の禮に一つ折
はらのたつすそへかけるも女房也
一ぺんはすげなく通るふみ使
雨蛙すぐに其角がわきをつけ
三會目あたりなますへ箸を付け
預け引たぎつた男二人り來る

叡山は釋迦で夜が明けみだで明け
足留めに盃ばかり出しておき
ちつとした事さと禿かけて行
中宿は行燈はるとほぐにされ
灸をむになされますかとゑりを折
宵立の客は何やらきゝかぢり
判官も沙汰は無い事氣味が有り
ほうそうのいつち重いに聟をとり
鑓持をはじめてつれてふりかへり
御さいかご何が出よふも知れぬ也
若いもの羽織ひつかけ江戸へ出る
わづらいの内は女房の膳でくい
とび付いて娘へわたすせんのつな
氣にいらぬ縞とは乳母のほたへ過ぎ
百姓はねこだのうへで死にたがり
初がつほ是も左りのみゝで聞き
最明寺何ンのかのとてにじり込み
紺屋の子ぎれもてつこにおへぬ也
大一座何ンぞかしらのくづれなり
めんどうを見て下されとよめへさし

男の子はだかにするとこらまらす
山伏をたのんで馬鹿にして貰ひ
見るも有り見ないのも有る綿の弟子
遣手迄わらひの行ぬうらの客
あべ川で馬はきなこをあびて行き
島田にも金谷にも武者五六千
錢ぐるま跡をおすのが首へかけ
木藥屋駈て來たのはむみやうゑん
こくげんを八つと觸出す師の無盡
暮がたに二タ人で通る地がみ賣
袖口にあてゝ直をする小でうちん
旅芝居けんくわをのらへ追出し
ふしみせの亭主はさいを聞きに來る
馬かたのぶつうち垣をみなくらひ
巾着をしめ〳〵おりるやり手ばゝ
質屋から來る内さしで歯をみがき
下女が髮畫まに成るとぶちかえり
ゑり卷をしごきに貰ふいろは茶や
品川でよねまんぢうをすべらかし
懲りたやら今度の下女に沙汰がなし

すげ笠に有る名でさん死呼かへし
此家できりやうばなしは法度也
じやまをする子には赤繪を遣つて置き
下女が灸ゆでそら豆を二合かい
さり狀をそれと突出すまきざつぱ
へッついの角へこい取火を貰ひ
おしそうにものをくれるが妾也
男ではくるしく遣ふみゝだらい
けんぎやうはつかむ所をみせてつき
品川へ來てなが〳〵の口なをし
女房へ忍ぶは其日の市もどり
判官はどれだと笏で陸へさし
馬の尻たのんでよめは通りぬけ
す見物買はゞあいつとゆびをさし
悦んでくりやれとみそへ一つさし
旅の留守ある夜内義のいだけ高
うつつくが居よふと覗く松が岡
入りもせぬ物の直をきく雨やどり
樽ひろいくすねはじめは土へうめ
てつきうで打てかゝれば桶でうけ

ゆび二本ひたいへ當てゝ下女はにげ
そろ〳〵と行きなとちりを入れて遣り
にんげんのたけり迄ある小間物や
おくさまは二の段で割る御一生
どの湯へも一廻り入るかたきうち
もふうらはやうじを遣ひ〳〵來る
富士川で三みせんを折る白拍子
かんざしはうけ取る時も髮を出し
ほとぼりがさめぬで市の足を留め
五月女のあをむいて見る大一座
長屋中けんしが濟むと井戸をかへ
かとく公事相手といふはくえる顏
お羽織をなどと幇間はねつをふき
七くさを寐所で笑ふにくらしさ
いつかどのどら口々へ人を出し
つけ紐で牡丹餅くばるいぢらしさ
氣はありやなしやとすびく角田川
大一座多藝なやつはあぶらむし
座敷牢女房の方は手がらなり
仲條は綿の師匠へ五枚なげ

仕立屋へわけ有つて來る女もの
なんにせい帯をばしなと長局
お内義に灸をたのめば笑つて居
山伏に度々化ける源氏がた
寐てとけば帯程長いものはなし
御出入頼んで唐のきうじに出
あらはれたわけは娘が無筆なり
藪入が歸ると母は馬鹿のやう
會津屋のおこされるのはおかわ也
枕めしよめがしやくしの取はじめ
ぬり桶のわきへ亭主はくんで出し
まな板の上へつがせる料理人
やかた船山のはい出るごとく也
糸の來る内手のひらをばちで打
錢車をんなを見てもしづかなり
人べらしよらずさはらぬりんき也
鳥さしの追ひ込んで行く犬くゞり
小ぞうめを仕事にしやと草鞋はく
はたらいて見んと座頭は龍立ち
餅花が四つ手の中へ二つ三つ

盃をひよいとほうればわたしかへ
さそふやつ内義が立つとそばへ寄り
お内義をとなりへ遣つて筆をもぎ
姨捨をしなのに聞けばいもで居る
馬に水のませる家來たつしや者
婚禮のあしたむすこは見世でてれ
ごふく見世見立るやうにして上り
御好みの内三みせんはむだをひき
初雪のたつた二尺は越後なり
中ぬきのふんごんで有る中たんぼ
やうくわいの中でもぬゑは細工過ぎ
そばがきをねこまの供にやたら強ひ
その跡を大屋のむす子くらいこみ
けさごろも遠く寐る夜の面白さ
みくじ本人參きざむそばでよみ
ひや麥でする受狀は二度めなり
だますなと張塲迄來てきめて行
眞桑瓜ふじて賣るのは月たらず
井戸端でおつけをたてる家根普請
藪入のみやげによしごそへて出し

ひとり者ほころび一つ手を合せ
草履とり茶やのむすことかしへ行き
ねがはくはよめの死に水取る氣也
みゝのわきかき〳〵お七そばへ寄り
ごぜの灸跡で一だんのぞむぞへ
夜そば切かけおち者に二つうり
材木屋さわぐさぎうを呼び付る
あれこれが知つたに母は氣もつかず
御師の供へし折るやうにふたを明
おつぺしよるやうに馬上の禮を述べ
里がたでおしがる姑しやりに成り
二親の人と思はぬたいこもち
五十ぜん程と晝來て金をおき
かわきりは女に見せる顏でなし
けんやくで一つまなこの下女を置き
げびた性燈をけさないと寢付れず
わき目からしつきやくまけの和中散
女客ていしゆは見世へおひ出され
わらんじをはくと二足ふんでみる
にうり屋の念頃ぶりはつまみぐひ

引札はゆびをなめ〳〵はすに來る
師匠さま來ると湯番はそれ見たか
むづかしくめしつぶひろふ中風やみ
たいこ持道手をまねてぶつさらい

俳風柳多留三篇終

俳風柳多留四篇

むかし〳〵の前句冠附は蝶々子苔翁萬句合に名をならし、享保の頃收月出て世話事に句意のおかしみを專らと撰しより、江府在々の組々迄これを好み、年毎に一萬の句員を集め、今にその餘風殘りぬ、爰に寶暦のはじめ淺草新堀端の考士川叟萬句合發し、めづらかなる言葉に常世のはいかいとひとしき句姿を新斧せしに、或は一萬或は二萬の句あつまる事此考士の妙とやいはん德とやいはん、よつて書肆星運堂のぬし俳風柳樽の小冊を編集し二篇三篇となり、ことし四篇をあめる事を乞ふにまかせ、近來の勝板行を拾ひ集め二二の篇とはなしぬ、

于時明和六丑の孟秋吉辰　　淺下境吳陵軒述

鳥追ひを扇子の先でよけて出る

奥のちん木綿ものさへ見るとほへ

草市にききやうの切れる中の町

常念佛折ふしたんが引かゝり

女湯へおきた〳〵とだいて來る

もつと寐てござれによめは消えたがり

材木屋さわぐさぎうをよび付る

平產のをりもをりとて飯がきれ

丸の內井戶へおろしてしよい直し

しうとめの屁を笑ふのも安大事

そばがきを猫間の供へやたらしひ

藏宿でよんどころなくそりを打ち

藪入のみやげによしごそへて出し

一人者ほころび一つ手を合せ

かはたびや四五けん先をふところ手

しやか十のやうに火の見の顏を出し

草履取茶屋のむす子とかしへ行き

ねがはくはよめの死水とる氣也

へどをつくせなかを御用たゝく也

女房をたのしんで來るすけん物

おやたちは井戸と首とでむこを取
夜そばうり欠落ものに二つうり
麥ばたけ小一疊ほどおつたをし
かま揚しもげたおやぢ箱をもち
てんば下女寐所へ薪を一本もち
大磯へ馬士はせい〳〵追て來る
朝がへり首尾のよいのもへんなもの
病み上り喰はせずにおくやうにいひ
八文のことで火鉢で顏を見せ
あぶれ駕かね四つ迄は見世をはり
海あん寺眞赤なうそのつき所
下女がはれなんぞといふと黃八丈
印籠をくれなと尻でゆりおこし
小ざむらひ女郎の中でべそをかき
みつものを下女は直斗聞て見る
あまだるい聲で殿さまおつかける
紫宸殿よく化ものゝ出るところ
陶朱公見切つて錢をつなぐ也
やうきひのうたい宵から二度通り
座敷らう手代も一人り宿預け

掛とりの手をひいて行くにはか後家
中直り鏡を見るはをんななり
すりこ木でなぶつて通る楊枝見世
はつ鰹旦那ははねがもげてから
つばなうりよく〳〵みれば女の子
貌見世のお供はどれもくじつよし
和尙さま膝へ來る子にじゆずを出し
奥がたへゆい言はなしみなと川
あいそうも男へすれば疵になり
たいこもちしやれて內義にしめられる
銀ぎせるあつたら事に手ではたき
やみ〳〵と座頭へ渡る町やしき
米つきのなげ込んでやるそれた鞠
見せもせず無筆は文をもてあまし
角田川しやばいらいだをいふ所
御家老の知行百首の內に入り
大一座となり座敷はさし向ひ
靑首で猫などおどすりやうり人
おくり人は奈良茶位に目は懸ず
武士のけんくわに後家が二人出來

彌陀しやかの違ひ不縁の元となり
白狀をむすめはうばにしてもらひ
一二番産婦もよみを打て見る
おはぐろの尻へたかつてだゝを云ふ
釣臺で高尾へおくるしのぶずり
三郎は毛虫を筆ではらひのけ
産の伽口がうごくで持たもの
美しい流人大めしぐいに成り
舟宿にあるのが本のからころも
切れぶみは一ぱいのんでかきかゝり
行くと先づ邪魔だと渡す根津のぎう
おどり子はつめるぐらいはゑせ笑ひ
せんがく寺旦那を一人おんなくし
柄杓うりなんにもないを汲んでみせ
三人で下女はあかるく藏を出る
お月見をていしゆに十五丸めさせ
師匠さま一うねづつにねめ廻し
圍はれはいひわけ程の見世を出し
ふり袖でぶたれる御用氣さく者
中直り初手に笑ふは耻のやう

十二月人をしかるに日をかぞへ
光秀は不斷うぬ見ろ〳〵よ
一葉づつきしをはなれる柳ばし
ごぜの供何をはなすかにこつかせ
見申したやうだと遣手呑んでさし
七つ迄そだてさしやうとわりを云ひ
義さだの勢は念佛ふみよごし
手を帯へはさんではなす乳母が宿
遣ひたてましたと下女へいとま乞
わたし直でけん見の供は二反買ひ
花よめに時々化るひのえ午
根津の客ゆしまの芝居ねだられる
秋葉だけ湯屋は四五日先へたち
晴天に仕合せわるく馬士の簑
たかのぎう箱提灯をさげて居る
藏前のゑんまにちるを帳に付け
伏勢のあぶれはのろり〳〵來る
はつ鰹一ト口のめと下女へさし
豆いりをかみ〳〵しなのいとま乞
つけのぼせ母はにくさとなつかしさ

四五年もお講に目立つ緣遠さ
中納言わかれの時はたちのまゝ
惡源太八町上ではらをたち
聞わけもなく又來ては蚊をいれる
品川は鳥よりつらい馬のこゑ
駕ちんをかぢかんだ手へ一歩とり
口程のことは渡邊して來たり
あのにさい女にきつくすれたもの
大一座後生大事に名をおぼへ
桶ぶせと入かへにする座敷らう
物思ふそばにかむろの春をまち
月代を剃るとりきんで耳をふき
おそなへの次手に賴む三の糸
たべんせんなどと新造よふかしな
水茶屋の仕事はきついさびれ也
ふところ手見附へ來るとわけが知れ
まごへ手を出してつばなの錢を取り
もちつとの事で鮎迄みなごろし
月(げつ)ぱくに寄て一ト夜さのみあかし
よめの留守しなびた乳を先づ預け

辨當が出來てたんすをまぜかへし
次の間はしつぱりとする料理人
泊り客近所では最うなんのかの
ゑぼし親勘當の時すくふやく
きげんよく十八日は陣をひき
くし卷にするのがよめのくづし初(ぞめ)
川ざめに碁ばんの外はつぼをかり
土弓むす左でゐるがきついみそ
あの女房すんでにおれがもつところ
いろは茶やせんばをしてもはねる所(とこ)
宗旨ろん耳と首とにじゆずをかけ
飯焚が死んで手りやう治やめに成り
とうふの湯御用に內義手をあはせ
十三と十六たゞの年でなし
きぬ賣にゆるしをくれるやわら取
引おひの手代御殿でひいきなり
女房はねつからぞくな事をいひ
米つきのあかるみへ出る一つかみ
封じ紙もらひに來たに間(あひ)をさせ
年わすれかはれぬ時分一がきれ

小紋がたごせは多分のはうへきめ
つき袖で御用一面ッ持て來る
大木に成つてもどこか柳なり
香の物へし折つてくふ一人もの
へッついのりつぱな側に日なし貸
月夜だと五郎中々とかまらず
大三十日世間へ義理で碁を休み
ちよろつこい様でももげぬ禿の手
いせ講へ其後こりておやぢが出
おとなしく寐やさみそ漬一つやり
こし元は雨戸くるたびおどかされ
かへる母むこへ一口りんきする
のむ所があると燈籠に見へをいひ
此家で生れた内義まけて居ず
ごせの金御局そつとかりはじめ
中宿はにらまれて居る藏をたて
びり出入大やもちつとなまぐさし
けいせいを乳母が子にする口車
かりもの丶部へははいれど手柄也
ふり袖で度々上みの句をくづし

かこつけて出る吉原のあつけなさ
こゝ借のかい〴〵敷は麥もとり
て丶親がひろへば文もしづか也
あるかへとうそり〳〵と雨がへ屋
一の糸新ぞう呼んで喰ひ切らせ
よく〳〵の事か宿下りしかられる
御妾は四條あたりのてんばもの
なけなしの錢でたいまつ二本買ひ
鼻の下ヶ長く女房の御帳つき
掛り人むすこにけんをしなんする
御袋のやうだとかげでけちをつけ
後家の供くりでゆすつて酒をのみ
中の町すへたのもしくないところ
きねへ茶を置て米つきあせをふき
さい箸で是かへといふ唐ぐわし屋
番太郎しかもをとことへらず口
切見世のたま〳〵目だつ緋縮緬
業平のかさをか丶ぬもふしぎ也
跡くさらかしとは下々の言葉也
置きごたつ噺を奥へつれて行き

三味線屋大せい立つとおつしまい
宿下り今度も灸をすへはぐり
湯歸りを見たであばたの論がやみ
母おやのいけんおがむが云ひおさめ
くつわ虫寐しなに一つゆすぶられ
入相をぼん〳〵つくによめの禮
園はれは長屋のものをくぼく見る
手のこんだ化ものゝ出るしゝん殿
ほれたとは女のやぶれかぶれなり
入道のさうだん相手二男なり
草市はたいがい百であるつもり
若旦那つまらぬ物をしよいこまれ
源左衛門馬ぬす人をくろうがり
尺八も男もよいがきたない手
百九軒なからが留守といふところ
御代參ついでにほつきあるく也
角田川つれがわるいとかざわかし
引四つをはしごで開くはめつけ物
けいせいは人をたのんで一つぶち
髮ゆはぬ内はきうじをせつながり

とばロへ見物のある旅がへり
花の山ぬいた〳〵があらし也
朝參り主馬と七兵衛もくれいし
蚊ややめて僅かな手間の其らくさ
賴政のむほん茶の木をらりにされ
うそをやと仕直す帶でたゝかれる
神樂堂しまひにきざな目をふさぎ
湯殿山くつわ虫ほど音をさせ
產所から一文やれと見世へいひ
乳母同士たいけつになる柿一つ
入相は一つ撞いては庭をはき
しんぞうの鼠をたいこつんにがし
田舍乳母せんたい無理な髱を出し
火繩うりなんのかのとてにぢり込み
御茶とうはしたかと亭主聞いておき
大部屋の客は酒屋へつれて行き
大くせつみす〳〵雪に歸るなり
心中はほめてやるのが手向なり
琴の師は三みせん乞食めくといひ
お袋が死んだがさいごにぎやかさ

猪牙舟も小馬鹿にならぬ荷をこなし
うつり氣なことゝ針明一人ごと
ねぢ首のじつけん臺をころげ落ち
さつぱりと書いてくれなと見くびられ
憎そうにうせるはといふすけん物
町へ行きたいとやり手に實をいひ
太夫から二かと虎屋はつめて居る
きぬ〳〵を神田の大屋明けてやり
ほう杖でかへし申しやはけちな客
そばかすが有るで三評通りかね
からかさで花見の中へざさら落ち
茶の會にかげのうすいがてい主也
いつ見てもずんと奢らぬ角兵衞獅子
八瀨小原きれいに牛をしかる所
性わると禿そばからさいはぢけ
すきんせん事とちぎりにぶら下り
さんや堀舟で子の泣く十三日
はたし狀きざな事には墨が折れ
乘かけへむこの田地を見せて行く
師匠さまかしくと以上別に置き

寐入らずに居なと硯を持つて行き
鳥かごのそうぢ糀屋ほごにする
小間物やおめかと帳につけて置き
下女が兄はしか二俵のざらをうち
金時が行きそうな所らしやう門
ぞうりとりいらざるけんの習ひ事
賴政が死ぬとかり橋願ふなり
吉祥寺雛にもふせんかりられる
にげた跡禿は對にしばられる
雨舃と母はむすめのひざへより
親たちのゆるしで來るとみそを上げ
雛店で花見に行かぬ筈にする
氣をつけやなどとお針に間をさせ
めし粒のやうに油を髪へつけ
御立腹なごと女房をきよくる也
さございへ下女がお立と呼びに行き
いんぐわ立てしい〳〵内義はらむ也
夜そばうりいつの間にやら子をでかし
しうとばゝおらがうつそり殿といふ
なめかたをしてはるやつは出もの也

三かんを玉ものまへはすぐ通り
村のよめ道陸神へ願をかけ
こまいかき根津のいりわけ聞て居る
まきざつぱ持て米つきさゆをのみ
古近江がほしいと妾ねつをふき
御留守居は船の出る迄五雨かし
中直元との酒屋へ立かへり
土手で逢ひどこへ〳〵と手をひろげ
ゑい山へ行きつ戻りつ沓の音
す一歩はげしなりませであんどする
不心中五十三次ぱつとしれ
女の詩歌よりどふかにくらしい
湯げのたつ形りで鏡のふたを取り
針妙は返事の時につ いとこき
下馬先でばたら〳〵と笠をなげ
上下をつまんですわる暑氣見舞
おらがやつなんといつたと連に聞き
一夕まけるとよみもけがの内
侍のさゝぬところが命なり
源氏方ふじ川巳後はかまがきれ

わがすかぬ男のふみは母に見せ
二つ三つならして座頭どぶをこし
薬せうがをちぎつてはねた泥をふき
書見世へ遣手の孫をおつぱなし
笑ひ止む迄は高座であせをふき
せめ合に成ると石田はみなかけ目
舟宿で上下ぬぐが他人なり
御妾は石の流れる川にこり
ほうづきを口から出して間をする
駒下駄をはき〳〵ぬしをつかまへや
仲人の夫婦わらひが上手なり
年わすれとう〳〵一人水をあび
新宅の爰も明くかとおして見る
しわん坊つれのもち花こそづかり
玉子賣醉つたと見えてさしをいひ
藏へする給仕おやぢはしらぬぶん
よし町で御菜せん香折れといふ
ふられたを舟宿なだめ〳〵來る
片ゆきに成るを手引はうるさがり
四火をすへ一ト火〳〵に熱いかや

戀むこの先おつとつて三味がよし
町內で舌を出し〳〵よめの供
ぬけ參り鑓さすまたの中で出し
袖の梅のんで上着のまゝで寐る
白茄子草市巳後はついに見ず
傘をさした御用はよのつかひ
ぱつとした內義のてい主りちぎ者
乘合ひは思はぬ人を待て居る
嫁の下女少し內ばにしかられる
かゝ樣の無い後下女にはだかられ
こし元の化粧にきびに手間が取れ
馬かたの表でどなる紺屋しき
犬がほへますと產婦におこされる
けんとくが苗字へあたる新五郎
大こくにやいやだ〳〵とさくら姫
禿さんなどと御ぞうは火を貰ひ
かの後家が來たと樂屋の窓でいふ
むさし坊やつと御めかを引はなし
そりや〳〵と座頭にへどをまたがせる
おやぶんは美しいのをあまよばり

もしちよつと來なば初會のけいご也
くらつたりなどきのじ屋は下げて行
ぶんごぶし一流乞食かたり出し
した平目御乳母はふてゝくはぬ也
大和茶をおやぢ四五日してしまい
生(なま)つばきはき〳〵巴切て出る
柳原塀へ懸けものかけて置き
火廻しに禿引け四つたんといひ
後家の義理いゝへ〳〵で小半年
船頭のたれるのは手に入つたもの
辻番ではなを賣るのが頭ぶん
そつ中風扨にぎやかなまつご也
はやくよと斗は紺屋屁ともせず
岡釣りは竿をふまへて揩火うち
御花見の濟む內客へ手を當る
旅がへり五けんのぞいて內へ來る
長く居たほうび旦那で綿を着せ
文(ふみ)使ひむす子をはすにまねき出し
命日にひそうの柿をとりはじめ
年こしに十二の禿なぶられる

鴨に芹出せば御しまひよかつたの
つり臺へむしろを敷といそがしい
日がくれてかへろとどらが願也
座きやうだといつても娘泣やまず
もてぬ夜は本を見い〳〵お間ヒかへ
よし原はこうかへ行くにてれる所
本ものに成つたと雨戸二枚あけ
とつぷりと暮てと聟の方でいひ
秋葉から川へ三みせん取にやり
新尼の我をいやがるかげぼうし
御無用といふて尺八にぎらせる
ひきならひきのふ合せたてうし也
とばせたといひ〳〵茶やを先へ立て
ついそこに有つても妾人をよび
ひぢりめん是も異見の數に入れ
かげぼしの一つかくれるひざ枕
三味せん屋座で出てくれの聞あきし
品川の客の國府が本の事
寒念佛知つた女で他言せず
拜殿をかい込んで出るあきの守

朝がへり母ははだしで二三間
美しい貌でやうきひぶたをくひ
居つゞけのむかひきついは女房也
疱瘡する禿やり手を寄せ付ず
すけん物見て居る顔をあけられる
江戸中を數とりになくほと〻ぎす
葉櫻へさそふはつねの人でなし
うわばみの大がいをいふせうゆ樽
か〻さまがしかると娘初手はいひ
三みせんの糸の切れたが能いしまひ
一トさすりさすつて鳥の直を付る
とび色はしよ品を作るもめんもの
御勅使を天神さまと馬士はいひ
年始ではないがと見舞ふ立のま〻
角田川とかくにおやのまよふ所
唐がらし辛いといふにそれ見たか
宿が來てにぢるを女房それ見たか
米のめし迄くはせたと泣て居る
六尺に切れば氣のあるひぢりめん
百足山迄はその日に死きらず

取物をとるとたいこはしづか也
今時は無いと出て來るせんがく寺
合點せにや切乃を廻す御部屋住
大病にせげんの見える氣のどくさ
旦那寺くはせて置いて扨といふ
大さつま色身でいけるふしでなし
狩人はきつね釣りをばまだるがり
女神だけごふでも赤い方をひき
子供やァなどとらうかを呼びあるき
ぶきな客地口にしてもさしをいひ
わび事もお寺のするはひどいとが
高名をしてにくまれる五郎丸
順の舞下女あか切れの申わけ
文七は男もよいがうそをつき
けどられた下女はいやみを聞きあきる
あくた川本のあはゝの三太郎
田舍もの何をやつてもつとにする
うるしかき座頭に尻をつッつかれ
なま出來な所へ棚經もうしかけ
寐ごいやつ呼びかへさるゝごとく也

大いそへごろぼ〳〵と馬士は來る
せつちんで手綱さばきをする女
こし屋へはそう禮なれた人を遣り
さいめうじ一人あるきもした男
油うりまけに大戸を下げて行き
風呂しきを解くとかけ出す眞桑瓜
杖のたび追ッついて下女ゆすり上げ
草市に禿買ひたいものばかり
せき將棊先へくらつてしまひおれ
八文はみそを片手へうけてのみ
髮結のねぢつてつけるぼんのくぼ
若君に成ったを和尚買ふ氣也
若殿の美男おさへの聲がかれ
束帶で見るがまことのみやこ鳥
玉川にも一つ疵をつけるとこ
他人にはひゞかぬ乳のはづかしさ
また〳〵と水引をとく年をとこ
綿つみは見世へ娘の子をかざり
去り狀を取る內年が三つふけ
御首尾よい內とは下地有る事の

御茶びんがほしいとげびる飛鳥山
わが内にこしかけて居るあつい事
しひられてあたる炬燵はかしこまり
針箱を片手でさがすかぶりもの
三の糸ふッつり切れる聲のよさ
子の數をさきへあんじる三世相
水なんを先ヅけのがしたいわう山
鑓ならばうぬらくとしばられる
壹人居る内義鼠の引くのなり
はした出て手明きの衆はございよふ
つき出しは心がしれてあげにくい
子をあやす内は本氣のやうでなし
年始帳留守を遣ふのはじめなり
おのしもと云がいけんのなぐれ也
ゆかたではいやだと娘ふると出ず
おふくろのるすで持佛の小淋しさ
かくし町何ンのけもない時もあり
もてぬやつまだ藥でも遣る氣也
切れ小判たいこの智慧で遣ひすて
女房はとちうであつてさへぬもの

願がけに來たとすだれのそとでいひ
和國とは虎とあらそふ家名なり
燒物をとゞけた人をとひつめる
朝がへり高なわからは出家なり
細見はよつぽど先へ遣つてかひ
居る所を見たのが竹のふき納め
うす本へとつさまの手でかなを付け
居つゞけに高をくゝるは實子なり
切見世へおうせいうりは引つこまれ
不景氣なお子だと乳母は木戸を出る
ぐちな事いふなと夜着をかつぎ出し
もふ一歩くんなと女房舌を出し
嫁を見にごつひと路次へ駈けて出る
臺所の敷居へつき屋こしをかけ
若いもの片手にぎつてのんで居る
元結紙目をむき出して下女はしめ
くらはれぬ丁稚奉加に土塲へ來る
屋根舟で座頭あたまをことわられ
げつぷうをしてからつきや二杯喰ひ
質手代四つ手のそばへ呼出され

三雨で常ぎらで居る其ひどさ
合羽やへ馬かたが來りやさむく成り
雨乞ひも袖乞ひもして名を殘し
口なしの下に和尚のうづめがね
女房はそばから醫者へいッつける
むらさき屋京のこぼしい金をとり
土用干せッつく内がむすめなり
廿日過文でおつかけおん廻し
本くじは又檢校にしよしめられ
供舟へめかけの用のその多さ
あの乳母が書でおかしいことが有り
舟べりで虱をつぶすうらゝかさ
時宗が二度目の太刀は届きかね
それ〳〵でやせた遺手も疵のやう
玄關番座頭をのけて使者を上げ
はたご屋で世なみを聞くが子持也
御妾が何をつげかたしくじらせ
我ほうをなで〳〵はけをかりて行き
ごみ〳〵の中の白かべしち屋なり
間もないに里子をかへす耻かしさ

氣をかへて見たが內義の越度也
からたちを植ゑて和尚は氣がやすみ
僧正の氣にいるおやちせき恭なり
しうとめのみゝにあたりし玉のこし
關守の目きゝの通りめかけなり
御玄關を淋しく出るが町醫なり
灸すへる禿の顏を見にたかり
勘のよいごせろくな事しでかさず
うるさくてごふもならぬと雛を出し
里がへりとなりへ寄るが思ひ也
ばかめらと雪見の跡にのんで居る
御指南をうけましたらとめしに付き
ふき売をふんでおぞうは御出たそ
しかられた娘その夜は番がつき
我持つた財布の紐でしめられる
見かじつた女房むつくにいけぬ也
なべぶたへ一切のせるせわしなさ
きぬうりの墓を地藏のわきへ立て
いもうりといつて新造ごくづかれ
にくいほど亭主の義理をいひ過る

物買に二三度わせたよめのおや
入王を子にくづさせて夜食喰ふ
いしや迎ひ少しこゞんで先へたち
へぎいもにのりては賓がのめぬ也
やかたから何もかゝらぬ釣をたれ
朝がへり命に別義無いばかり
國の狀おこしのやうにわけてやり
へつらはぬ人うわばひを取てやり
目をふさぐ手を遠くから持て來る
土場太夫得てあつけないむこに成り
料理人氣のへる程にくづを出し
しんぞうのおやぢは村の香だおれ
御太義と手引の肩をつまみ上げ
新關は目くちかわきな人ばかり
十二月さう笑つては濟まぬ也
藪入はくされをぬいて願ふ也
用心にひるねして居る土用干
ぼたもちを飛脚へ出して物語り
おやぶんの女房かみたち供につれ
釜ばらひ下女は笑ふにくらへ逃げ

りやうり茶屋お靜かにへと三把上げ
産所からおまへの跡でたべやしよう
手のひらへ喧嘩をのせる切おとし
氣ちがひの膳は遠くへすへて見る
へんな目が出るといひ／＼帶を解き
月夜だに質屋歩いて行けといふ
關ヶ原すてつぺんからおし碁也
武者一人しかられて居る土用干
女房は客へ添乳のもふしわけ
つくやつをつかぬですゝが捗どらず
月見過よめのだんこうきうになり
江の島はゆふべはなしてけふの旅
となりからひつさげて來る猿廻し
女房の留守押入れへおッつくね
わきの借引ッこみぎはのてれたもの
いのしゝにくさめをさせる糸すゝき
桃の花下女がむかひの馬につけ
能く開けば女難で納所身をひかれ
仲條へ又來やしたはしやれたもの
おや椀ではかつてはとぐ一人者

年忘れぎりでたいこはひまに成り
中宿へまじめな顔でもふし入れ
餅の間に合せますると紙帳ごし
よめのうけ姑のとん死一つしれ
おれもよい男とごぜをくどく也
ぶつに買あいそうこそう盡きたごら
さつきうな下女前だれをむねへ上げ
樽ひろいにわとりしめた訴人をし
上下の音ばかりきくわたぼうし
鯉迄もむらさきに成る江戸の水
あれをまあ嫁で候とてわしはいや
目をぬすみおつたと座頭里へやり
こぶだしでなどと夕べをもう忘れ
おもしろく傘（かさ）をとられるつむじ風
ふけわたる廊下を遣手のッさ〳〵
琴箱の行き所を見りや質屋也
女房を大切にする見ぐるしさ
店下をあるけばむだな聲を聞き
法華經へ鮎の子をひるいさわ川
狩人のむこをえらむもめつけもの

大門をうちわと虫が入りかはり
あきらめて上下（うへした）に着る雨舎り
くさつたら寄るなと呵る年男
初がつを內義こわ〳〵百に付け
惣花にめづらしい顏二つ三つ
そうばんの鳴りやむ頃に珠數をすり
にうめんは外の賣人がよぶやうさ
斯うさげてゆけと敎へるかし袋
仲人の口ぶりはまあどつとせず
物まへの客あやうきに寄りつかず
千ごりにぬき手を切るは他人也
氣のかたの息子は土手でいやと云ふ
馬士の名を呼ぶのは通し馬と知れ
こわそうに膝へ手を置くせいごひら
紋付をていしゆがとつてしづか也
四日目は乞食で通る日本ばし
山出しは笑つてやるがしなんなり
賴朝をはけ次手には大き過ぎ
つかに手をかけてとむらい追て行き
一家中手本の外はほぐに成り

おふくびで見るのが馬の女房也
むらさきは石のうへにも居た女
あわもりで酒もりをする御殿山
是からは身がふりよいと憎い後家
神酒ごくり持つた大屋に人だかり
一羽づつなでて使は臺へつみ
ごらに成るはじめは女房あばた也
近邊にからまつて居て母をはぎ
新酒屋りやうじな事はいはぬなり
二つ三つふつて火繩を猪牙へ入れ
やぼむすめ兄の友達一人切れ
麥めしと書いてゐの木へ立てかける
御宿から文と艀宿にがわらひ
しうとめの氣に入るよめは世が早し
ふり袖のもげそうな塲へ母の聲
おやぶんは水淺黄まで着た男
鰹うりとなりへ片身聞きに行き
つけ登せまだふんごしはひぢりめん
ぶちまけるやうに千鳥はおりる也
おさまらぬものだと見世でよめの事

座頭の坊やつぱりぬいた方へにげ
八から鉦たゞ見て通るものでなし
素人に成つたがさいごそのしわざ
圜はれのなりこんで來るいろは茶屋
始皇から見ればば清盛小僧なり
根こぎとはつたないぬすみ牡若
まん中のあふぎ座頭のわすれたの
二つ三つ打つて皷を二朱ひきやれ
よつぽどの間かと晝寐は目をこすり
神樂堂目にかゝる迄おして出る
里がへり何やら母はきゝのこし
舟遊山大隱居からおさへられ
初の雛ていしゆも次についてゐる
諷ひ講不參の分は猪牙に乘り
くどかれて娘は猫にものをいひ
能くむごくしたと追ひ付く衣紋坂
のりもの丶内でうるさくつまみ上げ
順の舞諷はいつちはたきなり
ぜんたいが高尾米屋へ行く氣なし
わたし守朝めし前に五はいあけ

一人もの喰つてしまつて苦勞がり
名月に御用ほつ句をしたといふ
湯治から少しはよみもつよくなり
四つ手駕乘る氣なやつはそつと呼び
そら寐入あまりいびきがりちぎ過ぎ
回向院ばかりねはんに猫が見へ
麥めしのあぢもわすれた長い公事
藪入によくにたをとこ口をとり
若死と聞いてくやみに念をいれ
尺八でつッぱつて見る町はづれ
ごふく店一ト人か二タ人ねむたがり
里がへり人にあはぬが不首尾なり
寺小姓とぼしかけ程卷いてゐる
むさし坊あつたら事に上ミ言葉
白びやうしとは問びやうしの能い女
仲人は小じうと一ト人ころす也
角田川きせるをはたきさあごうだ
代みやくはやんまを追つた小僧也
卷ぞへにあつて女房も山歸來
御直段がよいと藏宿かぶりふり

我里へかへる御乳母はまんがまれ
袷着てところてんうりなぶる也
猿廻しつかんで出ると杖を出し
女いしやとんだ所でさじかげん
口びるがはれたと袖を取て見せ
首くゝりつら當てにとはたわけ者
白鳥がないてさびれる根津の里
女房にとちうであつて先づしかり
借馬引きもゝ迄出して乘て來る
齋日に帆を見たやらううなされる
園はれに地ごくは無いと實をいひ
草餅の使ひ公家衆にとめられる
生醉の七書にもれたはかりごと
すれ〳〵なものは花見の幕となり
どいつだと廊上下でおつて出る
地白からそろ〳〵よめをはぎはじめ
たいこあん氣の毒がつて水を遣り
せんがく寺客を墓所へつれて行き
大一座先陣すでに堀へつき
御無用ときみわるくいふ敵もち

かけて來た禿しばらく耳に口
根をおして聞けば娘は泣く斗
くゝり出る座頭すだれにつき當り
橫着と日ごろを呵る花の朝
友達は將棊の事で二日來ず
赤蛙ごせはかすかに味を知り
先殿(せんどの)の代はぺんともならされず
稽古所も出してやろうと後家の文
黑い毛をぬいたがよめの越度(おちど)なり
紫もござに着せると只の色
大一座かさばつかりと遣手いひ
玄關であくびをさせる匕かげん
羽衣をてん〳〵舞でとりかへし
黑木うりまけると跡へ櫛をさし
あらい髮にぎつてたもと見て貰ひ
遣手の子鴇にも出たり出ないだり
おごつたと楊枝を遣ひ〳〵來る
當分はならんで喰ふの耻かしさ

俳風 柳多留四篇 終

俳風 柳多留五篇

序

弓は袋に治り、湯店の看板の矢は軒に跡なし、今翫ぶ前句は題にくつたくせず一句の珍作を專らと評するも、判者の發明なるべし、此集去丑とし四篇迄出板するに、書肆判するにひまなし、よつてことし五篇をあめる事を望にまかせ、亥年秋より子年末秋迄の勝句を拾ふ中にも、市ケ谷はつ瀨芝近江山下さくら木は、年々會毎に千餘の片書怠る事なく、定連の好士の秀吟多し、予愚按ながら華吟のもとに心の駒を繫ぎて、

あぶみへもつもれ初瀨の山櫻

呉陵軒可有

つゝがなく茶わんを戻す太神樂
座頭の坊木馬に乘せてみんな迯げ
つれ合ひの日さと遣手はなしを喰ひ

乳母が顔あやしてごぜは笑はれる
せがき船松を置く場へめしを置き
藪入の妹はつぎについて居る
將棊ばんさし上げて居て是乳母よ
毒だてに鼻の先のはいひにくし
はだかつて手斧を遣ふ材木や
氣ばかりさなどと御隱居酌へさし
事かけになぶつた婆ァすりみがき
馬喰町きうじの手でもにぎらせず
增上寺生醉の出る所でなし
かけ取りの泊り迄來る手のわるさ
うたれたる譯は女房がかたやなり
その沙汰を聞いて宿下り廻り道
妹は母よりはぐに骨がおれ
遣手の子あの女郎衆がなどと泣き
太神樂たばさんだのが上手也
まだ來なんせんかと椽へ腰を懸け
あくた川鍋取りめがとおつかける
柳原樽をちよこ〳〵すてゝにげ
鏡みとぎ手前ばなをの下駄をさげ

錢の無いやつは窓から首を出し
六あみだ土藏作りが仕廻ひなり
座敷牢腰繩で出る十三日
たいこ持べんにまかせて借りたをし
根津へでも遣りたいといふあぶれ鴛
旅あんまはちにさゝれるやうな針
若い者しつけとり〳〵江戸へ出る
おらがのは年季を待つと藥とり
初鰹あつかましくも百につけ
棒鼻でかつぎくゞりをおし明ける
船頭も跡のばゝあは義理で抱き
春まけは醫者やの手ぎはにいけぬ也
ちん笠でつみ草に出る淺ぎうら
高砂は今もついでに行くところ
じやうだんをしい〳〵捨る鳥の羽
すがゝきの中を手代は出て歸り
留守ねらふやつはあいつとあいつ也
うそをつく事がきらいで素顏也
雜兵は又來ましたと後三年
傾城はかたきが知れて捨られる

らく中は女を丸で見せぬ所
大名の着く日もだしを賣て來る
入王に成ると見物碁へたかり
おしそうに姿を崩す雨やどり
五六度ど覗いてよめの夕すゞみ
三會め國府の下へ二兩置き
知行から來る内寺で五俵かり
何事ぞおこつたやうにちどり立つ
吉日が遠くて柱一本たて
針賣のいらざる後家を立て通し
おとゝいはむごくしたなと十五日
信長へお國ものだと申上げ
ぼたもちとぬかしたと下女憤り
六月のしちやは見世へさくをふり
どこでごふ習ふて來たか後家の拳
草履取よろけるなりに供をする
合せびんおもつた程は智慧がなし
旅むかいすやをした日の面白さ
切れ小口名代出すがさいご也
當ります抔とよしずへけさを懸け

圍ひ者ぢつとして居るたちでなし
白酒屋などは戸をさす手負猪
あま酒へみやげをすぐにおろし込み
人形と同じ縞着るくわいらいし
病人のみんな見て置くいしやの癖
おつかけて行くと新造ちゞこまり
ぶん〳〵に寐るが夫婦のすがれ也
七乞食などとからかふ奥家老
駕の者おろして願ふむし藥
萬歳はぞうになかばの春の興
鼻紙をつかんで遣手のんで居る
初鰹めしのさいにはあぢきなし
上下で上るり餘程ひどく酔ひ
首ッ引帆柱たてるやうにまけ
書めしを外トからどなる手習子
顔へ筋出るとさうめうせんといひ
みゝずでもほるやうに見る挑藏
からかさで行つて紺屋にいひまける
ごぜの供しつたのが來りや舌を出し
針打をおつたて跡へござをしき

おめかけの親元藥とりも來ず
下女が髮にしめのにへる内に出來
ふぐ汁もくはざらにやあとしうといひ
ぬき足でかへる亭主はじやすい也
又寄つて來なと出しなに一つやき
口ばたをたいこ遣手につめられる
腹がけに成ると子供はあたまがち
行水のわく内うらで二ばん取り
まだほへて居ますかと聞く姑ばゝ
おやたちの前から取ると茶屋は云ひ
近所には居るなと母は二両かし
ふくみ狀ひゞあかぎれは書きおとし
瀬戸物屋あたり近所へそんが知れ
青空に直して歸るひのころも
紫に成る程つめる江戸のはり
市歸り大戸上げろとしよつて居る
なまかべへ御使者を通す御立身
千両は一歩かけても氣にかゝり
御夜詰に御次へ座頭おして出る
御めかけのいふ程の事是となされ

烏追のしかられて行く店おろし
能い後家が出來ると啣す醫者仲間
祇王祇女田舍娘におつぺされ
料理人首でも斬うとふいて居る
しんこんにてつして聟は出る氣也
す一歩はあだやおろかに遊ばぬ氣
すけつねは今朝の御禮が暇乞
名代のたらぬ所でなわをとき
御しんぶははち拂ひだと二両出し
水茶やを二軒ふさげて見つ見せつ
針妙のながしへかゝる人ずくな
供部屋の外から乳母は乳で呼び
生酔のまくらあてがひ次第なり
新そばのきうじ廊下でつき當り
旅立ははでなが早くくたびれる
あどけないやうで無心に拔目なし
おやゆづりだと盃をしやぶらせる
おしいかなひそうの娘むごん也
あきの守時分は至極しんじや也
ます花になぞとは文のよわみ也

くさらせて置くが端午の名殘也
御不勝手質屋の大戸上げさせる
きやうこつなお子だと遣手螂を捨て
御ふくろに知れて娘はふとく成り
御隱居は杖のあたまへ手をかさね
是切りのあやめさげ行くはなれ藏
雨舍りきせるを出してしかられる
いそがしい見世につき袖亭主なり
町風かなどと御針に見てもらひ
よさは能いがとは女のそねみなり
毒をいふのへ御給仕はもり付ける
呉服屋へ來て迄すねるひぞうむす
女房は何さ〳〵と三つへし
手を取て子になでさせる鴨のはら
臺のもの隣へ出たであんどする
かけ乞も二三町ほど春をふみ
持參金うにこうる迄のんだつら
正月をよめもそろ〳〵かなしがり
大びきはきんせんとして崩す也
懸取のとぼして來るで春でなし

どらにあひたいがまつごの願ひ也
むこに行く事を茶やからそにんする
死水を取つたは今井一人なり
そだ〳〵と駒下駄をぬぐ素晴しさ
江の島はつッついてさへ行く所
ありんすを通ひ御針もちつといひ
ひとりでに釣瓶のさがる物すごさ
文づかひ袖口を買ふひつらこさ
でんがくのとちうから止む面白さ
質屋から出ると駕かき見ちがへる
有合ひの顏にてしかみ火鉢化け
師匠さま色めくと見て諷にし
大そうな道さとあんまもんで居る
あす仕廻ふ迄ちょつぱな呉服店
醉つたごせ人さへ見るとからみつき
はつめいで局大かたかしなくし
合羽箱おつゝく内のやかましさ
戸を立てゝ這入れば娘きやつといひ
田樂を持つて馬かたしかりに出
座頭の坊どこにほれたか文をつけ

物いまひだけに月見を二度くらひ

たんぜんは何もないのに結ぶやう

小町ほどあつてにぞろを歌によみ

まげぶしのひよめきに有る鏡とぎ

川留めに宿の小僧が跡を追ひ

うたゝねの貌へ一冊やねにふき

梅若は戸塚で喰つたまゝといふ

米つきはまつかなやつを二つくひ

御氣が能いなどゝ立派にばかにする

御座つたかぐらゐでは出ぬ蒟蒻や

ゑいかんに作れと乳母へ抱いて來る

欄干にもたれてどうだ煮えきりやれ

幕引はへんてつもなく見知られる

禿來てたんすへ深く手を入れる

二つ三つおきやと古着と和尚打ち

いせの御師扱錢の無い盛りに來

乳母が親油のやうな酒といひ

高倉の宮だと馬場でなぶられる

どが錢をつかひなんなと根津で云ひ

うすいもはかわいらしいの内へ入れ

違つてもよしときうじへ汁をかへ

あつ湯好きうぬばつかりがじやうをはり

藥種屋のやつと聞きとる山歸來

おしそうにこし帶を解く御延引

羽二重を着るは紺屋のぶてうほう

すつこんで居やれと亭主牛を見せ

しんぞうをすく内むすこ人がよし

しんぞうのくせつから〳〵古い聲

さつ〳〵とくばれと渡すかゞみ餅

きり〳〵す禿にいぢりころされる

金つばは餘程こうじた山師也

こし帶を雛の幕とはよめの作

こも僧はもらはいでもの姿なり

店ちんでいひこめられる論語よみ

瘦た子を肌におぶつてさしをなげ

かみゆひに一くし望むかゆい所

居つゞけのすだれへ歸る不屆きさ

さかさまな題目講を八百やとり

里の母髮を切るなとそつといひ

ひらり乘る猪牙は元手の入たやつ

薺うり村でも至極かせぐやつ
岡崎を八ッ乳でひいてしかられる
惡筆が寄つてつくしへ遣る工面
鐵炮の間へ一ト聲ほとゝぎす
姉女郎まんぢう一つわざと喰ひ
しばられて居るが喧嘩に勝つたやつ
つけ登せつゝいつぱいのろぎん也
女きやく物申などと笑ひこみ
下向にはあばたで戻るぬけ參り
居つゞけをもう一日で願ふ所
芝居をばやめて内裏の願ひ也
是はまあよんだやうだと膳を出し
いつなりと染てよこせはすねたやつ
手おひかけながら小遣ひくだせんし
悴めがしかりましやうと土手で云ひ
迯なんすところと禿いッつける
大門に内義はだしで待つて居る
ふうこうは斯うだとあごで二つふり
化けそうなのでもよしかと傘をかし
ごふいつて拜んだと開くゑんま堂

何が喰ますと樂天そばへより
珊瑚珠はたんごのはらで取りに遣り
百人首繪の出來たのははるか後
とむらひに行くも嬉しい一さかり
しつぱりと頼むとさゆを汲で遣り
口まめなやつかん病をはぶかれる
重箱をむすんで一つさげて見る
呉服屋の手代疊にはへたやう
すつぱぬきみんな迯たで持つたもの
死水のそばで母おや碁のいけん
腕ッ切まくつてかけるにはか雨
あごの髭もつとぬらそとのどで云ひ
心中が化けると禿おどされる
一人者内からしめてとん死する
十念のしまひ一ト聲のつかゝり
町人で役所をうめる大三十日
とぼしかけくれろに質や聞あきる
今五年おそいとだるま首ばかり
塀ごしに有るに高なわ越えて行
油屋のかいで出すのは直が高し

元結紙首をふるのでしまる也
かいどりで五十まけろと柳はら
關守がわらつたといふぬけ参り
根津の駕四百目程はおもい筈
神樂堂ふらずに鈴をしやくる也
請けに來て新酒の禮をいつて行
よし町は損だと和尚氣がそれる
こいところに大屋子守をあつらへる
一人者客にしばらく留守をさせ
かんしやくのやうに目をする色娘
駿河から遠江までかたぐるま
ふんどしを帶にして居る通りもの
辻番の奥の手は戸をたてる也
中ぬきでまねきやおつ付く小侍
雜司ヶ谷のどのかはくは平のせい
もくねんとして肩の灸かきこわし
大三十日女房がいふとだまりをれ
かやぶきへはいる夜盗ははけ次手
御局の女いしやとはすまぬ事
中の町さくらに人をつなぐ所

虫持にしたのは逃げた乳母のせい
柳原よるもばくものうる所
わるい癖ばかで烟管をほぢりやるな
鈴鹿山外のくわんおんではいけず
根津のぎうしやうゆの樽へ腰を懸け
にわたずみよけ〳〵兒持て來る
しうとめを久しい鳴りで故人にし
でかいがと藪入の供茶をしたみ
藥代に一つひつぱぐ他人宿
百兩をよめに預けてこわがらせ
よろつかあつい大門に着きにけり
待女郎聟を座敷へおして出る
仲人が來るとかくれるふとくしん
ぬしなどは目出たい株と土手で言ひ
知れて居るものをかぞへる泉岳寺
氣上りがするとぴい〳〵引つたくり
旅歸り大きなはらのまゝで去り
村正を和尚一トこしもちにつき
蛤であげるがむすめ氣にいらず
喰ひつみにふしをいたゞくおそい禮

門禮にしたのが伯父のふそく也
かさく公事元のおこりはそつ中風
四五兩のおこわをむす子夕べくひ
よく聞けば砂利場の伯父も他人也
き丶ほして見れば禿の智惠でなし
したく金取つて行くのはふくろもち
一軒で呼べばすだれがみなうごき
僧正もいせんはけんの上手也
しこなして袴をた丶むいひなづけ
人がらへからかさ一本かしなくし
なんにせい向ふへ越せと角田川
ゑびす講おどり子を呼ぶ息子の代
皆翌日へ廻して仲人おつぴらき
金屏風た丶むとつねの見世に成り
なんで間違つたか出合あけらこん
神樂堂小ゆびをはねてへいを持ち
下げ髮で二歩おちますと質屋いひ
木藥屋せげんのそばで五兩取り
はき溜めへ鶴のおりたは小松どの
おろうがいかと天がい屋星をさし

縫紋のことで棧敷を二日のべ
初鰹ば丶あぐらいはおつこちる
うごかずに居ろと去狀書いて遣る
わたし守一トさほ戻す知つた人
手をわけて酒屋尋ねる野がけ道
つけざしの禮に脊中をなでて遣り
女房はせうじの內で直をこたへ
あら世帶何を寄進にしやうといひ
死顏を他人で拜む不孝もの
鈴なしに出來たは肩がすはる也
御中入四百四町はあら手なり
御祐筆人を遣ふも筆のさき
しなの者江戸と國とは雪と炭
惡所とはばちの當つた言葉也
あてこともないと春やに起される
髮結所どうだむすこといふ所
愛をよく聞けとおふくろ糸をこき
朝歸り旦那がまけてしづか也
七兵衛一本遣ひに成るをとこ
市の供しなのひたすら願ふ也

なせ置いて來たと酒つぎ一つぶち
箸おくかおかぬに息子ついと出る
品川の衣桁もゝ引などもかけ
ゑびすさま人たがへにて盗まれる
乳母が荷のすだれを這入る氣の毒さ
口さりに身にしみおれと源三位
見世迄も顏出して行く里の母
買出すとせげん糸瓜でおつこすり
板の間へ菜をぶんまける事納め
蒟蒻のきざ〱きついじまん也
あいさつにこまりかんざし差直し
後のシテしごきでばたり〱來る
座頭金金のあたまをはつてかし
二か三か知れぬとごせにさぐらせる
水くみをひさくで春屋おつかける
立ち附てたどんをいぢる呉服店
素一歩で女房はゑちご屋へ上り
御內義をなぐさんで出る旅むかひ
よし町の文物中でもつて來る
雛祭旦那どこぞへ行きなさい

あまでらへ行つて我身にして歸り
ぶつかけがよいと花よめいひかねる
四つを打つ迄うなぎにてのんでゐる
女房に土手であつたは百年目
御はらいでわびごとをする樽拾ひ
あいそうに聞く三味線のやかましさ
錢だけにつきやしらげをいとふ也
福引にすりこ木取つて緣近し
のし餠もよく〱見れば裏表
虎の威を五種香うりもちつとかり
めりやすをはめると摑むまねをする
女客內義が留守でてれたもの
氣をつけてしんせられまし元だらう
人は武士なせ町人に成つて來る
物思ひあげくのはては死ぬくめん
あがるなといはぬばかりの年始帳
根津のきやく能書と見へて竹で書き
とう〱んのんで燈明せんを取り
どぶつ下女目をなくなしておかしがり
樽ひろひよこねはちつと早すがる

鳥追に出る頃は早疵もいえ
二歩出たは紙くず買の親の代
なぜくぼく見たと天秤ぎわへ寄り
木戸番のあたまで結ぶほうかぶり
牛若は千十四人きりたまふ
吸つける内に流れるわたし守
みす紙に國府錢ぎりくんなんし
わたし場を上ると六部三つ打ち
十四日きのふはどうでけふは首
掛取が歸つた跡でふといやつ
芝居見の留守は旦那とじやもッ面
番葛籠しよつてこのしろさげて來る
辻番は棒をつかぬところぶたち
松右衞門いらざる道でかゞみごと
喰ひぬいてこよふさ信濃國を立ち
年禮は門違ひでもてれぬなり
僧正の七尺わきへ一つ落ち
押へればすゝき放せばきり〳〵す
呉服屋はおちつく迄のやかましさ
さあなんぞ出しなとしやれる女客

二ㇳ樽の酒屋も見へる十五日
ふんばつてそう來なさいと火繩賣
茶呑づれはいとうの來た氣の毒さ
一箱はぬけるが山師口につき
そうばんが鳴りやすとよめ舌を出し
よしともは年を取つたといふばかり。
女房に髮をゆはせる氣のよわり
今だく〳〵と帶へたくしこみ
起請など貰つてむす子のりが來る
さね盛の切ッ手で通す佛が荷
よし町は文と手紙の間ヒを書き
わるずいで迎ひをとんだ所へ遣り
あす來たらぶてと櫻の皮をなめ
座敷牢目黑のばちと母はいひ
文使あるいはいさめまたしやくり
氣違ひのふんどしたといふ斗
待顏へさくら折々ちりかゝり
三年の戀とはきつい日まし也
寐しな迄合羽着て居る在郷客
御定めの通りを涼む京の町

御持佛にこがらしのするひとり者
狐つり思ひがけない鳶をつり
書出しをせつ〻きに遣る能い工面
女湯へ抱いて來るのは久しぶり
懸取は理づめで切れをさづけられ
大一座黑とそら色はつけなり
あづきやれと女房の金はなでこまれ
五右衞門は素手で歸つた事はなし
是れ斗着て來やるのと里の母
勝公事の戻りむすめをつんにがし
うつくしい顏で取込み勝負なり
朝長はよしや生きてもびつこなり
うけ出した後は五町の車留め
薺でも賣れがいけんの開きはじめ
信玄に生れて來ても不孝なり
茶屋の石こうが出來るとたらぬ也
琴よりも豐後の弟子はさいはじけ
飛込んでこよふがす〻の仕廻ひ也
か〻しうをのけて一杯ゐてに買ひ
藪入の跡氣の知れた人が來ず

針妙はきぬたがいつちあら仕事
のりかけで呼ぶを息子はいやといふ
しかられて急度出て居る茶の給仕
氣がへると小遣帳をやめにする
めりやすは女のぐちにふしをつけ
手習子めつぱりこふな火にあたり
かみ結は元結まくとこしをのし
手のひらへ錢をつかせる夜蛤
俄雨うらみをいつてかして遣り
よし原の咄をさせる小屋がしら
どうだなと戸へ寄懸かる日なし貸
朝がへり女房がいふと御もつとも
自身番まづ風などのくづを買ひ
歌がるたとふ〳〵下女はどぶを喰ひ
いやらしい下女前垂をふみしだき
こも僧の親しゆら道へ落て居る
先キ行はせまいと亭主乳を貰ひ
初のひなこ〻ろ當りが二三げん
笑はれて來やしやうと出るかねの禮
又一度酒屋のおちる中なをり

呼出しは晴天八日きやくがふへ
妹の三みせんかりて藏ば入り
飛鳥山座頭おどけて一つなげ
妹の先へかたづく氣のどくさ
おやの氣は大師河原のつもり也
鈴とへい引つさくやうな神樂堂
雨がへ屋次へ見せるはむづかしい
下女が荷もゆたんを懸て數に入り
はし近き湯殿ゑんやが越度也
にげこんで嫁の着かへる忙がしさ
死水をもゝ引でとる本望さ
あたらしい通ひにきざな引殘り
辻諷ひ扇で笠をあげて見る
三めぐりの雨は豐かの折句なり
御吉例みんな昔の御かんなん
奥さまの十九めかけのひがごまり
風ふせぐ外に役あり金屛風
さりとては又とのぼりを引こませ
蚊のくつた迄を恨の數に入れ
仲條へ供には過ぎた男なり

琴箱をよい〱で出す十三日
ぬけた翌日旦那に樽をひろはせる
身持にて紅を着て居るむづかしさ
手打そば下女前だれをかりられる
音羽さも出やうと後妻けなるがり
小松どの已後一門は海のもの
銀ぎせるふられてきずをつけ始め
琴一つごぜおつこうに廻るなり
すつぽんがゐやすと顏を二つ出し
口に袖あてゝ萬歳のぞかれる
敷初にとなり座敷はしやくをおし
井戸がへは深さを横へ見せる也
大根だね有りは村での能い手也
品川はしでほろぼしのところなり
朝歸り母のかぶりで横へきれ
大三十日肝にこたへる賴みましよ
新造の獱とはこいつふといやつ
御宗旨にかたりの出來る雨やどり
元日はおきそうにして禮をうけ
遣手をばばらしはぐつた治郎左衞門

品川の客牛町に氣がつかず
さあ小判ほしかやろうに下女は逃げ
一人者となりの娘うなされる
あかるみへ引ずつて出る仕立もの
物もふといふはぞうにの出るの也
わきを見て女太夫はざるをふり
糸ざくらきへいるやうに御勸進
母おやはひいきの役者知つて居る
首くゝり富の札など持つて居る
元服の甚だおそい根津のきやく
御内義がにらめたつけと連はいひ
こい口をならせば御用置いて行
今の目はたれを見やると姑ばゝ
樽ひろい匂をかいで是が酢さ
素一歩もせんたい我れが金でなし
ふぐりより餘程向ふで牛はたれ
深川へ落ちたと綿の師匠いひ
通り者ひざが光るで安く見へ
出合茶屋しのぶが岡はもつともな
なぶらせはせぬと花よめ湯へさそひ

間男をつれて相撲へにげて行
甲州は針やあんまに事をかき
勘當は雪か雨かのあげくなり
朝歸りだんごといもをつきつける
相ぼれの仲人實はましもの
おみかぎりなどと舟宿ろをおろし
雛わけによめは一日里へ行き
眞ッ先のむかひ箱でうちんで來る
斯う持つて彈きなど留守居笑はれる
歸りには人買ひに成る角田川
寐た内におひへを一つつい丸め
先づ是れで御免と藝しや三を下げ
駕かきの聲ばかりして眞ッ白し
女房の顔見てごほり〳〵せき
落花するそばにやつこの高いびき
銀ぎせる拾つたしなのいもで持ち
よし町でうつはくすんだ手代也
よし原はふり袖に目のつかぬ所
さがし出すたびのび上がる猿轡
ぐちなやつ扨元日のむづかしさ

丙午遠い所から結納が來
みんな荷にしろと笏にて御差圖
里の母遺ひ殘りを置いて行き
雪隱を過分々々と奥家老
惣門の内ではのきく杢のかみ
いろは茶や金より銀のきく所
琴の柱をひんもぐやうに仕廻ふ也
鮫鞘もぬけぬ筈なり厄だたり
小便をいめばきりやうがどつとせず
まんぢうをいしやに持たせて追廻し
ひまらしい見世におうばが二三人
母おやは羽二重だとて加賀を着せ
傀儡師思出してはどんと打ち
歸る迄笑ひつゞける女中きやく
坊主客あだやおろかの錢でなし
兩替屋ぞんじの外に肩がきゝ
二の足で師走の土手をふんで行き
女房のとッつくしまは直が高し
四つ切りを破りはじめは若旦那
鶯に出て谷汲のほとゝぎす

車井戸むりじやいかぬと汲んで見せ
のきなさい付木ばッかりくべなさる
みつだんに母のはいるはたけがしれ
てまへまあ内はどこだとやうじ見せ
三の糸こき〳〵それは知りやせん
名物の内だと御油ですゝめこみ
飯喰つて大あせかくもげびたもの
十三日氷もものゝ置きどころ
ふところはでんがく切りのしたく也
夕すゞみなげるなぞと角力取
品川の橋を越すのはしわいやつ
馬で來るのでよめん女とはねる也
六夜待一ト宿つゞく鬼すだれ
待ちかねて子は寐て仕廻ふ送膳
三夕の外の夕ぐれ中の町
つき出して岸に見て居る草履取
神樂堂歸るを見れば夫婦也
屋根舟へよべば踊子身にしみず
見くびつて遣手つらをも持てこず
いくらいりますと質屋はずらりぬき

石尊は土場からすぐに思立ち
貝ひろふ右と左は千代萬
丸綿をうつとしがるはきついこと
眞黒な手でつむじ風追かける
しどの無い藝子黄色なばちでひき
あかぬ戸を外トで手傳ふ寒念佛
大切な金瓦はごぬすまれる
隱居所で孫のちそうにりんが鳴り
御てんやくちんぴも安く見へぬ也
かんびやうにおしい姿を捨て置き
つまづいてにつこり笑ふ神樂堂
鏡立先づしまつたと杖につき
あやめふき人にだかれる年でなし
ふいに出るひなはむすめの吉事也
めづらしい内はきふりも皿へもり
きのじ屋の枯野に禿寄りたかり
今くへばよしと肴屋置てゆき
ごふく店きせるを廻すふけいきさ
楊枝見世乳をのむ內は買に來ず
手紙には狸臺には鯉をのせ

四つ手駕月のみやこをさしてかけ
萬歳はみなけいはくにふしをつけ
是萬里の小路とごそり剃られたり
らうがいの願ひは鼠小紋なり
しやきばつたやつを留場へ擔ぎ込み
家督公事口鼻がつくと座頭が來
女房はご母のむかいはこわくなし
引ッこぬくやうに髮結ゆびをふき
角田川今でも母に苦をかける
ゆり上を聞いて吸物もりはじめ
へぼ瓜のやうにうけとる一人ぶち
後添の內義いち子といぢり合ひ
よみうりは二タ人揃つてせきをせき
貌を見てわけも云はずにおかしがり
まあおれも入れろとゆびを一つ折り
さし引いてくれと口から一歩出し
くぜつ文字分頃でちくしやうめ
かし本屋是れはおよしと下へ入れ
よしきりに地をうたはせて時鳥
大あぢに成つて御茶の間緣に付き

かきたてる度に袂をがらつかせ
わつぱしに切られましたと手下共
めしびつへ顔をつゝ込む強い暑氣
きぬ川にかさねこのかた鯰出來
古寺にこいつと思ふ猫ひとつ
暑氣見舞たつてはだかにされる也
女房は土手のあたりで髮がとけ
御新造と内義と噺す敷居ごし
緣遠いむすめからだに作りあき
つくねんとごぜはあなたを敎へられ
越後屋の前迄傘へ入れてやり
黑がもと旦那とならぶ能いきげん
立ちつ居つしてぬひ仕廻ふとそ袋
花ぐもり二タ人一本あてにしよひ
むぞうさなものは桶屋のぶん廻し
板ばしと聞てむかひは二タ人へり
十三日覺えて居なはそれッきり
手に持て行くばかりだと羽織かり
座でひくといつてやう／＼幕の内
見世の衆こらへなさいと仲人いひ

巳待へも來る鎌倉の二ばんばへ
はし／＼は今に毛請を卷つける
あのお子はお氣が輕いと茶屋は云ひ
夜ッぴとい地主の餠でねつかれず
雛なればこそ間に合ふと買ひに出る
御つゞきが有るかと聞いて惡く云ひ
寐たがつて懸取を待つ能い工面
おかるれば能いに遣手の朝參り
女房迄見へぼうをいふそのにくさ
ぬけ參り土場で片はな持つ氣也
ごふく屋のはんじやうを知る俄雨
見世に居て呉れろと土手で祈念する
おやぢまだ西より北へ行く氣也
このしろの鏡にうつるにぎやかさ
こうの鳥びんぼう寺はきらい也
下女がふみ内義の下書で國へ遣り
下戸の禮片つぱしからたゝきつけ
身一つでお乳母のかける急な用
今朝かけた土手を麻上下で行き
中の町ごうぎにつまをつかむ所

結ふ内はたらひのふちにぬか袋
きぬ張をにぎつてよめは一つそり
かつがれはせぬと娘のねだる市
口をすくして氣のかたを連れて出る
はなし鳥そばでほしがる後生樂
ぬいた時やつぺしたゝく神樂堂
一文は取りそうもないなりでふき
跡を見ぬ人の乘るゆゑ猪牙といふ
ぶんさんの濟む内夫婦木綿もの
どつからか出して女房は帶をかひ
大一座禿てんでにつれて行き
かつ拂ひなんすとこさとおして來る
せんごりの泳ぐと岡でかんをする
行かば行きなさいと女房弱く出る
內談と見へて火鉢へ貌をくべ
六度めば茶の木の上へおつこちる
つくだ島汁のみ迄もわたりもの
吳服屋も能くはやるのは二人つけ
長つぼね屋根や一日きぬを締め
踊子にもたれて居るがやぼなやつ

初鰹煮て喰ふ氣では直がならず
腰元ですますはしわいやかた船
朝歸り取あげばゝにしかられる
目釘までぬくは一兩からの質
一きりやうある使者の來る一月寺
おやゆびへ袖口かけてひいて居る
代脈は何をこいつの氣で見せる
片眉毛おとすと嫁は手でふさぎ
船頭はをさこばかりを入日こぎ
勘當の羽二重で居るぶはたらき
御てんやく逃げると跡は浪の音
てうしへの路ぎんに拂ふ銀ぎせる
らうがいの元は行義をよくそだち
一生の顏を目出たくあかめ合ひ
知る人にばかり子供がすへるせん

明和七庚寅孟秋吉辰

俳風 柳多留五篇 終

俳風 柳多留六篇

川叟東に住で、西に初瀬南に近江北にさくら木の組鼎のごとし、蜀のむかし桃園に義をむすびしためし、爰に聞及びしさかんなる定連の俳名を梅園に結ぶは吟勢たゆむ事なかれ、洩たる餘組の好士の表德は七篇の一葉に顯さんと當秋より耳鋏てんと愚序す、

呉陵軒可有

松が枝のとなりへからむ町の春
かわらけは淺い深いの草で出來
旅むかひ遠見を出して揚て居る
しかられた針妙つういついとこき
遺羽子をたいこ田圃（たんぼ）へつきなくし
おき〳〵のきげんは只の事でなし
呑む禮者朝の勘定大ちがい
酒のちり筆で伴頭ちよいとはね

ちとしめてくりやうと親仁ねずに居る
たがかけもちつとかそつとかんなくづ
けんぎやうは手引が有るでへびにおち
嫁のよみ氣のどくそうにあざをたて
子をだいて惣身のすくむ角力とり
なんじらは何を笑ふとゐんきよの屁
茶屋女せゝなげほどながれの身
こんじきの男蜆に喰ひあきる
玄關番かつぶし箱をあてがはれ
蚊やうりはめりやす程なふしをつけ
なんになりますと大工は切つてやり
九郎どの五常を守り〳〵にげ
文遣ひ道など聞いておびき出し
毛せんを敷くとほろ〳〵落ちて來る
とうしんをたれに聞いたか嫁はのみ
とむらひのあたまにしては光り過ぎ
けいせいもやつこにされぬ江戸の張り
ぶどう棚なッたと旦那大さわぎ
女きやく先づ重箱をはしらかし
柄杓のゑ出して湯番はめしをくい

あつぱれでござると師匠三ッを下げ
またよかさくらうに思ふ里の母
しまはずと置いてくれろとあるきいひ
かんがくをしたと下女へはよごれもの
呻（うな）されるろせいしやくしでつッつかれ
六づきだ見なと目なしに內義いひ
此がきめみやげどこかと鳥の町
百だんなまさか衣もりやくされず
くわいらいし箱をたゝくがのり地なり
麥秋に書出しを遣るかるゐ澤
鳥の子を願つて呼んであばたにし
安玄關御用はらぱへうつて居る
手拭を人じちにする五十ぞう
子ぼんのふ小判もたせてこまるなり
煮やつこで堂をほめ〳〵のんで居る
曾我祭するから芝居金がなし
うけ出して鈴をふらせるかるゐ澤
そらじぎをするなと下女をつかまへる
門部やにたしない目玉ひからかし
御子孫は西の國でも大あたま

つれの部屋迄ついて來るむまいやつ
神樂堂跡引つさりがはじめなり
傘出せばひつちなぐつて供は飛び
かたみわけ已後はいんしん不通なり
日のながい事さ杉戸に寄りかゝり
大部やの持佛はしめて拾貫目
黑がもをつれて姿の高がしれ
祐つねは一ッかいのがれする男
小判ではいやだとにげるつくし賣
和尙さまくるしいわけは二タ世帶
京だんをまねて綿つみどうづかれ
上ぞうりころしてあるくにくらしさ
子の尻をはしよつてはなす御殿山
庚申のあした二タ人の宿をよび
姉むことよりやは母の手ぬけなり
雛の酒茶わんでのんでしかられる
藥種屋でとそを買ふのは無病なり
中宿へ御用小ぎくを持つてかけ
初がねはぱち〳〵とした顏になり
あてはめた內をお袋たばかられ

御刀をよけたが座頭越度なり
女房の聞くようによむにせ手紙
よめの留守孫も味方におびきこみ
お局の出に大部やは四人泣き
乳母が尻たゝいて御用うきめをみ
蚊を追つておすゝめ申す源三位
妹の無げいは姉のふらちゆゑ
にげ足でよめの出て居る門涼み
又それへふんばぎやすと産婦いひ
湯屋へ來て喘すは安い女郎かひ
けんぺいをいふのが乳母は癖になり
笠のじぎたがいにふちをなでて行
こし元は度々御らう下を一ついき
茶を直切るやつが役者の名をも聞き
見世へ出る年迄ちりげすへて遣り
ごぶさつておろうと亭主たきつける
雪をたべやるなと帶を締て出し
小言かと思へば女せいぞろへ
金時は鬼が出ないとねかしもの
金がつゞかぬと若後家地をかせぎ

竿先に成つてとあやめ達てとめ
神道者守屋十ぶん理だといふ
めがたきと思へど島田齒がたゝず
女にはいつそ目のある座頭の坊
不心中遣手へぐわらりぶちまける
居酒をば仕らずとむごくかき
いつはりをいふかもしれずあづさ弓
分散にちんをばいしやへおつ付る
もゝ引で和尚のつれる村小姓
ゑゝ子だと御用八百屋へ賴まれる
眞木ざつぱ程なでむす子みがくなり
檢校の妻つれ立つをせつながり
ゑい山のあてゞ前日一つ鳴り
けんぎやうへ物もふのない不成日
後の月一人々々にごみを出し
つれびきは猫と馬ほど音がちがい
へんな日にばかり髮ゆひやすむなり
切落し實をなげぬのは得手勝手
一人もの一なぐりだと笹をかひ
口ばたをつめるにといふ待女郎

よし町をふらつく乳母は不人相
虚無僧の礎にかける急な用
ほれたやつ見ぐるしい程つかはれる
小兒いしや赤い紙燭でおくられる
なでつけでずいぶんよいと連はいひ
子が一ト人出來てそれなりけりになり
將門はちんがふとくとへらず口
ろこう茶がひそうと見えて鈴をふり
御かごわき時々またへ手をはさみ
かぞへ日に成つてとそねむ年わすれ
こし元のよむを聞き〳〵御しづまり
千兩でゞ出しに成る五十けん
惡人がとなりに有るで早いひな
いらぬさし買つて酒屋はしづかなり
御内意で和尙衣を二つかけ
上の句でくもり下の句ぶんまける
たま〳〵はよいと亭主はふとく出る
帶に手をはさんで後家ははぢしめる
正宗を切れそうなとはほめもほめ
櫻ばなしらふでかつぐものでなし

心中が有るでつよくもしかられず
御見たてだなどとこし元引出され
名作の由來をはなす雨やどり
ごつからか人の出て來る大がらん
七つ口是れも〳〵とく〳〵しつけ
四つ手かご行のゝ道でねだられる
四五會めごふもうれしい事をいふ
順禮が來ると式部は筆を置き
ごふく見世何やらいふと持て來る
ひきぬきにしなのゝ伯母も捨られず
いんごうが濟むと魔道へ引こまれ
朝大師かづけて出るは高がしれ
上田紙でつちは下女に見おとされ
伯父が來てとかく他人の飯といふ
とこ柱しよつても見ずに年が明け
神樂堂姫ごぜの身ですつぱぬき
けいせいはたとへにもれた厚着する
りやうり人うん氣も少しかんがへる
ようも無い緣を組んだと源九郞
にがすなとひつぱつて行く大一座

初がつをふといやつだと猫を追ひ
初のひな旦那御太義なさつたの
づぶぬれに成つて兄弟わたり合ひ
母のないげい子五つ月迄かくし
宿下りのむと出してはとんだ事
こんやからもたせてよこす氣の長さ
膳が出てあぐらをかくのやかましさ
もふ客が來てもとぬかを一つかみ
しうとめに月見ひかせる氣のどくさ
お袋は日ッくわむす子はてつくわなり
ぬきん出て隣のじゐきしよつて來る
市歸りおんまがきやらをそつと出し
うらなひにさいなんと出る通りもの
下手將棊袖をひかれてねめ廻し
見えぼうでしつきやくまけの地紙賣
江戸みやげくるま長持などへはり
いたはしい程いんぎんな御不勝手
大はんにや時々でかい聲を出し
黑がもは五百がわたをみんないれ
米つきにおめしといふと帶をしめ

此佛さまもお好きと土手でいひ
百だんな正月くるとぼんに來ず
わらじくひ迄は能因氣がつかず
すゞみ臺ぎしり／＼と人がふゐ
雜役(ざうやく)の馬子がまじつてばくちじやみ
はやまつた後家入れがみで盃し
女よみおちなさるなとしやかをうち
浪人は長いものから喰ひはじめ
夫婦づれ女房に先へ出やといふ
一人者ゐ樽をくすね米をいれ
五十ぞう色に手拭買つてやり
せん水へしやうじひやかす入院まへ
化けそうな花むこの出るするが町
ばかにして彈くに上るり氣がつかず
たつた二度着たと女房ぐちをいひ
こうとうの內侍いんぐわと美しい
病人の寐たもぬすみにあふた晩
ごふく店かついで來てはなげて行く
二度かりた小袖を貰ふかたみわけ
ふだん着で出たとおふくろおろかなり

あねさんといひやさげい者子をそだて
くらやみで晝めしをくふうるしかき
うたゝ寐の書物は風がくつて居る
口上がすむと西瓜の手をはなし
今歸りますと笠ぬぐ大ぼとけ
ぬかつゝむ內御新造はしゝに行き
買つけぬなどと內裏を二朱につけ
江の島のばちで居つゞけ尻がわれ
す見物本多にゆふは何ごごぞ
あたつてはくだける浪の和歌の浦
今頃は灰になつたと灯籠を見
お妾に出るは一ごら打つて後
一反でたらぬとむすめはおしめる
せわしなくつゞいて座頭橫に切れ
いもうと妹を先へ氣づよく仲人し
しんだかと思へばおきる角力取
立懸けたやうにけいせい腰を懸け
去狀をかく內しちを受けに遣り
今ないた雛子うりに來るとうの澤
あの人と藏へはいやと下女はいひ

間夫に成るやつは先生善(さきしやうせん)をなし
旅むかひ夜ぎりはらつて出事はの
さつぱりとそうじをさせて首を取り
行廻りかん廻りのむ雛の酒
いしやの山二つ一つの玄關なり
かな川はてんまで來るが爲になり
半分は上げてもよいと吉次いひ
行戻り和尙大屋へおとづれる
雨乞ひも女はたんと口をきゝ
足があぶないと太刀取海へなげ
御殿ものふざけ出してはきつい事
關守の折ふし通ふかるゐざは
甥の殿などこうべる綱がをば
去狀は言葉だたかひ事をはり
かり元結かけて髮結なで廻し
くどかれてごぜははるならいやといひ
女中供つひに乞食にいひまける
やれば取るものだとばかのろんはやみ
中宿で地は御無用といけんする
大一座いたゞいてのむやつもあり

大こくのやうに紫式部見え
二ぼさつはあるかつしやいと本田いひ
朝歸りすだれへ戻るばちあたり
風ぐらひなんなど御用きめらるゝ
びくに程もみ上を出すワキの僧
あのしち屋先住の時百だんな
旅芝居目さへよせればおちがくる
清盛はきごくに孫をかわゆがり
石尊はあげ坪しても氣にかゝり
あら世帶夜具に屛風を立廻し
けんぎやうの娘以上へやる氣なり
上田には成るとさかな屋ならべたて
よし町でうつはりちぎな和尚なり
上ぞうり引四つからは横にはき
關守は手形とほくろ見くらべる
牛若が居ぬと熊坂大仕事
二三度もじやらして文を渡すなり
うんだのをかたわのやうに五丁町
めつそうにおすまいぞやと錢車
おそなはりましたとのまぬ人へさし

引出しをひんぬいて來る急な用
死にたくば死になとむすめむごく出る
角田川ロッぱたきだにがすなよ
半年の内に宿下り見事なり
だいなしにちるはと奴おこされる
白粉でばッかり持ッたよめをとり
すがゝきをりちぎにひくは出た當座
地廻りの向ふへ切れる惣仕廻
かくべつな顏にて明けるぬか袋
堺町おとなしぶつてのこされる
御障子が明いたで雀枝ばかり
ぬり樽を庚申塚で又おろし
大がくをふくさにつゝむ丸びたひ
上下の音ばかり聞く年始帳
一ト位いんぎんに下女なぶられる
あり切の音ぼねを出す野がけ道
じやうだんに談義などきく花戻り
碁會所といしやとへむかひ二タ人出し
およんなんしたかとけちな形りで來る
思切るすがたのこぞる雨やどり

鉢巻きと鞴巻きの中不動尊
死にやば死にや抔とこは〳〵母はいひ
寐坊めがと張良はしかられる
はんてんはよせと度々ともへいひ
江戸入だなどと野がけは火をはたき
そだ〳〵と藪からのぞく鈴の音
して取つた顔で鳥さし吹やめる
旅戻り乳母はから手でかけて來る
事ふれを夫の留守にもてあまし
餅へ入れたのを男は軒へさし
三浦では吉原すゞめさまといひ
硯ぶた茶うけに喰ふはげびたもの
その時はごうの秤のおもひなり
人ごめの中にもむごいかきつばた
おき〳〵の顔へむしんはさしひかへ
竹馬と下女わけのあるていたらく
時鳥より此の事とりやうり人
衣からとの様の紋すきとをり
檢校のめかけに顔を捨てに行き
たがいふとなしに妾に出たが知れ

引ばいでおこすむすめは木ぞうなり
後の月すめぬ顔にて内に居る
はだか身へ守りをかけてうつて居る
あざの有る子の母おやのうつくしさ
不動迄女房を連れる通りもの
かけむかひこいよ〳〵といつた果
樽ひろひからおなじみと毒をいひ
ふんどしのほころび迄もお針なり
わるがたい下女君命をはづかしめ
人先へしたくの出來るやぼむすめ
やぼなやつふられた事をひしがくし
かみさまをいくらもよせる柏餅
燕はぼん字のやうにとんで行き
小兒いしや常の熱とは違ひます
庚申のあしたしちやも預けられ
おめかけのす顔御拂箱と見え
五六寸お針の留守にさいはじけ
千の手で引くにみおのや氣がつかず
浦どのがからめてならばなんとして
す一歩もしらず駕かきついて來る

ひきはだで寄る品川は久しぶり
氣のまよひさと取かへるいわし賣
吉原のぎうさと女房にくゝいひ
品川へしづめにかける矢口づれ
あしらつてなさいと小判落すなり
辻番はならいが吹くとちゞこまり
くわくらんと藪醫見たてるうるしかき
また火してねるほどおちよ買こなし
入り船を見なさと初會の客にいひ
判取でおぎなつて置くやつもあり
くら宿へいつて來る內堂に置き
髮の毛でぞうげをつなぐおそろしさ
大一座黑豆のあるへどをはき
らんびんに成つて髮結ひ追廻し
鼠木戸もぎとるやうに人を入れ
たいこ持ほんだのわけち程にゆひ
ふくの神そん／＼は不吉なり
早乙女の笠ひぼ閊へもつて來る
着せるにも對ひつぱぐもついにはぎ
姑ばゝ後家をたてたがきついみそ

上り馬すてばひろふの氣でつける
けんどんが毎ばんくるとわるくいひ
麹屋のむす子お七にはねられる
女房はおふくろよりも邪魔なもの
筆せいの一ト村揃ふ三度がさ
米つきを二人とあてゝ米をとぎ
どこでどふ書いたか座頭文をつけ
すつぱりと這はせて置いて內義起き
仲條のしづかにくらすおそろしさ
たれかしらいじめて歸る國家老
百人首二つにわつて御なぐさみ
無筆でもていしゆの文にかげがさし
齒ぎしりのやうに枕のしまる音
ひる見世へおしよくはなまけ／＼出る
しよく臺の次手をむすめいきどほり
能くしめて寐やれと後家のあぢきなさ
冬の月ほめたりけりではたり立て
御首尾よく出れば嫁入のしゆんはづれ
さか桐を下女はほつても取かへず
すた／＼と九段を上るくわいらいし

小兒いしやむだなみやくから取てみせ
花嫁は湯へ行かれぬをやつといひ
年禮は喰ふやりくりをしてあるき
もみうらの無いはしやうしな土用干
あさづけもそう切つたのは甘くなし
鳥追ひのすがゝきで行く町はづれ
跡の戸をたのむと琴をかりて行き
わる口がいやさにむこの長ッしり
となりとはひさしの事で不破の關
先陣は兄弟ながら手がわるし
今に見ろなどと若殿附はいひ
中十日馬にしたがる黑木うり
きゝ納め琴をと王の一ッ手すき
十三日腹を立つてもその日ぎり
箸もつて肴にまよふすゞりぶた
けんぎやうのはじめて笑ふ御皆濟
米屋そんすれど車屋そんはせず
かけとりが歸ると骨をたゝかせる
一町は唐へも知れし斬ならび
やぶ醫者へ金百ぴきは月行事

年禮をずるけ過ぎたで松がとれ
虫よけをよみよく張るは無筆なり
ひつかりといふと僧正はりあげる
諸事前の通りとふれる後三年
井戸ばたの茶碗有常ゆだんなり
行つたなとのれんをかける棒でぶち
御ひいきだそうなとかりて耳をかき
しめられるむす子のそばに出入帳
まだしものこと男色と檀家いひ
さゝがしの牛房のそばで皆ごろし
合羽屋のから身でかけるつむじ風
半箱じやきゝますまいと茶屋はいひ
日本勢人參ぐらでつかみやひ
又今のやうにさといふくばり餅
能い見世が出たと家中のこつそりさ
上下で三日歸らぬはんじもの
園はれはだれじやといつてにぢられる
知る人にばつかりしひる子のきうじ
その氣では來ぬといひ／＼引づられ
信玄は七書にひいで四書にもれ

雨やどり男のすがたけなるそう
ほねが折れましたと渡すりゑん状
西行は神前まではやらぬ筈
どらけゆへきりもむやうに開立てる
何ぶしだなどと泣く子をじれさせる
若死にと聞いてくやみに念を入れ
寺小姓とぼしかけ程巻いてゐる
しうとめもおんなじやうにぬり廻し
風呂しきをとくとかけだす眞桑瓜
京女たつてたれるがすこしきづ
鳥かごのそうじ麹屋ほどにする
いつはりをいふかもしれずあづさ弓
寐坊めがと張良はしかられる
行くと先づ邪魔だと渡す根津のぎう
どのうらへ行つてももてぬ淺黄うら
古着買くりに引導きいて居る
盆持つた所化のりものへはしりつき
持つほどのものに字を書くぬけ參り
げつぷうをしてからつきや二はいくひ
うばちつとたしなめぐらい屁ともせず

大和茶のばゝア苧ばかりうんで居る
大名は小判の中によく寐いり
わらじくひ迄は能因氣がつかず
美しい顔で錢金づくをいひ
蛙とぶ池はふかみの折句なり
一ト樽の酒屋の出來る鳥の町
はなれ馬よく〳〵腹のたつ氣也
たゞ持つて居る約束の眞桑瓜
しめて居るのが入むこへ恥かしい
後家の氣は佛の弟いやな事
はらがきにして三味線を二朱まけな
折々はしやうじんもするよしの丸
嫁の禮敷居を越すのやかましさ
内に居る顔にはおしい御延引
持つ程のものに字を書くぬけ參り
惣花に遣手は風をおして出る
無い事をいふ世の中と後家はいひ
じつとして居なと額の蚊をころし
かげ膳のおろそかに成る事が出來
つみらしくごぜの行水のぞくなり

こたつから出そうにしては禮を請け
いもむしのよふにこし元承知せず
一つめり給へと留守居しやれをいひ
弓杖をつき〳〵そゝる高田馬場
てうしからさすらへの身としやれた文
ぎやうさんに逃げてこしもと笑はれる
中の町しやうりやうも氣のはる所
かくさずと御出と内義見ぬくなり
一人ものびんといはせて旅へたち
一日は春めいてくる土用ぼし
又せがきうせたと藝子ひきたてる
あかすりのぬかのと長田せわをやき
取る穴を知つてうなぎとたこをかし
蓮池をこいつと思ふ二タ人づれ
九つがものさといけんきゝに行
道をかへ歸るものだと引づられ
先づ盤の足をねぢ込む下手將棊
檢校のめかけ貌よりはだの事
引けものでこそあれ常世とり揃へ
すけん物こつを持つたは土手に居る

馬喰町衆と杉戸へにげこませ
流されて居ても角力をふるまはれ
ぬけうらをうるさくぎうはつきまとひ
狐つり女房が來てもゆだんせず
小便をせぬが大谷刑部なり
しかられて枕へ戻るやみあがり
一トけんくわして女房はしちを出し
だいじない寢言などいふ空ね入り
里の母寢ものがたりにいへといふ
鼻うたはうぬが勝手にふしをつけ
下駄を見にいらぬとうふを買ひに行き
奥家老泊りの知れたあるきやう
二位どのは小意地をわるくさして行き
あたゝかな後へ棒組錢をつき
遠乘の供はだんごを持つてかけ
げくわの子の本道に成るおくびやうさ
おふくろはおがまれて出す小紋むく
毎朝の事と新造ひつぱがれ
惣花はすゝきの中で渡すなり
戀無常などとおどける大一座

松の木へ遠く下官はぬれて居る
やかた船先祖のかげで初に乘り
貝杓子だぞと廊上下でいひ
ちぐはぐの顔は貰つた棧敷なり
はらのたつ貌も交つて水あびせ
あたごにて買つたさつきは三日咲き
あんのじやう日本で跡のといてなし
酔たあす女房のまねるはづかしさ
よむたびに賴政とかく德をつけ
たま〳〵のやかたにいとこはとこ迄
はだかにておきるが蚊やの釣り始
花を見に出たあくる日は仲人する
能い智惠の出た夜九つ土手で開き
切おとしりくつな方も引出され
萬歳にぞうりを持つてかしこまり
色文を人中で書くつとめの身
おぬしゆへ見世も懦弱と母はいひ
四つ手かご衣のさがるにくい事
萬歳を子にほだされて呼びはじめ
寢ぼうではむかしの京はいかぬ所

けいせいははだしになると其早さ
大じやもの顔で女敵うちに出る
むらさきでしうとの見廻ふ御不勝手
四ッ人で一トつるべのむ車引
そがの代にいぢめた座頭うづめられ
間違つて草摺の鳴る大三十日
げぢ〳〵にさし上て居る硯ぶた
つけ登せ杉戸をじろり〳〵見る
火なわうりなんだか外トでいひふくめ
筋をひく病大谷切りで絕え
かゞみさへ見るとほくろがにやんまい
行かうかとでんがくぐして歯をせゝり
かたき持月は見れども花に出ず
こぶ巻のでんじゆ廊上下でうけ
すり鉢の音も夜ふかきならの町
間男をおさへたそばに柳ごり
扨けふはひとへ羽織で大あたり
おつかけもせぬのに迯げるいやな下女
大三十日春日野一ト人うらやまれ
居酒屋のとなり產婦へ手をあてる

たいけつに大きなはらでいひふせる
こかまつて泣きな〳〵と子もりいひ
お内義は相談づくで又はがれ
年明のこつぱたき〳〵根津のうさ
おのれゆえりんしもせぬと大くせつ
雨どなり逃げこんだならおんだす氣
三世相下女殊の外くろうがり
出して來やなどと國府を買ひにやり
わるがたい山伏めだと庄司いひ
手を出すな氣になるよせとひぢでつき
もてたあす手桶の汁は身につかず
五十ぞう留るとあごをまかなはせ
ぢうくうなことばかりいふ宿下り
さかろよりでごとをおもにざんをする
梅づけをぶじなうちからよめは喰ひ
ワキの僧宗旨は何かむじしれず
かた衣で女房を化かすもんと宗
うばちつとたしなめぐらゐ屁ともせず
入相に大工かんなの三ッをさげ
たちばなの中へゐおとす源三位

六月は干飯をくらひ水をのみ
よりにたつ事はいやさと茶の間いひ
道ならぬ戀に明店二けん出來
又頭痛よめはしみ〴〵しやうしがり
虫ぼしの前夜間男つれてにげ
品川の客横づけがきついみそ
市戻りはいりかねたる十九日
御めんかごはじめて乘つて首を出し
愛元はとうにお立ちと正燈寺
やき鹽は信玄きつい奢りなり
おまへのがほつとう人と内義いひ
しちかへす病氣女房はきへたがり
醉つたのがつけかけをする年始帳
はしり帳隣は二日おそ〳〵つき
まきざつぱ疵と仲人願書
酒樽へ下戸は四角に口をつけ
さつきやくにいふとの出ぬあふむ石
引出しにうせたとおやぢつきまとひ
箱根にて剃らぬかはりに甲斐で剃り
まつ白なものゝ立をとる御かごわき

かみさまは有るかとなぶるかゝみとぎ
物もふにごふれ〳〵と二もく打ち
琴箱の通るも目だつ大三十日
なまくらな鍛冶屋木辻へくらひこみ
きむすめは片袖すてゝにげて行き
いやそうに嫁は乞食の下駄をはき
水茶屋でうつとはしごくやぼなやつ
小ならば御免と目黒からかへり
木ぐすり屋聞いてきなよと子を歸し
師のかげを七尺去ると人形書
幕の内手前の飯でひきに行き
またぐらへ褄をはさんで手を洗ひ
隱居所に片時も居らぬしうとばゝ
市の生醉すりこ木にそりをうち
三みせんをにぎつてのぞく土左衞門
村のきやくはたをおりるをたつてとめ
ちりめんを下女青梅より安くあげ
ぬしがのは氣ごりがよいと土手でいひ
氣のよわい亭主理づめでこしをだき
ひつきやうが箱根へ遣るも口へらし

此の風に又出やるかとそろい母
けいせいにかす子は酒をくごくきめ
鋲打の中で地犬をほえてゐる
中納言わかれの時はたちのまゝ
朝がへり行く時程のちゑは出ず
舟迄はあやかりものとみんないひ
なからはんじやくで義貞ずるけ出し
はやりいしや兩手をかごのふちへかけ
心中のじやまして今に禮をうけ
淺草寺見附できけばつきあたり
若いものばかり貰ふに元をいれ
氣に入らぬそうと水茶屋同士いひ
熊坂をせめたら手下まだ出よふ
しからせて聞くが遣手の目見えなり
すもつたいつけて檢校ひかぬなり
ろじ口をかゝァでうめる夕すゞみ
とむらひのうらはどうだと湯やでいひ
ふんどしをしたのが出ると湯は仕廻ひ
とゝをだとさみづてあやす久しぶり
くんどくのやうだと圍ひ三を下げ

ふいに來たつきやで二人ひだるがり
夜の内に臺迄行くとこりをとり
大名は小判の中によく寐いり
商人はこまつかしいと根津でいひ
吉日に大福帳は書かぬなり
忠臣はにくまれ口を三つきゝ
惣仕廻むかふのていしゆ小言なり
御無用の聲がかたきにそのまんま
眞ッさきへ寄る口ぶりと内義いひ
います内もたぬはやかましいと見え
はいらない日だと留場でひげをぬき
ふり袖を引きしやなぐつて一つぶち
髮結を一艘つんで帆を上げる
入れ髮をして深川へ初會なり
おいらのがしかりなんすと貞女めき
かみゆひをむぐらせて遣る大屋衆
御勝手の衆へとゞうは四百出し
うしろ迄あかるくするが忠の道
夕すゞみ嫁の出るのはごく暑なり
大和茶のばゝァ苧ばかりうんで居る

買ひにやる子へきぬ糸を五六寸
品川は杓子ぐわほうな大一座
おもざしは馬に似てゐるきり〴〵す
樽拾ひだれがついだとせんぎされ
花はくれないは遣手のきん句なり
田舍醫者へびを出したで名が高し
藪醫者へこもから脈を出して見せ
屁をひつてよめは雪隠出にくがり
九重は齒みがきよりもふしがうれ
七けんでほうれんそうの事をいひ
本店と出見世の間ヒにふじが見え
つかみ込みましたと亭主花のみそ
女房のものをかりるとたてこづき
お妾はうられはぐつたむすめなり
何やかをみをのやその日そんじさせ
へんてつも無いと御うばは鱚を喰ひ
岡崎をあげて四文が本を買ひ
おどり子で江の島うごきわたるなり
汁粉餅よめはちぎつて舌へのせ
百ぎりで一筋はねる下女が繩

金目貫見しやれと上るせいごひら
らうがいの妹はとうに縁につき
泣顔があのくらゐだとせげんいひ
出入帳百いんほどに夜をふかし
二町程つゞいたが後家じまんなり
人買ひのふじにふつ〳〵こりた貌
大一座ふきよせた程上ぞうり
こつずいにうまそうにくふしなの者
うつほゝをしたさ妹にむこをとり
房州もやわか相撲におとるべき
金だけにさわぎあてがふたいこもち
どのうらへ行つてももてぬ淺黄うら
御不勝手嵐のあした幕が出る
おつゞきかしらぬがけちな御新造
弔のかたをかへるのやかましさ
はんてんを持つて湯番はわびにくる
年よわな七百歳と慈童いひ
こうほねのうごくを見れば蛙なり
五郎丸二十九日は氣くたびれ
有つてさへ況んや後家に於てをや

玄關から藝子の上がるじだらくさ
松洞寺何かれつぱとすぐ通り
ぶつさばき柄へからんで押へかけ
よし町のけんぺきに成るいろは茶屋
供の下女笑つて通る宿のまへ
子を襁へうけとるひざをこしらへる
中宿へおふくろの來る一大事
足音を聞知つて居て向ひあひ
冬の内あらわざをするよしの丸
きむす子と見えて朝から市へ立ち
どこかぶつたび母の泣くにはかごせ
なんと面白かろうがとのぞきいひ
木ぐすりやひつを明けると人だかり
くすり箱出ると居眠ひとりへり
わに口は四つたゝいて氣にかゝり
てん宅をきゆうにさがす伊勢の御師
くどかれて乳母だいた子に間合せ
料理人小ゆび程たこ切てくれ
このしろは肩でもふける肴なり
こは飯をやつた乞食に土手であひ

若じにをしなよと一つごうづかれ
むきみ賣じやうぶな升をつかひつけ
まつたりとばかときせるでしんを切り
古着買くりにいんごう聞いて居る
まげぶしのおつ立て居るかゞみとぎ
清書にちつとちいさい下女が文
なき／＼もうかとはくれぬかたみ分け
棒組をよび／＼かごをしよつてかけ
つけ登せかつこうものにくらひこみ
盃持つた所化のりものへはしりつき
鬼王へしりやる通りとかたみなし
あす立つと土場で切火でのんで居る
父母います内は中々やむ氣なし
おとなしくせぬとねんねをよそへ遣る
てうちんで消すのがおぞうきついみえ
不成日しらずゑい山にて出合ひ
樽ひろひなき／＼髪をあらはれる
よそでへりますと内義はいしやへいひ
御かん狀外科の出て行く跡へ來る
おつかないたち賣をするかうじ町

かね四つにするが町迄こぎつける
後家をたてますには糸のひきて有り
つんぼかとのぞけばかねをつけて居る
入れがみをした入道にぬつて見せ
なぜいやだとは尻の有るくどきやう
ついかへす事かと土手で一分かし
有るうへをのばすがむすこ氣にいらず
大丸の請けとりをよむまくの内
一疋の座頭江戸染着る氣なり
うら門へ出やれと尻をおして出る
おき／＼のきげんは人の知らぬ事
九品佛こしをかけると糸をやめ
ほめられるたび持直す花の枝
笑はねば咄のならぬ小げいせい
けいせいのしまだ高尾はゆひはじめ
惣菜はあらめとかむろ口ばしり
相性は聞きたし年はかくしたし
石塔の外ヵはお家のくひつぶし
旅の留守戸を引寄せるにくらしさ
新川と號しばんとう深い川

わけ米の内を次男にせびられる
よめぬ字を何といふ字によんで置き
がんくびでつッぱつて居るいろは茶や

明和八卯年孟秋吉辰

誹風柳多留六篇終

誹風柳多留七篇

絹布に正札附有、蕎麥に正直あり、其店市をなす、今川叟の評は正道を專らとし、いさゝかも贔負の沙汰なし、故に年毎に寄句增員す、好人來る仲秋五日の會を延しと待るゝ中に、予横好の僻に齒を研すまして、滿月のそのこゝろみや五日月

明和九辰孟秋　吳陵軒愚序

干鯛箱へだてゝあたま二つさげ
からかつたうへで三つ組かしてやり
お妾ははらみこぼれてゐんにつき
中の町いけんもしたりすゝめたり
かんがへて見なよとごぜへ久しぶり
世の中のすがたは御講かぎりなり
つみ有つてむす子てうしの月を見る
はご板をなげて女房禮をうけ

此あばた見つけなんだと中のよさ
かつがれる宵にしげ〳〵うらへ出る
茶屋かぶが先ッ僧正のかたみなり
そらごけのせぬのはしゆすの年にはち
おめかけの書物めりやす斗なり
こひ聟を入れたで男弟子は來ず
座頭のをかりて座頭の鳴りをとめ
それもして見たとおこりはじれて居る
數の無いはしたお出がはるといひ
神事だなどとおやぶん氣の若さ
藪入をしかるをきけばきうの事
かけぬけて芝にねて見る野がけ道
わつちらが內も內さと門（かど）に立ち
不動さまうられそもないお貌つき
こぜの手を引くを黑がもせつながり
仲人の諷野がけで出したまゝ
不細工の內にして置くおんなの子
お妾はおもしろがつてしからせる
さらしつくきねでおしへる三笠山
遣手ばゝおんなじやうにつまを取り

あてもなく下女ぶら〳〵と戀やまひ
にくらしい口だぞといふ待女郎
品川はぶしやれなやつが爲になり
安げんくわ御用干ものを買て來る
居酒屋のけんくわかたりの方へおち
梅若は旅かげまにはいやといふ
上下で乞食に開いておつかける
ふるせでは無いと仲人しやれをいひ
行水に寐る程よめはかこはせる
どうしても泊つて來たが亭主まけ
きんたまをかくふり二百くすねこみ
藪いしやへ斷りいふて御やくゑん
おさまらぬものだとおやぢ雪をかき
あら世帶ひよつと日なしをかり始め
あとおさへ通るときねをふり上げる
あらゝ程小僧をいびり遣ふなり
御祭に出たのを下女はきついみそ
御經も寶づくしはみゝちかし
五丁町殿に燕雀付きまとい
からたちに成つてかん當ゆるす也

口ばたのみそをふき〳〵堀へさし
源三位きうくつそうな腹をきり
十三日長おひをしてとつかまり
あればかり男かと母じやけん也
四つ手駕杉戸間近くよこにつけ
よし原を大念佛ですゝめこみ
手のひらへ赤子をのせてしかられる
頬杖で見て居る文のくらうそう
祐經は久しいなりでうたれたり
諷こううは調子なも二三人
十兩の馬宿々へぱつと知れ
伴頭はやぐらへ乘つて來た男
あてこともないと産所へ追こまれ
身ごしらへ禿が帶は茶やがしめ
ごふく屋のめし安がねでくへぬ也
國に無い船と店ものあぶながり
後三年とう〳〵ごすい方がかち
日本ばし馬鹿をつくしたさし向ひ
ごふく店夫婦げんくわで行く處
長髪で大師へ參るむづかしさ

角田川までにあれこれやつとまき
下紐といふは木綿のことでなし
萬歳を下女ありッたけ笑ふ也
人さまの居るのに御用氣がつかず
元日の生れ近所で知つて居る
品川はあんま斗の下駄の音
よしの丸是は〳〵としやれてのる
人二タ人かばつて局不首尾也
吉野だといへば藝子はよしといふ
だらけずに廻つて來なとこしをあて
白酒に醉て公家衆の供をわり
清玄でござりまするど吹矢いふ
かばやきも斗ですまぬ所なり
小間物屋たどんを一つのみつぶし
後家の文子もりたのむが越度也
おどり子へ氣ばッかりさと堀部いひ
正とう寺大切米のさかりなり
神樂堂立聞らしくあるくなり
けいせいのちからでうごく石のふた
おやぢのはむす子が買た妹なり

美しい斗でせいしはりはなし
内が茶をうりやすさ乳母はゞで行
やきたてのこはだつきやへちそう也
宇治川のそこには馬のわなをかけ
あそこへはいやさ藪入氣の高さ
若殿もうきにはもれぬかすり疵
ひまな時ちんぴをきざむ玄關番
お直段に御ふそくないと座頭いひ
はねの有るいひわけ程はあひるとぶ
おとゝしの門に寐て居る車牛
ぶん廻しあんまり人の持たぬもの
おも手代不慮な事にてかさをかき
見くびつて下女に盃おさへられ
もふ片目無いと勘介うめられる
勘介はむかし鬼王だも知れず
村日待せんがとれるとごせを出し
たおすやつむかふの人も來らばこそ
一人もの御用をのせてさいをくい
お袋をこはがるむすこ少しぬけ
袋棚から札を出すむじん茶屋

又遣ひころす腹だと見世でいひ
後家を手に入れて子孫のほねがらみ
五十ぞう留守のやうなは客があり
あしたでも剃てくれろと飛車が成り
切見世も品こそかはれのんでさし
たゞも行かれぬがぶさたのなり始め
音羽町つか〳〵と來て袖をとり
ほとゝぎす二十六字はあんじさせ
ごぜの供琴を出されて是もかへ
金びやうぶ元が元だとかりにやり
なげるなといふは凉みの角力なり
けいせいの文に女の寄りたかり
つげ口をするとみの輪へ歸す也
かけそくにならないやつら後家に付き
朝歸りそりやはじまると雨ごなり
奥中で高尾が顔を待ちぼうけ
まはりでもよいと芝居の前を行き
かたまつた灰をつゝつくゑびす講
朝歸り後家待うけてあなどるか
なんの氣もないに御へいをいたゞかせ

青首をさかさまになでてしかられる
小所でしなのを置て喰ひぬかれ
若後家のあにこうとうをこのまんや
内證をちらりと聞てかせぐなり
ついたかとはぎしりをして見てもらひ
くわいらいし萬ざいよりも見てがなし
その方(かた)でもつとなさいと土弓いひ
島田くづしには高尾はゆはぬなり
ぬりへぎをころがり廻る百旦那
雨やどり箱でもしたい音をきゝ
よくきけば女がきものふといやつ
門ばかり有る御やしきで元結こき
立聞きに持つた十能の火がおこり
二三日片目無いかとかりに來る
うなされたでつち三つ四つけとばされ
安ものゝうれるばんだと遣手いひ
御二かいへ四文二つに八一つ
めしもりにくらひついたと遣手いひ
渡りそめすむと葬禮二つ行き
ようござりましようと借馬こしをのし

ぞうりとりへそ迄出すが渡りもの
ごうづかれ御さいはつぼをまたぐ也
おめかけは花の名所へすてられる
びくついて居るに宿屋はもうしまい
江戸衆は數がいけぬとかるゐ澤
子ばやいがおやかた犬の倒れ也
呉服屋ですぐに着て行く通りもの
出來るやつへゝ〳〵と先づ笑い
札附の下女政宗の在所もの
どつさりとざるへぶち込む淺黄裏
苧をうんで居るのをといふかるゐ澤
入れがみをして品川をやたらほめ
かし方をぶつて濟むかと日なしにち
とむらひが淺草邊できついこと
上下で拂ふは餘程ひどいかり
不承知な娘ひたいへしわをよせ
駕かきにつかれてすけんしたを出し
おとしてもよしかと文をことづかり
本能寺三日あはぬがふうんなり
又九月來なと品川にくてぐち

朝がへり頼みに思ふ母はしやく
わんぼうをぬぎおろうさと朝がへり
色をするつらかと遣手なわをかけ
四つ手駕中でくせつをかんがへる
ちつとづつしかつてしきせ渡すなり
朝貌のつるを引ッ切る中たがひ
酒見世へちぎりの禮に三歩遣り
あぶれ女郎夜食をくふが思ひ也
かみさまじや出來ぬとにげるはつ鰹
嫁の下女里びいきしてねめられる
ねかす子をあやして亭主しかられる
口に戸をたてぬと御茶つとまらず
わか後家は佛の兄をうるさがり
鷄はおつゝめられて五尺とび
行く水のなりにはこがぬ渡守
百旦那まかり違ふと地ごく也
すりはらひだとごう取は手をはたき
まな板へあられで疵を付けはじめ
飛鳥山ばたら三みせん百でかり
歌がるたちよき〳〵切てしかられる

素見物たからの山へ入りながら
口上はごうだとでつちわらはれる
鐘くやうぜんたいわるい矢先なり
田舍後家あんにすべいと髪を切り
かいあん寺時分ひるまはきついそん
女房をかみふせて行く正とうじ
たつた一人に細見を買て行き
うしろから土手で見つけて目をふさぎ
どうなりとしやれと母は藏を出る
夕すゞみなんの氣もなく土手へ來る
ゆりおこす手をたゝかれるおぢきなさ
雛箱へむすめ道からついて來る
戸塚だちとは見えますとぎうはいひ
能い音のせつかん坊主かふろなり
番たばこ鶴かきめらに遣つてのり
盃と小判けつしていたゞかず
ごふく屋をさゝずに出るは雨やどり
初午にたこを上げるはすねたやつ
鰒も喰ひますと花嫁しやれたもの
二歩と無いかねをむす子のにやつかい

よく〳〵の事からうがひ笑ふなり
正月のふざけはじめは三河なり
藥種屋のかんばん朝の一ト仕事
あやまつたやうと廊下でとち狂ひ
引料はやるとごふく屋うるさがり
口をすくさせて花よめこしをかけ
品川はいびつな月も見るところ
何の氣もないに母おやあぶながり
居つゞけのひんもんで置く母の文
はなし龜もとは鶴から思ひつき
十五夜は跡札のつくもん日なり
嫁のかみ酒てんどうじの時分出來
夜ざくらは年寄の見る物でなし
客よりは先へ來て居る安げいしや
盗みでもしたやうにするつりの二朱
御釜じめ何やらよめにいたゞかせ
けん好はあのつらでかとなぐり書き
居つゞけのむかひおつこちそうな腹
もちつとでほたるへとゞく禿の手
はまぐりがすゞめに成ると寐るの也

十人が九人しやうきか金太郎
帳面でぶちのめされるわか手代
ちんまりと居なと山出しからかられる
はつとした金三浦屋へ二度は入り
能いおてら方にあふ日となづなうり
まりうたをつけて御用はどうづかれ
朱を墨にするは納の色なをし
引ときで居るのに座頭通ふ也
土手で賣るやつは白狐のやうに見え
めしびつをしばりからげるひとり者
八百屋から賣るとはぞくのしらぬ事
しちやより女房はひどくはたる也
八景はよけれどゆだんならぬ所
そくいめし叱られながら喰ひへらし
又あけて見なんなと文ことづける
夢見ぬところせいは人のしらぬもの
親御樣だがとたいこはわるくいひ
出て行くをわすれる程に下女は醉ひ
前立を目黑がへりの見てあるき
かるたなどならべてけちな道具みせ

見にくいをはたらいて遣る通りもの
しまひ湯へ來る下女五日ぐらゐ也
おきて居て寐たふり酒屋上手なり
諷講ちよきにのるのは下がかり
花鰹下女はだいなし薬にけづり
松の内下女べんべらの綿が落ち
まつさきで黒がもいつちたんと喰ひ
けちなねを出すなとそびく角田川
五郎兵衞證文紙のうれる所
いやきみをぬかす婆ァとたいこいひ
まだ死もせぬのに泣いて呵られる
いそがせる四つ手から身で二人かけ
はらのたつものは年増のいびき也
にせ首を請人の見る氣のどくさ
よしの山十七文字でほめたらず
雪こかしやりてのしかる所迄
品川のよこづけ無佛世界なり
もみをぬふお針四五はいのんだやう
下女ぶんといつても座頭きかぬ也
萬ざいに糸をまき〱付て來る

ころもへもつく高緇の四つ手かご
ごふく屋はのぞいて見てもらんがしい
たいこもち何を置いてもとんで來る
水品を後家長さくはゐゝ持たず
氣のつきなよしやれと王をかくす也
鯲をばおまへころせと女房いひ
もつて喰へ若との樣じや有るまいし
おき〱のふきげん下女は舌を出し
きぬ〱の跡は身になる一トね入
もてぬやついつそ地口をいひたがり
素人の寄つてもよめぬさとのふみ
朝寐する人をおこすは晝といふ
物申があつて一先づしかりやめ
藏宿を出ると狀箱ふつて見る
六彌太といのまた酒をねだられる
船中で左樣な事といひつのり
もし床がちがいやしたと追ひ出され
朝がへりあばたづらめといひつのり
どうしたかむすめいやみないしやといひ
中年に成て師直いろけづき

かんどうへ持つてうしやうと銀ざせる
久しぶりふければよいと子房いひ
かぞへ日はおやのと子のは大ちがひ
あら世帶わけの付く迄雛がなし
御ていしゆのやわらかなのに作りたて
結ふ內に二度つれて來てしかられる
疊がへ目立て安いむしんなり
中の町こきまぜるのは柳ごし
當世はぼろ〳〵といふ形りでなし
旅がこうしやではい水の宿をかり
ごつからかしかりての出る田舍道
手をとると顏を下げるが女なり
くばり餅わらじをはくと一里の餘
假か後家大せいつれて牛をよけ
大所を寐てこざ〳〵を拂ふなり
うれそうなうそはなしかと留守居同士
よめずとも自筆にしなとうまいやつ
直介へ落ちたと綿の師匠いひ
火をかりによれば田舍は一本出し
なまながい經で有つたと土手でいひ

棧敷からのび上がるのは下女が貌
初會にはよく〳〵ほえたなとちんをなで
玄關から船をよんでと門でいひ
あふぎ賣夕べの聲は出さぬなり
いくらほどなくさしやつたと獵師いひ
あごをつき出して御しんぞ中に立ち
三會めこゝろのしれた帶をとき
けいどうで問屋をあける小間物屋
革羽織よしみも無いにかりに來る
一生のふかくは後家のうつくしさ
やつぺしに海をほめるは初會也
あたらしい事をばしらぬくわいらいし
店中で知らぬはていしゆ一ト人なり
どうだなとゝなりへ見廻ふ大三十日
まぐろうり根津へ〳〵かつぎ込み
つくらしやりましと仲人待つて居る
樽ひろひばん頭茶屋へひろひこみ
鳴子引よく〳〵みれば目くら也
にしが出ちや赤がむごいと村の母
箸をざらしやうを數入うるさがり

藥種屋は足のくすりも一本うり
四つ手駕くたびれて乘る物でなし
皆おれがごうとはよわいしかりやう
門ばいを圍ひ夜な〱拜むなり
雪かきでぶつとむす子は傘でうけ
かいつくらとても島田は川づかへ
法名を二貫が買てやつとしり
御小身やり持一ト人供がへり
かんぶつ屋うつとうしいと三日いひ
かた衣できりのごたつく木挽町
十兵衛でよいにお目がね違ひ也
おどり子のたのんではいる馬の口
冬の月よりおそろしき月をみる
松に目をやすめて通るよしの山
子は寐せて置けと斷るかしま立
金持のこわいろでごせくごかれる
やく亭主だん〱慇意うすく成り
いき杖ではねのけてゆく馬のくつ
なぜ貫目ものといつたとはしたにち
けんぎやうの藏へ鋸捨てゝにげ

くる程の子に髮を嫁結つてやり
御來迎ほどなく通る馬の聲
そのろんは春のことよとざるを出し
にくらしいきぬ〲を見る旅送り
いつか見たげなと仲人はつめる也
酢のわけを聞いて酒屋の內義起き
しんぞうをくゝすを見ると禿にげ
ぼうし針よめは銀のを二本もち
べんせつをふるつて宿は五兩とり
見世中へ二三把なげてこしをかけ
定ごうのいまだ來らぬ日本ばし
奉加帳めつかつた下女世話をやき
いとけなきものと隱居の大くせつ
生酔も顏の赤いはこはくなし
膳立に下女香の物ぶつちがひ
あと祈禱ごうかじやけんな仕方也
せきぞろがもふさとおこうくづれいひ
材木屋やろうがかくで河岸をとめ
ばちを手にとるときかぬとおやぢいひ
てつぺちへ髮を結ふのが店の衆

番太郎おはぐろつぼをつけてうり
坂東の十三ばんを四つ手ぬけ
かたきをばからりころりとつけねらひ
くらがりでむね上をするたかのぎう
百くれた切りでのぞかぬ下女が色
楊貴妃を上へきらくを先づたづね
せがき船ふるいけんぞくごつた〳〵
みす紙はその事のみですくと見え
窓でうるわらじ天命次第也なり
歌がるた無筆なやつは箱のやう
細長い箱でおどかす日なしかし
そうおしてたまるものかと鰹うり
いもがしらおとしてどうにしかられる
布引に通るでつきやふるまはれ
くどかれて又すらりぬくしち手代
百出して五そくかはせるにはか雨
おはぐろの邪魔はだまつてたゝかれる
虫干に小袖着たがるくわんせなさ
年寄のから手で拜む見ともなさ
まな板をたゝくと常の門と成り

花よめを見に出たむすめなぶられる
おどけだとほねぶとな手を口へあて
かり親をしてはけんぎやうやる氣なし
つゞみへもちらほらたかる花の山
ふり袖の內はさじきのはなに居り
三昧の弟子はもんのわけは師をくどき
宿下り日のべを願ふ死にぐれ
うんけいの作のそばから乘つて行き
馬ほどなりでおどりこよばりなり
鳥のほねしなのにきけばすてました
能いむこを伊東入道とりはぐり
御てんいでしんだはひとり娘也
引けまへにやつゝけますと四つ手いひ
五六人夕べをねむるごふく店
つんとしたのに幽王はくらいこみ
所々つとめますといひ〳〵のんで居る
めしたきはおはぐろつぼていちり合ひ
とつぱくさ出るやつをまつ四つ手かご
鍋いかけそりやのいたりとはさみ出し
玄關番びやくゑで出るはめしがはり

櫻までつき出しに出る中の町
手前ものゆゑかみゆひはぶつかぶり
氣障りなじよ病のんのに行きたがり
上下へつくは鴽かきたけたやつ
淸盛はいけんいはるゝ年でなし
雨がへ屋二タ人で見るはにちう也
羽衣のクセは野がけに打つてつけ
しりつきがわんぐりと成るひとへ帶
かはないと通さぬといふつばな賣
和田軍きざくにばゝァ武者が出ず
よし町のむかい片手にくつかむり
けいどうのいひ分け日なし開きあきる
通り者四五町しれるおめい講
二日醉のんだ所をかんがへる
内のやつとんといやのと土手でいひ
虱をば先づぬがしやうとせげんいひ
さい日に御用きん〳〵もので出る
他に事をよせてはんとに下女を出し
出來そうになると藪入かへるなり
なんのまな箸がと內義手で料理

母は子の爲にかくして一つぬぎ
おんだされましたと亭主だいて來る
出あるくなだが十二だといふものか
四郎兵衞が不首尾へんじやう男子也
樽酒をとう〳〵內義やめさせる
大三十日箱でうちんはこはくなし
たいがいに喰てみかんの筋をとり
けいあんはお上ミを二タ人程ころし
かゝみとぎにがさぬやうにおさへつけ
小ぶくろをさがしてこいの金を出し
だいり雛つとにして行く乳母がせな
こうか迄上下で行くとしをとこ
百人一首迄がさがみは戀歌なり
すばしりはみこしの跡を追て行
とりやげばゝ供を割たがきついみそ
一文の花火は人をおつかける
人音に仕事をつかむにくらしさ
晝のやうだと蛤のからを捨て
二かいから小べんせぬで角（かど）が有り
のみんしたなどと座頭をちよろまかし

今川をよんだ庄屋のやかましさ
ほころびを着て行く女くるしそう
はかま着のどうだましてもぬがぬ也
御衣でずい分よしと若い者
はや足の女の跡へ醉たやつ
若とうは行野の道で歸さるゝ
中ごしで割るのがまきの仕廻ひ也
らうがいがしかも娘の目ぬき也
月に來てくれろだろうとふうを切り
手間ほどは有るぞと笑ふ下女が髮
どうづきの聲つぼんだりひらいたり
物干の植木やくわんで水を打ち
衣より羽織のふうがきつい事
土用干下女にもしろとなぶる也
切みせへ手前のあごでとまる也
二ふんゑぐられたとつばで手を洗ひ
又一度十六七でつめらるゝ
もしくれもしやうかと遣手罷出で
寐ぼうでもずいぶん今の京はすみ
內證はできていやすとでつちいひ

いち時に出るなどろじをそつと明け
つめ將棊工夫が出來てどれのきやれ
うづ高く盛つたをおしな五はいくひ
關札が立つて品川げびるなり
喰ふ事も武勇も眞田人にこえ
手代迄紙つきにするごふく店
舟宿のいらぬ年始に廻りごと
くらやみを牛を引出す十五日
めぐり逢ふ日迄は顏のうつくしさ
木に餅のなるので母はまやかされ
目の內へ入れて母おやちゝくられ
田樂へすいつけに來る夕すゞみ
妹もぶら／＼といやな氣味
しかられた所へうつちやる花の枝
持參金よめなけなしの鼻にかけ
門(かど)禮で濟まぬと亭主そ引き上げ
小間物屋男に櫛をうりたがり
天神へ素顏で參る手ならひ子
すねた子はつかまへ所に困る也
呉服見世けつそりとするはやり風

すけん物それのいたりとはりこまれ
鮎がさびるのに川公事まだすまず
くじら汁四五日なべのやかましさ
ものがようござると椀屋がたつかせ
品川のあけぼし急度もうごかい
やうきひへ長いうちわをさし懸る
にぎりめしりくついひ〳〵大屋喰ひ
よく〳〵か十四日迄はらをたち
花よめを引きずり廻すおふま時
不二山は江戸のまなこで見える所
心みにつめつて見ればむごん也
笏の手にざいを持つてはみそをつけ
す一歩のむねん道々追ひこされ
お袋に聞いてゆこうはたのもしい
足がまがろうとむすめの下駄をかり
置き所を女房おらましいつて出る
こういたしますとかけ取ぼうを引き
取かへに女房の來るごふく店
ふり袖へやくわんひつかけ大さわぎ
山門へ上るまいぞと二百やり

となりの子おらが内でもきらず汁
つかまへもせぬのににげるいやらしさ
母おやを湯ばん門からまねく也
銀ぎせる銀のやうだとおやぢいひ
下女宿で芝居をねだりしかられる
おどり子の來る迄世事のはなし也
薄きをばにげても菊にとつらまり
蚊屋うりはよび出す前にかたをかへ
猪牙をのむやうに吉野は堀へ付け
ざつとした家で祐經うたれたり
地下人はうでぶしで折るかきつばた
花迄も盛りがすむと置かぬ所
きやつといふ禿は晝の毛虫也
旅むかひたいこ四五通持つて來る
どんぞうでからくり程はあるく也
心外とやいはんむす子片月見
四つ打つて來た油かい拜むなり
すりばちをむごッたらしく下女が買ひ
風ぐるま淺黄の頭巾まてといふ
ごふく屋で色の黒いはしよつて出る

天のなすわざはひ雪がしくじらせ
能うれる見世さと水をくんで居る
扇子箱だぞと頭巾を袖へ入れ
片月見だアなと母といぢり合ひ
よしなよとむすめ一寸ほどゆがみ
ひらに置きなよと引つさく眞木をとめ
かけこんで雛をせッつく八つ下り
村中のよめ入へかす無事な馬
北(ほく)てきにやはか南州おとるべき
いそ〳〵と下女こし帶をにはでしめ
から車面白がつて追つかける
けころばしごみも無いのにはいて居る
かわづとも出るとは外科の座敷なり
うりかひに質屋あるきにこいといふ
けんげきをふつて藥を賣りつける
なげこみの施主はふんごみなどで來る
五十ぞう大根を持つて追つて出る
品のぎう寺役ならばとわりをつけ
めづらしい顏が見えるとあるきいひ
いつそ蚊のくふもこらへるひき語り

ふしやうして寐なとかつゝくろつて行
嫁の禮おふくろ斗しやべりぬき
はたおらぬよめん女かるゐ澤の也
さい日の御用夜食はいやといふ
お見たてとよばるとしつをかきやめる
ふけいきなほえやがるなとせげんいひ
二三日間がありやさがみうらみわび
なま梅をあづけて子もりしかられる
かの人にとなりの內義二分無心
火吹竹ぐるみてい主をだいて出る
百持つて下女正月を待ちかねる
口ぼこにお袋それはよくかゝり
わるものに成りはじまりはあざを付け
ふきの出た羽織着て來るかゞみとぎ
さそひ人へ女房からんだ事をいひ
むせつぽいもので松右衛門ひつかける
安庵の御使者は家中での乘り人
とぎれると苧などをひねる御しんたく
あれ垣を喰ふよと下女がせなにいひ
す見物百何がしのおごりなり

いつたのさばか／＼しいと內義寐る
やかた船小べりでさすと寒く成り
おてらさま是はむごいと湯やでいひ
みん／＼のなくに白むくぶつ重ね
いつかどの身所をほうるりやうり人
花生けのぶつかへる程女房たて
あいさつに男のびゝる嫁の禮
綿くずのついたが師走女なり
さがり取ぶんさんの揚ではりこまれ
夏座敷あはせ羽織はちそうなり
けんやくを武藝のやうにいひ立てる
もうおきやくしまやつたかと御代參
品川の客にんべんのあるとなし
どこへ行くもんだと內をついと出る
淋しさを羽もりに遣ふにぎやかさ
かたびらで來るを小袖で待つて居る
出來合のたんすはどれも蔦の紋
尻をつめればいかほどのとくが有
一町の內で泣く雨泣く日より
二三町跡へつくばふ合羽箱

さあ見世を仕廻ひやしようと針をさし
此暮の顏が見たいと女房いひ
生醉のうしろ通れば寄りかゝり
なでぼうで結ふまねをして泣止ませ
ぬり桶を引つさげて來るきつい母
利上げをばまつたく嫁へぎりでする
笑ふたび唐人のへるうつくしさ
里びらき此頃にないめしを喰ひ
よし原は町人ふぜいいはぬ所
棒の無いてうちんで行く面白さ
義太夫が能いでいんどう面白い
いせ原を置いたで見世がらんがしい
又碁かとくるまつて寐る草履取
喰ひやうによつて黑鯛つみに成り
ゑり紙をさらつて通す暑氣見廻ひ
ぶ男のいらざる年のかくし事
いたゞいてさすがむす子の買始め
まくの內花をあざむく顏ばかり
ぬりたてゝ佛よばりのにくらしさ
甲子に牛てうばかり何の事

かへつては買はぬとねぎるこぶするめ
狠は財布ばかりを喰ひのこし
晴天に持つて通るはかりた傘
くれの文はたひろばかりおそろしい
よし原はもみぢふみ分け行く所
嫁の來た年が手ぎはな大三十日
かみそりを御さい一ト盆といで出し
衣屋へ遣るをおしむは他人なり
四つ手かご旦那お紙と下駄をふき
けんぎやうの居間に一筋こけおどし
子のきうをすゑて四五日にくがられ
猿廻しさじのやうなるばちでひき
おくそこの無い子と隱居大ばまり
しやうじんをすれば後添だがのだえ
けいせいのきうはにしきへつかみ付
羽おり着たむすめと本田五六人
たいこ持禿に爪をとれといふ
こはがつて下女御新造のそばに寐る
佐野の馬下馬に置く内人だかり
寐て用が無いで庚申夜をふかし

五郎丸まゐるぞかゝるぞはいけず
うちはではおもふやうにはたゝかれず
角田川我が思ふ子は向ふなり
七けんが同じ祝義の言葉なり
きら星のごとくに其夜手提灯
かた炭を大せつにするかゞみとぎ
御新造こう／＼はやす急な客
本ぞうの通り代みやくしやべる也
ひなの酒みんなのまれて泣いて居る
ぬれ事をまことにしたで島へ行き
内中が寄つて漬菜をとがらかし
しんぞうのうきがともには鼠也
つりしのぶ手玉に取てしかられる
ごせ間をしろとけんぎやうづ横柄
産籠で子供の遊ぶかるいこと
たいがいにしろと數の子引ッたくり
しのびごま大やしたゝか來てしかり
どうせもう知れたと下女のいけづるさ
花の留守五つ半うち四つをうち
十夜から餘程よりかと母はきゝ

石塔を客へ振廻ふせんがく寺
おつけさへあればとつき屋汗をふき
石で切るのをあぶながる女の氣
これ取りはさきをぬらしてさァこいふ
一里塚西瓜のかはですべる所
あかねうら着る内下女もりちぎ也
園ひとはいへど大きなばれをんな
手がきゝんせんとめそ〳〵禿なき
によう鉢で行く相談がきこえかね
やく年はけんとくで寄る萬年屋
おやといふ二字と無筆の親はいひ
花の無い靈地は鐘へ人だかり
はんじやうな見世は裙野のごふく店
花の山慕のふくれるたびに散り
もうつくは〳〵と通る市歸り
にげのびた腰元前をよく合せ
りやうり人すとん〳〵と惜氣なし
うはこどを笑つていしやに呵られる
碁會所で見て斗居るつよいやつ
紅葉見といつちや出さぬとむすこいひ

盃をさせばうなづくひきがたり
しんのやみ鶺い〳〵の聲ばかり
本堂に餘つたが後家じまん也
さわぐまいものかとぎ屋の氣が違ひ
揚詰めの座敷赤子の聲がする
賀茂程なりつぱな落馬又となし
薬櫻へらいしやうごうをたてかける
十五にも居ぬと十三にも居ない
ひく斗ならと花よめ三をかけ
不二山も目出たく見れば目は入らず
わか殿を遣る約束で幕をかし
羽二重のしらみたいこがたけはじめ
納豆の跡からばつたばたと來る
豆いりを大屋の内義つかみそめ
から馬で今年も歸る下女がせな
尻がちいさいと三浦やまだふそく
母なんにしようとて古金壹歩もち
目のさめた子を女湯へことづける
片うでに成る郞等を岡部持ち
長髮とむすんだ顏へ人だかり

六つ七つこいで何屋でござります
けいせいのふみはのぞくにかゝはらず
千金の御姿一字でもひけず
ぬり下駄をいたゞいてせな腰を懸け
書らんを取るぞと下女にたのまれる
浪の花ふきぶりでくむ面白さ
まけた猫鼠花火のやうに迯げ
おごり子の母はあつかましいも見る
あいさつにあきておたばこあがりませ
かんざしをかりてむすぶ子はかくやつさ
あねさまの顔が下るか見て來やれ
かぶ汁であさま左衞門五はい喰ひ
いひわけもだまりおろうはむづかしい
見くびつた人だと下女は二百かし
からッ手で來てさげて行く通り者
水々としたのをばゝァよばりする
あれおきやくさんがと禿ち狂ひ
まだひかれやせんとやぐら淋しがり
けいせいのたんすは本の犬おどし
しめろやはすき切れのする聲を出し

江戸ものゝ生れそこなひ金をため
だれが來るもんだと十能ねぢり合ひ
夜商ひ手の鳴る方へすいな事
よみがへり御寺へたいし氣の毒さ
三味せんがやむと扇を鼻へあて
上へ足あげてこたつでしかられる
ふきとばしそうなさむらひ一人連れ
御てんばに構ひなんなとてんばいひ
みゝづくのやうな遣手の身ごしらへ
ごくだてのやうに初會は喰はぬなり
御近所へ來たがと古いかけは寄る
こりや川だなぞと棒ぐみ大そうさ
手拭のすみをくはへる地紙うり
ひで吉のつとめたころはちらしめし
また板へ千人ほどの人だかり
舟宿にある內夜具へ人だかり

誹風

柳多留七篇 終

誹風 柳多留八篇

此篇は寅の十月廿五日會より、卯十月五日迄のひらきの中より秀吟を選歌す、其序に組々を輔助の手とりの好士がた俳名聞つたへを記す、然れども其順知れざれば當秋冬の大せり合の手柄に寄て後篇にのすべきと、呉陵軒反古張の團扇を入れてヤッといふ、

吐旭　紫夕　都柳　在豆　襄考　百術　龜峯
風也　春朝　千歌　文峨　五鳥　和竹　五樂
萬舳　染水　寄生　花鳥　蘭水　葉十　靑江
門柳　祇風　茂川　枡水　村竹　紅梅　川翟
竹賀　千雀　粟德　蘆舟　嵐巴　歌遊　狐笠
五秀　龜甲　未學　名木　井陵　似竹　秋憧
鐵炮　玉枝　三伯　巴連　牛町　綠枝

雛の箱まだふみも見ず明けたがり
よりたまへあがりなんしとあら世帶
役人に成ると小兒もむづかしい
おやは子の爲にかくして溜めるなり
あついばん表二かいのかやが見え
女房の言傳いはぬわかざかり
雲程に女房は月へさしさはり
ねじ上げて手をやつてみる雨やどり
九代目に坊主が出たでばれたなり
少し名の立つもうれしき若ざかり
それとも、と母は朝湯をのぞくなり
高砂もばゝアの方はくま手なり
猿廻し黄色な糸は三ッばかり
大小で配つてあるくかしはもち
女客てい主ちそうに他出する
母おやに顏をあてがふくろうなし
嫁の事しうと身ぶりをしてはなし
奥さまのおはらはぬしの御はらなり
あの通りだとしづかへは浪を見せ
山川萬里へだてゝも江戸に住み

掛けされぬ頃は雲泣よこに成る
買つて見ぬ内に女房をよんで遣り
まく事がならぬでむす子行きはぐり
そう行くと六郷さまの御門だよ
お袋と身はゞの事で一トげんくわ
年わすれしたとはけちな女郎買
顔をする前に見て居てしかられる
御ゆるしと猪牙から飛ぶの其早さ
のりのにはとは淺草で言ひはじめ
百兩をかけると首をふつて見る
我がすいた男の前をかけぬける
ゐのしゝはおきると歌によまぬなり
上るりが出ますと師匠しかるなり
賣る程もなしと金しやをじやまにする
縞がらのわるい小袖でこはがられ
じや氣のあるばゝアとたいこ申上げ
かんりやくを致はつて居るいたはしさ
かん病にはり合の有る事が出來
けいせいの能書は貌のたしに成り
舟宿の女房ふかみへついとつき

袴着て眞先に居るもふけ筋
むらさきの幕をのぞけば金屏風
餘の客はいらぬとすがた海老やいひ
御留守居のかたるを笑ひ／＼ひき
あつちだのつだの丁のと本田いひ
手前ものだけ菊水の出來のよさ
旦那をば出しなとしやれる女きやく
仕合せは嫁だと石屋朱をつぶす
ぬかる道とばれるだけはとんで行く
僧はさし武士は無腰のおもしろさ
だいてはいるとは二位殿が云ひ始め
熊坂も頭巾一つの祖師となり
僧正へ知れてぬす人百もらひ
品川であれ切かのとたはけもの
庚申の夜の一人寐は地ものなり
小兒いしや坊や／＼とにじり寄り
一步とは下女ばくだいの無心なり
長刀じやしよせんいかんと五郎丸
御局はげい子にいつそあやなされ
二かいからおやわんみせて母をよび

雛祭是れから斯うは姉さまの
船頭へのめと秋葉へ上りしな
旅がへり品川からはいんぎんこ
よめまいとないら藥に馬を書き
わが口で切れたと禿しかられる
縞に紋ぬはせるやつは數がなし
六月は日歸り春は御とうりう
かし本屋無筆な人につき合はず
もう外に死に人なしかと飯をかひ
歸りやるかきついやつだと角田川
かんぶくろいつとはなしにかけふやし
だアれでも無いと綿の師屁をかぶり
御亭主が死んで逃げるがやめに成り
しやば中にかりは無いぞとおつかぶせ
がまんして中形を着る地紙うり
元日はまだこはいから戸を明けず
光るのを知らせる役はまれよなり
ほうそうでおしい隱居が一ト人きれ
熊坂がさいごは五つまへと見え
しつをかくたいこしんだいはめつなり

きぬ〴〵に手綱かいくりかるゐ澤
とむらひをよろしい筋とむす子いひ
こそ〳〵とはなせば妾氣にかける
いやならばいやといやれはいやみなり
つめられぬやうにと禿願をかけ
櫻ざめとは下女のするいろの事
もん〳〵のはんてんかざりものを賣り
香のものさいかくに出る一人者
ちやんころが無いとみゝずを掘つて居る
よし原はいたし音羽はかゆいなり
石灰のたんと入つたを馬士はのみ
そうはもうつかぬと小よりよつて居る
根ぞろへをして髮結はさぐらせる
帆じらみをしよつて來たかとおりやういひ
あかはらを釣つて箱王しかられる
引け四つに明けた駕かきゆでたやう
とくしんをさせて質屋は繩をかけ
まきこまれきつたと噺す姑ばゝ
さがみ下女相手にとつてふそくなし
色の世ととなりの茶屋のばゝアいひ

俄かいしやもしもの爲になでに成り
乘習ひ一ト人で馬場をおつぷさぎ
馬喰町五百のあすが四十七
料理人千人前もあるといひ
乳貰ひに今來なさいと御用いひ
元ぶくも後のはどうかおしいやう
唐の琴どれもあやうい所でひき
ふくめんと羽織を取ると禮者なり
あすか山なんとよんだかおがむなり
品川へはぢき仕廻て四つに來る
しねばつてはなしはせぬと禿いひ
ちう三をかいかゝつたがいんぐわなり
二タ人ふちちまきへそへてやりはじめ
靈棚をはだかで拜みしかられる
くどかれて盃もないもの持つてみる
着溜めてもみんな二度目は口ばかり
あだ右衞門の內だとうらに行く氣なし
女きやく亭主出ばつて呵られる
そりやにじがふいたぞと出て引ぱしより
もつとのませろと生醉こうしやなり

だんぎ場を後家にくい程取廻し
お妾はこゝろがつるぎと部屋でいひ
初手二タ人後四五人は追人なり
びいどろの盃わるとまどはせる
銀ぎせるくはへてむす子花を立ち
片手から上のどらだと荷しよいいひ
干しころしもされず遣手里の口
女房が留守だとはめをはづすなり
けいせいにばん頭の名はかた過ぎる
肴うり四つ過迄はゑらを見せ
あのお家とかくに川で金をすて
引かへしの幕で明智はしてやられ
越後屋に小半年ゐる風の神
硯ぶたおらア飯だとかさを出し
海川はやひだとむすこ土手でいひ
出た程は後へひつさる神樂堂
持つ程のものにしんめう房をつけ
かし本屋無筆にかすも持て居る
生醉のうしろ通れば寄りかゝり
ばん頭は毛ぬきでこゝへうてといふ

もちつきのことで日蓮片月見
大門の内はたいこのたなごころ
山さんといふは品川初會なり
船の酒たいをかためて丁度うけ
またへつまはさんでこぼすぬか袋
心よくのせるとわたししづむなり
生酔をひいて小じよくはもてあまし
あらしの日客さむそうにみえるなり
奥家老ぐちに成る程さかりなり
御新造ははやつた人と御ぞういひ
床をする噂で弟子がみんな引け
年わすれ袴で來たでしかられる
しこためる御役だけなとやりていひ
かたく公事まづ文通でいぢり合ひ
鯛りやうるあたり入相程にちり
こびついて居るがめかけのかしよくなり
さがすふみこんなものかとちよつとみせ
まん月のせなかへあたるもどり牛
どういふ氣だかと赤子にひなを見せ
よめの鶺ぼつとりものを二タ人つけ

あんどんへうつして仲人いとま乞
二タ人目は女房の傘をかして遣り
大名と町人足の出合ひなり
かつちうをたいした所へ暑氣見廻ひ
かきつばた二タ鎌はごは水をきり
引け前にやらずば旦那錢とらず
ひなさまへやろう來て居る猫の番
下女がせな笑つてむすめしかられる
能い事をしたげなともりなぶられる
つばきしてあるくがひどく酔つたやつ
すがゝきをわたしてゆびをぽつきぽき
一人もの店ちんほどは内に出ず
さらし屋は江戸に居る内朝寢する
よしはなしたりと請けとる琴の箱
碁の助言いひたく成ると庭へたち
毛があらうものなら和尙色おとこ
中條で下女黒鯛のこともいひ
こう當の下足はたつた一二寸
不承知な下女たくわんでくらはせる
だに程な銀でしうとめ寺參り

ひやうきんにするなど姉に縛付け
べんべらを酷ッたらしく御ぞうはぎ
同役をよび／＼鶴をしよつてかけ
佐野の馬戸塚の坂で二度倒れ
能い娘なんのいしゆだか惡くいひ
袴ごし前からあてる見ぐるしさ
りん國のふんどしをする鏡とぎ
ぼた餅のこげつき御用二つくひ
餅花の下向東海道を來る
ひなづるは千兩にするつもりの名
さんばそうかぞへる程の人でみる
白むくをぞつくりぬいで蚊やへ入り
樽ひろひ毛ぬきをあてゝしかられる
其ていのわるさはかまをぬぎかけて
柳ばし出ると一トかぢゞいとやり
朝歸り竹にすゞめのなくじぶん
又あすも出すはとだます土用干
もういくつ上がるとぞうに開合せ
はつ鰹／＼とてまだくはず
ほれくさらかしにして居る內氣者

無いもせぬひしやくをふるふ剃刀砥
濱風に屛風の衣吹きおとし
萬歲の來た日らうがい大不出來
うたがひははれたとていしゆりちぎ者
おどり子がすけておの／＼やかましさ
明けがたのかねには花の人がちり
銀ぎせるおとした斷三度きゝ
御物見の下でごせ又いとま乞
ほとゝぎすもうひや飯もすへる頃
郡太兵衞さん上やすとげい子さし
三味せんの師匠はあまりこはくなし
開分てけんぎやうたつた二日の心
ふつて來たなんとどこぞへこぞろうか
渡し場のさびる九日十三日
目のまはる鶴をおふくろ土手で借り
國ざかい美濃の方ではゆだんせず
つくば山兩國からの行當り
薄田が陣小屋へ來るさがり取り
水桶の瓜やう／＼とかまへる
玄宗はおむく紂王きやんが好き

こしの灸入るほど明けて能くかくす
よばれても二タ針三はりぬつてたち
一ト寐入しても四條のわらひ聲
前髪はひりくるみだと火縄いひ
しやうじんが二せん出ますと鞠の客
辻番にたま〳〵若いほねがらみ
おかた光に付木をかつてふつてみる
びく尼だけしやうじん物の中に住み
いたゞいて飛車をとられた口おしさ
俄雨不二を目あてにかけつける
腰元は鞠ぐつはいてあるけいず
うつかりとのぞかれもせぬごふく店
よし朝ははだか常盤はうづみ着る
新田さま品によつたらきん句なり
わらはれる度に田舍の垢がぬけ
五代目はしやかで九代目かつぱなり
くたびれたやつが見つける一里塚
はぐれまいぞと摺こぎへとかまらせ
あね女郎小よりを笑ひ〳〵より
調合をしてもめつたに持つて出ず

鯛ぐらゐたゞうん〳〵と御あいさつ
花の枝御ひとりの時あげましやう
下地さとすまされて居るよめの風
藪入のしけをくつたもむごいもの
ぬえを見に百人一首程寄りたかり
ほめられたよめてんじんの方へ向き
見世中を雪にして行く居酒のみ
御一門迄にうんかにたとへられ
とりかぢででんがく迄は遣りたてず
千兩のおもみ家内が持つてみる
四五人をべらぼうにして請出され
しら箸で毛むしを幕の外へなげ
枯野見に一歩あましてもてあまし
花ものをいはねど女房けどるなり
ばかものと高尾へむごい評がつき
二つ三つつけて餅花子へわたし
子曰むしが通して切りもぐさ
はりかへに遣つたと馬の方を借し
十兩へ座頭とう〳〵てんをうち
此手合行く日になればいくらいる

雨袖を出してしよひ込む夜着ふとん
いぢろきの無い所に居るほれたやつ
上下をでつちのたゝむむごい事
一ト箱をむす子十度どに盗出し
そのきげんではと髪結こはがられ
おもしろく無いと片尻ひんまくり
御内儀は千六本に酢をかける
くれの文何がどうでもよこせなり
園はれの下女うんつくじやいけぬ也
元日の御用いゝなとほめられる
あれ馬がのやさおどり子笑ひ出し
ちつぽけな湯とうで醬油買に行き
花ほろのやうに荒神樣を切る
休む内たいこであふぐ盃おどり
雨合り氣の毒がつてこもを遣り
能くしなよふれ頭だと遣手いひ
嫁の手とくらべて下女は笑ふなり
竹の子は一本ぬいて先ッにげる
おふくろはかぶつて行くの迄はがれ
けいせいの意地は五町を構ふなり

不動さまかえと初會をついて見る
麥ばたけ作大將が見あらはし
ちつとべいいもはあるがと村仲人
むごらしくごぜ蚊いぶしの先に居る
黑小袖世を早うする着ものなり
切見世のくせつ一ト人はこしをかけ
おどり子のとりあつかひにしてふられ
から尻は江戸へはいると見ともなさ
花の外には松ほどの奥家老
あつさりとしたは角力の棧敷なり
袴着て棧鋪へ通ふよろしき儀
川どめにてにはを直す旅日記
百里程はなれて後家の相手なり
上ミづつてしそこなつたは源三位
首ッきり切つてはほうる料理人
あつちへも來やよとごぜへ御やくそく
むつ言をちよくしへかたる美しさ
あいそうに先ッおはぐろのつばをはき
樂天は麥めしおやぢだと思ひ
物もふのたびに爪からかけ付ける

こも僧の見習ひに出るおもしろさ
めしびつをかゝへて内儀わらい込み
ひれふして商ひをするごふく店
かゞみとぎ地紙の後へ座をかため
諸太夫にしてはこすいと遣手いひ
さかさまによめば新造おない年
爲になりんすとはげびた貰ひやう
龜菊は大事のきやくをして遣られ
中條で本のかくごのまへを出し
ずつと來てずつと出て行く松の内
女房の縁で御油なども上げ
母のじひぢんがいよりもかろんずる
何事のやうに兄弟ひなをわけ
おはぐろはげい子一生いやといふ
仲人は母のうしろを度々のぞき
よし町へ廻るを御さい恩にかけ
ひぢりめんいけんついでにとめられる
わるがたい後家とは見たて違ひなり
らん丸をいつちおしがる本能寺
一生のなん儀花よめはらがへり

琴の音を生酔こなしく行
正月の買ものに出て氣がそれる
櫻ほどだらくされぬ紅葉がり
御母儀から急度たのみと諷の師
よめの噂をあさがほの垣根ごし
園はれの子はとゝさまはないといふ
新造はふる氣ではなし寐る氣也
棒組やあかゞね屋根の旦那だぞ
他にとをよせてふられたいざをいひ
書置はめつかり安い所へおき
乘物のすだれを上げて子をあやし
其かぶは無いにごふく屋やかましさ
だんぎ僧一トロのんでふたをする
駒下駄で馬ぐそよけく茶屋を出る
太々でいひおりに成るはぢをかき
山わりにするけいせいは下り坂
門すゞみ宵ばりだのとあやすなり
江戸のまん中でわかれるなさけなさ
養子にもしろ娘だとかげでいひ
ぞつくりと持つてお姿聞きたてる

此頃はつくるにていしゆ氣がつかず
內談はお茶あげろよが仕廻ひなり
扇子にてひたいをたゝく能いきげん
紅葉見を下女にやかれるはづかしさ
もう一本ほしそうにさす御用たし
たのしみに手の皮をむくひせんかき
にくらしい口だと前をよくあはせ
眞先といつちやァ內が出にくいよ
おどり子の母人口にかゝはらず
はごの子をつきずてにして嫁かくれ
先供に一つきづいてせなあよけ
大層なせきばらひする大がらん
村中に江戸からよんでにくまれる
下女が色戻るふりして袖を引き
よし原の格子もときにあはぬなり
玄關番おれが手だよときめてたち
野がけ道和尙以ての外ふざけ
おどり子はおいらも鯛を包もうや
ざわ〳〵と大さむらいの通る音
ごせの聟氣にはたらきはねからなし

床げい者ずるにかけてはにちうなり
跡に成り先になり來る下女が櫃
まだ俗がおとなしいよと旅おくり
そば切でさへもてんやは汁ずくな
くざいたを下女ふれあるく其にくさ
どの幕へ行くとげい子をつけて行
さし賣のおいこんだのがたわしうり
くひかけてとゝをが汁をかゝあもり
安ものゝ米うしなひはしなのなり
大一座なけなしの美女もらはれる
歌がるたなどに事よせなめたがり
つがも無いとは不動より下の事
まつとうにすりや本店も見ては居ず
つけのぼせたばこの虫をとりにやり
柳ばし川へふとんをほうりこみ
一本の杖千金の道具なり
品川の文來るも月來るも月
たいこ持若年ものをむごくする
師直は事もこうじたさゆをのみ
よし原を三うねり程にほとゝぎす

奥家老みんな娘の氣でしかり
番頭のぶんごへんぴで初にきゝ
にこついた内儀の跡へ雛をしよひ
こんごからもう御免だと嫁の供
返事をばでつかくしろと姑いひ
毎年の事萬歳をおかしがり
入用をきかねば大工ひつ切らず
草市に茶屋の内儀に百かりる
三味の箱先へよこしておちつかせ
うぬぼれで隔日に剃る地紙うり
百やると荒事をする神樂堂
灰ふきを持つて見たてる捨どころ
ざいふりをにらんで置くと母はいひ
こうさして行きやれと破れ傘をかし
てん〴〵に宿所をかたる雨舎り
吸物をぺろりしてやるのまぬやつ
きげんよくまけずに歸る黒木うり
わたしをばばかした氣さと内儀いひ
だといつて今百兩は出されまい
おつかけて一升ふやす初鰹

金平の夢を見て居る枕蚊や
宿下りはどうか兄貴がよんだやう
戻り駕本町筋をよんで見る
若い身で安請合の後家をたて
田舎道こぼれたやうに家があり
戸塚から五文で來たと御用いひ
上下で泣事をいふ伊勢の御師
その町へ來るとかけ聲きえるなり
身代のよい十郎は金子なり
御殿中心のうごく鈴ひとつ
引張ると隣の出來る花の山
二十四五上とはむすめむごい事
戀女房櫻ざめにはかゝはらず
若旦那八九とつゞき大仕事
私をば馬鹿にしやんすとちんを抱き
駿遠にあくびをさせるきつい降り
若旦那寶さかつてはこぶなり
喰ものにかけては孔子むづかしい
客二タ人切れて敷初りつぱなり
なるものとむす子同じうせんとする

雨やどり始皇でからがみじめなり
逃げた晩えしれぬ初會五六人
芥川草をわけてのせんぎ者
太神樂ふさんで釣つて來てみせる
ぐわいぶんのわるさ女房と下女が論
せんどのをまだ縫つて居る茶屋女
吉原のぐわいぶんに成る意地をはり
おまへ方本降りだにとじやまがられ
世はのがれても義理の有る六夜待
ふみやんなと紅葉のそばで一歩かし
座敷らう初手は遊里にとらはれる
人口(じんこう)を衣でふさぐにくい事
十ヶざしを禿おきると出して見る
すみなさい氣に有る事と茶の間いひ
疊屋をはしたに遣ふ神無月
どや〱と將棊に付いて座替する
地に御經あるで小便どぶへせず
柳橋出た御ぞうめに百たおれ
人がらでにらめくらする茶屋の錢
ひいきよさと藪醫見たてる信濃もの

いひまけた方からぶつてかゝるなり
花よめのほうそうよけは持參金
あのかゝアしやうねが有ると御用いひ
ゆだんして母すこたんとやらかされ
日和下駄鼻の有る時はいたまゝ
町内を亂(らん)びんにして根津に居る
しくじつて二十里上(かみ)へ下女かへり
しん水のらうをたすける下女が色
その氣ざし有て羽織はもたせたり
上下のせなかをさする禮の供
出されたを出て來たにする里の母
日本へ四角な口を出してにげ
大磯の江戸とはていしゆむしが知り
よし原へ紅葉をこぼすつむじ風
まんきやうふ棧敷を二けんおいし事
そういつてきやよの前は耳に口
白拍子大かた主馬のしなんなり
あいそうのよいをほれられたと思ひ
女房を籠づめにして番をつけ
片月見ごく〱わるい首尾とみえ

大せがきしてから後妻氣がかろし
ひんもんで度々捨てる能い女
相談が出來て紅葉見ひつたゝし
他人からよんだが伯父のふくれなり
ほとゝぎすきゝんしたとは年增なり
その舟はどうするのだと矢のごとし
そろ／＼とむす子碁にあき鞠にあき
ひとりでに羽織のこけるひんのよさ
藪入の五つ月過ぎて御ひまが出
內に居りやむす子めつたに人をよせ
あの後家の珠數でぶつたは初手の事
前帶をうしろへ廻す客が來る
おはぐろの口をひんもぐやうにふき
本性をたがへずひらきますといふ
辨慶が居ぬとしづかをのせる所
初の雛伯母御やつきとされたなり
よこさずばなけと古參の御用いふ
雨舍とうれ／＼とみれんなし
ゑびす講なますは見世でうつつもり
庭へ出て直しては入る子のきげん

人同じからず花見の仲間われ
光秀を素人細工にころすなり
茶はそこにおきやとぼうしの針を取り
不屆な男上下はじめたり
切れ文ははら一ぱいな事を書き
能いむすめ惜しい事には齒が黑し
折れたかと思へばおきる種さし
物干でよめも生醉見たといふ
出し合つててうちんを買ふ素見物
ごふく店ひくい返詞はおとななり
あつぱれな智惠で辻番灸をする
傘へおたふくでさへ入れにくい
かん病をひとりねめ／＼往生し
くらはせてもう仕廻はうと料理人
村ぶげんすみ酒ばかりのんで居る
若旦那ちいさいぞえとたいこいひ
九(きう)ぞくを皆海ばたでまよはせる
月といや三日月でさへくめんもの
けがのない內にとくすねたがるなり
まだ出來ぬ顏へしかける淺黃うら

あがりでも能いが五十めつくまいか
渡し守水てんごうにほねを折る
町代は油むしさと大一座
福來る則ち死すは明智なり
はんだいに升とおやとが二つ三つ
たいがいにかぢつて柹の皮をむき
四日目はのう〳〵とするかんぶつ屋
旅の留守内へもごまのはいがつき
踊子を味噌こうしほの間へ出し
しかられて今朝出たと母くろふがり
持參金すわつた所はうつくしき
ぬき〳〵に廻つてよめはにくまれる
歌がるたごぜは無筆とちぐるひ
小半日いなゝいて居るごふく店
はたられるのが無き靈へきのどくさ
なりひらの惜しい事には地いろなり
初會にはみだりに臺へぶちまける
夏の内しきりにいつてみくびられ
柳橋鞠のくづれの二艘なり
茶屋の直をする内拜むにくらしさ

ぬきぐしにせなかをきめるひざ頭
けんぺいに火鉢をあらす火のしの火
太神樂まはせるそばへひらざさす
生酔のつきのめされる形りに寐る
しんぞうはまゆをひそめて見立てられ
ばかにしてくわへぎせるでひき懸り
下直とやいはんつき屋へさしみなり
川を越す女一寸づつまくり
手下共松の下にてぶつて居る
田舍嫁手ぎねを見せていやがらせ
なけなしの鎧朝比奈ひつちぎり
藪入にはしよれ〳〵とせなあいひ
品川は山のいもよりさつまいも
辻番は乳母をしかつて下座をする
拂ひ雛泣く〳〵母はきばるなり
十三日おはした目より高く上げ
しんのじゆ者命なるかなと穴でいひ
町内であいつあいつが仕出すなり
卯木うり鰹のそばで二文とり
先達はきめうてうらいばかりいふ

ひぢ枕いくつかすてる疊さし
おしそうに雪隱を出るりびやう病み
ぶきびなるものはおやぢのそら寐入
棒組やありがたいなといそぎ出し
よし原はじゆ道が一つかけて居る
ぬれる外よい智惠の出ぬ雨舍り
ぎやうさんに二タ人がかける紅葉の賀
わたし船萬歳一ト間おつぷさぎ
花嫁のしやうぞくつけが五六人
をめかけにからかつて見るあほうもの
すてぶちは御ござのはしにねた女
此寺と芝で公家衆へ申上げ
やつれたる女房の來る古いかけ
目のすごい鳥だと車よけて居る
たのむふみよろこんで行くすけん物
仲條は物もふはむじきかぬ醫者
代脉はわかとうで來た男なり
狆を呵つて檢校を座にしやうじ
座きやうだとてにはを直すごう腹さ
ひるの內女房ほつても氣が折れず

ずつ〳〵と仕立おろしをむす子着る
猪牙舟の音ばかりする雪の川
八丈とどてらとまからはつて出る
弓はりで送れば嫁をやすくする
花嫁にだきついたとはひどく醉ひ
朝がへり妙智力にていひぬける
十五日江戸であらそふ肩車
工面する內此界の四つをきゝ
しほらしい姿牛町かぎりなり
御酒きげんより見ぐるしいさゝ機嫌
乳へ子をぶら下げて縫ふとそぶくろ
あじのすふこはだのすふとにぎやかさ
駕かきの居る所迄もてあまし
上下のまゝでうけ取る子ぼんのう
通町ごふく店からたそがれる
羽二重はいやとてうしの質屋いひ
ごちや〳〵と月下の門へ禿出る
きう冬のしゆく意ばら〳〵扇なり
酢だそうなしんせもうせと內義起き
羽二重を這つたしらみに人だかり

通りぬけ無用で通りぬけが知れ
市歸り二百餘つて氣にかゝり
そう禮を見て初鰹直が出來る
穴一をひつたてゝ行くにいし染
わるもてのしたはたいこのさくいなり
おがら賣かつぎあきたか下げて持ち
大三十日ゑゝしゆへうるさ植木うり
ふところの眞ッ四角なが御殿なり
朝がへり一ト人しやべつて靜なり
持參金買はぬむす子へむごい事
ぐつと寐てやりんしたさはむごいやつ
からかねをせんじては出すいく世餅
繼信も十が九つあたらぬ氣
にげ尻でかひばくはせる寺男
朝がへりおとなげなくもどうづかれ
弟は江戸へ逃げたと須磨でいひ
奥中が相撲で秩父もてあまし
一ト小言あつて錦手かけを出す
かゝァどのちよつとございと間(あひ)をさせ
おてうがんやいさおやぢは呼びに來る

はしよつたりおろしたりする御見合せ
こしやうの儀有つて亭主が臼をひき
柳ばしのり出してからふうをきり
內裏中兵庫々々とひいきなり
おどり子も鮎と一所にさびるなり
御いもじをいたゞいて下女寐つかれず
やれでかいたくみをしたと田舍公事
魚の紙丸めてじやらすからす猫
馬を買ふ程でうけ出すかるゐ澤
いひぬけてひざなどはたき〳〵行
さしを持つ下女ちつとづつ頭を下げる
わつちらも武士づき合ひと夜たかいひ
いつそもう氣をもんでさと茶屋でいひ
又伯母といふかとしかる後の妻
勝つた馬士青なしなどをかぢるなり
武士道と出家かたぎでもらひひき
相談をしい〳〵こしの跡を行
蛤はため小便をたれてくひ
やりてばゝかな緋のやうに醉て來る
裏門に日がな一日でれん坐し

しゝさるは蚊屋とこたつの極めなり
あすからはおいとしいぞと御師を出る
女房の目のいそがしい下女を置き
藪入にむす子芝の居見にげされ
がしやうぎに小栗であてる旅芝居
下女がせなゆずを二つに割つたやう
シテワキで淺黄の通る花の山
はだかにて是ばん頭とほうり込み
はた持もらひ泣するみなと川
はさみ箱下駄で釣合ふ禮のとも
逃げたやら近頃ばゝア茶をはこび
順をよく死ぬのを姑くやしがり
すゝ竹をうりに來たのはたけ林
紙びなは柳の葉ほどまどをあけ
べんべらが有ると飯たきいやといひ
硯ぶた尻をつゝいて紙を出し
やぶれたるおんぼうを着て謡出し
下女は又出てつきやどんさめるわな
持參金あばた多少にわりが有り
ごぶろくの生酔ためへころげ込み

米をかむ事をおりやうへいつ付ける
いつちよい町はどん〳〵かつかなり
御ごり斷くふ内にしてやられ
諸事頼みますると足をこしらへる
節用をひかへて庄屋したゝめる
十七屋日本の内はあいといふ
子は先へつきものと母邪慳なり
しのびごま隣は泣のなみだなり
女房はやかぬがたてやいぶすなり
そうむごくいはぬ者だとにじり寄り
くら宿へ廻るで四つ手百たかし
御知行は末社ほどある神の末
若い手をかりてむすめの灸をする
死ぬものが損とは後家へあてこすり
兄弟の中へ寐るから中納言
いさぎよくりやう治を頼む向ふ疵
夕べのはくせつ今朝のはけんくわ也
朝顔は朝寐のものにしかみづら
うでへ物まきつけて物干かりに來る
おめかけのひるまは至極無口なり

女房のくろう草木黄ばみ落ち
さかづきがどこらへ來たと料理人
仁王門そのかみ蔦のあつたとこ
げんぶくも二タ剃刀は女なり
あらの出る長口上は鐘の銘
うつつくが居ようと覗く松が岡
五六寸針明ほどく御いたづら
おまへがたいゝそうだんと渡し守
うちつくを仲人屛風へそ引込み
はなれ馬かり豆屋にておさへたり
かへる時くひつみの出る大わらひ
江の島の十里こなたに三日居る
さあ雪だ出たくなつたと女房いひ
あつけない夜を傾城にすねられる
花の枝もつて風雅なたおれもの
一町を藥ぶくろでおつぷさぎ
一チぼくへ御家老などとのんでさし
手切金めかけの兄は三度とり
醫者はりはやはり和尚でうれるなり
朝がへり廻らぬ舌でいひまける

二日寐て女房いこんはらすなり
前九年ひつぱり合て一首よみ
首二つ棒をくゞつてかたをかへ
ひどいかり春めきながらさへかへり
五條坂けどい七兵衞せんぎなり
わつ〳〵となかせて置いてすりみがき
はんぎりの中にうなぎはのび上り
御來迎間もなくひいんひんといふ
かくれんぼ通りすがいに尻をわり
足ばかり洗つて仕廻ふ關相撲
朝がへり遠くでみれば掃いて居る
釣竿のちよつちよとみえるよしの中
公用を工藤はんとにしてうたれ
雛の有る内はおふくろ氣がのこり
おしろいを村中さがす宿下り
繪が無いと男女の知れぬ百人首
御手がらな事と禮者はかもをくひ
雨やどりおぬしの方にいくら有る
行くむす子御なん〳〵とけてにげる
むす子まだとむらひからはいやといふ

いとびんの旦那はものがいひ安し
いつをいつ迄と園ひの母はいふ
いみぶくをいふなとちろり二つ出し
暮の留守下女もうせんへ足を出し
いつ用にたつか芋虫つのがあり
熊坂も人がらで居ちやかゞみとぎ
つばなうり跡へつけさと與家老
くやみいひながらせたげる木薬や
小べんをすわつてしろとせげんいひ
なべゐかけけちなてうしで手を洗ひ
へつつゐのかな具あるきにみがかせる
高足をうけると下手はぶちかへり
茶をくれといへばおれもが五六人
目黒在正五九月にたぼを出し
子がなくて御みや大きな口へ喰ひ
一生の女房とむす子吟味する
十六でむすめは道具ぞろひなり

安永二癸巳林鐘吉辰

俳風柳多留八篇終

俳風柳多留九篇

此編のはじめに、當夏書肆星運堂のぬし心願に依て、不忍奉納句合催し、千二百員の寄句の内四十吟の秀逸をあらはすなり、

水無月の滝に寶珠を盛上げる　近路
一トひろでまします時の有がたさ　布川
清らかな花水鳥の留守に咲き　魚交
ほの〲と人丸堂を矢のごとし　鳳尾
毘沙門は辨才天のふせぎ也　南星
半夜程勾當連がたらぬなり　鳳尾
人間のからだで首は茶釜なり　茂仙
火をとぼす頃大川へ猪牙をまき　鳳尾
鐘供養獅子が來てらりにする　雪圓
もうおまへ三年程と爪をかけ　雨曉
花嫁を百貫道具だとほめる　仙郎

ふさんから首松へ出し椎へ出し　未學
生醉のつゝかい棒にげい子なる　鳳尾
鐵漿の禮覺えて居なと歸る也　歸航
神樂堂淋しくたゝく定直段　雪圓
二尺程飛んで渡してしかられる　梧洲
あの金をどうするのだと息子いひ　布川
厄どしを藝子むしやうに長くする　寄生
渡し場の意趣だとそびく花の暮　五樂
花の山足よわづれがせつひ出來　雪圓
隣國へやつゝかへしつわたし守　紫夕
づぶになるつもりで下戸を誘ふ也　粟穗
宿引のやうに遣手のすみだ川　木綿
うるしくさく無い道具は二度め也　同
連に迄うとんせられるしわいやつ　仙郎
はしたない事をいふのでお末なり　嵐巴
秋の夜を二十八日むす子しよい　同
こわいろへ御經のまじる御縁日　芦舟
手水場の垣に楊枝の二三本　月印
駿河ものの手前のものゝやうにいひ　一鳥
繻子の帶百度參りの帶でなし　三朝

不忍の方迄槌てぶつこぬき　龜遊
是むちう作だと起す花の山　千鶴
きげんをとると女房はゆだんせず　枡水
みん〳〵がなくぞと息子おこされる　鳳尾
歌がるた乳母はにぎつてたゝきつけ　魚江
都鳥どらの傳受をうける所　絹多
惜しい事あつたらむす子りちぎ也　ふせん
そう行くと岩つきだよとわらはれる　川朝
松茸の出そうな名なり男山　嵐巴

右者奉納之吟編

かんりやくと大氣の中に母はたち
子どもよく湯づけに鰻そへて喰ひ
曾我の後又宿下りのひがし山
夫とは向きをちがへて晝寐する
寒念佛世に捨てられた月をほめ
花の山ごせ松の木の方へむき
惣化廻ひけつきの勇と茶屋はとめ
是でまあ夜食々々としんをきり
太神樂しまの財布へばちをいれ

十三日ふだんの顔はぶしやうもの
筆まめは名迄せいしやうなごんなり
あつけない右大臣だと政子泣き
すけてやるやつさと酒をふき出させ
ゑん天にすべるを見れば瓜の皮
いつたあすおつゝき合つて湯屋へ來る
三きね程あてゝつきやは布子ぬぎ
けだものを一疋まぜるくわいらいし
花の雨座頭つゝかけものにされ
大三十日又來たぞえとけちな事
やね船で高まんをいふ俄か雨
うろつけばなで〳〵といふごふく店
くすぐれば禿ちひゝと笑ふなり
銀ぎせるつまつた時も銀でほり
ていしゆをばいひこめ内義市へたち
百人の中へ一ト聲ほとゝぎす
初手の火はふり袖に似ぬけちな顔
みさをゝばていしゆのたてる氣の毒さ
生醉をおかしい内にかへすなり
片道はしやう〴〵で行く御代參

鳴こんで來るがたいこの年始也
その客が來て三ひろ程反古に成り
さまづけに禿を遣ふふきげんさ
もう何か嫁は御ぜんをしそこなひ
園はれのしつゝこいのはかくごなり
元日に女のあるくひどい用
手の墨を洗ふをしかる渡し守
御忍びの供はしあんの有る男
てうし口おれが米でもうまるはづ
うたゝねは何かふそくのすがた也
碁を打つて居るはやかたの婆娑塞げ
上ぞうり跡じつさりに客へかし
間男の傘は四五間にげてさし
米つきはみごをくわへてこしをかけ
そり橋を先へ渡つて口をきゝ
三味線もおきやとゝぼでもさせぬ也
鳥追はあを向いてからひきはじめ
あれは元うばのずる〳〵べつたりさ
若旦那よばりは母の能いきげん
紋つけにひいきをはぶくひつらこさ

おりはをばやめてくりやよと產婦いひ
はづかしい顏へてつちりもりつける
お笑ひとはごのこばかり外トへ知れ
もうせんへのるが碁石のかくしげい
花聟のなぶられるのは四十こく
ちんまりとあるきなさいと御菜いひ
うづらでも能いと藪入よわく出る
疊がへひつ付き合つてめしをくひ
あの船を寄せて見しやうと三ツを下げ
楊枝みせちとおやすみとわきへ寄り
あくた川どつちもにげる形りでなし
名をいつて座頭にあふが久しぶり
こはそうに男の廻すいとぐるま
そういつてくれりやあおれも千ばいだ
請合ひで土こね迄が足をぬき
すてられたおばもせんたいくらひぬけ
うしろから目にも立たずに五百まけ
大一座らう下へ遣り手尻を出し
なき女なれば楠まだはねる
新造のなぐれた市とすけんいひ

ぞん命で居ても大谷六部なり
あを向いてつき屋さんまをふつり喰ひ
女きやくてい主あいそに二タ人だき
萬ざいははられるだけはねていひ
是式の出入りへ丶へとなげづきん
かたつ尻つまんで笊をふつて出る
てもくらい內だと御菜こしをかけ
井戶ばたであびるはへんのかはつたの
はや乘のかざりをくゝるおとしづよ
萬ざいの歸り布子にかけゑぼし
こりもせず禮からむす子すぐに行き
不斷着でたいこはどつこ迄も行き
そこらから戾つたやうな四つ手かご
乳もらひはがつかりとして花見かえ
わる程な氣で高繩へ置いて行
人は人なぜ歸らぬとおやぢいひ
藪醫者の先へかな棒引いてくる
年玉をつるさつて出すはさみ箱
釣臺の生酔對いによろけ出し
まけたやつ棒を一本かりて行く

やゝあつて一きねあてるまつこうや
仲間はみけんかぎりに縄をない
こし帯にふるつてちからみんな出し
楠は美しいのをたておろし
白魚は王子でくはぬうちの事
大こくの跡を辨天五日とび
辻ばなしつばきをしてはふみつぶし
金魚うり是か〳〵とおつかける
きかぬふりするはむすめの吉事なり
物を出す禿たんすへはいるやう
名月の生酔ひるの氣であるき
醫者どのは女房が立つといけんいひ
おくさまのよぶ踊子はおごる也
居つゞけは見世から文でなぶられる
やうきうを耳迄引いてしかられる
いつ迄も娘で置くのにぎやかさ
朝參り内義は紙でふいて出る
あくせくとぬつても後家はふいて出る
ちつと行きそつと行き乳母芝で逢ひ
ごばの犬しちやの門に待つて居る

初まぐろ根津へへな〳〵かつぎこみ
先日の手引がとごせいつゝける
たいまつで工藤が夜具は三所こげ
ばちびんでごせの手を引く主の命
定光はわんぼうぬげもした男
しんざすでおつぱしらかすかたい後家
酒中花をのんだをごせはくやしがり
がら〳〵とならせばちんも見世をはり
つきぬけて客をとる事三箇年
つみ草のやうにおぞうは矢をたづね
間男もかりそめながら二度目也
七兵衞は主馬が舞ふたをくやしがり
どら程の事か道具もとめられる
しつけ苧をひざであるいて内義とり
ひなの酒下戸をへだてぬすみにごり
しかられる禿羽おりのひぼばかり
色男うしみつ頃になやみ出し
うすくらい内からさらし織つて居る
やゝしばしあつておはぐろへんじする
玉だれの内に太夫はまつぱだか

ろじのかぎかりてさか馬さして居る
それかみやと一枚もろふつばなうり
能いつぶれやうさとごせはほめられる
兄さんとしやれてせなァに逢ひに出る
立聞きは今來たやうに內へ入り
雪隱でぶどう一ふさ御用喰ひ
ぶつさらいおるとおどり子どうづかれ
日くれからかこわれへ來るよ入道
すてられたおばもせんたいくらいぬけ
どなただと中將ひめはまぼしがり
たばこ入きめうてうらいだとさがし
待つて居る座頭はゆびのあかをより
行廻りかんまはり來る出來たやつ
百人の中へひと聲ほとゝぎす
ぬけがらのいくつか出來る花の留守
田樂は田でたのしむのよみがあり
けんぎやうの妾ものごしのよい女
ならものは內分ですむ道具也
茶の會へつねのあたまは下手らしい
ひやうぐ屋へ役者繪の來る長つぼね

どの口でむす子女房はいやさいひ
禿どもふてらつこいとおして行く
やすよりは御さんにしごく能い名也
ばんに寐る事を苦にするつよい暑氣
ちよき舟はだんないものと江戶なれる
花嫁のうきがともには百人一首
ちとあなたあれへとぎうはかきたてる
いろめいた聲に骨おるうたいの師
とまつたら御めんと母をばかにする
嫁のしちのこらず出すと半つぶれ
暑氣見まひせなかをむけて此通り
より取は三文ほどがひろひため
しやうとうじ是がいやだと土手でいひ
門松をうれしくくゝるよめ丁度
仁王門追はれる雨はもうやまず
後の月さいおうの義とおやぢいひ
齋日にたちあがつたは羽織なり
いゝ筆をつかつて御用しかられる
犬坊もかり屋に居るとやらかされ
それかして後家たいそうな枕する

寶舟さかさによんで下女かんじ
むだつ火をたき〳〵下女の面白さ
むごい事嫁のけばへがわるくなり
かりつこはなしと高繪を明ける也
辨慶の使かきごでのんで居る
書置はめつかり安いとこへおき
乘物のすだれをさげて子をあいし
去狀を引きずつて置くじやもつゞら
太々でいゝおりになるはぢをかき
外聞のわるき女房と下女がろん
せんどのをまだ縫つて居る茶屋女
根のつよい見世と大せい水をくみ
十九には手前そんだと留守居いひ
つぶれてもよいとお主はおもやるか
惣仕廻ひぬけ〳〵とした旦那也
百棧敷承知々々と追ひ出され
不動尊ぶちわるやうにいのられる
今晩は行かぬはそんと母にいひ
御妾はひつぷの勇でふぐも喰ひ
不二山が見えて傘みなかへり

たちばなを六位ちぎつてしかられる
古だぬきめがとちはやの寄手いひ
たがわざか文が女房の手に渡り
げんぷくをならべてさせる呉服店
我内のやうに式部は明けはだけ
ひなの箱ころんだ所で明けて見る
つき袖であいさ左様と承知せず
北條のかり屋ばかりはしづかなり
やうきひを湯女に仕立てるりさん宮
三味せんを車へはこぶにぎやかさ
角田川妻がといつてはりこまれ
お初尾をじろ〳〵と見て鶴は立ち
柳だのさくらだのとて出られやす
つき合ひを御ぞんじないと母にいひ
上下で吸へば淋しい火繩なり
川留をわらじではなす旅もどり
そば切が二十うどんが二十七
松の内花よめ二十四そくかり
切おとしやき鹽つぼはあんじ也
清水をいのれどあざはぬけぬなり

どれでゝもかきなとあたま出してかし
はし箱に一つのこして賣つてやり
ふせがねをうつが工藤がかゝり屋也
直が出來てたが屋どこへか持つて行き
まだ床がさめぬとおやぢおつかける
かひ物が違ふとおそく市へたち
ほしい顔せまいぞとひな店へつれ
七月の八日玄宗づつうする
寺宮を入れてまけたは源三位
どんなのへ行くえと內義聞きたがり
玉川の鮎もちつとでみなごろし
切米はいゝが手足を見てくんな
めしの內そこをばやね屋さん待な
じやうかいは常磐の方へ付けたい名
苗字からしてすれ〳〵な伴左衞門
其じゆずはしまつてくれと土手でいひ
子共衆などと遣手は締めた時
百旦那小僧てうしとひたしもの
百のかしそれ覺えてか日まちの夜
扨火をこぼしといはれどう二にげ

ふり袖の天命を知る吉田町
岡ざきをへんなてうしでひいて居る
ぬしの無い刀ぬかけの舍弟也
かまくらは度々召人の舞つた所
小やろうの使經は半くされ
柄へじゆずかけて講中先へたち
親たちはおこもにやるといひ當てる
三味せん屋小やものそうと跡でいひ
くらやみに茶がら捨てるを待つて居る
箱崎は四方をむいて居るところ
平皿をへづッて廻るふいな事
能いむすめのと上人はむがでほめ
前九年元は女房の出入なり
ひとりねをして居る客が二三人
はらもちをさん〴〵にするけんとう使
御近所へお世話をかけて顔をやめ
雨替屋のせてくれろと肩を出し
御しんぞう顔だけ明けていとま乞ひ
木綿切れまけると太刀に手をかける
歌がるた見物をするはづかしさ

仲間われさんやの方へ行くも有り
こつちでもふるといるよとかして遣り
出がはりに日和のよいも耻の内
上下を身をもつ人はこしへまき
弟のけしやうはあねのわるさなり
神樂堂おいこんだのは湯をあびる
目見乳母大はだぬいで両手つき
せにはらを和尚のかへるふこうせき
とこをせぬのが母おやのきついみそ
うまそうに辻番とつちや口へ入れ
夕立にあつてふんどし好きに成り
あいわつちや鬼神さなどと遣手いひ
かお原も合せてよむと時平なり
心中が出るで結納うりはぐり
さま〳〵なすり鉢の有るから紙屋
他のものは入れまいぞやと松の内
はだか王らしく引四つ迄すわり
ちつとにほはせるとせげんつきに付き
一人のを買ふとつぱなのほをそろへ
百旦那そのくせ地藏ほどくらひ

やき鹽を三つくつたとやみあがり
ふたをせぬつき屋喰ひ〳〵しかる也
わるじやれに付びんで來る品の客
しいの木を祝ふ頼政恨む曽我
六夜まち百染程の手をあはせ
吉原のぐわいぶんに成る意地をはり
お前がた本ぶりだにとじやまがられ
月に又ござれと柴の戸をたてり
ろくじんと覺えたおやぢ持つて居る
ふみやんなと紅葉の下で一分かし
座敷らう初手は遊里にとらはれる
入口を衣でふさぐにくいこと
十ざしを禿おきると出してみる
むしりあふ内おどり子はてれて居る
しかられてけさ出たと母くろうがり
かり方はさぞやと思ふむらさき屋
しかられた通りに母はしかる也
片身にるのを女房へおんにかけ
せがき船事おかしくも堀へつけ
田舍嫁かんがへもなくびんを出し

御せなかをきつくながすがへんじ也
ふきがらをけしてくんなと間をひき
初戀に下女すばらしい相人也
お袋はめうりを知れどまだあまし
ふられた夜どうしてくりよと考へる
かヽアどのとは四五人も出來てから
石の鳥居も一日は左官來る
鉢の木を大木にして御へん禮
お内義のうけとり發句書いたやう
まめ藏へぜんが出ますとよびに來る
どてらかいどりで鋲打あらためる
そうじして置いた座敷へお預り
せんじつめましたとこしをかける也
ゑヽかげん見やれと母はまごをたて
行まはりかんまはり來る出來たやつ
たいこもち前世は土手の狐なり
のみにげをして藥種やでとそを買ひ
かさもりへ女房ぶつてうづらで行き
いかぬかと馬士居酒屋へ聲をかけ
山形の星ゆい納へさしさわり

客にかこつけて一ト晩かひに行き
馬はもうひらきめさいと仲人いひ
御ていしゆの琴をかせとはおくの也
くどかれた乳母うな／＼をしなといひ
うれしがるやつだと文でくらはせる
祭にもけだものを出す糀町
てうちんで夜たかを見るはむごいこと
じれつたいお子だともりは二ゆすり
もてぬばんいくらのこともおもはれず
御めかけは元民間に人となり
幸村は生きる氣でない紋どころ
乳母くへのせんべいねからむまくなし
やくそくは頭巾の山を折りながら
駕の衆や先では出ぬとおぞうきめ
見物にむだ口の無いせんがく寺
すり鉢で吸付けて乘るわたし船
しやうとうじ妻こふ鹿はかへる也
ふうじ目を柱で付ける急な用
かヽあ持一人すめりと角田川
江戸へ出ておち／＼と寐るさらし賣

土用ぼしいつち仕廻は生ヶのもの
御歸をいふな／＼とあさつぱら
よめの禮町内中へ首が出る
さゞけ文あごの下からちらつかせ
さつとした所が後家はものぐらゐ
元日に泣くは七歳みまんなり
おしろいを霜と見られる耻かしさ
思ふむねあつて時政ちゝくらせ
にげ水をおツつまくツつ家を建て
雨ふりにあづま男をつくばわせ
のぶつらと萬事かけあふ源三位
ほうそうに兒の着て居る緋の衣
こゝろ待ちしうつ浪の音ばかり
先づ殿へあんどんわきを奉り
中の町かつぱらはれて泣いて居る
人形を鎧のかはりに能くつかひ
茶の飲める庵はみやこの辰巳也
なます皿きうじの留守にとりかへる
奥家老こけらしいのを見たてられ
金持に成ると請合ふ八卦おき

大の目をぬいて門番二升とり
てえげいにだらけなさいと内義いひ
能い日和内義戸板をはたつかせ
客さまなそべらつしやいとかるゐ澤
御亭主はぐわんをはたいて五百たし
あさり賣みのないやうによんで來る
懸り人みなごろしだと湯をわかし
さよ姫はあきらめのない女なり
手ならひ子大津繪程はどれも書き
五尺ほどある書出しへ一歩やり
もうしまりますとはむす子古句なり
目のあかぬ主を持つたと手引いひ
寐て聞けば野馬をうつたやかましさ
歌がるたお局くされどうしなり
神の膳此うへもなき手ぬきなり
此町はみんな出みせと三味をやめ
扨わるいものがとそびき出しに來る
にらめくら三時して居るふけいきさ
と見渡した所が下戸はおれ一人
これどりは尻のかゆいをもてあまし

夕薬師ざつとたばねていきやしやう
ぼん山に一ト筆たのむてんば下女
ごくかんの布子三つ四つおごる也
い丶日和下女は茶わんへ銭を入れ
文づかひ御用に一寸よび出させ
なすびうりこの〳〵が仕廻ひ也
座頭の坊おくの手は杖ふり廻し
惣ぼうのうてたは天のなす所
親分の不快夜着など着てあるき
ゑ丶年で初さといふは御てんもの
もらはれて店立てをくふけちなばん
根津のきやく遣ふも三日一歩也
はなれ馬大手をひろげては逃げる
葉櫻にしてかたづける御不勝手
踊子はぶうにしようてしひる也
石町に遠い得意をもつて居る
色男じゆばんでのどをしめるやう
乳もらひに大の男のむごい事
一日はむすめまかせの土用干
深川へこげとはさんだ角田川

付ざしのそばで大きなせきばらひ
泣く事はないと四つ手のござをさげ
かん見廻ひからにほはせる大三十日
鶴も居る亀も居るしと乳母はほめ
内義の名むかししづあやなどといひ
そりや見ろのやうに駕脇戸を開き
江の島はなごりを惜む旅でなし
島田より金谷のほうの御氣がせき
夜る出すとこなたのせいと嫁へいひ
むす子のは若旦那のに貳朱高し
花の留守このざまはえとかたづける
せんぶをばかつぐがつぶれむじん也
もち屋から出て酒のみをまち合せ
おうへいで直が出來ますと小道具屋
ながし元ひだつた女房笑ふなり
元結ぎわつかんで母は乳をのませ
大和ちやでたゞのはなしもくどくやう
五月雨に東三條の通りたえ
通らしやい無事なやつだと馬子はいひ
ざいごでらひだのたくみが口につき

鼻紙をぬひ〱すわるぼうし針
里ぶちをわたすと乳母は行けといふ
國家老殿と淺黃をしめにくる
是はきびしゝにぼたんとたいこほめ
思慮の無い家老は池の庄司なり
その形りで後家のさじきへ顔を出し
ぞりや出たと子供のさわぐ居酒みせ
木の下にむき捨てゝある瓜の皮
天狗すけ太刀に熊坂氣がつかず
くら宿へ二百十一日にゆき
大部屋へとや出のたかをつれてくる
そんでいに見なしと鰹ひつたてる
生酔が來るよとにげるつばなうり
せきぞろの笠上下でかぶつたの
七日には入るのだとせしゆ一分かし
にげたばん宵に長うた二度通り
馬子うたに二人ひれふす麥の中
はい〱は毛せんなしにころげ込み
入かへに行きながらきくほとゝぎす
品川に居るにかげせん三日する

かべ土を相手に座頭大こゞと
干鯛箱女房はぼろを入れたがり
下女が戀みなはりこみのうへで出來
清水に居て大名の評議する
うでづくになると禿はぶらさがり
ぬけたくし四五へん踊る琴の上
來は來たがはなし相手のない徐福
おしろいのあらうち見べいざまでなし
山十に土佐を遣ふとかつぎいひ
ぬか袋犬のあたまへぶちまける
まきじたでやうだいをいふげくわの前
大やしろ美男にあばたおッつける
名玉をしつちなぐつてあかんべい
家樽をばもたせて出るが嫁はいや
利そくをばわしが出そうと下女せたげ
下女が白むくかたびらのかゞみうら
上るりの通俗ものはこくせんや
こうもんの會に益なきたてを持ち
男めはにげたそうなとこもをかけ
せんの内四五度もたつ安ていしゆ

わに口は鈴をつぶしたかたち也
左遷の身だとてうしでまだしやれる
おくりぜんびへをかき〳〵禮をいひ
まついざをかけてお出でとたいこ言ひ
は入るまいものか只とるやうなよみ
勝つた時仕廻ふとこだとぐちをいひ
鉢巻とくし巻の中ふどうそん
こけおどしにも詩は少しつくりたし
梶原を二度だましたと佐々木いひ
雨かわが味噌するやうにひきたてる
笑はせもなかせもせないくわいらいし
かんなくず蛙とならぶしはらしさ
あいつらは長生きをしてたべまする
花嫁はめしをかぞへるやうに喰ひ
かけ聲で月宮殿へのッつける
のけざまにかむりを着たが惡ちよくし
山程な苦を品川はすてるとこ
としの市弓は手桶に納めたり
やうついだなあと御次へ來てうらみ
人先へしたくの出來るやぼむすめ

かなづちでたび〳〵明ける一人もの
齋日に燈籠へ廻はる氣のどくさ
かけ向ひこいよ〳〵といつたはて
手ぬぐいをひつぱり合つて野がけ道
こうしなと乳母はま弓をひやうと射る
おれだよと酒屋をおこす高まんざ
あたまをばひきわるやうな櫛をさし
にげてみなんしと禿の高まんさ
かくべつな顔にて明けるぬかぶくろ
さかい町おとなしぶつて殘される
こたつから出てあたるなは出來ぬやつ
むつ言といふは高尾がいひはじめ
おふくろと牛いさかいで黒くそめ
頼光を伯父ィといつて御意に入り
帳面に鯛々鴨といそがしさ
さなきだに花よめ寐ごいさかり也
藪入をやつとつねつたぐらひ也
高砂の切はおし付け寐かす也
年始帳供にかゝせる氣のどくさ
しなばしにやなどとこわ〴〵母はいひ

仲人の跡から出來るおもしろさ
二つとは男かぶろのたゝかれず
ひとりでに火鉢のおこる大三十日
なんとでもいひなとこへ引て行
人をよく買ふは衣の手まへなり
一人ものごめんごうなと二升たき
がになつて女房腎虚じや無いといひ
わきはらをかゝへてつき屋やすむ也
まつすぐにはく狀をする五月め
けつちやくもせぬに船頭堀へつけ
わらッ火へ銀をつッこむいなか道
釣臺のはそんに二タ人しかられる
雪の日に五兩くすねてむす子出る
おやのすね今をさかりとかぢる也
供べやにねぬは臣々たるのやつ
三人で座頭のあたまそり仕廻ひ
つかはずに居ると中宿いけんする
ごら故に母もなばへがわるくなり
子をかして嫁のせなかを一つうち
鳥のはねすて所よりわきにあり

舟の雨ふちとらまへるはやい事
墨染の袖へ駕かきとりすがり
車引きひきずり上げるやうにおり
たいこもちつかはせるよりわる氣なし
うぢつくを見ると駕かきへしに呼び
みがいてはあれごとほらぬ客ざせる
はたを織るじやまを藪入してあるき
しよせんなくとなりへ見廻ふ門すゞみ
梶原はこゝろの外の歌人なり
一生のかきん女房を帳につき
ほれられたそうにして居る二十けん
品川はとしまの月も見る所
大三十日箱でうちんはのろいやう
十九文見世にいなかゞ五六人
おれをさへ二歩かたつたと伯父はいひ
前だれをはづして內義しひに出る
はんてんはよせとたび〱ともへいひ
いさゝかな道をあらそふ禮のとも
江戸入だなごと野がけは火をはたき
してとつた顏で鳥さしふきやめる

旅戻り乳母はから手でかけて來る
ぬか味噌をきたながらぬは二度め也
母の來るたびに妾はこかすなり
事ふれを夫の留守にもてあまし
その時はごうのはかりの思なり
おき〳〵の顏へむしんをさしひかへ
竹馬と下女わけの有るていたらく
時鳥より此事とりやうり人
二度迄は精進日にて逃げおふせ
初鰹ぶつかけにする座頭の坊
引ッぱいで起すむすめはきそう也
なげ入のやうにしきみは賣れのこり
はだか身へ守りをかけてうつて居る
あだの有る子の母おやのうつくしさ
釣竿をしまつて周の代をはじめ
世によろしい時の事を女房いひ
高足の下をこうもりついとさび
御きげんようと猫のゑりおしつける
不快だとよめをあはせぬにくい事
吸口で火を吹いて居る掛り人

二つ三つうちばに年をあてる也
生酔をつかまへて琴きいて居る
そこをよくたてやと嫁の手水也
助言ならいやよと內義駒を出し
品川は着てもさしても行くところ
梅ひさつおちて鳴きやむ雨蛙
地紙うりおぞうが戀のかたきなり
四郎兵衞はいくよねざめの姿なり
かぎをひねくつて檢校にじり寄り
丸めてはみんなぶち込むみゝだらひ
去狀をやるとふだんのいとこなり
勘當をとう〳〵母はしそこない
かねつけるごぜを覗いてこわく成り
不動迄女房をつれる通りもの
ひきやむとよしのゝぐるり川と成り
それもそうだと上下をぬぐやつさ
樽ひろひからおなじみとごくをいひ
ふんごしのほころび迄もお針也
わるがたい下女君命をはづかしめ
けいせいに思ひきられてあはれ也

日ぐれからかこはれへ來るよ入道
上下の音ばかりきく年始ちやう
ありきりのおとぼねを出す野がけ道
じやうだんにだんぎなど聞く花戻り
碁會所と醫者とへむかひ二人出る
ぶつさらひおると踊子どうづかれ
すがゝきをりちぎにひくが出た當座
地廻りの向ふへきれる惣仕廻ひ
ぐわんぜないかねほりの寄る鍋いかけ
あきらめがよすぎて後家のにくらしさ
どうしてと嫁は二八をわけてたべ
能い月にきぬ引かつぎふし給ふ
せきがきたのでおつことす四火のきう
きぬ〳〵はころもにゑんのありそうみ
黒鯛をたてものにするにうり見世
われしらず鏡にうつるごせの顔
たいくつの馬のりものをかいで居る
供部屋にらしやを着てゐる寒い事
太刀とりのしやめん狀きくばからしさ
しうたんを向ふ棧敷はおそくなき

わる樽の内二三人ほれたやつ
けいせいのしやく人を見ておこる也
うまそうに何やらにゑる雨やどり
黒がもをはじめて連れて氣の高さ
孕んだをせなァなりやこそつれて行き
暑い事となりでもまだはなし聲
四五日は引きての多い高燈籠
竹馬の小口へ赤いやつをさげ
鎧うりはみじんさといふあやめうり
もうあきて又一ト夜留守二タ夜留守
傘さしてこん屋のまへをすぐ通り
乳もらひの夜明けも近くだます也
ばちぶくろかくされてごぜ手を合せ
ゆきたけの合はぬをたいこぶつかさね
來年はほたるかごだとおやぢ着る
御くわほうとほめて妾の氣に當り
油手でこたつへあたりしかられる
たつた一歩に金入れのなんのかの
わづらひなんした顔さとやきぎせる
かみゆひのすいで付けそる樽ひろひ

あいそうに娘は口へそでをあて
さくらから生醉うでをこいて出る
一三とは花嫁むごく見られたり
花の山下女は拜借もので出る
引ッこみはぬふ事に勝ち縫るにまけ
生醉はもたれかゝるがきついすき
からかさでさへ大こくはふとッてう
夜ッぴとい一歩が小言いつてゐる
かんなくづおもしろがつて追かける
行ッたなと雪をむしつてぶッつける
やらないと又あだけると母はいひ
生醉の內はさられたぶんになり
ちよつと覗きやれよ怨みッぽい女
身にしみやよさとお針は繩をとき
月二つむす子太義を思ひたち
忙しいしやうこは棚をまげて釣り
高くらを夜ふけて通る源三位
かの事がもふよいぞやと小兒いしや
ぬゑ程にさわぐをきけば毛虫なり
身にあまる恩は七つのとしに受け

御めん駕二三度乘るとあづけられ
御亭主がどれだか知れぬへんな內
大ぞくの身にあるまじきかこひもの
生醉を送つて手代のびをする
くし程な鋸ゐんきよひそうなり
女房が出るとはなしがやひになり
心中を魚屋尾ひれをつけていひ
花にうづまつてやつこの高いびき
うたゝねはあらてをかへておこす也
よつ程なきげんさばてん買つて來る
夕すゞみずしりと俵おとす音
ゆさん船ごぜと座頭で安くみえ
おぢいが目みろと小刀やつと取り
能い草を干したとしやれる暑氣見舞
四尺程あるふんどしをみせに來る
あぢな事養子に嫁をあてがはず
あいそうに持佛をみせる母のきやく
せいろうのとなり遣手のわめく聲
はだかの子おもしろがつてにげる也
すべて女といふものとそこらを見

ろけんする迄は夫とむになやつ
あいつらはどうしたといふ野がけ道
吸物を出すでやね舟そのけぶさ
中の町餘日も無いに美しさ
ばいやつて下女とおぞうが水をのみ
うらのきやく舟宿の前行過ぎる
本性はさくらの下でたがふ也
内川へはいつてよめはちつと彈き
禿迄のみなんせんと口を出し
どつとせぬ嫁けふもほしけふもほし
けんぎやうと人はともいへ取結び
すまぬ事となりではもう餅をつき
是も遺言とたんすへ手をかける
ふがひないみやすどころの舍人（とねり）ども
後家のとも氣にはたらきの無い男
ぶどう棚あれいたちがと目のうとさ
くわんがく屋腕をまくつて錢をつき
大三十日かゝみ見て居てしかられる
笑ふたび嫁手の甲を口へあて
みんな顔かくすが嫁の大笑ひ

むろ町を通れば不二は付いて來る
いちどきにきせるをはたく供廻り
こわいろで歸るは宵のかん念佛
わら灰をつッかけちや吸ふ村のよめ
あこうへの早あいにくとふり通し
戸を明けておや〳〵〳〵と雪の朝
見物と役者とならぶ大あたり
三味せんが止むと八文もつてかけ
御しんぞうねぶたざましに飯をたき
三つまたは金で武勇をふるふ所
それだから二百目つくと仲人いひ
四つ手めがよんだやつさと素見物
御ふしやうと遣手さかづき又はじめ
銀ぎせる立かけて置く三つぶとん
屋形船すがたをかへて一トかせぎ
萬歳はあの生醉に三度逢ひ
師直は閻男はれてするつもり
六十里ならしにあるくけんとうし
取逃げをしたやろうめと明智いひ
茶の會へつねのあたまは下手らしい

火入の火三ばいかへる長ばなし
時も時たゞの座頭も目立つなり
おき〳〵のふきげん下女は舌を出し
げつぷうで門を出るのは百旦那
せん僧に四つ手したゝかしかられる
願ひある身だと勾當しわいなり
田樂でしやれろ向ふはかあんかん
うつくしい顔で車に口ごたへ
北國のゆう里にむす子とられる
小びたいの有るでばん頭高く見え
嫁の禮じよさいの無いがついて出る
ぼたもちをすり子木でつく恥かしさ
初がつを十けんよんで一本うれ
夢見でもよかつたか乳母ぬりたてる
色文をさとつて逃げるおもしろさ

誹風 柳多留九篇終

誹風 柳多留十篇

此書、明和二酉とし出板せしに拾篇に及ぶ、依て星運堂のぬし當春相撲會を取結び、番勝六十員の秀吟を爰に顯さん事を乞ふに任せ、諸組は略し好士の表德を記す、猶亦來申の春是を例として角力會催の節は、ゐいとう〳〵の大寄せ書肆希ふのみ、

不二を夢見て番頭に直るなり　青鵲
十度ど目の盃事がしんの事　淺十
いとなまめける奥さまの御名代　東車
袴着た初心むしやうに手を入れる　遊子
門松のすつこむ時分嫁の禮　歛吐
十ばかり水をこちると松に成り　雨曉
あづけるの嫌ひな禮者づぶに成り　鬼青
氣の知れた男女房をよぶとやめ　眠狐
九千卷程よんだ時松をとり　如雀

女房の智恵には錢をかくす也　露蝶
連れて來た下女ばかり嫁しがる也　狐穴
ころすたびしつ聲の無い笑ひやう　秋紅
薺うり鉦をたゝかぬばかりなり　一目
嫁の手へ生酔ばちをおつ付ける　泉河
嫁入の時もあばたは荷がおもし　同
十かへりの松だと牽頭わるッ口　木綿
市に寄り愈〻つみがおもくなり　同
随分たつぷり出來ますと天がいや　泉河
琴の音も止んで格子でわるい咳　木綿
りつぱなるもの花嫁の丸はだか　紅梅
行きなりさんぼう男の雨やどり　芦舟
なじまぬも道理禿が蚊やを釣り　燕子
母の文まづい顔してよんで居る　露蝶
生酔をふみ臺にして花を折り　鳳尾
後家の琴ゑんりよなさいと支配人　小川
はへぬきと見えてするごい內義也　芦舟
一度いつたらいゝはなど角田川　不戰
和漢の書ちんば引き〱そらんずる　仙郎
門松に大勢立つておかしがり　金龍

取立ての肴一ト月置きに喰ひ　龜遊
死ぬと直がすると書かきをむごい評　眠狐
色文をひろつて御用首にうり　新紅
功能はうつ症を治す三つぶとん　泉河
金ざいふひろふとつゝきおこされる　桔梗
したく金惣身にたつた六つ出來　泉河
端ちかな所でのんでる中の町　鳥江
本の年いひな〱とひざでおし　千鶴
仁王さま二タ人ならんであつ湯好き　桔梗
大ばすに切つて松魚を安くする　五鳥
おやゆびを鼻へ入れなと土弓いひ　萬里
うれ殘りまヅかなやつが五六人　吹雪
ばくだいな振袖の出るかるゐ澤　新紅
下女が來てお新ぼッちが出來やすよ　雨曉
生門を明けて閻魔所ゆだんせず　敵吐
あかぎれの有る內せげんうらぬ也　露蝶
二年程番頭をしてよめに行き　花口
まだも有るやうに金入仕廻ふ也　秋紅
餅の有る內はなまける一人者　東里
下手にうろたへると干死ぬ掛り人　芦舟

下女が白狀大せいのそこねなり也　冬始
吉原で黒介根津はかさもりだ　萬里
六彌太は一人者だとかぶじまい　萬鼬
人よくの茜だしきはやりてなり　蟻穴
げくわ抔にかゝつたも有る松が岡　新紅
品の客酒たけなわにおよんだり　文仲
言葉多くて品川へ四つ手かけ　魚交
ぬけがらのいくつか出來る花のるす　同
田樂は田でたのしむのよみがあり　同
まきを出し申候とて小はん時　泉河
物置は身にも皮にもしまぬ戀　雨潭

安永未の春

催主　星運堂
補助　さくら木

髮置は白髮のたねをまきはじめ
ぬかぶくろゑりへ廻ると口をまげ
中宿は義理で勘當二日おき
こびついて居ると女房はきげん也
さり狀を書くと入聟おん出され

入りは落ちたかと柏莚土用ぼし
初に來た座頭のじぎの手の長さ
けんぎやうと座頭のじぎに人たかり
駕供の下女杖のたび子をあいし
明店の前で鳥追ひ乳をのませ
まッ白な犬合羽屋でゑごられる
やうがんをくづして禿引ッつめり
ちよき舟をあんじるやうに罷成り
大門を一合にしてふけわたり
送膳ゑゝ病人とみなくらひ
年忌かづけがお局の宿さがり
さあのきなさいとおはぐろ暖める
九尺店琴をならはせそねまれる
來る程なやつおやたちに用は無し
銀ぎせるけさんに置いてうなる也
戸つかだと思つた晩にとつかまり
何(なん)にするのだとやげんを貸して遣り
夜着ふとんいつか親父の耳へ入り
平太夫扨もふきつなのりなり
なんだかと左官ろんごをめッけ出し

かぐ事もならずさし身をぺろり喰ひ
女房の留守鹽からでのんで居る
あさッぱらいとしや母はしちを置き
草ぞうしおうばつぶさに申上げ
あさつてはあのあたりから月が出る
手を組んでそこゝせる娘出來る也
一トにぎり有るを舟宿こそづかり
すばしりを棧敷て見たがはじめ也
すがた見へ近く寄つては顔がなし
道成寺花見にへちをまくらせる
いッくらも見せて呉服店はしがらせ
眞白なやみを四まいでかけさせる
くら宿へ廻るで四つ手百高し
座敷牢九月しまとは母の慈悲
顔をする間だ前がみひんむすび
十四日ゆだんをすると山へぬけ
縫つてやるやつさと娘ごうづかれ
手の筋を格子の外へ出してみせ
源三位大きな智惠をつけもふし
花の山いまだ御ぞうが氣はしれす

かた衣でみなさつたのと新枕
三次ぎの卷頭へ行く氣さんじさ
是になる氣遣ひの無い長局
旅のるす何をしようとまゝな事
すて扶持はじゝむさくないおびくにん
十三日しやうぞく過ぎてしかられる
おごけずときり〳〵文を返しなよ
門すゞみしつぺたたゝき〳〵居る
ものもふをつきや見かねてはだを入れ
道ばたにすわつて連れをにちて居る
うでへ卷きつけて物干かりに來る
平六が向ふうらかと留守居聞き
枝豆でつッぱつて來る重のふた
又おれをうりてんげりと諷の師
油揚にこぶは村での大法事
仕事師の持つ辨當はわきの下
中納言名ある女性を二人しめ
五寸程明けて質屋はまねかれる
にげた鳥雨手をひろげおつかける
おそろしい男ごうしで痔持也

山姥はくひつく程の鬼でなし
笑ひなさらばいやだよと袖をとり
よめの禮もやう程なる門の松
川ばたにつゝ立ちあがる旅むかひ
おどり子を五六人前あつらへる
ごぜの膝下女思慮もなくつぎこぼし
はなをよくかみなさいよと覗きいひ
ほめられてくれた名をいふ雛の主
髪をよく見やと母おや三針ぬひ
はら帯をせずに産んでは江戸へ出し
折釘、下駄をかけるとかつぎあげ
ちう三をかつたが鼻へぶらさがり
むごい事ごぜ容貌はすぐれたり
汁粉もち出て來る顔の寒むそうさ
けいせいにざつと御をあいしらひ
生酔をかついて通るにわか雨
虱取るそばではだかでまりをつき
春するゑやしやうと藪入したを出し
うよひよを置きしいの木の下で死に
氣にするも道理十九で袖をふり

土用干となりのよめはうつくしき
はなれ馬しひの木へ來てつき當り
つかまつた時分は娘から財布
朝がへり下女が事までがなり出し
くらやみへそとおり姫は穴をあけ
高倉は落馬しそうな御名なり
四つ手駕牛の小百もかけぬける
衣紋坂四つ手いきおひさかん也
鑓はさみ箱で生酔はいてゐる
母おやをつゑの下からだます也
ものゝふに成る迄おくるあさぼらけ
帳前にゆびをなめ／＼亭主居る
ござ聲で事のとゝのはざるに行き
鳴りやうるそばで懸取りぼうを引き
後の妻子に丸綿をいやがられ
あのげん氣よふ戸塚迄行こうぞい
殿さまはすばやい方とつぼねいひ
ふり袖をおさへてひなを直す也
とまつたがあたら櫻のとがに成り
やきざかなうちわを讀んで呵られる

口と手とばかり屋根舟さわぐなり
藪入は春の殘りをくどかれる
あろう事前度遣つたあまをかひ
明店のたへぬがかたい大屋なり
鳥居ぎはへゝんといつて下女殘り
氣がもめんすとよりかゝるからたんす
ちく生を相手に馬子のいきどほり
由井が濱すでに一宗たえる所
むまいものだらけと茶漬喰つて居る
たゞさへもけんな娘にかねをつけ
事ふれを遣りてしたゝかかつけをし
母の乳をなぐさみにのむくわほうもの
下手のまり扨にぎやかな義と覗き
まゝ男はしまいしと後家大丈夫
政宗ではなはだもめるかたみわけ
しよせんなくさくらへ昇りおりられず
まゝならばまゝさとおやぢじぐち也
生酔を大戸上げろとしよつて居る
つゞらをばしよわせて出るが下女はいや
のまぬやつしごくあまいとしひられる

出來たやつ遠くへのいでちやんと居る
首一つ取次いでやるきりおとし
花に春をむけてだんごを喰つて居る
伴頭がなめると御用ふれあるき
ぞろ／＼と花嫁惡所よばりする
しなのから來たとつん出す病み上り
石尊へたつに二口きりかへる
町人でしち屋を出るはひどい事
色男でも坊主だけよわみなり
中納言ひよどり越をふだん見る
げんぶくも二タ剃刀は女なり
人間の貌でからだはこたつ也
だん食のかはり鼠に成つてくひ
手にじゆずをからんで和尙一つ請け
若どのは馬のほねから御たん生
取りたての鮑は四つを開いて喰ひ
しんのやみ早太をるかと物すごし
大あせで歸るは安いすゞみなり
なりひらは金を遣つたどらでなし
つた屋だと四つ手から母手を引かれ

かの後家がさまたげますと仲人いひ
花嫁を二タかみそりでらりにする
たッた一度に百笑ふうつくしさ
親の氣になれとは無理なしかりやう
しんかんとねたばを合はす枕がや
午祭となりもおなじ拍子なり
料理人切合ふやうな音をさせ
ふんごみのまゝで傾城しばられる
目印は殿がひたいにつけて置き
時平こそゑんぎのわるい臣下也
大言は吐きは吐いたが初會ぎり
羽織でももうしれやすと女房いひ
松かざりくづす時には能い男
すり子木にすがつて禿引いて來る
こなた迄ぐるだと母はしかられる
草市はみなまぼろしの物ばかり
いひわけをきかぬはやみと月夜也
旅むかひまじめな顔で扨待つた
ふりあげくさんだ所に駿河町
駕かきと一箱明けたはなしする

なまきずの一日たえぬすゝき賣
戻りにはあぶみふんばりおぞう乘る
念佛をひよつとむすめがおかしがり
二タ道をかけてと下女はいきどほり
ためたがるつかひたがるで不斷もの
御こうへも餘程引付ると木戸でいひ
はご板で下女いやつたく追つかける
妾がへご奥中むねをわるくする
久兵衛を七日見かける雜司ヶ谷
さかづきがどこらへ來たと料理人
庄屋からせんじものめと一歩かし
そばの荷へ鉦とたいこを置いてくひ
あまッ子を未練の無いがかひに來る
常袴もゝひきほどは錢がなし
園はれへ髮のあるのが來てぬすみ
大あくび棚の御神酒を見付出し
具足びつのは髭の出た男なり
次の間ははすに切りこむ料理人
一年と渡しかけ合ふ十五日
ゑゝ鳥がとれて二階がどつし〳〵

ひぢりめんひらり〳〵と風にくわし
そばかすの有るでは三まい五両なり
仁王門そのかみ鳶のあつた所
本所に年始のこぶが一つ出來
よし町へ世俗にうとい客が行き
けいせいは一日白き苦をもとめ
ぼくせいがゐてゝ居續けいそがしさ
いひぬけをみんな女房に覺えられ
じだんだをふんでは見たが貰はれる
もてぬ夜は何をいつてもへゝん也
でんがくをちよび〳〵はこぶ女船
外聞の能い奉公と聟おもひ
狂言があたり黒がも杯をおき
商人(あきんど)の道を梅干からおぼえ
ふり袖はまかり違ふと聟す氣也
例年のごとく田にしとごく酒也
上下に矢立をさして山田もの
雨だれをかなしい聲でくゞる也
成程といつて又見る遠めがね
たんとつく譯は花よめ二タ人也

やくとのやけつく出やすと内義言ひ
いつの間にゐゝと二つ三つあやし
通町ずつずと行くときんり様
金の有る所をぬきみの下でいひ
世を捨てた人のじまんは大三十日
御妾の聲うつばりのちりがおち
三みせんを嫁うつかりとひざへ取り
いたい事無いとげくわどの針を出し
頼政は素人好きのするむほん
つかへ手をかけて生酔道をきゝ
おはぐろのそばで返事をあけてみせ
みそをつくやうに釣舟かしをつき
繪の具代などともうゐんじゆへつかひ
能い筆で蚓を書いてしかられる
椎の木をとびこすやうに猪牙は行き
おかしいとよめ手の甲をかぢる也
細見を四書もんせんの間によみ
淺黃むくこたつへかけてひよんな物
大あばたさるにもほねが折れる也
柳から乘るとはごうかなびくやう

有るかひはござりやせんと女房やき
まきのふしすいきやう者が割つてくれ
ふきがらは櫻の中でいぶり出し
歌がるた子の刻迄がかぎりなり
時鳥あくる日からはへしになき
しろものと見えてさじきに目立つ也
むごい事らりやうの袖へ鈴をつけ
初鰹かついだまゝで見せて居る
しめし籠のけて太鼓をあぶる也
つれの文あけて見たくてならぬもの
けいせいの棧敷に一人目にかゝり
五文ではとびのいて居る廿けん
手ばなしでつけざしを呑むなれたもの
三會めもてゝうれしく無い夜なり
乳もらひの苧をかけて來るいたましさ
女房の苦は花が咲き月がさし
向ふ棧敷で見た事はひしがくし
そも／＼ざらのらんじやうは花見也
海よりも田のもの月がひんがよし
奉公をした小袖だとついて居る

馬五六疋におめかけむかふなり
はつさしたものまをとこ芝居也
下手の鞠皮たびなどはのきと見え
鼠くそ毛詩に二つ惜しいこと
品川はきぬ／＼山の帶をする
日をえつて茶をのみに行く恥かしさ
ぞくなものばかり妾はねだるなり
宿(しゆく)近く草履をはいた人に逢ひ
色男でもうんつくじやいけぬ也
入りむこは是でおわかれ申します
たまさかにけぶりを立てる一人者
女でこそあれと聟はつッこまれ
他に事をよせても女房さとる也
品川へ猪牙はけつきの勇でのり
のまぬやつ一日拜むはなのやま
明日芝居へさとひたいを剃つて居る
はなれ馬施主のやしきへ追つて行き
おもいれを寐たと櫻をぶつぶるい
渡し舟さかく生醉立ちたがり
勞がいはしのびがへしの内でやみ

四つぐつと過ぎに聲山たてゝ行き
何か出すそうでお内義ふいと立ち
夜着一つやけをおこして女房着る
朝がへりすゝきのほにもおじるなり
初鰹つき屋呼びつぐばかりなり
くりびきのやうに屋根舟膳を出し
ちよきに酔ふとは天命につきたやつ
てうしをば旦那でかへてしかられる
さかづきで運の定まる大一座
とうがらしつきやの貰ふすばらしさ
初會と見えて寄りかゝるさが丸太
夕めしはかゝァいやだと百旦那
下女色に布子をうけてくれといふ
女房のくろう草木きばみ落ち
夜着きると妾はちえが分に出る
大和茶に下座を切つてゝ目立つ也
ぬりたつて殿のひたひをもんで居る
鎌倉に鰹もくはず三とせ居る
石塔を見るゆゑかたい旅おくり
ふき降りに白衣黒衣のにぎやかさ

しづかさは晝も鼠が二つ三つ
呉服店二つにきつて人通り
夕めしをくふを見て居る雨舎り
ちんこ切尻から出していきを入れ
寐ざあなるまいと苦にする暑い事
一疋の螢でくづす門すゞみ
降出すとくそだと茶びんまだるがり
一人者二かいをかしてなりこまれ
雪の晩饂だんべいと藪醫おき
鵜のつらは凡慮の外な所へ出し
木ッ端もすごとく芝居の蠟とぼり
格子からばつちらがつて子をかりる
二度目には娘で通るわたし舟
晝見世で馬をかぞへるひまな事
かこひ者あたりとなりへ煮ると遣り
御不勝手おくさまびわゝ琴もなり
あつい事嫁襟元をくつろがせ
ものごりと見えせんもんとち狂ひ
才藏が立つとやうぎをくづすなり
御妾のくし箱しゆ〴〵な繪の具あり

鏡見てそめものをするはづかしさ
かんざしをしこなしぶりにかりる也
爰におりやすとむすめの門涼み
いつもお若いとは後家へあてこすり
つばなうり生酔に二把たゞとられ
しのはずへ二てう辻駕きばる也
歌がるた好いた男を入れたがり
黒猫が居ぬと鼠にひかれそう
俄雨歸つて開けば降りませぬ
沙風にもまれぬ先に小松かれ
むらさきの幕人の氣をうばふなり
何申しやしやうと後家の供はいひ
あくる朝羽織のかへる能いきげん
雪中にさけぶをきけば四つ手也
かたみわけ嫁人がらを仕廻ふ也
いふまじき口上女房連れへいひ
もゝ引の泊りもとるでげびるなり
此花を折るなだろうと石碑見る
おめかけのひるまは至極無口也
おや分の內義不動に待つて居る

かねの禮ごりや見ようぞといやがらせ
御延引古歌をならべて御たのしみ
松の內もゝ立で來るぼていふり
びは一つ喰つたがうらのしるし也
なびけやいぐらゐは高尾しりんせん
いらひどい玉づさの來る大三十日
紅葉見をいな口ぶりとおやぢいひ
舟宿の女房たゝせて置いて縫ひ
狐つき大屋しかつて耻をかき
お十九でやれ〳〵といふてんがい屋
二三人來るとどう〳〵たらりどう
才藏はすわつては口ぶてうほう
くいつみはびやく衣の人が來てあらし
御ほうびに下さりながら手をとらせ
あいそうが過ぎて棧敷をせばめられ
左右の宮ほどにあんごん脇にゐる
そろ〳〵と御所が木曾どのぶまに成り
旅がへり女房につきやかましさ
生酔を捨てたもつみの一つなり
たいくつの中を流るゝ不二の雪

みつだんへはなつたらしが茶をはこび
持參金からき命をのがれたり
あつく禮いはるゝ戀は出來ぬ也
おつかない顔でおやぢは土手を行き
ちと內のやうだと懸るしゆろぼうき
年禮の一義がすむと金のこと
知り切つて居るとおふくろりを聞かず
むらさきをしめ〳〵しやうが入ますぞ
かみなりはおもねる公家の上へ落ち
傘はさしかゝつてのむしんなり
ひんまくれ抔と伴頭こゑをかけ
ほとゝぎす下女は小袖でくるしそう
ぬかみその手であだ人を追つかける
おがんだら直きに歸れと錢をやり
御新造きせるでちよいと一つつき
赤じやれた黑ちりめんがおびき出し
はな紙へじゆずをいつけて大小言
仕立屋のでつち茶丸の棒をしよい
はぎしりはどのがきめだと遣手いひ
大道へ二十五さいをはいてゐる

こりやどこへ御出と杖をとかまへる
目がさめて見ればまだ書く長い文
しやうぶ太刀乳母どつこいと請止める
山ねこをだまり〳〵とかひに行き。
ゆかたにてふくを師直よつくみる
間も無いに目黑へ行くはいらぬもの
しんぞうは二かいを廻り〳〵寐る
元結と油をもつてとなりの子
おらがのも遊びは下手と御ぞういひ
あごの無い寄合不參だらけなり
笈摺はみかんにはじめ柿でぬぎ
正直にいふとおごり子大どしま
品川の月にはくらい道を行き
物さしでしんめうかたを二つ三つ
歌がるた仲間へむすこまぎれこみ
子供客喰ふ程喰つておさらばへ
つき出しは高てうちんで來たの也
たいこもちお針のそばにまッぱだか
芝居でも見しやうとむす子大じかけ
伯父貴から烏渡來やれはいやなきみ

ふき味噌を子になめさせて叱られる
帶刀で紙くずをける見ぐるしさ
高慢は雨のたもとに禿なり
つかねど此かね關東へはひゞき
鹽からいにしゐを上げて乳持だまし
六づきで國府を買ふは行でなし
花よめはかいくも尻はかゝぬなり
ろうがいをやむがとむすめくどかれる
はな紙でやればそれ程おしくない
柳ごりくらゐは松へいひあげず
いけんだて置いてくれろと亭主いひ
こうなんをさけんが爲にごぜをぶち
下駄を見せねへときらずを買ひに來る
さのゝ馬はなれ山でも二度倒れ
ほえそうな新ぞうあれも一分也
木綿屋でおくのは惜しい男なり
諷をば無言で通すやなぎはら
嫁の着かへるをのぞくとちゞむなり
ふだん着で番頭ゑらい事をする
三川島捨子貰ふにやましといひ

錢箱へがら／＼／＼と五十入れ
おはぐろを酢か酒鹽のやうに買ひ
さかやきでこするは二文四文なり
けさ見れば四五箇所ぬえに引かゝれ
味噌をつくやうにあつまる與道者
女郎衆にかすなと子もりことはられ
ゑびす講四五日ほねをしやぶらせる
座敷持琴はあゝして置くばかり
心中の座敷一トばん遣手ねる
盜人にあつて三非のめしを喰ひ
棒組よお願ひ申せなぐるぞよ
かゞみとぎ三み合せてかき廻し
ふぐ汁の表をばかな寒念佛
座敷持しんなとやらがかきんした
あきはてる迄は毎日通ります
琴箱をかついだ袖へとつかまり
わつぶしなさいと一重次ぎへ出す
すれば碁じや無いと親父もちふ悟り
つみ艸を遣手は舟へ呼び集め
内へねて木戸ぎはに居るひとり者

百灸を落して高が四文なり
雪の朝女房はいつを持つて打つ
まけやれなどゝ御新造芋をかひ
そう酷くいはぬものだとにじり寄り
惣花におもき枕をやりてあげ
女房はやかぬがたてゝいぶす也
お廻りを氣をつけやれと角(かく)をなり
日藏に面目もない延喜帝
奥さまをしやうぶ刀で切なびけ
女房のちえは花見に子を付ける
竹でさへぬいたが始終越度也
出あるくな札が付いてはならぬぞよ
美は美たが王昭君はけんなほう
萬人を酔はせてかへすゑびす講
琴なりにげち〳〵の這ふらんがしさ
矢を二本箱入にして申しいれ
あんどんへ遠く四五人うれのこり
けいせいをやけで諸出すむごい事
かけ取の來ぬが精靈へのちそう
まだうごく死へ奉書の紙をかけ

謊言へおやぢきせるを出してみせ
臺所はたゝく表はひつこぬく
そろばんをわきへはさんで隙な事
つま立ッてあるく宮女を御てうあい
國家老歸るとてん〳〵なり
御縁日だけに景清用捨する
眞黒な口でせわしい子ではある
是はさと箕からなげると嫁はにげ
母らしい人の尋ねるあら世帶
地女をわらぐつと見る一さかり
あほう宮をさこの聲は始皇なり
物干へひよいとあがつてごせこまり
くわん〳〵取り付て泣くのは女房なり
ねせつけて他人に貰ふむごい事
月宮殿へ二度のぼるいたいこと
引ずつて來るをにこ〳〵渡し守
おつと來たなどゝ三味線舟へ取り
能い春だのとは大きい中の町
御持佛はおふくろがかり十三日
草餅をやいて宿へもしんせろよ

いよおばゝさまと若後家いやがらせ
鬼の目になみだをながす曾我のひん
つよい暑氣內義たらいて縫て居る
舟廻しのも悶づけも土手へ出る
大當り一坪ほどで所作をする
ふり袖をちはやの外へ出して置き
一つ身を前からきせる大さわぎ
どうしたか山歸り巳後人のよさ
すがゝきの中でゐねむるなれたもの
糸を卷くやうに花嫁もちを喰ひ
やぶれたるおんぼうを着て母に逢ひ
いくらするものか羽二重ばかり着る
ふんごみで取まいて來る狐つき
山の客ぐんだりやしやの方へ行き
毛せんのとなりの棧敷みかんよび
とりかぢをしなとおどり子聲を懸け
ぶつ擐ひませうとたいこ土手でいひ
見世先で袖かき合せ結つて居る
木に餅のなるやうにいふ源三位
草履取無言でくるひ〳〵行

切かぶの上へよしのゝしゝん殿
慾心さあんなものをと出合茶や
出合茶屋ねぎれば鼻であひしらひ
むきみ賣やがて買ふほど苧にかゝり
初鰹片身となりへなすり付け
花にめで月にうかれておん出され
泣く聲がにたとはぬえで無いとみえ
はんゑきが首はおさきにつかはれる
おやわんへもるぼたもちの鹽からさ
御拂がずつか〳〵とどゝこほり
通りもの猫のしまいをつれて來る
すいぶつて晝過に行くさかひ町
關寺の所化衆そんならかけて居ろ
倒れものおとゝひ剃つた醫者にかけ
物もふに下女まげほうへ卷付ける
やかれるでくさ〳〵すると圍ひいひ
引事で田村鬼神をはぢしめる
辻番は二百が藁にうづめられ
とりがもううたふやつさと三を下げ
奉加帳御用內ぶところへいれ

四つで駕東海道をさしてかけ
不二の夢はたして白き御ゑり元
船をうかべて一日は御しのぎ
屋根船で行くのはどうかふせい也
ぼうし針さしてこたつにこしをかけ
人來るときんばつゝとわきへのき
やつさいとかつら男をのせて行き
土手のまん中で去狀くれろなり
むらさきで都をすてる本望さ
よめの禮おとすと地主ぶるといひ
そだのかんかよとばゝァは腹をなで
しんの闇わんといはせて四つでかけ
薺うり此上ねぎるところなし
きん酒してむす子おやぢをはむく也
內義同士けんくわねの有る事と見え
送膳燒きもの餘程落ちて見え
度々の留守女房ぎやくいを思立ち
口をすくしたと忠綱後にいひ
弟子とふづくつたは年が不相應
齋日の藪入飛脚ほどあるき

何も無いそうで干物を燒く匂
大和茶に至極ひそかにごふを打ち
里の母かげ辨慶を遣ふなり
かんざしの跡を小ゆびでかき廻し
御家中は坂のやうなる肩にのり
御年貢はこはい物だと禿いひ
おそろしきもの〻喰ひたき雪の空
三の下ごせふけいきなつらをする
川留にむけんのかねへさそはれる
ちつぽけなふとんで四つ手一荷出來
駕の衆やこつから聲をかけずによ
米主と銘の有るのをやつこさし
持參金見合ひに出るは何事ぞ
五丁町おやぢはしよぞん有つて行き
能の笛あごでかき込むやうにふき
かけとりと云合ひながら毛をむしり
足に毛が無いとむす子は女なり
ほうつては扇子をひろふ野懸道
吠るぞとけんぎやう藏をみせに遣り
提灯が消えるとかッさかさあるき

四つ手駕すてがねの内直がきまり
そうやくをせねは見られぬかねの口
ごふく店きたない箱へ金を入れ
見るが日の毒とはけちな素見物
どなたゞかお出とゑだる置いて行
大部屋の石臺ものはとうがらし
かた身よりおなかのすわる掛り人
あんどんはふきがらだらけよみの朝
本性に成ると辻番いけんする
せちからいやつ藪醫者にかけてみる
窮屈にすわつておめへさまといひ
ならものは内分ですむ道具なり
心中を立てずにのると玉のふね
鰹ぶし喰ひにげにするかりた猫
けんぎやうの妾ものごしのよい女
ぬひながら口三みせんで姉はつけ
俵やをたてつけてぼろさらひきせ
いけて置くやつでは無いと五両とり
さがりとりべんをふるつて先づ歸る
ぼん蓙へ櫻ちりしく御てん山

引づられながら内義はしつけ取り
張良は作りばツかりしてあるき
松がとれると品川は月の沙汰
す一分は落手せぬ内氣ぐろうさ
さらばそこへ行くべいかとぐわつさぐわさ
むさし坊はかまで剃つたまんま也
御つとめは四五二〆さと根津のぎう
いきなりにぼん蓙へねるぶつたくり
ひさしぶりひつじを喰ふとていし龍
佛眼でちやんとして居る下女の酌
芋うりのがきさと遣手手にあまし
美しい顔をくづして子をあいし
ねこのなわとくと錫杖ふりたてる
御駕わきまたを拜んでかけぬける
針うりが死んで一日見世をひき
長つぼねきのふの口をもう二本
十二文ほどのきげんでけころを出
納つてから竹光をさしはじめ
佛法の事だと四つ手あけて來る
下女がせななくなと馬にかきのせる

わきよれに一ト貝すくふ馬ふんかき
新酒屋うらから女房度々逃げる
こん龍の御衣を御耳へあて給ふ
おく家老櫻の中にいためつけ
日本のぐわいぶんに成る塚一つ
百人のかつえぬやうによみはじめ
先づ息子さまさと後家の下女はいひ
はくちうに大路をわたす去荷物
金屏風どこにあらうといふ道具
じんじやうに御出なんしと皆はだし
上下をぬぐと無常は戀になり
たぬき汁にながらうでをさする也
名のる内馬はしばらくいきをつき
よし町でふかく合はせた前を明け
はたばりの無い氣と灸をすゑて遣り
おく家老そり橋をはふむごい事
高いよと初手におどかす初鰹
むらさきはかぞへる程のかたわ也
惣領はだゝで半分剃りのこし
月も日もけふに當つてうらに行き

口おしさ似た顔も見ず吹歩行き
すいかんの内にあらたな年に成り
女房に舌はありやとたいこきゝ
文一本でも一艘と付けるなり
御ひろひに車ひれつな事をいひ
女房に一日つらでおどされる
舟とふね寄つて和漢のつめひらき
座敷持何か書籍も一部みえ
地女の御きらひなのにもてあまし
八朔をゆるして天をしよはせたり
たいがいな風邪はぬける三つぶとん
左大臣凡慮のおよぶ惡でなし
やうがんは五十四郡に無いとみえ
やう〳〵で屁のやうな茶を禿くれ
後家あまりきれいな口をきゝ過し
取勝だべらぼうめがと猪牙ゆれる
月の座があいてゐんすと文が來る
やうだいを十分きくとひざを立て
二つ三つ灸をおとしてさとられる
春宵(しゆんしやう)に野がけの通るにぎやかさ

金びらを切つて羽をのすつるが岡
ばん頭は柱で肩をもんでゐる
ゑぼし親督我いつけんに口をとぢ
餅花が有るかと白米わらはせる
下りとりてうしへ行けとつき出され
不承してくんなはいやなくんな也
歸つても今朝はそなたにいやるなよ
鹿のふんよけて地諷かしこまり
書くとこを見て參つたと地紙うり
柳橋弓やなぐいをかへすなり
內庭へ始皇ゑの木をうゑさせる
大黑をたんすへぴんとしまはれる
吉原へ甥めが事でけふも行き
ゆるしやと巨燵で咄す御新ぞう
證人につなみのやうな文をいれ
新ぞうにみんなのまれるきおう丸
こゝらでの飾あじろをかき寄せる
うつくしい顏で四匁五分かけ
いら高でおやぶん聲をはり上げる
勘當の內おそろしいよみに成り

竹べらをぬくと切みせろじを打ち
俄雨四つ手を交ぜて五てうかり
田舍よめくるま長持はなにかけ
四人でふるまい水をみんなのみ
おはぐろの口は左右へちつとふり
甲斐の田を越後の鎌でかりたがり
夜るといふへんに鳥だと笏で書き
扨ぐちなやからだと顏やめに成り
きよろ〳〵と男はすれど內義せず
女房とからかつただけ土手をかけ
ちりめんはとらまへいゝと悉いひ
初雪や出たがるやつと女房よみ
夜着かけたこたつから出て言述る
かゝさまによく出來やした十五日

俳風
柳多留十篇 終

俳風 柳多留十一篇

中春角力句合序題

年に二度土をふませる呉服店　櫻木連 大柳
喰つみが熨斗に替ると美しい　杜若連 如舟
俄雨乞食の相をはたすなり　櫻木連 四龍
四五人で夜道をかへる嫁ばなし　若菜連 箔印
唐土に無い夢を見て神酒を上げ　柳水連 石斧
引はづれはづれて堀の女房也　櫻木連 木綿
よべば蜘行けば風にて手におへず　柳水連 雨潭
龍顔こゝにうるはしき初の雛　養老連 婦美
谷中門くゞるはけちな花見連　橘連 露蝶
歌がるた氣色どらぬともつと取れ　櫻木連 鐵砲
意趣でも有るか何もかもいせしろし　柳水連 雨潭
拾つて喰ふ様な汗を四つ手かき　櫻木連 四龍
吉凶ともにふり袖を顔へあて　柳水連 雨潭
すでの事柳百本に成るところ　櫻木連 其山
土産をば身ぶりで咄す長局　橘連 狐穴
遊ぶ日もこはい顔みる年季者　櫻木連 授扇
らん丸はおつうが尻をつめる也　兜連 舎丸

扇賣かけ取の氣を弱くする　鶴龜連 車印
不二を隔てゝ朋輩を持つて居る　橘連 澤麟
花の山やぐらの跡へ塔を立て　櫻木連 山田
中しやうぎ御后の出ぬばかり也　若菜連 烏江
觀音にふらついて居て目立つ也　養老連 都
あつさりとしたは大屋の松飾　初音連 喜朝
品川のほたけ一日なげて居る　橘連 鯉紅
松葉屋はつい〳〵に買ふ櫻卿　養老連 蓙船
春の買ものだと隣からなだめ　高根連 五連
生酔に澤山かけてしかられる　旭連 露蝶
そつと持出せ海鼠だと十三日　鶴龜連 名古屋
鬼に成つてといふ人は情知り　仝 瓢隱
出來ぬ相談を二日路先でする　橘連 鯉紅
暑い事出張つた松の方を漕ぎ　若菜連 中印
小言いふ内になくなる春の雪　櫻木連 大柳
俄雨かけられるだけかけるなり　仝 仝
夫婦して女郎を買つてはかゞ行　柳水連 石斧
手を打つてお出で〳〵と子煩悩　仝 玉簾
飯たきを鴫に仕立てる松の内　櫻木連 芦舟
人先へちやん〳〵と濟む下戸の禮　柳水連 玉簾

お竈にくるまつて居て富を付け　櫻木連　計志
もろ白髪迄圍はれのふはたらき　鶴龜連　松鶴
滿仲の役が仕納め新五郎　柳水連　雨潭
留桶で汲むをやつかむ寒い事　若菜連　東里
嫁の禮かしはめん鳥つれて出る　鶴龜連　松鶴
短命は松椎の木はながらへる　養老連　都
ちんぼうを鐺刺股の中で出し　柳水連　石斧
手と足のよッ程長い鏡とぎ　仝　仝
手水組では無いかなど局いひ　櫻木連　如雀
一たびゑめば母親へ扶持が來る　柳水連　石斧
芝の戸を出れば四手は付て來る　若竹連　狸仲
紅麻の置手拭で淺黄しやれ　橘連　狐穴
馬鹿ばかりいつて鞁をたゝく也　養老連　長笑
きつとした顔でふんどし嫌ひ也　柳水連　雨潭
下女が色いとし男が五六人　養老連　鼠十

安永五申の孟春

催主　星運堂
補助　薩秀堂

公家ならばどうしなさるとかねを付け
けいせいにうめられて居る惣仕舞
あなどつてげい子合の手なしに彈き
かんざしでかきやと山出し叱られる
角田川二十二三な子をたづね
赤いかと御さいに顔を見て貰ひ
見る人の無いが紅葉の名所なり
入むこの諷四五人弟子がつき
物もふに屁をはしらへくゝりつけ
かこつけの仕廻ひが市と息子行き
馬の跡足ははねるがしうちなり
是切のこねどりぐつとさし上げる
お局の病氣引きとりての多さ
ちかづきつ成つて熊谷首をとり
岡崎をくらやみでひくおしやう達
四人のなげき氣のちいさな二タ人
直ぐ針で釣つたは鯛のつくりなり
足ばかり出來てあはれな十五日
ねてからのきゝ耳まくら二寸あげ

百人一首きうせん筋も一人あり
きつ〳〵と挑ひは出るが茶もくれず
しやう香を据膳でする女施主
扨なんとなきだすべいとかき立てる
かん應寺つきべりが先づ二割立ち
はりひぢをしては辻番とつて喰ひ
ぬけた夜着いますが如くふくらませ
五六番迄せんじろと月行事
おはぐろの邪魔鼻先へちよいとつけ
二歩がものかりたら下女は立ちの儘
十三日伴頭白いざいをふり
ゑびす講上戸も下戸もうごけえず
うけるから見れば六てん女房はり
明店の札所々へ張る十四日
いるまねをいたしましたと手引いひ
飯の時つきやいしやうを付けて喰ひ
なげられもしやうかと初會片くろう
ごらが居たならさまくりを母のませ
げだつ物語て當てる村だんぎ
鈴の音がやむと友成たびへたち

山公事も甲斐と駿河はきついはれ
能い娘もつてあらくれ武士に成り
眞ッさきのむれ田樂の字に當り
永い日がすむと跡からお春なが
薬樱は呑む一式のやから出る
人目をもおもつたは後家初手の事
十五日置くとはつゞみ長じ也
おまへよく下女をと跡のむづかしさ
車引牛てんかぶるつよい暑氣
尻ッぽから先へ書出すとりの繪馬
百人の中で西行そきらなり
のぞかれて顔をつッこむみゝだらひ
牛かたはしりへ廻つてしかるなり
覺えんしたと御針のをひつたくり
出立のころからの儀とていしゆいひ
御めんなんしと來て何かそつといひ
とう明の有るせつちんへ度々かくれ
かたい後家男をたてゝやらぬ也
きのじやの松に始皇のやうなつら
智を持つて生酔に成る大三十日

狼に衣てかけの御院ごう
十三日おれをもつけとねだられる
木戸ぎはにはむきゝ仕廻ふを四つ手待ち
玉川も高みにあるはすばらしい
二つ三つ上なのが出ておびき出し
いけんきくむす子のむねに女あり
むごいやつ二文四文で二分ゆすり
木でしたを見て來生きたを料らせる
をんな客膳のあひだに本が出る
ぎんなんが落ちると楊枝置いて立ち
おやぶんはこしをぐわら〱御門出る
淺ぎうらやわらでぎうをきづく也
てつじやうで御玄關へ來るおそろしさ
喰ひつみを三十日に喰つてしかられる
田樂を喰ふ内まゆ毛かぞへられ
あらためにあふとはたかい紅葉也
雨舍り內義のはらへゆびをさし
上下で供の手を引くとんだ事
ほれて居るだけが女房の弱み也
歌がるた嫁こまや程つんて置き

あいそうにいつたを下女は本にする
御不勝手五色をもれたしうと入り
蔦を引きぬいてさくらを植ゑるなり
ふり出すとやかたでにくい口をきゝ
ひよんな事嫁しやうかんで坊主也
もてた事四つ手とはなすはしたなさ
銀ぎせる松川をのむつらい事
けいせいを夜ぶかにおこす見苦しさ
おとなしい娘をとこを度々つぶし
なんぼじやときけば鰹の直は出來ず
もと船で大のをとこの針仕事
まなばしをうしろへ下げてのぞく也
かん馬東西にはせたる御本ばら
明日ありと思ふ心ですゝはらひ
ごふく店所々へつるして手をふかせ
何かきくべしに御ぞうをおくへよび
品川へしゝとおほかみ毎夜出る
痛はしやむす子てうしのそつに成り
暑いこと隣りの寶かぞへたり
折針へかけるかいなや早い事

女房の諷よッぽどひどくよひ
外に能きはかりごとなく又もみぢ
花よりも柳のわびはもつれたり
居つゞけに毎朝鼻をつまゝせる
飛び〳〵に鐵漿をもらつて憎まれる
六郷にとゞまつて居るはなれ馬
ちゞめると四くだり程の初手の文
おかしなさると怨みだとおやぢいひ
べら坊で居ごころの無い二十けん
もとゞりを直して孔子たのみましよ
まづい事たばねた文をぬいて出し
そごく指南の居た跡へにうりみせ
きんぎ書畫ならべた斗しりんせぬ
朝がへりだん〳〵内へちかくなり
あきの守時分はふつこほどの事
たれながらだあ〳〵といふ下女がせな
ぬゑを射た手ぎはに宮はふわとのり
かけて來たほどに娘の用はなし
かんばんを見るなとみそを買ひにやり
六夜きやくあしたは山のしほれ草

五十七人はあかさかさしてにげ
どこのかみさんだとなぶるかねの禮
とまり客柏もちでもよすぎやす
あんだげでほらをふくはとのらでいひ
あつがみをへがすやうなはけびやう也
へッついを直すとじきに預けられ
月見前ごうをまねきに息子行き
小べんにおきて女房は碁をしかり
二十けんとち狂ふのが一だんな
硯ぶた度々引よせるのまぬやつ
もり久のかくにはいかぬ黄八丈
名代の部屋へくやみが二三人
おめかけの母は大きな願をかけ
大根は後におろしたものと見え
よし原さなどと母にはつよく出る
むし干を馬上でするは法師武者
あの衆へ酒でもと取るぼうし針
けふこそは本の紅葉と母へいひ
來がかりに頓死のくやみいつて行
ゑゝ年でしほの目をするにくらしさ

雨舍り子の行けといふ氣のごくさ
座敷ろう薬をのめにゆだんせず
子の寐びえよく日夫婦けんくわ也
百両はふらついて居てとかまらず
七くさに遣手も長い爪をとり
わつ〳〵と泣いてかたみを持つて行き
なんにしろつきやが喰つた跡の事
とむらひにむす子おこわにかけられる
月夜からとう〳〵やみへいひのばし
歸朝して一のはなしは蜘の事
御めかけのおのれをみるは作るうち
柳ばし出て十分にろをつかひ
文覺があるきをすると伊藤いひ
女房は上るり本をほんにする
雪隱の道でよし原めしをたき
深川は蚊やをまくるとすぐに船
ねい〳〵と四五人歸る正洞寺
さかひ町ずか〳〵通る角力好き
年明けが一人あはヽが五六人
下戸の禮炭けしつぼをぶちまける

恐入りましたと亭主ひよぐらかし
うかゞひに下女めしびつをひつかヽへ
入聟の無念せい人よばりされ
今のかヽさまはにくいと禿いひ
ろうがいのむすめ行年十九なり
暑氣見廻ひ脊中をつまみあふがれる
萬ざいは刀を二本さして來る
足音にてうしをかくすけちな酒
舌戰がこうじ三くだり書いて居る
あのかヽアこはいやつだはこりたやつ
我内へ先ッこしかける旅がへり
ほめられる所で切れる三のいと
諷をばむす子すてヽんげりにする
四つ手駕淋しくかける定直段
べらぼうな夫を持つて御仕合せ
いやあお出でだと藝子を座にしやうじ、
うめられぬかはり油の中で死に
おまへもかわたしも九さと松が岡
月二つ出家けんごにまかりこし
古いやつうしろから來て目をふさぎ

としやうのざいにと下女はひつぱたき
あいちつとおか場所とにとはりこまれ
花なら花さあそびならあそびとさ
にくい事嫁聲あつてかたちなし
女房の先へばかアなをそこ行く
御子そんもはんじやうあれ切りの諷
花のくれ身について皆こうまいれ
御内義と後家ときかれた事でなし
まッ黒なやうじを捨てゝたゝきつけ
うなぎやに園はれの下女けふも居る
二箇村をぬけがらにして公事をする
うれしさはうれしいが下女よめぬ也
菓子持つて禿たいこにあかんべい
たけのこをぽんとぬすむはつみがなし
五六ぷくくらつた上でのみなんし
花嫁の人目にかゝる暑い事こと
鼻うたで土藏へものを出しに行
かんのう寺といへばおらが近所にの
入むこをあはれと思へ山ざくら
東北を一ト聲うなつてはよろけ

三味せんは外事ころり〱也
雨でも雪でも居つゞけさ〱
判取りを小刀たづね〱よび
あればかり女かと母ちや〱を付け
衣さへ行くに入むこむごい事
代みやくが來たでいまさら引つこませ
大雛のおもてゞ小雛しやこをうり
ぬしづかッしやいとかけがね湯番懸け
一トわらひ笑つてめしをかりて行
三つぶとん親父はかはぬ樣子なり
はらさんざぶら〱されるけちなばん
江戸へあいばんかとつばなうりにいひ
袖の梅おもき枕をあげてのみ
花嫁のついへをいとふにくらしさ
はちつけの板よりちぎる御いたづら
ひなをつかませぬで今朝ッからのだゝ
おごり子がこしをかけると牛をぶち
はいつくと四五寸のけるまくわ瓜
けつしてよ〱とて醫者かへり
始皇帝雁をとらまへそうにする

いゝ年でわるぢゑをかう源三位
ゑぼしでは手がらにならぬ向ふ疵
公家にしちや大きな聲と鳥羽でいひ
銀ざせる中だめにしてはなしかけ
ひるいなきぞう言をきく朝がへり
わづうかな月も品川數に入れ
御妾に出るまへ所々でほしがられ
舟宿に左傳四五卷とんだこと
垢すりをかせとりきんでみことのり
ちゑのあるやつ岩たけを取りはじめ
手を引いて行くはと一つうけさせる
碁會所へ灸がすんだと呼びに來る
初がつを御用手を出ししかられる
こん禮を女郎賀したりきよくつたり
ばんにいるあたまだ一つやつてくれ
かげ清はらうざしはせぬおとこなり
乘りそうなやつへは四つ手小聲なり
尻目なご遣ひ神樂をそうすなり
あれねぎをたべなんすよと大そうさ
三十日とはめかりのきかぬ神事也

ぐつ／＼をしてくれおれと留守居いひ
何事かおやぶんかしこまつて居る
馬をしよつたが一生の不人がら
せんびやうはうすき契にぶら下がり
度々ちよく徒餘の儀にあらず雷の事
駿河から遠江までかたぐるま
御てんもの來て下んせを忘れかね
めしびつへ顏をつゝこむ強い暑氣
四つ手駕月いみやこをさしてかけ
祇王祇女田舍むすめにおつぺされ
十四日きのふはどうで今日は首
寐たがつてかけとりを待つよい工面
俄雨かけられるだけかけるなり
しばられてゐるが喧嘩に勝つたやつ
木のはしでないのが海のはたを行き
一文はとりそうもないなりでふき
座敷牢大工を入れてしめて見る
貞女ぶり今じや元直にしかねたり
塀ごしに有るに高なわ越えて行き
ちん毒をきらすまいぞと呂后いひ

つげ口をするで不如意な諷の師
ぶつかけがよいと花嫁いひかねる
雨戸くるたびに甘干じやまになり
すりこ木でこづくは安い法事なり
金たゞをいふとまんぢうさまだぞよ
むぞうさなものは桶屋のぶん廻し
とうとうんのんでとうめうせんを取
月ふたつ出家けんごにまかりこし
くわつ〳〵といふと帝は出來上り
たから船なみ木の中をよんで行く
江戸ものはうまれそこなひ金をため
もう一本ましそうにさす御用たし
あね女郎こよりを笑ひ〳〵より
一トねいりしても四條のわらひ聲
花の留守五つ半うち四つをうち
揚づめのざしきあか子の聲がする
俄雨不二を目あてにかけつける
ごくたてのやうに初會は喰はぬ也
ふきこばしそうなさむらひ一人連れ
枡花女の出る土弓場は入りがあり

しほたれた伶人の居る神樂堂
膳だてをするが椀屋のまけじたく
綿入れにうつれとくわん木二枚なげ
びろ〳〵としては御さいは勤まらず
ぬしづかッしやいとおどける大一座
にこついて通ればどこへ行きなさる
出合ひするぐるり池水をたゝへつゝ
御離縁の跡すゞむしのなくばかり
不二山はみぢんつもらず一夜也
むつ事の中へ油をつぎに出る
ばかな事生醉琴でおごるなり
座敷牢たゝませて置くいやなきみ
下女を直すにつき緣者二人そり
車にてしきみ淋しく引いて行く
ふらないと首を取るよと內義出る
ものあきと見えて奉書のたばこ入
仲人を三とせうらみるつらい事
みん〳〵とないても月と花は見ず
聟のごらあの嫁ならばむりならず
あしたおッしやれと內義へ下戸渡し

とうしせん見て居る息子けちなつら
やんや迄ひいてはげびるよめの琴
傘あやめ持つて御住持申します
ぬけ參り嶌に取りつき登る也
吉原へ二三度いつて氣の高さ
朝がへりそれおやぢがとおごされる
品川はころも〳〵のわかれなり
今の駕もう歸るはとすけんいひ
目があると女房にするとごぜをほめ
生娘をくどいてごうをさらすなり
ほうづきを荷ともに嫁は取よせる
おさへやす櫻田さんとばちでつき
とち狂ふふりで袂へ文をいれ
なまりぶしよと金持の格子から
もち花でごまかそうとはふといやつ
此村の嫁で合羽ももつて居る
大三十日手をくんで居るすまぬ事
蚊にくはれたのもうらみの數の内
ころんだをあんざんの後はなす也
信濃ものにつこりとして喰ひかゝり

御待かねだろうと船ではかゝ取り
いたゞいて茶代をとるはばゝアなり
大津繪のやうに王昭君を書き
びいどろのかんざし村のはで娘
通らしやいあんともせぬとせなアいひ
乳もらひ氣の毒そうに芝居なり
人のすゞみをかはかしにひらだ舟
なびかぬと鎌でおどかす麥の中
かさぬくせいけんがましい事をいひ
ほりかけた臼などの有るさかひろん
旦那敷ましやうと四つ手帶をとく
あてごとも無いと財布を母はもぎ
きつい事昨夕迄はしぶんなり
くらやみへ四つ手衣を引いて行き
花の山鬼の門とはおもはれず
晝時分おきて花火のはなしなり
金びやうぶ生酔に手をあてるなり
嫁とよめはなすをきけば雛の事
つき出しの一日二日はれまぶち
ふもとから來る三みせんは櫻どう

齋日はちッさなように事をかき
通り町一丁行けばかこいかご
葉うら迄見ても女房はくれぬ也
かぢ原は二タこさめにはあなをいひ
紅葉からされればさいふは女房もち
目ざましに御用したゝかくらはされ
金札を立てたばんから人通り
つく田への一番舟は米屋なり
女郎屋のおまけは内義申します
一トしきり女房はむごくすてられる
山もぬくいせいをくぢく車留め
三味せんをにぎつて通る船番所
おなへゆびあてゝかたきをねらふ也
女房のりくつ吉原みぢんなり
此かぎを合せてみなと遣手出し
一禮をのべるど茶番々々よび
番太郎としよのあゆみをおくる也
目黒から引ッ切りもなくすゝめこみ
一ト人さへ買ひかねるのに惣仕廻ひ
是でもう二りやう着切ると前九年

おつかけるやりてみかんの皮を持ち
小やろうを一疋などとむごくいひ
さやばかりさしてぐる／＼しばられる
安名には九百餘歳の犬としま
庄屋をばきらつて江戸のかけむかひ
あごなしに四百なげ出すけちな事
若やくにいごかッしやいとしうとばゝ
初がつをかと僧正はむがで聞き
はんれいが寐てから越の手代ぬけ
ねぼけたで四百七人ほどに見え
友だちを女房はつらでおどす也
若旦那ひたいに笠を張つたやう
ぶつかへりそうにつきやはかしこまり
さしがねをこつさには入れ遣ふなり
朝がへりしうとめごぜの目がひかる
下女腰をいたゞくやうにもんでゐる
番頭はをんなのぬけ荷ばかりかひ
かくれんぼかべのしやみを掘つて居る
大和茶でねがひある身の長ばなし
おらが大屋は小人と儒者はいひ

秋のたび下女おつゝいて子をあやし
赤合羽ぬれるよりはとむりに着せ
さがり取御用爰だとつれて來る
蓮池をぐるゥり廻る安いきやく
へごをふみ〳〵辨慶はいのるなり
御産婦を證人にするほとゝぎす
いたぶりであらうと妾逢ひに出る
此しぎでござると巨燵ものをいひ
おめえさんお聞きなんしと祭前
ずんごうのすゞきやんとはんれいは呼び
ほれたやつ間がなすきがなおとづれる
らく天はくがぢを來るとにゝりま切
仲町にのゝ字を入れて三年住み
座頭金たいこをくれるすまぬ事
うつくしい後家方丈のしつに入り
風呂しきをとくと深川早がはり
はやり風もと船を出るくすり箱
御ひろうにしよしや山ほねがおれる也
たのむ木の元より劣るかりた傘
またと無いにず一疋の官女なり

よし原へうでよりかたで早く行き
紙くずのたまりはじめは寶船
深川へ行つて來る程長湯なり
今以て行くかもごろか角田川
大門だ泣くとしばるとせげんいひ
出るそうでわつわと泣くと御用いひ
金氣でもござれば貸すとむごくする
門すゞみ下女わりい事しなさんな
圍ふのをにくゐんの兄いけんする
うたがひの深さ手引にくしをみせ
ひめぢ迄たき火のうつるお目出たさ
いけもりの酢の無いをくふ内氣もの
笠合羽かんやう宮をかつぎ出し
踊子はわれ一ぞんで二度おろし
消炭をつかまッしやいとしうといひ
仁右衞門のすんだあたりに仁王門
ふしみせつしまひ拜んで歸るなり
辨けいは書置き迄のいらひごさ
うはばみの時にはい公ぬいたまゝ
やせこけたしがいが有るとわらび取り

茶ばかりだまつとねようと新世帶
木曾どのゝめかけ一ト人はうまぬ筈
御目出たうござると誘ふ角田川
藏たてた後家口ひろい事をいふ
國ひとつ和銅の頃にはねがはえ
かんがへて見てはつめ込む柳ごり
すいめんがやむと六疊敷をもち
呉服屋へ來てねぎるのはこしをかけ
居風呂を出てから何の日だときゝ
そらッことありがたそうに息子よみ
いけぶといやつと又行く後三年
にはか雨御慶をのべてうらみられ
備前ものさげて大藤内はにげ
雨戸くるたびに甘干じやまに成り
仕合せな聟しやうかんでばッたばた
まちやれよのめる理窟が出來るによ
髪おきとはかま着を置き河津死に
初がつを辻番いらぬのぞきごと
勾當のないしよろひを引ッかくし
材木屋ついてあるいて空を見せ

妻よばりおきやれとけなす松洞寺
朝ッぱらしかるをきけば松とうじ
しなれるとたいこ三日にあげずに來
天ぢくの唐のと玉藻なれたもの
朝歸りつねの身なればいひやせぬ
ちつとおやすみと格子へ臺のもの
しよく好みするはやう家の娘なり
ばいしよくを一わり入れて札がおち
炭をつげやいといけんがさえかへり
鳴る所でいんせいの出る鈴の音
三百里もちをふらせる始皇帝
すさまじく呉をとりさばく越のみせ
せんそくに嫁身がまへのむづかしさ
御てん醫者鈴をならして笑はせる
その夜ふるやうに呉服屋たゝみがへ
やみにあやあつて娘の門すゞみ
お白いが泣くとへげるとせげんいひ
みり／＼といはせて禿つるさがり
よし原で武道勝利を得ざること
古近江で岡崎をひく御ひめさま

朝がへり女房に質をせたげられ
屏風から産婦の覗くじやすい也
しち置きに四五あし捨てる四つ手駕
もてたやつ夜中おいていていをいひ
毛せんでさじきを拂ふ油むし
墨染へつく駕かきはおぼえあり
ひな棚へもぐさを置くは姉のちえ
死すべきとき死なざれば日本ばし
おし鳥は夫婦げんくわの池へ來ず
氣ほうじに須磨寺へ來る中納言
御朝寐の御つぎ高尾がうわさなり
女郎かひけいせい買をあざ笑ひ
ぐつとこゞんでぶつかけを嫁は喰ひ
なまわかいなりでと巨燵追出され
ふん切れと他人のいけんおそろしい
いらぬ事いますがごとくつくりたて
ぢうくふをいふなと下女をせな叱り
てんやくとてる日の褌子はすり違ひ
間男をするよと女房こわいけん
くわいらいし子供の外はにがわらひ

はな紙へしの字を書いて嫁はさし
大道でみやくをみてゐる小兒いしや
りん病の毒もあいつとごししよいひ
內證で鹿を手ぎねでおつぱらい
いくぢなし下駄の鼻緒をさしで立て
長刀をはづして來たと木ぐすりや
墨染の御身だはぎうの過言なり
くらはせてかつて置くはと亭主いひ
顏上げてゐなとつき出ししかられる
前髪をならんでおとすごふく店
すいながら跡をひねるはげびたもの
手打だと常世しなのがものはあり
五日迄たてゝ置きなとさがるとし
女房がよめば手がみもつの田川
二三年でつちは素人手ほんなり
師匠さまぬき穴のあるはしらなり
つげ口をするで不如意な諷の師
あさつてはおはつ月忌と後の月
主人相知らず四つから末のこと
おぞうさんていらに居なと猪牙を出し

くゞり戸が明くとつけ込む夜かごかき
かんざしをかせともいはずすいとぬき
六尺にまでちそうする念ばらし
まりもつきあきるとやねへなげてみる
八朔をのがれてへんの無いをくび
黒猫にとう〳〵するめひかせたり
御寵あい外へはつうんつんとする
古市の前日いしがものをいふ
つくしうり姉はでんがくやいて居る
しやつ金も三年やらぬ孝のみち
それたまり取りにくる迯けて笑ひ
うまそうに煮えるをみれば木綿也
寐て話す所へばッかりむす子行き
尻まくりくらとはあらい歌がるた
座敷らう大工を入れてしめてみる
たくましき男と小あま土手を行き
闘ざきをひけばそばから母かたり
ちうけいでつくように鶴和尚出る
正宗をわらづとにして江戸へ出し
つき山の梅をおとしたむづかしさ

生酔のうたひやたらにおッつける
花の山むかしはごらのすみかなり
隣からとなりへ笑ふやうじみせ
雨やどりはるか向ふはせみの聲
ほころびをぬふ内たいこ土俵入
かんどうの四五軒先で妻をさり
ふだん帯しめながら出てたんと喰や
十兵衛日なたへたつた三日出る
百八のうち五六十よめのこと
下女が兄ぐらつくやうにかしこまり
今夜のもからッさわぎとやりていひ
ごくるゐを二日くはぬとたいこのみ
あつい茶をのんでて御用しかられる
腹あしくこうけいを出る淺黄うら
こしをもむうち秋のゝを馬は喰ひ
官女のときも飛鳥をおとすなり
切れぶみの奥へ飯もりさまを書き
なせしたを出したと禿こそぐられ
けんどんは代物の塲を箱といひ
母をあやなすこと神のごとくなり

越前屋元ひめのりもうつたやつ
いし〳〵をたべて明石へ書きかへり
名人のまり扨足に入つたもの
ごうさとつたかせん僧もためるなり
道にそむけた母おやの跡を追ひ
松の木をへ先へ出しておごらせる
あなごつて嫁の出て見るかゞみとぎ
小兒いしやさじをとられて手をかさね
ぬめのゑりかけていやあと下女いはれ
豆いりの名人店を度々おはれ
女郎でも買ひなとむこをばかにする
月あきらかにしてほしは隱れたり
せつしやうはせぬと四つ手とはなす也
かゝさんにねだつてきなとのぞきいひ
木綿ものつかむとごせのいとま乞
雨だめといつたと聞いて乳をくれず
二代目ものろまで金の番をする
さぼてんを買つて女房にしかられる
江戸ッ子にしてはと綱はほめられる
女房をしばつて奈良茶喰つて居る

かんごうのゆりた祝に又こける
東西へみごろをわける上田じま
いろはでは元日からも來なといふ
生酔ひも松のうちのは人がよし
ちかくの他人だと大事をでからかし
本鄕をどッこ迄もと傘しよはせ
高金を出して尾の出る身うけ也
むらさきのうん氣座頭のやねに立ち
定ごうで死んだも嫁になすりつけ
神樂堂なで切りにするやうに舞ひ
ぶきやうに持つまな箸がちそう也
けいせいの蛭にくはれるにぎやかさ
あの鼻で足駄はわるいおもひつき
かし本屋げだいばかりのがくしや也
萬歳は小聲のときにおちをとり
ごゑつぐんだんを淸少納言よみ
どこにあるやらわつちらがもちといひ
れんくわんの中を花火の通ひ船
百旦那へはすりこ木をまはすなり
道の子を生酔ひあいし〳〵行き

品川でこんやのむす子どらをうち
乳もらひに行きまはつてと大三十日
色男どうだとしなのなぶられる
あいおとつさまとかい巻ぐるみ出し
六郷で打つはとかける二三人
ねがひすじにも三味せんをひく女
常の日はわたし守さへありやなし
ほんごくも生國もあるたかい山
あいきやうの無いふり袖は内で留
中にも此の松一歩にたかいもの
いけざるとにらぞうすいのしたく也
木のそばにきみのましますヽ雨舎り
日本かときいて上總でわらはれる
さまをつきぬいて船頭のびをする
鵜が呑みこんでおどり子ひきはじめ
三會目母は一歩で行けといふ
泣出すを聞いてしなのはいとま乞
六文はついで一文ぶつヽける
くゞり戸が明いたと御用湯へしらせ
大坂屋ねごとを書いてやねへ出し

じやうぎらで居て店だてを度々くらひ
おんねんがこわいと富をとらぬ同士
よい男むかしの女中むして喰ひ
みの笠にぶきようなのがかゞみとぎ
熊坂はしさつて拂ふまではよし
くじら汁わんをかさねてしかられる
前髮のちらかつて居るごやのかヽ
いつそ屁をひるとみの輪へかへす也
ごやのかヽあねご〳〵とたてられる
御勝利はあしのかれ葉をかるごとし
もみぢがり車はわきへおしやられ
花よめは和こうの中で茶づけなり
能い月夜かぐらをふいて二度通り
ぶ男のふられたはなし實のこと
どこへ〳〵とおして出る松洞寺
わる口がいやさにむす子だいて出ず
せんべいを頭へ上げてめつけさせ
あたごからあそこだなあと本能寺
かん病にだいり迄出すやかましさ
ほえついた犬へ百兩ぶつヽける

二代目はつき屋に門（かど）をたゝかれる
越手代せいしに夜具をねだられる
川留とおぬけなんしと女郎いふ
かんざしはかゆい所へすぐにさし
せみ折を宮六度まで明けてみる
扱よくしやべるやろうだと源三位
舞の内辨けいは出て船の世話
かべに耳なくつて四巻世に殘り
それみたかと引けたとしらふ腹を立ち
くわん金がゐんぎとなつて御立身
女房をなぜこはがると土手でいひ
いはうかと下女をいたぶる樽ひろひ
きざ／＼の有るゐりで持つくすり箱
かまはずとござれといつてゐぐる也
大せつにこげと竹澤ちよ／＼らいひ
かねやすはお七を見るとたゝきたて
色じやうのぬけた事いふごやのかゝ
鴛わきのおしこんで行くはやり醫者
ひんの能いばゝァ扇子の芝でなき
藥とりとう／＼始皇まちぼうけ

よし町はこしなどかけて針仕事
するが町寶永山を芝へ出し
吹たとてかへすものかとせげんいひ
にはか雨まざ／＼伯父のまへをかけ
くつわ虫ぐらゐ新ぞうかんまぜず
いかい事つかめばぬけぬくわしの壺
こび付いて居るで女房にはやくあき
平六で聞けと船からよびに遣り
下向した御用布子に人たかり
せがき船だれかつかつてしかられる
色文をおとしてめしもくはぬ下女
日ざんりをすへやれ人の目はまなこ
川留にこりけふも山けふも山
たから船並木の中をよんで行
つッつけて能く見ればごせねぶる也
札を見に九條通りをごうろごろ
七つからおこされやすとだきあるき
しやうかんとやぶ醫見たてる狐つき
女房の留守内中（ちう）がわんだらけ
ざんそうをなぜきいたよと鬼がせめ

前錢の客だと根津で大事がり
せんとうで一人角力の氣の毒さ
きよひゅは添ひおふせると釜はらい
一ト七日持佛くひものだらけなり
言葉たゝかひ事おはり火吹竹
木に餅のなつたうそではもうくはず
しりかしらべへみがいてと村しうと
一ト所はをじめのやうなふもんぼん
五百萬石は白石ぬう手なり
しげ忠が無いとあざはね打つ所
いつにない御きげんと手をもぎ放し
松かざり大屋根こぎにして廻り
聖人の代にも二タ人はひだるがり
二千里も行く勢ヒの四つ手かご
殿さまは惣むらさきでおすこたん
かまくらの汐干うろこのしまひ也
かげ膳を人さへくればはなす也
繪に書いた餅を師直くひたがり
四つ過の四つ手ぬけ荷を待つて居る
松洞寺むこいへどうもいへどうも

びりッ子も行るにおゐるす居たはむれる
はやり風ぐらゐ花よめつくりたて
女郎衆はさぞと大汗かいてぬひ
のみこんで居て水がねの能をきゝ
てゝおやが抱いて玄關にむごいこと
雪隱に有る名のむすめすごいもの
せんべい屋安いくつわの音をさせ
いよつんとしましたといふかねの禮
ろくに血のおさまらぬのにひきに出る
みな汗に出ますとつきやのんで居る
呉服屋は奥へ行くほどとしまなり

風俳 柳多留十一篇終

俳風 柳多留十二篇

〽初瀬 市谷田町　〽初音 麹町　〽風雪 丸山
〽柳水 麻布永坂　〽諫鼓 大傳馬　〽羽衣 神田
〽鶴龜 小石川白山　〽登 千住　〽橋 橋町
〽櫻木 上野山下　〽いろは 下谷　〽朝日 薬研堀
〽深雪 牛込　〽居ます 今戸　〽大津繪 柳原
〽若菜 新堀　〽養老 小日向　〽玉川 三田
〽杜若 神田　〽兜 八丁堀
〽清瀧 四谷　〽舞鶴 小石川
〽眞砂 青山　〽水仙 二本榎
〽高根 櫻田

一生に一度おとこへなめてさし
らく日にくれなゐの出る仲の町
つみ草もざるをもつたは近所なり
落武者の一トつぶゑりは七騎落

松がとれるとさむらひが百さがり
菰かぶりとゝでまんまもくつたやつ
口中に茶ぶくろの有る神樂獅子
一枚はえやしたと小はらひつたくり
檢校とびんぼうゆすりしてはなし
はしたがり泣書置のばかりちぎ
ゆびさして座頭におしへ笑はれる
座頭の坊またのありたけまたぐ也
よし町へ俗の行くのが末世なり
せき臺へなすびをうゑる安ゐんきよ
香のもの程にさしみを女房きり
身上はたて直つたがけちなよめ
手拭をふんどしにしてつゐをとり
みゝだらひ紙たくさんが嫁のなり
しやうとうじ三ッの足まで聟はふみ
かたにぼう左官がおくとせわしない
太神宮さまへとかぐら一人來る
おれを大名にしたらとすけんいひ
さてひろい野だと仕丁らさがす也
百出すと伶人いつか手をかける

そばへ寄るまいぞと耳のあかをとり
いゝ月夜やつたらしッたものにあひ
おいこむと後生をねがふよしの丸
十三日手もつけられぬはらで出る
山ざるのかむり女帝のおものずき
供部屋の音を禿はふしぎがり
車引たわらの中へむぐるやう
けんくわかと思へば車おして來る
何もかも内ぶところへごせ入れる
役者附中よりうへは何ンぞもち
女中よみてい主ひに見てかつぎ出し
五日めと十日め須磨で御てうあい
二十けんこしの廻りがなじみなり
わんぼうで脊中かくなとせげんいひ
おしよくさんなぞと踊子なめ過る
松の内下女ぬつたとはぬつたとは
より高を見せたが和尚うんのつき
すま左内どのに逢はうと座頭來る
むきみ小屋四五人かくすらんがしさ
つッぷすと新造音も沙汰もなし

一年とこはさかけ合ふ大三十日
花を見すてゝはたご屋へさわぎこみ
こし元のゑりをつゝこむつめたい手
角兵衛といふ人しゝをまひはじめ
とつさんのなまゑひやいと母へにげ
松の木は今もくまでのぼゝァ出る
尊氏はとほうづもなくにげて行き
はづかしさ毛うけで顔をかくす也
けうなばん御免なんしがやたら來る
でんがくでのむ内さんだちゑが出る
御子孫の甲斐もないのは原田なり
おめかけの一門あまたうかみ出で
納豆もたゝきあきると春が出る
月までに文の來ること十五たび
ゑびす講ふじのぶらつく程酔はせ
かん病に女ッきれも見せぬなり
江戸ものが九條通りの道をあけ
はつ鰹つらをしかめてよんで來る
まくゞしの先へのびるとくゝしつけ
北國のかたうでになるしようとうじ

むごい事もめんもやうで土手を行き
深川はさつさとおしてかへるとこ
一ッたいは地ものぎらひのみだも有り
旅四つ手おもかぢといふ音で出る
乳母がちゑてうしへさゆを入れて出る
ほえただけ五兩さがるとぜげんいひ
たるひろひやうじをつかひしかられる
まんぢうをときんにあてる子ぼんのう
りんじうを嫁こはがつてしかられる
子がござりやすはなといふ神馬引
ぞんざいにせけんをおこすつき米や
品川の女郎とんびのわけをきゝ
かんどうをよぶでとむらひ三日のび
孔明がうつむいて居るむづかしさ
待ちびとおそし品川であそぶなり
三度づつまきを引出すふたしなみ
女房の番をして居る大あばた
女べや夜半には君がひとりゆき
大あせをかいて割てるさるすべり
思案するやうに重荷をしよつて行く

あげづめのうち川ごめに島田あひ
おくせつで一夜べつじとぎうはいひ
向ふがは無いでうなぎがうれる也
くわんおんの茶屋の給仕はびく／＼に
はなやかなめんぷくを着る輕井澤
じゆくすゐの玄關(げんくわん)にたえぬはやり醫者
地がみうり鏡とぎをばくぼくみる
木綿うり京だんをいふいらぬ事
一踊り仕廻ふとかたきやくいじめ
毛のじよ／＼は嫌さくれ人の前でいひ
めんつうといへば牛かたいきどほり
おやぶんとつれ立つて行く初の山
舟子どもやいとよろける柳ばし
小人(せうじん)かんきよしてやたらふせたがり
かづさ戸をひッしやり立てゝ五十とり
おも入れをわらつてぞうに二ぜん出し
いかなればむすめとむこを別にねせ
それも癪のせいとげぢ／＼を捨てる
うつくしいはず大こくはふくろ持
かんばんに珠數をして出る憎らしさ

たゝかれるたいこ巾着しめるまね
さかづきをまん中へよめさしてにげ
命也けりくわい氣してはたちなり
無いはずはないと跡から藏へ行き
べちやあねへ尨犬だよとせげんいひ
花の朝いやアと下女もほめられる
番頭も外ではおもしろいおとこ
向ふが榊原かへとたてこめる
百ものがたり程入れて顔をみせ
おふくろもおふくろかぎを釘へかけ
先へいつたやら廿けん中に居ず
もゝ引とづきんを取ると女郎なり
かひぐひが過ぎるからだと下女が母
通りものまさかの爲にぶつかさね
けんどんやごこの盃だかといひ
世が世なればと踊子を母しかり
それさもみぢのある寺と母わすれ
鑓がせつかん針が出てとりさへる
暑氣見舞枕とうちは持つて逃げ
はな紙をかざすを上げてもらはれる

女房の御きげんを見てしちの事
ちと本の事もいやれと母はいひ
ひまな事せみのぬけるに二三人
かりた子をりきんだ顔にしてかへし
天命は座頭に二タ人おさへられ
ふんどしをぜひなくしめる暑い事
そこら中見合せひらのふたをとり
にうり見世なんの爲だか雪の下
また妻が久しいものと母いはれ
よくうれるうしろに手代一人立ち
つのッ口して枝がきのたねを出し
東北へだはゝのまじる風呂の内
座頭さん又島かへとわたしもり
からつゝらせなアにしよはせ引はづし
むだ口へ子の小便をふりむける
ばくろ町二かいへずつと文づかひ
あすの日も無いやうにひくさる廻し
大づめに妖怪の出るくわいらいし
湯くわん場のきわなはみんな竹に成り
目の肥えた四つ手のよばるもめんもの

屁をばかきましたかとよめはきゝ
叱られるそばでたゝみをたいこのみ
暑い事よめあごばかりあふぐなり
うろたへてかけ込む女はき出され
出合茶屋庭に池水をたゝへつゝ
ぬけ參りさくま町から跡につき
ねぎをはさんで花嫁をおつかける
くすり箱素人の持つはきう病氣
名殘惜しげに蒸籠へふたをする
島田より金谷の方へうけ出され
むごい事うきが友には猫ばかり
時鳥下女居ねむつたのがしれる
油見世折ふし居てははやらせる
夕べのはくせつ今朝のは喧嘩なり
白むくでしほれた草をみてあるき
なんのくも無く上下で武士あるき
はつがつを客も臺所のぞくなり
あごばかりのきに殘ると人はちり
國の色せなアの分に成つて來る
三たて目に遣手へゝ〳〵〳〵と出る

醫書にもれた事紅葉がしやくのたね
わらはせに白髮の禿つゝき出し
來たばんに笑つた嫁をさつてやり
踊子はころぶとはくを付けてやり
ふさつのおんをかうむつて五兩出し
寐たふりをして居りや禿何か喰ひ
ばんどうがかんのうしてと馬子はいり
蜆を二升みんなにてもてあまし
身仕舞をけころでんざへ向つてする
表紙をはねると松ばや半ざえもん
振舞で行くのはちよきにかしこまり
身上のかたむくまでの月を見る
惣じまひする事四つ手かたでしり
下總につないだ馬のやかましさ
すゞんでる足もとでちう〳〵といひ
たてかけた長持へ來てせみがなき
みともないはず借金のかたによび
八宗けんがくいろはの品川の
ぎうに手をひかれてびつこ舟にのり
ぬりたつた孫の手をひくみともなさ

雨やどり日和の方へかけて來る
深川らしいがうづらへ二タ人來る
引きぞわづらつて引け四つ迄あるき
遊びでは無いと四つ手の直をねぎり
椎の木の根へおつかけて弓をはり
しばられて居て助言するふといやつ
水鳥はにげてひよ鳥さいごなり
師匠さま机はおもきとがめなり
かみなりも天狗もまじる百人一首
上下で大きな金を切りに來る
かけるかご見て牛かたも一つぶち
春のすへ錢へからしをつけて喰ひ
みそすりをやめて大坂がたへつき
姉はあねだけもうせんをねだる也
品川はなじむと盛つてくれる所（とこ）
出おるなどいへば跡から出やるなよ
呉の國をまゆをひそめてかたむける
女郎買ひ横合ひが出ておつぷせる
きヽ酒のきげん一ト切あそぶなり
はじめてのいけん夜食をこしらへる

仲條へむすこけい母をつれて來る
ふじの歌山のほとりの人がよみ
ほとヽぎすもふな／＼でうむしたく
わるいちりめんさとお針ぬつてゐる
鼻にしわよせて犬ぼういきどほり
一トさかりたいこのことばきなりとす
目あきだといヽぶちものと玄關番
錢車相場きかれておせをふき
わりひざに成ると亭主は立歸り
明らかな智恵でもたつた三日也
背人にやつたは常世うそらしい
さゞゐから海へぶちこむさつた坂
いッそこはがるに座頭の子ぼんのう
ふたゐこんじやうのがきだと後の母
朝がへりとなりできくの面白さ
月花の定座五町の徳場なり
若旦那さまと書いたを下女おとし
七夕は土手からみえるもん日なり
どういふ料簡だにむす子こまる也
いたいことと月てふ山にたのまれる

かゞみにて見ればきつねの天下一
親分は手をあをのけてわりをいひ
三味せん屋置手ぬぐひでひいてゐる
同行でございとふるへながら來る
上下と衣のはなすふはんじやう
もふゑんじゆしつかいさめがはしに書き
西行もやろうゐたまで一首よみ
寺をしてもらつてあけち又とられ
下女がいろ大念佛で二度通り
むゑんほうかいで引ぱぐまくらがや
うつとしいかぶろつッつとそだつ也
一箱もくすねて置いて戸をたてる
みつもの屋下女におつぱだぬげといひ
雪の朝角田川からいひたてる
椎のみでさか之茶の本でをはる也
あごを剃る内見る文を引つたくり
ふられ客うねめの宮で夜をあかし
目をふいて杉本左兵衛めしにつき
扨はおれゆゑけがすかと亭主いひ
棧敷から首のありたけ下女のばし

仲國はなか〳〵やぼでないをとこ
源三位毎夜そくらをかひに來る
人なればとうに出て行くさの丶馬
神風にこりてあきない船ばかり
すいかんでころんだ上へ鞠は落ち
細見で見てはべちやくちやしやべる也
田町からもういひわけの無いところ
藥箱もたぬばかりにさまをかへ
駕かきは歸るに牛はひとつ所(どこ)
かけとりへくひつみを出す中直り
あはとかづさをかけぬけるたいくつさ
こんたんの來た夜初會はみぢん也
松の内笑ふかごへは乳母來る
娘のくれた矢で御のう直したり
生男が袖へすがるでげびるなり
金といふものはと嫁をむごくする
死んでしらせたのが公事のおこり也
きやうげんを見ずにはかまではむく也
たびのひぼむすべばみかんころげ落ち
きつとした買人のふりですけん也

やうだいをいひ／＼女房いつ付ける
かま倉のたねのはびこるさつまいも
せい出してためてもいせやおいのもの
きり／＼とつくねやれなど御しんぞう
大おんなやつに張良うたはせる
せつかんにまあ／＼／＼とふたになり
ばん頭のまつごに子あることをいひ
平六が所づぼうとうよくうれる
お飯よりまんまの膳を先へ出し
門松をとると生酔目だつなり
かたい寺見立てヽ式部かりる也
住持様ばかり男をもつて見ず
とりかへた子を景清は度々みかけ
去つた跡綿入れものヽ仕立かけ
歌で昇進まつたくのひろひもの
そらッ茶をのみ／＼見たりみられたり
むねに靑すぢで水ッ子だいて居る
ぼうずいの小袖を九月こしらへる
關札にさびしく僧の歸宅なり
是からは鬼に成りなと後家にいひ

是もふんごしだこかつぎ並て通り
けいせいははねられるだけはねる也
三界むあんのはずたに二タ世帯
かへりは御一所とむす子こまらせる
大やからてつぽう玉が十五來る
初手いやく寺で仕廻つて歸る也
さつた／＼といふけれどにげた也
ぼんぞくに寺をうられる秋の末
下總はおかべむさしはあんもなり
ひく事をもッぱらとする後家の色
藪いしやへ自身に藥とりが來る
髮置のくしさせばおちさせばおち
くの世界女郎かひにも月や華
おふくろにかくすがげいこ本の事
ねころんでろんご見て居る暑い事
やねを上げゑんをおろすと楊枝みせ
高をくヽつて石河岸の明けはなし
形は男だがなく聲は女郎なり
茶やかりにいの字ろの字は入る也
渡しばでいちばるむすめ人だかり

きつねつきおちると元の無筆也
眞先はこゝ迄來てといふところ
內のふとんが二三十出來るなり
そうめんをくばるを見れば御用也
すばしりをそへて金屏風をかへし
黑猫のわんもやッぱり片おもひ
ばいしよくでなくて三みせん枕也
にうり見世みの無いがんや鴨がとび
今いふは口づうへだとふとんかけ
ものもちのわるさ今度で三人目
妾の不首尾きんくわ一チ日のえい
生醉の女房あたりでほめられる
ゐいぐわの內に粟もちがかたくなり
かしましい跡から花を一からげ
すけんでも門から內は氣がかはり
ひろはれたそうだと手燭外でけし
蓮の茶屋今朝から半座明けて待ち
ひやめしはあるかと下戸の初鰹
雨やどり四五町行くと水をうち
化粧しながら島がくれ行くをいひ

てんがいを笛でつゝぱるほとゝぎす
淺ぎうら手をこまぬいて待つて居る
やるせなく盃をつん出す子の給仕
みそをする爲すりこ木をむこはかい
あの寺にあるをしつてる小間物屋
おどり子は事ともせずに又おろし
しのびごまそつとのぞいてみれば嫁
お舟はぎつちりこと下女わらはれる
かけとりがかへると家をほめに來る
品川で遣ふは本の入れぶつじ
白かべのそばでてうちやく御用され
とそ酒だまゐれと長田むこにしひ
さァやろう來いとおやぶん水子抱き
馬喰町死んだ役者の繪などかひ
しやうぎをば二番まけては金をかり
まな板を帶ひろどけでたゝく也
あたい千金の夜なべはむらさきや
文せんを妾そばからひつたくり
酒だるへ四角に穴を下戸は明け
みの市はあんまり人のしらぬもの

れいふくの生酔も來るまつの內
大一座內をあんじてしかられる
幻術をつかつて手代ぬけて出る
荒神のおまへをみれば下女ねむり
取次の四五文おこす氣のどくさ
よの舟でみればやつぱりたゞの松
こはいもの見たし生酔嫁のぞき
女さかしくてもみぢもうれぬなり
のびをするそばを通るとかまへる
二十けん茶代をやると不人そう
みりん酒を入れてびいどろすゝぐ也
十もんめ八もん本所でうりはじめ
かくれるをにこり／＼とおくり膳
雨やどりごおんとついて叱られる
三両のゐいゆふだちのまんまなり
三まいはやにむにかたをひつたくり
神棚を毎あさ拜むとほりもの
御知行は末社ほどある神の末
土こねのやうな女郎をくゝしあげ
つりがねのはなし芝から京へとび

何(なん)といゝものかと金を子にみせる
入王になつてへんじを書きかゝり
手に當るものできむすめぶつて逃げ
野がけ道あたまへ扇くゝし付け
三分一土手を殘してねだるなり
二三町出てから夫婦づれになり
若い手をかりてむすめの灸をする
琵琶はふくろにをさまつて金をかし
そこに置きなんせは憎いもらひやう
母のるすはなしがわれるやうに出來
口へゆびさしてめかけのうわさなり
きせるをば土藏の這入口に置き
順風に板の帆が來ていやがらせ
花を見すてるとうたひてむこ歸り
伯母さん／＼をじやまがる宿下り
道ばたにすわつて母をねだるなり
大津繪の生きてはたらく輕井澤
生けもりをもちかへすのはそゝう也
げびた意趣さしみをくへといはぬ也
針箱をさがすと女房さんで出る

まつすぐな柳みて居るあつい事
朝がほは朝寐のものにしかみづら
花やちるらんで女中をこはがらせ
あごへひつぱさんで亭主たゝむなり
一打を剃刀でけす惜しいこと
是命とりめと下女はなぐさまれ
へめぐつてこずやとさそふ淺黃裏
ぬす人が這入りやすよと火をもらひ
西瓜うり冬瓜をうつて寄りつかず
引合はす嫁何とやらいひはいひ
いなびかり男ばッかり涼むなり
內の子の乳をはなさぬ氣のどくさ
母よそのむすこをほめてつゝこまれ
釘ぬきとまんぢうつんでこぎ出し
ふてイやつ手ぶりで人をすゝめこみ
品のわるさは四つ手からころも出る
白むくを田町でぬふとざん暑也
妹はゆもじ一つで直が出來る
琴のごみ面白がつてはたくなり
にくしみのつよさ子供を置いて逃げ

つり合ひをよくあるくのは三步也
かぎといふかぎをさらつて女房出る
ねはんにももれたで手代ざらをうち
そらッこと置きなと女房やりこめる
わらはゞわらへ長持が十五さほ
不承知さこゝでもきこえやすといひ
舟宿のこし張り見ればむしん文
山もりに盛つたすゞきを二はいくひ
はか所から虛無僧の出るすばらしさ
九月蚊帳女房いかりを書いてつけ
ゆびぬぎをいしやが歸るとさがす也
國家老ぺんぺこぺんを先づおさへ
母がつかないと貰ひ人だらけ也
ぬかだつて方丈さまは御宿かゑ
しやのかやは三人とねるものでなし
むごい事二タ人は死んで一人にげ
あの伯母御二度死んだにと藏でいひ
座定つて若いもの呑みはじめ
七月が小でをはりのいそがしさ
目があるとゑゝ女だとしれた事

出來るとむじう小袖をばもらふはず
ずんごうのすゝきやんと范蠡はよび
あたらしいふんどしをして外科へ行き
たんざくは重忠しごくふごうしん
かご松のなぐれ今戸で鬼をやき
生酔をあつかはせてはとしまゝ也
考へて見て此さきで聞かッしやい
そろ〱と後家を邪法へすゝめ込み
藥師寺が來ぬと寐道具すでの事
ぐし〱となくので項羽はなれかね
乳もらひのから身で來るは目を押へ
おもてむきから茶屋の來る左まへ
いさこにもしろようくると旅の留守
あざわらひながら出て代脈に逢ひ
うへ木どのやぶるまいぞとかやば町
出來た下女井筒いまへとなぶられる
平皿をやつとあくる日思ひ出し
大たぶさなのはむすこのおむく也
うすべりのまどから見れば衣なり
大ぐらひ也と木曾をばざんをする

ふみ使そら小べんを度々たれる
ぬかばぬけ跡で竹とはいはさぬぞ
子おろしの向ふうらだとげい子いひ
さねもりはほれ着を一つねだる也
切おとし札をみせるは引けのやう
貴僧さまなどと品川はつのふみ
よくに目がくれてぼた餅喰つて居る
二百年ほどふいんだとたけの內
大門へこのしろの入るにぎやかさ
百旦那あらとほどなをあつらへる
三味線をつめでひいてゝさがさせる
ゑんの下のぞいて廻る樽ひろひ
せつなさに年とり炭をなげ出し
この村の名醫で箱をかつがせる
蓮池院つれて助兵衞茶やへ來る
小一兩わしにとられる大不首尾
ねるのにも二タ通りある大三十日
松の內しるもしらぬものぞくなり
萬歳は舞ひをさめると不人相
わらやるな若とのさまの伯父御だよ

とうろうの内はしらうとうりもする
着つゝなれにし大もんではやす也
座敷らう母も手錠がものは有り
夕だちにあふと女はすたるなり
つくし迄どう行かりやうと内侍とめ
ひだを直しながら鯛の先へたち
しやくせんのよけい中宿二日置き
老込んだかげまやつぴしあごをなで
ぬかと書いたかと木曾どのえつき也
あぢなつりばりで尊をむこにとり
三つぶとんよッ程天へちかくなり
ほえる犬手桶をかぶり追廻し
さア爰だつらをぬぐへとせげんいひ
けいせいを買ふと男が生きて來る
身祝に望まれて主馬一かなで
一つ宛蛙を仕廻ふ水の音
せつく前箱でとりこむ女の子
夕べあれからいつてのと髪結床
辨慶がわるさで時がしれぬなり
皆人を笑ひなくすと臣下いひ

はなれ馬門松一本引つこぬき
本能寺じやうは横手をはたとうち
杉部屋にかくれると手におへぬ也
御したくはよしかとどらの師匠來る
なま酔を家内中出て落手する
二十けん一たびゐめば百とれる
なにばかだどれとつ樣はだをぬぎ
ごふく店なでに成るほどとゞこほり
いそがしい中で薄田どらをうち
ばあさまのやうに山ぶし年がより
ひやめしの方からしなの片づける
長兵衞どん毎夜おせわと早太いひ
むすめの生酔ふんごし目立つ也
禮者かとのぞけばおぞう一人來る
けふこそは本の紅葉と母へいひ
もん／＼のしやうじのまへを娘かけ
さんせんは父植木のは母がやり
大さわぎ鬼ふり袖が二三人
かくすのが憎さ道にて封を切り
ぬけ參り片道虎のゐせいなり

反物のそばでおはりはにへきりな
夜ばなしがこうじて札を立てに行き
始皇帝口がいやさに生きうづめ
土弓場へけふもたいこを打ちに行き
大あばた小兒醫者とはふりやうけん
ねこにまたがつて妾のおやあるき
足がるの仁王にかはる花の山
親のそろばんをむす子は破さんする
初がつをはしをはなせとしかられる
土用干下女あれがゑゝ是がゑゝ
乳もらひは道具もとめてあるといふ
雪隱で味方まけるを石田きゝ
仲條のろじに手代のものあんじ
ひごいかり泣いて居た子がだまる也
塵を入れやれと亭主がさいはじけ
おめかけの友だち今にはした也
夕立のむかひはだかで傘をさし
生醉をしよつて女中をまつ二つ
鳥にだもしかず納豆汁ができ
九州にはびこる鳥を鎌で切り

ぬす人を大根からい目にあはせ
たから船日本からも一人のり
美しい顏でれいしをやたらくひ
なんぞ名の有るべきものをからす瓜
油うり是になさいとかいで出し
自在かぎいじつて野がけもてあまし
人といふものはとこもへ指をさし
ぬかぶくろよッぽど顏をながくする
四五年も花よめで居るぶせいもの
すぼまつておびを出しなとおがむ也
めしを喰ひ過ぎてからかさ一本なり
月しよくに向つて下女はぬり立てる
入水しようよりは傘張る方がよし
死ぬものが損とは後家へあてこすり
びよう打を掘ゑて前後へはつとのき
初の字が五百かつをが五百なり
わけをいふ程ついて來る四つ手駕
口をかき入れにたいこは一歩かり
あの男このをとこさて古るくなり
くさめするのがお妾の持病なり

後の月又候かやう〳〵なり
俄雨四つ手に乘つておだてられ
けふ切りの屋根や柳をといて行き
がさつなはあふひのうへのとねり也
紫の仲間いまだにたゞのつえ
横に見てたてかけて置くかゞみとぎ
聟に行く相談むこがちや〳〵をつけ
うぶやからすぐにかぢやの手に渡り
いゝ潰れやうさとごぜを手なづける
かけとりのいひわけ川瀨喜內する
なまなかに片目見えると無藝なり
齋日に御用大しやにおこなはれ
高繩ではしよりをおろすけちな客
兄弟の中へ寐るから中納言
せん湯へ羽書で行くはひんがよし
さん留をへし折つて下女すわる也
知切つて居るとあこやを主馬なぶり
座敷らう身につかないと根津へ行き
かけ乞はゑんまを二日前に見る
姉さまやたんとあがれと夜そばいひ

五位の裝束で居るのを隱居揚げ
いさぎよく療治を賴む向ふ疵
羽二重はひとりで着切るものでなし
朝がへりあしたに道を聞いて居る
遠藤は龜戶近藤つく田なり
此國で左衞門とつくふといやつ
ぞろ引いて出たで時宗とつかまり
ぼうつきは水打つてくるひらく也
松が岡江戶の內から開いて行き
目の上へ兩手をあてゝ嫁逃げる
するが町中ごふくものとりちらし
きのふまではなをつまんだ耻しさ
首尾の松あれば不首尾の柳あり
ひきがたり中やすみして蚊をいぶし
切餅のやうなで四つ手汗をふき
もんもうなやつをばうめぬ始皇帝
文づかひそらッとぼけが上手なり
かべにたてかけて有るのを隱居あげ
ごろぼう〳〵といだてんおつかける
百とるに上下を着てはひまはり

刑部かなはぬにいらざる關が原
地ごくにて知る人にあふ延喜帝
供が內みるがやぶ入くろふなり
他人の中を見て來たはけんとうし
おくさまをほめて御人のあきがなし
楠はつくりの方のひいきする
安うぶぎさぎとすつぽん雛遊び
伯父がわせたであきらかな紅葉也
吉廣を月夜に買ふは急なこと
いち時に立つてちよき舟しかられる
聟をおはへて白髭で一分かり
けんぎやうもたゞつき合へば殊勝也
つよい氣で着るとちりめん安く成り
くせのある酒で花見をはぶかれる
たいこがさし口でかぶろとりに來る
ちんぴぶくりやう見かぎつて彌十郎
くどかれて前歯できせるかんで居る
なみ杖を四五本やつてはたらせる
若衆こんじやうが出たがる江戸家老
ごふくやのつき當り迄五つとまり

ちよくとうにあたまの飾一本へり
女房があれば行かぬとけちなやつ
こんりやうの御衣洗濯に二分かゝり
鳥のはねすでに狐が喰ぶところ
御手切れとみえて御道具二日行き
わさびおろしも孝行の道具なり
わッちがやうなものと面白くなり
いつ所帯買つて來たよと初の午
らく中にききやうの花が三日咲き
ほぐさへ有るとよんでみる邪推也
言葉たゞかひことをはり花でぶち
袖の下やらぬとばゝァ長座する
江戸へかと格子をあらひながら聞き
田の中でともへ／＼と三聲する
花を見てそしてとおやぢむづかしさ
生きてゐやすりや廿五と七回忌
馬になる役者はをとこ二疋なり
まちん下さいと鼻ッたらし來る
女客てい主こびつきしかられる
六文で布子着て行くふてイやつ

乳母の子にして尾を出さぬきつい事
いましめて置かぬとさくらみき斗り
松風の半月（はんげつ）吹いて人だかり
産所から二タ足三足じやすい也
たのもしく見せて娘をうれといふ
むなぐらの外に女房は手を知らず
見世先にてい主ぶらつく三丁目
座敷ろうばん頭なきにしもあらず
乳が出て夏のかせぎの邪魔に成り
もち花とかきが四つ手に生（なつ）たやう
一ふくろ證文持つて後家あるき
白むくを五六の中でくけて居る
ねかさないばんあんのじやう月の事
やう／＼と袖口を出る嫁のみやく
ほうそうにして湯をかけた妾なり
花の留守やつぴし雛へ手をのばし
圍ひ人のむだ足をする井戸ぶしん
はづかしさいしやへ鰹の直が知れる
ゑりをぬき出して息子はとこを出る
神鳴りは通すが仁王にらめつけ

くひかけをたもとへ入れて鑓をもち
ほねッきりかせげとおぢは二貫かし
六文の錢が切れるとまけに成り
から箸を三口ほど喰ふざせん豆
ゐのしゝやむじなのわきで工藤死に
安房と上總を杉戸にて仕切る也
くるま引娘を一人ほめなくし
七月は小だと遣手氣を付ける
すりばちへ茶をぶんまける新世帯
數をよくなぶられて來るかねの禮
叉けんくわしに來たといふ中のよさ
二三里も手前からつく犬をとこ
御くたびれ扨お內義はひよんな事
ごうはらなものは坊主の野がけ也
金屏風きゝもせないにおいらがの
蛇の舌をてうせんなどてぬかれたり
百噺すうちばけものは待つてゐる
雨（あ）おちをほり／＼噺す下女が宿
今死ぬと花をふらせる妾がおや
月ひとつうぶすなさまにけのがされ

子にやるまりをついてみる若い母
ほれたやつ飯時分には歸るなり
かつがれた圍ひの跡におぶつ坊
六月の質屋ながれん武者を干し
出ろうをするときせると髪の事
あんにしろ鎌をはなせと庄屋わけ
小ざむらひ並んでたれて叱られる

酉二月十五日開吉例花角力句合　催主　星運堂
補助　薩秀堂

中將の道くさに折るかきつばた　諫皷連　如雀
そッちらの羽織が女房すめぬなり　初瀬連　歌遊
ひや麥を紗綾や綸子の下で喰ひ　柳水連　石斧
ほうぺたへ穴を明けては嫁わらひ　櫻木連　井筒
隣からほしいはわけのある義也　柳水連　玉簾
氣の知れたこと盃をとんでさし　櫻木連　和友
喰ひものをはさむとやりて不人相　初世連　秋紅
雪に四つ手をおよがせていそぐ也　若菜連　敵吐
羅生門綱おれが行くべいといひ　鶴龜連　千路
落ちて來たので腰帶はほうられる　柳水連　玉簾

江戸の土ふまずに戻るおし送り　鶴龜連　船布
十五日からはおぼこの聲かはり　高根連　勢幸
蛤を捨てゝいのちをひろふなり　櫻木連　一町
目一つが千兩につくとんだ事　柳水連　玉簾
茸狩りら內府は手前藝者なり　仝　雨潭
あら後家へ出這入をして毒づかれ　鶴龜連　其冠
神前で女中一むれ泣いて居る　仝　百千鳥
素人のなま醉ひ松の內ばかり　高根連　志光
大風の跡に伊兵衛と虎ばかり　鶴龜連　百千鳥
わづうかな戀をして來るやうじ店　朝日連　豐袖
作頭の無念引け四つものをかひ　初瀬連　秋紅
せつないに絹の襦袢でけいこさせ　兜連　古狸
在鄕醫者何ぞといふと騎馬で來る　登連　文器
身代が直ると嫁のうつとしさ　風雪連　古泉
猪に笹りんどうのゑふを立て　柳水連　扇印
ほれるか／＼と茶をくらつて居　鶴龜連　千路
誰ぞが首を切りなよとだつきいひ　仝
きり／＼くばれ師走だぞ／＼　杜若連　下時雨
ふきぬきで堀へこられた義理でなし　櫻木連　木綿
りやうし仲間へ入り候とごらが文　柳水連　石斧

かゝとで巾着を母は度々切られ
下女がさがるでかみ合がたえぬ也
氣に成つて負けると内義叩付け
下女が色兄さんよばりにくいこと
ゑゝ坪へぶちまけて行く夜そば賣
おかしさは夫婦喧嘩をちんがほえ

登連 文器
鶴龜連 千路
櫻木連 新紅
若菜連 遊子
杜若連 松翠
仝 松翠

俳風柳多留十二篇終

俳風柳多留十三篇 川柳評抜書

一ぷくをひつぱりにのむ女きやく
ちか〴〵と見えて大工やたゝみさし
四五人の大屋をしかるいゝくらし
傾城はならひもせずに書きくづし
後ぞひはこは〴〵一つぬひなほし
敷ぞめの夜具天井へもうちつと
琴箱へのびるを入れてしかられる
こん立ての外にころぶを二三人
口惜しい事いゝとりに飯をもり
針妙をおはりと言つて叱られる
かこはれは店賃でもの見世をはり
たま〳〵をとこと生れ禿なり
ぞくの氣が離れぬで後家目立つ也
買ひものはうら白根松女郎なり
めんぷくで來たが今度の地主也
時ならぬ藪入それでよめやした
一とほりのべて年禮なきはじめ

一だんかたる内まッぱだかにされ
棚經はあたまをたゝき〳〵よみ
うら口は出來そこないのけづりかけ
口書のかぶろ其節ねたになり
ひつたくるやうに四つ手は肩をかへ
雨やどりまんざらおぢの筋向ふ
年輩なほうへ花よめさしてにげ
長ばなし扇をひろげてはたゝみ
妹をつれて一日ばかな沙汰
御りゑんのわけ琴爪のきづが出來
御寐間からゑみをふくんで妾でる
ふみ箱をもち官軍の陣へ來る
萬歳はなく子の顏をつひに見ず
後生迄いひたてられる華の雨
惣花の返詞おや船まできこえ
なんとゑゝ角田川かと土手でいひ
夜るの道具とおもはれぬ石どうろ
しきみをばいゝ直に買つて袴着る
門番が能過ぎて敷居高くなり
惜しい事ゑめばはぐきの出るが疵

花火見るたび御妾は笑ふなり
大師河原へ行つた跡女房にげ
長州でだいりくづれをあきなはせ
黑白に二度よごれると春になり
高慢さこじりをさすり〳〵行き
娘もう筆をかくしてつかふ也
ゆふだちのもりかへをくふ長ッ尻
でばじやれるふりで袂へふみをいれ
黄びろうどなぞで張角つゝむなり
遠ッぱしよりをするやつは玉もなり
あわめしが出來ると元の旅人なり
母の留守ごじやうを買つてしらん顏
切もぐさ大いは大方うれこのり
本能寺寐耳へ土岐の聲がする
から車引いてむすめを追つかける
魚らん近所かと賴光聞き給ひ
女房の留守みそづけをつかみ出し
鍋いかけ子にきん玉を見つけられ
やたいばねよばりは一歩すてたやつ
節句まへやぶ醫十疋二十ぴき

今迄の事を湯にするやかましさ
つぼやざんまじなひますと手をつける
天とう正直あばたがうれのこり
後生へはけつを向けてる遣手ばゝ
けふも來て居ると向ふのかゝアやき
一大事花よめごうか屁が出そう
たばこやの女房は血ごめ程まける
施主が聞いてるにいこうの行くまいの
鬼王のどら御ぜんのと分に過ぎ
藪いしやのはいつた家にさつき立ち
おばさまをくどいたもある百人一首
わるい癖のむとはつかへ手をかける
御寺のは大根や神酒ですまぬ也
つくしぬきをれとはわるい叱りやう
若とのに道ををしへる大どしま
ちりめんをとり繩にするやりてばゝ
定家の門にうぐひすないて居る
白石でせんをしているまつの内
杜若いたまぬやうに公家は折り
御師のとも岩戸をひらくはさみ箱

毛せんを立てゝちやうだいふかく入
ぬひならひほめるとどつか持つて行き
小田原の魚をすそのへかつぎこみ
わづうかな毛をすつことす惜い事
かごかきがかへるでうしを一つぶち
釣道具おろして松の木へのぼり
天がい屋笑つた人につきあはず
身代がなほると嫁が目立つなり
男にもふり袖を着た御てうあい
こわめしとだんごをふかす賑やかさ
どうれいと黑ン坊の出る十三日
入り王に成るとさかなや助言する
しばらくは顔をたすける綿ぼうし
なんだなとかべ土はたき／＼よみ
仰山にばッかりげくわはおこされる
つき出しをお嬢さまだとたれかいひ
後家のおしきせもりそだてますといひ
北てきのために遊里にさらはれる
くねへひつゝいたをじゝうもぎはなし
鳥おいをよこにひかせて申いれ

日の出より日の入迄に下戸の禮
杉のうへからもすんでに出るところ
釣がねをもちやそびにする雨やどり
だいりでこまり入鹿を鎌で切り
大門へつけ人をしてこしをかけ
いくらともなくむこの出るこはい事
太平と書くと和尚につみはなし
いらぬ事口とりこしをぶつくじき
年よりはみな白ひげでまくつもり
もんさいがあつて若衆にだまされる
うつくしいはづ一雨が一歩ぬけ
上下で大屋とッくりさげて來る
たもとにすがりては顔を見せなんし
あたりを拂つてもふせんうれ殘り
かねの禮歸ると跡で是れだとよ
きてふだの歌書だのと取る袴だれ
もめんもようを遣手出しいやがらせ
やうきひはかんせんぬひの上着也
貴公さまとははづかしい屆けぶみ
かんしんはすでにはんとに出る所

はいとうに御用をしへてしかられる
さる廻しよし野を三度廻るなり
金入れにとび金もうるふきつ也
色をとこ引もくでする後家と戀
よふさんじますまいと聟りちぎ也
おはぐろの小言よッ程口がさけ
病人のにぎ〳〵をするけちな事
大三十日名作のできりはらひ
澁うちわかぶつたやうなみこしかき
萬屋の地藏のまへで後家に成り
座頭の坊夢には見るが口をしさ
よくなきなすつたと子守だいて逃げ
藏宿がかさぬとだぼうはせをつり
來る度にぜによふ〳〵とせなしかり
手の筋を見せて尾張へ道をかへ
かりるやつ見えもせぬにさんたする
かうもんのかえり樊噲くだをまき
らく中へじひは三日の口ふさげ
眞ッさきでげにもそうよが二三人
金の生る木はぎうといふ人が出し

やつぱらが五六本來てどなる也
大平の向ふうらからげい子出る
くわ酒をぐわいのわるい人がのみ
かつたいと棒打をする關が原
まをとこを御用百にて他言せず
泣ながらまなこをくばるかたみわけ
はやり醫者乘てにげるでひんがよし
葭屋じやないかといふとけさに切り
もうちづといのると塔は又たおれ
取りかぢとよばつてお手を〳〵也
角兵衛じしねれけてくると仕廻也
和歌の家とて御預けも十七字
そのくらさ早太さくらにつゝかゝり
するが町他國のものにはびこられ
きゝ酒のきげんやぐらへこける也
うるしかきのゝ字一字で日をくらし
おやをさへおん出すやつと座頭いひ
歌がるたよろ〳〵ものでけいご入れ
もてるはづなびくはしから乘つて行
うけつけぬお針つッつとこいてすて

鹿をどう〳〵〳〵とひくばからしさ
草ぞうし迄もとりやげる始皇帝
かたい後家なぞをとくのは不調法
むらさきとかのこを仕切るあげや町
あいけう娘そこからも爰からも
糸の無い三みせんの出る宿下り
四郎兵衛あたりなべかまとりちらし
雙六を禮者おどけて一つふり
二つ三つふくろ四丁目迄あまり
じつとして目見えはちんにほえらるゝ
からしゝの方はぞう程すいでなし
けつ王はいさめるに引事がなし
わたつみはみの虫程の音をさせ
ゆび折の門に赤子の聲がする
小百萬石もかすみの中に見え
つき出しのしるしひたいで人をみる
ちつきよでもたくさんだのにたゝむ也
畜生正直めかけのおやをほえ
あはァれな聲でうたへと子房いひ
おちなんとする事後家はあまたゝび

座敷らう出入の大工じたいする
小袖ではないと藥師寺にがわらひ
大當りけんくわいくつかつかみ出し
中入れますと禮者はこばすなり
むきものへ土肥の二郎は口がすぎ
ろうたけて來ておいらんのくらう也
巳まちでも無いのにふうふ共みえず
さがすなよ針が有るよと母はいひ
むねがにごらぬでかまくらへは行ず
正月もおへたにじゆずを切ましやう
吉原へいつたとやぶれかぶれ也
もふゑんじゆひつじぐらひはしらん貌
一國せいばいで息子はかみ切られ
生酔にまけて大屋はあすのこと
かくべつな事琴かりるふみのぶん
松の内つみ草に出るせちからさ
ぬがせるとはらをたゝいてこぞう迯げ
尻ッぽを引き〳〵繩をなつてゐる
はなしなよきゝやしやうよと迯じたく
來なんす氣なら來なんしとむごいやつ

數千兩出してしぶといものをかい
けづりかけ子をさし上てもぎらせる
扨よし原を見ましたと母にいひ
むす子の氣のかたに白ねこをかはせ
初に下女置いてやたらにしかる也
蟬をしばつてと仕事のそばへ來る
すめぬことと若後家五つゆびををり
釜の下の灰をたがひにあらそい
ゆくわんする所を四五箇所持て居る
夫婦のとり組み晴天七日なり
人魚を買つて來て汐干不首尾なり
母じまんやれそッからもこッからも
下女こしをゆすぶるやうにもんで居る
女房うるさくながしてはなりやせん
一歩でも有る内むす子とかまらず
つらいお酌だとたもとをぐわさつかせ
わたの師へ母どなり込むむづかしさ
卜者へ一人六郷へ二三人
ちよッと顔見てはたゝらへほうり込み
貳三箇所へめぐつたとは見えぬよめ

一日も添はず千日でらでしに
かたみ金今はあだなれかげま買ふ
おいらが子だとこじきだとよめの評
をしい事袖を通さぬのが十九
むまい事むすめのしやくの相手也
太刀をくわらりとなげ捨てかしは餅
やきものをふところにしてよゥろよろ
目かいは見えねど千兩役者なり
北の六郷はくろはぶた重でこし
だまかすとむしんにおろかなかりけり
せめて一こしはとちよきへやぼな事
此頃の雪でときばるなつなうり
どうやらこうやらどらものに母はする
笑ひなんせとかりた子をあやす也
一トロに五六人うる花のくれ
ちう三をなま醉の時かひはじめ
直の出來ぬ門でせげんは一つぶち
なつかしくゆかしくそして金と書
そのたゝみそうで大門かつぎ出し
くるまに醉て大内のわらびもの

ばかな事娘にきんをけられぞん
高の師直とかつほをわるくいひ
山門へゑゝ年をしてあがるなり
すけんぶつ晝寐して居るばからしさ
御つまりそうで置きに來る金屛風
女房はすつぽん女郎お月さま
牛若ははらッぷくれとつれに成り
泣て居るむすめ土藏から目つけ出し
茶のみ友だちで祐信くろうする
よこ合が出て湯治からはだか也
ふきがらにつばきの出ぬも難義なり
江戸のほうそうに草津のさゝ湯なり
われ二つおれ一つぬぐ大三十日
まきをわる分別をする水ぐるま
女房が留守でながしにわんだらけ
土手のだんごやはすけんの心まち
生醉はどぶでぬき手を切てゐる
三條の右衞門ぬす人めかない名
たしかおくまはこゝらだともちを喰
ぶきげんな所へゑこうゐんぶつしやう

うなぎやはむごいといふとはらを立
色をとこ好物ものでせめられる
切ぷくとにげ廻るのは雪とすみ
ちゞれ髪ものにかゝりが文をつけ
明け七つ時分熊坂手をおろし
名代のていしゆ茶見世に太義そう
美しい神子打わらのやうに成り
沙汰なしに拵へなさつたはとはむり
ぬるま湯を辻々でうる暑いこと
長くして一本かしやれと吸付ける
百八十四文さんまの膳へ出し
をかべやは仕合せものと奥でいひ
三國を雪ころばしておつぷさぎ
末世迄あかしの浦で目をさまし
一ト御殿斗り古郷へはな見なり
五百人げいの脊中を見てかへり
はかま禮たとへば一騎にてもすみ
ちよきで小便千兩も捨てたやつ
やくそくの首とりに行く大三十日
つむりからまくる朝寐は女なり

朝おきをして一人ものてれて居る
あたりを拂ふ出たちへかごいかご
十ッ手のゆびさすはこゝろまちといふ
三つぶとん坊主禿のかたをこし
三味線のみね打ちわるい御酒のうへ
こはくないおやから貰ふみゝだらい
氣の知れぬ客かんざしをぬいて寐る
初がつを一ト月むす子しかられる
油手をあらふむすめはゑりをすへ
かゞぎぬのゆもじにぎ王ぎ女おされ
おとなしい後家に四五人はらを立
つまをこふ鹿がゑらみのじやまに成
目くらめとしうと御さまを悪くいひ
ほゝへ手を讀の時もあてるなり
夜着ふとん大じやもつらな客がくれ
鶴の日に在かまくらはみんな出る
高尾ぼうれいもみぢ見へのりうつり
すわつてゝよめは着かへてずつと立
しゝやさるまたいて二タ人しのびこみ
そろばんを壹文なげて置きなをし

木のそらで追人の小言聞て居る
一人ものこうだ見やれど縫つて居る
今行くとはだかに成つてたびをはき
かんざしでしたとははでなつき目也
そうはいはふが小短かく書きなさい
上の句はかめぎくとよし時が事
きんてつの侍ゑんの下に居る
いけにえのおやは手あしでなげく也
かやぶきの土藏を庄屋三つもち
しんだ跡拟かはりてのその多さ
代みやくに聞けばくすりとめし斗
をとり子のひとり兄さまたいこ也
大口をきくのが後家のすがれなり
一長屋でばほう丁で寐ずに居る
ばあさまとぢいさま寐ればねたッきり
市戻り手をけをぬいでじぎをする
琴爪は前の方からはえるなり
おさいせん內義むねからほじり出し
銀ぎせるおとし張りにはよし給へ
神さびるはづ此頃はばゝア舞

すけんに向顏をなさぬきつい事
どれ程なことか孔明首をまげ
後家の流產はねられたやつがふれ
向ふの人の無いとこへ下げられる
あいそうにいつたのだのに半をかへ
長つぼねうしをやすめて馬に乘り
來べき宵也さくらから毛虫下り
花よめはその頃といふ病なり
お妾へとかまり立ちも二三人
中の町母のぞき込みのぞきこみ
鼻毛ぬき〳〵細見よ細見よ
何申やしやうと御用百にぎり
下女いやな目で切れやさん〳〵
御大法通りまたせる初會なり
鬼の手をたがひに出して酒をのみ
せゝの無い本多が來たと遣手いひ
師匠さま我居る所はへりを付け
今下山今かも川と六位來る
人知らず羽武者源氏へかせいする
文道で三位武道で女房なり

かまくらの光明江戸か京へさし
にしき木をもみぢへたてるむだな事
しわくない事が公家衆へ御きやう應
魚店にかりに居にけりはつがつを
子ぶく者は一ト月置いて又たてる
舟宿にかむろほたるを拜むなり
氣のきいた女はくわよふぶ人也
女房にへつらい過ぎてけごられる
ほとゝぎす花嫁ものをいひはじめ
五畿内はうたひの中をあるく也
もみうらも男の着るはのりをこへ
入りむこのつらさ花ならはなッ切り
馬のはるびがのびたのにごうに上
くわッ／＼といはぬ斗に遣手せめ
そへ乳して後生だによときせる出し
はらむのを嫁はう／＼てせつかれる
ひなの座敷から男はおし出され
一チ夜のえいぐわあわもちのみやげ也
みんな人參にさけちなかたみ也
よく人をいためなさると出來かゝり

田町ではそるゑもんではのめる也
遣手あばたへおめへでは無いそうな
きやッといふむすめの跡を蛙とび
聖人の代に木食が二タ人有り
ときわばし御用の女郎通るなり
末吉で緣についたは妾が母
下女はだを入れ／＼ごふれ／＼也
ふしやう／＼に仲條へ納所行き
門がやかましいで壹歩貳朱がかひ
いゝしうと本のいびきをかいて寐る
小判は口のふたにするかたち也
きせはしませぬと能夜着かりに來る
こわがつて娘半分なびくなり
壹人ものかみさんたちになぶられる
みそこしを御用うざ／＼賴れる
わらひ顏までけいせいはこしらへる
あてにしていんすはいやないんす也
口ぼこにかゝらしやるなと親父いひ
どれなりとおつしやつてはと若い者
百人で九十九人はへびにおち

旅は道づれ駒下駄で三四町
なぶつても猫のやうなるちよくし也
出來合のひやうとく伊州々々也
根津のふみもらろんの車釘の折れ
よし町なればよけれども納所いひ
ゆめに見た內へとん死は入れて置
清水のくわんじや喰つては寐〱
江戸町は京町のいろうばふ也
白魚を半ちよぼ出してよめ拜み
茶めしには成ると勸當場をかたり
ぼたもちで思出すのは他人なり
ぼうしうりうれいな貌もまれに見る
いけどりを先へひかせて八もんじ
千本もきせるの出來る猫をくれ
此夜具もつまりやせんとおそろしさ
釜じめの直を聞きに來るあら世帶
さんばそうまばらな人に見せてふみ
藏掃除ひとりでがたりひしやりする
鬼も十八だといふはろくでなし
四つ手から出ると三つ四つよッろよろ

しゆんせう一刻あたいは三歩なり
おもしろい日にはけいせいうしろ帶
ひなの棚いぢるとばちがあたるぞよ
三つまたで難船にあふおしい事
あら世帶大屋を聞いて二タ人來る
ふし無しの商人の來るせわしなさ
人くらい馬にすみ友口があひ
氣のもめる文で禿はたゝかれる
やうゆうが一番弟子は日本人
松根によつてまどろむ禮の供
かとく公事おこり內裏で角力也
ゑちごやが出て切落し穴が明き
左衛門の太夫にも才藏があり
仲人は千日あまりうらみられ
ひる寐も人の目にかゝるその當座
金銀を置いて桂馬を關羽とり
みめよからざるを杉戸へ立てかける
ごじやう汁內義喰つたらわすれえず
京にすくない烏百に一つなり
かきつばた今ぬすまれた水の色

いゝわけのやうに牛にもくらを置
子にじぎををしへて内義いとま乞
錢がなくなつて大坂しまいなり
いさめると穴だと始皇おどす也
口留めをきれいにされる女郎花
大あたりやろうそんじやをおんならべ
はなれ牛ぶら〳〵行てとらまへる
仲人にかけては至極名醫なり
切口へ鹽のしみたはゐぼし疵
いしやがはなれるとぬき身を持てかけ
夜着ふさん先づごふくやでもてる也
あきらめのわるいが後家を立て通し
おとなしくちやんとして居るワキの僧
吉原にござるとト者さばけ者
もう一歩ちよきの板ごをはねてみる
おふだがよ〳〵とつめて戸をたゝき
りんげんはみなかめぎくか口うつし
生酔をやれ〳〵〳〵と落手する
元馬の出入からさと茶師はなし
おにの出た門へすけともあまやどり

氣づかひの無いのは女たぬき也
ふり袖のしがくにこまる俄雨
もむ内にどし〳〵〳〵とといて居る
壹人客ひなづる丈と書いて來る
此あひだ鼠をたべてこのとほり
白子やの跡もちやとは思ひつき
しめころすぞよとおどかす大三十
おしなやとよんだをみれば男也
貳番鳥うたつてかへる田舎色
使かと思やぬりものつぎものし
ちんどくをきらすまいぞと呂后いひ
板ばしへ大根の金を入れなくし
門並につッぱつて居るいろは茶や
たいこもち身に引懸けてどらをさせ
ごふ思つたか聖堂てじゆずを出し
知れぬはづ使をどり子やとたづね
あてもなくこくうにいそぐすけん物
ふそくした碁石にさるのほうをおし
ふんごみの女郎鬼一ト口にくひ
はまぐりをはらかのやうに上る也

泣そばにせげんぶつてうづらで居る
鰒うりも十三日は黑日なり
うら門を左々とゆけばよし
はさみ箱にはしなのをとあてゝ置
ゆふ王はこそぐる事に氣がつかず
日本ばしどこへゆこふがすきな所
あいつだに歸る氣ならとばか亭主
日半日ねこをじやらして貳歩とられ
らん留が能いとじやうはへあけち言ひ
前だれはものゝいひよきすがた也
ばゝァをよんですみッこで見て貰ひ
持參金吉日に見るかほでなし
そして又みそもたまさとねこまいひ
きんたまをねらふは男禿なり
箸とぼん持てきれいな魚をうり
藥箱あつたかそうにしまわれる
氣づかひの無い頃小町寺あるき
三みせんで世間をおこす寒い事
ぬえが出ますぞと二位どのたゝき付
四日とはたち廻らせぬ主のばち

川一つ越すとでんがく石のやう
渡守一さほもどすくすり箱
けふはいゝなと毛せんでぶつてかし
一文だこはかけて居る内ばかり
主馬でさへ舞ふたと靜すゝめられ
三みせんでくへるものかと母はいひ
どらな子をおぼしん王は二タ人もち
あら浪をのせたで舟にけがゝ有り
けいせいは格子の外もつめる也
海遠し浪切り不動とはいかに
しゆんせいに岡部それから憎まれる
仕合せは持つたが病ひばかりなり
りべつした女房と並ぶ切おとし
れいしても喰ふべき顏でさつまいも
いたづらな小僧わにぶち山に居る
土用が入るとかげ清のまくをぬき
繁昌な見世きつね迄買ひに來る
宇治川はたのみに思ふ川でなし
ちんどくのやふな火で吸ふ鍋ゐかけ
五番目の彌陀は姿めしきらひ也

うはつでは置きにくいよと和尙いひ
いたゞいて左右へわける神樂堂
だい〳〵で手をおつたのは高がしれ
ぬす人のたけ〴〵しきははかま着る
うゝきくよ先はなしなと迯て行
辨けいはせめて小町はからむたい
あらかじめきくと盛綱ひつこぬき
小づくりな方が殿だと三浦いひ
ゆふべの一座にこついて通る也
高野山金持の燈にけちをつけ
くずの葉は何をいつてもうそだろう
あの人さそしてだれだと下女が母
かせ〳〵をはりい〳〵でまぎらかし
めしびつをまたいて亭主しかられる
わたし場につながれてゐるはなれ馬
くさづりにかゝらぬやうに巴たれ
下女がせなたらいをかりてかき廻し
はらんだでそうだんずつか〳〵出來
くろ土にするぞとこわいさゝばたき
人をよくすれば熊坂笠をうり

いくたてをいひ〳〵飯をかりてくる
重箱をゆすぶりながら禮をいひ
わッちがも行くとぶつさと松が岡
そらいびき心でわらひふみを書き
たんものをおくま一ト色けちをつけ
三すじ町三みせんぼりの近所也
すりはり太郎ぬす人にうごかぬ名
其こつがらはあつぱれな醫者とみえ
子をあやすふりで夕べはだましたの
はて珍しいたいめんと土手でいひ
人をゑらんでばけものはおぶッさり
八日迄こらへろさゝすやぶれ傘
奥行の無いごふく屋はあいといふ
神樂堂鈴をばねじるやうにふり
うつくしさ淺黄さしつめ引きつめ射
五日跡手つけを置いて傘を買ひ
ぼたもちのすりこ木置所にこまり
しんだかと思へばうせる大三十日
安産のはづやす賴を先づゆるし
せいだくをわけてもてなすひなの酒

雨がわにさほひめの居る淺草寺
だらで出る文の日つけはけふし也
こも僧のおし合てゐるくどいふみ
左右から貌をたゝいてぬりたてる
さあおしを賴むと女房ぬかだらけ
ちんばひきながらまちんを買に來る
うなづいた所化の跡から四つ手かけ
鬼が居りますと老母へちからつけ
あの顏でなでられに行くおしい事
春秋は池へおし鳥おりるなり
一長屋いつちに成て餅をつき
旅だちのよくは一ぱいじやうにくい
人のすくかつをむね淸きらひ也
おきつねはたとへ化けても高がしれ
いん水をたつて女中の芝居なり
りやうしゆんを用ひずまりが上手也
けざる事女房は神のごとくなり
ふきげんの寐ても直らぬひとり者
なまくらな武士に靑砥はあわぬ也
にげる客すゝきのほにもおちる也

手をついて猪牙にのつてる耻かしさ
その時のせいらう島屋壹岐の掾
なでつけるやうに四つ手は汗をふき
祐つねはころばし根太のうへで死に
前でよくなでてうしろへよめ廻し
すばらしく照日の神子はしやべり出し
よめはらのたつまいものかあまよばり
をしい事きりんびつこをひいて出る
白魚をかわゆいさゝと子にみせる
錢もあるまいにとむごい禮をいひ
けざられるはづ板の間へ貳歩おさし
むす子行く時に小道によらぬなり
追焚を見てけんしんは小うなづき
むッとした文ていのくる大三十日
まん中をあるくは本の醉でなし
藥ぐい女房きせるをひつたくり
ちよきのふみへんぽんとしてよんで行
いつたらばいふ氣そさわへこしをかけ
又見さッしやるかと叱るくわいらいし
見くびつてないら藥に馬を書

小便をするうち四つ手こしらへる
かざりもの斗り氣長によんで來る
二十日過今が座頭のまなこ也
大黒は金の入るときふりあげる
六玉川をんな六部は五つ見る
なすびうり二つと三つづつつかみ
布子のかいざりでびらしやら輕井澤
女房のたびはていしゆをはなれ山
おかしさはこん禮のばん鉢がわれ
げほうめと申ましたとざんをする
なんぼべイしますとけちな紙びいな
じつていになると襦袢を五分ちゞめ
わつ〳〵とざなつて亭主はぢをかき
むらさき屋人目が有るで念を入れ
もし〳〵を三筋でよぶのひんのよさ
目の玉をおし込んで置く雪の朝
ひなわけに母手を出して呵られる
しらなみ〳〵と袴だれおはれ
さぼ口を母のはいてる有がたさ
しどう金見ては内大臣でなし

ふとんかい込んでゆんでに火なわ箱
ばた〳〵の間にとざりを一つませ
名代へうつぷんをいふけちなやつ
妾がはゝ内のしやうでんゆるさるゝ
なぶつたらゐゝわさと下女しかられる
あんまり御やみくもさまと御ぞう言ひ
おれが弟子とはぎやうさんな女郎かい
ぶちぼうでとなりへはこぶさる廻し
どうか持佛はなさそうなごふく店
おしやかさまさへとかこひは學者也
輕井澤太夫もえたつあかねうら
豆がらで豆をたき〳〵ひなわける
かたきうち親と主とは雪とすみ
新まくらをのへのかねのおとす也
庚申を嫁の聞くのは目立なり
にくいやつばらだと玄關番はいひ
客しよくな後家山わりで茶やへ來る
ひれふして仕廻ふと茶番々々也
あやまつて居るうち春にあらたまり
目黒から十月かへるふとゞきさ

書置を見れば不孝も知つて居る
檢校のかつを三だん切れてなし
成ッ丈おつかけてみる切れたたこ
はくちうの四つ手こじりを二本出し
つみ艸の商賣人はみかんかご
留守かなごみくびつて來る大三十日
八日にはやうごく忠へかぞうなり
いき馬の目をひでさとはぬいた人
ふり袖の次ぎにいくさの土用干
羽織着てがうまのりけん一本さし
びり事で伊藤がたちを御しくじり
まいないをきうせん筋でつかむ也
二十けん茶がたけなわにおよぶ也
とむらいにつき合づくがいるものか
忽然と日なしつらくせわるくなり
かいで見て小田原町でしかられる
うろたへた女五山をあつちこち
つる龜をなでると仕廻かゞみとぎ
いかい事おばさんがのとしりをわり
松過の禮者米斗カつヽつける

せつかちと見えてぬれてくにわか雨
三みせんの外に根締の能い女
安がつをとく心づくでなやむ也
ほつくりわうじやう今日休也
雙六のそばにれいしのうづだかさ
かんにんがじまんで出した居酒みせ
見ましたは細おもてだともめる也
大三十日いじかりまたのたのもしさ
角兵衛じしじたらくで無い姿也
大學ををしへ切らずにこして行
おもだかをしんのふよこに晩付け
引ける迄ほれ殘されるつらい事
なせ雨具よこさぬといやふりませぬ
あらかじめさとつて女房へヽん也
そごくなど不可也としてむす子行き
ずつと差上げてひろつたふみをみせ
うら店でさられたやうに下女さがり
あの一座とつてくらいとやりていひ
父をしへざれどぐならず遣ふなり
たなつもの持て折々せなア來る

生酔にあした切りやれと納めさせ
ぶりがれんまねるで孟母店をかへ
をかひきをして五大院しまわれる
新道の邪魔は格子のはらひ物
武士はいや町人すかぬいろは茶屋
冬のとりつきが湯番はいやといふ
しなのものだれか本田に結つてやり
五百生手の無き人に南女する
あまでらは男の意地をつぶす所
長髪(ちやうはつ)でよわそうなのをおびやかし
つけ届けせぬとつる〆をとり上げる
不屆さ旅宿をさして家を出る
錢のあるふりで居酒をのんで居る
直實へ土手のぶつそううつたへる
他人づき合をして居る長崎や
傾城はとこへ這入ると氣がつよし
をしそうにむすめひたいを二つなで
大鼾わかれのじやうはねからなし
わが顔に見あきてがゝの國へ行
押込れましたと茶わんかりに來る

四所が火だに居ねむるむごい事
いろ／＼なけだものゝ來る親の留守
ちやんちき／＼といふとせゝくんな
番頭もうなだれて居る下女がもめ
後の母はゝとさしやうでもめる也
そのさたがちら／＼有るに入りびたり
江戸染一たんあたひ千金なり
商賣を身にしみるやつゆびを切り
炎が火とひなたの火入をしへられ
はな毛ぬきかたくつかんでばかなつら
初のひなていしゆさわいでしかられる
友なりは道草をして名が高し
雨舍りちよつ／＼と出てはぬれてみる
むらさきの中に出家が一やすみ
ちよきのへごそら色かゞをらりにする
おさらばをあいといふでもあるまいす
板の間で數度もんどうの甲斐もなし
關とりと嫁同年でおかしがり
その直では袷があたらしく出來る
手がらさは娘出るたびつけられる

戌春角力會之部

松島に人ッ子もなし十二年　櫻木連　柳止
鈴を持つたで安くするひの袴　登　連
先の方おかはりで見る道成寺　柳水連　雨譚
百二十ゑこじをわるく書て出し　四谷連　五雷
目出たい柱へ女郎をしばりつけ　伊呂波連　冬印
雪の藥とり引かへしてことはり　四谷連　五連
名月やくらい所は見世ばかり　姫松連　千里
松過ぎの禮は餘慶に口をきゝ　櫻木連　柳止
一里塚の先に美人二十人　仝　冬始
たそがれにいの字の續く芝の町　羽衣連
三聲づついゝ聲で呼ぶ松の內　高根連　志柳
山下門から大きな鍋がみえ　四谷連　五雷
かぶさをぬぐと宮がたは坊主也　伊呂波連　千里
十五日天竺のいしや匕をなげ　櫻木連　冬始
しんちうをさげ山下を娘行　仝　其林
大紋をのせることしの渡船　伊呂波連　千里
とつぱひやろからみてゐるばからしさ　仝　冬印
いつぞやの梅もうそださ喧しさ　初瀬連　五扇
月ふたつ息子社稷をかたむける　柳水連　雨譚

頷いたッ切で出來ぬ三つぶとん　櫻木連　冬始
袖口へたらりと下げて後家は出る　四谷連　閑々
四五日は歸朝の口にまめができ　羽衣連
お釋迦樣と同木の下駄が出來　伊呂波連　千里
あいちつとそうもと內義言込める　眞砂連　仙郎
田の中へ高い手足を入るなり　柳水連　雨譚
あまよばりして鎌倉で叩られる　初瀬連　五扇
袖留に牛のきわ迄つけとゞけ　羽衣連
猫好きもをとこの方は金がいり　登　連
うろたへるふりが上手な中の町　四谷連　五樂
年男をんなをみるとおどす也　姫松連　蔦故
おそろしい首を途中へ捨て行　櫻木連　梅風
上らんとすれば衣が邪魔に成り　登　連
大きな男ふんどしをねだる也　櫻木連　冬始
鹽やきと木ごり和漢の因果者　柳水連　雨譚
下手そうな醫者葬禮へみえる也　櫻木連　冬始
按摩とる內ぴい〳〵を袖へいれ　仝　大柳
年も顧みず楊枝をばゝアうり　登　連
いふ口の下長いもを下女は折　四谷連　五樂
なんはいにしろでは雪にはが立す　柳水連　雨譚

吹がらと跡から拾ふうざいがき　　櫻木連　梅風
ひどい事すゞやつぼ〳〵鳴わたり　　柳水連　玉簾
御立だと長兵衛早太ゆりおこし　　伊呂波連　洗路
お妾の勸めで銀のちろり出來　　仝　仝
まん座の中でいろ文書て居る　　仝　仝

安永七年戌三月吉辰

催主　星連堂
補助　薩秀堂

俳風 柳多留十三篇 終

俳風 柳多留十四篇

ゆびをさす方へひろげる乳母が傘
下女をさし置て娘に茶を出させ
つわもの丶まじわりもするむすめ也
手をされば生醉とかくふりはなし
他人宿とつてこし屋のむすめ出る
かな釘とめ丶ずと下女はとりかわし
四つ手うぬまでと生醉貳町跡
入る時に成つて尋るよめのじゆず
座頭の坊山ほと丶ぎす初がつを
闕も無いはず御二人で小百萬
ゑんこうが月だと迯げるけちな客
乘合で皆のぞかれるくわいらいし
あんどんへ寄懸るのを下戸とらへ
ほぐれ口唐づくへにて文を書き
大道で生醉金をかせといふ
こりやァ馬こりやァきりだと呆れた子
おいらも出ませうと女房いやみなり

たばこ入たづねるふりでつめる也
太神樂仕廻ふとしヽをしめころし
御女儀の御無用と堀でたッて留め
おかしさはすけん紅葉をうつて出る
しうとめの盃よめの紙でふき
めしでもくひなとわひことかへる也
今度出やるとそういふとぬるいはヽ
なぜ急にいるへと女房ぬわぬ也
方々へ無沙汰だらけて母に成り
ひん出してくんなと頼むせなかの子
女房は風月の友をわるくいひ
おめへがた欲をしりなと遣手いひ
御國からじよさいのないが昨夜つき
鶯をかわいそうにと母ゑがい
まくわ瓜壹つよぢ〳〵持て來る
夕すゞに成て出ようとなまけもの
親分のりづめよしかをぬけにいひ
ひやめしのぎんみがすんで米を出し
けんとうを開てぬかみそ亭主出し
人もをしとはかめぎくが事と見え

客まさにやらんとすその聲かなし
怪力らんしんのかたるたいこ持
かくあらんとぞんじ羽折持參也
あの四つは六郷さまと四つ手かけ
四つ手かご札所をさけび〳〵かけ
五條坂合羽屋の子はうんがなし
らうそくにたものを出す百旦那
圍ひものぞかぐひしたりかつへたり
つらい事すけんの思ふまへもあり
めうがせん出してよめ女をそしる也
あるかくなうそでは女房もうくわず
松の木の下へやつぺしはつて出る
雨がんのあきらかなむこ二タ人とり
暮のざま麻上下ではなすなり
やもめでおくがふびんさに金に金
らうがいがふたアつ來たとてんがいや
十二ひとへは急度した鞠のじやま
上總からしつせいたんの風でのり
おやにつめられては娘よろこばず
檢校も出來て乞食もそのよ出來

四十一で持つて一つ家一人ふえ
かゝみのゝのゝ字をぬいてとぎに出る
おぬしゆゑごろぼうよばりされるはな
もうおれもよしにしましよと子房逃げ
見物のよいに寐かねてしかられる
何ばかが城をまくらとごうろごろ
せんどのもこないと御用立つて居る
にわか雨首かせなどて通るなり
よしのとげおれこんで後家大さわぎ
三會目もつとこつちへ寄りな也
花も少しはとむくじる銀ぎせる
うかれてるつらを見たいと女房いひ
耳のあかほり〳〵顔をよつく見る
羽衣をうたひ切るのに女郎來ず
ちよつとしたちゑかごかきに道をきゝ
朝がへりうしろめたくも茶屋がつき
とりつくといわれてむすこまる也
ぼうふりとごぜに御ぞうの役ふそく
目黑からいゝわけの無い品が出來
うどん屋のばゝァくじらのはなしする

をしい事よしざねげくわにかける筈
品川のもん日へんがへもうごなり
宮島のけしきをしやべるきついねつ
百も貰ふ氣で淺瀨をばをしへたり
ひでさとはみかごのやうなものをゐる
出合茶屋かり人は御せんかごでより
おちぶれるものはかつをのねだん也
ふみや〳〵といふほどにもつて出る
品川のうそは古川やくしなり
さいくわいをごして大門からわかれ
おたふくめだまれと持參しかられる
やうだい書に猫などをじやらし候
おさらばをしなとせ中をうばからげ
まれ人も御らんずらんにみけん疵
遣手のさいそくいたゝきやしやう也
小ざむらひゑらい中ぬきはいて出る
よふしおるさかいと手代はまる也
かけ落のひるはやつぺしまがる也
ごふく屋の子もそこくらに二三人
かめ菊の内にしん筆あまたあり

着かやれといへばわんぼうぬぎおろう
袖の下遣ふねがひはぞうしが谷
行たがる外にわる氣の無い息子
しな川で狼之介とんだこと
しやうばんにしなのもさんりするゑて立
花の雨下女色あげをむごい事
雨がんくわつと見ひらいて親父まち
見せた外科見ると內義は迯る也
大門をつきやと這入る屋形もの
母いけんよや〳〵をぬけにいひ
相違無いそうでかつぎは持て行
こいとりといふなあの內義の兄だ
いつたいは下戶さと赤い貌でいひ
目出たさは武道勝利を得ざる也
世を捨る事めんどしく四つ手也
のぞまれて嫁一本はめ二本はめ
花よめのみやげは里へ生き如來
しよくしやうを隱しおふせて御師を立
さるものは日々にと後家はさかん也
民のかまどを見おろして四つ手かけ

田をうゑるよめでいちうのはちす也
惡筆へまつてくれろは能書也
品川の藤澤どまりあまりなり
どこへみこしをすゑようと土手でいひ
川中をわらじてあるくいかだのり
いろは藏いつちそばのがかの字也
藥禮をふぐの小言でつゝむなり
又てうし言葉と母にしかられる
簡略はとうるのおとゞきらひ也
けい馬さい中はなれ牛はなれ牛
芝さまのお入とたいこなりわめき
かまくらへ行く前川へすでの事
ねじけ人もみぢ迄來ていやといふ
松の木の下できぬ傘しぼる也
お物を御用立て侯傘とかき
生酔に嫁どこへでもあがる也
かぐはなは座頭みるめは松ゑもん
お秀さんどうだとやうじみせへ來る
年に二度でつち呵責をまぬかれる
ばからしい病氣女を見るもどく

三輪の神あげくのはてに無心也
豆めしのくいにげをする諸葛龍
こいつだと孔子をうしろ手にしばり
丈け四尺くらゐにつもる夜の雪
首斗りゆヽしく見える本升屋
ごつとせぬ神子で神さびわたる也
しりみやをあらつて息子内へ入れ
穴ぐらのはしごを引いてあやまらせ
もうわらふまいと新造かしこまり
歌もよんだりふせきをもあそばされ
きの國やみかんのやうに金をまき
仲人はやれ幕をかせ琴をかせ
越の傘かりてちじよくをすヽぐ也
大内のふはむきになるめしをしひ
はらの中迄も見て來ただるま也
一日にたらぬしごとへへびをまぜ
あいきやうを遣手のこぼすいたひ事
京都から見ればかまくら赤子也
めしびつをかくすが母の大おこり
れいしよりだつきはふりがきつい好

あきとのはむきがいヽと源三位
琴の上ねぎをいつけてにげる也
舟迄もほッそりしたが息子好
大なんぎわんを出さぬとべそをかき
妾がおや來てはしやうじをつッ通し
御一笑々々々内義がきさん
古着ばッかり買ふやつはぬれて來る
繼子こんじやうながきだと遣手いひ
すけん物小見世などへは目はかけず
仁和寺の化ものみやくを見て貰ひ
犬坊はかみつくやうにくやしがり
死馬に針きんつらがいけんなり
手紙よむうち仕切場にてれて居る
ちと内へへめぐるべいと息子いひ
袖を留めたが本寺迄ぱつと知れ
あかるい所へ持つて出るひきならひ
金をふやすのがびわより妙手也
下女が笑ふと産所でもしへ／＼
駕しよつてかける向ふで茶宇をぬぎ
ごつちらがりこうか土手で別れたり

かけねなし一ト山三歩づつにうり
當分はかしま參りと母はいひ
子曰おふくろをあやなしやれ
馬の行く方へのつてくにわか武士
蔦の葉をひつさいて嫁ごれにしやう
おめかけをそしり座頭でくちはてる
はヽアきやつめだとかんづく旅歸
神樂堂夫らしいへぶつつける
さがされてくすぐつていと子を返し
是はあざ是は青二とわるいやつ
妾にすんださたきくし金主來る
そこらちうさわがせ這入る初のごら
珍客と見えてとうふを細でさげ
をしい事かまよりよめがうづもれる
おかしさは皆がねらつた後家が剃
何か出たかのぞきの子ども笑ひ
九年母とひじきを下女はかさへあけ
もはや置かれず十を六文／＼
こわそうに後妻ひとつぬい直し
むりむたいの所にごふくやの庭

火のみやぐらの正面が三歩なり
はいとうのねだりにうせぬ嫁をとり
柿ごづきを聞ていしやにしかられる
わるごすいおかみさんだとぬかやいひ
口說く奴おぬいがそばでじやまがられ
ちんぼこへ火がはねるよといかけいひ
ぬか袋下女は目鼻をつかみよせ
人をくみ出すと井戸がへ仕廻ひ也
なんぼべい出せばおろすとせなこまり
柿ぬす人めを見つけたとしりをふき
ばがかたい子だとめかけの母しかり
ちう三の一チぼくつれるはやり風
死ぬものヽそん女郞やはうかむ也
口をそろへて江の島へいつたぶん
旅人のぶんは杓子であてがわれ
花ざかり一日をとこ世帯なり
たからくらべを嫁がする暑い事
女房と相談をして妻を去り
にげ込むを見ておかしがる歲暮客
張りものをする所へぬれてかへる

盃を三みせんひつたくつてさし
かん定づくで疊のうへのをかひ
格子からそりやなげるよとあまい母
袖で口かくして茶臺ふり上げる
やむ事を得ずこのわたをみんなのみ
鼻うたでせんじやう門をかついでく
にわか雨ひるねの上へほうりこみ
下女がこと一日おりんやかましさ
蚊帳釣つた夜はめづらしく子があそび
どうぞして仕廻つたが後家ちゝが出る
樽ひろひしやうじんおちにくらはさせ
もうことし二人かけおちわるひ内
法事からはじめてとまる里の母
嫁の生醉御しゆでんをひけらかし
まごへ來て遊子々々と呼びいだし
おかしさはすけんの女房りん氣なり
いんぐわなやつだなとすて子あやす也
やすいてうぶく足あとへきうをする
目見えだと見えて小袖できうじ也
うるさゝはあねィごふぢやと腰をかけ

となりさじきのまんぢうをねだる也
平皿をふたッつつける極こん意
わんの中からまゝ母の貌を見る
村きおいつくり酒やをぶちこわし
こわいものなし藤澤へ出ると買ひ
土弓ゐる御用時々うしろみる
ゆふべにたとうふ目きゝが五六人
まんぢうへ小僧だまつてゆびをさし
門出(かどで)に坊主にあふがなづなうり
おこまりかなと雨ふりの子をあやし
すけんさんそれぢや千住と笑はれる
吉原見物ならつてがあるぞへ
梅若へ行くのはうそでよしにする
安い三みせんはたいこのかわではり
たらちねの爲にはらからおごるなり
たつた拾兩きんしだとふさい事
くたびれて供のなき出す安禮者
下女くせつ布子のそでをしぼる也
人參は行長どのに見てもらや
一國な所(とこ)と田町の床でゆひ

とりの町江戸をくらつたどらがみえ
なきながら奉加をかへす樽ひろひ
ぶつまねはにぎりこぶしにいきをかけ
かみゆひに成つてかげ清ねらふはず
おのしもぐるでかくしやると御新造
江戸のまん中へうろたへもの二人
りちぎまッぽうなつらにてぶんごぶし
てんこちも無い事めうゑおもひたち
是からはおれがすきだと三日いひ
二つどうぐらひは直きと子房いひ
一人ものけちな出合ひにかりられる
へいごしにおがむ〳〵と下手のまり
加茂川の水でもいかぬ色があり
おこうのまへに面白く一度着る
のるものは落ちをどるものころぶなり
もち見世のさわぎせなかをくらはせる
公家はしをかけて僧正よびたてる
口がいやさに九代迄しつじしよく
ゑんだんがしちむづかしく出來かねる
青ぞらのたしない時分ほどゝぎす

りに勝つて女房あへなくくらはされ
御めんかご中に細見よんでゐる
供べやに何疋ゐるとれう理人
ばかでやりやめのこがゑゝさ夜そばいひ
あわ雪で又二三本さしをなげ
しやぐわん〳〵とやばたいをたゝむなり
大きなかわばなをゝ馬のけつへつけ
藪こうじいしやの住むにはわるい所
はやがわり牛町からはぼん子也
やうらうの瀧まで下に〳〵なり
草木きばみ落ちてかこつけもなし
口のこをはねてけんぎやう金をかし
小兒いしや一つのきずはこわい顔
うちわではにくらしい程たゝかれず
きやッ〳〵とないたがぬゑは本の事
又春といやるかと母すみをすり
酔ふとねやすと前置のそのながさ
上下でかみゆひしかりつけられる
たいまいの金を妾はさして居る
首すきう流れるやうな大井川

くわい／＼のくわいと下野さしてとび
ちとはやうあるきやいのうと牛を追ひ
かゝァはなさつたはやいといぢらしさ
きついやつゑもん坂からはづす也
よし時はいちよくのつみで御座りやす
尻を高くしてぶつかけ娘くひ
きぬ張でおひ打にするにくい口
品川のかたうでになる源五兵衞
官女が居ても名のたゝぬかたい寺
佛さいはれたはめかけ一ト人なり
もろこしへびたもやらぬは源氏也
ごろ坊となんだあなばたおつかける
一本傘かして小言で内に居る
はんぞうは血をはきそうな軍師也
三つぶとんうそをいふならはしご也
むだあしを一日置きにこんやさせ
三年のふるきずをみる本望さ
御一所にいたしませうとひらのふた
あじな晩三歩の口はうれのこり
山がたとなりくだものがをしいなり

こゝいらへ見世を出そうと御針いひ
さくらをばどれも御てんの跡へうゑ
ゑをかはぬがたかの羽のおちどなり
米かみのうごくをたいこ見つけ出し
添乳してたなにいわしが御座りやす
麥めしを喰つたかわりにもとめづか
小田原を目あてに御そうかける也
と出たところはすけんとみえまいの
一人ものやれ茶をくれろ火をくれろ
こんにやくと酢で仲人はあひられる
だましてもいけんとていしゆ外でいひ
かわらけへとなりの書物きざみ込
黒がもをはじめてつれてふりかへり
母一ト人古いやく者のひゐきする
こはめしのはらですけんをしてあるき
たま虫のはつてあるくをせなアくれ
しりもち以來とちゝぶは和田でいゝ
さじのえでえりをかき／＼かげんする
かみゆひのひまはおゥくれおくれ也
下女が鼻うた臺所のすゝがおち

くわんおんは遣ひてのある佛也
五十でん〳〵のくりきにろじがこみ
藪いしやのとくはにげるが目に立たず
留るなよ佛がくるといろは茶屋
ごつからか御用きせるを出してすひ
出來合の武士うれ切れるまつの内
賣物だなぶらしやるなとせげんいひ
青銅拾疋めしも喰ひ酒ものみ
六枚でばッた〳〵ところすなり
一チ女出世して九ッぞくうかむ也
十四からこしやくな御子ともういはず
ふんべつが出ると女にいやがられ
もみぢとかけてうそとくきつい事
そんならば湯でもくみやれと下女をつれ
見くびつた通り入聟しかたなし
せんやくでめしのくへぬもげびたもの
けころ見世地犬のやうなちんをだき
ぐわいぶんをいせやも二代目にはしり
神前迄はつぼとござ敷きつめる
おく家老おんぶしたよに乘つて行

持參金のみゐい大津より出る
片ことをいひ〳〵おやぢしかる也
ごろぼうもしばつて置けばはなしする
かわらけのくもついじかりまたでもち
でくの坊べイ書きおるとむら師匠
賣れ殘る手のすじだろと遣手いひ
藪いしやはうきめをみせて世をわたり
是でやぼならと女房一歩かし
あゝら珍しやはこわい土左衛もん
五六町跡で大きな御名をきゝ
三日でもとられぬものを明智とり
城をとは家老のまくらことばなり
ひとつとんだりとはかま着つるし上
やねぶからはけさきいじり〳〵出る
じぎをしすぎて上下で二八なり
とかまるとそこら中から口が出る
壹両をつまんで見せてしまふ也
わんをふけとは花よめの役ぶそく
夜がふけやしやうのと口をむしる也
むごい事ほくろ程なる乳をたづね

先妻に世話をやかせた今の也
すり鉢をふせたやうだにびわが出來
十二文のんで向ふの顏をきゝ
じつていなむす子汁かけめしをくひ
月見過手のかるくなるおぐし上
いけよくの深いあまだとあばたいひ
おはぎくばつて置なよと二度目いひ
ふりこんで來た後家たちのまんま也
いけんばなしに一ト人にげ二タ人逃
あきらかなちえに信長たばかられ
石ごうろつくばつて居て氣ばる也
聟用をもみぢの下でかぞへたて
たびむかひこうしてゐるは損だはな
ねたふりでじろ〳〵客の相を見る
お妾のきんこうやたらはらむなり
よし仲もついには西へかたむかれ
髮ゆひはもとゆひまくともめといふ
はらませて置いてとごなる朝がへり
今時のめかけは金を見て笑ひ
大一座はかまがついて安くする

すいつける内に柳が松に成り
水茶屋もすんで七所からもらひ
おどけのやうな事女房かゑつてる
女房だと思ふがむこのふかく也
よきにはからへで賴朝やくはすみ
いせの留守女房あこぎな事をする
いとあわれな聲にていちこいひ
百日のがれな事をいふうつくしさ
やけぎせるみだりに女郞おつゝける
身をなげに今行きますとはゝへいふ
かねて用意やしたりけんぬくとにげ
きついやぼごろぼうらしく引ぱられ
かつたいのそばで孔子はよまいごと
よし原に居るにへきらくまでさがし
わつちをもうけ出してよと禿なき
百旦那わざッとごらをあいしらひ
村のものしをゑりぬいて門にねせ
鬮とりに赤子をだかせ大わらひ
百安に口から一步出して買ひ
ほえるなよかなはぬ事とせげんいひ

ふられても御きげんをとるひんなやつ
二つ三つゆすぶつて置くぢよ夜のしヽ
旅がえり女房三みせんかくす也
歸つたを見ればほうきもおそろしい
二上りでかげまののどをしごくなり
承知しそうだにむかふのかヽアうせ
はたることゝ都ていちまきいらひどい
お七どの薬をくさしめとけんびたい
手のうちへむす子をとしまいれる也
てんがくをしかつた旦那おとす也
ねぶつてヽ顏を預ける子ぼんのふ
氣のどくでありんすねいとあばた出る
金うなりそうなめうじは角のくら
年々にこうもふすから笑ひそめ
御番所をこすとひき出す今のあと
二はいめの四つ手しのびのものをのせ
鹽がまのきうせきじゆずやだらけ也
命日も十九日さゝはヽはなき
中宿へ來るところもに紋を付け
七くさに遣手もをしいつめをとり

御てんものおあし車はいヽといひ
住寺さまばかりがをさこゑらみせず
どッちらがべらぼうだかとおきてあけ
うらつけを片々持つて四つ手かけ
すみッこでちよッこり出來る母の文
さかな臺さしに一度は神をのせ
極月は半月やつてたなをあけ
毒水をのむ氣遣ひはをんなﾞなし
そうもん〳〵と國香の狀を出し
のびるだけ腕をのばしてなわをなひ
てうあしの向ふに日なし立て居る
おこしのてうのをと根津のぎうがとり
わたし舟四十そこらと十四五
黑札をまくとはけちな日まちなり
江戸から京までのこらずすけん也
千兩のうらは今だにつけてなし
米つきのあし元をほるいそがしさ
やかましいおれがひなだと母はいひ
馬の氣で車にのつてわらはれる
かヽみとぎ御部屋のくもり迄はなし

品川は釋氏ぢやう太な月が出る
むづかしさ野馬を臺にのせて出し
ふきの話でてうろうされたはやい
母親のわけもいはれずむこにすね
鳥籠へむすめを入れるむごい事
草庵の一町つゞくひなの市
らうそくのしんもえている土手の雪
くわんおんを道くさにする面白さ
おやたちの耳へはつねのせきばらひ
たゝみさし禿をだいて通すなり
そこから用をいひなよと出來ぬやつ
十四日すけ鷹も出たうわさなり
つきぢからついて來てきくいゝ娘
ほころびと梅で兄弟おちをとり
角大をのけ〳〵けんしはいる也
一把づつ牛をいたわるくろ木うり
わたくしが事さ〳〵とごせひがみ

亥年角力句合

人ひやくは上下を着た料理なり　山水連　文古

顔見せへ旅立のあるらんがしさ　玉川連　川里
廿八九にて世帯のめづらしさ　登　連　龜源
五町見て買ふのが無いか歸る也　伊呂波連　洗路
加賀ばねをひらき西八條で舞　玉川連　五扇
めつきりと禿まんぢうくさく也　井升連　金龍
こがね作りのさしもので姿出る　山水連　文古
渡し舟乘つて思はぬ人を待　櫻木連　律長
毛せんでいせ物語よんで居る　杜若連　山青
晝螢籠へふり袖かぶせてる　櫻木連　西下
居眠をきせるで起すむごい事　御幸連　故雁
饅頭に目鼻がついてやかましい　山水連　冬始
薄でまねいてはもはや惚人なし　杜若連　下時雨
奴ふみ臺でさくらへ手が屆き　錦　連　水府
所こそあるに吉野でたゝき合　柳水連　桃李
ほつぺたを窪くするのが一歩也　眞砂連　五盛
せと門（かど）をすとん〳〵で廣くする　伊呂波連　律長
けちな祭は人間がだしを引　同　洗路
九はいめの茶漬の所へ猫間來る　玉川連　五樂
大のをとこが八人でしけを喰ひ　井升連　眞乳
宗匠へみのよかさよと土手の雨　玉川連　五扇

とうふやが紅葉を付る譯も有り　井升連　眞乳
錢とりに三十二まいそめぬ也　櫻木連　律長
ひだるいぞせちをいそげと爪を取　柳水連　五連
踊子のはなし大きなうにこうる　牛込連　龜遊
にこついて一人か二タ人富塲出る　櫻木連　駿岱
跡乘にそろばんの入る十五日　唐崎連　左秀
あんこうはきんたま斗り殘る也　錦　連　二浪
おッと暖簾を賴むときのじや言ひ　井升連　八橋
梅の花二枝三枝武者が折り　杜若連　松翠
あごで蠅追ふやうな馬常世持　玉川連　里旭
ぞうすいの側ではたきを拵へる　山水連　魚江
凧の糸かへとからぬき五十遣り　櫻木連　木綿
釜底で米をといでる一人もの　玉川連　里旭
御せん籠から餅の出る月迫さ　朝日連　甚可
とんだいゝ間だのに娘うッちうち　御幸連　一甫
にくいたかのゑにはこまらぬが女　井升連　金龍
首のすつこむ迄出合ひしいる也　山水連　冬始
高倉はおいとしなげにだきこまれ　同　同

二會目

つねやるとあいそづかしな扇也　櫻木連　木綿

大三十日こゝろくもなく妾彈　伊呂波連　洗路
隣の三味にたばこぼんたゝいてる　玉川連　五鶴
ほら貝は吉野の町をねせぬ也　風雪連　吉印
緡へ押込んで仲人ひらくなり　玉川連　五鳥
よしのから猿に西瓜を投てやり　風雪連　田道
浴衣くりやよと言捨て嫁しやがみ　玉川連　左淩
櫛をさし直すが笑ひ仕廻なり　兜　連　含丸
つら中が醫でむすこいやといひ　玉川連　川里
あふぎ箱買風呂敷と百で出來　山水連　東里
美しい花をちらすと二十七　井升連　宮戸
渡し舟淋しく乘て鑓を立て　櫻木連　清江
戸を立てる前三夕の拂ひもの　山水連　木綿
二三げんよろ〱すると日が暮れる　櫻木連　長笑
かいどりに月をかくしてよめの禮　伊呂波連　洗路
ふなやどへ上下をつむ大一座　櫻木連　遊里
數の子くふなと上下着せて出し　同　芦露
あふぎ箱買はふは遠きはかりごと　山水連　烏鵲
逹さまァ我妻なふと石に成り　杜若連　下時雨
姉のかん病も二タばん息子うり　玉川連　五鶴
なさけまじりに酒の儉約をする　錦　連　紀來

やろうの娘わがまゝをいひ通し　登　連　文器
だゝくさな樣でも只はころばない　牛込連　龜遊
澤山さいせ五さんでもかた身賣　若菜連　永印
片あぶみまッかなやつを紺屋干　玉川連　文車
張のなさ奴にも成り田をも植ゑ　山水連　木綿
たいそうなこまは念佛にて廻し　櫻木連　其林
しやうじん日もう何ッ時か／＼　柳水連　其水
酸漿をのませなつたとどち狂ひ　御幸連　里蝶
品川のどらはやぶれた衣なり　鶴龜連
あぶりこを嫁繪双紙であをいでる　御幸連　一甫
十三日富札の出るはづかしさ　山水連　花江
しいる時すでに兩方たつところ　井升連　金龍
おそろしい空だとたんす仕廻也　柳水連　石斧
たゝき集めて貳歩無いは恥紅葉　玉川連　五樂
なんぞ聞こうかと代脈くろう也　柳水連　石斧
新都では海ばつかりを諸卿ほめ　同　桃李
十月のとなりへ布袋見世を出し　玉川連　不淺
いゝ宗旨あたま丸めるぶんの事　櫻木連　出印
首の座へ出る氣で賴む剃習ひ　杜若連　五扇
しけかして鰹を二本半分くれ　櫻木連　靜風

にぎられた片手疊をむしつてる　風雪連　古泉
ひとりものもちろんの事持佛なし　伊呂波連　琴亭
手をとると片手で櫛を深くさし　玉川連　鼠弓
うつむけに寐た傾城は手におへず　御幸連　歌遊
俵のついでに鯛迄ぬすまれる　柳水連　石斧
此枝がほしくばゆびを一本づつ　杜若連　山青
噍をしからうと園ひのひなをほめ　櫻木連　南星
みろくからよめ百萬年迄にげ　玉川連　五雲
猪牙と車で藥屋は粉にきざみ　山水連　諷々
心中をむさしとう／＼祈りのけ　錦　連　水府
釣師にたのんで八百工面する　御幸連　舟志
急用であたまを持つてあるく也　山水連　啄梓
とつ樣のそばへ斗ヵ寄るむごい事　御幸連　歌遊
催しちや出られませぬと土手で言ひ　玉川連　四郭
胡麻揚の香ひが下駄におつけされ　朝日連　長可
凡人の夜具とは見えぬ三つぶとん　玉川連　五鶴
せめられて下女留守の事有ッたけ　同　同

三會目

奥座敷しらせて來やと鈴を振る　櫻木連　黑兎
ちいッさな羽織を貰ふ勝角力　朝日連　長可

紫をしぼると船はくれかゝる　櫻木連　普歩
花よめの氣づい三年過ぎて知れ　杜若連　五扇
來た晩はけつして他見させぬ也　錦　連　紀來
百からは少し手のこむ神樂堂　抑水道　石斧
ちう王のぞら人だねがつきる也　同　風頭
禮ふくでちゝをのんでる十五日　櫻木連　出印
下總でいつた一ッこく百のこと　柳水連　石波
赤みそにこけがういてゝ呑める也　櫻木連　木綿
ちとかしこ過ぎてにくいは妾也　玉川連　左淩
けんひたい佛が內へ入りびたり　伊呂波連　洗路
二つ三つつらをたゝいて白くする　玉川連　水砥
さい人はこよりで髮を二つゆひ　御幸連　長笑
年禮の供夜ッぴてイねないやつ　山水連　烏鵲
苧と嫁と一口交せにひねつてる　玉川連　文車
くたびれたやうにふむのが抹香屋　風雪連　吉印
師の曰玄關でごなれ／＼也　伊呂波連　洗路
下女小便に供舟へ手をあわせ　櫻木連　律長
下女が文書くもんだなど覗かれる　同　同
大小はあれど直段は互角なり　玉川連　五鶴

四會目

江の島へとてもて參る三年目　玉川連　五丸
めぐり逢ふ迄は手の內受る也　柳水連　桃李
夕だちのあした鰹と傘を下げ　同　石斧
不屆な女郎官位をけづられる　玉川連　五樂
目をつり上げて鏡をふり上げる　櫻木連　洗路
三會目みしり／＼とよじ登り　若菜連　永印
跡付けを持たせて藝者船へ來る　山水連　東里
禮に着て來たのを菱の餅へ懸　牛込連　龜遊
面しよくをかへ丈ヶ長の禮に行　玉川連　五雲
長事御たいくつ赤く着かへさせ　山水連　木綿
地廻が笑ひんすよとゆすぶられ　若菜連　春水
よめそうにしては短册又うごき　櫻木連　小石
こぢつけた侍の出る松の內　鶴龜連　鬼頭
目をこすり乍もろかくあてゝ驅け　錦　連　舍樂
大吉のみくじで不時の宿下り　登　連　一和
品川の見立てちらほら醉て來る　櫻木連　黑兒
松の供ふだいおんこのつきや也　牛込連　眠狐
新造を宿なしにして義理はすみ　柳水連　石斧
淚はらつてねめ廻すかたみ分け　伊呂波連　洗路
のぞまれたうへに兼好不肖尾也　玉川連　鼠弓

てうちんをうその名人どもをさめ　同　五雲
なぶられて逃ながら下女帶をしめ　杜若連　洗車
高尾からはつきりわかる江戸の張　玉川連　五樂
茶を仕廻ふ食たさ見世へ聞に來る　若菜連　春水
あま酒に少し氣の有る村まつり　柳水連　雲水
池のみぎわに鶴を折り待て居る　玉川連　五鶴
五百兩わたすと首をなでて見る　同　文車
火をたくが下手で船頭呵る也　伊呂波連　琴亭
一人者味噌は買へども音はせず　櫻木連　芦露
十五年目でかきがらへ手を合はせ　柳水連　石斧
ゑゝ聲でぶら〳〵と出る暑い事　登連　淵鳥
一二首はもみぢのてりでゑらむ也　櫻木連　洗路
かたい事袖より上の物をとり　玉川連　水砥
足のおやゆびでつめつて呑込ませ　伊呂波連　蔦故

五會目

いゝ料理喰つて老女の舞を見る　玉川連　五雲
分別が出たかお針の邪魔をする　錦連　紀來
讀んで遣る文は時々くらはせる　櫻木連　其虹
器用さは二月の末に京へ着き　若菜連　永印
歸らぬも道理緋縮緬をほどく　玉川連　五連

惣名代としてばゝアそばの禮　山水連　木綿
むねんさはめくさり金をかりに行　櫻木連　洗路
けどつているに辨當の支度也　登連　淵水
米二俵たもとへ入れる運のよさ　櫻木連　洗路
七所を見い〳〵渡る瀬田の橋　伊呂波連　律長
四角なたいこ遠くからたゝかせる　同　五雲
田樂の方へ色めきわたるなり　玉川連　鼠弓
あいそうにちいさな袖を嫁はやり　同　五雲
三めぐりの鳥居思はせぶりにみえ　伊呂波連　遊至
古ぞうが名代に出る二十軒　錦連　紀來
ゑゝ男おんにかけ〳〵三味ならう　玉川連　五連
おとうとが來ると千兩すてる所　登連　文仲
豚をみるそばに四角な絽の羽織　牛込連　眠狐
きつい事猪牙が壹艘のけて有り　玉川連　五樂
武士の生醉ひ遠巻きに人が立ち　牛込連　眠狐
から傘をなさけまじりに高く賣り　登連　文器
石町の四つには雛の見世も引　玉川連　田夫
死ぬこッちゃ無いと大太刀持て來る　錦連　二浪
切れのちうけいを六尺こしにさし　櫻木連　其林
口説かれてもり胎毒をへがしてる　風雪連　古泉

安房上總ほめ〳〵二三戒やぶる　玉川連　五連
牛の角もぐと女が二タ人出來　杜若連　五扇

六會目

目を明きなようと乳をのむゝごい事　柳水連　桃李
海邊にへびを四五日つかつてる　玉川連　五雲
何かしら有るとはけちな花見也　伊呂波連　五丸
松のかげばゝァ一ぶんかき寄せる　櫻木連　木綿
三味線を下げてゝよめをそ引也　杜若連　五扇
ひねつてほうると一曲舞とかや　玉川連　五雲
かごの跡二タ人で傘を一本さし　錦　連　二浪
すご六なかば國忠さま御らく馬　櫻木連　洗路
あばたとくしんで勘當ゆるされる　錦　連　紀來
女郎のねだり事はきもが潰れる　玉川連　五連
ふけばとぶやうな婆ァと仲人いひ　櫻木連　芦露
首尾の松あたり息子はゆすぶられ　錦　連　舍樂
自らをかぢるなまけた切おとし　鶺鴒連　鬼頂
うわ言のそばに仲人くらうなり　櫻木連　横好
はなしうなぎもふといのを姑ゑり　玉川連　五雀
ちッぽけな蓆の上でどくを出し　伊呂波連　水砥
急用のあとであぐらを一人かき　登　連　文仲

はなねじりとは名斗でぶつの也　牛込連　亀遊
そゝうな蜜柑賣はねこを擔出し　櫻木連　南星
餅ぐわしで見世を圍ふと女郎ふえ　錦　連　紀來
どけへくのこけへ行のと出られやす　伊呂波連　洗路
少しもふさでありけるはあさぎ也　玉川連　五連
ぼうずいのなりだとおやぢ軍者也　伊呂波連　洗路
いゝ姑本のいびきをかいてねる　玉川連　五連
うら町でげい子おも荷をおろす也　登　連　亀原
ゆびのふの前へうろたへもの二人　玉川連　男好

七會目

呉服屋は夜分のていもちつとみせ　玉川連　五鳥
たいくつのあまり荷物をしめ直し　柳水連　雲水
手のひらをなめてる上を時鳥　伊呂波連　水砥
切れ文を頼まれて來て一喧嘩　玉川連　魚交
雪へとび込むが四人一歩なり　櫻木連　五扇
罰の當りそうなうそを女郎書き　錦　連　紀來
〆をかいてから氣まずいちそう也　風雪連　古泉
丸々の中を矢をゐるやうに漕ぎ　玉川連　梅斧
しりも結ばずぬふ程に出來懸り　若菜連　淺裏
かわをかけるとなりそうな松飾　玉川連　五連

およしをかたづけお龜に聟をとり　眞砂連　五盛
顔を見い／＼よッぴいてひやうとゐる　櫻木連　洗路
七つを打つと松の木がみんなひけ　伊呂波連　水砥
放し鳥こしのぬけたはほうり上げ　玉川連　五雀
小ごとまつさい中に花が三文　同　吐雲
はやい事しなのがのぼり立て行　錦連　紀來
鼻原をとつて居るのと見立られ　玉川連　鼠弓
糀町遠いところのものを出し　錦連　含樂
子どもの目には面白いねはんぞう　玉川連　五鶴
ひめのりと札とを持つて天狗來る　錦連　水府
お釋迦樣立のまんまてせんげ也　櫻木連　旅狐
聟へ氣の毒なさしうり見世へ來る　登連　文器

八會目

八月の大汐に客けつふかあ　錦連　紀來
にげたゝけひなさま七分三分也　櫻木連　冬始
いゝ男はだかで弓をとりをさめ　若菜連　一口
すゞで袖ふるからごほり／＼せき　櫻木連　律長
せちからさ息子生姜の市も賣　同　五扇
間の能さは足をぬらして拜む也　伊呂波連　五雲
すめるものはのぼつてちう三と成　若菜連　淺裏

もちでこしらへた人間生姜下げ　牛込連　泉河
くろう性持もよし原通ひなり　錦連　紀來
藏の火をとうろうの灯へうつす也　牛込連　眠狐
てんせい息子くわつたつな買人也　櫻木連　洗路
蜘でも見たらよみそうな三歩也　伊呂波連　水砥
見とれたつらをけるやうな神樂堂　玉川連　五樂
女房のひが目にあらぬさくら也　柳水連　玉簾
八疊に預てばゝァしかられる　玉川連　五樂
ちぎれた歌を花嫁はくつ付ける　杜若連　梅斧
あいいやでありんすを聞き扱放し　牛込連　泉河
足をしばつて田町迄のみに行き　錦連　紀來
御舟はぎちらこぢや息子まだるがり　同　水府
とぶ鳥もおち馬からも落る也　櫻木連　洗路
代脉こたへて死生は天に有り　杜若連　五連
あま茶な錢ぢやァいかね初鰹　櫻木連　木綿
義時ちよくとう二分づつ遣はされ　伊呂波連　洗路
時は今不二へじやの出たあした也　櫻木連　下時雨
情硬いやつ花道をつるされる　登連　文仲
鏡とぎらしいをほとけ供につれ　玉川連　田夫
ばかでいゝなどと息子は讀んで居る　錦連　二浪

見えぼうでかけ廻てるせいぞろへ　櫻木連　其林
金を貰ふにつき嫁がついて來る　眞砂連　五盛
占つて貰ひにあはゝていしゆ來る　杜若連　梅斧
つらい事花莚のうへで四つを聞　同　五英
ふきさするとは數の無い小袖也　牛込連　龜遊
をどりどんお近づきにと三會目　伊呂波連　吟之
わごれめは何ぞとあさぎ大くせつ　櫻木連　洗路
源三位ぬゑとむほんはくもと川　柳水連　玉簾
朝がえりきげんはよきぞ早入れと　櫻木連　其林
二杯目の四手智恵あるやつを乘せ　柳水連　雨譚
白ッぽく田うゑに嫁の目立つ也　風雪連　古泉
うら門でかの御經をごくじゆする　柳水連　雨譚
きゑ僧で西國武士はみんな切れ　櫻木連　木綿
七夕五分の口がいもにばけ　同　东勝
五六國下げくろん坊内へ來る　登　連　文器
石一つ神田の酒でおつふたぎ　伊呂波連　芦露
せきはんのおひねりが出る賑かさ　玉川連　魚交
腰なわの椸でなでつけからだふく　牛込連　門柳
ふゥわりと寐ると所作事おちがくる　錦　連　水府
格子からはなして居るは無いの也　同　二浪

別當はおれだ〳〵と呑みに來る　櫻木連　蔦故
持參金おはぐろしゝのやうにつけ　錦　連　水府
のみをとるまなこは外に有と見え　櫻木連　五扇

安永八己亥春

東叡山麓　星　運　堂
催　主　薩　秀　堂

俳風

柳多留十四篇終

誹風 柳多留十五篇

亥年山之手組

六千餘吟 御たんす町 四谷鳳凰
三千五百卅吟 御納戸町 牛込蓬萊
三千百廿吟 中坂 飯田町錦
千餘吟 若松町 青山眞砂
二百吟 ゆや町 赤坂紅葉

同 芝組

千二百卅吟 永さか 麻布柳水
千百六十吟 二本榎 芝水仙
三百吟 やげん堀 兩國旭
千七十吟 三河町 神田杜若
二百餘吟 新堀端 淺草若葉

同 本郷下谷組

二千九百十吟 春木町 本郷名木
千五百吟 四丁目 本郷古月
千七百吟 東叡山下 山下櫻木
二百吟 片町 丸山風雪
二百吟 大はし 千住登
二百吟 廣小路 下谷伊呂波

丸の内まどから犬をけしかける
ぶつかけを花嫁片手ついて喰ひ
おほそよと呼んで長屋で憎まれる
格子から目で見て鼻でかいで居る
つら中（ちう）へごぜの子乳をあてがはれ
ぴん／＼とおろすは嫁も居ぬ氣也
いよ／＼のだん正宗に手がふえる
うづ巻が細引に成るはなれ馬
文の先禿そろ／＼巻いて居る
花よりはだんごのごらか大きすぎ
かりて來てうち／＼を嫁しなん
宿下り兄を二かいへぼいあげる
こわい顔したとて高が女房なり
百すると大道中（ちう）があたまなり
はなれ馬片荷するのを引て行
嫁のひなかざらぬ内に人だかり
見世を出す前に五匁ぼしをしへ
こりはてヽ男へもどす雪こかし
日の永さやつと寂滅ゐらく也
間のぬけたこと上下で小松原

三みせんの千てうもはるねこをくれ
すがゝきの中を女房のうでまくり
三十九のくれらうそくをたんと買
是さおくびがのびるよと承知せず
花も葉もなくなつてから御本坊
五代めにからの弓矢が用にたち
よしのからひつ切もなく人が出る
めのわらは大きな門につけておき
半月の松萬木にすぐれたり
もみ上とつりがへの毛をおしい事
大凬が五けんつゞきへふいて行
色じやうをさつて元ゆひ上げて居る
目のうへをそり〳〵とおしい事
きみわるくなすのゝ出水こへかねる
ふり袖が立つとらうそくひィらひら
神樂堂三百とぎをふり廻はし
すりばちへ惡魚を入れるかまぼこ屋
能い男に成つてしちを置きに來る
水茶やで見たよりどうかわるくみえ
山ぶしを初てはとが〳〵しくとがめ

もちやそびの中から番太顔を出し
かしへ行事など本田ひしがくし
先ほしか船をまさかごぶつとめる
惣花にばゝァ今わの目をひらき
いまわの時に孫のある嫁をとり
りんすしいすは北てきのことばなり
百五十二まい多いをしまわせる
ぬかぶくろ斗もおはりいゝしごと
きついもの四百餘州に木がなし
もめる筈ひやうとくのあるばゝァ也
顔をしてくる〳〵巻は花ぐもり
ういざんで道具のもごるむごい事
僧正は山ほとゝぎす青葉なり
くら宿で引きおとされる月二つ
秋葉道寺にも鯉のあるところ
口まめで荷をなでられる木綿うり
江戸に居やよとおふくろのみれん也
いつとゞいてもよいよふにけぶし也
ずぶろくを辻番手柄そうにしめ
うたいにもほうへ手をあてわるい癖

てうはんを佛御ぜんは見たといふ
まだ〳〵と先生むねぐらをとらせ
そうおうにすけんも內は不首尾也
そかあよせ二朱だとすけん氣の高さ
ぼうがおやわんでふせてるまつの內
治部いわく此人にして此やまひ
御主さまぶると北條つけのぼせ
國家老千里さきから聞いて來る
夜るの着ものとは大きな無心也
芝居をかつ〳〵して見るさんばそう
つくしへははたでもおやりなんし也
初がつを女房に小一年いはれ
山がへりあたり近所は笛だらけ
大きな虫けらの出たは近江なり
品川へ四つ手一もんじにかけ
旅がへりふきげんな貌氣にかゝり
やれかなしい事だはと母はだき
きうせんを携へぬのはしぶつかき
金花山のぼると三浦夢にみる
おれが家だぞとうるさくさしが來る

かりた子に乳をさがされてちゞむ也
やぶ入を夜ぶかにおこす母のこゝろ
傘はりのむすこと馬のつらへはり
西の國でといふつらは御めんかご
こん禮を打どめにするわたしもり
太平のよめが通るとげい子いひ
百やるとひとつのりけんぬきもつて
ふり袖も着あきてからの病ひ也
內義が一分たしたひな安いはづ
さいをつまみこむは春斗のつぼ
生醉にぼん〳〵つらをみだす也
ぬいて見もせぬに番頭百なげる
大一座おすな〳〵とのぼるなり
ろくじんとう泣くれたとせなア泣
手の內でせなアふきがら廻す也
おどりはありや〳〵と高時はさわぎ
あねのともするのではなしせわに成
もろこしの音曲でうるあめんぼう
けいどうのやうに新茶屋からつゝき
源左衛門あすの朝のをしてやられ

ぎう臺へけつかふざしてひげをぬき
かる井澤ざいごうふかき身と生れ
木刀のづぬけおやぶん持て居る
杉本は他家でふちよせぬおとこ也
圜十をたもとへ入れて禮をうけ
しばりぞめまだしやせぬと遣手いひ
せんひやうはうすきちぎりにぶら下り
そばや口書五十せん御あつらへ
辨天さまだころすなと母はとめ
かみけづりゆあみしせげん手入れする
せんたくに下女はあたまは片荷ずり
念佛をぬのごしにするむごい事
口おしさ杖の下からかりる也
四つ手からなんまみだアと母は出る
天に口なし樽ひろひふれあるき
いゝとむらいがされたよとふれあるき
五月雨を三日てらすは土岐あかり
ゆび一本百両につくあんま也
まッ黒な乳ぶさくわへてじれる也
ほころびと子をとりかへる一ト人もの

下駄やでもよッぽどきやらをぬすむ也
一つのかうをたてやれと母の文
袖斗り持てあほうの二タ人なり
金かりに白水またぎ〳〵行
おもひなしたぼもあふひのやうにみえ
ぼんごから下手にさわると月の事
もちやからよろ〳〵出るは身内也
朝がへりきのふのはぎにみそをつけ
うろしからたかれて内義ぶんが立
とこをくださいと丈夫な男来る
御めかけをとつてのけての御けんやく
あばたとにげたで評判がわるい也
明六つを打つと御立と三うらいひ
先供の中女郎かい五六人
あねさんがたんといたよと尻をわり
さしもの大軍しなのだけ喰とめる
火なわふつてからおとり子うたひ出し
大一座人のふんどし二三人
生酔を後家はけいしして遠ざける
切金を三口持てゝじやうばかま

眞ッ崎でとしまやをいふげびた事
おらァもういやよと帶でたゝく也
せん寺もすみにおかれぬ紅葉なり
しきみを直ぎるやつは嫁をもいびり
あだ名にこまつた借正一ト人あり
やくにもたゝぬもの禿ねだるなり
長者の萬どう不二の根へとぼし
ぶつまけて二足逃げるしつくい屋
ひら〳〵の有る鑓ほりを見てあるき
かッぱッてつかひなさいと遣手いひ
一ト月に風月をくふいたひ事
おつと來たなとそば釜のふたをとり
大一座やき場のぶんも二タ人揚げ
よし町へ行にはまねをせずとよし
よせ申候と竹笠ころばせる
生酔に二度めのぼうも叉とられ
くらはずはいゝはだまれとあわのもち
こしやくさは小西石田がみやくをみる
村和尚たわらやくしを貰ふ也
れんしやうに成きぬうりのゐこうする

ごぜといふごぜ甲州を夜にげする
三みせんはあいつけたりとばちでぶち
せんやぞめばゝさき袖をつッて置
年をへし糸のみだれでかさぬなり
こゐはへもふんだん有ると村仲人
二三人すはると鈴をまいらせる
東寺あたりをはなれ馬〳〵
けがをするはづ錢かいと車力いひ
みんなしていびりましたと松が岡
おのしもしたれはせぬかとぎ女が母
いらぬ事手引をつれていくさ也
おてうぎにのつて入むこおん出され
いかさまにくていな首と住寺いひ
目がさめて見りや大坂に成て居る
てんとうさまがゆるさぬとおやぢいひ
度々ちよくし餘の義にあらず雷の事
やるものをやらぬとばゝァいかる也
あの後家と大屋そも〳〵からの事
どうがわきやすとかこいの下女ほざき
三度笠村一ばんの書てなり

一のとみごこかのものがとりはとり
てゑ〳〵をしたならやろうとゞけ文
よし町にござるたちかと納所いひ
金屛風斗り殘つた御りつしん
血だるまを十七人が寄てほめ
下戸の首二つかゝへて世話になり
新ぞうがことしの市はきついきれ
百官名つんだ所でしよもんする
あひぞうこが出來ましたと戸をたゝき
せんごんはとびこむとこをつかまへる
よばれるとうるものにするなづなうり
おはり勢先づ油やをせめつぶし
ゑい山で大きな山をだんじ合
やゝまたせ内儀おんまくしつて出る
中直り本の女房のこゑに成
きつい込みやうちよこ〳〵とろを遣ひ
見せでうた顏をねぢつてうたふ也
小松ごのしやうじんものゝみかり也
三百里家をたてゝも雨にあい
氣なしにごおんごんとつくおしい事

座敷らう母二三日るすといひ
しんせつはみだけて遣ふかつをぶし
ばアさまへ行ふ〳〵とふぎやうぎさ
地へあしのつく人斗り眞間へ行
おやにて候ものへ御ふちをねだり
あかをかへろとらく天は下知をなし
齋日に切を見て來てしかられる
葉ざくらになると國主の紋かはり
ひそめるものをそり落すおしい事
みらい記にあまくさ切て何もなし
御のたられなさる者かと四つ手いひ
あたい千金の御はなし相手也
まんぞくなものはすけとも斗也
十九文ほどもてないきやらの下駄
かめのふたあけてあちさいかき廻し
くたびれた足へはつかぬ四つ手かご
のり合に前だれもあるかやば町
はなしでもしなはさびしい月見也
まくをとをすが家づきの内儀なり
大根が出ぬとから家にされる所

ぬかぶくろ二ばんだしにて母あらひ
神樂堂しんとう流をふり廻し
御かあさんなどとろくさんきひにいひ
かた衣をかけて貳文がのりをうり
だかれなと嫁ひつゝいた乳を出し
ゑんもない湯屋に一日戸をさゝせ
うんじやうをしたふりをして母にみせ
おやの目がおかぬで美女の持參金
たぬきね入りは北條のかりや也
百やろうはさゝもり綱だますなり
ぼたもちで字を書いたのをつぼね着る
子を二タ人すてゝおや〳〵とんだ事
半疊へならべどの子が目ずき也
おはぎの下の火でもまあ入れやしやう
あら世帯おひめさまだとだれかいひ
いろは藏ゆめみしやうに息子する
鹽あまく見て上野はなめすぎる
長いもを小ざらへとつて子にあづけ
用向きのとなりへたまる一人もの
かへつても膳を出すなと下女にいひ

いたましい貢子をしきみ問屋もち
こうろへたげい子しつぼがさける也
三みせんをだいてたもとの錢をさし
行水（ぎやうずい）の戸板へ日なしはたるなり
げめんによぼさつと品川大くせつ
へのやうな由來一石ばしのなり
むりな事かさぬとやたいばねよばり
藤四郎さまのはつきやこりはてる
弟子の來る程は三みせん音がせず
つるがから番をつとめる江戸の町
やわらかなぼうですけなりくらはされ
藏へでも入れられてはと聟踊り
諷講すむと大屋がとりに來る
よしともへ鳴海しぼりのゆかたあげ
こりやかつぱ十六もんが持つてこい
そばのせんかつぎはばかをめつけ出し
御やくおとしだとは湯ばんへらず口
ちごが淵はなッたらしがしやべつてる
ごふく屋の傘かへすものにせず
切おとし海老藏をしてしよい出され

雨しんぼたい船頭も二枚つき
今とむらいが出るやうに左兵衛泣き
二の六はあみだの道もとび目也
大やさまへは三みせんのしなん也
かゝみとぎ帯ひろどけであるく也
伏兵を置くはかね四つ過の事
廻國ばなし猿が子をゆでました
けしからぬふり大藤内とはなし
鳥のほねあるきを呼んでたゝかせる
いなか下女眞わたといつそつかみ合
ほころびてきらひな鶴によめはのり
土ひやう入まけるけしきはみえぬ也
本かくで行とくるわへおさまらず
あらッぽい仲人をする庄之介
つくだじま女房は二十すしかぞへ
内かぶと見ぬいて武士をひとり寐せ
喰ふとねむがるはよそから來た夜伽
にわか雨四つ手に禿ふたり乘り
ちよこ／＼と火を取りに出る御新造
たわけめといつてはひげを一本ぬき

ふる斗でもめいわくなからかさや
看病をにぎやかにするきつねつき
てんがいを母に見せずに寺へやり
まゝへ二度さぞや勿体ないといふ
人參のやうにこしらへ三うらかけ
見る目いぶせきすがたにて傘をかり
かすがの里のかりうどはいゝおとこ
でんじゆ事になるうそ土佐坊はつき
傘の禮すむと其角がはなし也
石で手をつめ品川へかんきよする
みやこをうつす我まゝなおちゝさま
此うらにいけしやあ／＼と二人居る
やうきひも元かつがれた女なり
紙くずも一歩にたいこもちは賣り
仲國は西八條へぶしゆびなり
後鳥羽院の御せいとうわつち有り
そら色で行よし原は久しぶり
中宿へ來て紙二三枚うなり
四つ手かごおゝなじやうに心まち

すいぶつてばゝァの茶屋へこしを懸け
やぼなのを猪牙へそ引くのらんがしさ
いゝおけばいゝにとくつのひぼをとき
役所に三時着座するつらい事
せきぞろは御こうの仕廻はじめ也
かまくらの方からひかるものがとび
一さかりちよきにて海をわたす也
里の母うへをぬきやれと世話をやき
大織冠りんしやうじよほどほねを折り
ゑぼしたゝれで出船のじやまをする
どこのかものに見せるとて後家つくり
ぞうしがや御菜も一把さづけられ
さをゝかしなさいとうでへまいて來る
かきやみはとんだ遠くの湯へはいり
やがて見やがれよと雪でうがいする
大かつ一聲たけのこを捨てゝにげ
しめ烏屋今度のよめで三人め
むしをおひ出して毛せん引つかける
二つめは子にねだられるはなし烏
乳もらいの跡へかな棒引て來る

よしあしにつけてもまれる市の正
びしゆかつまの作共いふやうな下駄
たんばのとのゝむほんだと京さわぎ
ほつぺたをすぼめてせなァ吸ひつける
とめて置く葛籠にござとてんとくじ
越の傘かりてちじよくをすゝいだり
御しゆこうよろしき方へころぶ也
手ぬぐいをかぢ屋あたまへのせて置
ため切てござるぞよやと母はいひ
入れずみの有るはすりはり太郎也
町内に人はないかはぶたれぞん
高くら通ひを禿いッつける
死水を嫁にとられる殘念さ
座頭の小べんそられるだけはそり
若旦那さじきとりだとたいこいひ
枝がきのたねを出すのに目がすわり
ゑゝかぶを目くらさがしにさがす也
どれ御供しよふと座頭たれに行
女房に何にもさせぬたわけもの
へん病が來たと熊野で人だかり

ふらちそうに見へるので舟かふね
百ふくろすッぽりかぶる恥かしさ
くらゐあらそい角力とはげびた事
まん中が出るとらく天こしがぬけ
くわうとく寺下におかれぬ百旦那
ほうわうのつばさは月に三度ぬれ
うか〳〵とあそんでねこに小判也
さんや通ひといふ頃は馬で來る
雨合り筆の無心はひんがよし
よぎも無い事眞ッ先で目がくれる
頼光の弓の師匠は他人なり
あやかしがついて屋根舟堀へこぎ
座敷ろう通ふつばさをいれておき
かたのつぎにもと一歩をねめて居る
女房はみだらな中へかへるなり
若後家のたよりになつてやりたがり
せんぴやうははたしてだるま血をあやし
きのふは眞間へいつてのとびつこ來る
乳兄弟ならもつともで事がすみ
あぶなッかしい女房をあばたもち

かちにげの元祖は五湖にあそぶ也
大紋に萬歳つねのはかま也
ぬけ參り留守で生れて首尾がよし
いゝ沙汰を聞いたと琴の邪魔をする
わに口を打つにも女身ごしらへ
四つ手駕歸りに土をふんで來る
在城をしほ〳〵としてたいさんす
口上にしたがい嫁はうごくなり
お出なんしとじやけんなる親に逢ひ
酢とからし買ふ程一歩のがのこり
上下で行くよし原は小言なり
いゝ妹もつて二むらいさまに成り
いものある客が月見を仕廻なり
二タ人とはしたてゝの無い唐衣
花よめのふざけたぶんで三ンを下げ
いふことをきかぬ生酔木から落ち
舟を待つ内仲人と伯父が來る
金箱をけいせい枕元とに置き
朝寐のぐるり紙くずや切れた三ン
大三十日おやの代にはしよつてたち

おごりがましき事の無い角兵衞じし
白石は五百手程も先が見へ
にが笑ひ女中の中に一人居る
初會にはあてがいぶちをくつて居る
紫をその目で見るがやかましい
三歩につきもの多くこわい事
口書になんにもいはず思ひきや
大さわぎ五町に客がひとりなり
近所だにだるま見世ぬを根葉に持
かりもので見せに後光が二日さし
しかたなくよめ一チを打ち二ッをうち
ふり袖をころもの中でときちらし
ゆふ王のしまひが本の笑止なり
古近江といはずに鳴るをかせといふ
近所から來たとは見へぬ白拍子
りつぱな武士で本宮を出るなり
くろはこうとうむらさきはそんなり
紅葉にたへずものいひ出來るなり
有がたい八百もいふ江戸の町
御てんもの中におはれていそぐ也

見れば見渡すで梅若やめになり
保昌を江戸ことばにてやりこめる
ちえの出ぬ時はこたつにこしを懸け
穴山がうめるそうだん相手なり
それなどがしれたらと母判の事
さつたばんもちやさとうで夜を明し
四つ前は老いにけらしな二十けん
かんじんの所を萬ざいそつといひ
二つ三つ帶ひろとけで親父ぶち
ごふくやの子もおいらんも持て居る
泣ながら氣ばつて母は雛をうり
るつうで居てヽふり袖のしうち也
けいせいに女房めんだんする氣也
うわついて日よりと雨の中を行
いしやの駕先でしよしなを一人する
なづな賣かけねをいつてしかられる
ちよきが歸るに石舟は一つとこ
門禮に追人のかヽる中のよさ
目をほそッくしていたゞく鈴とへい
おれが目をねむつたらばと名句也

けいせいもたまにはきついくすり也
とりませた化ヶものゝ出るしゝん殿
こぶするめおとぎに付いたあすもらい
三會めきつと一歩のしりが來る
兩方をねだつてむすめしかられる
大一座下戸ねたがつてしかられる
ざッくばらりが氣のかたをつれて出る
へつらはぬ男はむねが淸いなり
行まはりかんまわり喰ふ柏もち
お妾の古さとさむくねだる也
まよい子は天狗について來たといふ
まつくろな若衆をつれて江戸へ出る
奧家老まだぬり出來ぬかとせつき
塀のやねふわとこんだは數右衞門
つゞきまして能御天氣茶番よぶ
やさをのこかりるがさいごよこさない
あんばいを內中(うちぢう)させる下手料理
茶に醉たふりで丸わた姉にきせ
だがなまり武士といつたと妾せき
さてつよいはッち坊主と御所さわぎ

たゝきあつめ源三位三百なり
仲間われ川さきどまり二三人
大一座しろうと方と茶屋でいひ
めがたきはうつ方がにくていなつら
ゑい山で見おろす時分つかゞ鳴り
じや〳〵馬にひたちの伯父御くいつかれ
出があるに早くと馬のあしをよび
おたけどのどうだとぼんぶ尻をぶち
てんぐふりつけで入道をどる也
みんないひ切るとせきぞろやめる也
切おとししよりやうのいしゆでつかみ合
たいげイにじやらけなさいと出來ぬやつ
いものかわもちッとにしてひよくらぬけ
それのみでをどり子ぐつとはやる也
さる廻しなげると杖でかきよせる
はんゑきが首をだいなし棒にふり
そのつみ斗りでお七はにくまれる
切おとし八つ時分から火にこまり
けぶをそッちへふきやれなどまけたやつ
きんつらをせひ關白にしやうといふ

ふるしきで半分つゝむ小間ものや
かやば町一番舟は手ならひ子
おそく來た大工あたまがひかる也
ふかやぶはさすが蚊の出るお歌也
わるい道馬士はけんぴき迄よごれ
こんないとくんなとむすめ使也
是和尚火をと茶坊主つかはれる
此ぬしなべとあるたらい馬につけ
十八町あなたへ僧は四つ手也
さかるからほえますと檢校の下女
下手のまりはやくよこせとせがまれる
かさぬやつしゆ〲物入をいひたてる
官軍の惣大將は朝寐なり
かんなくづ扇子ではらい御使者坐し
さくら田のやぼへいゝなと遣手いひ
年禮を一けんふやすにわか雨
高もりはくへぬものだと母しひる
案内がせつかくしやべつても見ず
若いがきごくありやうよく持て居る
つみらしさ座頭の女房うわ氣也

旦那を土手で見かけたさやぼなやつ
うき世をのがれとうふやのせわに成
りんじのもの入土手からちィらちら
みんな馬だといふ所へ國家老
娘にかぶりをふらせるやつがあり
もちやれだがあたりさはりの有る女
身がはりの首はくわぬと番頭いひ
奥さまへつとめる頃はにうわもの
細引へよこにかけるは數がなし
御花見のるすあいきやうの無い女
みせ馬だのと水茶屋もけどる也
日本ばしかつ手に足のむくところ
ふり袖をうごかすたびに歌がへり
尋ねるだろうとこくぶを四つ手すひ
少しといてはうすどんな貌を見る
御ほうらつおッぱだぬいで留る也
ちよつと見せやれとぬき身を下戸納
しゝが谷みんなが道をかへて來る
おはぐろを付て仕廻とばゝア來る
勤でもわッちやうそはとおつにつき

きうな上京ゑゝ肩につかみあて
はまやきへ一客穴をあけはじめ
三升やのおろしへ大はまだこざる
ごうはらな乳母は人形町に居る
忝いにかゝつてる町の春
綿の弟子文をおとして一日來ず
此首をくゝると母のこわいけん
元ゆひを切るとかけ出す大三十日
一本出來ると古ぼねかいと知れ
かんきんがすむと居ずまへ嫁直し
わきの僧納豆箱を持つてかけ
下女の供いま／＼しいとでつちいひ
ぶちまけて淋しくかへる四つ手かご
御ひめごのとは僧正のことばなり
御くろうな事上下ではなの山
四つ過のしちや戸板へあなをあけ
ぼう組近年ない雪しらんかほ
度ごとに御なんをわたす下手のまり
いらぬ事よめ田ばたからこしがぬけ
赤地のはわッちと妹よくはなし

芝居のじゆずを切やしたと世帯じみ
びくとさほもたせ車でかへる也
ちつと居てくれろとなでるくれの金
八兵衛といふ若衆來る春の禮
出陣もせずに内侍とつくし也
いぬをすて中をかつ込む松　岡
四つ手かごふだらくせんをのり廻し
くらやみのゆかた後妻ぞつとする
檢校はわるいおごりをおごらせる
客星の光りうしのふ後の月
屋敷中わッちが思ふまゝにする
おほめ申た斗りさと車力いひ
みな先へかけろと御使者馬に乘り
飛車角を勝頼せいてたゞとられ
さられるのだにぼうもいこ／＼
末の松山は今でもこしにくし
子の使かへるとねだりことをいひ
すい口でこゝらのあかをあらいなよ
しおくりがついたでまりにうすを置
かすそうでいけんがましい事をいひ

まちんをくださいとすねを巻て來る
穴一はいろはといつてたゝく也
いやならばいゝが嗅アにそういふな
わる口がいやさに夫婦べつに出る
あなぐらは山師の内にむかぬもの
大そうなかけおち安部が見つけ出し
人さまが來るとまゝ子を目へ入れる
ぬれるよりましのかんかと菰を着る
すまぬ事師匠折々ころぶ也
百の錢むこつかひ道いひたてる
手もちが無いでやるまいぞ〳〵
まさかりとどてら一つでかゝへられ
あだがいつたかにこ〳〵とさぐる也
ぞくの僧正は座頭を目のかたき
佐吉めは仕合ものと和尚いひ
へつらわぬあきんどの來る淀の船
にわか雨伊兵衛がとこに御座の時
跡をとるやつが位牌を持てたち
どこへでもくつゝいて出るばか亭主
水油四五まいじやまなくしをつけ

松の内夜そばしろうとうりもする
しうとばゝじゆずをはやめて小言也
その當座雨のごとくにてんが來る
ひやうし木の尻をむすばぬ面白さ
涙ぬぐひさアはかりにかけなんし
まッくろなすだれの中であごをふり
丸わたをたしかにかぶる不二の夢
ぶたれちやあきかぬと寄せる本能寺
本の首とうにこかしてのんで居る
一わりはくもにかくれしものがたり
ものにかゝりでしちりきのけいこ也
神主と御寺おし合おやくがへ
左まへの子を新ぞうだいて來る
敷ぞめは先づごふくやでもてるなり
やう〳〵と火宅を出て御慶也
から樽をみんなおろすと馬に成り
妹のほしがる小そでみんなうり
おく家老朱にまじつてぐちに成り
すだれからやつぺしのぞく御めん駕
行水へ爪のにほひをさぶりうめ

來て見ろと生醉花をふり廻し
らくてんは日本一のはぢをかき
ものすごいもの冬の女郎と月
おきぬかとかやのくわんにて顔をなで
若いうちだれもとけい母おもて向き
うなるやつ巳待が二軒あるといひ
たゞのまんぢうでなきゆゑ事が出來
わらびをくひながらいつぱいをいひ
百さじきにはぎやうさんな作りやう
行く時に小道に寄ていしやになり
あざをまじ〳〵見るとよめきえたがり
十五日猿廻しほどじぎをさせ
おそなへのとつかへこするいそがしさ
中ゆびへ金をしばつて禿かけ
めう代をとつてわづかな住居なり
仲綱も折々つれて夜をふかし
にわかごせ母はなみだでむみやうゑん
二十萬石で澤山だにたくみ
あくたいにへそをかゝへるきう見廻
山うばの能う金時が事はなし

下に居ていふ禮でなしおかたじけ
うそをつきなさいと袖でたゝく也
ねすごしてとんだうら道など通り
傘の事池田でもいつかしり
はかまなどぬぐとうるさく四つ手つき
さみしい町ににぎやかないせ屋也
友なりの道くさ祝儀事に成り
來るたびに茶をほうじてく里の母
うらないしやみやく所から切て置
でんがくにすゝきおやぶん氣にくわず
爪り坊を三疋つれて角兵衞じし
酒が過ぎるとしやぼうをばとりあげる
人が見るとはしてとつたことば也
二度はふられぬと母おや着せて出る
ひげをぬき切ると辻番しらみ也
おもしろく無いはおやぢが尻目也
ねこのぶんしなの度々ことわられ
そこでいはれざよしなよとむごいやつ
かくし引出しを明け母ぎよつとする
げくわの弟子だれぞ切られろがして居る

さる澤の土左衛門を見に御幸なり
かるわざの切にあふぎの上へのり
おとなしくするはそんだとにじり寄
ひぢりめんゆくところもにたちわける
ろてうさんから拾雨とくうな事
たねせんがくわんとう方にのこる也
よめのへを聞いたものは長者になる
ぴい〳〵をふくとおかしら首尾は也
火ぶくれを見せてぎゑんははらを立
氣の知れたみやげをみると御用よび
松永がりつぷくさんだ茶釜なり
とびこすとくわアんと琴へひゞくなり
大やろうが義とせきばんよびあるき
いまだかせざるがうりかつやうじみせ
ぬゑはへんなものならひに角兵衛じし
はなをつまむのは乳もらひしらぬふり
ねことばッかりものをいふふてた妻
大一座松葉の中へつゝぱいり
おくびやうな事大こんを喰て居る
はらだちのきせるの下を對に逃げ

ばいしよくに月花をむすび大不首尾
是ほどのんだら醉ふとかねへ入れ
指をなめはいをつまんでよめをねめ
後の四つ三みせんひきとあばた也
まごつく中へ法性坊さんだい
いづみ町下駄とみそとが名が高し
耳へ口あてゝそばやへ下女をやり
緣遠さいくら見せても茶にされる
おのれまあいつこかしたと土用干
ちつきよしてそうめん斗喰て居る
いりほがに詩を書いて出すにくい事
きつい行過ぎ傘しよつて中の町
客ぶんをやめねばならぬはらに成り
そろばんで人をあつめてかたきうち
けいせいを見に斗り行くけちなやつ
じやうをはり過ぎて糸だて引かぶり
奉公も松坂しまをこえてから
くされてくると十六にうつてやり
何がないしゆにかけ針をぬいてにげ
犬もほうばいひやう定に口を出し

ぶにんそう片手で雪をかいて居る
ふたアりがすッくと立つとよめはにげ
無い袖をふるに留守居は氣が付かず
せみがなき出すとお世話に成ました
かたびらの初會大かたうらがなし
參宮の留守のもふけは男の子
今でこそわらへとてうしばなし也
あてがある松過迄と長田いひ
むきみしぼりを着てあねへ出府する
古ぼねが無いと一日ぼうをふり
人立の中からたわらひよいと出る
はだか身をみせるも女つみに成り
町内のうちでおどり子おろすなり
月過へおんのべて置く袖の事
お内義がたつとはさみの落る音

子正月角力句合

一日はいなりが黑い斗なり　鳳凰連　文福
鰒(ふぐ)を煮る門をばせをは一人行　夕照連　下時雨
三會目いけんしそうな顔が出る　古月連　柳印

乳がひとつ赤子に足らぬ耻かしさ　風雪連　若竹
とぎだての鏡つゞれの貌をみる　同　古泉
ばいしよくの道具としらず住寺植　櫻木連　木綿
顏に手をつくす計りが御奉公　近江連
中町でとらまへるよめふとりじし　鳳凰連　且府
子どもらに八日とッくみ合てみせ　名木連　洗路
さゝめ事天にあらばあらしか月　柳水連　雨譚
丸綿を着せぬ計りの紋日也　紅葉連　鼠弓
仕合なお妾もちをつとにする　鳳凰連　五扇
ぎう臺の上へさん木をならべ立　若菜連　東里
琴の音をかいかねよりもこわく聞　古月連　笑加
猪牙にのりたそう小松そなれてる　櫻木連　大柳
なんにも持ない御禮者ならいやだ　同　花口
その罪を赦し又ぞろよびかへし　錦連　紀來
すわかまくらとも丶引で五六人　柳水連　桃李
鯉をたゝくと釣人は皆かえり　伊呂波連　律長
是からが女角力とそ引なり　櫻木連　五扇
はなしの種と客しよくな女郎買　鳳凰連　文福
慈童うらやみ川まへにて一首　柳水連　雨譚
陸ヵで見ては三文にもならない木　蓬來連　一甫

兄かこゞむさ弟かなげる也　伊呂波連　芦露
只取つた商人が來りや松が取れ　櫻木連　木綿
ぬけ參りあかぎれいゑて思ひ立　伊呂波連　和笛
美しさやれありやうくれこりやうくれ　古月連　兎明
をとこ十七をんなは三十一　井升連　一口
うまいもの喰つて四つ手に二日乘　櫻木連　仙郎
五七日よめ金ぱくでかこふ也　若菜連　清江
おもかげがかわつて小町寺參り　朝日連　律長
千両のほこりを島へ置て行き　鳳凰連　五樂
藥禮のしかたにこまる二三ぶく　錦　連　紀來
御家中が三人へつてかたき討　柳水連　風頭
御不勝手鄕士が娘嫁して來る　蓬來連　菅江
あやしげなふり袖出してお氣の毒　柳水連　雨譚
やぼらしい事傾城にうそだろう　杜若連　亢樺
やぐらの燈夜光の玉をかゞやかし　櫻木連　律長
くすり箱もたず品川さして行　鳳凰連　五鶴
雨風のつ丶かけて來ぬおだやかさ　風雪連　古泉
い丶傘を持てなにはや名が高し　近江連
いそぐ酒つるんだ所で引つたくり　鳳凰連　文福
萬歳や才藏業平をかんじ　蓬來連　泉河

てい主が死んでにぎやかな内に成　伊呂波連　洗路
そわせて御くんなんしさ神を拜み　櫻木連　律長
喰摘をあらすは勝負よわいやつ　風雪連　五蝶
おしい事串柿へふり袖をかけ　錦　連　水府
百旦那斗りたすかるせんがくじ　柳水連　雨譚
もうちつと杖の方へと竹を割り　古月連　水巴
いきづへをして鋲打のみともなさ　柳水連　雨譚
黑猫のわんにはきざなあわび貝　櫻木連　文古
貝やきにひじきの坪はふつり合　伊呂波連　和笛
村こしの向ふぞんざいやがならび　櫻木連　律長
よのとうふやはぢん香もたかぬ也　柳水連　風頭
目にか丶る所へ置やれと粥を喰ひ　若菜連　東里
死んだま丶六部を置てさかい論　鳳凰連　五樂
よしの山むだ花の咲く四十年　同　五扇
はや打に負けず月見の四つ手かけ　柳水連　雨譚
百度もおつ立られる棧敷也　櫻木連　洗路
一歩無いそうで疊の上をかひ　杜若連　亢樺
女房は六鄕亭主伊賀をこえ　鳳凰連　水砥
若いにもなまの付のはみじゆく也　柳水連　雨譚
古來稀なる賴政のむほん也　同　同

上方ははかり江戸ではちぎり也　鳳凰連　五鶴
梅にうぐひす松の木に婆々ァ也　同　眠猪
琴三味線をうかめると毛が生える　風雪連　古泉
さいの神過禮に出る村のよめ　鳳凰連　水砥
能い後家がなじみおかまを起す也　柳水連　風頭
せんそうじ跡の六日はかするなり　若栄連　カンタ
うらッぽち切て入れわッ〳〵と泣　櫻木連　洗路
すゝはきの御せちがいわひ納也　伊呂波連　琴亭
豆と角斗に見せてよめあらひ　鳳凰連　水砥
くわッ〳〵といふと帝は出來上り　伊呂波連　琴亭
金だゝをいふとまんぢう様だぞよ　名木連　淺裏

催主　山下　星運堂
薩秀堂

俳風柳多留十五篇終

俳風柳多留十六篇

淺草新堀端　柄井川柳

うしの年斗り取次顯はして
永坂や柳の水の蔭清し
蓬莱や御納戸町の風薫る
四谷に羽ねをのした鳳凰
三河町そのゆかりあり杜若
風雪森(しん)と夜るの丸山
廣小路迄もいろはの茶の薫り
二本えのきに古き水仙
旭まだらに兩國の霜
名木の薫りをしたふ春木町
高根白々さくら田の冬
新堀馴てわかなつむ友
八重垣に雷門の和らぎて
春日町にも曲水の宴
不斷さくら木山下の榮(はえ)

前句にかゝわらず古事時代事趣向よろしければ
高點の手柄有、すべて懸句世話事ばいしよく下

女抔の句ゝにあたらしき趣向むすべば手柄多し、
年々の勝句を味ひて考べし、

けいせいはあすをあんじるものでなし
となりの女房まくらがやとりに來る
はし板は平等院へかつぎこみ
ばちぶくろかくして跡をのぞむ也
ひめのりで出る初午のいそがしさ
江の島へおどり子ころび〳〵行
そら色をまくつてちよきへかしこまり
はなれ馬りふんじんによめかけ上り
見めぐつて居る內きつねのりうつり
ひなを仕廻ふと人間の直をつける
半切をかくしてついでやかましい
おしい船いろ紙のはたひるがへし
下谷ではひく市ヶ谷でかたる也
大なんぎ下女女房に成る氣也
兄弟に泣かれてこまるふどうさま

蝿はにげたのにしづかに手をひらき
わらわせなんなと新ぞう來てすわり
むねぐらを女房關口りうにとり
色直し前に一口乳をのませ
喰ふが大きいとしなのを百ねぎり
おかいこの下におやぶん豆しぼり
里いものやうなしゆもくを六部もち
百さじきあぐらをかいてにくまれる
うぬがため春の野に出るなづなうり
江戸中におのしばッかり女だよ
小刀で茶わんをけづるあぶら見世
琴の爪たもとに有たながれしち
そろべくそろにかいた文貫公さま
相應な道具あわびで升へ入れ
いしやにさまかへるはまだもりちぎ也
いきて居る土左衛門はせを敷いて居る
源左衛門またぎまわつたしよりやう也
めしもりにはまりころりとやろう也
ころもせみ大序のやうにうなり出し
なせひきこんだといろはで生酔にち

大法で三みせん箱は持て來る
おやぶんは大きなすて子ひろふ也
國ものがさがに居るのになすへ逃げ
參内をしろと國香をせめる也
ちと御やすみと代もつを取りに來る
いもやおはぎにねめられるいゝ男
きうな井戸がへ一ト長屋ねこをのみ
片荷づるあたまで下女はあらい髪
蔦の跡こん〳〵るりのとのづくり
ちか道をかへつて嫁はしかられる
うわごとをはなせば笑ふ御けんつう
つゝぷすと禿かんさりましたやう
木綿店やねにねりべい少しあり
三つぶさんそばて袖口買て居る
一日に十七人もたびへたち
ぬしならばお氣にいらふと茶屋はいひ
うんを見ておくんなんしと小げいせい
わきざしに似たものをさす合羽箱
着料と見えてつぎものをお針する
いゝ男せぼねをひざてこづかれる

小道具屋寄りさわりにはすつぱぬき
氣の多いやつを門内ごりにする
二三年しらアん貌でほれて居る
むし干をなげにわたしてさせるやう
はまぐりはみを入れかへて高くうり
毛をむしりなさるなともり首をふり
小びやうぶのかげて藥種屋がたつかせ
やまと茶のくわぶんは錢にならぬ也
船ぎりで玉のこしへはのらぬ也
それあたま〳〵とけちな船ゆさん
夜着ふとんあいそづかしが二三人
三みせんに合はせ本田をふり廻し
さかいろんまけた年から柿をかひ
吉原のじやまはすいくわを買てくひ
人穴はふじ權現のうしろ也
宵からしめてねて居たでうたがはれ
首一つふると角兵衛じしに成り
いゝものといふとなくなる春の雪
石にせいあつてかたまる四十七
大らんを入れたとてい主留守をする

ちえはあるけれどぞう程しやれはなし
竹の内りうでかたきをうちに出る
まなづるの方へもひかり〳〵とび
はしる馬にもむちをうつ御目出たさ
貴公お出がなければとさそふ也
なりひらは天のあたうるものをとり
女房をとつてのけてのりやうじ也
すぐな針鯛を半ぶんつり上げる
書は深川あきないはするが町
見めぐつて來て船頭をおこす也
十九だといわぬとお手がつく所
二むかしたつと古市又はやり
くわんおんさつたのかいもの二日也
花ものはいわずやりてをにこつかせ
よし原といつて出るのは正洞寺
のみあきてきせるを廻すほれたやつ
さじきから指をさゝれるめいわくさ
中條へ內ふくらしいあばた來る
足で戸を明けてごばんをごさら置き
さつ〳〵と玉藻唐本よんで居る

肩で打つ迄は花嫁きいて居る
宮の御跡にのぶといつらで居る
七つうちかれ是いたしむす子出る
あいそうにけいせいやけどさせる也
ばせをのうへでかん當をゆるすなり
おもしろくしほをふんだは中納言
どこへ〳〵と牛町へおして出る
じやを下げてお七がはか所きゝあるき
雪見船いらざる下戸のまじり事
いゝふりだなどとやね舟にくいこと
めりやすのこゑをしるべにふねいふね
番頭はとくじつらしいのを見たて
ゆづり葉がたけにゆうれい待て居る
のどかさは武げい見ながら草をつみ
おかざりにつゝまれて行くいなか馬
下の句は月へゆづつてほとゝぎす
さんせんを身ごしらへして女なげ
もふすてる氣で居る顏をそゝのかし
しやつきやうへ戀むすんで六夜まち
竹笠へ御用はなをゝすげて居る

おちついたしかたはくわよふ婦人也
だゝをいふ艜は所に名を殘し
はなれ山けんさくにする女族
こわれないものは御用のあたま也
あべ川はしらふさかわはよつぱらひ
のびをするたんびにみえる遠江
ぞうきんの白いをおやぢはいて居る
むちう作左衞門下戶にひつぱられ
やく年に東海道をちつと見る
ぼうにうつ手なし辻番下げて出る
きずやみもせず切みせをはつて居る
ふところのつめたいやつはもみぢなり
おもしろくないは座頭のおどり也
島田で出したこのかたさごばん出し
つるかめを道艸にして湯へ這入り
先づうちはさもにうりやうる振で出る
田うへ笠禿をよんでほどかせる
江口の太夫内心もぼさつなり
二三羽はまな板へ來て羽をやすめ
むらさきのまくでゆかりの花見也

大國にやうゆうの弟子さんとなし
禿まで生醉にする大一座
はいだらけに成てならの能を見る
けいせいの夜具もえひさるこわい事
こんな金よく見ておけさ番頭いひ
ふじのゆめ三千五百九十一
下の句は京だん上みはござあなり
ぬかぶくろいくじがなさにまたひかれ
ぐわいぶんをすてこさよふの嫁をさり
男げいせい大門でさつかまり
半分來たろさ四つ手へ首を出し
六郷が出てもござるとはばかりちぎ
ごく月は小でこまるとふかくもの
せんさうへさそわれせなア大なんぎ
上がりにこりたかむす子直に行
こつそりとした所和尙よく見立て
遠くから弓矢を持つて娘來る
唐ぐしに和こくつまらぬりんか也
しくじり閑屋おさまりへはつて來る
しゆばいしんちよッ〳〵と人につき當り

師のいわく何手のくぼをすべけんや
おどり子は行くもかへるも大坂や
首桶をあけて船頭めしをくひ
はつがねのごぜすいりやうで恥かしさ
ぼたもちをこわ〳〵上戸一つくひ
しうそうが手あきになると首がおち
ちんばひき〳〵それせめよそれかゝれ
やきみその方へ高尾は行きたがり
天ぢくらう人でわ上御のふ也
はしぢかにびやうぶのひかる十五日
もふうそもむす子かれ野におよぶ也
長い雨大きなをとこてれて居る
とけぬはず元あきなつた女也
ちつきよして居る迄が出る大一座
かとく公事後家くごかれた事もいゝ
おふくろと大門を出るはづかしさ
さらしから見ればつるぎはあかッ下手
かた言でむす子をきめる出來ぶげん
ぶちのめすたんこうがんち大あばた
稲光りかぶろを二タ人ぶつちがひ

羽ねのけた跡が五十四ひろい也
かんむりのきわ迄ぞうりはいて來る
御舟はぎちらことつまる川せがき
間を見てははたけをせゝるわたし守
はらいせに三月半ほどかゝぬ也
四十七中にひとりは百だんな
人立は火なわをふると橋になり
だれぞ手を出したらと母さらまなこ
たれもかまわぬのにふし見町をぬけ
かまくらのまつに三年身をかくし
物さしを嫁へなげるはうつくしい
ゑの木一本であまたゝび和尚じれ
そう又いふ事はねイとそばへより
もふ花はいらぬと遣りてまつご也
もうせんでおつぱらはれる百さじき
どうぞ〳〵とばんとうへしちくどく
馬のつら傘やとすでに書くところ
大きな門をざいもくでしめるなり
うり傘もあるのに數刻見世をかり
はげた齒で女房八つ迄はなしてる

淺からぬうらみひたいへきずをつけ
七月のやかたうばそくうばいなり
しやれるのをお國ことばでしかりつけ
川ごしのしなんたゞつなつかまつり
くどきそびれてかんざしをかりてかき
のみこみのわるさせひなくはぎですて
まッさをな下で糸だてぬいですて
無いものは金ちうさんがうれのこり
かつをよぶとなりはかりで金をかけ
むらさきやゆる〳〵そめる女もの
はじめにははのたちかねるかたいうを
ばゝアがちや淺ぎのんでるにわか雨
ならちやだのそばのとけちなさじき也
山ざるのかむりさるしま郡なり
入むこがやくわんをぬぐとむづかしい
おそろしい御のうは玉のあせをめし
二つ三つかくをあてると御里なり
行あたりばつたりと出るあくた川
是にしておきやれと母もまよふ也
色直しのちのしなんは他人也

ねぎつたであッたら首が二つおち
かねに銘うつうち和尙のんで居る
よくよわせなつたとばちであふぐ也
けい馬をば見ずにけんくわへ人だかり
すりこ木をはりのけて後家はじしめる
さゝやいてやるはのませるごふく店
丸わたをきぬ白むくのおもしろさ
しらがぬき仕廻ふとやりて又ねめる
うき〳〵として見しやれのとこを上げ
くらいばんうぬがこわいろ通る也
ぢん中で人を茶にした琴をひき
ぶこつなるけいせいの出るかる井澤
氣のぬけたふり袖のある御不勝手
くわんおんの地で殺生をばゝアする
一ト宿は宿引きの出ぬふとゞきさ
後の家主かだじやくでわるい沙汰
めしをたきこんで花見に女房出る
がくや新道さと下女がしつたふり
あさつてといつて七書をよんで居る
藤を折たのでりやうしにとつかまり

里がえりしたらさはぽんだも知れず
口とりは帯へつないでひる寐する
のぞかッしやるなと近江やわたしかり
喰ひかけて御用をまねく一人もの
くだりうり小桶の中にかんなくづ
さむらいにつれぎんみしてしかられる
金時は母にはきつくぶさた也
目と口のある人土のだんごかい
うし馬をよけてひづんだかやをつり
錢の遣ひやう大坂知らぬなり
前をよく合せすかねィ生酔め
おくられるわきをす一歩かけて出る
はらひ藏すみに大きなひきがへる
かんばんにいつはりの無い手ならい子
硯ぶたはしからとるはていしゆなり
岡釣りも小おけをもつは近所也
おやぶんのにわに一トばん牛をねせ
わたし舟戸板しよつてゝしかられる
あさのある計平家は悪繪なり
なべの〳〵のそこぬけきやくゑきへ來る

常香がきえてかえり〳〵小言
安い事まぐその片荷あたま也
たッた二三本につぼね耳だらい
おちさまといふなと小式部をしかり
もめるはず茄子を一つ持參也
馬の小べん二三げんわきを行き
通りものはるなへ願をかけてやめ
まごの跡から明樽があるくやう
猫のこわいろでおつてるぶしやうもの
こうはかつてはといもうり三つのせ
夜もあはゝひるもあはゝとあら世帯
ものもふにばいやつて出る手ならひ子
みんなぬしづくとばんしんあまるなり
もう外にくいてなしかとあるきいひ
さんばそう太夫にうはと樽ひろひ
上下のひざへおどり子こしをかけ
そこらまで行つて我金女房かし
あごの無い男がさるをしよつて來る
藏もとなりのだと仲人しめられる
旅は道づれ大名とたるひろひ

りんちうに村中よつて米をつき
山うばに何が御用とやりて出る
すつぱりと直りましたと鼻が落ち
二百ごみむす子いけなくなりはなり
銅だらいあつゆをくんでほうり出し
角力とり一つところをふんで居る
おやぢ橋もふろくするさ願ふ也
主人相しらず鑓もちうッろうろ
木挽小屋ぞうりほり〳〵はいて出る
しよくしやうの醫者はゆかたに羽織也
針と糸もつてお船はぎつちらこ
三歩にぎつてふるしきを禿もち
またの中から引出しを鑄かけぬき
藪醫そのくせにうるさく多言也
白鳥をくふた男を見ちがへる
だゝむねはいゝ正月をするつもり
ついほろびますとすゝめる源三位
しかるにむす子代をとつて二三年
めつごをさつしかこいへのゆずり金
どうぞこうぞするそうで年始にみえ

二三合たゝかいくすりうりつける
二三十やいてくんなとすけんぶつ
見ともなさしらがまじりを苧でたばね
土手でかりたのだとかへす人のよさ
長崎屋今に出るよととりかこみ
けいせいをおつかたづけてごふく店
錢をよみながら四つ手をしよつて來る
井戸や川のぞき六郷さして行
かる井澤錢にあかしたくしを差し
かんどうの内江戸中の湯に這入り
もてぬやつおぬいはなぞとうなり出し
こそ臺へりん病見廻ひやたら來る
なた豆をくわせてせげん直をきめる
なをしよ〳〵とびつこ引て出る
たるひろい鑓をかつひで使者に來る
越後や太七しやれてよひにちられさ
花くわいに行くとさそひに來てくれろ
らんびんでよしひろをぼつこんで行
四郎兵衛に女之介はとつかまり
じぶくつて見てもいけない關が原

ふきりやうなよめゆかん湯をもつて來る
小ぬすみのはくじやうをしてひなをかひ
あたまてん〳〵でかみゆひまねかれる
せつきやうであかねの袖をしぼられる
諸太夫をしまいになでるかゞみとぎ
少もふさてありけるおやぢなり
ひやゝばんの俵を山師五ひやうつみ
かつがれたでいしゆ三十ばかりうへ
鹽まぐろやけばありたけねこが寄り
するが町外にたづねる人はなし
ぐわいぶんをわるく女にくじをかち
ゑんのない白いもみぢの世話に成り
靑空を見つけてたいこかつぎ出し
夜着づつみ角力くつれのじやまに成り
よめのほう丁梅づけの大こなり
とつさんがるすだとぶちなさると泣
あわづからしそつは二月二日つき、
丸一をやめけんやくで角兵衛じし
かりた子によめは御いろをつけて遣り
下町に片岡ばかり町がなし

しらきてうめんがきおいのことば也
今時分だと熊坂も御てこなり
湯がへりに寄ては二三枚うなり
宿下り三をむすんで一つひき
使者のともあつまり勢できふくせす
すいぶつて初會にやたらめしをくひ
ぬかみを里のおふくろ來ていじり
後妻ののぞみあんどん置いて寐る
はて知つて居るよ〳〵とつぎこぼし
ちよきのかしぶく內はまだ靑い也
きせんおしなべてかざりをほめる也
門にぬれてるにばん迄ふればいゝ
つッついて來るで借金めだつ也
能い所へ來たとせい高つかわれる
手と足の長いやろうを冬かゝへ
けちな名歌を大釜の中でよみ
能とまりやの候と高なわでいひ
花に嵐はあてさせぬおく家老
足元で鳥をたゝせる右大將
くものふるまいを他人はしらぬ也

しゆつくわいをいつてうづらへおりる也
傘の咄のならぬわるい御所
いたゞいてのむと女郎はわきへむき
ろこうくださいと王子でそゝうもの
女房のむなぐらをとるたわけもの
井戸ばたの子は寸にして其氣有り
見なさるなよと何帳か嫁はつけ
よひッぱりするけいせいはごくづかれ
美しいふり袖土へもうちッと
はらをたつてもたゝいでも一歩ぞん
あたい千金でかたわの嫁をとり
橋板でつゑをいかして四つ手かけ
まかりならないになん義な若い者
千住品川むらさきのたもとなり
虫干ついでにより政すぐに着る
けんびらき娘あんまりなさけなし
四つ手駕御へいにじきをしてまがり
宿帳をつけると由のきやくはなし
色事にかけてはまめな男なり
二三町出てさしかへるもらいぐし

かべに耳あるところんごは今になし
御りゑんの御使者ぶこつな男也
桑の門から杉の戸へ通ふ也
一きやくへ日月ともにねだる也
きつねつき有るで切米二歩高し
足音にうたいをやめるけちなきやく
明晩はせんだいさまと茶屋だまし
ひき臼ははげしく成るとしまい也
三文がほどはやりてもおんなすり
あじきなく下女よし町の供をする
夜そばどんふたアりづれはみなんだか
沖づりは女房のるすにすゝめこみ
三箱ぬすまれた今戸の左大臣
けいせいをぶちのめす氣で女房出る
主のあだせしめる氣にてよじやうのみ
金太郎わるくそだつと鬼になり
一羽ではいり合のないめじろかご
あのおしやんすわいなと高くうり
もとめればあいつと淺ぎすけんする
こなたには孝行だよとしうといひ

一すじにたすかりたがる百だんな
得がたきはときと本のふ寺へしかけ
おか釣のあふれ大こんぬすむ也
しちりきを眞ッ先でふくとこのばか
一トこぶしあてちかい内きなといふ
しよさ事のしまい兩手に花をもち
にげあしでぬえを見に出る美しさ
まだくれぬもみぢの寺へ息子つき
すげ笠で内儀しんしを張つてゐる
少々はふるも可なりとていしゆ出る
おいらんでうみねんしたとだいて來る
首一つ五萬石餘のかたにとり
きながにもならず六部は七里行
過たるはいしやのさじにもおよばざる
大風の跡にたらいとかゝみたて
首が出て來ると人形おもしろし
頼政は前きやうげんをしてしまひ
かくてははてじとほらがいふきたてる
御せわさんながらとちよきへ文をなげ
もとゆぎわつかんでせなにあひに出る

湯やげんくわ元にんにくの出入也
しなのから來い／＼大根あらふ也
うみ出すと目のある子かと座頭聞き
義のつよいやつにかぎつて錢がなし
きつねと袖をすりちがうおもしろさ
口書に禿もつての外しやべり
せなかの子尻をもぢつてしかる也
今年の市はすりこ木にはねがはえ
一番をかへとばせをかたづける
わが事じやないよとちんをなでさすり
御自身に出てはひつぱるいろは茶屋
もちッとで本のが來るに蚊やへ書き
しうとばゝじゆすをはやめて小言いふ
にうめんに灯のとぼつてる五丁町
忌中のやすみを御用はうれしがり
つらで無い泣むすこづらにする
死ぬと直かすると親和をむごい評
やぼでもいゝからまあこゝをはなしなよ
いつわりまけてお引出す通りもの
ござ／＼を先へしまへとはかをなげ

梅に鶯をせげんははいでとり
ありがたい御代本とうに子をおぶい
大名は一ト人でころも奉加する
御勝利も初てはおかざきからの事
東海といふと大王ぎよつとする
ひだるいをわすれて常世舞をまひ
おはぐろの廻りにおきを下女ならべ
らんがしいものはおりはのたゝきッこ
茶釜をば四五町行くとたゞとられ
たいまつでやくわんやどうこ出來上り
跡の無いしやうこおふくろさかさ桐
居るもごうはら歸ればねからのそん
おがむから出しなさるなとはゝのひな
ろじ番をお供につれるごやのかゝ
あふぎ箱買ひきざみこぶたゞもらひ
手がいの鼠手をくつた本能寺
ゆや御せんなが居をすると水をのみ
たねのないほうかじやうはかまでつかひ
おへんじをでつかくしろとせなアいひ
病人の色目を遣ふけちな事

百三十二文てんかんたゞとられ
ゆすつた金をせな宿にてあてがわれ
ひざくしばつたなときどう腹を立て
いせの御師ひざッぷし迄手を下げる
はなれ馬とまろう事か十三日
いかけやの聲のよいのを女房よび
ふそう第一の大きなごふく店
大坂はなんにも色をそめぬとこ
しろうとが折とふくれるかきつばた
針うりをかえしてい主はしかられる
玉もよりすごいやつだと江間はいひ
まきぞへにすけとも犬にほえられる
すつぽんに椀は御めんと女房いひ
針のさびけづりしつぼころびをぬひ
火ばしが無いとせなア手でつかむなり
下女やぶれさんとうまつたからすなり
かんざしと巾着が出てしばられる
おめでとうごんすとわるい樽をいれ
嫁のるすしなびたちゝを先づ預け
直しよとよべば錠まへはらをたち

明樽へ細引をつけまごは引き
つばなうりさやちりめんへこすり付け
當時はとかく一ころび二こへ也
子をむけてとなりさじきへ襁をのべ
でんちうをひたひへあてゝ馬場へ來る
土手であい今は何をかつゝむべき
にくそうにもりやつたのうとしうといひ
まき車しなのをませて引いて出る
じやがたらはおつかない名のみかん也
おはぐろにおつたてられるかぢけ坊
なきなんすと左まへの子をもどし
高い家大ばんじやくでぶつつぶし
母おやはむす子のうそをたしてやり
小つゞみをほく請取てふざけ出し
あし元のあかるい内に子房にげ
御先祖も子そんもへびでせめる也
つけとゞけせぬと名代ばかり出し
はい女が來イしたと禿かけて來る
借りて着た小袖をもらふかたみわけ
中たがいかぼちやのつるをたぐる也

三つぶとん内へしかせてごらがやみ
女郎のおちをかしらへつけてうり
十三夜琴は月へのちそう也
牛車わらはのひくはひんがよし
かけとりのゑがほは右の通也
けいせいにうそをつくなとむりをいひ
うしみつの頃にのろ／＼初會來る
ざまがわるいとはぶたへをおやぢはぎ
さんぷのじやすい大ぶりなせきばらひ
仲人のあきの方とはでぞこなひ
爲に成る女はむすこきらい也
御心見程品川は見世へ出し
かごには人のないていに四つ手かけ
めしもりかと見ればにしきの夜具也
二タ宿はまたをくゞつて世を渡り
しちやで能しつて居るよろい二りやう
こうまんなしちをれい人置きに來る
だゝッ子にゑだるを付ける初の午
見世先へおろしてのぞきしかられる
まだかみが多いとごらの師匠いひ

嫁いじるやつはしきみも直ぎる也
のきなさいけふやあすではたきつかぬ
やく所を惣だちにさせるきつい事
しなのから京へ出て一ッこくをいひ
あら世帯門にこもそう手をつくし
ぐわいぶんのわるささじきに立つて居る
人の國迄へもくつわおんむける
なげかへす文をおぼへて居なと取り
藥とり直にかへるははかまなり
おふくろになかれてこまる中の町
むこつのをぬぐと目かくしよめはとり
二三十つくかいやかとはらをなで
あのねつでかねをかくした人のよく
きんつら卿といへ〳〵が氣にくわす
しいとまつ見て行きながら遣ふ也
美しいはず世盛りに來た女房
みかん二つでと直をする子のあたま
千兩のごけんあて名はおつるどの
淺黄がうたふのが本のまちうたひ
まつち山から見おろしてくわだてる

三つぶとんしやくやづゝうにきめう也
駄荷をおろすので南州げびる也
ごせのしりつめればだれだ〳〵也
なべゐかけ子どもに水を取りにやり
むだッ火を源左衞門は焚かぬなり
ゐなの上初手どらものにふませたい
たばこやは目をむき出してきりをふき
五文がむきみすりばちを内義出し
高くらへそくらをかいに毎夜來る
嫁の手は高みくら迄とゞきかね
ためきつて置いても女房又まける
はゝをはぎしまいそろ〳〵妹也
兄にて候ものへ大小をねだり
にわか武士けだし妾の兄にして
すゝめてせなどと高時さわぐ也
二タ人づれたさにしなのにはさみ箱
さむらいが來てはかッてく高楊枝
目をさましでつちもぐさをはらいのけ
來年中御てうほう紙代百
大ごまり戸板をしよつてはやて也

生酔はおもしろがつておん出され
他人の馬だとめつたにすまぬ所
おかしいとあッちら向いて神子笑ひ
人をよくするとしんぞうしんだやう
淺ぎうら斗り甚三郎といひ
あすの花下女すそまくに夜をふかし
もみぢでもおうりなんしとよびたかり
むごちない事をばくわいが原でする
御ほうだんすむと五つを打に出る
なま首をはじめて見たと和尚いひ
錢ッきりあそびなと竹光をとり
かりばしのざるゑが有るでひんがよし
たるにこしかけてちいさくもッしもし
十七日のあけぼのは御用ごよ
まごつくと子房もひしほもらふ所
文王とふてのたまわく喰ひますか
土くれをちッとうごかす百旦那
さゝ木の四郎讒言によくあわず
男がけいこに來りや母せうじ立
おかげでもあるかゐんきよとこち狂ひ

梅やしきから天ぢくへおし廻し
手ぬぐいを米屋一りうかむり出し
そら生酔でなんだ大三十日だと
あく迄くらいあたゝかに成て行き
島がくれ行せいろうは片荷づり
琴三みせんを十六で嫁うがめ
正直なもみぢは足に豆が出來
江戸のするがにも日本一が有り
嫁の禮鰹四歩一いたゞかせ
大くせつあそこのすみじやごッそごそ
だんのうらその尾についてざんぶりこ
花を見てやりては貞をやわらげる
半げんくわすり鉢にふく二三ばい
後生ねがひのふりをして見合ふ也
御見たてとよばつて毛ぬき袖へ入れ
ふにあたりへひとりに出るかゞみとぎ
三つぶとん下りこぶしにすいつける
氣のしれたおばたをつれて出合茶屋
羽おり着て車をおすは荷主なり
矢ぶすまをつくつて柿を大しかり

よこッぱらたゝいてあるく角兵衞じし
かつこんで行きやとおふくろだまされる
山出しの下女はまわたとつかみ合ひ
釣臺でくわ遣ひするしつくい屋
草市へよめは着かへてしかられる
諸ぐんせいつねよが爲の出もの也
南無や八まんとむきみの小やへ迯げ
にうりやでつまみぐいするあぶらむし
むだ坪をよしといふ迄ふせて居る
田樂をくわせておいてのみこませ
むらさきともみ斗り有る五丁町
しり切つていやすと女房しらぬふり
だまつてろもゝんぢいだとおつぷせる
さあどうにつきやれとは入るかさッかき
夜そは切お上ミのだよと皿を出す
おれをせく客めが來たと土手でいひ
たまくゝ事に心中の晩に行き
人のよくまん中へのるわたし舟
ゝぢをかゝせぬのが後家のおちど也
通ひ船女に遣ひころされる

したく金來てでい中をはちす出る
七けんで七文が賣るなづなうり
ふり袖はすわつて居てはさえぬ也
門の外よせなさるなと式部いひ
中の町月雪花にことかゝず
目の一つあるがごけんのあて名也
お妾とのろまやつぺし立てをつき
きむすめ迄をそゝなかすにくい後家
さあ取つて見おれと鴫で猫を追ひ
二郎左衞門ひなのやうなを切たをし
國家老にわかさしからぶつちめる
美しさ男へたんとふしが賣れ
ふとゞきの事は和尙のうしろ帶
四つ手無い頃馬やろうくゝ
なべのしぶゑきでよッ程ぬける也
戀はくせもの茶をのむにかゝつてる
一人兩名とむらい帳につき
醉うまい事か三州を長田出し
かいあんじこいつものめる所なり
ほそ音をつかんで遣手藏へ入れ

木曾のざんごうを冬中こきつかい
ぞうりとりむねを二はりぬつて居る
うけ状のかへるを見ると日なし來る
もうひとつごくの玉川出來る所
つけひぼをくつて仕廻ふとしれぬ所
さいみやうじもつと泊るときらずめし
又なかされてお出よと二タ人泣き
名をわすれたのであばたが用に立ち
馬喰町と丶でまんまを喰て居る
みの紙を度々ぬすまれる國ざかひ
二つ三ついびきをかくと御慶也
乳のみ子を相手にていしゆすめぬ顔
とんだり／＼とはかま着をつるし
たんちの丶耳をこき／＼しいる也
嫁の來たばんに見世でも一らしれ
件吉の氏子りつぱな家をたて
太刀の魚新田このかた出來る也
銀ぎせる四五間ちよきをこぎ戻し
太郎からびんのそ丶けぬ男出る
銀ぎせる疊をた丶き／＼めり

うたひ本うなつて見てはゑごる也
中納言ぐらいをくれるしわい伯父
とりにこぬあふみにうへる雪のした
風ふかばどころか女房あらし也
かし元のずるい所にまつが岡
せんたばをなげて手代をくどく也
あわせ一くわんでお寄りの留守にうせ
米のめし喰ふとせつきやうかたり出し
なんもんをかけにかこいの兄に來る
小むぎやきもちツとおすとゆびをやき
いもが子はやりての手にもあわぬ也
せんぞの山庄をむす子らりにする
ば丶ァ笑つたばん帶をとくなり
かり豆の中から馬は首を出し
せんがくじ中に一ト人は百旦那
おがみんすよとはんぞうへ貝をいれ
へをひつたより氣のどくはおなら也
くろ石をた丶きちらしに江戸へ出る
あかしからおこしての來る花の朝
うろおぼえにわを通つてしかられる

しやがんでゝ嫁はゆかたを引かける
大一座女郎はかつち〳〵うけ
すゝはきにあるき袖口そとへかけ
りちぎもの帶をしめると寄りつかず
ほつきあるいて下野の土になり
おつりきな名は傘や六郎兵衛
そのいやさ下女はご板でたゝくまね
ばあさまのはなしはのやをぬけにいひ
馬くづしをうちそこなつた源三位

丑正月花角力句合書抜

催主　星運堂
　　　薩秀堂

ひろわれぬやうに佐殿まきちらし　櫻木連　玉章
御目出たさ武藝を二タ人顯はせり　柳水連　鳳頭
二タ所の三つ井で幟出來上り　杜若連　弓印
横に車をおさせぬは御殿也　柳水連　玉簾
鼻に袖おふへといつてしくじらせ　櫻木連　左満
美女よりも先へ惡女が一歩取り　柳水連　桃李
住吉はたいこはきらい女郎好き　同　雨譚

目に見えぬ物入鉾が不如意也　蓬萊連　田鼠
用人かくであそんでるいゝ男　柳水連　雨譚
ごふくやの庭で帷子しぼつてる　櫻木連　洗布
むすこのきよろう黒い狐で直り　同　横好
高うは御座りますけれど美しき　朝日連　巴幸
おつかけて來て細見を買て行き　櫻木連　和笛
井戸ばたと二階の窓といつか出來　柳水連　峯印
寒いことほうを切られた人が來る　伊呂波連　玉章
馬をひかせてあるくのが妾が兄　櫻木連　律長
渡し舟跡から飛んで叩られる　同
筮で目をつくは八日のゆしま也　朝日連　巴幸
ならずやはむらさきやから嫁を取　櫻木連　琴亭
白拍子ごぶつか舞ふと雨かぶり　柳水連　雨譚
こんじきの文字すをお局は着し　櫻木連　律長
碁のまけ腹でむたい成る詩を出し　柳水連　雨譚
四つ手駕むだ直をきめて乘て行　同　同
いなづまを拜借に行く暑い事　杜若連　五雷
嫁のひな見直しに來る暑い事　若菜連
傘の無銘手詰をかりたやつ　櫻木連　玉章
是さわたくしだと御慶おちつかせ　近江連　肩印

おんはくでもいけないを能因持ち　櫻木連　洗路
たんす迄つらをぬぐふは二度め也　柳水連　桃李
よもや大こんであろうとは白波　杜若連　如雀
そこだから相談ものとにじり寄り　伊呂波連　篤故
藏王權現を語たい中の町　鳳凰連　五雲
くわれないひものを歌人持て居る　柳水連　桃李
青ものを袂へ入れる能い日和　錦連　紀來
八朔にたいこくやみも古いやつ　杜若連　如雀
いでといつたら見せよふと干て置　柳水連　素文
一世一代鎌倉で舞ふつらさ　若菜連　木綿
おはぐろも何もかも嫁休み也　錦連　紀來
まッ黒なきせるにかゝる野懸道　櫻川連　松國
弓を持化鳥を三羽つれて出る　鳳凰連　水砥
二三枚瓦を置いて帳に付け　伊呂波連　篤故
鬼の手をよめ香箱へ入れて置き　櫻木連　律長
是でかりはねへけふのを置な也　同　其林
主人相知らず四五人かゝァもち　若菜連　永印
風まけのするさし物で禿出る　柳水連　桃李
高なわからは手を出して通る也　櫻木連　玉章
や下りに世上にまなこたかい皃　近江連　扇印

はなッぱりあんまり口がきゝ過る　櫻木連　其林
聲あつて形ちなし穴ぐらで呼び　柳水連　素文
牛かたに衣をぬぐをめつけられ　櫻木連　車道
ゆうれいの鳥居で今戸から見える　伊呂波連　律長
花まぐろそうにへかける村ぶげん　杜若連　如雀
五十人ほどと平八ばかり見る　同
別火やにねたふりをして行やつさ　伊呂波連　玉章
のまぬやつ餅のさしみを拵へる　櫻木連　和笛
まけたやつこたつにねてゝ考へる　朝日連　巴幸
若いんきよ樣さと息子へらず口　櫻木連　玉章
きんたまをひろげぬ計り淺黄待　柳水連　雨譚
成ッ丈へら平こうにやつゝける　伊呂波連　玉章
品々は出さず二つ三つ見せ　櫻木連　律長
どなたださ中將ひめはまぼしがり　同　同
たばこ入きめうてうらいだと捜し　同　同

俳風柳多留十六篇終

俳風 家内喜多留十七篇

井に組々の表徳を名のる角力句合
附り番數をつり上た俳名を顯はす櫻題句合

寅正月吉例角力句合

お妾とたてをつくのは古風也　蓬莱連　龜遊
吉原でふられた人の名の高さ　柳水連　堀印
乳貰ひは冬の月へも指をさし　同
後添のつれて來るのは女の子　櫻木連　龜勇
一筋くわんと鳴しそれ彈きやした　鳳凰連　五雷
げびた鯉さしに通して一本下げ　柳水連　桃李
めづらしさ箸をにぎつて考へる　高根連　東水
女のすごさ盤の足がアりがり　櫻木連　木綿
慰みのかいこはちがひ棚を這ひ　鳳凰連　五雷
中宿でそこの有るのとはき替る　伊呂波連　横好
枕元文を書き嫁しかられる　櫻木連　兎明
丈長ではち巻をして肌を脱ぎ　柳水連　石波
姉聟はものにかまわぬ男也　鳳凰連　五雲
藤を見がてら三神を拜む也　高根連　鳳頭
大紋は笑顔上下泣ッつら　杜若連　如雀

衆生縁ある園はれのやかましさ　井升連　狐聲
きうくつにひざをかゝへる面白さ　眞砂連　五盛
によろい手は平に無用と左近いひ　玉水連
どうよくさ一年が十七ケ月　柳水連　雨譚
遣る所でないは禮者のかぶり也　櫻木連　木綿
乳は出ぬからおとゝさんとれやれよ　柳水連　十印
門松をぬくより早くめがはえる　櫻木連　兎明
一日はいふくの中へひなを立　同　龜勇
年始がすむと弔に入る計り　八重垣連　中葉
千日のがれな事嫁思ひ出し　柳水連　雨譚
法橋の娘に成つた方もよし　櫻木連　五扇
はつぬりの羅綾着て出てやかせたり　伊呂波連　琴亭
かぶと首日當てに火打がきをかひ　櫻木連　狐聲
大當り毎日舟がぞろぞろ　同　兎明
おやにもあはす黒石をいかす也　伊呂波連　篤依
嫁の出る迄はまだるい歌がるた　若菜連　淺裏
二十一さと三年の法事する　八重垣連　狐聲
五十づらさげて笑ひに出る女　櫻木連　木綿
おふくろへさはぎ斗と一歩出し　高根連　鳳頭
くろうと好のする息子母こまり　鳳凰連　水砥

ばちは動かず首はがくッりがくり　柳水連　玉簾
ずぶぬれに成て歸ると歌書をかひ　櫻木連　玉章
卷紙をつかずに息子遣ふ也　柳水連　雨譚
字の書いた小判せんなく疵が有り　玉水連
三度ねらつて鑓先で一步取り　蓬萊連　五遊
おかみさんおめへだと鴨下げてくる　櫻木連　横好
かくれたるより顯はるゝ炭だらけ　柳水連　雨譚
ぼうさん御だかりはいやな下心　櫻木連　律長
もし帶をおときなんしと畜生め　柳水連　雨譚
すぐにじゆくだんいゝ男いゝ女　櫻木連　杉壽
まッ黑なもちをたかには見せて置　同　同
おぎあ／＼とつれぶしの耻かしさ　同　同
あたまを丸めてより政いらぬ事　同　同
梅にうぐひすさくらに生醉也　同　同
さい日にかみゆひくてあまた也　同　同

催主　星運堂
補助　薩秀堂

すゝんでるむすめとき／＼よばられる
のりものを戸だなに遣ふ川づかへ

くらつかあ／＼ついほりへつき
あくるあさ女房はくだをまきもどし
はやり醫者やうじをもつてかごにのり
あさがほもつらをしかめるなが小ごと
うけ合が出來て生ゑひしばるなり
女房はかごでかへつてしかられる
前だれでござるとさらぬたかいやつ
くたばる程にどやしなとやりていひ
しいの木は殿さまよりは名が高し
もんじゆのちゑで帆ばしらが能みえる
あてはめた市を息子はとめられる
せいろうで深入りをするふとゞきさ
そこで釣るなといけがきに坊主くび
ゆしまから一萬石の搭が見え
つまむのがやまずみのわへかへされる
さり狀の跡はおかしいいとこどし
ねこまたになりそうな三味庄屋出し
月よりも冬の女郎のものすごき
けいせいのはさみをもつとなさけなし
子心にはやくねたがるたから船

年禮のかえるすがたがすいになり
にわか雨わんもたないこじき也
里人を相待て居る四つ手かご
ありがたい事え丶嫁をめつけ出し
師の坊はぎしやばり妻戸こかされる
かまくらにいらねへかごが千のこり
四五へうの炭うりものと書て置き
おそろしいおんど羽うちわ口へあて
御てい主とねんごろが内義へうつり
かんどうが村のまつりの師匠也
ゑんなきしゆじやう行燈と差向ひ
行きたくは行きなと帯をうぬがしめ
友だちが來ちやけつしよする獨者
過去帳へ首を出してる百旦那
いせ屋はかたく三河屋は大ふざけ
あなほりといつて門松しかられる
まめでい丶なとおや分の御慶也
十月のた丶みやはした仕事也
風ぐるま子のある神のみやげ也
初もの丶内から胡瓜ばかにされ

あみ笠でけつかふざして諷ふ也
やつたくわし禿どこでかくつて來る
うらゑりが立ッて丶無礼ほじくらせ
あわひへもしやうりやうだけに坊がつき
おれもごうるゐとは女房むごいやつ
後家のとしうちばにあてるいやなやつ
まじイりまじりといま〳〵しい初會
貴様とはもう〳〵いやと引たてる
くだりうりびんぼうだるで手をあらひ
そらいろでちよきへのるのは出來心
もうせんへうば二三人おん出され
とん〳〵三みせんのいとがありやすか
あのやねが紫宸殿だといよのじやう
まづい事後家さつばりとあきらめる
よく〳〵な生酔花よめをつめり
うけとりを取てお袋茶屋を出る
是れは百雨と申す嫁にて候
町内の匂ひぶくろて船へ出る
あれでも中に居る事か四つ手駕
けいせいは一ト月早くぶつかさね

日本へ來てはにんそうづらをやめ
十六夜にこと三みせんでさわぐ也
かすがのは四〻人とないきやくを持ち
物くさ太郎へ母きうをすゑる
玉のてんとつたら御のうへいゆ也
おめかけは鬼もおそるゝいせい也
三みせんをひいてさみしいしらげい者
あたまからのるので四つ手ゆする也
初雪や是から江戶へくいに出る
尾張町とんだ所に干てあり
御ねがひは又一歩かと母しかり
色男おれを見たかと供にきゝ
見物もよろこびのある鈴をふり
げぢ〳〵をとるとやつこはおひ出され
方丈さまへお目もじとむづかしさ
房州のくもはれやらぬ品の月
おそろしさしゆもくをもつてはたる也
のち〳〵はといふ內はやこれ〳〵
うす〳〵は女房もの日もしつている
にわか雨かつ込ぞしやう五六人

女房と目黑へ行けば御きげんさ
六月四日犬ぼうは寺まゐり
ろうがいになる前かつがれそこなひ
のむまねをしろと御用と一人もの
ひじをまげまくらとし乳ほうばらせ
がんづいて女房そふくを出して置き
おきるよりはやく御用をよぶやつさ
やうじ屋の間から白い馬が出る
ずい分ねぎつてかへよと嘉兵衛いひ
おごろき給ふな仲國めでござる
にわか雨手足を長くしてかける
いけぬ事こッちからもたせてやろう
一生の御ねがひを母はきゝあきる
つめられて下女すりこ木を持ちなをし
十九出家三十から女郞かひ
御氣のどくながらと出來をつれて來る
引きまどから出て高瀨は米をとぎ
錢がなくなつていひんへこゝろざし
おいづりをかくしてそてつ見に這入り
花を見てさへやわらがぬおく家老

もみぢよりうどんをほめるげびたやつ
しんばしの松で大雨をしのぐ也
水茶屋へ霜月來るは他宗也
目がさめてからしいの木をくがでみる
かういふもんじやだとはぎへそ引きこみ
けいせいを大白にするいたい事
三文が程はおごり子むすめなり
やわか三歩におとるべきはだか也
神佛をいじるもむすめ道具也
口をすぼめるがいやさにこもを買ひ
友なりが近所ひやうたん能い所
めしもりをはかりにかけて十匁
友達がきしやうをくわんへ入れて遣り
犬や馬斗でけちな船ゆさん
箱は明ましたかと來る百さじき
中ぬきの中にこま下駄ころんでる
まよふまいものかひッしとならんでる
せきぞろは御かうくづれのじやまに成
島はとめ舟ははせ行くしいがもと
只今かへりましたとうでを持參

とそきぎん子のあいそうにたびへたち
きむすめはおびをほどいてさがす也
四箱あつめたのはけちな歌がるた
小松原かほりみちくる嫁の禮
すてそうな所を荒神だなへあげ
かん病につぼ皿を出ししかられる
仲つなは傘やのがきにばかにされ
さりゑゝるものかとおかねにくい事
あんどんをとぼしてゝはる十三日
たづねてこゝへくる人は日なし也
うかとめがねで駕を出るはやりいしや
しよき見まひ家のでうぎを見て歸り
きつい事病後のなりを道具也
なみだより外にはちゑの出ぬをとこ
なまみそを杓子のまんませなへ出し
金は無いはずひんなりとした男
五二べたを女房ざく／＼汁へいれ
大門へ目つけをつけてこれを見す
おしおくりねたりおきたりこいて來る
三文がなづなをかつてしかられる

子のさかやきにしやべり人が二三人
いり豆に花とはひなへちそうなり
かるくいつても八文がものはあり
一ふで申されて下女はこまり
心中も男の方はかりだらけ
はかまぎにしやうぞくつけが二三人
太夫さじきだと日なたの藥とり
借金は春永にして禮に來る
もつて見てお釜はざるへ又のこし
そのびりを受てくれろと立つて居る
顔へほんあてゝ車のまへで泣き
橋をふところにして二分とられ
一鐵な男ねづみをうちころし
朝がへり是れまあきけよ〳〵也
ほら貝もふくかと庄屋下女に聞き
うらぼちをくわんへ入れたを後家忘れ
三やくめを玉ものまへではたく也
おく家老さんりを出して馬にのり
ぼんが過ると月しろがあがる也
商賣をほんさにほれてやかましい

十三日かんりやく奉行おくへにげ
ぞうりとりじつはさようとぶちまける
手作だと鹽を諸郷へわけてやり
なりひらのつさをかくしてはぎをみる
大小をころしてさすが妾が兄
行くやつを伊賀の窓からじろ〳〵見
藤房の外はわいろをみんなとり
よんやさ〳〵とはかま着はあがり
娘のはける駒下駄に留守居より
ほうの木を不快な妹おがむなり
まりでなしうたひでなしと女房いひ
とつさんが見ている内はかわゆがり
猪牙のはなづらに一そくやわたぐろ
鼠見物でゑい山きついい人
水茶屋もかんづいて居る耻かしさ
跡へでも先へでも行く能いしまひ
づぶぬれになるは江戸中ふんだやつ
此やうな糸をと錢にくゝし付け
船ちんをましてやるはと坪をふせ
たのまれて足をふみ出す切おとし

あまりこびついて女房にやすくされ
しごくおんみつ明店でおつぱじめ
千ごりを橋からよばるけちな事
こてすねあてゞからびくの見ぐるしさ
たのしみは嫁をいびると寺參り
おんぢいといふなとせげんしかる也
やあちよのはじめのと羽うちわをあて
ようわすれる人ときせるたなへ上げ
四〻人で土手をくるのはまりくづれ
ぐれつく橋をたのんだがおちどなり
さあ／＼どうだゑゝといふとこへ蜘
まんぢうはくわずそうめん喰て居る
木綿屋はまかりませぬとぐつとしめ
こゝで知つてさとてうつけ斗する
伊豆もよろしうと小聲で源二位
重箱へかけそこなつて寺へかけ
女房を持て人(にん)そうづらになり
いゝさらさ人をちやにして鳥を書き
いしやうあらためあつたばん女房逃げ
ゑちごやのてらへひでさとかねを上げ

地女にひれつくむす子高がしれ
去状のそばをころげる火吹竹
からびくごさほを車につけて行き
口のこをはねるで御用はげむ也
かなしくてならぬに鬼になれといふ
ころもをばぬぎなとかこい内氣なり
朝よりは一字すくなくかねをうち
母ちよきをあがつて三つ四つよろけ
王子からくさいきつねがついて來る
はかりにかけても高尾はぴんとする
人ぬしをそばのついでによんでくる
かい帳は五丁二丁でおつふさぎ
紫はきでん淺ぎは身ごもなり
おかしさは座頭やみ目をしよつてくる
かゝさんといふ内むすこまだくへる
へらがあるのにのべ紙て石田ふき
三年の戀がさめるとりゑんなり
あわれさはぎおんばやしに三味がなし
松下は日ざん用ではがてんせず
女房にさくら／＼とうたわれて

高くらのむかいそうかをそゝつてく
すりはり太郎は近江無宿也
いそぐよめ一さほもどすわたし守
似合つたといわれて娘子をすてる
松が岡わらでもたばねさせぬ所
ゑちごのけんしんかけ直なしのいくさ
うめんめへあぎやうとよめはかゝりて來る
かけごへの無い四つ手にはせげんつき
白かゝにしなとおはりに見くびられ
心中の座敷をかぶろかけぬける
蓮を見にむす子を誘ふいやな後家
はやりいしや手紙を持てかごに乘り
にげた朝まづしづかにさ〳〵
三つぶとんうんといつたがそれッきり
ころぶはず大きな坂の近所也
うすべりをまくると本田によいと出る
もッぱらにやけをむねとして地紙うり
のぞきこみ〳〵かみゆひさがし
生酔にどぶをおしへてしかられる
時鳥ゆだんをするとなきたらず

うつくしい虫船ばりへ出てまねき
まゆげのないのが禿にこわがられ
うへ下へ着るのはけちな雨やどり
祭の子わらつて通る内のまへ
ねんぶつと三みせんやむと雪に成り
地下人が五つに折るとごみに成り
坊主もち生酔とんだむりをいひ
はやりいしやとなりの娘うつとしさ
三會目ちつとは女郎かつたやう
そのじゆずをしまつてくれと土手でいひ
家の有だけはごふくやくばつてく
母くろうびらしやら斗り二三人
大のもぐさをくださいとまゝ子來る
男のらうがい五町でなをすなり
何ふそく無いと檢校ほめられず
二つめの咳で女房にかんづかれ
着るものゝ色を聞いてはおつかける
じやうぶだん鬼の念佛嫁はきゝ
かゝアたち出るは〳〵と大坂屋
第三はばゝアに一歩やりぬらん

まきがりがなくば手ごわいかたき也
なんのべんてんとあたまをふみつぶし
横て寐て見りやたいがいのしまい也
大國の美人尾州に跡をたれ
廿二日にしつけとるいゝ着もの
とびのり〳〵こぎ出す月のくれ
やろうのけいせいおつてが五六人
女房もちほれたといつてつゝこまれ
しんぞうは後家になる氣で請出され
公家衆に似た人ひたいやらかされ
十三日五百のあたまはりまわし
みそづけで亭主湯づけをおしやうばん
御湯立の跡ばアさまのお江戸入り
角の石やう〳〵いきてすいつける
うれい三重で母おやいとまごひ
わつちやたべゑせんとやりて置やあがれ
つれてうたつてくれおれと新むけん
すゝき田はあそんだゝけがとくに成り
時政はかすりへばかりまわつてる
小寄講にて見合ふのは二度め也

もろこしで永の御たづねじよふく也
目あき千人じやもつらはうれのこり
三つぶとん下手なまり程足を上げ
したを出し〳〵ゆげ村へちよくし行き
かこはれのちんやろうをばほえる也
かた〳〵へ二本ふんごむ十五日
門に馬たえぬがむらのはやりいしや
出すまじき所で淺黄武士を出し
くま坂が手下寐て居るやうに死に
わきの僧いぢかつて居て何がいゝ
手を鬼のやうにしてよめかくしげい
七けんで七文がうるなづなうり
三めぐりで日ぐらしのなくいゝ時分
我はらがへると子もりはかえる也
新茶屋でわうじにうつる恥かしさ
おもてはわらじうら門は弓矢也
あらい鯉くつてつばなの直をねぎり
大わらい富塲でしやくしおつことし
ぶちまけて四つ手四しんが一ツ四也
堀井町うちわと見せてさつまいも

百貫のかたへ麥わら笠ひとつ
十三日十三ばんのありがたさ
一歩やらずははぎそうなばゝァ也
十九と廿五といもうりがはなし
切ぬいた判をけんぎやうむこひきで
たんすをからと見ふめねへ座敷也
元日にだいこ一ト切くつたまゝ
でんがくを飛こして出てこりやどこへ
廻り部屋引手の穴をふさいでる
呼出しははづかしくなくうれ殘り
ぐるをやめにして米かみねらふ也
猫に十本多いのがよめのげい
おやど迄召せと諷へもどり駕
折らずにおくと名所にはならぬ也
すみだ川一つ着て出て大あたり
おくさまもよろこびありや鈴の音
しろうとになつて女郎の穴をいひ
色白なつわもの二タ人出てふせぎ
けんぎやうの女房からだにいもはなし
おいらんは六町と出ぬ言葉なり

おしい木をやね屋はずッか〳〵きり
十七屋とてんはいかにわたるまし
三つめ迄あがりましたと子をおろし
十三のまん中頃で四つ手きれ
せつぶんの札をうばそくうばいとり
物さしに打ッ手針にはつく手也
高なわへ來るとうしろで帶をしめ
格子からその手を取てすじを見る
御出入のとうふ屋がうらやましがり
藥とり甘草くつてしかられる
牛かたのあたまの出來る十五日
むごらしい所もあづまの名所也
琴の師へつゝぽう袖じやいやといひ
しつッこい景圖を引ていやがられ
そのくにで酢を一しきり買ひきらし
うんのいゝ高尾は車留になり
初午は角（すみ）ッこばかりさわがしい
はな紙をぱつたりと置く夜の音
ばんづけのこし張を見て下女はすみ
水茶屋と見せないしやうは是れ〳〵さ

寅三月別會櫻題萬句合書抜

ありがたい御代鎧にも錢をなげ　雅情
ゆるすのはあちら染るはこちらなり　季伯
繪に書いた時鳥さへ一羽ぎり　五樂
大きなのふりやう花の山をうかめ　雨譚
若後家はごうはらそうに孫をだき　百菊
せんでらはい丶方角の紅葉也　仙路
はたちから十一二年氣らく也　玄漣
げせぬ句だわへときせるを廻してる　ぬのし
夜着一つふとんを三つねだる也　五扇
おふくろがやかましいとはまだ初心　花口
さすが武士まかねにわたし土手へ行　吉公
御主人と思ふとめかけ不首尾也　亭々
ふじ山をかくす斗りが春のきず　吸川
じやうのこわそうなが這入る松が岡　百千鳥
三とせ見ぬ内にさがみの言葉也　井筒
僧正の一ばん弟子はおそろしい　石斧
朝がえり其い丶わけはくらい〳〵　蓼我
ふじ山も有ものにして店おろし　豐好
ま丶子こんじやうで禿はつめられる　間々

一の人二かいの上でうれのこり　半黄
おかしさは來月分も母しかり　五樂
千兩迄の女郎には手づかへず　五扇
あいそう過ぎて一町のやかましさ　且府
しやうもんをやいて檢校縁をくみ　四郭
ふかんなるやつは都にしやがんでる　五漣
神樂過うまし乙女へ大一座　且府
うまし〳〵とすみ友はやせへおり　川里
あんこうは口びる斗のこる也　客來
五十三次へかけると湯もやすみ　季伯
二タ人づつひッそりとなる大一座　一町
こ丶らでのしちや五六つき干てみせ　同
よしはらがたんぼへ引て猪牙はでき　冬始
ほごすのは親父の代にあんだこも　如雀
し丶が見えねィ〳〵にむこを取り　窓梅
僧正のひつぱりたらぬおそろしさ　子樂
かみゆひも座敷があると一歩かり　南來
耳たぶのちいさいやつがつかに成り　狐聲
鼠をよく取るむすめに母こまり　三町
手ならひのせわがやんだら女郎買ひ　狐聲

百里のよ行き上下を着すなり　一柳
れい年の事にたまげる初がつを　其漣
へどの出るせんぎやねぶでしやうを吹　巴幸
道しゆんてんを下げて來てさそい出し　眠狐
又文かそこらへおけとひかる君　烏鵲
うそでないもみぢは二度と見に行ず　四郭
あやつりをすく藪入はべたつかす　鯉橋
尾かしらの無いがいせやの初がつを　夕照
葉ざくらへびやう打の來るおとなしさ　洗路
切迄見たて仲人のあん氣なり　文仲
くものあるくのはしらずたまげる　文洞
ぶつてしめたとはむいきな色噺　松國
門(かど)の春跡からも又跡からも　啄梓
年禮の落思ひ出すにはか雨　澤蝶
となりではいつそつめられるにうせず　冬始
念佛をきずにしてよふうつくしさ　靜風
元船にひかへろといふ御どうせい　唇虹
團十郎で出ましたと母くろう　雀芝
のろッこい四つ手跡からせげん付　ト文
出むかつて噺す袂へ何かいれ　五鳥

つき出しとみえてつくねたやうに坐し　眠狐
六十目づつ毎ばんの御そん也　朴水
石こつばでものこすなと御下知也　龜遊
忘れたが因果こくぶをかわかされ　李牛
朝おきとねかれる中に美しさ　眠狐
夕だちは十七屋から京へ知れ　門柳
青首を取るがじせいの手がら也　眠狐
うら門をのりうちにする目見也　龜船
まいづるにつかまれているうれ殘り　眠狐
とうろうの名ごりたがのとお針みず　燕子
くつ音がすると僧正うなり出し　其樂
二十さつたらずよみ本かたみ也　由之
上下を引ずり戻す中のよさ　狐聲
ちんじちうよふせい人の繩め也　賢魚
三つ口はせひなく非人にてねらひ　下時雨
いわしにたなべはみのぶの時鳥　仝
まわり〳〵の小ぼとけは四十七　其俗
ぬけしなりとうして來たとりとうてん　弓光
のみでやうじをけづゝてる晝休み　林雪
しやみなどのくふものでなし初鰹　旭枝

ほど〻ぎすさしてもさゝんでもの雨　仙路
たッた三日にてころりと山椒みそ　仝
手の下のざい人めかけたんと持　百千鳥
もらい乳ゆすぶり込むがちそうなり　仝
いるにまかせとはうたも矢つぎばや　杓子
ひつきれのとべのと琴でふりを付け　石斧
さじかげんしろうと目にはおしいやう　桃李
高く舞ふ時は小粒を付けたやう　石斧
糸だてをぬひてむかいをしかり付け　仝
よし町へつん〱としてまがる也　仝
もつとよくされる氣で來る三會目　未然
天に口あり一反またへ入れた　水砥
おとなし川へおちる所下戸おさへ　仝
ばせを翁ぼちやんといふと立留り　間々
かいどりの禿が二人うれのこり　五樂
ひよつと來たッとも〻度も子供來る　魚交
てへも無い所をあんかうしやうびする　五雀
あッけないあそびつ〻みにいな〻かせ　五鳥
しやこざかしいとなる神むつさくみ　柳枝
こッちへは來ぬと里からさわぎ出し　五雲

よねの守りをよふ少ですくね出し　岩計
やれ遠いぞと山のが紅葉を出し　女五英
こつぱづかしい聲だよどいなかよめ　五扇
來る人が日和をほめる旅見舞　素鳥
人がさしくづしてしまふ嫁の傘　眼狐
うら〻かさ品川沖へかちはだし　葉十
居ぬむす子雪をわけてのせんぎ也　眼狐
先づ御入あられましやうと江戸家老　雀芝
さかなうりまちかね山のほど〻ぎす　門柳
そのま〻で高尾がのるとしづむ也　梅斧
百雨はしまい見せろと初がつを　門柳
夜るの雨ところの人は小言なり　素鳥
母の相づちてなまくらものに成り　五連
錫杖をふるやうに出す下手のけんり　葉十
地主をば御めかけ伯父に書いて出し　五扇
けふもよくふるはと這入る下手將棊　五鳥
十郎が出るとくわい中箸を置き　眼狐
御きやくさまだはとけちな上下で言ひ　洗路
おふちやくのしるし黑門出てあばれ　同
引けまへの初會ふられて來たのなり　花口

目にかゝるものを母おや寺へ上げ　冬始
きざな事らう下でちよッと／＼なり　硯壽
うぬからすめと梅の木へぼうを出し　唇虹
琴の糸かッちらかして泣きやませ　同
よし町へ行くをめつけてくざくなり　花口
持參金松川氏のむすめなり　東里
目をさましやしたおいとん申やす　鐵房
不二山がおッぱだぬぐと九十川　蜃虹
つめが出るそうであかるい内にすみ　花口
どろ足で工藤が夜着をはねのける　同
初雪をめぐり日といふむごい事　夕照
もふゑんじゆほうをも赤くゑざる也　鳳頭
はりぬきのゑの木を四つ手見て曲り　中葉
手をかしてくんなと五文ぐりをとき　三町
堂よりも茶見世は二けんひろい也　一口
無いものか道だとよくをふかくあげ　庵子
扨御そゑんをしましたとさやをこき　山水
おぼろけの十が息子をよび出し　魚交
半ざらしこゝをせんどとかいくらひ　其樂
しよせんたりないと大山さして行き　山路

花の山石に出家が二三人　枝鶯
ごふくやも二ッ人のつてる寶船　百菊
じやうたんにうばだき付ていやがらせ　毛穴
はざくらや毛だらけなものぶら下り　吉公
半げんぶくでちつ首のにくらしさ　文仲
げいのうにたつせざるのがさるだ彥　龜深
手いらずのばゝァそとわにしこを懸け　其岱
行くときはもみぢであたまかくす也　同
春の日のあまりくわんこう寺も探し　下時雨
いつそのくされくし卷で芝居也　巴幸
今ばんも新ぞうごくしんしでふせり　巴幸
すしや程ゑさ箱のある下手のつり　ぬのし
吉原へ行くはとていしゆやつてのけ　同
心ぼそゝうなたちかと伊せの留守　花口
もみぢはしづみとうふやはうかむ也　蔦故
いもうりへつるかけを出し呵られる　同
庄屋がかゝり湯するとほらをふき　萬象
違ひ棚あけて淺黃はしかられる　花牛
つみが無いそうで柳にみえる也　賢貝
木の丸どのにお公家だの小僧だの　萬象

さんまのひものくいさして烏おひ　至方
えりへ手をあてゝせつ法とき仕廻ひ　仙路
つめのまくまへに目高をすくふやう　同
あいそうに嫁はつるだのお船だの　城山
美しさ一日さやへおさまらず　仙路
角兵衛じししやれにおかめを交て來る　四敬
しよく人を五百しかつて五百ほめ　谷幡
かけ取のかわつてたゝく烏のほね　百千鳥
傘におよばすとみのからかけて來る　同
はやおけよりもちゃませる切おとし　米子
御留守居のはかまで秋葉くだりしやれ　名古屋
三年に一ト月寺はうけに來る　遊子
花の宵紙をまろめていのる也　箭車
初がつを女房あたまもくふ氣也　米子
ほそ布もそめ木も母のむねあはず　百千鳥
はいふきをひどくたゝくが旦那也　同
御めかけのぶきび旅しやうぞくて着る　鳳頭
外々と御見くらべ代三歩　桃李
となりさじきに見て居るの耻かしさ　雨譚
駕へはむてんかなづきは内でよみ　石斧

うしごみのがつそうきものふといやつ　雨譚
うれ殘りたれとはおろかあばたなり　同
いつ何時でも女房うんといひ　石斧
ゆうてんをむさい疊へ通す也　鳳頭
かんじやうでお座へ出されぬやつを持　礎
しよさの內とりて四五人てれて居る　石波
のゝさまを二度うけ合てうし也　玉簾
だんきんのまじはり二てうかけさせる　石斧
十六本すると人迄くいあきる　李牛
海山をこえて行くのにさしてゐる　同
はなねじり斗がねだるかひの國　石斧
前髪が來て酒もりをぶつこわし　柳舎
會津屋でさがしたといふ紋所　同
しげひらは大きな佛火にくべる　五扇
おふくろのしようのはけちな宿下り　接州
ゑつの傘ひしこもついにそつて來ず　魚交
かならずくりへ出やるなと和尚いひ　錦江
仕切場へ只右衛門手紙持て來る　半黄
酒屋の見世に雨かけの四つ手駕　五園
ぐそく代持つてかしかんばんで迯げ　五樂

ゐこうゐんぶつしやうゆんべどんだ事　五　雀
そいでさりますとげくわ殿半氣也　五　樂
道行きをぬいて義太夫本をよみ　五　鶴
きんたまをけられたきねをよしにする　同
丸ごしへ湯やいろ〳〵と申わけ　錦　江
あつい茶をめつけてあるく一人者　且　府
氣のどくさもちやのみせへいしやを呼　五　言
にぎやかさ色々な貌入りかはり　柳　燕
ねたばをあわす其そばにすゥやすや　青　口
かたき打しにんの山の近所也　水　砥
あつけなくみきわの茶屋を二人出る　四　郭
ぶつつけるやうに駕ちん女房出し　五　連
うら〳〵かさしきりに錢がほしく成り　且　府
まあうんといゝなんしよとつめり上　女　五　英
にげてッてよそのくいつみこしらへる　五　連
ふう〳〵をやめて野懸へ火をはさみ　水　砥
ばけ物に成つてとおばたまつご也　川　里
おどり子におどれと留守居むりをいひ　四　郭
ゐの木一本に三度迄はらを立て　五　園
はなうたで來るのはけちな女郎かひ　斗　石

犬は目があるのにつゐてぶちたがり　接　州
はづかしさみそ一重のみやげなり　斗　石
佛にめしをたかせたはさくまなり　素　龜
三會目そこいつめたき帯をとき　橫　好
下げにするそうで相てもかみをゆひ　同
凧まけもせず十五夜を仕廻ふなり　和　笛
夫ゆゑには金と成つたるおんな　同
しうとはじきに死ぬやうに仲人いひ　冬　始
ちよゐッこい事をして居る常ざらい　鐵　棒
てのよいごくがい妾やたらしひ　敵　吐
やぼな事どこへ御出と土手でいひ　同
手次手にかゞみの前へごぜをするゐ　淺　裏
よその子のていにもてなすやうじみせ　清　江
山王と神田でもみた金屛風　花　口
あじきなくしきみの中にかきつばた　淺　裏
間男をこたつやぐらでふちのめし　川　角
わたくしをにらめましたと妾泣き　南　溪
ひろげるとひつくりかへる傘をかし　硯　壽
雪のみの庭へふるつてしかられる　梅　成
家名からしてなまくらな茂左衞門　其　林

しよざいがなさにあれこれをしくじらせ　歴虹
二タ人ともうごくなと石かツちかち　梅守
さむらいのあそび大小なげ出し　同
やせこけてていしゆ赤子をだいて居る　久烏
紋つけにかけちや手の大きいかこひ　杉壽
どりやおれものまうとうばへたよる也　同
しぶうちわつるすはけちなにうりみせ　車道
五十程付くがうすめのみこと也　杉壽
車座にならび高尾がきげんとり　かすみ
よわむしとあくる日女房づゝうもみ　杉壽
船のげい向ふ三げん出來るなり　鯉登
しまる〳〵に又はかしのふはかし　季伯
よくおれに犬をけしかけたとしやべり　洗路
爰はかの文字太が內とびくを下げ　玉章
當分は出にくいひざくりやうられた　百菊
しづうかにしやれと大屋はる氣なり　同
とこ代ははすばな女拂ふ也　魚交
ついそばのつめを尋る不自由さ　十口
長おいをせぬがよしさだおちど也　玉簾
糸をこき〳〵座頭の坊はなし也　素鳥

ゐゝかんにたべてしまやとぶうとかけ　玉簾
そりやのいたりよと火箸で鍋を持ち　長笑
せんだいてひやめしともがあてゝ來る　雀芝
まだも氣どくはちのみ子を連れて逃げ　門柳
くま坂はのびを追つたがおちど也　龜遊
色出入にはかゝわらぬしなのもの　美香
しだれざくらへ飛びつくと納所おひ　菅江
なき〳〵もよい方をとるかたみわけ　東里
中そりへ竹をうへさくごふく店　海枝
なけなしでろを買て下女しかられる　彌柳
四月八日は行水のはじめなり　龜遊
やわ〳〵と墨のたもとを四つ手引き　素鳥
見られたがつて火をとりに息子行き　魚交
千金の嫁一ッこくをぬかすなり　眠狐
こわい事さしみをくへといせやいひ　魚交
ならものも五丁町ては切れる也　葉十
衣をぬぐとくわいけんを和尙出し　同
ごうはらさ錢を拂ふと天氣なり　十口
花火をもらい日がくれろ〳〵　五鳥
一つ着てもうよかろふと角田川　魚交

つかへ手をかけるで酒の興がさめ　甲鼠
大三十日ひッひいひいが十二文　三朝
かこわれがほうかいりんきうるさがり　門柳
鍵のしち只一すじはなさけなし　雨譚
見ともなさ亭主かきのけまかり出る　曾木
あつい事小袖を八つぶつ通し　文祇
大木を持てせなアは江戸へ出る　竹露
袖の梅あれども女房くらはせず　玉簾
とうなんに大あなむちのみことあひ　泉河
しゝ口のうへからおやじいけて置き　眠狐
遠目がねちかい二かいのうへを見る　東里
はなッぱりすこぶる小言などをいひ　雀芝
かみをつくねてはなのさき母あらひ　五扇
爪ばたけわるいばなをの切れ所　東里
金持を見くびつて行く初がつを　門柳
女郎やのおきてをひよぐりながらよみ　菅江

天明二のとらの彌生　催主　櫻木
木綿

誹風 柳多留十七篇 終

誹風 柳多留十八篇

寐てよんだふみまん中でおきあがり
松をたてない正月を庄屋ふれ
たくましいふくらッぱぎを下女は出し
げんぶくをいたしましたとやみあがり
十四日ぬき身をしよつて夜みちする
由井がはまびくり〳〵とさせた所
つけとゞけせぬと門番こりやどこへ
引け四つさやらがなるとはゝしやれる
親ぶんはこつがらのゑゝ松をたて
いなだ九郎兵衛がりやう地も一首いれ
つまへ手をかけると女郎かたち出來
でんがくのなぐれめらさと遣手いひ
みやこ人わづかな水ですゞんでる
よめはもうくろ吉に成るはづかしさ
浪へ手を合せてかえるざんねんさ
切れぶみを母がついてゝかゝせたり
にわか雨やぶいの門がにぎやかさ

名代にむめわかほどのやつを出し
若後家で七日々々のにぎやかさ
御門をば錠よりひどい石でしめ
しッかりと喰てあゆめと下戸はいひ
しよき見廻ひ嫁の手あつい事をしり
ぶちまけて仕廻と四つ手無言なり
先をはらつて金もんのたばこぼん
關もりに見知られて居る中納言
金ぎんはかわらのごとくいゝくらし
す一歩はとッかいべいがこわいなり
ばけものゝ部に入て居る御さしりやう
門のかぎこゝへよこせと國家老
後の月嫁氣にかけて爪を出し
わつうかな紐をとくのに二兩出し
紫で金澤へ來るついでなり
ちいさ刀でも大きな事が出來
中宿で男ふうじに書きなをし
けつこうな春はせけんがひろいなり
おもしろくでん地を五町おッぷさぎ
母もよろしくとおどり子座になをり

まつりには御かしなさいと暑氣見廻ひ
御めかけと中のゑゝのは御もつとも
うら門をたび／＼いるとさとられる
十二日から色男ねらわれる
かわくといへば梅屋敷もちつとだ
きつい事男にせずとつれて出る
ひやうし木のまくらに近きおもしろさ
はかまはおりてかへさぬと衣來る
さたのかぎりはくわどうにてせんげ也
見て居れば座頭は明たがる目つき
たれるうちごぜ大道にあけらこん
こしらへるを見てすつぽん思ひ切り
ふりうりの田地に一羽さぎがおり
うら店へ二俵かさねてにくがられ
だんばしごどう切にしてしよつて來る
まけこけて女房にまゆ毛付けさせる
うたゝねのつらへ義太夫かぶつてる
品川は山にかけ直のあるところ
もろ／＼のちしやたちさたすいゝかげま
はだかッ子嫁しんまくにしかねてる

四方からふでをつゝこむ天の川
もみぢとは古句と女房てんにせず
そら色はかぶろの目にも青く見え
ちよくめんの跡に女とちぎりなく
かんざうも一人他人でてッきはき
せきしやうぎ手を切つたりとげびる也
かんのんさんへ御つれなんしとせびり
太郎兵衞はもう／＼金がたんとふえ
神明をおがんてゐるにもッしもし
今川はだんせつしたとまり手合
牛かいにからかつて居る小間物や
本所へいんきよをせぬとむづかしい
月見もせずに西山をさがすなり
かますこだてにかの大こくをねらひ
地がみうりしまい左の者ともになり
豆のあるこわめし小町くつて居る
ねんぶついつさんまいと嫁をいびり
大太刀をきめてはなくそうりつける
御ふによいはしやしよくの臣がまきを割
どう／＼におんぶして行くおく家老

うでけつかつてゐび二とは是だかへ
三つ山で御しやうちならとしよかつ龍
ありんす國の月を見るいたい事
ぬす人でさい禮に出るきついやつ
ぎやうぶさま御入りと草津大さわぎ
なく石をかねとたいこでだますなり
高尾しすともほえづらはかゝぬなり
はんてんで御こうのるすにひよろり來る
しんちうをなめおいづりをぬいてゐる
いせやの年始あふぎとはそらごとよ
小便所めんぼくもない人にあひ
すりはり太郎巾着を切りはじめ
のろまを出して加賀ものをこまらせる
へをひつてやといかぶろは二日來ず
五二べたを日本ばしからほうり出し
いよ玉やなぞとへッぴりわるふざけ
入道を東魚はたこの見たてなり
つるの來る事をさとつてひらくなり
朝ぎりてやぐらの見えぬじぶん行き
黄金へ尾かしらつけてやねへ上げ

ものどもつゞけと上下ひらりのり
とめるさむらいはするがに立て居る
さゝはたき後妻いとまをくれといふ
ちう三をぶちのめす氣で女房出る
まんぢうへ馬上から手を三本出し
にげた跡禿は醉てたわいなし
入りむこは下女と一所におん出され
生れたとはしの上からよばるなり
子をわしがさらつたはなし六部する
ぬけるのを弓矢を持てねめて居る
しんごんひゝみつでもかなへぬけばこそ
くま坂は外のばくちはきらいなり
むごいやつ宵にちらりと來た斗
冬の內しなのゝ介をめしつかひ
品川はどこの海ともいつゝべし
ていしゆの着物着て質をうけに來る
車にはりこまれ道鬼は仕廻なり
お門を切りくんで根津から女房呼び
公家衆の生醉しやくをふり廻し
大名をねまきの外へねせもうし

大門に屋かた一そうたつて居る
御拜領くま手でかゝぬ斗なり
口上にしたがいまするほれたやつ
たッた一歩でくるわ中ほれあるき
おふくろのぬる內ちゑのないむすめ
久しいふみをよむ所へ暑氣見廻ひ
けいせいのからはらへ來るやかたもの
どらに成る前あのむすめ此のむすめ
仲條の門にたつてるのが相手
醉たやつ二朱づつひなをつけ上る
よばつても來ぬはず禿蚊のゑじき
何もゑんづくはたぎつた顏でなし
永の日をゑりから上で妾つぶし
元おれが地だと大家はくだを卷き
僧正は座頭をひつし〳〵うめ
よの山はすそつゞきにもたらぬ也
大紋をぬくとふだんの萬右衞門
妾が兄何十人もゆびをさし
いふ事のさつそくに出ぬあふむ石
立酒は一口のんであとをつぎ

中宿からは手を長くして通ひ
氏神のこわいろつかひおぶッさり
より政か毎夜通ふとかぶろつげ
一人は左衞門でない四天王
奥家老跡から馬につけて行き
ゆふだちに蛇の目を廻はすかやば町
土みかどさまをあねへもかざるなり
あの亭主になるやつはといらぬ世話
首すじ元へひや／＼で五兩出し
繩がなくなつてぎろうで吸ひつける
小性あがりは尻ッくせわるく死に
はやりいしやお月番はごためる也
なまかべは男帶ほど先へ干る
百三十二文出してひんをかひ
手のひらへ書いての丶字は口でいひ
さいはしよじしたと島田でおつぱじめ
米かみいらいひやうばんのたわらなり
大三十日本田あたまは廻はりかね
かなしさは三日からさきかすむ也
さあまく／＼をきくやいなやりて出る

心なくよめばかきつばたではなし
おれがなもかつてとつばなうりはなき
あてもない松に預けてくれをぬけ
三度笠犬にあづけておがんでる
おく道者明き手の方へしぶうちわ
そりや木曾が來るとでんぐりかへす也
ひやうし木をしろうとの打にぎやかさ
三人でだちんを拂ふぬけ參り
上げしほて御仕合だと仰ばし
ごふく屋へこしをかけて丶直ぎる也
九代目は宮をらうひつ迄へいれ
ひなのわん小ばかにならぬ高いもの
ほうづゑをついてた丶みや日をくらし
せッつきに弓師へ通ふ小ざむらい
おやわんをちよくしうしろへかくす也
いんぎんにされたでくどきこじれてる
だかおしへたか今のか丶さん女郎
高尾がみくじはじめよし後わるし
しうたんで女房のあてる大三十日
男の貌をかねではるあばた來る

なむあみだふつ是からは根元記
ぬす人にいわへ〳〵と市もどり
きたァねへ顔で闘とりかしこまり
びわの弟子一人ふえると二人へり
たましいのひたいにあるを四つ手のせ
木ぐすりやさくびやうぐらゐなをす也
からしりをおりてよこねのやうにゆき
ねだりに來たよふに座頭大一座
内中にくまれて居る首まがり
かねはたちまちゆになつてくさい也
勝ちまけはともあれ女房本目はり
ぼたもちのとゝまじりする神無月
十月ごまたちばなの中でたき
たけ田のからくり三年ひしがくし
おもしろき夏と冬とのいしやう也
風まけのする荷を牛は二日引き
江のしまへ黒かも斗り二三人
人じんを錢でかうのはいぢらしい
市にたわらをふんまへた物目がけ
わつちかへ平六兵衛ともふしやす

じつとして居てけいせいはだきつかれ
あたらさくらをふによいにて見そこない
ゑもの〳〵をひつさげて市がへり
ゆびでかみをかき〳〵ひざい身あがり
するが町みゝをこき〳〵すゝめてる
うろ覺え十五年跡來たおてら
さがみまできこえる程にこりをとり
一夕花で七兵衛なれそめる
お内義は師匠の留守に出てしかり
よくてうしなんすときせるふり上げる
だいやを二つくらつたに川があき
へッついの前へこゞんで下女がかね
人の名歌を九十九首ゑらみのせ
はら帯をしめると跡の五十兩
御所でだといつて石かけはやるなり
おくへ行くほど年の寄るごふく店
四斗樽へ傘をつけとく長いしけ
どうてつにとんだれいほうばかり有
ふり袖を着あきて四火の沙汰に成り
島がくれ行々したがくずれなり

うきふしと花嫁やつとうたい出し
きみのよさふたをさゝげた備なり
もろこしの弓矢でぬえはゐころされ
羽織着ながらあんどんですい付ける
身をなげた上をやかたで三ンさがり
いらざる僧のうでだては土弓なり
だてに目は二ついらぬと小十郎
三みせんのけいこがへりは口でひき
百両へ三歩がきずのつけはじめ
夏しぶく冬あまくなる堀江町
何かないしゆに半ばかま〳〵
きたはしを上ると時平ねめ廻し
女房に付きについてるたわけもの
いしやとなつてじやうふだんおこされる
やうきひはいふ程の目の出た女
うばたべるうち御しんぞうおごつてる
いもが子に屋しき一箇所のけて置き
さむい事みじめな後生ねがひ來る
三みせんはあいつけたりとばちてぶち
かけとりの小聲でいふは下りなり

二日のゆめに七人にはたられる
かな棒の跡から太皷ついて來る
ひつゝりがふえたを持參わるく聞き
きげんよくしな正月のかいものだ
氣のどくさあくる日土手でつほにあひ
すつぽんのかうらかぶつて鑓けいこ
湯くみばへ首をつゝ込むばくろ町
きでん身どもで酒代をつきちらし
あり助にはくじやうさせる御新造
草木きばみ大玉が落るなり
ふきがらをけしてくんなとばちでつき
とゝをは山へかゝアは内でいゝわけ
ぎよらんさま御使からのすがた也
れいをもたぬとおいはぎにあつたやう
汁わんをてんでにすゝぐばくろ町
ぶく〳〵をしてくれおれと淺ぎうら
たッた一度でかんざしをもうねだり
はらを切るのもあきつてさきとつてる
ぶる〳〵とするで三疋しゝが出る
ひげ切をとぎすましてるびんだらい

あかい頭巾で太神樂嫁ねだり
すねた子をかべからやつとひつぺがし
死にかねるはず店うけのたからなり
ふいごのけぶから高尾はあらはれる
そりやぼうさんが居なさると水かゝみ
さいけんのすみから一歩とりに出る
切おとし中を禿があをむかせ
あまよばりされたせんびやうまつが岡
三河から古風なしやれをいひに來る
ろうがいのしさいかならずとなり有り
萬ッ木にすぐれて筆をうつちやらせ
せんつくしびつくし跡がおく家老
くわいけんをけごつて遣手上げぬ也
もてぬやつつれなく見えしわかれ也
けいせいがだくと赤子も皿にもゝ
すけんぶつ見とれて居るとあげられる
きねをひつかつぎあわびをくいにより
氣づまりを根こそげはたく野かけ道
根そろひをつかんで殿をおつかける
さし引きのこりしほさいへのんでさし

やぼのこつてうおとり子をつめるなり
丸わたをはじめた人のはつめいさ
大きなほとけ金しやうと木しやう也
もうひけとおはぐろやからかッちかち
ゑびす講傘をかえしにくるやつさ
黒助のわきで男にばけて居る
まよふまいものか持參とはだか也
にえたつとかゝァとんやとかちやよび
ばゝァは川へせんだくはせがきなり
閏月嫁きい〱がわるいなり
大三十日才藏つゝみしらべてる
がん〱と始皇のみゝのきわでなき
ぬひはく屋氣のむく方へばりが出る
くろ石のごげを引合ひ久しぶり
すみッこに居てもやりてはやかましい
黒吉になつたとさわぐ長つぼね
さいみやうじいんぐわな所へ宿をかり
何かないかして前帯が五六人
下駄とみそほどのちがいはいづみ町
そこでおやぢがはらを立後の月

かんざしを二三度かりてこゝろみる
せつなぐそたれに張良おいて出る
たゝぬやくそくで生醉ちよきにのせ
にわか雨こもをかぶるもこゝろがら
日なしかしひとりはろじに立て居る
自身にはいひにくかろと下女が宿
大三十日火ばちとともにしかんでる
十七屋もめん合羽へ馬を入れ
やつかいのあるはよし盛がてん也
やろうの唐人に二日やとはれる
もつといねへなと米ざしとり上げる
ぬりものつぎものむさい箱をしよい
茶ぶくろの立ぬひ下女が申たて
松永がかまをのぶ長心がけ
役所とは身がうわさかと淺ぎうら
馬喰町てんすゐ桶へたれられる
御しらすでばれをいひ出すばか亭主
田舍馬でも來たやうなせんべい屋
五十年立つとはたごやせんを出し
にくまればゝァ一けんに一ト人づつ

生醉はよめをつめつて三日來ず
かりた子に嫁うつくしい貌くづし
白いあたまをなでてやるくしついで
むしが出たそうで新ぞうわらわねィ
きつねの嫁いりちう王のとこへ來る
雨乞ひの中に川ごし二三人
かしがあるそうで御慶をざつにうけ
をしげなく床をはなれる一人者
四つ手にせながなでられるはづかしさ
江の島へあはゝの追人まわるなり
もういりやせんと丸わたよめくづし
是から日本の地だとちよきを出る
ついたてのそとから白いあしは見え
度々かりた小袖をすぐにかたみわけ
つめられるたんびに娘そだつなり
くれの文ぜひなくあいそつかし也
ぞく方とじつ見えますと四つ手いひ
すね右衛門をとらへたかいもなくまける
松井屋はやつこ一人をなぶりきり
能い天氣こん屋かなもの見世を出し

やぶいしやは一ト人いかすと二人しに
若い内だと土手を行くすけんぶつ
御とりあげ無い願書湯屋はほり
女にはさてたのもしいをとこなり
いきをひつ切ると田舎は米をつき
あのやせで御めしは四ぜん五ぜんくひ
見えて居てゆかれぬ所はとを〳〵み
是は御名作とばんとう百なげ
ねぶつたら御めんと淺黄ばかにされ
おもてからみれば水茶屋一トとをり
いじろきもないに下見に琴きかせ
しうとばゝ死にそうにしてよしにする
あまりくるしさにつらせて使者あるき
わきの僧たづねてあるく百だんな
得がたき金去りがたきよめをとり
お江戸でもそとがはまから御登城
三會目しよぞんがあるではやく來る
のりものに醉たをめかけひしがくし
夜具をほめながら女郎のはゝむしん
はいほうを大きくいへとはやりいしや

三つぶとんやわらかにしてはにたゝず
おとしぶみしうねんぶかいいしゆがへし
ちんがほえるぞと目あきをおこすなり
わるいりやうけん子をつめるものをよび
人間のくわん女がみんなそねむなり
いゝきもの着ると內でもかしこまり
さいふでももたしやつたかとせげんきゝ
ばかな事かんびやうもせず里へ行き
春の一時をたこにて子はをしみ
中野で鼻をたれて古鄕を思ふ
百五十日のこし置ふきたおし
あみだの光はおしつめたこん禮
しがみつきやれこい〳〵と五郎丸
下手なやつ川中でかやたゝむやう
かうさんのやうに大小わたすなり
ぼうぐみやおよらぬうちにねがやれな
ごうざらし後家に二度迄つゝこまれ
おつゝけてしまうとこわり〳〵來る
太神樂あれは下手だとだますなり
わたし守毎日ひとつ所をこぎ

おふかみをころしたやつががいをなし
石がきのむこふにとしまならんでる
こゝちれいならぬはをとこほしい也
かたぎぬをかけ百せんをくいに行き
とつぴやひやろにけんぶつが五六人
おそわつた通りにひなをねだるなり
留守をあづかるからかゝァ左衞門也
へんじやうなんしでお內義市に立ち
あぶりこをかへと手おけがものをいふ
もふかく事が無いそうでかしくやあ
おどり子のあげ場は石の鳥居なり
よみかけをいしやはたゝんでかごを出る
ひら澤にもゝ引がけで三二人
鈴と一所にあんざんへたきつける
長追ひ無用と六鄕からかへり
うへものにしよくるいむすこ一歩出し
やうきひはろくな一家は持たぬ也
ぶつゝまねをして直をつけるはなねじり
さし上て打ひやうし木のおもしろさ
かッちかち打つとふろしきひつかぶせ

明き御所にのぶといつらでのこつてる
湯屋の臺ひねつた錢でうめるなり
ほねを殘すから知れるとせん坊主
首とゑづふんぢらかしておつかける
書置のいかさまに母ひよくらのり
かた〳〵をのこして嫁をわらつてる
あれ斗り女かと伯父いきごをり
白いものはきなんしたと子をかへし
つれのあいかたへ初會はたよるなり
きついつみ座頭の內へ入りびたり
堀へまがるとちよこ〳〵とろをつかひ
江戶の同役をにらめて座になをり
はこねをおつたてゝも一里もたらず
かしはもちくばつて來ては一つくひ
ごふく店うかとのぞくとらんがしさ
そくたいの中へはかまでまぎれこみ
僧正へ大きな御手を三度下げ
つまもたぬ身もましかやと尼公いひ
笹ばたきめでたくするは十二月
日本のたら〳〵下りへ門をたて

かなでした人別帳を息子もち
内證もほろ／＼になる口おしさ
とまる時分に道中をしはじめる
けいせいにあすをあんじてしかられる
鶴は下げ龜は山ほど金をしよい
どきやうを見定めて夜具をたのむなり
つれないにやおどりとしなの供につれ
まけたものばかりのこつてはなしてる
五つをの車はゑゝが大ぐらひ
大通ふ上人御ふみをかいで置き
だてがせきそのころならば御ともなり
あした出來ぬと番所だと土手でかし
のきのとうろう二度の月に金がいり
持參金はなはあれどもすじがなし
たいへいにして元の座へ御なおり
僧正ははじめて公家を二度だまし
さだまつた家のあるのに山で書
はづかしさとちうで人の手にわたり
四々人にかなきりごゑを四つ手させ
たちまふべくもあらぬのに二十四五

若後家はしたく金にていつたやつ
第三はて留めの所へ一歩なり
ざしきらうあゝ月われをほろぼせり
じやうのなさ座しきへ秤持ッて出る
そのなりでいきなと女房聞きかぢり
生酔の手やあし四つ手からこぼれ
遠くからくどくをみればばかなもの
ぶちころしても金になるねこをくれ
かゝつてゝでつち十三文めつけ
ちいさな納豆百兵衞どのへ遣り
しめ出しのやうに朝湯を待ッて居る
おかしな聲になると母ゆだんせず
しな介やおはちのそこをならしやるな
鳥さしのとんびをねらふ心あて
大一座中にしろうと五六人
はしごうりまけるとやねへかけてみせ
病人のそこらをさがすけちな事
だいた子をおとそうとするうばがちわ
きむす子はつれに目きゝをして貰ひ
いつなりとさゝいた時がけふし也

ほれらぬ氣でかたる也大さつま
今日の御きとうからッさじき也
きたアねへ貌で鬮とりかしこまり
二タ人ぶちちまきへそへてやりはじめ
すぐにじゆくだんいゝ男いゝをんな
まッ黒なもちをたかには見せて置き
おぎやあ〳〵とつれぶしのはづかしさ
あたまをまるめてより政いらぬ事
梅にうぐひすさくらに生酔なり
さい日にかみゆひひくてあまた也
知りもせぬいしやを呼込むそつちうぶ
大こくの外を目がけるわるいやつ
後家のしち男ものから置きはじめ
おしげなくぶちまけぬしへあげんしやう
よし町へ行くには和尚たちのまゝ
清水をいのれどあざはぬけぬなり
あつけない夜をけいせいにすねられる
ぶりがれん知らぬに家中氣がつかず
びいどろは心づかひのみやげなり
湯もどりの小ぞうをていしゆ左まへ

生酔をひよつとおさへてはなされず
是に居りますと繩屋にまかり出る
おはぐろつぼへぶちまけて元結あげ
門口でしよいなげをするさる廻し
あいちつとおとつさまへとおつゝける
そらたばこすい〳〵見たり見られたり
おかざりはわしにくれさいなづなうり
あれにこう是にこうとてまけたやつ
二度おぼこ嫁は二タ子をうんだやう
つばもとをくつろげて居て藥うり
ごまめうりゑだるに一つもらはれる
わたし舟ゆるりと馬の貌をみる
柳さへたれたまゝいるあつい事
先づちよッとうんでこべいと臼を上げ
ひとりものしんだ所が寺はなし
ふうがないけんしんで花が咲くものか
ひどい夕だちこしやにも二三人
とんともうでけぬといふにまけなさろ
花火にしんだいゆう王入れ上げる
本ぶくのくすりとなりのみせで呑み

わがものだそうでお針はついで居る
おれもち丶のまうはいやな子ぼんのう
西瓜のみやげあけずとも見えるなり
うい奉公内義のはらに氣が付かず
三會目くれそめて金ひやくなり
金の龍坂東一の目ぬきなり
金びやうぶもの見の松で見て通り
女房をよしのへすて丶堀へゆき
うれのこりつれのあるのがちからなり
舟いくさすむと淋しい師匠さま
のぼりざほ五六本さすい丶すゝみ
はみがきはやうじですぐにかべへさし
かす時はしごくしづかな座頭の坊
いッくらも子をやげんにておろす也
あふぎねがわくは水をさしよき見廻ひ
首がないぞよとひそ／＼里の母
子をたべたゑんまさまさと嫁はなし
二日の夜みな正直なかうべなり
あくた川こしても先にあてはなし
かつほの生酔はち巻しめてねる

五百から一躰ぬけて人にすれ
船頭も雨しんぼだい二まいつき
八十がみそをはやくとでつちせき
かたみわけ貰ふ氣で下女やたら泣き
とつてくんなとはご板をむねへあて
よし町の月はおかまのだんごなり
追ひだきの下へさんまをつッくべる
ほつ言をしたやつ寺を先へたつ
忌中札さしうりが來てゆすつてる
御めかけのひとりあにさまはき丶也
泪を棚へ上げて置くかたみわけ
來るも／＼坊さまだとあやめいひ
とんだ事遣手きんちやく切りにあひ
なみだ片手にすりこ木でこづくなり
銀のひるまき若とのをうむともち
くやしくはたづね來てみよ松が岡
やすなりはしやうねのしつぽ見あらわし
せなの代になるとごろ田をぼうてうち
もん付にひいきをはぶきよくがしれ
辻番と思へばうなぎやいて居る

見ともなさちよきで二三度ぶちかへり
御はりさんおいらんのふとむごいこと
もりつけたうへで六夜をしまわせる
にたころゐがするとみす紙かざすなり
なをらねへ病ひい無いとぎばはいひ
惣のくいのとせめどうぐ賣つて來る
みじッかく牛戸をよんてせなァ來る
乳のみ子をすてそうにしてよしにする
月のばをふさげて花の江戸になり
ゐちごやのいなりを其角はじしめる
おちついて居りやゞやうものか數通來る
花嫁を見てこようかとはかゝ着る
こぶするめくいそうにしてよしにする
上るりをはじめてつくるとをりもの
はつゆきにいゝしめりとはたはけもの
天狗は是をたべますとなべゐかけ
といたゞいてははんとりい／＼
ごうするか見ろと小判を子にもたせ
中條へたのみましようはたゞの用
よく／＼のばかよし町に三日居る

上下で手なべをさげるとしおとこ
ねこもしやくしも吉原のじやまをする
錢車やうじさしなどおッことし
市でない事は息子のなりでしれ
ちつとまあだかせなんしと筆を置き
いゝ法事二十餘年にふしをつけ
拙者このたびと萬歳帳を出し
まちがひいんしたとあばたは又すわり
子のきうはあくたい笑ひ／＼する
のしを付けてもたゞくれぬいせの御師
政むねは六月見てもさむいなり
ぼうし針おつたて尻でさして居る
なんのおこわだか使にそつときゝ
座頭の貌をねめつけて金かへし
一年と大きな魚を臺にのせ
ごま鹽はあてにするなど師匠いひ
うぐひすとれん木が出るとおでん也
たゞの名の女新ぞうこわいなり
あした眞間夕べに道を聞いて居る
こじつけのみかごを船へのせてにげ

ちよき舟にたいこと見えてかしこまり
三會目金のへる木を持ッて出る
われなべをとなりへも遣る女同士
たばこぼんきらひなやつも前へ置き
日本のせう〱あかねにもならず
樽酒のかけ出すやうなにわかあめ
この頃に來るよすりこ木まあよこしや
らしやう門おに迄かたわものになり
ぞうりをぬぐと名代はごッかゆき
ゐなにすかされた程嫁わろふ也
かもつがひかんきあたりの目がくぼみ
女郎かひ仲間はとんだ仲間なり
かねたいこせげんまじ〱きいて居る
下に〱でいなかものかしこまり
鳥追ひにつらを見だして申入れ
孝行なつらで燈籠を母にみせ
半ごろしにしては迯げるはやりいしや
ほう年のむらへ目切りとうす直し
傘といふ字をすいりやうして無筆よみ
ふだらくの地に善女人二十八

とんぼうとびそうにしてよしにする
ぬす人ねこを豆からでくらわせる
はつきりといやともいわぬ大和茶屋
ほうばいのお松はめしをいつそすて
かぶろをだましなにかをきゝたがり
金がなくなると中宿いけんする
弓づゐでこれ頼光よ〱
諸人これをみればびれいな神子まひ
高なわへまつりの殘る五六日
朝がへりおまへもまあがはじめ也
三つぶとんうてうてんへは程ちかし
四人で三十六里のそんをする
とうろ見にぐちな女がぞゥろぞろ
てう山は見世でのてうじがしら也
よしひろにやき刄を渡すすばらしさ
頼光はおきると弓を引いて見る
こち〱としたみそあきは道でくい
けいせいのたんすなんぞがありはあり
行かぬのみならず道々いけんする
けんぶつのむなぐら取てほうりこみ

門すゞみおらが二かいの戸がたゝぬ
おめかけは三をくんなのむすめ也
座敷のまん中へすわりしかられる
氣のふとい女はくわよふ婦人なり
しかるにむすめ弓矢をとつてはやり
ぬきみにておどるさい中門やぶり
油をついで行くのだにうたひやめ
へんな事始皇ちんぷんかんきらひ
出來た氣でさじき一けんぼうにふり
御うたゝねぬすむがごとくきせるとり
袖はふれども三十のうへわらは
坊主にもされる思ひで嫁ぬらし
かつもつていそぐ氣のない渡し守
にんそうのいゝぬす人は陽虎なり
外料へいさぎよく行く向ふきず
月の座へ息子はひらき直るなり
せけんのきこえ三みせんおとなわせ
しわよせるものを落すのをしい事
ほれたをすけんおもひ切〳〵
げんぴん僧都なけなしをひつぱがれ

まりをつくむすめはひざであるく也
しなどの風にさそわれて御用ぬけ
お内義も手しや火吹竹にてうけ
梅花を折てこいたごへさして來る
土佐ごまぐるみいけどつたむさし坊
宇治川の水をたわらでせきとめる
めイめッと泣くなとかいるりやうつてる
あまくさも小なべだてしたきつい事
つき合ひで四ッ九もんはるかたいやつ
どぶへたれたで馬かたはやすくみえ
人がみるよしねイと半吉はいひ
しわいやつ何んぞといふとじせつがら
直實はいゝあきらめのへんじみる
かけしやうぎまけそうにしてよしにする
をかもちへおしやかを入れて持ちあるき
あからが好きさと山うば綱へいひ
廿日過まわりにかまをかりられる
音のせぬやうにおしやうはごらをうち
しづまつてはしらのけんをやつとぬき
はんれいが居ぬとめいどがつくところ

ゆふべにはいしやあしたには僧と成り
手傳をおんにうけずに井戸をかへ
しまのせんざいがよりうはころぶ也
人なみにくへばしなのはやすいもの
木ばちのそばでつへの方〱
はなしでもしなんしと名代ぬかし
百人でおもて八句へ四季を入れ
京をくらつてなりひらは歌まくら
りやうり人つるして置てふわけする
判とりへおもたくわたすはづかしさ
二百十けんお長屋のはそん也
琴箱を先へよこしてぎ王ぎ女
藪入は能い人間に成つて來る
水茶屋で女郎見せて母をはめ
花のあす下戸にしたゝかいけんされ
きうなかけおちゆひのふとすり違ひ
朝がえり出來ごゝろではすまぬ也
直次第であぶない事を神子はする
今日かうしんだとしうといらぬ世話
藥種屋の近所へ留守居入れあげる

部屋ずみを四五人つれて茶屋へ出る
かねごとも女郎のいふはいたいなり
しかたなくたてかんばんのいしやへ行き
ぼうしよくをしにぞろ〱と江戸へ出る
いわし迄女房さかさに直をつける
みそづけでおやす湯づけをたべて居る

卯正月吉例角力句合

催主 星運堂
薩秀堂

御座敷の松と疊はおないどし　櫻木連 芦露
たッた一ト色ごつとせぬ京の水　近江連 漣
にくい事姿王位に望みなし　蓬萊連 五扇
よしの山十八文字でとゞめたり　近江連 東水
一生けんめい日本と書てみせ　櫻木連 玉章
來年のゑほうで大工仕廻ひ也　若栄連 清江
居つゞけは白たへさまの御客也　蓬萊連 東之
八朔に四郎兵衛至極いゝ名也　柳水連 扇車
三位の官を引ばいでかしへ下げ　蓬萊連 五樂
そうせん寺迄かへと猪牙太義そう　山水連 木綿
うじやくのとばぬさき番頭は歸り　柳水連 玉朧

三歩がものあり一歩がものなし　八重垣連　中葉
高もりは木曾このかたがはじめ也　伊呂波連　玉章
ひなの時遠い所のものを見る　杜若連　亢樺
松過の禮者はひどいくめんなり　柳水連　梅谷
いそがしいつとめかた衣竿へかけ　櫻木連　兎明
春ふくろにはうんざりなさい布也　近江連　山覺
子どもと同じ事赤いが目につき　八重垣連　狐聲
梅の花公家衆が持て出てなあに　名木連　三町
萬歳でものもふまくしかけていゝ　櫻木連　花口
ちとたらぬ男にふみをたのむ也　蓬萊連　素鳥
せいが高いよと若後家出來かゝり　柳水連　雨譚
肴うりとんびを切つて人だかり　若菜連　敵吐
急度した御中宿はにまんごく　櫻木連　與練
帶ひぼをといて付合ふ三會目　同　如雀
姑ばゝみぢつかいめで嫁をみる　名木連　美徳
てんとうや屋ねがよしのを十重廿重　櫻木連　玉章
もちつとで狐王子をはらむとこ　柳水連　歌橋
繼ぎをあてながら男はいゝものさ　蓬萊連　雀芝
あつい事あたまのかけた鳥が出る　若菜連　萬來
觀音へ四つ手で參るやうにみえ　櫻木連　玉章

藤澤のけび一トさかり直を上げる　近江連　東水
陰の無い姑一人と仲人いひ　櫻木連　雀芝
一つ目で五十二るいの外をかい　若菜連　角市
俄雨はねのくさつた人が來る　杜若連　亢樺
大的をこそぐつて居る小ざむらい　水仙連　葵印
萬灯は宵一灯は夜ふけなり　柳水連　糸遊
九月しまろうふしんさと大工いひ　蓬萊連　水砥
ゑり元につかぬ手本を高尾出し　若菜連　清江
いはれざる帆を手傳つて叱られる　杜若連　西喜
舟ちんは小遣ひ帳の初てに付け　櫻木連　玉章
金札をたてそうな所たッた百　草花連
おもいかへなどと善光おぶッさり　若菜連　金旭
材木のかげで千住もみんなうれ　櫻木連　玉章
老人に赤染右衛門あげられる　若菜連　淺裏
たッた一字の事で安い神樂　櫻木連　里蝶
大門をはいると地ものかげはなし　朝日連　破琴
下げ錢で梅や榊の下を行き　櫻木連　左滿
す見物おんなじやうに紅葉賣り　あさひ連　破琴
飯かわりばゝァたいこの音もせず　櫻木連　兎明
遊軍といふは薄田隼人なり　柳水連　雨譚

まよひ子のお松ほつても知れぬ也　蓬萊連　五盛
晝めしをあらなわで卷く牛つかい　杜若連　里丁
上下でごや〳〵はいるろじふさげ　柳水連　糸好
にげ水の頭居ましたと太田いひ　櫻木連　都宮
松坂の切りたてへぎをかゝへてる　近江連　漣
守にこそあげましたれど宿はいひ　伊呂波連　琴印
湊川ほんにないたと左兵衞いひ　櫻木連　都宮
氣が荒くなくてはお杉いだがらず　杜若連　西宮
ふり通すひがん堂守あがつたり　山水連　木綿
猫の出し入れさへせぬと九月いゝ　柳水連　石斧

俳風 柳多留十八篇終

俳風 柳樽十九篇

川柳評辰春角力會三會入　淺下境　呉陵軒著

手へべゝをかけてかゝさま追まはし
しのべとはむすめづぶとくなりはなり
やぼなやつ一歩がくろうしてかへり
その中で高は女郎のかいがかり
どろ足の干る頃あやめ賣しまひ
もめんうりまかりませぬとのしかゝり
出來ぬやつ大きな聲でいてへはな
ひぢりめんゆびへ引かけ三を下げ
屋ねぶしんていしゆ向ふに噺してる
にくびやうぶのけて法げんさじを取る
よしの丸小べりてさすと寒くなり
女房をおそろしがつてたゞかへり
やさをのこ待てと四郎兵衞ひつとらへ
おばが來て黑吉にする耻かしさ
雪の供こいつがなんのしやれだろう
國家老ひつつまんではぺゝをする
やまと言葉はおくびにも貴妃出さず

まじり見世こわ〴〵いゝをあげるなり
ごつさわらはれ渡し場でむこわかれ
京町へ江戸をくらつたきやくが來る
きつい事十五夜及び十三夜
どのまつりでも深川のおやぢ出る
四つ手かごろう宅へ來るいぢらしさ
水の無い川どめ江戸の出ぐちなり
雨おちへすてろはけちな月見なり
傘はちりあくたよりかるく出し
へらさぎとつるとで松のあなをほり
やぶいりが來て二三日さいが出來
せんがくじ他宗もみんな引うける
ばつた〳〵ていしゆのかわる美しさ
人中を見ろといもが子やといなり
かうしなれてはと講おや二貫出し
きん酒ことわりて御用を追かける
ちう一にしやれと母は一歩かし
かずのこでむしやうに下戸はのめといふ
たいくつの中水はゞが一里也
參つた沙汰をきかぬ古川やくし

けいろくをやッぺし下女はほじつてる
あくる朝六部はだかで村へ來る
ゑの木へゆびさしてあのざるはいくら
いたい事ばゝァをもつていわしむる
藏ににたものをもつてる村ぶげん
そんなものだと鬮取となかし合
かん定のわるさ五人で二歩のこり
ばかていしゆ湯で聞きかじり大おこり
ぼんならぬ女とさくまおもつてる
口すぎになるとは見えぬ出合茶屋
ぼんござをおさへの跡にしよつて行き
あれと出るなと兩方のおやがいひ
ふんばいてこようとばゝァ江戸へ出る
四つ目がありかいにくいくすりなり
おつりきをやるとあるきにもませてる
にくまんぢうをくつたのがおちど也
ぶちころされた命日にむすこ行き
なめかたで織田ほど勝たものはなし
御來迎三文ですまぬ海のはた
他國からおすみおよしが來て植ゑる

あくる朝もふぬえの繪圖〳〵
吉原がいつち下直と初會ぎり
平家物がたり大めしくいが書き
つかむのをみるとなりへふいて行き
まづち山今では猪牙の目あて也
女房のいつぱいをするいつた朝
御用にはほとけさまのを下げてやり
尻をまくつておやぶんは座になおり
そうもふしや御が點だよと貴妃はいひ
百介はふしみ町からすつとぬけ
女房をとりやげて置てりやうしする
いさゝかなじみ禿にかくれごと
くつ音をきくとめう代うつぱしり
若後家はあばたへすわるごふく店
中宿へ出家這入るといしやが出る
大門へさかきの這入るにぎやかさ
むづかしい判とりの來る茶うす山
鶴の一こゑ折かけてかふろたち
中なおりするとこ女のこゑになり
泪にも少し間のある百箇日

犬にきうすゑるとねこにばける也
ふるしきに文何かしらかりにくる
ゆびッ切してけいせいの中のよさ
ふみなど書いて居るのをあぐべからず
しやうちするそうてあたりを娘見る
むす子初夢に七人一座なり
錢のある皃をして居る松の内
古きずのさいほつしわす十四日
あすはとうからおひんなり乳母こまり
それ善兵衛とさがりんす〳〵
はやりいしやひたいのはえた供をつれ
仙人さまアとぬれ手でだきおこし
めうゑ上人根をおしてきめられる
月花はおやじ小言の定座也
あの馬はのれますまいとさいみやうじ
死人の山でもねだれといんのちう
碁で無い時には黑石かくがいゝ
初がつを女房日なしへいつゝける
雨やどりいゝおしめりといふやつさ
よつたぞ〳〵と來るはこわくなし

三ぶ六のかよいだとひなほして居る
さくらならさくらでかへるごくいん氣
中の町さいたが通な見ともなさ
谷つ七郷をさしま屋でおつぷさぎ
間男をせぬは手前の妻ばかり
へをひつた子どもをさがす師匠さま
立聞きは今來たやうに内へ入り
まつ白な酒もゝそのゝゐんへあげ
はなれ馬二かいに居ても戸を立てる
よう拜はどこでも出來るふじの山
いけねへ唐人帶だの衣だの
人にうらみッこいもなく不二はみせ
こゝをようきゝやとむすめをやりたがり
屋根舟でしやうをふいてるべらぼうさ
しなのから來て名月を一つみる
九十川たのみはあたまばかりなり
ちんがほえるさ女房を先づさぐり
いびり出しにくいものをば嫁はもち
ふじ川がとまり工藤はさいご也
雨乞ひの中に川ごしふてへやつ

いゝ人ににたが手くせがわるい也
生醉がのつてわたしの人がへり
しゆんせい卿の片うでを打ちおとし
はかま着の頭から手くせわるい也
男のふり袖もよせぬ御大びやう
てんがいでよごれた皃をかくす也
のぞきに斗り行くのだにかごいかご
げくわの戸をほと〳〵たゝくうしろ疵
よくつらをふみなんしたさぷつり切り
こりやひざがおれるはやいさ留守居いひ
すいぶつてめう代をとりいざをいひ
いつそ面白く喰ひこむあら世帶
ちつとづつ毋手つだつてどらにする
馬ぐらいやつたがいゝとあやめいひ
いろは茶屋かさもりぢかく氣にかゝり
目を廻はしそうな所へおくりせん
杉戸へは二品三品出して置き
此子こゝにとつぐでよくはやるなり
ひしこうりふしみ町からかしへぬけ
入むこは花の外には内ばかり

目ざすてきろせもの組がめつけ出し
手のそろう迄と內義の細元手
內かぶとしちやへ見せる口おしさ
花嫁をひやとかん酒のあいへ出し
氣づよくもこな〳〵にするてんがい屋
花の雨のちは後生のさたになり
麥めしの後あやまつてあらたまり
女郎かいたがるもむす子むしのせい
もゝんぢい出るともう母はおどかさず
御紋からして角(かど)ひしな小笠原
けいはくのいひぞん西がはれる也
はんじてる內に忍だるのぬしが來る
はづかしさ九一へつわはつにはき
色をする事はあくたのごとくなり
あじに義理たてゝまゝ母ひいきよさせ
わきざしを仕廻と弓にかゝるなり
小兒いしやあふぎいたゞきながら立ち
たゝみをたゝき立てどこの目ぐろだよ
いつしよけん命の地をむす子はかち地
やゝあつて地ひゞきのするいゝふしん

藪入へこゝぞとむすこ三みをひき
お中をよんでくれと米さしをぬき
馬のくら人のしよつてくばかななり
いをつりがきたせ〳〵と赤がしら
とものいしやもりころしたに相違なし
やくざめにちゝぶのろぎんみなにされ
子母錢をさい布で日々に取りに來る
なぜよわせなつたとばちでたゝいてる
才藏は大樹寺などの百だんな
ばからしさゆやへどてらをかえす也
そらッこと二三本書きふみのやあ
手ぬるさはしやうちする迄くどく也
釜をかさないで松永しめられる
めう代へうつぷんいへばしりんせん
さんげ〳〵藤澤であそびました
何もいわいたしませぬと四つ手駕
百人の中に目あかし一人居る
六つ七つからしこまれて琴しなん
まゝ母とにらんでせげんやすくつけ
塲ふさげな佛はむかし今の京

歌がるた女の中へまけに出る
ひまなばん見世で三味線手をつくし
駒のかしらも見えぬ程松をつけ
とちぎりとうたつて井筒しかられる
大三十日たび立程のいとまごひ
雨がへ屋足ばやに來てさとられる
やね舟のてうちん顔の中へさげ
雨のもる家とも知らず左馬の頭
政宗があるでとむらい二日のび
天がいは雪折竹のもやう也
江の島へかくれて參る新五郎
まッぴるま雨戸をひくは爲になり
やかましさ片々の子が花を持ち
いたい事女郎を一人もちにする
はいふきを持つてみて居る雪の朝
さゝやくと直きにつけ込む夜かごかき
中條へ嫁のかつ込むはなれ馬
大やしろ近所でおくにうれたもの
足留のまじない帯をかくす也
遠州のあくびするがへうつる也

下りとりおふくろを見てつけ上り
鈴の音人足しげし中の町
まゝ母のはていとやはり〳〵
せけんかまわず鳥追ひのけいこ也
行がけのだちんはいらぬ樽ひろひ
けちなからくりのぼり迄くれる也
針をのむうちにころせばころす所
いやならばいゝに若後家いけんする
ほうづきをふいて居るのと見立られ
しやうりやうと女房を留守に急な旅
よし町のきやく女人とてへだてなし
組んでおちるとは圍ひのみらいなり
うしろ疵湯番大屋へつげッ口
お釋迦さまのにやく僧はあなんそんじや
こがらしに高野の蛇迄うろこおち
雨みゝの無いので內義かねをつけ
品定めとは錢いくら米いくら
高繩へ來る迄帶を前へしめ
しうとめの本ぶく嫁は十九也
引ッぱがれもしやうかとこわ〳〵年始

座頭の坊せッつきながら年をとり
上るりのぐわんそはつうな女なり
さすがは女まゆとるをごせおしみ
坊主衆と坊主を四つ手よく見知り
つうづき合をやめやれと母いけん
岡場所のきざは子をとろ子とろ也
もてたやつ帶ひろどけでおがんでる
かゝみとぎ千代もぞんじておりまする
こゝにけつかると見て行く松が岡
鯛をなめさせてさかなや寄つかず
繪の所が出てよみ本を子にとられ
足よわをまめな男がつれてにげ
度々後家に成つたは馬の内侍也
唐しせんよむとくじやくの尾がほしい
四郎兵衞から請取柱へくゝし
かんなくづなんになさると橋大工
おしやうじが明くとおし鳥きしへ寄り
御たいくついくらか金をきしへすて
ゑぼしかり衣をぬぎ捨て外科にみせ
むらさきは男ゑらみをしてそまり

ほし入はかえつて高い五丁町
みゝたぶのわるい唐人つかにつき
おもしろがつて子のくゞる土用ぼし
一つかつぐと樽かひと見える也
今以て三日にあけず京でほめ
大せいのへんじに若衆一人來る
きつねつりねこがかゝつてもちにつき
はなれ馬よりさわがしいつなぎ馬
今のかゝさんはよしはらからといひ
おやゆびをそらし禿をおどすなり
御めかけの手柄木刀だらけなり
ねきものが二度めの四つに二三人
旅むかい五十里先のあくびする
中條の跡明店でやゝしばし
こまつたものといふ内に大三十日
若いもの諸さむらいにはこまる也
茶をのんであいもなく來るやなぎ樽
一客がこがねの月りんをいだし
御用の書置いろはでおいせさま
たゞ今和尙大通とかわります

かまくらへ行くはずふだんあまよばり
御持佛へころして立てるかきつばた
ぬり樽を下戸ふしやうちな坊主持ち
孫が出來たらくいそうなおばゝさま
辻番はうづをおい目にはつて居る
ともかくも先うら門を出て見やれ
杉戸迄のこらずうれるいゝおくり
切おとしごふくやあなをあけて出る
口上があがつたおめしたべてゆきや
五六けん一度にわらふやうじみせ
茶わんうり身代切にけつまづき
拙僧までも本望と首をみる
高みでの見物茶人おちどなり
しうれんのしんをみのにて出せといふ
今に日が當るとあわぼうを直切り
子をほうるまねをして行くはしの上
紙帳の内へ重箱のさかづきの
村芝居せなアふところ手で這入り
作大將ぐるみ三文でかひ
きぬかつぎゑんぎの御代にくいはじめ

まん中が出てもやッぱり立かへり
百廿疋へびをいれせめるなり
三會目同士が來たのでむづかしい
ばくちでも無い屋根舟が氣にかゝり
山とうのゆふ借月を二つしよひ
下女心がはりでしちをたてこづき
國忠を伯父さんとろくさんはいひ
かうしんでしに繪をかへた事がしれ
たがじやもをつげたか座頭大おこり
ころびとは中ぶらりんのばいた也
死石が玄關へ來てはどなるなり
くじら身をくわへて尻をひつぱしより
目あかしをつれてけんぎやうあるく也
きやくでんにつるくつてあるけちなかご
高をくゝつてかこわれの出來ごゝろ
いひ草にしおるとろんごとりあげる
夜具のぐわんをば三めぐりへかける也
をわり町木の丸どのかにぎやかさ
むみやうゑん聞きにかえつてしかられる
かばむくを着た人まわたかいに行き

車座の女中の中へ高尾出る
じやうだんのやうにたんすや鋲を打ち
はしごから上はわたしがあづかりさ
よんでやらずはとすけんの母はいひ
時平の子孫らいしははら田なり
品ものにはまりゐんがわからおちる
みらい記で見れば高ときさかななり
ねむたがる子を出遣ひにつかう也
ぞうにつゞいてあついのはほうし武者
ざら錢の中へしに繪はむぐりこみ
やすい土瑒百度參りを一人つけ
子にしかられたふいてうをしてあるき
四五日は引き人の多い高ごうろ
非人め出ませいのやうな船でうり
しんだ金いかして遣ふ品のきやく
ゐんのない寺へもにげる一家中
とつかいべいのおやだまは十五城
おのてるのさじきに一度かつたやつ
帯をして跡金の來るけちなよめ
まくら元で文高尾が書きはじめ

よッぽどのきげん母おやばちをとり
目の二つあるむこが來て無心なり
おもしろくなくしてかへる國家老
ひろい事まつが岡へのつれが出來
かねくやう六だん目にはぐわんといひ
弓矢八まんとだまして訴人する
せんぎして見れば玉もは無宿也
買物にちつとかしなとだいて行き
かしわもちあまくこしらへ内で喰ふ
いなかのはらッぷくれ三つぶのをかひ
目黒から廻るはまだもりちぎもの
ふられるたちだのと四つ手跡でいひ
にげそうなのを先へたて土手を行き
いよかなへぶつさらいだと初てはほめ
げきりんばつて兄弟でひなをわけ
高さ三尺ゆうよあるふとんなり
ちゝぶからかえるのを嫁づつう也
しぶがきは大地へどうとぶつゝける
ふんだりけたりの目に今川出合ひ
直のいゝ四つ手はから手が二三人

つへをとり上げほうりこみ〳〵
聖人の身にもかなわぬあがり鯉
いたちをついにふらせるはわきになし
うたひをば大事にしなと遣手いひ
ゑんりよ過ぎるとくずをとる大一座
ていのいゝ馬ごろぼうと源三位
すけんとは神ならぬ身のかごいかご
むさばんの三つぐみ江戸で名が高し
けちなばん女郎の二ばんばえをかひ
きんりさまから又來たと小僧いひ
とらの門通りを行くはとり荷也
だきつくにけいせい身うごかしもせず
五文がむきみすりばちを内義出し
にわか雨こじきそうをばたすなり
きつねさへしろうとでない所なり
もちやそびに四五疋のこすごじやう汁
ゐちご屋のうへて一ころほとゝぎす
ねるは扨おしいとけちな月見也
いり豆に花がきんりへちそう也
おそろしい初湯はのまのうづみ也

手ごみにはさせぬと母はひなを分け
關口りうでむねぐらを女房とり
おらがよし原はかうだと文左衛門
大そうに笑つてしわすしかられる
今までの事を中條水にする
實の無い客衆とうぬがあるたちか
かへ玉を車にのせておつちらし
あゝもにるものかと綱はくやしがり
名月院でんさまへおくさましやう香
江戸ばしへへごだらけなる船がつき
白鳥はさびしい池をにぎわせる
勇士の名くゞると糀町へ出る
しら歯の殿御さとあやめうらやまれ
笑つたをねめ〳〵通る御りつしん
何本でおまんまたくとお家さま
黃金もござるはずだと大野いひ
なめしやの前で尺八仕廻ふ也
七月は拜み八九はもてあそび
門兵衛と思ひ荒波明けおろう
ろうがいはにげもかくれもせぬがもと

妻をさり鯛を半ぶんつり上げる
名の下できせるを廻すひまな事
おそいうちいひわけをこしらへて行
ひなとかや預分はきうな事
神風にぶたやひつじのへどをはき
千日かうがんせざればゑんはきれ
なんとうらやましいかと客かたひら
かけ取へもちの酒のといかぬこと
良のいゝ手代もやうをたんとうり
丹波のねづみ京へ出て馬をくひ
より政へじせつのものをくだされる
くどき出すまへにしばらくだまつてる
ちう三はかうの座に居てうれのこり
せいぼには酒で用ひるのをくれる
いそがしさ升をもたない芋屋來る
雪見の供はもつともな小言也
百の女郎もすぎますと伊勢屋いひ
どかおちのしたさかづきで下戸はのみ
おめかけをだがよ〳〵と江戸家老
三のいとちり〳〵〳〵とどつか行き

ひなじた、ほうろくうりもしたくする
秋のまん中に大きな後家が出來
嫁なにをかけたかおりはすてゝにげ
めしつぎをかゝへせんどう船をおり
いけんするそばからあいと先づいひな
つくぼうをこえるとてん〳〵也
いしやうあらため里でするむづかしさ
うるしかきかすつてつばめ通る也
御しやうしとこよみとひじき斗り置き
身代の爲にはじごくおとく女郎
直が出來て錢ぶんまける火鉢うり
首と首よせてよんでく土手のふみ
是れでかうつかみましたと綱はなし
ばゝアは川へせんたくにせがきなり
めしごりを出してかみゆふばくろ町
女郎より女房は四兩一歩高
あじろから百旦那へ手をくれる
やぶいしやのともは遠方より來たる
三わりならばふせようと女房いひ
たれるのでぼうふり取はわきへより

はなれ馬さいをにぎつておつかける
かゞさん出なんしよとけいせいはふり
つゆ切りとひんをよくいふよだれふき
佐吉御茶上げイと和尚手をたゝき
ちくぶしまだけが一合ふそくなり
にんげんの禿をかりにやとつてる
出家でもふけたをいしやでつかいすて
もふ外につうはなしかと中の町
すねぼうはかべのかいがらほじつてる
久しぶりさとながし合ひさて出ます
あの内の一ばん子さと四つ手いひ
犬坊へへしにかちわらけしかける
がうがめつせぬと辻番いゝかくご
かたづけといふと座頭は立て居る
三會目やうやく女郎かつたやう
うき世をひに見ず島田は賴む也
人並にいゝ春といふつらいこと
そとわ引仕廻つて水で手をあらひ
雪隱でぶごう一ふさ御用喰ひ
ねたふりをして居りやしつをかきはじめ

けいせいは傘をさす手はもたぬ也
此へんとうに行きくれるくれのふみ
麥さくではらいなさろと輕井澤
三會めきうの跡なごいじらせる
四つ手からこくぶをつかみ出してやり
奉公人の出がはりをうりに來る
拾兩といわれて母はつゝぱなし
どうでもしいすから下に居なんしよ
ひやめしをふるまいに出る國家老
天狗までうたにうたつた能いお寺
によせがもんやめろと孟子しかられる
とむらいに行衞しれずが二三人
やみ上り三ばいづつにきめられる
なんぞねだりなとほうそう見舞いひ
いつくしま今ぞうゑいもあきの守
西行と五重の塔をほしかため
切先をそろへてわたる田むら川
かちの葉しいの木程にしやれはなし
石尊でかめのこ程にみえるなり
やすなりが居ぬとそろ／＼笑ふとこ

御ふによいだそうでびらしやら二三人
もとめづかにて麥めしの禮をいひ
いとけない主上がむすめ氣にいらず
その時分八條までは人ごをり
御ふくろは和の引ことでいけんなり
佛師屋をしても弘法くえる也
五番目は一か六かへまわすなり
こま下駄の音にうよひよろじへ出る
十三日目出たくいしゆをかえす也
うすがきやそら色で來て初會ぎり
品川のひかたがむすす子うんのつき
ほねとかわ斗りかぶとへそへて遣り
さむらいのきぬ〳〵鐽がふろうとも
からかわのせにをぶつ〳〵内義出し
絽の羽織着て出る所へ日なしかし
するが町りきまぬなんでごんす也
三ぞろをさゞなみといふ人のよさ
芝から品川へ通る所化の僧
そらをかけるつばさ地をはしるかつを
まきずるめいなかのおぢはくちへいれ

聲あつてかたちなし市の馬〳〵
いゝくらしへびを四五人遣ふ也
ぶきげんの大こくをかうにわか雨
ふぐはきらいだとねつこりもつたやつ
廻り〳〵の小ぼとけは四十七
はだかつ子はらをたゝいてにげるなり
大きにやわらいで茶をやたらにのみ
のぞいてはあいそのつきる御さいかご
やきめしをほうばりながらゐさをさし
女房にゆわせてめゝずほりに出る
とこ花にならびをつけてばゝァとり
いたい月品々御目にかける所
しゆろぼうき安くつけたらきられそう
后の外は笑ひてがひとりなし
傘の名代しやうるり世界なり

辰春花角力會　催主　星蓮堂
　　　　　　　　　　薩秀堂

笑ひたい時萬歳はわらはせる　近江連　龜若
駿河町とは晴天に名づけたり　櫻木連　大柳

生鯛はつられたなりで臺へ乘り　水仙連
くどかれてちりをひねるは古風也　櫻木連　かたる
千兩出さずに着るのは殊勝也　八重垣連　中葉
千兩のかけ手見きんで座頭さし　櫻木連　大柳
梅のじゆず持つて僧正御參內　水仙連
不二にわかれてから旅に骨が折れ　櫻木連　かたる
松二本小だてに取ていひのべる　玉垣連　和笛
ふみこんだのは賣切れた見世の前　櫻木連　かたる
一人乘つたがけいせいのたから船　同　大柳
病上り女に坂をかりる也　近江連　漣
梅の花出した公家衆手前遠慮　櫻木連　木綿
毛氈に付て花蓙うりつける　八重垣連　金龍
三みせんで鈴むしの音をとめる也　櫻木連　芹文
おかしさは牽頭內ではにが笑ひ　梅連　運丁
萬歲の來る日も嫁にいひ送り　櫻木連　子樂
名高ひ女をぼかんとむごい事　八重垣連　狸聲
名の下へかみ〳〵すわるいゝ得意　伊呂波連　素廣
のゝ宮の鳥居をむいてしかられる　櫻木連　かたる
桔梗をば三月ほどにて染めて遣り　柳水連　雨譚
江戸者にせひ〳〵座頭成るつもり　櫻木連　かたる

白く成るものとはみえぬあらひ髮　同　素鳥
正月と雨と用意に市へ立ち　若葉連　清江
持參金わつちや片わとむづかしさ　柳水連　玉簾
けんぎやうは此糸さまのお客也　櫻木連　狸聲
辨天へむらさきの水引をあげ　柳水連　玉簾
植ものでいけず釋教うつて行き　櫻木連　木綿
しわいやつ一家が寄て醫者にかけ　飛鳥川連　十口
追はれたそうと六鄕の門でいひ　櫻木連　木綿
三年は新造買も孝の道　同　狐聲
宵なきをさせて孟嘗君通り　近江連　龜泉
うざッこい親類の來る美しさ　水仙連
此頃はいつさんまいと珠數をみせ　櫻木連　其林
ざん切にされたも女房いきごをり　梅連　青峨
洗湯のはさみ材木くゝりつけ　櫻木連　嶌故
江戸者はもてゝ奥州ものふられ　八重垣連　中葉
女房にこび付て居る大あばた　櫻木連　麴車
かつしても呑まれぬ水の有る所　蓬萊連　藤子
政宗をかいこみ藪醫かけ廻り　櫻木連　木綿
十萬八千べん毎日回向　柳水連　石波
さごさいは長屋でいつち稼ぐやつ　櫻木連　萬三

いろは茶屋もちろん客はすみの折　柳水連　石波
雛のくどきにや番頭もこまつてる　櫻木連　木綿
山鶺は鴈のつるさりそうな屋根　同　大柳
大あたり佛在世程つめて居る　八重垣連　狐聲
年寄をわらづとにして市がへり　若葉連　清江
大こくのそなへをうでる不成日　櫻木連　玉二
六尺の尻中啓をさして居る　水仙連
むこじつは日本の地利も知て居る　櫻木連　五扇
弓矢の家に生れむすめそつけつ　櫻木連　蔦故
着かへずに芝居跡の夜をふかし
目つらをつかむ最中あばた嫁入　八重垣連　中葉
立つて居て座頭のぬれる俄雨
そと縫の事だとあるき足を出し　同　同
にわか雨相手にがしたやうな形（なり）　水仙連
春三月三所でねらふ敵なり　伊呂波連　蔦故
三會目私しやつめとうありんすよ　櫻木連　春松
ひり〳〵からいが伊世屋の鰹也　飛鳥川連　萬疎
蠟燭でしばらくをする金つかへ　櫻木連　かたる
紙びなへ棒を通してぼゐを下げ　蓬莱連　五扇
のみようがわるいと女房りくつ也　櫻木連　かたる

三人で一本糸立にはおどり
てんがいをぶる〳〵として吹きはじめ　伊呂波連　素廣

角力會二會目

うそ六百でかためたる國家老　玉垣連　左満
くつかむりだと唐木屋は安くつけ　八重垣連　木綿
植もので公家衆の不足まぎらかし　櫻木連　子樂
仕合さ年（ねん）を四五年置いて行き　柳水連　石斧
是が本の一休だと棧舗だぞ　櫻木連　かたる
殿に見しよとてべにかねを付る也　水仙連　流芳
三みせんと貞をのけるとすたり者　蓬莱連　藤子
にこ〳〵しても飛ぶ鳥が落る也　飛鳥川連　雀芝
八月と師走よし原こわい所　同　素川
猪牙舟へこりやアどこへと枝が出る　櫻木連　かたる
廣い事ほうそう神が不斷居る　同　子樂
萬歳を氣の毒がるは古風なり　飛鳥川連　諷旦
我は禿もせぬやうにしつ叱り　同　素川
嫁手がら唐のおとゝを軒へ立　櫻木連　五扇
御縁日もので物干咲みだれ　同　かたる
三度目の客が歸ると質を請け　飛鳥川連　十口
いかねへけりや今迄遣つたがむだ　八重垣連　木綿

ひからびてすッぽりぬける櫻鯽　櫻木連かたる　五盛
もみぢ見のふり合にした手紙來る　蓬萊連　諷旦
楊枝見世是す通りはなりやせん　飛鳥川連　五樂
句をほめるやうに蛙はなき出し　蓬萊連　梅舍
もうわすれたろうはけちな女郎買　梅連　五鳥
宿わりがすむとしづかな大一座　飛鳥川連　同
絞殺されますとはやり醫者はいひ　櫻木連かたる
どこへもつてくか千日ぶしをかい　同
能いつぶれやうさとごせはほめられる　柳水連　石斧
まゝ母と見えて泣子にいつも勝ち　櫻木連かたる　和笛
番町をさかなのさがる程尋ね　玉垣連　狐聲
市以來息子うり切申候　八重垣連　五樂
蕗のとう一つで喰ひあきたといひ　蓬萊連　城山
おくさまと唱へませいと馬鹿家老　水仙連　里丁
三會目さん用づめの金ばかり　櫻木連　子樂
こびついて居るを鐘つきひつ放し　同　丸印
近所の地赤ばん頭は奥へほし　八重垣連　花口
青いのはとろッ拍子に獨いかご　櫻木連　梅舍
てんたく寺でかつはちねへ隣也　梅連
川ばたで意見についておぶつさり

ふして惟みれば後家あゝほしやな　水仙連　旭子
拍子木のたびに大きくなるをとこ　若葉連　淸江
まん中の子供をほめるわたし守　伊呂波連　素廣
もらひ泣四つ手せげんに叱られる　柳水連　石斧
いかぬ事たつた一歩でもてたがり　櫻木連　里丁
役德で門番二百受納する　梅連　素江
遣手出る前なまぐさい風が吹き　蓬萊連　鶴遊
ほんの御つき合ひにてせげんの涓　梅連　兎町
しやうぞくを取ると不斷の彥兵衛　櫻木連　美德
平ッたくいゝ出せかしと後家思ひ　飛鳥川連　諷旦
錢ッ切くんなはけちなたばこ也　櫻木連かたる
みかん同前よし原で金をまき　飛鳥川連　雀芝
六鄕をこえるとみえる江戸と京　水仙連　里鳥
辻番にはらッぱへして御用居る　櫻木連　子樂
和尙色衣で若後家に尊まれ　八重垣連　金龍
細見はあるいて見るがおもしろし　櫻木連　芹丈
なんぞ家名もおらうのに見倒し屋　同　同
味は聞こえたがしやりがげせぬ也　柳水連　玉簾
昔々あつたとさといせしるし　同　玉川
武者一騎まごつくを見る暑氣見廻　蓬萊連　青峨

代金をとる内女郎はづす也　櫻木連　美徳
いらぬ事あるき手を出し一本負　柳水連　石斧
山門へくん酒をゆるすたつ田姫　八重垣連　素重
兄さんとしやれてせなァに逢ひに出る
紙帳でかいたのを下女はいきどおり　櫻木連　かたる

角力會三會目

ぐわんほどきまだ巳の時の衣也　飛鳥川連　五扇
まだとしやァ若いになどと御退出　柳水連　玉川
上下で菜をもみに行く有がたさ　櫻木連　間々
來たばんに笑つた女御手がつき　飛鳥川連　五鳥
御てかけの弟政宗さして居る　櫻木連　春松
しつた方へは上げられぬむすめ也　飛鳥川連　間々
すだれがおりてと若とう駕へいひ　櫻木連　木綿
一ッ町はかんなッくずを下げて置　同　久鳥
嫁逃げた晩はもちろん星月夜　飛鳥川連　諷旦
男たるものゝもとゞり切る所　櫻木連　木綿
三歩だけ格別いたいつめりやう　梅　連　梅舎
闘寺のそとばたおれたまゝで置き　飛鳥川連　素鳥
たち花は世間を知つたふところ子　櫻木連　芹丈
きこえぬは名代がおんなじ面だん　柳水連　雨譚

すり鉢で一ぱいのんで花を見る　櫻木連　萬故
ぬかるみを四つ手大きく言立てる　同　其林
小船でおつとり廻す花の山　柳水連　石斧
地女のたゝりと見世で八卦いひ　櫻木連　木綿
能いしかけ汐干が土手とかわる也　飛鳥川連　五扇
きつい事おなじ枕に十三夜　同　諷旦
ねて花をやるといふこじ三會目　櫻木連　五扇
不二のすそびんぼう神の宮も有り　同　洗路
をはり町春はやさしく夏武ばり　柳水連　高簾
いでもの見せんといふまゝに能因　同　雨譚
くわッ／＼と戸樋へおこし女房待　櫻木連　花口
一ト人の化ものあり土產百兩　飛鳥川連　五盛
てんかふん團扇へのせてなすり付　伊呂波連　素鳥
砂をもる日はお定のもめんもの　飛鳥川連　五鳥
御むほんも夏仕込みだけもたぬ也　櫻木連　木綿
爪音のするは古風な花見なり　飛鳥川連　諷旦
身代きり着めい／＼札出して　櫻木連　木綿
金がなくなつて女郎にいけんされ　同　和笛
夢に見てさへよいとこへごふく店　飛鳥川連　五鳥
なぐさみにせぬ摘草はみかんかご　櫻木連　車道

初鰹かつかちめいて江戸へ出　飛鳥川連　素鳥
大名をおつゝくねとく川づかへ　同　間々
とんだ事座頭ならびに魚鳥留　櫻木連　三巴
いくらで直をしたか四つ手牛の樣　同　里丁
御の字に成つたと花見したくする
不屆さ家ばかり拾匁でかり　柳木連　石斧
からすよりにくまれ口を尾長きゝ　伊呂波連　素鳥
高尾はとんだばかものと姿いひ　八重垣連　狐聲
待つ人は來ず若いもの〳〵　飛鳥川連　五扇
しほ〳〵と請出されたは高尾也　柳水連　高簾
今日は是切炭の中でしに　櫻木連　五扇
澁張りのふたを明けると天てらす　梅　連　鬼丁
おきたとおきの琴平へさそひ合　櫻木連　芹丈
その外のとうふやはへもひらぬ也　飛鳥川連　萬疎
中程にあつてすみ町とはごふじや　櫻木連　美德
大一座木辻は能のかへり也　同　清江
やれ〳〵嬉しやと夜着をくけ仕廻　飛鳥川連　春松
蚊の來るを蛇が待て居る出合茶屋　柳水連　石斧
緣遠き庄屋もめんの袖ふらせ　櫻木連　木綿
三會目とけ〴〵としてかえす也　柳水連　雨譚

てつぽう町あたり昔のつぼねみせ　櫻木連　中菓
下女一歩持つてる沙汰で文を付け　飛鳥川連　五扇
政宗をくつたと質屋そつといひ
むさい盃つばなのせとく王子道　同　杉壽
ふんごしが赤いでうれいぬかぬ也　柳水連　石斧
おきやがれ宿下り宿をきたながり　梅　連　梅司
天竺のがく人てうちんでかくれ　櫻木連　木綿
せんとうのかくには座頭いかぬ也　柳水連　雨譚
ゑぼし親祖父のかたきもうてといふ
地藏堂泪のたねが上げて有り　同　芹丈
養母に耻をかゝせたでやかましい　同　石斧
まあうんといへと無盡のゆびをおり
すいりやうでむこふさじきのもらひ泣き

角力會三會結
天明四年辰仲穐　吳陵　著

餘加
おつぽつて縫ふが花かごわきにつき

ことようのすがた無沙汰のまへをかけ
うけつこをやつてきせるをとをさせる
もう〳〵じやまなこッたと四つ手かけ
こりやさむい百だとはなッぱりぬかし
ほれぐすり傳にいわくは何事ぞ
つらあては寐しなにしごとおッぱじめ
かけ取の跡へ廻すは丈夫なり

誹風柳多留十九篇終

誹風柳多留二十篇

昔々三十年も昔より、聞き毎に上名護屋をはづさず、おのづから名にしおひたる翁あり、連中いかつてこれをいへばごりやうけん〳〵とわびて笑ふ、そが年年組たてたる柳樽はや二十といふに及ぶ、此道のさかえ人のめづる事知るべし、そのはじめにこそそへよとこはるれど、今の上野つたなき口にいはんやうもなく、松が岡あまたゝびいなめど、本庄のしひてせためられて、つらの皮三寸舌長なやつさ、江戸中のおしかりをうけんは合點なれど、十三日どうでなければならぬ物と思ひきつて、勅使三度やみくもにしるす、

天明乙巳冬　　雨譚

同せきの末座むらさきあたらしい
年禮でなけりやいひぶん有るあふぎ

先祖代々うれ殘る石どうろ
ごろぼうはならぬとさがす火打箱
足音がするとはこねでかねをうち
しんぞうをおこして廻るすけん物
後家のしち男ものから置きはじめ
さぬきから虎の門まではなを出し
はやりいしやのり物ぞしやう二三人
ちがつたらひいてみせなに母こまり
糸立はしやうこさなしにうれる也
けんまくでくわゑん玉屋へ女房來る
折よくも土左衞門が來てせがきなり
りやうり人たのんでいせや氣をへらし
からッ手でかんきんをする子ぼんのう
座敷らう酒をのませて母ぶしゆび
品川であればかりかとたわけもの
はやるやつ夜中出店をあるいてる
ふくろごとやるとなきやむげびたがき
すけん目をはなさず見たをあげられる
松洞寺にわかに風のかわるとこ
名代へごうめゑつたかうめゑつた

一兩のとこ花手ごりやつと二歩
百八をいしやおッことしぶッこわし
まいら戸に乳母よッかゝりのませてる
むらさきぼうしこま下駄を御てんがい
つき出すがさいごむしやうに水をこぢ
神ばッて女房御はらい箱をしよい
氣つけ針たてられるまでぐごく也
旦那でらのばせを葉をもらわない
たびせつたにてうらば入ばかりする
三日正月を丹波の庄屋ふれ
唐本はかごにのる時斗りいれ
まさ門はあいそう過ぎて見かぎられ
文と手にゑんやが妻もかんじ入り
あいもなくつき出し力おとしなり
金になるそうで留守居の紋をつけ
つれてにげなよと二條のききいひ
五斗俵を高尾自由にとりまわし
おそれ入りましたと琴をかたづける
萬木にすぐれゑびすやかめのじやま
やきながら女房のたべるかんろ梅

三會目そのごをぬかずばヽァ出る
女房は三ッの下にてがなるなり
ほめられて此世にたッた十九年
三めぐりでふきまり故に行がばれ
ぢうのふをうまくつかふが三丁目
ふざけなんすなと煙管でやらかされ
世間ではとりもちひざる四つをうち
つれ〴〵はへつぴり坊主までをいれ
此ひしほすてヽしまへとのたまはく
くわんおんへ女郎の出來がぞッろぞろ
きおい三重でかけてく月のかご
せがれにはかないませぬとせゞん卿
ゆひのふとおつ手と道で行きちがひ
芝居のまへは行くまいとねぢけ人
かみにくつたくは快氣にほどちかし
こわい貌するあくる日は正月さ
ひよんな事嫁なた豆がきついごく
こうとうのぶんやに當りしうん立ち
をしい事むすめざかりを角に置き

いひまくられてだァまつて朝がへり
おれにあたるといッつけるぞとめかけ
どこに目があるか大門しれぬとこ
子ばッかり出來てみじめなそごくの師
すいさんをねらつてあるく妾が兄
おかしさは月を目切もともに待ち
のや〳〵だらけで母おやいけん也
乘るもんじやないと馬塲からびつこ出る
宵の内先づ寶引ともふし立て
萬ざいがたつとぞうりのけんくわ也
あさがほはしほれてゆやへふみを出し
酒だるにこまのかしらも見えばこそ
何の日かおふくろ井戸へ手をあはせ
あそぶ事ほうありせん香をたてる
まき高直につき二三日よごれ
半平と名をかへさかなうつて來る
女郎の三ッがいもしたむす子なり
堀のじやまよし野一そうのりはなし
ばたりといふと東海とよみはじめ
大きなきつねつきをやすなりおとし

ゐりッくずはや子のこくにおよぶなり
いゝのさと後家しんるいと不和に成り
いゝ女ずきにじゆくだんいゝをさこ
頼光の武具あらましはもらいもの
つれ〴〵の外にまいらせ候も書き
勘當の跡甚七がものになり
かねがおちたにむかし〳〵のはなし
まつ黑にさくらの口をしめる也
とまりやの帳に口まめまかりでる
くろがねのはしをならして鯛をきる
いもみざる間に花よめはぬりたてる
けいせいのれき〳〵禿ふたりつれ
程過ぎてきつけの錢を聞いてやり
かみなりごへで僧正と御はなし
歌はうちまきほつ句では米をうけ
かご代はならぬと女房無法なり
物干でけん馬のろうをふゆづくし
いッくらもあるに着ものを嫁ねだり
吉次が通る道すがら金びやうぶ
五六文のかしはなにさ〳〵なり

しやうわるはあぼしんわうの五男なり
母の留守けんどんなどで人あつめ
さいづちはちうをたゝいて面をつける
馬程なむすめはわるいとしむまれ
しやうばいをあてゝみやれと淺ぎうら
ひろつたとこへ置て來やともふ母
もちばなをていねいにつけしかられる
源三位ありがた山のほとゝぎす
くいたいものにふしをつけ子はうたひ
もみぢよりめしにしようとかいあんじ
高くらへゐんきよが來るとかぶろつげ
神子がひんぬくと笛ふきのしかゝり
かんざうがゆりて八さんけいこする
あつちからは玉藻こつちからは貴妃
身についたものをなんぞとてる日いひ
ごふく店八合目あたりでのざら
三會目しやくの居所をいちらせる
ゐんむすびきれいな貌はまれにくる
つねが常からふるしきとへんじ來る
上下がたつとかけとりしやべり出し

ばゝァ茶をにて友だちをおこす也
うたい本けだしむす子のうそにして
女房のるす扱うらはいッかごろ
まだ跡にこりやと四五兩淺ぎ見せ
ごふれいを大せいでいふ手ならい子
どう／＼といつて仲國笛を出し
今川でろんごをおやぢしかつてる
かうしんの夜はたけ長におよぶなり
金のきうじをよびつけるにぎやかさ
大きな内でぞんざへるしなのもの
七づ目もあてにはならぬ本のう寺
さがみ入道のはい名東魚なり
手を出さッせへと物さししうと出し
井戸端でたてつけてのむしよきみまひ
すをくんな御用あないちして居るよ
しッかりとたのむでもなしなむゑんま
ぜんぴやうは念佛をきくやしきがへ
ともにうりやうるでこし屋がいゝ直也
おれともに上ミは五人とてかけいひ
日本の地へ來ると下乘あいはなし

あつたら後家をたゞ置くと知らぬやつ
氣のどくさいしやへつかいが二人來る
第三にやらぬとばゝァらんにとめ
じやうだんにのませて嫁はくッつかれ
きついふりおもてをいなぶらがあるき
居つゞけをつかみ出す氣でおやぢ出る
やくそうで前の女房をかくすなり
さり狀はおつてと何かしさいあり
僧正がかぶりをふればもえあがり
へどの出るせんぎやりても色が有り
はねつるゝ目の無い臼をからみつけ
あれ今湯へうしやァがらと藥とり
島田めは錢にならぬと遣手いひ
三河から來てつがもないうそをつき
井戸の中からおもしろいどろぼ出る
下總のだいり紋からしてがげび
ごうせいなうでゝ下の句取りはぐり
音羽のこぢよく風車取つてにげ
とうにやおちずにせきそんでかたる也
三本折らせて半四郎をたのむ

一國せいばいあんまがひとりなし
めうがの程も恐ろしくごくじゆする
御手を引き申せと石田世話をやき
二三人けころして來た女房なり
ゑびす講あつかましくも傘をもち
うつくしい髮三日目にほどかれる
そくたいの袖へおやわんかくす也
一ト宿(しゆく)はおちこち人のとまるとこ
女房のそうを見い／＼さそふなり
きみが一日のなさけにもうねだり
うんのよさ此八朔はもよふもの
夕だちで一斗七升河岸がたれ
文左衞門手まへ一ト人がおもしろい
ふじどうしや下向よしはらどまり也
によぼんにくしき僧正のかいはなし
からやうにふで屋はいじりころされる
てへ／＼といひながらのるにわか武士
ほとゝぎす土用時分はふるせなり
そりや笠をぬいだりけちなもみぢがり
孝行のしくじり舟ではしをかけ

津の守のやしきはよせとはかまだれ
ぼたん一本をふたアりの子になかれ
せつかんをしかけわらひにばゝア出る
門番にさへとをり名をつけるなり
中宿はかしわきざしもつて居る
ぬきん出てとなりのじゑきしよつて來る
にようばちをあばらへあてゝうなり出し
松洞寺何めんぼくに歸るべき
ふじとよし原は江戸でも近所也
かんざうはおふじやうずくめゆるす也
しゝが谷大一座だとかぶろつげ
ふく神をかつてせつたをこしにさし
ぜひに八分でと手おいのねがひ也
おもしろだぬきよこに來ておこす也
いしやに似たものが一人であるく也
留桶をつかひ長やでにくまれる
たばこ入くふかと思ふさむい事
ついには神明の市がばれ不首尾
のろしのあかりで落ちた物をひろう
ころがよくなるともひとつとしをとる

神樂堂しんるゐ書がならんでる
むごい譬へはかんの出たやうしつ子
わらじくい迄はのういん氣がつかず
いせのはけゐきはとやくしなでる也
後の月きぬとさやとはすてるなり
さん見舞長口上は御たいくつ
せげんさまたのみまするど母おくり
もりつけたうへをおしなはねじる也
たびねがひけいせいいッこ出來ぬ也
女房はもみぢを買つてくやしがり
日本に死にそこないが二タ人なり
たつ田ひめ是よりむす子うかれそめ
けちな舟ゆさんよし野をさがしてる
爰に一ト人のゐいゆふ有り敷ぞめ
仲人のきうあくの出る嫁じよやみ
をしい事嫁も小いちがわるくなり
聟きえも入り度きおや子げんくわ也
ぶくづいた小袖で淺黄土手を行き
おんがくをもんがくどなりつぶす也
見物らんぼうかず〳〵切おとし

傘で不沙汰のこもをおつかける
楽めしやへなでつけ心やすく來る
女きやくていしゆにこづきしかられる
手桶うり直が出來首をやつとぬき
耻かしいけんくわをひだちぎわにする
羽左衞門てらさとびくを下げてより
ぐるで入れぬと大門で女房いひ
らく中は光秀信士とぼすなり
一國はいわ非をねだる根をたやし
女郎見てわが家々へたちかへり
ぶきげんをよこッてうから來てだまし
半ごろしにしてよじんへとやぶいしや
とんだ事十夜を南もん日なり
もう一歩くんなようと母へいひ
ふられたとていしゆせつない申わけ
百も小言で納豆でたづねてる
よんでやる文あいだにはちくしやうめ
やむことを得ず生酔をしばるなり
伯父の目にもなみだ座敷らうのわび
ひやうばんのたわらをはしへ出て賴み

折釘を打つて松右衛門一本きめ
さがやうでせうじへ一首書いて行き
正月のゑんま芝居におされたり
手ぬぐいもむすめがもつと品になり
けんのこゑとなりやしきでべらぼうめ
ひつぎをおくりふとゞきな大一座
入院の外のもの入りはかたづける
松の木をうへ〳〵先へまかりたち
こゝいらに門がほしいと田をめぐり
かべそしやうしたら末世に本はなし
夕立のたんびに仁者かしなくし
雨やどり迄はぶこつなをとこなり
くものはふやうに大臣こじつける
いとものあわれに木めんのいとをとり
魚鳥留せぬのは甲斐のはかりごと
ずつと來ておどり子袖をぶつちがへ
やれ〳〵もいとでおどり子引出し
はづかしさそだろうといふ病也
なんぼう怖ろしきものがたりは夜具
ざッくりとつかんだ所を母おさへ

佛より若いのをもつまづい後家
さいた〳〵見さいなめかけのおとゝ
清水をいのれどあざはぬけぬなり
つめをとりかけて和尚の禮をうけ
間男の子もあてやすとだつきいひ
梅の木が大きな森に二三本
左様斗りに氣のつかぬやぼなやつ
釣つた鯛直ぐた針ゆゑ魚がおち
はちびんをみんなが笑ふまつり過ぎ
くたびれたやつ口元へこしをかけ
水くみは小べり斗りの舟にのり
百人一首こんぴらさまに氣がつかず
尾張町通りぬけるとしづかなり
むねくそのわるいはなしを地紙する
五人のあごを御めかけはねだるなり
これもんでよんごころなく嫁おとし
はしの有るだけ書いて出すくれのふみ
とてもうせるならよし原へうせをれ
片目だがきりやうはよいと仲人いひ
角田川二度とはうれぬ名所なり

江戸中を越後屋にしてにじがふき
面白さやるぞ白かみかねとよみ
明店へ若との丶行く十五日
三會目ひがわるいとは本のこと
神々の大たばを出す十三日
ふんごみと頭巾四郎兵衛から屆け
此みそはいくら目するとなめて見る
三十八年よけいにて札を出し
すじ骨をぬかれたなどとまけたやつ
あたご山かん彌がやねをさがしてる
はきものを持てころびの母むかひ
うんを雨だんに見芹を先へかひ
詩をつくるのがいつちい丶上戸なり
ば丶ァ正直金さると笑ふなり
がきやみの跡はいやだと湯場でいひ
ほらをふく迄いひ立に庄屋の下女
しなの迄かわりごッこにおぶッさり
後家のいろ先年五両出したやつ
よし町へ行には和尚たちのま丶
あさつて迄にそまらぬと番所だぞ

袖の梅おあんなんしのくすりなり
仲人はしうとをのろふやうにいひ
琴爪をちんぼうへはめしかられる
下女の戀文もへッたくれもいらず
酢てんがいなどこしらへてかこいまち
女房子も見つけ次第と長田いひ
ばいためが來ておるげなと伯父ふつう
わらわない子をあいされる氣のどくさ
はまぐりにひらめ女房はふとくしん
きいてばかなもの赤子へものをいひ
まくるだと女をおどす關所まへ
三ヶ日だけとをよそにいびるなり
冬の内月三斗づ丶くひこまれ
くだりうりやなりをさせてといで居る
はなれ馬もらひにこぬでこまつてる
孫も六人もと祝ふむこひきで
こんにやくをなげ出して追ふはなれ馬
四つ手駕むかしあい丶をいつたやつ
わらはせて見なと新ぞうしやちこばり
ふんこつさいしんの玉むし母もち

牛のくそあわびッ貝は見てとおり
ひるがひにゆかまいかやと淺黄同士
まき羽織ほぐしていしやは駕を出る
目うつりがするはずゞらりッとならび
あれとかとあきれるやつと後家は出來
若との丶ぬけがらおくでば丶をする
向ふのが松だと石にけつまづき
もてるもてないは水もの代三步
二度行かぬ氣ならよし原いッちとく
くわんぬきはけつ王の代にはじめたり
油あげ二度目の使おとなゝり
畫の良ばんとう色師とは見えず
子がじぎをせぬでち丶するいとまごひ
四本さしたのが四つ手の直をきめる
太神宮を引つれて御しゆつ立つ
ひやうし木に嫁居直つて口をふき
のこりなく皆出ましやうとやりてふれ
としま屋であわぬはめしのさいにされ
仲條は這入りがつてを三とこあけ
あいさつが無いとやッぴしつへを立て

年明けの安目にみんなひつか丶り
やね船のうたせんごりにつぶされる
だきついてみなこいやいと五郎丸
病人にまやもの丶有る大三十日
のみ口をゆばん氣づよく引ッこぬき
ひどい事しち屋を出るとむこし也
たべる外しなのわる氣の無いをとこ
生鯛は糸を喰ひ切るやうに見え
四文づ丶ついては女房おして見る
富の場へさい布をおとしわらはれる
鍋之介事五右衛門とあらためる
つよいごろぼうも無いもの石灯籠
足音に仕事をやめて鈴をふり
御めかけのげい元ばん國のがつき
ぞうりとりろへ取ついてしかられる
とうとい寺の門内で四つ手きれ
一日に千兩迄はつかわれる
京斗り大きなりで木そう也
いせものがたりに太神宮なし
さがやうの返事仲國もつて居る

置いて逃げやれと切文たのむなり
通ひの高の登るはず夜具を入れ
ばちはふくろへ納るとしづかなり
口をすくさせて花嫁こしをかけ
つくしうり小判を出せばにげる也
下手のまりけられるだけはうぬがける
寐まいとはもうしやせんと書いて居る
亭主がごろぼうするでどこへも出ず
後家ぢみにつくつてけつくこのましい
師匠さまいろはのうちはこわくなし
あつけない夜をけいせいにすねられる
手ぬぐいのはしにけん布を少し付け
すゝはき竹や竹と只七は賣り
人のいゝ車力ねこだを敷いてくる
そんならばおめしと下戸にわりが付き
けいせいの御きげんをとるしわいやつ
かこう有りといへども初會はくはず
めづらしき龍宮米を藤太くひ
氣にしてはつまんでは見る貌のいぼ
けちな雛一けん店で買つて來る

いも見ざる間に御きとうに皆とられ
馬の金園ひに小袖ひとつ着せ
はぐれるなよと摺こ木にとかまらせ
海ぞくの用心に戸をさすつく田
玉川は江戸へ出がけに米をつき
嫁のからしをうばひとりしうとかき
いんしんぞうとうせぬやつへ名代
座頭のつめた跡たぞん干場なり
人もさすなら我もさす有がたさ
うらゝかさ榮花のゆめをうりに來る
發句にもならぬかつをを伊世屋かひ
ふにやいの上下申入と來る
肩車店子などへは下りぬなり
冬は書春はむじにてくばるなり
けふはいゝ寐日だと雪をむごくする
上下ではだかの中へわけていり
脊中へも手のおよぶだけ嫁はぬり
質店のがきがと小じよく泣いてくる
なべいかけ切目たゞしい砂をもち
雨のみゝふさいでもりはなぶられる

三ッぶとんしよつては出たがすてゝにげ
雪ふりのもちやそび跡で手にあまり
どつちでもおとりなさいとまぐろうり
本郷の町酢いものでくつて居る
重をとる手を前だれでふいて居る
おしつめていゝそうだんを長田する
せなァ小聲でかますからかもを出し
しわいやつ七十五日はやくしに
皆落葉して丸いろは目立つ也
おかしい時は小便に師匠たち
うッちやると思ひ禮者のつらをむき
しん宅のかへりにどこぞわるくいひ
うらやむを四つ手の中で聞いて居る
つかふむす子に福の神追つかず
となりあるきを馬でするつるが岡
いわゐなとかんざしで毛をかきわける
日本にかまいなさるなと貴妃はいひ
先のていしゆに御無用とうんのつき
あをむくとかみゆひのどをのぞくなり
どろだらけみやげはすてずしてかへり

高い水一升九十五もんなり
くれおそき關はのびたりちやんだり
臭へ穴あけてやうじを十本かひ
じゆずを下げてもどこやらが色師めき
百さじき口さびしいとたばこなり
うら口をしめて來やれと門すゞみ
べろ〳〵をしてとうがらしこりはてる
さんげ〳〵大こくをぬすみました
わるくは無いが高いのでうれのこり
とゝさんと寐ならへといふはらになり
鯉のくいにげやるまいぞ〳〵
かこわれへつぼか廻るとさかる也
車坂下を二度目の高尾行き
丸臭のおも長に成るはづかしさ
以上なら百つけましやうと檢校
亭主が有つてのろうがいさじをなげ
息子の不得手地女と孔子なり
ふせがねをくさりでつなぐ六あみだ
新古のしやべつなくあげる大一座
けちなかたりてんびん棒下げて來る

惜氣なくぶちまけぬしへあげんしやう
持參のつくを一ト目見ていやといふ
あゝらおもしろからずの雪の供
あじなばん古ぞう斗りうれのこり
子だからも身のさし合とせげんいひ
秋葉からかへりに太郎坊へ寄り
堀の死跡へかたづくうんのなさ
安玄關じやうじをたてゝかぎをかけ
相傘はだまつて通すものでなし
はきもの御用心を三浦屋で張り
にわか雨はるかむかふでせみの聲
よびだしは用をかゝへた人がかひ
茶屋なしにゆきやれとくだと安くされ
文など書いて居るのを上げべからず
きゃすなど少しうなつてとこへ入れ
人が傘さすならわれもいとだて
たがあふぎだかつかつてるわたし守
まき紙はひよつとおとすとにげる也
瓜ひとつぬすめばはたけ中うごき
不仕合せたいこを見ると横へ切れ

春の生酔ぞうりとりはさみ箱
さそひてにゑくぼがあるで悟られる
まんざらの傘を越前屋となをし
うきあしだなとついて來る四つ手駕
出したり入れたり高砂金太郎
ごふく屋一けんでくらす六郎兵衛
坪皿を持て非ばんをわきへのけ
しちやから切れぶみの來るつらい事
なまにえなうちになくなる小なべだて
あつちからのおなじみと内儀さばけ
三月のこたつもすてたものでなし
美しさ二つのあざがきずばかり
文をなくしたでおッかないすゝはき
けいせいの人別帳をうりに來る

巳春吉例角力會　催主　山下　櫻木組

八百の上下を着るありがたさ　玉垣連　和笛
朝寐ぼう六日に松を取はじめ　伊呂波連　子好
兩方の木戸をしめると髮をとき　櫻木連　豐好
あすありと思ふはけちな女郎かひ　鹿子連　美德

怖くない虎の尾をふむのどやかさ　玉垣連　和笛
鈴の音を留めて法眼匕をとり　鹿子連　鹿蝶
たこの糸ぶん取に大ぼやも出る　櫻木連　かたる
馬鹿もあるものよし町へ大一座　柳水連　素文
二三年白毛をぬいてやめにする　玉垣連　山口
江の島を賣て女郎に買ひあきる　柳水連　素文
取だてのかぼちや屋根屋は振廻れ　飛梅連　素鳥
あいそうに牽頭は二つさくら卿　櫻木連　かたる
家根の雪前垂かぶりせゝつてる　鹿子連　美徳
みの市は其角このかた出來る也　櫻木連　東々
おしい事信長妻戸ぐるみやき　柳水連　玉簾
三つ布團天水桶に程ちかし　櫻木連　かたる
女房はさくらであなを見付出し　井増連　白子
一家中四つ手はいらぬ近所也　飛梅連　開之
春やしき秋は寺にて不首尾也　櫻木連　運町
二三人人じちを出すはやるやつ　水池連　里井
あづまから憎まれものを染て遣り　八重垣連　寸魚
柳うらどこだと聞げば角田川　櫻木連　春松
初雪やせめて禿の一トつかみ　柳水連　猪牙
將門をしめたを龍王へはなし　櫻木連　洗路

素見物きたなくたかるひまな見世　柳水連　玉簾
軒並び梅澤あごをつるしてる　櫻木連　木綿
生酔にこゝろ遣ひの金屏風　飛梅連　鳳頭
はかなごは有そうも無い寶寺　櫻木連　如雀
餅をやく匂ひで上戸いとま乞ひ　飛梅連　開之
傾城のうそをいはぬがつみに成り　玉垣連　山口
御預けの義士にもはぢぬ達磨有り　柳水連　雨譚
中入れますとなんだかほうり込み　櫻木連　かたる
とんだめにあつたと頬冠で來る　同　同
おめかけの悪い手本をだつき出し　柳水連　開之
西の内をくんなさいと泣いて來る　鹿子連　美徳
評定の内ういろうを士卒かひ　櫻木連　木綿
よにごくぶきよふな笛は按摩也　井増連　高柳
らうがいの娘かならずとなり有り　八重垣連　寸魚
ゆるい黒木へ竹の子をさして出る　櫻木連　素鳥
ふられたさいふに女房聞入れず　飛梅連　春松
庄屋さし寄まかり出て雨の禮　伊呂波連　文車
内もゝでちらり／＼とわなを懸け　櫻木連　かたる
口まねで小町あた名が一つふえ　八重垣連　狐聲
ふき殻を飛車でおさへる玄關番　櫻木連　かたる

いや是からも御不沙汰と傘をかし　梅　連　兎丁
もそつとに致しましたと牛房下げ　櫻木連　木綿
とむらいのくずれ三歩は賣れ殘り　柳水連　宗文
放し鰻もふといのを選ッて居る　玉垣連　露日
たてつけで品川通ひ荒りやうじ　櫻木連　木綿
いきを引取ると女房を引はなし　梅　連　鼠走
大口に十八文が米をうり　八重垣連　狸聲
初雪は時を定めぬもん日也　櫻木連　豐好
御新ぞをかみ樣といひ叱られる　井増連　狐聲
あゝほしいなァ百兩に人だかり　伊呂波連　文車
ものはそうだん傘と花とかへ　櫻木連　春松
嘉六はよび人で彌八は賣人也　八重垣連　狸聲
越の傘小雨にもさすふてェやつ　櫻木連　蔦故
借ものと見たはひが目か金屏風　飛鳥川連　連町
一トたびゑむと一歩取るばゝァ也　同　借遊
十五日梅若の方かきくもり　櫻木連　近糸
娘の不首尾町人に立ちかへり　庇子連　串柿
あふぎやへ行くので唐詩せん習ひ　櫻木連　乙丸
呉服店はなをの切れた下駄をはき　井増連　狐聲
御へいが出ると二十人うせにけり　水仙連　旭

すけべいなけいせいの出る三會目　柳水連　雨譚
里の母わるこんじやうで暑氣見廻　同　同
巳二月五日ひらき　催主　星運堂
補助　薩秀堂

續角力會

かつほ木とゑまとが京の四月也　雨譚
きついい事火鉢の中に百すたり　長笑
六十五しうむらさきをほめるなり　素文
ちゝをとん出しておすへけちをつけ　雨譚
一ト聲で五町をなぐるほとゝぎす　百千鳥
檢校に成る前所々でにくがられ　石斧
おはぐろをくんなと貌をもふかくし　長笑
三會目から人がらがぐつとおち　狹衣
花の外には松葉やへ行くもあり　伍遊
一年に二度高き家にのぼる也　芹丈
くりかへし猪牙半分はふみに成り　五樂
もつとおふへいにいひなと新世帶　雀芝
猴を開いて鹿きゝこりはてる　石斧
ふとん三つはむせつぼいねだり事　和笛
大木の花見はものがいらぬなり　石斧

初手のおたふくめがと後妻へはむく　五連
渡して傘を明けて見てしかられる　雨譚
栗の木の下へ毛ぬきを持つて來る　芹丈
まゝのもみぢは中川の火がくろう　素鳥
わか家守くれはちやほや嫁はいひ　西喜
今買つた三ッとふり袖ふるつてる　木綿
大一座美へさすおしのつよいやつ　鳳頭
千雨は衣にしてもうらかなし　和笛
あきらめのわるい若後家四火の跡　長笑
あぐらかく仲人丸ッ出來かゝり　素鳥
はなれ馬とらまへて來てしやべる也　五連
びんぼうのかくしごつこは中の町　美德
御用の外もかまはぬは十五日　文集
かわかしがつくでかこいの所がへ　木綿
かたびらの下へ紅うら着てかへり　栗穗
しかられる所迄あるく寺の庭　素鳥
はぐれたらゑの木の下と市兵衛いひ　車道
二十一日梅わかへつかをたて　大鳥
金屏風のまへにゑちごや絽がすわり　雨譚
多田のやくし迄はいせや連れに成り　伍遊

雪がふるうちにはおとりあげなし　梅舍
からあさり直段の出來た音がする　間々
四郎兵衛をしかつて追人かける也　如雀
仕合せは宗盛おろく不仕合せ　狐聲
かねやすは不斷祭の通るやう　美德
杉ばしを火鉢へつけるざつなうち　素文
百疋ぶんがあいそうをばゝアする　五扇
いやな事いやとおかねはいつてのけ　龜遊
つぼなうり一歩出されてべそをかき　伍遊
うるさゝは持參やつぺしつめる也　山路
ふんごしをしながらのぞく雪の朝　豐好
にげ道をあけてきそうをくどいてる　五樂
あさのみの一トつぶゑりが四十七　遮蝶
年を迄一割引いてせわをやき　三丁
一ト寐入寐て高なわは月見なり　石斧
李花を冠にかざつたを二人連れ　五鳥
盃のもめるむかふにいゝ女　五樂
手のひらへ家内いつける月の客　春松
けんたいへなをつてかわら拵へる　車道
のむ禮者所々にて供をおこす也　猪牙

初午はこよみで見出す祭也 — 同
いきせいひッぱり袋もぐさを下さい — 美德
男の出がはりおッちよッてつッと出る — 百千鳥
ねんごろにかたればといふ神のちわ — 芹丈
きしこくのとをりへさくら植る也 — 鼠弓
ごしやうぎでくらすはかたい川づかへ — 近糸
せがき船切れた三ッなど落ちて居る — 素文
わるごうがいつて白紙へ判をおし — 五扇
夕だちの一句いなりもはだし也 — 五鳥
ひどい事にげろ／＼を琴で彈き — 玉簾
袖づまをひかれしたびに下女なびき — 春松
大松と小松のさかいたゝくなり — 霞朝
すいかつらみんなにすると馬ふんかき — 三丁
梅玉のそろばん二十五けた有り — 美德
わつちやァいやよとこわ高に娘いひ — 滄水
暑氣見廻行水をするごくこんい — 雨譚
顔見せのむすめは曾我に嫁で來る — 霞朝
鈴ぐるみ十九夕の仕立代 — 門柳
まつ黒なくちや／＼をする耻かしさ — 文集
正洞寺聟は門前ばらひなり — 蔦故

もふせんはどこへ敷いても面白い — 同
ひなのめしおらかへも來て戴きな — 横好
甲の座のきやくはまやきへ手を付る — 芹丈
しかられて下女はき溜へごみを捨て — 五樂
沙汰は無い事上げ下げを三歩する — 芹丈
傘の直が出來ぬける程ふれといひ — 青蛾
てうしをも見たおや方でわけがよし — 五扇
ふところのあくうり物を息子する — 芹丈
なせでもと鳥居のきわに下女殘り — 三丁
旅馴れたふりでせつちん先へ聞き — 近糸
かゞみへ向ひ鼻など下女つまみ — 滄水
茶碗はち網の中から出して賣り — 豐好
關とりとしなのをよばる飯時分 — 門柳
命より大事にしたは高尾なり — 素鳥
はりまやが來たらばとうにあけよふぞ — 横好
野にくらすやつらがまゝへ二三人 — 同
屋根の有る閜持へ釋迦いれて來る — 春松
川崎の品川と來るむす子旅 — 美德
雨舍り茶瓶にかゝりて吸付ける — 石斧
川留めにこり棧道を通るなり — 同

龍神は歌と發句で二度撰み
女きやく白うをなども聞て出し
どうがへしもふけ小間物一本賣り
金びやうぶ子にたゝかせる心なし
四丁目もまたちらほらと匂ふ也
うりものゝふしは六郷そこらなり
たんぽゝの草ばかりあるこがね原
みゝにたこできいしたにと高尾いひ
からかさを三日かりてる長いしけ
切遊び吾妻女郎に京男
ごばで見た男かじぎをして通り
けちなひなそばやの膳でまぐに上げ
此はなと心中しろと札を立て
合羽籠部屋へは御用行かぬなり
四火といふ沙汰を聞もしわたしやァね
小豆は公卿大角豆勇者なり
棒の手を見せて和尙へ馳走する
おかみ迄知らせて女旅へたち
にぎやか過ぎてもふからぬ出會茶屋
ちやうちんで立聞をするたわけもの

門柳
芳蝶
三丁
狸聲
同
亀遊
霞朝
狹衣
蔦故
同
芳蝶
車道
狐聲
美德
同
同
同
豐好
美德
狸聲

月の枕言葉くろうでありいす
あはもちもいゝやいや二十九日
狸聲
同

巳二月廿四日開

春日町鹿子組
催主　美德
補助　星運堂
　　　薩秀堂

俳風
柳多留二十篇終

俳風 柳多留二十一篇

此篇の初丁は、十四五とせ以前迄此道に名をとり給ふ若ての上手名吟多かりしに、おしいかな世を身まかり給ふ、予うろ覺えながら彼秀吟をかきあつめ顯はせしは、御なじみのかた廿一篇の御回向あれかしと願ふのみ、

お妾のむつごとくれろ〳〵なり　淺草　紅梅
高つきの菓子が屛風のあるじ也　小川町　車十
持參金出るはれ見世で笑止がり　番町　梶葉
かんざしでかき〳〵車いひこめる　神田　嵐巴
江戸家老若衆根性出したがり　下谷　冬始
はやり醫者一かたまりに睡らせる　市谷　萬鼬
氣ちがいのそれからたえぬ角田川　麻布　龜甲
庚申は横にいつてもけどられる　柳原　千雀
車にてしきみ淋しく引いて行く　下谷　井印

嫁の髮巳午の間にやつと出來　青山　仙郞
雨やどり子の行けといふ氣の毒さ　麻布　きぬた
晝着ない小袖は內で出來ぬなり　本鄕　鐵砲
大とく寺水にはあはぬ所の名　青山　五盛
子のねびえよく日夫婦喧嘩也　麻布　似竹
二またはわけてはたらく土大根　丸山　百菊
あれにはなぬしがござると神馬引　下谷　綠枝
踊子の母にくらしいせきばらひ　八丁堀　月桂
身の重いうちはおはちも下さつた　下谷　陀陸
冬の田は山葵おろしのやうに見え　本鄕　中菊
お妾はばちばツかりで利生なし　本所　淺裏
からす爪垣根の外の命かな

ひのへ午のとし末秋　呉陵軒印

歲旦はしたが歲暮がむづかしい
いくさは無いと見切たでかさぬ也
お念佛いそいで嫁によつかゝり
まめじやと申斗りじやと持たやつ
はじかみの祭禮なぞところんごよみ
やつさすにぬれ事をする新五郎

もみぢではないとまゝ母そにんする
二度とはつれぬとさくらへ下女くゝし
ほれぐすり傳に曰くは何事ぞ
旅もどり子どもが先へふれて來る
風に笠とられぬやうに口をあき
小びたいの有るやつゑらいとらをうち
神棚にかるたのつてる屋形船
からのかゞみとはたれだと亭主きゝ
湯屋をかたうでにきざみやこして來る
土手の雪かねのわらじの跡ばかり
足元をねづみのあるくあつい事
車引跡のたわらへむぐるやう
たんすからやりてふんごみ見付け出し
うりぶりのわるさしやくだのつかへだの
町内のにくまれものがあつ湯ずき
いびつてはむす子をひとりものにする
今くへばいゝとぶきみなさしみなり
雨乞の歌もくどきがまじつてる
げじ／＼をすてるあふぎのいそがしさ
御用のみゝやおつゝけていたばさみ

てうはんばのたゝかい跡元ゆひこき
有がたさ人をころすところされる
座敷持にせたんゆふをかけておき
ゑちごやのあいそうになる雨がふり
ひらき戸をやたらして置くかたき持
町内へ來るこつまぐるにくい事
札紙のついたおあしを御さいもち
あれだきつくよと氣にするもちやそびや
五三の通ひにむす子はゑらい事
一つまなこがあんどんのばんをする
あぶらむしらかんをさしてはひ上り
書くもんだなとすけんぶついらぬ世話
すふわりが三歩どたりが一分也
内藏之介くしやみをしてもいしやにみせ
だいのものうしみつ頃にごうそごそ
はたけの中で袖をひくものなァに
おはこびを山々願ふ六夜待
いんのこ／＼つんぼうねめられる
嫁の禮男の見るはかほばかり
大あばたかゝァがきげんまかせなり

よういろいんな事いひなんすのう
目うつりがすると三百けんあるき
もうせんへのつてしんぞう叱られる
またをくゞらうといふには嫁こまり
耻かしそうにごふくやは無いといふ
にげやうとぞんじましたとばか亭主
つかいに行てかへらぬを一首入れ
丸い風ふくにはこまるかやば町
下(した)から出る御むしんを殿御しやうち
からッ切座人もせずにまつが岡
あわぬ角力はだてがせき高尾山
とふにはおちず石そんでさんげする
なんとしいしやうどッちらも三會目
錢の無いやつにはどつこいとげい者
日本ではぎやうきぼさつと女郎也
道々もいけんでもごるまつが岡
虎のなきごゑをきかれて儒者こまり
とりしめて一だんかたりみそをつけ
山といや川とこたへて四つ手かけ
ゑんが切れても大事ない下駄をくれ

をしみ〳〵ふり袖をひとつのこし
臼の禮たもとゝ帶をはたくなり
白布を取てばくろうよびにやり
にわか雨女がいゝと傘がふり
もんがくはぐわゑんにするといゝ男
夕だちに馬を半分ぬらすなり
ゑきもない首持て來て琴をきゝ
いつ迄とないたはぬゑのいとこなり
龍宮はつりしをとかくむこに取り
寺町でもうぼをきけばこしました
むらさきを品玉ほどにしぶんそめ
いたいけぶにん子どもがいつそなし
長吉點でよんだを他人知らぬなり
音(おと)さびしくぞかえりける四つ手かご
けつ王にはじまりそうな衆道也
いそ〳〵としづか御ぜんの跡につき
ぼだい所へからだと首が二度に來る
きなこつけ〳〵おはぐろをつける也
申おろしにしたばんにまたかつぎ
大根だのいもだのゑの木だのと書き

いなかむこ袴でしばりからげられ
まゝおやは紙で折たる夜るのつる
遣ふはずおやぢさかッて入れたもの
がいぶんまひをまふ年で何あらう
げびた事だいはきりでが無いといひ
こゝ通りなさいと袖をひざへ上げ
大こくはいゝがあぶりこ手がわるし
鈴の音で甲乙の座へならぶなり
あのぢい様のかいたのとがくを見る
おかしいと御幣ではらい神子は舞ひ
ふみを書いてはとつといてやみ出し
じやまな事伯父のむすめが二人迄
僧正の目合を見てはつかむなり
居つゞけに用ひてよしがちィらちら
石町のかねでむかしはひけをうち
蚊の中に新ぞういきがたえて居る
汁のみをかいに出すので弟子さがり
五つ目へいくらはけちな柳ばし
朝がえりとあるこかげへおろさせる
たばこ入かるとうがらしつきやだし

糸を切るはさみは女郎いらぬなり
つり合のいゝけいせいは直が高し
おれが良みなよさ嫁はつねのかほ
いせものがたりもつたいないと親父
ばん僧は松をぬいてる人に聞き
となりやしきでも月見どこでなし
盃は出たがさあ跡がながいは
よけが七両二歩いるとてるひいひ
流れくわんじやうの近所で二疋釣り
ねどころをはしごの通る大あらし
やつぱり梅といふそうで公家てれる
町内のぎりさへすむと大一座
とぶぞと見えしが忽ち土手へ行き
勝つたやつそろ〳〵にげて音さびし
切おとしおしをおかれぬまでの事
下女のはら心あたりが二三人
他でころぶぶんはとけつがひろい也
錐よかなづちよとしろうとのうなぎ
村の嫁今戸のでく〳〵でひなまつり
あのかきうりめと大地へぶッつける

をどり子は女の中でぶにんそう
すなをにするとお高さま〳〵
戸板でかこいほうり出し〳〵
百年目矢來の中へいれられる
うれしさはあやめしらはの殿を持ち
とんだ時いとまをねがいなぶられる
あついのにお針手おもいものをぬひ
かうさんの事だとなんだ初會なり
まことのけいせいかひ笠や下駄なり
ぢゝイとばゝアあつたとさ嫁はもめ
やめて居りやいやさと後家は出來かゝり
ふりそうな名のうすぐもはふらぬ也
をどり子が來るとしやうぎをやめにする
ふもん言二十五程も候をいれ
法事きやく嫁の素貞を初に見る
松が岡女だてらな會所なり
取つて置きねへなにいらぬさしをかひ
おかしさは持參いのこに見合なり
鳥にだもしかざるべきや四つ谷とび
ちよくしさんなごと巴はやすくする

よみの見物すい口でこれからさ
萬ざいを嫁はけいしてとふざける
此どてはいくらだとねぎさげて居る
死をぜんどうにまもらずおとこにげ
よくきけばおしやうの流れくわんじよ也
おでいにそみた結構なきやらをやり
引臼のいッくらも寄る安日まち
當住大山ほつ〳〵とたゝかせる
菰をかぶるぞよぐらいはきくものか
金魚を片身上げておくけちなひな
はんめうを羊の中へりよかういれ
手のひらへしたみ才藏下女へさし
せつぶんにふだらくせんへもみ上る
ちゑの出るほどふり袖はじやまに成り
もどりには道くさをくふとりやけばゝ
こじつけたそうでこわ〳〵あるく也
たそがれのわたしつりしが二三人
口をしさ大わざものゝ御せんべつ
おやにて候ものうたれ拙者うす手
きげんよくゆふ王身代をつぶし

麥めしにさいはいらぬとみなくらひ
ふきげんさやりてあはゝの三太郎
ありがたい所で切れる三のいと
一トやしきおつとり卷いて帆を上げる
たきつけろやいとひしこの首をもぎ
あん内がしれて六ねんはやくかち
枕言葉もあらうのにそんりやうや
中宿のまへをげんぞくわらつてく
岡ばしよのたいこはごばの片手わざ
生醉の供ものひろひ〳〵來る
何をして居たとこわめし又つめる
田原町からねらつてくふてエやつ
きやくぶんを松へ中々がてんせず
木魚程のものをやりてさげて居る
一人子に草をわかつて赤がへる
いさゝかな用ごふく屋にこしをかけ
ふみにじり〳〵ばんづけおこし
いろむすめしゆん三夏六ひなを出し
此へんのあめだとおやぢ目が黑し
から荷では植木かほうろくか知れず

客をしかつて出て御用しかつてる
どこ迄ころげるか見てる火ふき竹
たこの切れたをおしむので奕げび
大こくを手長じまからかひに來る
二代目はあしぶみもせぬふくの神
かやぶきの舟からきざな聲を出し
姪で御座候と善兵衞はんをおし
あらなわで着ものをしばるかや屋ねや
はやるやつねかしつけてはごつか行き
是切のらうそくのぞき〳〵ゆき
むかしとつたるきねづかでとしわすれ
ごらの入れものてッきばきぶちつける
夜るはなきひるは旅人のじやまに成り
半ぶづつさすとからかさ戀になり
げんざいのくわはぶきやうに二本さし
おしうりにぶゑんの后せいへ來る
めしがすゝまぬで御用をぎんみする
ほん〳〵がなるぞと子もり笑ひこみ
芝居へは向ふのめりでむすめゆき
目のからむ時分にろじて母のうへ

あみの目を大方うめて能しまひ
つめ／＼をほんとうにする遣手ばゝ
とんだあんもんをそばから無筆いひ
まだとしやわかいなひなさまに梅
どか／＼とうゐはとむらひくづれ也
歌でつき合へばいのしゝこわくなし
見ともなきちうをつまんで軒に立ち
かごちんをわけ／＼あいつされぱいゝ
やさしいこわいろしうとめ上手なり
子をひとつにらめて置いてもうしわけ
いせのはなしをきかれつぼねはこまり
しる人をひどくしばるはやりてなり
是はといふをせいろうで聞いて居る
なんだちよくしだと國香はらをたち
あのきやく僧こそと高縄まで追ひ
羽織は長さをいとわずせがれ着る
いもうりの仕廻ひは升に入れて行き
あッたら船に坊主だのばゝァだの
中秋はごらにみのいるじぶんなり
封遣ひふきげんなきやく二タ人出來

ながしのから夜通しとすねをさすり
三丁目ごふかわづらいそうもなし
三會目わッちやふとつていんすによ
しうとを元のおぢにするむづかしさ
御しまいとことわつて子ははしを置き
車引ほどの人數でむす子ゆき
參りそびれたと何やらかりたそう
女房が出るとだァれかよびあつめ
おけはざまついに勝利を得ざるとこ
新見世のうちは二八にわさびなり
初ものゝ内でかみなりいやなもの
しちりんのそばでよんでるみくじ本
ゆへ行くのにも船にのるやしき也
ふしておもんみれば又行きたくなり
かけひまの内干大根などをうり
から紙を品々こすと大佛
三のいと小ゆびてまわし／＼來る
一人づつ丸ごしで居るわるいうち
見物左衛門をあてに土手の茶屋
どてらかいとりで六尺ともかえり

金の番いせやのむす子よしにする
かゝ人もおふかんめれとじたいする
四季折々のたわむれに母こまり
ゆび三本やつとの事で嫁ねじり
白あがりの詩をびやうぶに張て置き
來ればくるとて二タ人迄金糸かひ
めいを入べしにやたらにいびるなり
車どめ道をまわらぬ十五日
むごい事伯父ばけものをたゞよこし
百しても鯛はおごりのうちへいれ
知れぬものあやめおいれのわるい人
米屋でもけいせいやでももの日なり
じや〳〵馬に友が出來たで事に成り
さとられぬやうにうたひであいづ也
よんだ當座は出ちやもどり〳〵
むねあわぬゑりへは高尾つかぬなり
一町はさせほせ傘にかゝつてる
おこそうでおしいめんめを嫁かくし
上下を着るさ內でもかしこまり
おんさむらいのありがたさ大一座

論語をばめかけそばからひつたくり
ぬれて行く女かぞへる雨やどり
ひとりの客にあいかたが千も出る
三をひとつによね澤をくんなり
さる時は九十兩ではすまぬなり
母おやの目にはあさ湯と見える也
盛遠は元こうしなふ事をする
五百から一たいぬけて人にすれ
ほうそ神ふんだんだるまもらふ也
馬はねをひでさとが來てぶつこわし
ていしゆにあきの方三年ふさがり
ほうばるさ何もいはれぬのは小判
きりやうよい持參をと母おんな也
しらげい者母はうるさくつきまとひ
花鳥には行くが風月には行かず
三ケ日またずびくには見世をはり
白びやうし後生をねがふ風でなし
目がさめて居るとゐのしゝ怖ろしい
はりきつてこまるを恩にかけてくれ
朝がえり一度か二度はたしなめよ

まゝ母でいたしにくいとむすめ書き
兄弟でげろうを二タ人さしころし
高慢な後家地男はきらいなり
御たいくつ金をば谷へすてるよう
こわめしをくふは一座をせないやつ
宿下りすきまかぞへがいりびたり
けいせいはきつとすわるとげびる也
貫二てうばくり〳〵とかついでく
やくかして女房火ばちにあたつてる
さん所から今のばッたりはなんだの
さむらいをまねても春は錢に成り
すけんの中をす一歩の氣の高さ
石だのはしだのと本所馬をとめ
酒はたべやせんがわッちや上戸口
にわか雨せつちんでかごよばつてる
かいじやくし數萬のかわづないてゐる
小ざむらいおらがとのさまけこけた
てこずつたとこへ張良笛を出し
月のおッぱにかんごうをおやぢつけ
すまぬ事母のゆくわんは寺でする

座敷らうふみをとゞけて母不首尾
大黒はそれから御ろんじやりましやう
六月のひるねもほねがおれるなり
奉公人を置きあてゝきついいり
大烏毛高尾りつぱにふり通し
大一座三歩をませて氣がつまり
ひんのいゝきやくは六鄕さまをうり
ぼんにつんでもとは金を安くする
火ばちのうへであたまかきしかられる
ごふくやの通ひ山師のうちにかけ
繪そらごとゝはいはれないほとゝぎす
びやうぶ坂あたりおねまの有つたとこ
直が出來て四五町あるく土手のちよき
むかし〳〵たゞすむすめおしい事
むらさきやとなりのべにやこして行き
つり竿を出すは屋かたのさびしそう
あんどんにとりそへうれのこつて候
いきづゑでちよつと見せてく金屛風
細見を大もじに書くせんそうじ
わり床でしごとして居る木ぐすりや

三年目かまくらがしへゑんにつき
三つぶとん天水桶の下へしき
もみぢがりむこやるまいぞ〳〵
うられる程のこんじやうとやりていひ
三つ四つついてつきやはひとつぬぎ
ばけもの丶はなしをじゆ者は引ッ叱り
だい〳〵をこぶ巻にするいそがしさ
かへ玉をくわせばんとうぬけるなり
かうおやの前へせにばこもつて來る
しりきつて居るにせきれいばかなやつ
あたり見廻はし繪のとこをむすめあけ
しちなんそくめつと女房あきらめる
つんぼうもあるものさじきにいつぱい
三會目はし一せんのぬしになり
後家が來ておどり子みんなさがへ行き
すでにがッしすべき所へおくりせん
なきごとをひらき直つて常世いひ
よめッ女へあらくら置いてひいて來る
思切つてとびねェなとふねのぎう
江戸のきやくはく人ッにほねをくだく也

めかけのはねだり下女のはゆすりかけ
引きしほでないとども丶りまだうらみ
ねたほけてす丶はき竹でわたり合ひ
ふといやつすりゑで一歩二百とり
古筆はゑらまぬ神へあげるなり
二タ人してふり袖を着る十五日
御しのびの御ともはだれも行きたがり
いなか大じん三つぶのをかうつもり
さかい屋やすみよし屋から來てうへる
此雪に内に居るがとそやすなり
ぐそうけしては醫者になるおもしろさ
正月を二百十一日にふれ
子おろしの札は夜る來てはると見え
かるい澤馬ぬす人のしりが來る
ふくろ町口とりやすみ〳〵追ひ
九十九はゑらみ一首はかんがへる
かぢの葉よりはしいのはを人は知り
三みせんの外にもしのびごまをうり
年號がさくらのうへににょッと出る
金もふけとうふにむつをちよッと入れ

あらものやからはあわれなりで出る
以來足ぶみせぬ氣でぐどくなり
子どもにも草履かくしをじゆ者させず
おッかぶせられたといはにやつり合はず
本所の寺もふさがる大あたり
百のくち十両ぬけた嫁をとり
さらに桃もつて置いたは西王母
かねびしやくぬすまれる迄せわがなし
いきかわりしにかわり出る下手役者
ごッた見世道中記だのはゞきだの
蚊が無いと其角千両迄はつけ
ふとゞきさちかしい中に其氣あり
かまくらも三十迄はおしくなし
相談が出來ないはずよじやみッつら
こんざつさひなに夜食がそつて來る
市の不首尾はゑびすやにてかつて來る
引とりてなくてそとわにこしをかけ
百出して今をもしらぬさじきなり
父は子の爲にかくしてひるまかひ
本性になるとたいこは寄りつかず

いとだてやこもかわせて名をあげる
おそろしいかほで島田をやりてねめ
來る時に小道へ寄らぬ三會目
まくよりもすだれの花がおもしろい
六夜にはしごくのさこと市の正
いなか間につもる相馬の埊の頭
わがものにしてはついへな女房なり
はまぐりもそう〳〵門を追出され
もう後家もやめねばならぬはらに成り
かんどうのむすこにさふさばしであひ
げんぶくも一どきにするごふく店
又明日と小田原の上座たち
手がるい船で日本の地へわたり
こしばりをはかまはおりでぐばる也
ぞろ引いてながしへかゝり叱られる
つまつたはいふき心わるくはたき
女郎のはなしさい中女房かえり
しんこうにねこの水のむ音がする
たまさかにやろうもはいるいろは茶屋
ふくろくのあたまを娘つめつてる

よし町へ寺澤りうのふみが來る
師のかげを七尺さるとちうあそび
はさみ箱から萬ざいやねづみ出る
あら玉に遣ふはくれの御ゑん日
風呂敷をかぶつたあしたかやを出し
おめかけの不首尾さしうり數度の事
御だい所すりばち山のあたりなり
庚申によいから寐るは世すて人
天とくじおんむくじッてやぶい見る
おもしろいはず二ヶの津が寄て居る
をはり町ぶら〳〵するとつりこまれ
やッたらに升をせッつくひしこうり
下女はらのたつまい事か他言され
つとめと遣手で壹兩はじやうよと
袖に切先をおしあて二歩ひきやれ
夕だちや十二字たすとふつて來る
かきをくひながらばくろはのつて行き
目がさめてまゝの紅葉をほんに見る
ふもんぼん半ぶんごろでよこへきれ
かごかきの口からにげたあながしれ

三日ほど仕立やさわぐ夜着ふとん
さてついにこないところとのがけ道
能い妹もつてちやらくら武士になり
ばかな事いもとがしんで武士をやめ
ろの國の人とむすこはつきあはず
いゝ女房きかぬくすりをせんじてる
藤の咲く時分は花の山でなし
みやこではは な見白川では月見
をさまらぬ物がふつたとつれおこし
かたみとて見れば小判もあわれなり
ばんづけを又御むしんと百さじき
相の山手しやな女の居るところ
むづかしい文を花見の先で見る
納豆のかもにはたゝきまける音
命をちんかいのごとくやぶいもり
うれのこりげに十目の見るところ
そういつて先づ見たのよと出來ぬ奴
花の雨琴しんまくにおへぬなり
にわか雨冬のそてつのあるくやう
つけ木つきにぎりこぶしはのこす也

畜生めとはあんまりなさゝめごと
八からがねよく〳〵見れば手が二本
白かべを見ろとさり狀ぶッつける
鬼のうでとりにともべ屋からぬける
こゝくじをぬけまいといふいぢッぱり
とぢくつて着ますとしうとがのつよさ
戀やみと他人の目にははやくみえ
けんぎやうはねかねる藏をたてる也
三百店に新ぞうとさしむかひ
間のわるさ中條のまへ二度通り
よつぽどのたわけ座頭とつかみ合ひ
よし原のはりが江戸往來にもれ
口にしやうめうまなこには嫁をねめ
三十八年いきのびてふでをとり
尺八をふいて見ないと後妻いひ
から天竺はけつの毛をかぞへられ
兄さまは御馬やりもちはへこきなり
ひとりべへならまだしもとせな叱り
赤ぞめとすはうのないしいとこごし
良がよごれたで風呂屋へはいるなり

きやうさめ貌でくりを出るかたい後家
芝居より高いさじきはなわからげ
ねんぶつも四五へんいれるごじやう汁
もゝをぬすんだやつだのにめでたがり
いたい事月の上座へなをされる
さがやうをひよいとほうッて猪牙にのり
しらひげだからとなりには長命寺
あなたもかわたしも三ッと萬年屋
出がわりにかんじやう高いやつのこり
尾かしらをつけてまぐろを三井かひ
ろじをしめますと戸のすきからのぞき
ろうがいの母は近所のどらをほめ
百目がけよほどこうじたばくち也
かさでわからぬでせんきに道をきゝ
水をねめつけてみゝずをつまみ切り
かひぐひはいゝがうりぐひみじめ也
當分はのりもの町を後家とおり
海遠ふして淺くさでのりをうり
南無きやらたんのういやんなと孟母
もとゞりを切つた當座はほめそやし

大一座下戸は女郎をあらすなり
びやう打と四つ手すりあふ御ゑん日
金びやうぶ明けてあばたのさんぷ出る
からで一ばんのちゑしやをいひまかし
うッつい女郎がきたないむしん也
娘をむごく大あばたむこにとり
なべとりはしんとうつしにわらじ也
きふ專片々つれて中の町

午正月吉例角力句合

なり平を追ふのだに水いつ迯　狐聲
げんざいくわを見て三味線けいこさせ　一口
けいせいの峨眉ひそめる月の前　芹丈
むなぐらをとつた程には書けぬ也　かたる
壁土の中からときにあひに出る　寸魚
うす前へおもしをかける三會目　かたる
をしい事よし野で仕舞などをする　狸聲
雪打ちはらい夏の魚見せるなり　同
まなこは九郎兵衞だはへとゝらまへる　中葉
かゞさまの前角兵衞もたいこやめ　木綿

人に鬼あつて百から四文取り　かたる
錢車出見世の餅を引いて行き　狸聲
旅だけに邪魔にならないやうに折り　狐聲
誘ひ人がいゝで紅葉をたべました　木綿
あいそうのいゝが將門越度也　如雀
大坂からは女郎屋こして來ず　一口
柳公お出妻は留守妻はるす　雨譚
御てさんは又江戸へかと腰を懸け　木綿
こび付いたほど錢のある薺賣　かたる
ほとぼりをさまして行けと母おしへ　文集
あやふやな主どりをする黑い猫　和笛
一生ゆかん氣だにこう書いて來た　木綿
唐木やはじまつて下駄を一度うり　玉章
ごま鹽をふつたは長い夢ばなし　芹丈
勾當の內侍からむらさき式部　雨譚
かわせ金わたして座頭旅へ立ち　文集
はなし龜一日ちうをおよいでる　糸柳
いひこめたそうで內義がたゝかれる　木綿
かねを木にしたらば錢をぐつと下げ　文集
楯一つかけると細工寄つて來る　文古

伊世平次にしては築島は大氣　雨譚
梅柳兩木すでに並ぶとこ　玉章
今入の女中をびくにたちなぶり　敵吐
姉のひくそばでだいッ子三を下げ　霞朝
くつわやはごろをしるべに追つかける　洗路
年禮の廻り道するいゝかざり　狸聲
面白さ箱でうちんで花見なり　同
春工面よしとぜん寺札をはり　玉章
長つぼね穴のいなりの近所也　狐聲
棧敷番だんじきどもを追立る　洗路
切ても血の出ぬに番頭百かし　狐聲
兩懸けで伊勢の三郎あるくなり　かたる
氣の毒さ碁笥からさいが一つ出る　狸聲
せいらうは卷じたてやるつかひもの　車道
こしらへ喧嘩ちろりが二つみえず　木綿
めしもりとさらにみえない品かたち　旭烏
馬鹿な高慢おらがかさはよし原　雨譚
おくまが親父はら帶をせず生れ　木綿
ごうてきよろこびますと四つ目いひ　三町
是からすけべェと戸塚へつかを立て　中葉

黒介の一社參にむすこ出る　同

右角力會結　催主　星運堂
薩秀堂

丙午三月廿七日開女柳追善句合

吉祥日にたてたる佛かくなり　五樂
在五中將のはれ着はからころも　雨譚
同じ木に斗り名鳥羽をやすめ　洗路
鳥追ひも嫁追ひも來るうらゝかさ　五樂
十九年むすめを持つた夢を見る　狐聲
かぞふればよッぽど月に遣ひ捨て　鳳頭
うすくもがせなかその頃ゆびだらけ　青峨
むろ町の御所はもゝ咲く頃に出來　寸魚
鹿を追ふりやうしを四つ手乘せてかけ　狐聲
しろうとにしてもめつたに無い貞女　串柿
吉原一ゑんにりやうしたは紀文　雨譚
佐どのは金をいかして遣ふなり　鳳頭
もぐさ島などをこのむがやみ出し　美德
したく金見合のうへでましを付け　雨譚
字あまりの已後は一句もいゝてなし　中葉

花が三文ではすまぬ中の町　五扇
不断着ぬ島をぬつてる旅じたく　車井
をはり町扱いゝ魚のつれる所　卯木
客の逊水吉原のもなかなり　高砂
ふみの來るたんびに息子ちゑが付き　五鳥
はぎは名物もみぢはとちに合はず　献吐
よしがきへ目はなが出來て琴を止め　五樂
五人の内でげひんながよくしやべり　巾葉
こゝの宮にも源三位ぬえたいぢ　車井
けんぎやうの子どもほうそう重い筈　高砂
かきつばたたらい一そうくつがへり　五樂
さかいやの息子のいたひ田うゑ也　間々
よしはらの宿引口をよくしやべり　歷紅
相づちがすむと汁なべかける也　素鳥
ぞくぶつの名は見世中でこわがられ　蔦故
三人で一歩たらぬを二朱あまし　洗路
梅ばちがあたつてへびにせめられる　龜遊
氣のいたむ屛風を二日かりて立て　石斧
りやうり茶屋本の娘はあばた也　伍遊
しらなみのうわさ式部が來るとやめ　五連

ほめるにも銀閣寺にはよくがなし　石斧
三つぶとん九まいかさねる面白さ　魚交
千人もはいて一ト重を身にまとひ　一口
やぼらしさ切手を出してぞゥろぞろ　高砂
一ト聲を京江戸できくほとゝぎす　洗路
御てん中あやかりたがるやせッぽち　歷紅
碁うちが來たでなまおしの小袖也　石斧
つらやくでじゆ者も袋を一つ入れ　木綿
やねの無いやつを代りに出しやァがり　美德
引きまぜをしめ辨當を内で喰ひ　糸柳
男のかわをかぶつたをつかまへる　五樂
ふらそこを入れたでむす子内に居ず　芦露
なぜでもとむす子手拭かぶつてる　素鳥
あわァれな音でかた餅隱居喰ひ　雨譚
外のけいせいをかけると十匁　孤舟
泣子も目を明きいゝのを取るかたみ　二町
これは〱と川中の船がつき　高砂
はき溜めにつる門部屋に國家老　同
うッかりとはみがきを出すつけたあす　同
勝角力小太刀まとめて引つかつぎ　玉章

ちゆふけんびして居酒見世を出し　雨譚
長いもをたてかけて置きしかられる　蜃紅
湯治場でなんにも知らぬざんねんさ　東水
五六人やかたへ下ぎぬいで出る　和笛
さくら艸春のにしきの小切れ也　梅舎
女郎と一つふところ三くだり半　五扇
あすか山しろうとなげても〳〵　孤舟
ふところでめしをもつてる無盡茶屋　芹丈
三文が女郎もかはぬ氣になりやれ　三町
あらッぽい下女ひな皿がわり納め　霞朝
むづかしい書置をよむころも川　さゞ浪
內心によやしや梅きぬへみつをぬり　芹丈
園はれへふいに來るのはじやすい也　石斧
なんだせきひかと一つもよめぬなり　芹丈
口よせをあざけりむす子しかられる　孤舟
よい〳〵わい〳〵みのかたつけろ也　金旭
たび戻りいしゆざしをする出來ぬやつ　間々
片かわはにこついて居る雨やどり　青峨
あみの目から手を出すのは茶碗うり　美徳
にたやうできねやとつきや大ちがひ　狐聲

かけひまの內やうじやのめしがはり　木綿
三がいに居るを汐干に母あんじ　五鳥
おろすこそ尤至極やげんぼり　五連
おゝそうさ〳〵にいちこかつにのり　運町
むづかしさ嫁小ぶくろへつゝぱ入り　洗路
なべやぼり黑い手の出るいゝ日和　東水
十七はみめぐり十八はよしの　如雀
ぬひはくもこんやもしらぬくらう也　車井
犬のせわもなくこん屋は干して置き　素水
夕べにはいしやあしたには僧と成り　麹車
時鳥ふぐこのかたのやからより　魚交
文づかひ遠くで一本ぬいて來る　美徳
本望をたつしたよしをうつたへる　さゞ浪
もみぢをうりしまひどうのいもをうり　高砂
たびおくりはしより川が人がふえ　門柳
女房のむかいに來るは一チもんじ　高砂
しゆろう堂むかしとけいのお間の跡　車道
おとなしさひつやつゞらを馬に付け　五鳥
人のちる時分に人の出るさくら　孤聲
浪人をこしらへるのが妾上手　五扇

乳のむはたれだなと來るふてェやつ　美徳
下總でしりのつまらぬひなまつり　文石
ほれての多きいゝ男女房なし　高砂
上はくは九合しますとしろいわく　如雀
おそろしいわらは賴光二ヶ人しめ　石斧
さくらの元にて扱いかゞし給ふ　雨譚
男めかけの氣で居なとむこにいひ　芹丈
どこのいんきよだか四人子房は出し　雨譚
おめかけはほうじを祖としねだり事　鳳頭
りやうしゆせんどう行ますと德兵衛　五岡
三年目二ヶ人よこして又むしん　鳳頭
行く氣は無いかといせやむだな事　狐聲
うわばみの目くらいをさす村の嫁　狸聲
うらおもてある水茶屋ははやる也　芹丈
すりこ木をさすべきはずを鍋かぶり　雨譚
入定のまへにしよくしやう一度する　鼠弓
かげ淸がきず岡ばしよになじみ也　雨譚
ゑちごやの喜平次だんごうりはじめ　湖水
ていのいゝばくちつぎほの弓をいり　高砂
あはれむべしひそう小袖切りくづし　同

子の出來た見廻ひ夜食はきつい事　同
堅いやつとう／＼お手をつけさせず　夢中
おかしさはおうむも五人ぶちねだり　石斧
いッつけられるをこわがる江戸家老　高砂
としよのあゆみでよう／＼と草津也　門柳
道理之介をとり立てやりねェな　蜃紅
土弓場も美しいのをまとに置き　五秀
鍋いかけしゆもくを持つて風を出し　高砂
ふくろ持で無いまた唐人くゞり　同
ころり行くところへ馬がかけつける　卯木
紙ひなのゆふれい花の宵に出來　高砂
とむらいのくどく大しやが二三人　洗路
小山のごとくゆるぎ出て一歩取り　狸聲
しうと嫁を見る事どかいのごとし　同
たんざくをおてらでもらふけちな事　芹丈
玉のをが切れるとのむにこまるとこ　旭鳥
ぼんによつたので六夜を仕廻ふ也　夢中
眞間から見れば正とうじ遠い所　串柿
こしを日當にさかやきをなでてかけ　文古
じひな事けいせい馬鹿をふらぬ也　五帆

かみをゆふ下女ひらいたりつぼんだり　花笠
淋しさは下の句同じやうに出來　風車
若松を紙でこさへる氣のどくさ　美德
木食の大病めしをゆるされる　高砂
いぼのぐわんなを出來そうな所へかけ　玉簾
くろ猫をみじかい玉の緒でつなぎ　同
なゝ草をたゝく所へくれの人　同
せんぞうをなまゑひにしてこまりはて　高砂
長くしてくりやれゑんぎにかりるのだ　芹丈
ねれかげんしんのごとしは神樂堂　如雀
おとなに乳をふるまつて乳母不首尾　同
ばちをふくろに御きげんよう御出よ　鬼蝶
名代にとしまの出るはごふく店　石斧
のちに穴なし有りてんま町の下女　梅舍
おきやあがれ下女出干をいたしやす　玉簾
とうろうがおのけいせいを妻そしり　五帆
うさんといふにほひ女房かぎ出し　同
五十貫かしてあみ笠にもならず　同

天明六年三月　催主　清江
一口

風俳
柳多留二十一篇終

補助　木綿

誹風 柳多留二十二篇

花のあしたより月の最中雪の夕べまで言の葉ぐのさつきせぬたねの功なるえらみを書き寫してとし〲やなぎだると題するも此道のなかだちともなり好士考士のむつましきをねがふ事　呉陵軒述

關札を打かへさせるふじの雪
子の口へしたんで內義客へさし
臥龍梅見てめうけいをたくむなり
仁和寺の茶ばんは事がもつちやうじ
居るとこを見たのが竹の吹き納め
平家をかたらぬとびわはねかしもの
ごうでしれるにぶちまけなとかねおや
なんでもと思つたら後家ごそらそり
よし原の狐女房を持つとおち
中の町あかるくなるとほとゝぎす

御しやべりが來たとさん所へつッぱ入り
けちな嫁きい〱としを一つとり
むだよせをしてそろばんの直を付る
ぼせをもいけず大いそへくすりとり
はた道具つけてあふめの嫁もどり
不二を見なくしてちからのおちるたび
大門へかり門の無い大一座
三人で二歩だがかえる〱
ちんをしばらせかゞみとぎ上がる也
母のるす通るものごとそ引こみ
よしつねの首かまくらでものをいひ
いし山で一わり引けの書物出來
をしからぬ命春迄ながらへる
いんふと見えますとはりい口ばしり
から鮭をしごく古風な內義かひ
おやたちを內百番でだます也
はやくかえりなさいよ御取上なし
今夜はおれでしまいなと女房いひ
しんそうをかたにとつてるけちなばん
張良はんくわいを一字づつぬすみ

饂飩屋の見世にびつこやわらじくひ
三みの弟子七尺さつてなめたがり
どうだなと戸へよりかゝるひなし貸
引おいのろう人ふうふ今にのみ
一トしあんござるとやぶいこわい事
毎日耳についた跡もちをなげ
てんがいをおしいとほめる他人なり
梅若は二月のすゑに京をたち
四斗樽の中へすッぽり馬は入り
ばかな事いねむつて居てつんにがし
うす墨で昨十九日むすめ事
あかい切れ持つてよろひのわたし舟
松かざりいけよくどしいものばかり
どこぞではわらの出そうな店に出る
たれとなくおきな〳〵と花の朝
むづかしい鳥でおぼつかなくとよみ
らく天が又來ると人玉が出る
佐殿大とりゐんじやくをはなさず
人かひのむだぼね江戸の名所也
關所前女をなぶり〳〵行き

書にいわくけふし御げんと唐机
もう一度着て留めたがる嫁の袖
はぎももみぢもしり切てござるぞよ
かまくらがすむとあぶない所へ行き
くわでんは元よりこたつもいましめる
思ひなし江戸町はりがつよいよう
むごい事高尾つぶしにうつてやり
そめたものとてはふんどし斗なり
内でくふ程いわしかふ中の町•
硯のちりもふかぬがと御じゆつくわい
いざり松すけともそれもすてろ也
よび申すもとろうがいへおくりせん
いせやにかつをつんぼうにほとゝぎす
くわんとうべいは大そうなあだ名なり
たびのるす向ふの女房だきこまれ
ふりものゝ内へ目くされ入れて置き
傘ぶくろ嫁よこをむきはめる也
うなぎをつかまへるやうにこんやいひ
吹くもんだなどと楚軍で初(しよ)てはいひ
糸だてもかわれず上下で四つ手

後家こゝをよんでくんなとちッと出し
せんせいの下でびしよ〳〵のりを取り
おれ斗りうれぬと遣手きげんなり
口をしさ女房に世をせばめられ
おきッくらしやしやうによとにぎやかさ
らう宅へ四つ手みじめなむかいかご
わるがたい後家でだん家へばつと知れ
この雪に御太義時にせがれ事
大わらひ嫁闌とりとおないどし
死かわと水をさゝれるうり小袖
こも僧はまわたに針をつゝんでる
かる〳〵と赤子をだいてしかられる
すまんぞううろこがたやは暮れにすり
百人で一人はひどくおちぶれる
そばの皿かつぎ古法をもつて居る
石山のせいぐわんじのと寺ば入り
もゝ引を帯ひろどけて直ぎつてる
あらきだを百匁ほど出すなべいかけ
初のおはぐろに見物二三人
朝がえり今戸のけぶに取まかれ

光秀と長田ならびにしなのもの
ひやうばん〳〵所はかわらばし
けづり懸ぼんてうちんのかごで賣り
あすは出勤しまするとて五はいくひ
おかづりは足でふまへてすいつける
すばらしさ男もの着てくどいてる
のういんは川どめなどのうそをつき
みす紙であふぐそばから取つてくひ
むす子おもへらく三歩がものはあり
一合は辨才天のものになり
時ならぬれいふくを着る五丁町
時もときわびさい中おや孝行〳〵
小舟にのつた女房を息子もち
初に來たちんかぐほどに〳〵
しいの木一本小だてに取つた松浦
女房が留守で園ひに內を見せ
とまやよりまきよりしぎは人が知り
ゆげのたつ男判とりほうり出し
母のゑくぼをつッついてちゝをのみ
いも見ざる內にかしらをはかりこみ

はちす葉のにごりに後家はしみに來る
一ト引ひかせなと黑い口でいひ
すまぬ事花筵の上で四つを聞き
きゝおちて二度目の高尾すなを也
すばらしいのは關とりのわらはやみ
おしまづきに寄り細けんなどを見る
豆いりをかんだり貌をしかめたり
てつぽうを賣つた金にて笈をかひ
正直などろぼ大こく斗りぬすみ
はらさんざ見て供に遣る遠目がね
くたびれを嫁はおいどへ出して行き
上下はかそう二百で來てくりやれ
三會目ばゝアも一歩女郎なり
介兵衞といふ人じんきよやみはじめ
つらい事すけんに斗りほれられる
おゥいおい糸立さんと四つ手かけ
ぬきあきて毛ぬきを廻はす玄關番
はづしものとなづけぬすみ物をうり
おゐんとおこう鳥居ぎわに立てる
十三日やれ首をもて足をもて

一箇國一ト冬江戸でくつて居る
かんどうも二タてうしめでゆりかねる
つくりしろも落ぬべききくよふなり
いもじ迄先から出來るうつくしき
のしめあさ上下でなまゑひさま通り
海と山とでかみをとくはづかしさ
小人に店をおわれるそざくの師
よし家はおざしより政じかにゐる
妹とむことかんどうわびるなり
わるい口きいて其角は雨にぬれ
土用干女郎の宗旨にない事
まき藁へぐそくを着せてばかにする
さよごろもやつとはんじてはらを立
なんじつまよ夫よと宿ゆすり
おかしくも無いに茶臼を見て笑ひ
北てきよりもなんばんと芝でいひ
女郎買う金をおやぢはためてしに
手合ひぞろへだと盛長ふれあるき
手のひらで琴をおさへるほとゝぎす
おや子して四十五人の下知をなし

さぞしいのみがなろうとはやぼな猪牙
かごにのるまで四郎兵衛がまへに立ち
石ごうろ買人があればうる氣なり
こゝいらへすわりましようと暑氣見舞
かじけたりなまけたり二度義理で來る
金主がついて駕ぶとんたばこぼん
二萬石かわづとりまきないて居る
下戸へ禮いつて女房はそ引こみ
直し釘あたまの時はつよくうち
ひだるさを千住の伯父にたすけられ
月を仕廻ひついでに出見世をしまひ
竹鑓のあし元へ來るかやゝふき
御びくにん人のほしがる皃があり
五十ましちうをとんでく根津の駕
くらべッこして白瓜を一つかひ
白むくは三月ながれもふし候
はまぐりのからと息子をすてる也
八丈を着てせいろうへ乘つてゆき
村だんぎ日のべゑの木へはつて置き
歌がるただき繪といつてしかられる

そこ〳〵に見るは氣のあるもみぢ也
つゝ井筒ひやした瓜をのぞいてる
死にんしやうよと息子めうりに叶ひ
まけをしみゐんきよとしまを上げる也
一ぺんはかさもかきやれとたわけもの
正月はたるから小粒つかみ出し
あみ笠をゑがほでかぶる柳ばし
妾が兄すつぽんつきをもたせてく
三丁目にほはぬ店が三四けん
めづらしいおこゑがすると傘を出し
なみだにはもろくないのはしち屋也
品川でやくをよけるとふといやつ
たなへ上げよその內義の不義ばなし
十人がよつて見たのでうれのこり
とうろうがなくなつてから八つ着る
內こうが付いたでかこひにくまれる
はッつけよばりで出やしたと女房
字あまりの家名を付ける五丁町
むづかしい口で隱居くはへぎせる
いびりてを澤山よせるだんぎそう

こそめでたけれと戸だなで留る也
わがどらをさきへはなしていけん也
御主君はひとり無刀の御せきひ
口とりにそびき出される妾が兄
ねごとにて女房畫行く事を知り
ひのへでも無いのにころす美しさ
北國なまりどうしいすこふしいす
愛そうをつかさぬ氣だとかさぬやつ
てへ〳〵のいたゝけのとてふりを付け
ねこもしやくしもと樂天おどかされ
ばんあたり行ふかごこへふみが來る
桑をつむ女房にほれるばかな事
かり金の穴をかゝァにほり出され
たま棚にいんごうの無い耻かしさ
すい瓜ぬす人ねぢ首にして逃げる
百やすで首をくゝつた店へこし
めうぎはるなをねだつてるかるゐ澤
ばからしさ馬にのつてゝ道をきゝ
あるかれぬはず琴箱を立てにしよひ
番太がところで一トどら御用うち

すりものでふくろ戸をはる安いんきよ
にわか雨四つ手に禿ふたりのせ
時鳥きいたは後德大寺なり
ひどい事やりてと座頭同居なり
いそぐのにさて〳〵子どもよけぬもの
けんとうじ後は茶づけをくひたがり
ざん切りのそうを茶屋にてゆひ直し
ちゑが出て日くれから出る片しまひ
むごい死にやうやうきひと高尾なり
病人を祖とし八朔ころもがへ
ぞくにかこはれてかたみがひろいやう
をどり子の跡へねり馬のせなァ乘り
まくらにのこるくすりとは四つ目也
四タ人と二タ人とむらひくづれ也
ろせいはたきたてひやめしはさい明寺
琴箱を横にしよひつきまわされる
もてんとすべからずふられじとすべし
ぬれッ手をふき〳〵みごろどれ見せな
遠い寺もうじやをそしり〳〵來る
來たそうでかこひ格子に貌がなし

狂歌でもよんで見やよと中納言
金は持つたが手紙を書いたざま
丈にあまれるつゑをつく小ざッとう
つれがふられたからつき合でふられ
百人一首かぢをも一人入れて置き
うらみぽい歌斗りよむ源三位
こんにやくを小便桶でうりに來る
熊谷はふしやう〳〵のてがらなり
魚ふちにおごる十目の人だかり
ゑぼしきてついぢの穴をよつんばひ
たいそうな引料の出たもみぢ也
髮をそるゆゑごんは後家よしにする
おしろいときながら舟をしぞ思ふ
ぎんぎせるにて下知をして堀へつけ
江の島のしやうじんむごい事をする
時鳥左樣ならばとないたやう
さいあいのふじんに別れやけに成り
三年はざいかまくらとかくごする
白むくでとかくさむけがしいす也
けいせいをくぼく見て居るそん料や

藏たてる迄はなすびをうゑて置き
禪寺はしらふの石碑出して置き
けんぎやう在宿不成就日なり
病人をとりよせてみるはやり醫者
本庄をさきとわらじをはいて出る
やきもの丶うらをかえして初會ぎり
まさきのぴい〳〵ふきながら野懸也
山ぶきの花だがなぜと太田いひ
あはれにもおもしろいにもよしの丸
百兩はきえ安いがあばたはきえず
手いらずの芋でながめる後の月
打しきに一つ十八かたみなり
かつたやつからうすに耳そばだてる
通りものひるはまなこに血をそ丶ぎ
能書の通りじや四つ目安いもの
朝はとうからおひんなり嫁をねめ
あるきくたびれ關寺へたどりつき
米びつの下へしこうときれた丶み
くらがえしてけがあるなと姿が兄
うるさ丶は初かりかねをすねで知り

初かつを高とき犬にくらはせる
おくり膳美しいかときいて見る
ちうげんは二百がわらで見えぬ也
もう死んだろうのとむごい尋ねやう
楊枝屋はざん米もうりさしもうり
じやの道をつか〳〵行くとわうじさま
すゝき田は冬ばッかりの女郎かひ
たでくふむしもなく毎晩賣れ殘り
山ざきをこうべをかゝへねづみにげ
南風で地中れいらくしたもあり
八まんの氏子月見のいそがしさ
九十九は古歌で一首はあたらしい
京の鬼さたを大津で買つて來る
御ッ女房といふやつをつれて來る
めづらしい魚鳥おッつかッつ出る
なりひらのどうらくばなし本に出來
丸寐して居た帶をとく中直り
大坂のまつりへんしやう男子也
らく中はあやゝにしきの中を行き
づきんでもめしてと茶屋は笑止がり

四十二はから紙斗り見てかえり
楊枝やは戸板に豆を出して置き
さがし事女房はちうをとんで來る
始皇帝かべの中には氣がつかず
からやまとに無いきぬを藤太着る
歌をよむたびに小町は名がふえる
紅葉見て來なと出しなにかるくやく
くごきそびれてかんざしを又かりる
太神樂どんとうつてはひよいととり
若衆にほれたをしりめと申すなり
なげ入とちがいなげこみむごいなり
庄之助數萬の人をいひふせる
はちまきへよろこびをいふ產みまひ
うぞうが出るとむぞう來る下女が部屋
かし本の加筆いたつてのそ筆
たけのこをぬすんだやうに明智され
年よりに夫婦げんくわをむす子させ
大やしろくろすけしやれて叱られる
うんのよさとう〳〵二ッ人なが尋ね
すばらしい舅ぢゝィをかま田もち

ひいきの沙汰として兄貴召出され
及ものざんまいで神慮をあふぐ也
公事宿にちうや枕がごろつかあ
初だけはほめてる内に出やむ也
けだものや虫けらの中仁王泣き
買つて行くものは品々有るところ
是では地文だとつき出ししかられる
せわしない猫かつぶしでくらわされ
虫の知る事を唐人氣がつかず
ねこだ敷く車力は人にうらやまれ
歸りにはごくらくを行くいかだのり
さいふから出たにはいかい御高なり
業平にとしよりあそんいけんする
先たばこぼんでお妾庭へおり
住吉のとなりの國は四千石
あいそうのつきたけいせい金を持ち
くれなゐさまのお客をやりてねめ
けいせいを勝手へ入れて松を立て
すてる神斗りで平家つぶれたり
じやうだんに堀の持佛のりんを打ち

顔に有るあざもやッぱり金をくひ
聞いたかとさへばくつたかとこたへる
客を見送つて殘りをぐゎい〳〵
てへ〳〵をするとくいつみすぐにとり
たが來たかぞうりの見える一月寺
四五兩ですめばおふくろ請出す氣
のむとこがあるとはすけんおきやァがれ
柳とはいふものじつはさくらなり
はんぞうで黒染をする恥かしさ
はく人ゝと江戸も一日いゝたい日
五つ目ははした佛がきらひなり
御よだれをおふきなさいと侍從いひ
こんどから行きなさんなと中直り
青苔衣に似てとうろうまけず
びわをひくまどへも一人二人たち
花嫁はかんがへもなく貌をぬり
よく〳〵のかわきばゝァへ淺黄寄り
こわめしもうれいな時はす貌なり
衣屋の嫁をしがつてしかられる
宿(しゆく)通ひやめべイならと村の母

しやば中を尋ねましたとあるきいひ
合羽屋のかんばん火の見のひながた
二三疋龜がなまずをうんだやう
わうくわんをふさげ切見世たれて居る
おきやァがりますまいと出る朝がへり
かくれがもなしとはけちな御せい也
ともかせぎ女房がまへばふゑをふき
いびりやうこそあらうのにすけべいめ
べゝは着せよいが小袖は着せにくい
色男たゝかれながら糸をぬき
さつま薯ばたへひやうたん植ゑた沙汰
ぼうぐみやいゝ御かつぷくとまへおき
切れた三もたせしなのを買ひに遣り
かうの座は金屛乙座幕のぬし
御はなし段々雷の聲に成り
孝行のしたい時分におやはなし
すみゑがいゝで江の島見て歸り
宿引は萬歳ほどのはしらだて
名句の手がらしいの木へ二三人
むごい事さかゆがすむとさつてやり

ふじの外にもしれてゐる三笠山
新ぞう迄はふりたらぬあきの雪
つき合ひをよくする聟はおん出され
御一所といふやつひらのふたをのせ
朝がへりおろかなものにいけんされ
みんななくなすと異見のしてがなし
おそれ入りましたを其角聞きあきる
としよりだそうであみ笠迄わらひ
手ならひ子はゝをせめるとまた筆か
とうふやはさるやねづみに忙がしい
古ぼねに成てみやこをひらくなり
よし金ゆゑにふられんなちからなし
くつきやうな射手は娘にかゝわらず
川さきへ參るかげまはもういけず
うぬがてに錢はもどりとすけんいひ
ぼんまへは天狗だおしにされる也
本ぼれと見ぬいて夜具をねだる也
くらぶしん大きな茶こしさし出し
いろは程あるのをこすと秋葉なり
ふんどしを女房さいそくしてあらひ

やぐら下やくしやと女房居る所
おいらがにや具足がある〻御用いひ
其氣をおだしなさるなど外科はいひ
かういんおしむべしほうものが目だち
歯をみがきかけあをむいてものをいひ
くれなゐはせんたいしわいとこで出來
はせつりの事おかしくもたまをもち
ありがたの御とむらいや大一座
耳よりのとこに大佛おわします
くきづけをくいに半日歯をいじり
からくりをへッぴりごしでのぞいてる
山下でゑんとんゐんは知りませぬ
こうなされてはと龍女へ藤太いひ
すみさしをは入れちよこ〱遣ふなり
年始帳作左衞門とともがかき
むす子をむごく大あばたよめにとり
いけんするおやぢのむねによめがあり
紫をならべて見るときやうがさめ
とらの尾もさくらの時はふんで行き
おくびやうな客やみの夜に成つて來る

二三通後妻書置おッかくし
子安貝女だてらなみやげなり
いたづらな後家内義からふみが來る
渡しばであすおこすよと夜さぎ乘り
わけのある勅使を宇治へたてるなり
奥樣の三みせんちッと不出來なり
先に目が二つあるから金をつけ
よみ人のしれぬは歌の川ながれ
茶の給仕さしやうはけちな見合ひ也
他人のはじまり兄よめをねらひ
古池のそばでばせをはびくりする
居角力の行司あんごん下げあるき
吸口をみがいてもてと親父いひ
御てかけのけんぞくおの〱百石
かい間見は尻をつめつてかはりあひ
ちう三はのこつてはぢにならぬもの
ゑちごやのいなりを其角しやくる也
くたびれをのせる四つ手はもとり駕
いつちい丶ちゑは夜伽をうつて出る
盃の廻りじまひはあばたづら

死人に口なし置きみやげとぬかし
二箇國のはしのふそくをわたし守
のぼりには女房とこうの望みなし
見くびつて二朱のやたいへつれて行き
いもじか白いので後家出來かねる
四百三十七萬餘たしていひ
今のあづま下りはねつこりと金
いやらしさめかけ此頃茶をはじめ
よし原と知らずにあてるはかまごし
やくよけへ行くふり袖はうれ殘り
金ぐそをひるのは乳母のそゝうなり
ばかな事かげまやけさを持つてかけ
とり繩も手じやうも見える三みせんや
くやみにいつて先づといひ出しこまり
ひやうし木で福井の田地たゝき出し
もりやはつゝきらいごうはがありがり
一ね入りしてもやつぱり錢の音
やかずにゐればやかぬとてかんをつけ
言葉多きしちおきは品すくなし
どろぼうを一俵にするむごい事

ぬしの手で御はし入れと書きなんし
がさ／＼といふとんぼはつるむ也
ろうがいの母はむす子をそゝのかし
あそぶ事法ありせん香をたてる
もう二ぜんつけてみやれと御新造
雙六の繪圖で出來たる御庭なり
おかしさはすて子をされてじまん也
ほの／＼にあかしのとのゝ御立ち也
もぎどうな出がはり馬でうつぱしり
かんざしで嫁はちうゐのすをはらひ
はゝおやを生れもつかぬつうにする
ゆふべもてたを女房にらりにされ
氣の毒でありんすにへと來てたおれ
里がえりはなさぬことはは聞かず
どの羽織着てござつたと下女に聞き
あん内者よめぬがくへはつれぬなり
きじづかいけんもほろゝの御あいさつ
月に二度うゑ木を通すわたし舟
をしい武士そうめんびつへ入れて置き
日本ばしおし分けて見る買つたやつ

まかり違ふとこもだよと空を見る
むす子の琴はらうがいの下地なり
ごふくやに無いのを拜むたへま寺
世つぎ村よいけんとくのうばが來る
やく不足だらけ素人の芝居じやみ
百さじきそらおそろしく一人なり
にやわないもの清げんの式部きやう
わた入がなぜおひえだかげせぬなり
とむらいは五人で一ト人はさみ箱
ゆふべ初會のごてれつがらんをいれ
とうのいも坪一式ではやるなり
田うゑに出すをおみやれど村見合ひ
がうに入つてがうはらなはざんぎり
品川のいしやはいめうは芝山也
ぞくめいた名はゑびすさま斗り也
一つめかけはしやうやうをこのむ事
小便を四十七人せずに居る
巡禮のやうにたかのり書いて居る
すねながら引つぱられはしごをのぼる
いもの無い月を品川二つする

いんくつなてらいけづるい國へたて
いんぐわな事をいひたてる泣上戸
地獄から言づてをする延喜帝
勝つたなら逃げて來なよと女房いひ
ばちあたり正五九月に追出され
ぬれのまく下女のび上りしかられる
じやまな石夜るはひとりでかなしがり
はかりちぎきッかり五十懸けて遣り
せんたくにこそ上げたれど八百いひ
御機嫌を見ては論語にじやまを入れ
賀の祝ひ心中に出た迄はなし
夜伽同士はつ音のろんでねたが知れ
ものをいふやうなさしみを島で喰ひ
はまぐりをすんでに升ではかるとこ
おくさまをしりから出しに國をたち
づかん足ねつ六月ふじの山
かん病にはり合ひの有る事が出來
柳ばしぞらやたいこをつんで出し
火を一つくんなはけちなかこひ也
そこ爰をおさへてをんな馬にのり

駕かきは傘屋の見せへまけて來る
ゆひのふが來ると伯父とはふわになり
もふざふもしえ丶ませぬとはや太いひ
雨いとうふりつる夜內からひよくり
魂を入れかへますとせしゆに立ち
またぐらのひつさけそうな下手のまり
色香たえにして常の下駄にあらず
割下水通り夜中ににげるおと
三浦屋の有る細見をおやぢもち

申の正月吉例花角力會是より

萬ざいで笑ひ命をのべるなり　川長
信濃でも京へ出たのはずないなり　嘉樂
きつい事十三里有る馬場を乘り　如雀
たいこ持らうのすげかへ見てにげる　中葉
伯父迄がよると座敷のふえるさた　久鳥
かうようをすると紅葉はだしがき丶　古松
鈴虫は御寐間淋しく夜をふかし　豊好
大門をごふくや一家丸にする　同
年號もよしの丶方はさくらさめ　木綿

安いこま下駄雨に八ッそくに付き　嘉樂
ゐちごやのくらぢう妾かざ廻し　かせき
う三といふから水の方がかうしや　狐聲
夕べにはさいふあしたははさみ箱　中葉
ごまめでもすむと鰯を安くつけ　久鳥
しよかつりやうい丶手廻しの石を居ゑ　嘉樂
金持へはだか參りのうつくしさ　川長
二三人海おも渡るやくばらひ　狐聲
今川は父百にんしゆ母おしへ　久鳥
三めぐりの御留守にあるへい紛失　かたる
さとう菓子がう天井へ入れて賣り　玉章
かうさくの道具迄持つ名魚なり　同
きいな事ゆゑ武者修行おん出され　同
元祿のころはつゞいてかたき討　仙羽
うたいにも三人むづかしいばゝァ　花口
貌二つ池をのぞいてにくがられ　狐聲
所作事も太刀打ちも成るかぐら堂　玉章
さいろくといふ人念にねんを入れ　かたる
忠孝で有馬のとうじとめ申し　玉章
やりがふらないで素一分めつけもの　嘉樂

御しよくだけ一つ目の有るとこにすみ　横好
わるいものふりますとは四五たびめ　和笛
下谷のは仕合せ芝はふしあわせ　鳳頭
へんとうはどうだとひどいくどきやう　中薬
きりやうの有る人年禮に早く出る　露舟
春の笑ひは箱根山こしてから　清江
釣ぞめと見え冷麥をかつぎ込み　同

右　催主　星運堂
差添　薩秀堂

午四月開き角力會

おとなをやりこめた歌も定家入れ　洗路
衣の袖を三度引くおそろしさ　中薬
めうもんな浪の打つのは和歌の浦　高砂
御とうりう鳩やからすの聲斗り　五樂
御歌で見れば住みにくいやうすなり　如雀
錢をたやさぬくふうするあわの守　雨譚
つりがねはうそだが雨は本にふり　梅舎
伊勢がのは場所ゑらみなく出來上り　石斧
かきつばたけ高いざいごものが折り　素文
かまくらをいてん大がねもちになる　石斧

是がわざさと一家中目をつゝき　五松
そくたいの中へ女の生酔出る　文集
きれいなあだ名はまつよいとものかは　五樂
下げる膳はし取つて遣る三會目　何がし
はつものゝそばでからすり鉢をすり　石斧
一チねんつみ十ねんはごしやうなり　露舟
ほとゝぎす有明たどんのこつてる　五帆
むすめのそばへうかとよるとしに成り　文集
風のまへ日にともし火はきえるなり　玉章
十三年忌は座敷を持つてとふ　素鳥
本(ほん)もうさ娘兵法めに入らず　狐聲
かり衣をこまいの折れで度々やぶり　高砂
盃棚はみんなはたけの月たらず　古松
梅のなげ入れ白むくで生けて置き　五帆
おとゝいの梅若けさのつかみあひ　五扇
天井へつかへてまがるかげぼうし　五清
關東へいたちは道をきらぬなり　如雀
和らかにどれがあやめと源三位　狸聲
品川でどうせいのますいせのかみ　糸柳
こりはてゝ油と醤油べつに置き　五松

人まろをねつぶして下女まくられる　五樂
堀迄のつもりに火繩切つて置く　魚麥
十年は蝶よ九年は花よなり　素文
あごでおふ蠅は六味へたかるなり　五松
こわそうにさいかちのめをつんでいる　間々
にし木ぎをうすくも直きに取入れる　雨譚
笑つて客が歸るとしかられる　玉簾
五六ぱいくらつて伯母をすてに行き　門柳
まんざらのむだあんざんの使者のとも　石斧
新世帶たゝみのうへでみそを摺り　高砂
只で無いやくしと女房見ぬいたり　五樂
餅の丸やくを柳へよめはつけ　五帆
うらゝかさよめぶくりうへ豆を入れ　如雀
なびいたうす雲をば請出さぬ也　石斧
水斗りにげると思や月もにげ　五樂
針玉に袖をあげ〳〵二本かひ　横好
かりが有るそうで御慶にねんが入り　五遊
つり合つたちやうちんだうにぶら下り　芝烟
立つて見ろすわつて見ろとせげんいひ　五樂
今近江ぐらゐを妾やたらひき　和笛

川せがきよめものがたり舟がつき　素鳥
よし原に買はぬ女郎はないをとこ　石斧
羽二重をべんべらものとおやぢいひ　芹丈
りちぎなもみぢ行きかへりにあやまり　高砂
かツぽしりたがるぐるりへ屏をかけ　五帆
隣から百かりて來てまゝへ行き　五淸
きんせい東方ざつとゝふつて來る　五樂
しんしのみ箱女房出すいゝひより　高砂
他人がうの入つたはあべの仲麿　雨譚
三千のけせう流るゝ水戸じり　高砂
いゝひよりよせ切れの戸を出して置き　車道
とりまいてぬしの八卦はあたりんす　五帆
生醉のわすれて歸るよめのかほ　五秀
其跡へ來るとはおしがつよいなり　玉簾
十七八のたんと居るよしの丸　芹丈
江戸は朝京は夕暮じまんなり　串柿
一度づつ茶にはされるとしやかはいひ　五連
麥わらのじやすいを女房廻すなり　横好
かんばんのそうめんざるのうらへもり　丸水
秋葉から天狗がついて川をこし　素文

盗みついでに御みやもと心がけ　五閣
青ぞらに毛引かゝりがね四五十羽　蜃紅
なん所をこして四會目へ上るなり　花菱
身に付いたくわほうと妾にくい口　何がし
むすこのもみぢやき直し〳〵　芹丈
目あき千人も目くら一人に成り　美徳
かるさんのむしんたぶさを取つていひ　和水
ちん客を一ト人ねかしてどつか行き　五鳥
辻ばんは鑓が通ると本を見る　糸柳
それとなくあれと〳〵がいさま也　高砂
年明けといふのが女郎安日なり　文集
正夢のごとくにはなすふてェやつ　狸聲
釣りしのぶふり〳〵をかけしかられる　雨譚
ぞくな男だと金好はぶかれる　梅舎
短冊が子がへりをして御らんしよう　門柳
寐たふりをのぞいてどつか又うせる　文集
反物で脊中をぶつてほしかろう　鬼蝶
風呂舗に手紙を包むちからなさ　雨譚
はなし龜やつこをふつて日をくらし　素鳥
藥賣のはおさめると人がちり　美徳

上下と褌並ぶいゝてんき　孤聲
にくい程いゝ聲だかとつぼねいひ　文集
あま茶では喰へぬ鯉のはしりなり　丸水
竹光のけいこ一ト月してねろう　石斧
よめさへ〳〵とぼたもちを七ッくひ　素鳥
三人で一ト人魚くふあきのくれ　如雀
ちう三をびんぼう神とおやぢいひ　狸聲
足袋見世でゆびをかぢるが上座也　丸水
こゝいらにしやうとはやい切おとし　素鳥
つう仕立のねこかゝへてすへて居る　雨譚
摺子木におしをかけたを公家衆持ち　五秀
風上みへ廻つてすてる鳥のはね　古松
おそろしい酒宴久しい木ずゑ也　玉章
とりの町遣手へみやげくまでなり　同
じれッたい文が花見の先へ來る　握機
仕廻ふ時ふたへ入れるはけまり也　高砂
顔見せの木戸ばん首がさかさなり　玉章
八百の身代笑ひつぶすなり　洗路
目もじならではわからぬと畜生め　文集
松のうち内義毎ばんのしをつけ　横好

禿を袖にぶらさげてにげるなり　五閣
まああれも入れろはけちなやつと見え　高砂
そりやねいぴいだと姑くわい氣也　美徳
じやうるり坂は五段につゞいて居る　洗路
かつけじまんはしよくすぎた病なり　福邊
仲條の引札で下女くどかれる　福松
觀音を七兵衛は度々うつて行き　狸聲
扨もめうこく寺のそてつだとほめる　美徳
御名代としてふとんが一つ來る　如雀
俗名に地藏は一つたらぬなり　美徳
木曾をだきしめひおどしをねだる也　玉章
木綿高直につき下女むふんなり　高砂
ちゞめるとさり狀程な初のふみ　伍遊
はつがつを女房の聲で呼びたらず　五鳥
八九人ごろ〳〵〳〵と雨やどり　文集
子おろしを下女は八百へかひに行　五明
三太郎ほめ〳〵かわらこしらへる　素鳥
いゝはずさ三わりましの女郎なり　五鳥
ふか川八（◎はカ）の丶字かないでうしろ帶　福邊
丁がせつしやとく大寺へ初會ぎり　雨譚

茄子びづけで茶を呑むもげびたもの　鬼蝶
とうだいもとくらし髮ゆひらんびん　孤舟
わざわいとさいわいの門でかけもち　狐聲
俄雨ほねをさしてくむごひ事　福邊
しまだよりかなやが先へ請けいだし　志木
角田川じやうがこわいとすてられる　素鳥
持參金せいが半ぶん高いなり　洗路
かりに女郎とあらはるゝけいご也　玉簾
女房を參らせたがるねりくやう　芹丈
よッ程な水けこま留めひッた〳〵　雨譚
むらさきと男ならびにむだづかひ　五樂
まゝのつれ米のま木のとはなしてく　狐聲
するが町みほの松原芝に持ち　口喜
兩國はいんろう田町袖をすり　素鳥
明き店に置くのは市のなぐれもの　同
けいせいは三人跡は遊女なり　如雀
梅の鉢うゑを賣る御ゑん日　寸魚
やきばへかぶせるやうなを局着る　美徳
島田とは同じ木ならぬ下駄をめし　一町
雨のふらぬまへはもちとばかりいひ　高砂

火の中水のそこ迄もやきどうふ　福松
びんづるの生きたを湯屋に出して置　梅舎
きついふりたはらが馬を引いて行き　素文
ぬけがらのやね舟の有る鳥居下　五松
よしはらも四十里先はけちなとこ　卯木
藪いしやの餘人へといふかるい事　高砂
大三十日柳ごりからつゝみ出る　文集
とんだよく這入つた夢を小町見る　横好
とんだ賣りもの雪陰のねこぎなり　蔦夫
道の記の口元でなくほどゝぎす　高砂
高野のをすぐにむさしへ引く所　一口
てい女にはこまりはてたと三浦いひ　車井
朝歸り座敷へ傳馬町が出來　如雀
みんな留守外科にねこそぎ見せる也　青峨
ぼうし針ほつたて尻に成つてさし　同

天明八申年初秋

右角力 催主　文集
串柿
補助　芹丈

辭世

雲晴れて誠の空や蟬の聲　五月廿九日　木綿居士

右追善會柳樽廿三篇へ加入仕近刻出板　二代　呉陵軒

俳風柳多留二十二篇終

俳風 柳多留二十三篇

淺草新堀端川柳叟 年々萬句合の泉なるを利き分け、上戸も下戸も愽しむる其うまみを乞ひ請けて、如レ例柳多留廿三篇に汲込み書林星運堂へ送りはべる、各不ニ相替一御披被レ下ませ

如猩

かるはづみ被レ成ますなと目出たがり
きんぴやうぶ暑い時分におもにたて
つきのうそ天に僞り無きものを
ばかりではいやだと櫻連れがなし
たをやかな音桐つぼの方でする
かんじんの禮を言はずに迯げて行き
ほころびる命を歌でぬい置きし
よもうとて花を盜むもあぶなもの
はくちうに門をたゝくは十三日
なぜでもと鳥居の外におゑん待ち
むらさきに成ると間もなく五日留主
かんどこがわるいで晝寐しそこなひ
しろ水の流れた所へ蓮が咲き
お花見のあしたさしての咄しなし
とし玉でなけりや一チばんいふ扇子
こぼんのう抱く迄にして泣出され
うしろから鏡の貌へ笑ひかけ
たての歌横にして見りやかきつばた
いそがしさ十七寐るとお正月
生けたごへ小判を入れるめづらしさ
いろ〳〵な入れものへ寄る後の月
田舍駕あるきながらにかたを替へ
いくぢなき二タ人でめしや粥を焚き
色事のけもない内にいひ名付け
ろく七人にのぞまれて嫁はじめ
六あみだみんな廻るは鬼ばゝア
六月上旬てつぺんへ旅をする
六鄕は舟より駕がおもしろし
はやる下女又飛入りが二三人
孕み句は世上へしれて小町なし

八朔に凉しいといふ仕合せさ
鼻ねぢり斗りがねだる嫁を取り
初舞臺などゝ新大屋をいぢめ
初午はをとこ禿に世話がやけ
八十年早く平家は運がつき
にぎやかさ浴油の下で舟かふね
にわか雨にこり〳〵と來るやつさ
握つてゝたいじやうを乞ふ放し鳥
錦繪と墨繪と行者もつて居る
女房へせい目で居る大あばた
ほうせうに包みかねるははかまなり
法眼のじひはのれんをくゞるなり
法師武者其夜ぶたれたやうに寐る
へんといふ迯げ道醫者は明けて置く
別當がうたれ神主なつて迯げ
といしの外は何にもないきついしけ
殿樣はぬゑから已後の御朝寐
道樂ものは川上みへいつたさた
通らねばならぬ所に禿居る
道明寺欲をはなれてつめるなり

鳥籠の木になつて居る組やしき
ちう三のあがつた跡へいゝ女郎
ちよッ〳〵と迯てかぢやの火にあたり
ちつとの事でも客の空言はとがめ
りはくだと見えて石碑をよんで居る
雨腕の弟子雨も呼び雪もふり
隣家には船斗りなる御はた元
ぬす人に飛入りの有る市二日
ぬれた錢握つてちやァ〳〵よしかな
ぬりわんぼうを脱捨て下女も春
をなご共いつそうわつく月がしら
御禮參りおば廿ちに成つてから
奥行はあつちら間口二十けん
落すなとぐるり〳〵としばるなり
おしかつの男はすたりきつたなり
おし賣りの藝子に祇王祇女おされ
奥は花お部屋は曾我のねだり言
弟へ兄の花出しはぢをかき
わるい道手がいた塀をあるく成り
かげ清に三つ多いが不斷の名

鐘供養ばんくるはせが一ト人來る
かいどりをつきや四五十ついてぬぎ
かうじやの內庭土のらうが見え
かまくらの牢は抱いてははいられず
かうの座に居るぬけがけの手習子
かゝる所へ小林は義士のじやま
かまくらに居るうち相の手もわすれ
かぢの葉はよん所なくちらし書き
かつぎどのおらが野郞はいなんだか
かうじ町冬はとりべに人だかり
かぶきのしんざん畜じやう道へ落ち
がいぢんの時はあうしうことばなり
がらくたをつんで隣へおとづれる
かうしんはさて不自由なつかはしめ
川立ちは川お婆はさんで死に
よせ本を三の糸にてとぢる也
夜る見れば目斗りあるくからす猫
よ火をすへやれとおんべい母がつき
よし廣は冬は打たない刀かぢ
夜伽とはねつこりとしたうそをつき

たゝみを持ちあるき觀音をおがみ
立聞きをせぬと一首はすたるとこ
たびがけにしては折りめたゞしい歌
駄ちん馬かゝし引いてくさむい事
立ちどまり人をねめ〳〵もちをこき
そば切りは嫌ひけんどんは五つ六つ
染物やこの一品は江戸へやれ
袖頭巾菊石もつみを作らせる
つき花もその內に有る一トかまへ
月にもて過ぎてかじちのさたと成り
ね過ぎたか四つで手明きを二タ人連れ
なら茶喰ひ〳〵品川をむすこきめ
奈良の鹿座敷へ來ぬがめつけもの
長い繩ぢごくの聲を待つて引き
ろうかひそ〳〵聞男が二三人
むね近は狐がついて譽められる
胸わるで來るとゆるさぬ和歌の神
六ケ敷く言ふとといやは明け渡し
むごい事分けちへふとん一つ出し
馬からりつばに落ちたはかね平

馬をしからせてはまごも一人まへ
うせものは不レ存湯からむすめ逃げ
うるさくも晒ふみわけなく所
うまそうに喰ふを見て居る雨やどり
いつそやろうに成りねェと若いごけ
家毎にどれも一ト人はにくまれる
色直しろに成つて來るおもしろさ
のがけ道折りふし連れをなくすなり
おもひ出してはシテワキのさしで口
くひつみのたいはに及ぶよめのれい
喰ふものでないのは花とほとゝぎす
配りもちから女人とてへだてなし
草かりよりはせんたくが嫁こわし
やなぎと娘こきませるやうじ見世
止みきつて居ざりとびつこ門を出る
まごがおりないで姑女すばらしい
枕がや二はり三針うばはじめ
けいせいのいんぎんなのもげびた者
還俗をする弟子を持つ松が岡
化粧の間ふじに明るともゝんぐわァ

ふの切れた傘やつとかしてくれ
筆をゑらまずけし炭で一つ付け
ふさやうじ横にうごかすはづかしさ
こまものや内靈寶が金もうけ
國府より手ざわりのいゝ三會目
こち付けのさむらいの出る松の内
呉服屋の番頭家に杖をつき
小姑は丈夫な身かた二タ人まで
聲あらゝかに參内をとめ給ふ
小付けには成らず鑓持もつてのり
是がかこ付けの寺さと内義ごし
ごみのする事をとゞけるいそがしさ
後家の髪此世で遣ふほどは置き
御きりやうみそで六尺のかたやすめ
御くう所のゑんに青傘五六本
御てん山むなしく歸る所でなし
是が本の正宗だと棧敷だぞ
こんれいに娘をさがすとんだ事
こんにやくの有るに菓子盆さらひ込み
この人にしてこの病軍師なり

戀のぬすみをさせぬから病ひ出し
勾當は大きな物着星が出來
江戸の富士よし原宿へすべりをち
てばなしで川中へ出すいゝむすめ
天と地のつゝかいに成る不二の山
あの客僧こそ大事よと品川
跡の車も一つ所かとむづかしさ
赤子の足をゐいやづとたづね出し
あら世帶茶袋をぬふ針はじめ
秋の月もちろん一句ではすてず
あたゝかまんぢう喰れぬは市のかみ
荒海へ千鳥の鳴くはいなたりやう
あいそうのわるい石碑を禪は建て
ふんどんに取りそへ三分賣れ殘り
さる廻しもらふと後ロ見せて行き
三味線をばつたりやめて通ります
三會目すみから今にまかりいで
細見にまでのけものゝやうに書き
きつい事隣しらずのごふく店
きんくわ一日のゐいとは中の町

金屛風やろうの上にぐらつかァ
氣に入つたのに樟腦をたんと入れ
きん句だに禿雪こん〳〵といひ
きつい事いゝ天氣だに夕立や
ゆかげんをしつたも百の內へ入れ
行く氣かといへばさん候といひ
めのうへに藪人を見るにぎやかさ
飯盛にやよすぎけいせいには成らず
めの字からへの字に成るとつけ上り
みだされるまではほつても嫁いはず
見世先でくわへぎせるは屆け文
見苦しさおとものの下女がとちくるひ
箕の市斗は江戸をあてにせず
見ともなさ茶屋の表にぼくかゞみ
しろかねの箸を鳴らしていゝをくひ
しんぞうの座敷かれ木に花が咲き
七本の鍵はのこらずしづがさく
車力どもなで切りだぞとかううあれ
猪さるは元よりぞうまである町
尻ひつからげ立向ふ下手のまり

しやうじんを二つと蕎麥のいらぬ事
十二銅羽子板にのせしかられる
尻のつまらぬ年明きはやろう也
十三はすわりさみせんころぶなり
ゑびすかう十日過したおもしろさ
柄を出して置て湯汲みはめしにする
ひざの猫ひざへ渡していとまごひ
ひきながら三味線はこぶ十三日
屛風飛びこし逃道は三百里
百里ほど有るを日づけにワキの僭
百兩はなく成り親はのこつてる
ひんのいゝ棧敷つもつた雪のやう
晝まへは老いにけらしなやうきうば
ものゝけがよし町へ行く連れに成り
物語り直に本尊書き給ふ
物着星かたみをもらうなさけなさ
ものを言ふまへに生醉身もんだへ
せん頭の足音を聞くいゝすゝみ
錢箱の有るがらかんの組がしら
晴雨とも晝夜げんきなほどゝぎす

すがゝきも文も立つてく大一座
直ぐにひらくで釣臺は百ふやし
菅笠へあてがつて居るすいかつら
角田川まではよそふと二三人
すきな事釣りにもてんや物が出來
せんしうのもみぢ息子のてんま也
二度目には三年ものゝ女房也
すばしり口を出ると直き田町也
仕合せは車むごいはかり也
水におそわつて月見をにげる也
同日のろんはするがと近江也
あなたは御かうしやと娘はたち也
いゝ仕廻ひどつちへなりと歩行也
朔日の雪物さしでつもる也
付けざしを娘のんだがおちど也
床花の口のこ茶屋へはねる也
品川で口がすべるとぐそう也
からかつて居るは初かねもらひ也
四郎兵衞が關へも千鳥かよふ也
あきば道木の葉てんぐはだんご也

立ちまふやうに飛び込むは二百也
嫁はもうらりやうの袂切れる也
いつまで見ても紅葉だとそびく也
名山の麓はなんで〳〵也
息杖で行くともらいはあはれ也
からかさをかさず借金はたる也
あどけない商人筆をおつ付ける
夫婦しめやかに月代ぬすんでる
古近江の糸まだいゝにかけかへる
しゝが谷がよひを禿いッつける
店びらきかつかちめいてほえられる
たま〳〵は吉じやう閣で帆を見せる
てんがいや花に嵐をといて居る
もみぢのうらに摺子木を下げて來る
座頭の女房吸ふ度におッつける
二十九日から仲人やたら來る
十五夜を十一ふやしころも見る
十二文が酢を下戸にふるまはれる
西行は半ぶんよんで吸ひつける
いとだてをかぶり四つ手の跡をかけ

てんがいや男のかいた文見つけ
夕立にこり三百里たてつゞけ
上り段があぶないと治部氣をつけ
車引はなしをするにふしをつけ
惣勢は土手をおしてくよしの落ち
二タ人づつ御いとまの出るざつな內
三つまたで玉のこしからころげ落ち
小まいかききせるをわすれ廻り道
やつといふうちはの下に仁王立ち
下駄をはく時棒組はつゑになり
なけなしの一分つかつてひまになり
氣のどくなあげまり四人ひまになり
かきつばた盗んだ娘よめになり
かうじ町やくにたゝずが足になり
女房にほれると先が近くなり
谷汲で所のしれぬ人になり
番頭が江戸言葉ではげびるなり
うりくひをせげんの見込むむごい事
千住川よしのゝ通るさむひ事
二十四そうに下駄をうるとんだ事

いふもさらなり番町でむごい事
十五疋早馬の出るふりよな事
八朔に黒助で居るつらい事
うらの雪戸板だけかくつみな事
金屏風おつかけに又まくの事
傘をさそなら春日のはきつい事
へんとうはどうだといへば春の事
大一座あみ笠ゑんりよすべき事
せんだんのふたばをせげんほぢり出し
觀音は千じゆの見世を二日出し
何とぞちんを御次へとさる廻し
にわか雨ふるまひ傘を三井出し
うでおしの地取りのやうなたゝみさし
ばかものも有ると仕立屋居所なし
むよくの全盛まつせへ名をのこし
こわい事落馬六度で仲人なし
かんしやくは跡で氣のどくだと晰し
かたりてのおもしろがるできゝてなし
かたみわけ田舎は繩と竿を出し
かうぼくへ櫻をうゑておもしろし

賴光へ出たはさゝがにごこでなし
ふい／＼と出るのを伯父に母はいひ
にくいやつ亭主の事をきやつといひ
近過ぎて穴がしれると五百いひ
摺子木と手桶見たおしと四郎兵衛いひ
夢にだに小判は見ぬとたいこいひ
あがられやせんと秋葉でげい子いひ
かけ聲の合ひに小聲で何かいひ
たつた二度いつたに女房どらといひ
旅の留主見舞ひ一日むだをいひ
文やどんもうござんなと女房いひ
十貫目付くよと京の仲人いひ
さぶがつてしちやの見世でだゝをいひ
あまい酢で梅若をまた母はくひ
なんの氣も無いによし町やかましい
あら繩をがつしやうづゝが根津でかひ
泣きぬかけかゝへてはかり事にあひ
立すぐり居すぐりさせてせげんかひ
女房の此ごろ髭をそりならひ
たね柿の助言をいつて一つくひ

まへだれをかけてのッぺい子供くひ
干しうどん夜とぎ親わんにてくらひ
あぢな商賣茶をのませとちくるひ
太郎でも居ぬとこゝらはすばらしい
大一座一番首をいどみあひ
亂杭へとらまり太郎いとまごひ
迷ひ子に鉦のくだけるころにあひ
うんざりは男のそばに耳だらひ
髪が結はれて餘の家へ又かよひ
御めかけに出すをまゝ母恩にきせ
座敷牢珠數をねだつてこわがらせ
柳と娘こきませる楊枝見世
いゝ春にわかい嫁ごを引合せ
御持佛の下から下駄を出して見せ
かんしんにいぢの惡いはへをかゝせ
呉の國の代ものゑつの見世で賣り
はかりへも高尾は褄を取つて乘り
するが迄行くは大きな拔參り
奥道者歸りはよほど手が下り
女房にひかせ鼻ッたらし語り

貌をするそばで一ぷく付けて遣り
九つの鐘をあいづに賣れ殘り
月のまへかこち顔なが賣れ殘り
せいしうはならとやはたの中に散り
御しんぷの見る細見は鍵が有り
人しらず生酔座頭目がすわり
五百人見物のます大當り
折るべからずが見えぬかと下戸呵り
舞おさめると懸け取りは又しやべり
取れぬ懸け猪牙を一艘棒に振り
信濃にてさぬきの事をよく綴り
行平とおんなじやうに嫁歸り
廿五工かゝみ座敷が出來上がり
あく迄喰らひとち狂ひ二ふん取り
もつれ糸おへなく成ると嫁に遣り
龜で足休め鶴までまた迯り
撰り人で居風呂桶をかりに遣り
まぢり見世一分うや／＼しくすわり
去り状を有髮のあまに成つて取り
がた／＼とふるへながらも嬉しがり

あかるみへ出されぬものを呼びたがり
下女籠の鳥だと文へかきやアがり
生酔を勝手で嫁はおかしがり
かきつばたどこか思ひの外はまり
芋が子はやとひかむろに出でにけり
こりや〳〵とおうばはづした飛車をかり
川端の小ぞうあたまをはられけり
見せものにしたい白髪を詩につくり
人別をめでたい事でぬけるなり
だいりぞうえい四分板と小わりなり
立てひざで打つがかぢやのていしゆなり
かわらけや一日こまをまわすなり
いせじまで晝間はかたいむすこなり
そろばんでもらへば嫁もげびるなり
遣り手の口と土手とが八丁なり
見せ賣りをせぬけいせいは手がらなり
花咲かぬとはおい込んだじせいなり
きよさい趣向は女郎のやつこなり
申し子は夢ばかりでも出來ぬなり
三段切れで一ト切れはさしみなり

よしやきみなどと西行りづめなり
ゆふ靈もたいしんでんはきえぬなり
すけん物二階に居るはしらぬなり
錢車若衆が一ト人まじるなり
をしいかなあッたらむすこりちぎなり
へんてつもなくぢいさまとこたつなり
梅柳山はざつとして渡るなり
しんからも出ますとげくわの座なり〳〵
上ハぞうり客がはいてはしづか也
かん所が三十日できまるなり
猫の戀ぶたれる時がわかれなり
福來たるすなはち死すは高尾なり
來ずといゝ人まで雷の見舞なり
首打落し灰吹のそうぢなり
唐人と布袋せなかを合はせてる
持つたのとむすこ仲間をはづされる
一ト人客からけいせいへうぶ着來る
酒屋でもけんどんやでもきよつとする
つくねんと花ゑんの上に三時ざし
がうざらし日本の地へも二タ人出る

女房をうかゞつて居てしかられる
舟がついてそうろうとぶら持つて來る
六夜待ま一もんじにかけさせる
とりやげばゝ目やにだらけな貌で來る
一生に一度我が顔見ちがへる
そば賣りは門をこわすを見てにげる
ごうゐいが有ると母おやこすられる
両方の木戸がしまるとばゝア出る
くだすだれ一トつかみ持ち立つてゐる
口をすくしてらうがいにきらはれる
品川へ風をくらつた客が來る
はらあしきばゝア二分で笑はせる
だまされるたびに母おやちゑが出る
よし原のつぶれた夢を母は見る
はいつてゝぞうさくをするのりものや
ゑちせんはいたしにくいと小間ものや
大丸のけつに大きな目ぐすりや
寺にかちましたとかりる祭まへ
駒はとめたが猪牙舟はとまらねェ
日あたりのいゝで大きなふきがはえ

せんごうの左右ねッからわからねェ
一ト人のる舟はしあんの外を行き
地紙うりがまんが過ぎて風を引き
じやり〳〵が濟むと四タ人連れで行き
江戸見物には雀が一羽付き
げせぬ事めでたくかしくだしに書き
江州のさんは只取る事が好き
四タ人は皆がつ〳〵とせんに付き
帳付けのぶんおも一ト人上げて置き
嘉平次はこわい奉公人を置き
富士の山三とまり程はついて行き
一人もの死ぬとぬかみそ泣さがし
生酔ひも祭の跡のにぎやかし
す一分は素見に少しひんがよし
かみそりを一トざるさいで御さい出し
よし原の御つぼね並みの人でなし
はらからのために大小ねだり出し
一ぞくのかずに十三多いとし

酉正月廿五日開き吉例花角力會

差添　星運堂
勸進元　薩秀堂

上之部

氏子等は夜る寒くない家をたて　洗路
ふきよりもぺん〳〵草が御意に入り　川角
やねふきも井戸ほりもしたみかど樣　扇朝
京と江戸とで朝夕をそめる也　かたる
御本坊花の外には御ねり也　窓梅
ほんとうのかこうは江戸の四月出る　芹丈
幾つに成つてもとにいこ〳〵くゞり　宿禰
いけたごへ四五本心あてばかり　清江
岡ばしよへ嫁も三年身をしづめ　鳳頭
花ものをいはねど落馬人がしり　かたる
河東ぶし內では後生ねがい也　櫻木
ぶきよふへッついをぬる初ざくら　里山
四郎兵衞にとかまへられるふぐりなし　洗路
じやの引けものを朔日のばんにかひ　雨夕
木娘のうゝかいんにやかわかりかね　雨譚
はこねのやうな女郎はしばられる　如雀

白ぬりの戸を月見過ぎたてゝおく　窓梅
けいせいをはいけんに行くいけぬ事　雨譚
玄關ばんつくゑにさせるけちなうち　柳雨
一ッ足のくされと書いてとうふなり　窓梅

中の部

おふくろの留守に仕上げる座敷ろう　歷紅
近年は二月はだかによけい成り　いづみ
そうろうの水でとうふや洗つてる　窓梅
不二の夢はたして川留めをくらひ　夢中
しよぼくない若衆なづなをうつて來る　由香
金づくでそるもな江戸にやありんせん　夢中
明き店とい丶手で書いて見ともなさ　里山
やね板をふみ〳〵覺えませぬ凧　九水
それならばそうよとてい主卷かれてる　同
三浦屋の有る細見に人だかり　かたる
ゆは付けたりでお妾もついて行き　雨夕
女房は外のぞく立て斗りさせ　九水
こッちらを亭主が向ひてやかましい　洗路
さいけんのひを打つ程にむすこ成り　里山
此はりでつれるものかと大けんくわ　狸聲

大きなだゝッ子引つぱる花のくれ　山雨
後三年めだつた手がら權五郎　洗路
いしやは醫者だが藥箱持たぬ也　山雨
うれのこり御尤ながら二三人　左滿
もの日のすけんとびくにのぞく也　山雨

前之部

高座ではおとし咄しもありがたし　いづみ
よし町でもうとらまへぬ年と成り　雨譚
うり物だのにめつかちやあばたなり　宿禰
もんがくと一休あたまにてすゝめ　芹丈
もろこし二本で五町を廻る也　玉章
じねんじやうけちな花見をあてにやき　窓梅
あまり御しいくだされなと禮のとも　一口
大ぐしをあたまへさしてむめをほめ　茅窓
歸りには宿なしに成る筏のり　窓梅
扇子箱折ふし出てはつみ直し　糸柳
おもしろや猪牙にてまつらがたを行き　箕山
宿坊を十二にわつて御ゑん日　串柿
皮財布かつてかうとうにくまれる　窓梅
かゞみとぎ若い男をついに見ず　由香

ふてるはず二つうへを伯父よこし　窓梅
立ちくものにわかに見える向島　清江
梅よほし瓜と中の郷大さわぎ　窓梅
源三位あくせく二合ほどひろひ　風車
其にくさ間男が來て子をしかり　窓梅
こりましたそうとおふくろいつている　雨譚
いろはから京町へ行くしやうたつさ　蜃紅
めしつぶを和尚はせんへちつとのけ　芹丈
はきものをれんじへ角力置きはじめ　窓梅
なりッたけてうしを上げるさる廻し　宿禰
やつあたりかまくらさして女房行き　凡通
よりかずが女房大きな口をきく　鳳頭
着船の日から町人禮に出る　若竹
のうくあれなる御僧駕やろう　箕山
なり花にあきむだ花を亭主かひ　若竹
うちしきの地黒しかたがなさに出來　凡通
金をためるのがうんつく上手也　洗路
古川とかけ品川といて行き　箕山
小便にはしごをさがすいゝてんき　糸柳
百人並みのきりやうだに金をつけ　凡通

あさってはそばで見ますとしまやいひ　竹印
けだものと並ぶと仁王あはれ也　窓梅
納豆のまずいをていしゆいつかくひ　龜石
二タ聲で目のさめたのが下女じまん　丸龍
いけぬ晩女郎とッけエべイにされ　雨譚
くろりんずかたひざたてるむづかしさ　窓梅
ぼさつにも氣々女郎だのくわん女だの　墨莚
かんむりをもの丶下にて嫁直し　狐聲
おいらならもうかを着ると初がつを　横好
客でんで龍紋先へぬぎはじめ　窓梅
すけん衆がい丶と田町の酒屋いひ　同
祭に立てるを化け物持參する　雨譚
しほふきやおたふくをして髭をそり　其童
せんぴやうは死人の山の邊へこし　洗路
猿廻し一ト人で來るはしづか也　柳雨
手ぬぐいをやつかいにする安むすこ　雨夕
にこ／＼とごせ御物見の下を行き　宿禰
たいめんの幕でさじきでもたいめん　里山
傘のかし手の多いのは其角　雨夕
げくわの箱小ぞうなんだかなめたがり　同
ばん付の錢を御門で乳母かりる　同
大尾　折れ込んだ御禮に石の手水鉢　霞朝

酉三月廿二日開き本郷天滿宮奉納句合

願主　串柿
　　　文集
補助　芹丈

御ゑん日までは氏子らそだつなり　芹丈
ゑらまねばこそ古る筆をあげる也　文集
天神を拜し時鳥をたつね　川長
目に三日程はすゞしき夏のたび　卯木
白酒の無い大内は玉のあせ　宿禰
大ざらだ／＼と雛をかつぎ込み　丸水
松さう寺切りで歸つて灸をすゑ　雨譚
はらからは鑓長刀でおごす也　宿禰
傾城をうつちやらせるに骨を折り　魚交
梅若は向ひも柳ばしへよび　姫小
さくやひめ三國一のすそッぱり　夢中
十六で產みつゝがなくはかま着せ　若竹
蕈をばうんとねぢ込み下戸野がけ　雨譚

京都では梅を盗まれたと思ひ　夢中
らうたけて針わざならふうんのよさ　文集
い丶花をもらひうつりにやぶれ傘　若竹
つッつけて見ると茶わんを覗いてる　五連
番頭の手廻しわきで子をこさへ　丸水
うみ山にい丶夏ものを江戸仕込み　雨譚
餘寒さりかね雛棚に梅つばき　左滿
うら付けで板の間を來る待どふさ　糸柳
ありくはい丶がおつかけおん廻し　宿禰
三日程てらくとする五月雨　同
生酔のある評判記茶人持ち　雨譚
やすひでをめがけるけちな歌がるた　洗路
玉のきず弘法大師見付け出し　玉章
前九年ぐそくのいしやうはつとなり　同
かい間見に斗り行くのに四つ手つき　雨譚
中かさと錢もつて出る一人もの　夢中
そりやア草だアなアこんなのがよめな　由香
百人の内一ト人喰ふ初がつを　芹丈
もんもうな孔子手くせがわるい也　如雀
ばアさまはまだまめかとはむごくき丶　丸水

かちさまの御あつらへと繪馬やいひ　巵言
むごらしいのり賣首が二つなり　串柿
夢斗りなるかまくらに二三年　柳雨
らかん寺にもふかると言ふ佛なし　豊好
牛の御前でのろついて息子行き　玉章
おそわつた通りにおがむ手ならひ子　横好
かうじ門を出る事仕丁なり　雨譚
雨やどり出ようとしてはよしにする　同
せうこう寺うれ口のよいもみぢなり　糸柳
金屏風のそんりやうのみ喰ひをする　夢中
のぶといつらで宮樣の跡に居る　柳雨
玉にきず藏宿を出て猪牙に乘り　若竹
文の末へ梅の折り枝一つかき　串柿
こいつむしんだなとぶ人相であひ　雨譚
ちんまりとすわると女郎げびるなり　如雀
こわい役わりを六本杉でする　同
どれ程喰つたかしなの腹がくッちい　國香
まだ夜をこめて馬のなくは品川　洗路
去りにもつたッた半年つゞら也　門柳
おもだかとちやうせんせめは向ひ合ひ　如雀

初がつをそばで茶わんをかき廻はし　國香
鶴は古いと入道は犬に金　雨譚
京都ではゑもん江戸では式部也　文集
はしごおりきると二階で雛をまけ　若竹
用がありや來やすとしきゐやつとこし　丸水
嫁禮のいしやうかた付け雛を出し　左滿
八樽くらつていなだをもくふところ　玉章
土みかど樣べい立てるいなかひな　花口
鍋ぃかけ古いこまいもちつと持ち　そこう
なぜ一ト人とかまいないと下女が宿　串柿
きついふり晝寐も起きてかしこまり　横好
こよみ見て後生を年に二度願ひ　糸柳
一廻り程猪牙からも見えるなり　柳雨
ふらそこはちびり／＼と青く成り　一口
にしきでゃのむがそだよと袖を引き　五連
ねり供養には女房を參らせる　芹丈
母嫁へもの日にゆだんさッしやるな　若竹
下げ錢でくどいたを下女いきごをり　門柳

大尾

神子を見てふとしく立てる宮柱　丸龍

中七月廿八日開き　角力句合呉陵軒木綿追善會

（地名には有るか色には出來ぬとこ　和笛
かゞもんもきつさしたのは光るなり　間々
（二枚目の板も直成る奉行職　同
（石山も二タ月ほどは紫衣寺也　和笛
（長刀は愚か鑓をもねだり出し　交者
（御取立て殿のさいくと見えぬ也　口喜
とうにも堂にも緣ある靈寺なり　五樂
奥樣を三味線ひきがざんをする　東里
木下川を猪牙の通るは十二日　芹丈
地女の八朔なみだぐんだ貌　如雀
秋の夜のたらぬは月のほまれ也　交者
おもしろし明き手の方へ松が見え　如雀
女房はきたない夜具へ一人ねる　鳳頭
注連繩で首引きをする二見瀉　横好
男どももらひ湯をたく雨大師　東里
ひッそりして御寺内のごみを掃き　雅交
よし原のうら門出るとしめられる　車道
よし原で聞けば赤子も愚痴な聲　來々

ぼたもちへはたの餘りをかけて來る　紀原
玉ににたものをいだいていざり泣き　狐聲
寺這入りしてもほまれな官女なり　間々
楊枝で一度かみそりではづかしき　同
松は替らぬ色だのに縁が切れ　仙羽
ふとんを三つあたかなやつがやり　同
はつせつく貰ふたんびに立て直し　糸柳
見合ふのを出合と言つてしかられる　姫小
仙様は大じの客と三浦いひ　豊好
よし原で招く尾花はむづかしい　静々
傘の明き籠で丸挑灯をうり　和笛
月のわへ熊が谷坊を連れ給ひ　紀原
見くびつておあい車を通り抜け　三丁
木むらあづかり大坂の冬角力　和笛
賑かに精進をする本願寺　車井
松が岡三年置けば用に立ち　豊好
やろうの細見を呉服店へ下げ　龜玉
馬の耳に風しうそうに春秋　如雀
女房と中や絶えなんしやうとうじ　芹丈
外の客をば人しらず高尾ふり　同

けちな二の足さいにも中聞かせ　姫小
北斗の星が嫁入りにさわる也　如雀
かねにかこ付け庚申を嫁は聞き　同
骨の無いやうな男に下戸こまり　夢中
前九年後家にせぬのがみやげ也　姫小
とんだちゑをつけたのはくわやうふ人　如雀
紀の國やいらいけいせい買れのこり　糸柳
物着星姿がぶんやにあらわれる　玉章
大手が二十四からめ手が二十三　中葉
こびりついてゝちう王に殺させる　可候
百年忌御寺が歸りさみを出し　和笛
舟はまだ駕に醉つたはげびたもの　狸聲
白髭へかつ込んだのも八九人　中葉
よし原のひんかく月に影もなし　五扇
夕立にみめぐり牛のせをわける　花口
下駄笠につゞき材木きつい事　玉章
義を忘れたで直介に殺される　扇朝
しれ者也と引上げ見ればせむゐ　串柿
西村をはんとに出たとなべいかけ　川口
馬から落ちて腰折れの名の高さ　玉章

石は生きたが死にめにはあわぬなり　雅情
馬の生酔をばくろう買付ける　洗路
夕立ちのあす觀音の御縁日　蔦故
三度が三度親わんでつきや喰ひ　丸龍
三つみねの犬にも負ぬたいこなり　洗路
五六百渡る〳〵と追ひたてる　蔦夫
喰ひつぶしやらう人別外に置き　姫小
目も鼻もなく横に寐るふてェやつ　玉章
いぶすより焚付けるのがにくいなり　丸龍
ぶつかへりそうな門から妾迯げ　仙賀
四郎兵衛が關所やぶりは高がしれ　夢中
死にかねるふとんの下に二三両　五扇
秋來にけりとけいせいをおどろかし　姫小
習はぬ經を覺えたで孟母こし　雅情
平家物語り四五はい喰つて書き　如雀
ひやうし木で板の間を打つ面白さ　夢中
わうにんの亂山と川いぢり合ひ　芹丈
梅若の四十九日にかしわもち　如雀
煎じかゝつては引きずり茶をほうじ　姫小
長者の陣を張つているこんや町　芹丈

八會目あたり白むくしよつて來る　仙賀
退屈さ川を越す夢斗り見る　夢中
臺所へぬぐのは湯屋とこんい也　花口
ふたアりはしやうじん物で淋しがり　車井
切手を見せて田樂を喰ひに行き　山路
わらひ過して鬼灯を嫁なくし　同
御こうでもないにどや〳〵參るなり　一口
二階口またほうづきが鳴て來る　同
極樂のひやうとく和尚付けてくれ　車井
はかき吹きちる古市の三會目　同
嬉しので見合よめりをいそぐ也　玉章
車留かた身をひろく嫁歩行　同
何やつがしわざか娘かぶりふり　文集
おし送り日本と江戸の間へ來る　夢中
御れん名下ほねがらみ二三人　洗路
遊里のとらわれとなり母へ文
ずいきの白あへを女房ねだる也
和泉のつぼのその跡へるりのつぼ　文集
年玉そッくりとよゥろ〳〵とよろかへる　同
候べく候のさみせんを見世で彈き　かたる

大磯でやう〳〵馬を取りかへし　久鳥
はつがつを小半丁からげびた事　里山
ごう工夫しても時計のわが餘り　同
六あみだへび迄出たり這入つたり　久鳥
わる口に耳なれてゐる後家のとも　かたる
芥子みそ錢でかわれぬうちの事　同
あく筆のやたら流れる八日過ぎ　雨夕
出まして留主とは御念のいつた事　里山
たむしの咒咀には木をらりにする　雨夕
百さじき茶食の留主にせまくなり　かたる
らんちうと號し蛙ッ子をあづけ　雨夕
二分あると二分すてゝ來る病ひなり　かたる
やがて死にますと姑女しれた事　久鳥
もち米をけんぎやうむしやり〳〵かみ　同
嫁のかまくら手におへぬ事になり　里山
ぐそくびつ紙ひと包みまぎれこみ　同
だァまつてはりでつくまねうまいやつ　同

右追善會

催主　かたる
補助　櫻木連中

言の葉の茂る手向や一めぐり　語涼軒

故人木綿門葉追善に記す

燒き筆の先づぶつ付けは玉津島　故人櫻木
たんゆふは天窓の上に蟠まり　同　非賀
瑠璃殿の御門にたえずさんご笠　同　綠枝
植木屋の歳暮は明けて披露する　同　豆龜
天王寺斗りは額がごッちやごちや　同　芦夕
正直のかうべは神に見立てられ　同　たろく
本阿彌は鰯は見れど鯨見ず　同　巴江
右の七吟を思ひ出だせば其面影にあふ心ちして
只回向するのみ　如せい
寛政元己酉はつの秋

俳風柳多留二十三篇終

俳風 柳多留二十四篇

功成名遂佛國へ身退れし新堀の先生年々撰の萬句合より柳樽今年に至り廿四篇に及びぬ、猶また此餘の秀句を後篇として部分にて出し好人の御求を希而已、

花洛庵一口

川柳追福三評句合入

（原本此次に肖像あり、本書之を卷首に移し揭ぐ）

酉八月十一日開き　川柳評

座ぞうよりくどく世界をかけめぐり　狐聲
大坂は座頭に用の無いところ　笑艸
七去の外にもう一つまつがをか　如雀
舟ばたを鼓にうたふもみぢがり　笑艸
つる龜をうつて女郎にかひあきる　和國
地女の年明きをまつまつが岡　口喜
風上ミにすわり鬮取りしかられる　中葉
上戸をつれて氣遣ひな花を見る　狐聲
田町にてゑんやらやつとまめ本田　車道
あくびの中の川はゞが壹里なり　狐聲
忠臣は初手くすの木でのちはいし　同
見物はまゝへうり人は松洞寺　祇樂
能星の下へ轅(かぢ)をたてさせる　同
切れが有てもひんのいゝ屛風なり　芹丈
だまかした大蛇で女房角がはえ　一雅
いゝ男ごぶから女房つれて來る　口喜
こも僧の出直して來る大さわぎ　和笛
四つまでは世帶じみてる二十けん　一口
はかまごしあてたを女房くやしがり　狐聲
女さかしくてもみちうりそこなひ　串柹
商ばいにさゝわる地紙やのあばた　狐聲
大人(たいじん)は六郷むす子松とうじ　一口
ぶどうをくひしまひ灰吹をすてる　狐聲
かりものとまんざら見える金屛風　中葉
大門を四みんのいッち下でうち　玉章
三分はなうれ切れたよさ下戸だまし　洗路
直がでけんじやとまねて行く鰹うり　中葉

中納言九條あたりにしるべなし　洗路
十ヲ斗り留守居は年をかひかぶり　一口
海にたゝみを敷つめるいゝひより　玉章
丈長の鉢巻とんだげびたもの　狸聲
も一ぺん廻るかどうだにへきりやな　梅玉
福原の後チわたづみへつれ申し　狐聲
看病にしよくせうをするまづいやつ　玉章
おとゝひのやうに又いふそめものや　中葉
はらをせにかへて山猫かへるなり　一口
ちうぎさは鋲打て行くぬけまゐり　洗路
越の傘かり吉原へいつてもて　夢中
ひげつらであま酒をのむみともなさ　一口
しん川の手がらは水をあびせられ　喜常
百姓もどなるをきいてあきれてる　串柹
ふところはでんがく切りと土手でいひ　米久
兄弟が居ぬとだるまも無一物　寸魚
めし人のゐんでよしはら通ひなり　文集
ぷん〳〵とたばこはにほひ錢はなし　中葉
八重垣組連會之終　催主　一口

萬歳ににがやせゝらやあざはなし
ふらすこもちょびり〳〵と青くなり
八月の一つまなこに客はにく
かきつばた四字と六字の上に置き
むごいこと後家のべ紙で鼻をかみ
殿様へあたゝをすえる國家老
一子出家すれば鳶しらみぬけ
意地づくで女房鰹をなめもせず
正燈寺手をかざしては西を見る
あの晩にてれたと息子くやしがり
あま逆さまな事なれど緣を切り
その外は表だゝずに高尾ぶり
憎い後家佛が口に付いて居る
すねた子のそばに母親あきれて居
三味せんがぱつたりやむとうさん也
禿が先へたばこ盆初會なり
座頭の坊松をさぐつて一分やり
賣物をかんがへて居る唐づくゐ
ぐつとおし出してお針はすひ付ける
ふつていな物を島田は色にもち

おいらんが名代きりゝしやんと寐る
重箱をもたせ餅屋でつもらせる
箸紙はこれも小判のはしで出來
大象をぞろ〳〵引いて馬喰町
一ッ角と一片土手で仲間われ
傾城も月の障りは退れ得ず
一ッけんまゐらうとばちを引つたくり
きらびやかなる長持をからで置き
そんなのも今來ませうと鰹賣
盜人はせがれ同類女房なり
こも僧と乞食にゆだんせぬ男
どぶの坊ほどは花屋も生けるなり
杜若折角やればりんをうち
二つ三つぐらゐは妾塗りかくし
生きて居念佛講を取りたがり
歩行くたび一二兩づつ下駄がへり
神々の御かへり濟みで幕が明き
大そうな物は女郎の他出なり
おいらだと離別ぞとかへる四つ手駕
次第に御淋しくもない男見え

くがいとは月雪花も入れるなり
燈籠のあしたまばゆき仲の町
ぬしの手で御はし紙と書きなんし
手拭でつらをぬぐつて無心なり
百人の內で明け方一ト人聞き
いッち日二國斗りこいで居る
いづくの浦でもにくまれる男
どつさりと降ると初雪げびる也
かげ膳をすゑてる所へ武田寄せ
うしろの子前へ廻すがもり上手
けちな窓四角に壁をぬり殘し
きつい邪魔そどくのとなり引たてる
木がらしの時分持佛は花ざかり
萬ざいの跡で氣のないかまばらひ
嫁が出て發句をみんな歌にする
よの客がきッぱり切れて乳が出る
目をぱち〳〵でさそひ出す憎いこと
茶一斤だけまゝ母は馳走する
云ひわけをしたが間男おちどなり
寺の門番役德にしきみ賣り

爪の糸のびをしい〳〵賣つてやり
かるやきを買ひに他宗は通りぬけ、
大坂で市の男をおしいこと
尤な事ろうがいをごせは病み
女房に負けるものかとたわけ者
ふとゞきな目黑秋出て冬歸り
す一分を持つてそかいやこかあいや
蜜柑籠よりはむざんな四つ手駕
片々が他人で詫に手間がとれ
紅葉狩今は遊女がたぶらかし
忠臣の家老いたつて身が重し
止めてから出口の柳蛇のごとし
女にごうをはたかせる神事也
小刀を持ちづめにして栗を喰ひ
唐やうは一字はなすと讀めぬ也
僧は聞俗にはくへと釋迦をしへ
のうれんをいしやは扇ですくひ上げ
其角が無いとおたすけに出る所
お鼻毛をかぞへて居るが勤なり
切文は宵に歸たあした書き

けいせいのあいそづかしを舟でいひ
年の暮明けてくやしき嫁をとり
三會目呑みものんだり喰ひもくひ
とういなんばんほくてきへかり込まれ
來た當座下女吹がらを手へはたき
土俵からしろうとを呼ぶ急な事
御短氣引ごとにして又いびり
はなれ馬筆でとめたで功名し
北てきに女房は世をばせばめられ
時鳥きいたは後德大寺なり
しろうとの鬮取ばせを葉へのせる
さもそうづさもあらんのが賣殘り
後の月すんでにろうを破るとこ
口びるで嫁かんきんを濟ますなり
貧乏をかくさぬ男源左衛門
あな有りやなしやの身でも戀歌よみ
あんちんは因果なとこへかくされる
母親は舞をまはせる雪のあさ
賴政は嫁の五器までひろひこみ
民のかまどをうるほした御ほうらつ

二度目には月も親仁もすごく成り
三圍で氣のそれたのを付けのぼせ
いゝ取組だがふしやうな天氣なり
生醉をいつそけいはくして寐かし
をしいものゝふをひやぞうめんにする
うれいでもいゝとちう三ぬかすつら
うぬぼれをやめれば外に惚てなし
親分は殘念ながら杖をつき
不風雅な軍吉野でおつぱじめ
惡口はわつちがかぶと女房いひ
ほれて〳〵ほれぬいたは淸玄
役がらで氣斗りつよい與家老
あたい百兩一こくをぬかすなり
あれを呼ぶ氣だなと伯父が星をさし
德向きにかゝり大きな目に出合ひ
交り見世うかといゝのも揚られず
爪音は嫁ばつくんに秀でたり
素人の女郞代金五兩なり
三角は目出たい藥袋なり
むしのゐゝむりに娘に成つて出る

ふだらくの岸打浪を猪牙走り
人相のいゝ大どしま一分なり
鼓より才藏口をたゝくなり
素人が餅屋に成るといそがしい
いゝ日よりつくりそんじた仁王出る
けちな客二ヶ月餘り寄つかず
名の下へ二歲の居るは食時分
身で無いものへ骨斗りの傘をかし
をもしろやとうろう化して雪となり
正月もあかるく成ると嫁の禮
ひよく紋目黑邊からはやり出し
朝がへり御用を內へ見せにやり
嫁が出す水はりのけて目をふさぎ
はさみともいはれずとんだめに出合ひ
丁どよい刻限御幣出して居る
をしいかな息子女房にこびりつき
芝中の穴掘どもをかりあつめ
からッ文斗りじやと見ちやひんねじり
五郞丸ふわりとぬいでしがみつき
いびきをかき〳〵遣手いゝ往生

月のかげ日向に成つて母くろふ
切落し半疊かぶり雨やどり
たりひづみ金で直した嫁が來る
初會ではとなりの部屋へいつて喰ひ
重忠はあざむかれない男なり
石尊へ信心で行くかしたやつ
三河からきつゝ馴れにし門へ來る
十德の雪打拂ひうちはらひ
明日も來たく成るもの木村よみ
三度目は張良からッ腹で行き
人立をはらつて赤子内へ入れ
人がらをぐつと見下す大三十日
金の有顔がけいせい上手なり
浦島はかくても書いたやうに成り
嫁に花もたすあばたの待女郎
塗りこめた曰く左官はしらぬなり
運のよさ土手へ來る迄男なり
御ふられあそばすげなよと奥でいひ
りんじうをほめ／＼藥禮受け納め
ぬえ時分迄はわる氣のないをとこ

かぞへ日に杓子當りがいゝをんな
出は出たが二條の后立ちのまゝ
それいはぬ事か抱いてゝだアらだら
あまい酢でくはれぬやつははつ鰹
吉田小僧が命日にむすこ行き
まだいきが有とたいこはつきまとひ
當日の祝儀八月すさまじい
子を捨てるやぶへ息子は金をすて
人よせにぬりたつて居る旅の留守
女房に恥をかゝせるやまひなり
柹の木の下へ氣付を持つてかけ
主人相しらずめかけは色をもち
なんとちるゑがとわるい知惠を出し
いんどうをわすれたやうに和尚いひ
松過のけんくわは暮の相手なり
三人になるはぢきさとしうとばゝ
それは氣の毒と道から醫者かへり
めでたくもましとかん病あきはてる
梅はよんだが山吹ははぢをかき
あら世帶しかしねざめがわるい也

時々貌をちよびと見るほれたやつ
七文字へらして客を追かける
二三俵のむとぬけてくはやり風
くらがりをこそり〳〵と下女がいろ
中秋の頭大ごらを愚息うち
よし原も市の仕込に文をかき
あはれむべしす一分にて雪にあひ
いゝ男身の毛もよだつ文が來る
鍵ひねくつてけんぎやうにじり寄り
中將碁覺えて居るが相手なし
そろばんを出して三度目止めにする
鬼子母神などを賣るのはやすいやつ
譽ことばそばにまじ〳〵敵やく
じやくめついらくから賑かなところ
櫻へもやらぬと女房でかしだて
目つぶしを後家百八を持つて居る
よし廣をさして貞盛おちをとり
奥中のよろこびめかけしつをかき
けちなみえ坊八つ山で駕に乘り
文初手の一分を出したふといやつ

生酔にげい子歸つたぶんにする
小間遣ひ二タ人そろへて三分なり
しうとめはねこだと仲人出そこなひ
やぼなもの角兵衛及びくわいらいし
居候いんぐわと子供きらひなり
魚店にこうまんらしい初がつを
たてつめてせんかう花火を晝ともし
ごましほの毛うけへたまる口をしさ
花の留守聟つゝしんで相つとめ
首筋ををさへたやうにたばこきり
すごいことばゝアこよひのあるじ也
我意趣を殿にいはせてしらんかほ
みんな見なくし拍子木でをんだされ
目に立つ疵はかまくらの權五郎
金屏風まだあそこだといふ道具
うるしやは外のゝ字は書かぬなり
むりないけんはたましいを入れかへろ
うけ出すといな父で候母で候
百とると首がないから川を留め
まゝ母のていしゆはどれも少しぬけ

中の町なまけたやうに腰をかけ
若死をしあてた人は小松どの
女人成佛四郎兵衞へいとま乞
小便のならぬを賣るは小間物屋
うすにめす迄は火の中水のそこ
行平の噂はたッた二タ人なり
さじの柄で妾をのける御大病
引け四つがなるにけいせいほれ殘り
一分づつおれにわたせとこりたやつ
傘でこも追欠て行くごくこん意
とうなすの天井をする下戸の内
もりあてた醫者はほどなく病入り
錢は通用せぬやうな中の町
仁王さまなりに似合はぬおぐし也
手ばなしで川中へ出すいゝむすめ
いも見ざるまに茶代共置いてにげ
關守は二度夜が明けて大さわぎ
土用ぼしみすぼらしいが嫁のよさ
味噌こしてからは岡埸の袖の梅
またぐらへ秤をはさみ糸をまき

關東べいをなぶらんと公卿出る
百人一首天神樣に氣はつかず
どつかどう戸棚へしやがむ一大事
吉原でいッち高いはばゝァなり
客をとらまへる時には一文字
殿樣をおなかへ入れてねだるなり
刋取へおもたく渡す恥かしさ
有ッたけ着たとは見えぬ仲の町
新らしい出ばを息子はかんがへる
仲人を眞向きに成つてあそばされ
船に乘る時分正味の高尾なり
朝喧嘩となりの芝居まで邪魔し
酒呑みのきうあくの出る土用干
あの後家は堅いやつじやと色がふれ
評議まち〳〵さらはれた娘なり
吉野丸どたり〳〵と堀へつき
筆まめな得意にこまるかし本屋
情なき一言嫁はふだんきゝ
天蓋のやうなを和尙ねだられる
馬士の新米とぶへたれて居る

行燈へ針はよしやれと和尚いひ
市二日突出しの出るやうじ見世
息子の手屆く所に金はなし
神道さじゆ道の米は雪とすみ
大黒屋市兵衛ゆだんせぬをとこ
園はれの母ねんごろにゑかうされ
亂れ矢の中を白齒があッちこち
なかぬやつめはしやば中に借りだらけ
腕おしの地ごりのやうな疊さし
俄雨箸も持たない乞食なり
妻戸見て殘つたざくろ喰人なし
まんぞくに產むと親子でをごるなり
たゞの名の女しんぞうこわいなり
内に寐た夜を女房にかぞへられ
駿河町食を三石一斗たき
かぶらずに來る女房は小附食ひ
そら色は禿の目にも靑く見え
きついこと男にせずにつれて出る
富士の夢丸綿ぬすと乳母判し
玉むしはあぶない役をいひつかり

がた〳〵とするさんまを燒て置き
かつ込みそしやう斗有るまつがをか
雨だれは首を仕廻つて通りぬけ
とゞめをば餘人にさせるさじかげん
眞向にかざし木具屋はへいで居る
三河から暮のきげんを來て直し
やんごとの有つるら斗貰れ殘り
一箱を息子段々輕くする
いんぎんにいつて尺八ほどこさず
なまぐさくないを酒屋はむすび付け
大風の跡に萬歲かしこまり
嬉しそうに抱へて女房質屋出る
わびことに衣の見えるむづかしさ
切るの突くのとおどかして五兩取る
きついこと病後のなりが道具也
傾城のうでに俗名きりつける
一日は蛇の道になり衣紋坂
あみだへ參る娘錢ほどひかり
御免駕さゝいな用もいためつけ
出格子が立派に出來て山師めき

皿へ手を當てゝ時宜する暑氣見舞
ひとつの利劍扳持つて神樂堂
木に餅のなるほど目黒にてすゝめ
綱わたりすると高尾も玉のこし
御屋鋪があるとそへ乳をゆりおこし
牛ざきを外科りやうじする氣の毒さ
四ッ人を息子いかして遣ふなり
代脈の因果とけふは不出來なり
草市へ目やにだらけな顏で來る
妾が兄事おかしくも鞭をさし
献立へ又ふりかへりこけをふき
娘の貌見せもあたりはづれ也
才藏は草履けんくわの中を出る
引け過の初會なまいき過ぎたやつ
片桐が爲にはちや／＼のつぼね也
いッちいゝくせの生酔詩をつくり
さあばあ樣御出だとたいこのき
大御無沙汰とゑ樽の跡へ來る
肩で風は切るが刀ではいかず
わづうかなぞり／＼をする恥かしさ

腹斗りかしてりや妾いゝ女
行くもんだなといやすけんうさアねェ
くらへそばへてみかどさん／＼
品川のげびにはつらがしやくんでる
鰐口へずつともつてく十五日
淺ぬらがふざきあがると遣手いひ
どらのかさ秋はどつどと上るなり
ふさつてゝをねばをとつてくんな也
不屆さ晝寐の顏へ論語當て
なんの因果に大名に請け出され
しづッかなとこで仲條時行なり
美しい顏をふくらし船に乘り
金持を見くびつて行く鰹賣り
旅籠屋はちつとゝいへばちつと成り
うす雲は當世高尾は古風なり
一ト聲でわれも／＼と貌を出し
す一分は用向きの無い中の町
横しまな美食などする樽ひろひ
休めもうよしといはれてつよくもみ
はらわたを入れかへにするさかな賣

かげまなど居そうな所いろは茶屋
九十九人は親のはらから生れ
ひんの盜みは大黑に目はかけず
朝歸りだん〳〵母へ火がまわり
時過ぎ時きたりよう〳〵と來る
ふみけして禮いつて出る雨舍り
傾城をつまらなくしたいゝ男
つれをはぶくはこんきうな女郎買
きついせき乘物町へ嫁まがり
ゑぼし大紋でさんまを二つ買ひ
御后を芥の中でさがし出し
何となくにくいはよし原のばゝア
元服の仕着せ松坂こへたなり
ほうそうでびいどろが本當に成り
たれどこが有る迄ころり〳〵なり
はしり大黑を和尚はくやしがり
ゑちぜんは一生おさな顏うせず
こわい事こたつで餅をつく氣也
脊中にはめつたにすゑぬひとり者
す一分は吟味しぬいた金を出し

我が内の入牢馬鹿げたやうに見え
じやうがこわいと捨てらるゝ松洞寺
欲の世の中持參に先ンがあり
ぞうにと素麵二百が物は喰ひ
のし餅を着物のおしにいゝ仕廻
猩々でからがうたいで呑みにくい
我舟へ船頭留守をさせらるゝ
大そうなうろくずを取る熊野うら
音のせぬどらを此頃和尚うち
大江山出見世の亭主ふりよのけが
しりで穴上手に明けて人を入れ
さんげ〳〵借金で參りました
なさるともいはず御手がつきました
引けるのにこくら〳〵と店ざらし
どうしなんしたとほたて貝へいれ
小木の花見いたつておもしろい
おれは〳〵と斗りむこ花の山
あゝしわくするのも伊勢屋虫のわざ
まだ御呼出しはないかと藥とり
膳立を崩して椀屋まけぬなり

大丈ぶおめかけ腹にあくまなし
大不了簡ゑて吉をむすこ入れ
女の道のくたびれは尻に出る
大あばたこんどもくなし三十四
御夜づめが長いとすけんどくをいひ
くらがへを追詰めて行く小間物屋
藪醫者のかげで念佛講を取り
むすこの耳は馬つらはかわづなり
ひだるいにまづい物なし破れ傘
素人にや横ざけのするうなぎ也
とち蓋を見付て下女は隙をとり
御しんぞの出ぎらい實は是がなし
坐禪くわんぼうの地に紅葉はいかに
船をしぞ思ふ吉野の御延引
藤を見ながらにわづかな渡海也
きさらぎは寐て卯月には立て居る
願ひごと有つて四つ手はしづかなり
おやぢよりまづ見限るはたいこ也
しんぞうがしかると禿眞似をする
門禮はよこさぬ奴をねめて行く

おふくろがつッかつて置くなみのごら
後生をやめてやき餅にかゝつてる
定紋であたりをかこふ能い花見
江戸へ出てゑぼしをしばしかりにきる
三度笠あれだ／＼とゆりをこし
けいせいもあたりはづれの秋が有り
爪音はかんじばち音うかされる
後家の内男の聲で顔をよび
ころび出し糸屋は古いかけもとり
呉服ものつりをしながら賣るもあり
せんぴやうは艾のからがねはんぎやう
あみだを賣てしんぞうを買ひに行き
てん／＼にあそぶ穴ほるいそがしさ
ろうへ貌出して持參を母すゝめ
美しい嫁から財布持つて居る
三年過ぎてあま店へ縁につき
大黒はぬすんでばちにならぬもの
大口に八文が賣るなづなかご
ごく無理なだめさしに來る切落し
初鰹玄關をふまぬざんねんさ

けちなやつ九月の十五夜にうせる
大師から觀音迄はうそばなし
わるくふりますとぶらりと角力取
せいろくが度々におよんでそこがぬけ
中の町立はだかつて年始なり
月々に替はる上野の札のつじ
ゑゝしまいそれつりよこせつりよこせ
きたァないなりでおはぐろ賣りに來る
何といふ氣だかさいけんおやぢゝ見る
先(せん)のていしゆがよつて來て恥をゝかき
うそを書きつくしたおくに月のこと
のちの四つなるほどけちなつらだはえ
貴公をまつこと久しと二十軒
仕立屋にけだ物の有る祭まへ
春三夏六に娘ひなを出し
ちゞれ髪げびた所へほめられる
吉原で初めて一のふりてなり
首二つうけ取つて生醉はたち
油壺ぐれんねた刄をあはせてる
中ぬきの中にこま下駄ころんでる

寐たふりのしぞんごこのか上草履
まよふまい物かひッしと並んでる
高なわ迄は釋尊の御弟子なり
大黒は五かいの內のひとりなり
小判のはしと中をちをあるき煮る
納豆へちりにくはしき所化が付き
假りに女とあらはれてめしをたき
よくのかわ張さけそうなばゝァ出る
盜人の目に花のさく土用干
ばいやッてはしごをあがる大一座
娘が付でもらひてなし百兩
もし旦那々々と四つ手かッちかち
母門(かど)で大腹立てござるぞよ
德を取るより名を取つたは高尾
舞ふて見せるによこしなと天乙女
もの着ぼし客わざわいにあはんとす
巾着と遣り手一所に口を明き
瀨戸物やぶく／＼としてあらためる
つぼねの年明き甥や姪にかゝり
十一番目ゑぼし着すでのこと

くれの文口やくそくをはたるなり
若女形實惡を妾つとめ
鼻からけぶを出しながらふいて出し
ころしたもよこせば藪醤よい仕事
花でつき合て置いたとそ引出し
一本の木立ち屋敷の名をひろめ
長つぼね腹にたまらぬものを喰ひ
新五郎うはつく筈さきでござり
歌がるた人の丁場を嫁あらし
つな様といふ文高尾かゝぬなり
やろうの天狗子供にとりまかれ
ひすべし〳〵と源三位に御意

八月二日大雪としちやいひ　文集
寐すごして嫁梅ぼしを貌へあて　洗車
薄氷をみちり〳〵と伽羅でふみ　門柳
松風を有髮のあまで三年きゝ　玉章
ふせがねに蓋をして置くだん義僧　芳蝶
かん病をねめ〳〵しめる糸さなだ　麥雨
ごろぼうさたがうんざりと平非いひ　洗路

やきもち坂であま寺の道を聞き　窓梅
なせ教へないよとしめしかごを出し　柳雨
御夜づめに梶原が出て大さわぎ　花雪
にくらしいものは女のこんのたび　紀原
生れたとつれるさ中へよびに來る　鐵炮
出來だての貌でおひるを嫁はくひ　豐好
大當り口上首をふるばかり　文集
むごいやつじやのほねをかす俄雨　如雀
またもとのさやへ納めるばかてい主　芹丈
たゞもろふばゝアを遣手とはいかに　紀鳥
人にほれべきをべらぼうぬにほれ　狐聲
たかをくゝり過てきられなんしたよ　文集
いらぬ事持參ふたッつ三つかくし　未學
なま松葉あさつぱらからしうとたき　龜遊
くすぐッたがらぬ子を持ばかてい主　夢中
けふは引わけ見ずとてもしれた事　枡水
船頭をまたせさうろうのあぶら虫　頭照
そのやうにたれにされたと下女が宿　紀鳥
あつけない遊びねにふしとらにおき　川長
廣こうじ武鑑を見るのににぎやかさ　芹丈

大海で土はじりするうら丶かさ　和國
借金の穴へ娘をうめるなり　文集
京町へいつてもはりはつよいなり　未學
つらい事一年おきに嫁ふくれ　和國
百人のあたまの上にしつけかた　同
むごひ事むす子のそばにからす猫　同
ぬかるみへふんごんであるやす火鉢　車道
新造のあげづめむしろやぶつてる　丸水
石町へ内裏をうつすにぎやかさ　同
ひなしかしうせたでまぐろ買ひはぐり　青峨
いやはやきのごくがき大將ふられ　芳蝶
もてねヱでどうする物かやぐ承知　雨譚
くろちりにひとはりぬきのしらみ也　歸朝
内のものとは合口とたわけもの　青峨
新枕からすがなくにのつて居る　五連
はづかしさ尻ッぺた中(ちう)あざだらけ　狹衣
腹のへる藝にむすこはあきがくる　同
三會目金のへる木を持つて出る　同

薬十評

笠と下駄おッつかッつの御大祿　丸龍

一曜が六萬石の御高なり　芳蝶
雲のうへだから御門(もん)も月日なり　川長
ふじ山がなければはつち坊主なり　鐵炮
人げんのたけりらうがいに妙やく　五連
ふきか丶るやね屋柳をむすび上げ　寸魚
ま丶ッ子にあてがつて置くおしの蟬　龜遊
甲斐の國まで白むくの裾を出し　川長
見手が多いで三月が嫁くらふ　青露
小兵でも坂東一のぼさつなり　如雀
時鳥月をかすつてないて行き　紀原
おしげなく嫁のまくばるかたみわけ　五連
根強いとい丶そうな國甲斐駿河　姫小
中入後源氏車に高尾山　川長
日にやけたごよういせもの語する　洗路
三年立つてから嫁もじまへ也　雨譚
御先まッ白と四つ手で息子かけ　露舟
ほころびを笑ふは内義ぬふ氣也　芳蝶
初雪やひとりころびと女房よみ　和國
氣のはれた佛事三月十五日　蜃虹
女郎はつけ廻し客はつけのぼせ　鐵炮

稲づまはくもをゑぐつてどつか行き　聞之
傘と下駄及びかつぱもかりてくる　芳蝶
氣にはかけられなとかける事を云ひ　丸水
ゑこういんねはんにねこもみえる也　鐵炮
わらでたばねた嫁の居るい丶天氣　川長
さむらいからやみ付き息子かよひ　丸水
百の字があるでしまいの御歌なり　狭衣
かくれんぼ嫁のするのは大さわぎ　五連
升わなをひるまかけとく中の町　青峨
亡者のこわいろをきくには水をむけ　玉章
星入りの女房を息子持つ氣なり　石斧
四郎兵衛が昔居た所かなものや　夢中
百兩で綿に包んだいもが來る　如雀
なんだをぬぐひよくきいた／＼　枡水
大きなどらは春の笠秋の下駄　芹丈
しもばかて下る三日のかみがかり　鳫古
錢はうへのでかね持は芝にあり　丸水
勘助を女にしたを暮によび　未學
はらい扇子箱見たをしはじめ也　丸水
氣のぬけた物はひるまの四つ手也　狸聲

女房にかみなり門で出ッくはし　露舟
廻り燈籠はおいらだと素見物　川長
女竹から男竹へうつるいそがしさ　百喜
今戸では人間鬼をかまへ入れ　夢中
浮草よりも質草はよくながれ　川長
宿はづれさるのせなかですひつける　丸龍

和笛評

詩ではくわん晋碁を出せば文殊なり　川長
右左ッ水と卿とで名が高し　和國
九躰そろふと一トやしき魚鳥留め　洗路
ひッかりと鳥かげのさす雪の下　門柳
めのさめた人が名歌を丸くする　窓梅
さてよくしやべる獵師めだと樂天　雨譚
井戸ばたの櫻でお秋名が高し　潮水
御法から花ちる里で大一座　箕山
御納戸金がよし原へ三度落ち　雨譚
極樂の道のりほどの句もゑらみ　丸龍
本庄のそば後に芝のかゆを喰ひ　雨譚
疵ものにひどい直段を其角付け　石斧
名月の御たづねものはうつくしい　如雀

じたらくにどや〱にげる都落　歸潮
からかさの内で庄屋は拜見し　百菊
大白月をつらぬいて二度おごり　雨譚
島原は名歌のぱつとしれる所　和國
三會目さんとおやまの如く也　文集
帆柱の木やりを殿ははがゆかり　窓梅
蚊にくはれ〱ほたるでよんで居る　歸潮
目出たいとまづ金屏風から仕舞ひ　口喜
二條通りを白丁の追人かけ　石斧
くわん東で下女上方ではけいせい　一口
氣の毒さぶさた見廻ひに雨がふり　麥雨
琴と三味せん過不及の病出來　芹丈
中の町扇子遣ひていもの禮　清江
箱入の玉川外の國になし　窓梅
七十九男で二十一女　川長
月のはしりを品川で和尙見る　露舟
じやと蚊の出るのは駒込の六月　春魚
猫におはれたで莊子はうなされる　如雀
うでのある内に櫻の歌を書き　未學
ねずの番がてら美濃では物語り　玉章

狼に衣重忠見あらはし　丸龍
ぬるい茶のやうにはいかぬ關が原　雨譚
かわごろもよりるゐのないから衣　川長
ちはやぶるか丶さんやぼめ〱也　口喜
陸奥で名をあげて駿河で名をとゞめ　同
當意即妙は木母寺の山號　麥雨
品の月かくれん坊はけちなやつ　柳雨
松のきざくをあらはして一分〆　川長
つッついて來たをひかれて禮參り　雨譚
こけィらでもてたと咄す川の中　頭照
親の名の次第に似合ふ三回忌　豐好
一升でいくらだといふけちなも丶　龜遊
狼へ犬のついてる御でん山　雁古
しまの財布へ三味線をごせ仕廻ひ　潮水
いやな下女淺間額に作るなり　門柳

追善　玉柳

年ごろ川柳の翁俳諧にふけりて丶としぐ〱萬句合の

御かごからわんさいはれるつばな賣　露舟
新造を平氣で遣ふかゞみさぎ　五鳥
菅江評
萩はうり物買ひものは女郎花　如雀
皆ばゝァづれ五六人あみだがさ　柳雨
本郷を梅やしきにておつぷさぎ　夢中
お妾の手がら門外からも見え　百喜
ねこも杓子もよし原の邪魔をする　豊好
菅江 葉十 評
名はちいさいが氣の廣い國家老　龜遊

寛政三辛亥年九月

催主 芹丈
丸水
補助 文集

批判に及ぶ、その聲謂つべし獅々吼に等しと、しかるをこぞの季秋、獅々吼聲をおさめて世を辭す、今年季秋諸連會して、かの翁の追福のために、二もゝちあまりの言の葉をあつむ、されど獅々吼歿してふたゝび判の詞をくはふる人なし、諸連ふるきをおもふあまりに、翁の舊知三人をあげてやうやく批判に及ぶになん、嗚呼三人よるといへども文殊の智惠の借用も出來ず、普賢ぼさつの乘給へる象をめくらのさぐるにひとし、さりとて捨置んもほゐなく、諸連獅々吼の餘波をしたひて、終に梓にいのちながうす、名づけて玉柳といふ、ころは寛政辛亥年九月廿二日菅江序す、

菅江 葉十 評
柳にも雪をれのあるおしい事　石斧
むごい事役てうちんで乳をもらひ　玉章
和笛 葉十 評
蟬丸に似た人をよぶ大法事　如雀
やれたつな〳〵で武藏珠數をすり　芳蝶
菅江 和笛 評
玉たぼこ見せるたんびにゆるくなり　串柹

俳風 柳多留二十四篇終

俳風 柳多留二十五篇

年々歳々華相似たり、盡せぬ水の言の葉に、柳の老木枯果てゝ此道既絶なんと、時に笛先生なるもの川叟の俳風を慕ひ、是絶たるを繼ぎ捨れたるを起す聖教に叶ひ、翁の撰評にひとし、社中誠に闇夜に往て燈に逢へるが如く、歡喜の美諷〱と耳にみてり、予進で家名喜多留廿五篇とはなしぬ、

寛政六のとし秋　　市中庵主述

御具足へ枝をならさぬ風を入れ　門梯
春雨の御歌吾妻の御土產　玉章
四たび目の勅使は禮に行くの也　文集
秋の田へ白い手の出るおなぐさみ　麥仕
有がたく出る御白洲は親子連　五連
千金の夜なべはおひざもとで出來　龜遊
下馱の上にたゝん事かたきは笠　雨譚
六十帖も紙の入るものがたり　三交
きれ〲によむ面白い歌枕　窓海

僧正になつて枯木に花がさき　一山
おく樣に十も若いので御意に入り　東季
二タ人に足跡ひとり芥川　丸水
おくの客一かははねてかしこまり　丸龍
一日の雛へは桃の實をあげる　狐聲
短尺でする色事の品(ひん)のよさ　豐好
かさをかす家の稻荷で雨がふり　ごまめ
八月の朔日雪と炭が出る　紀原
上ミ方の祭り女のぼくを出し　龜鳥
大一座正風躰がもてるなり　芹丈
兒許まで持ッてゝ嫁はねかしもの　かてう
咲と手のたらぬ太右衞門が中十日　三朝
鹽竈の烟たえ〲十二年　芳蝶
花ざかり伊兵衞も一首よんで寐る　歌遊
くつを冠に藏人は口ごたへ　如雀
一生にめでたき內をはき出され　三丁
此水を呑むなといふが玉に疵　連鳥
束帶の浪人二月下旬出る　湖水
是は〱と母の待つおそざくら　和國
しッぽりと和尚のくやみなれた物　孤雲

てきはきとした雨の降る暑い事　千鶴
二百十文がかさをふきおられ　美德
門の立つまでは風來人で居る　狸聲
二夫婦の内だん〳〵に夜が明ける　吉川
あつちから喰付きそうな松魚也　長故
盜人は虎と熊とで名が高し　香貞
見世をはらせるはばら〳〵扇也　五鳥
猪の逸太樣の御長屋山師開き　文子
白粉で富士を作つて馬鹿を待ち　紀樂
蝶々がとまりなむさんぼうにする　沛舟
丸山でくせつこはせがおつぱづれ　珍鳥
折紙が娘へ付くと疵になり　子誠
酒たけなわに及ぶ頃ばゝア出る　麥雨
大持參でつち其夜にうなされる　五鼠
大どふをこす玉とりは男也　口喜
看病によく來たッけが解せやした　芋先
樫の棒見ると疝氣がはつて出る　紀鳥
油繪の障子を明けてごくをいひ　一馬
竈拂ひだんだをふむ油松　喜水
むくしれる朝顔に衞士火をしめし　湖舟

あいさびへまッかにすくがきついみそ　儘成
歌も句もはの字とまりは古てには　高麗
櫻の毛せん桃に出しておき　石斧
氣のきかぬ人と山吹おいてにげ　南子
遊び所をあんじてる病み上り　邑市
本性で歸るはげびた花の山　詠歸
だろうといふに嫁いゝゑ〳〵　柳雨
其外の月はねうちのしてがなし　扇朝
はだか玉らしくおいらんうれのこり　秀印
叱られる度にむす子の年がしれ　麴志
名の高い子供德利や瓶をわり　若竹
小うりをばいたしませぬとさして居る　百菊
川留にこりて寐覺のそばもくひ　川鳥
ずぶ六の客へ鍬鐮素湯で出し　桂里
江戸の馬田舍芝居でつがもねエ　東鳥
ひッかいたのが名代の申わけ　東湖
ごたばたを見ればかつをと猫と下女　龜水
さばけたおちき勞がいをかたづけろ　不醉
宿下り道をきくうち薬をちぎり　周栗
でエぶ降すと素一分がこまつて居　漏安

小町の手がら洛中へかけこまれ　鳳頭
淺黄羽二重を振つたで名が高し　丸蔦
折鶴にふいとふくれる嫁の貌　姫小
四月上旬に小判をみそでくひ　里鳥
黒猫と小判をむす子詠めてる　未學
ついおまで筋めたつとき大地也　花丈
お妾の十九家老は國をたち　今紀原
はい軍の螢扇の上を飛び　兎舟
西行も野良の時は北をむき　康丸
雷(いなびかり)りまでは玄德はしを持ち　宣川
扇屋の要東江流を書き　左笠
花の雨寐ずにぬつたをくやしがり　圓之
大風を吹かせに娘やどへ來る　東里
さくらより娘あぶないとしによみ　渡柳
醉つたふりでもいけぬもの大晦日　玉如
豊といふ姓を貰ふとひとりまへ　綺席
和尚化して本田となるいすゞ川　顔六
唐からの直段で品がげびる也　澤志
龜の子へきもをつぶしてうそをつき　角香
あはアれなおとであさづけ隱居くひ　霞朝

蓮の葉の上へ書出し置いて行き　鬼鄕
禿にもたせ居風呂でよんで居る　柏之
虎髭のぶつたくりめと長半摶　守靜
閙しくきれ〳〵によむ下女が文　三柳
あれさもうおよしと油手でたゝき　聽山
大門のとびら片々五百兩　箕山
名はたいをあらはして居る呉服店　春魚
禿にも最中の月をねだられる　莞爾
大學に盥の印までも書き　和泰
吉原の袖はおこわじやとめられず　雅情
しゝたけは下女牡丹から出來るかへ　散木
有がたや太郎冠者共傘を持ち　玉章
うッかりとお咄しのやむ時鳥
おめでたさ鐺も長柄も飛上り
桃の花冠へちるのどやかさ
御たいくつ晝夜寐耳に水の音
おく様のおしやく妾のときやく也
花の翌日御居間を毛虫一つはひ
われた田へ寶の水をぶちまける

惜い事袖とひたいに及物也
けづりかけ程は殘して立歸り
羽ものか毛ものか疊束なくとよみ
琴箱よりは椀箱が御意に入り
待宵の晝まで只の侍從也
麥へふんごんで茶びんを欠扱る
霜月のけはひ十月髮をゆひ
太上天皇ばゐ樣のゆづりもの
十兩に目のないやつが點を打ち
春や昔のとてふしから文通
百員のぬけがらを持ち三をかひ
色直し緋縮を着て來る面白さ
そうこうへ首尾よくまたぎ嫁河原
いかして金を遣ふのは時花醫者
もつとこッちへよせといて月の事
年立歸りうつとしい嫁を見る
初松魚直を聞てかふ物でなし
暑い事重ねだんすで蟬が鳴き
數ならぬ身ではくへない初鰹
口上を庵室の戶に張ておき

手も足も出してこわ〴〵禮に來る
おんみつを出し仲人へ返事する
もう六たび降うと下戶は精を出し
越後屋のゑびすやきもの源五郞
黑羽二重でかくれるとしれぬ所
若い時の遊げい役に立つた子房
色紙の序そうめん買ひにやり
なぜでもの娘かならずとなりあり
めつからぬ樣に生酔送られる
くんひんな文字で反物の書付け
叉貝を捨てゝ行つたと茶屋笑ひ
家のまん中に宿札芝屋出し
義貞を娘助成嫁で見る
伊勢屋の花見どこまでも花見也
うんのいゝ嫁ぼた餠へ袖をかけ
雛を一つ賴むと闇でいひ
下女がおもても白々と花の朝
氣あがりがしたとにしめのくずでくひ
とんだ雨だと死師は大さわぎ
あゝらあやしや細見を親仁見る

びッしよりくさりじねんじやう〳〵
ぼた餅を喰つたで首がまわるなり
今夜出た雲があしたはぬたに成り
江戸中に錫をくつてヽ飴をうり
大いせ屋古せを二本百に付け
道具の大きいをくらべるあやつり
身がるに出たちごみがいたしませう
近くの他人湯をわかし腰をだき
旅の留守まよけに里の母をよび
化けそうな傘をしぶ〳〵いせやかし
大坂の金蓮桐が一分出來
辻番でしめを引つはるいヽ天氣
油うり跡で水ばなほどまける
見物左衛門がごうきに邪魔がられ
五十茶をやつぺしほめる雨舍り
にんじんのはいるは安い鱠也
つぶれねェみかん持つてる五軒の子
門口にらんぐひの有る宿紺屋
酒店でほり物をするらんがしさ
茶をきつし尻をつねる代百銅

親椀をたがへす様に信濃くひ
なせあづき飯だと兄は聞きたがり
珍客に女房御用の耳に口
ころんだ子泣出すで猶はやる也
是は大へんと素一分雪へたれ
燒餅を下女はちひさく路次でやき
二十八からふんどしが白くなり
江口の遊女持りやうのちやれ髮
はんじやうな土地箱入の水を呑み
こばんの上へまッすぐに雨は降り
七月六日黄白の鯖が出る
日出度さは月諸共にお使者出る
在五の机に香だのふくさだの
お妾のせうぶ刀は切れるなり
南北に新都の出來る桃の春
よしのから兵庫へ仲人指をさし
行燈へうつさせて嫁爪を出し
しるよしへかりにいにけり金屛風
嫁の酌ちつとヽいへばちつとつぎ
かんざしをしるしにもらひ物すごし

あんまり沙汰があり過て嫁こまり
嫁のうす芋かけに勝つ十三日
笹の葉へ折々からむみだれ髪
せわしなき寐耳に餅の音をきゝ
ぞうげ二本に舟のよるきつい事
髭をおしんでおひはぎに一首よみ
螢飛ぶ下に哀れな扇なり
さア御らんなさいとゐざり玉を出し
腹のひきうすに玉ほうだまされる
箱根から見れば大きにくぼいとこ
人がらな四ッたり一座大ぐらひ
おやぢのは猿むす子のは猫にあひ
辻番をたらふくにする妾が兄
奥行と間口の知れるむす子の代
私儀勝手に付きと三代目
いたい事帯と袴で十二両
せふばつは指と髪とでわかる也
虫の付かぬ内と桐の木をひかせ
藪針醬あだかも蜂のさすごとし
わッちのは蟹ぼたんさとはやるやつ

花物をいはず傾城落手する
來る人に嫁うぐひすやひわであひ
哀れさは土手に火ばちの遣ひすて
大あせでぢさん古着屋ほどたゝみ
こんにやくも鴨に入れゝばひんがよし
秋葉はなふるこんぴらは見るばかり
花嫁をしちやの店でふんで見る
傾城は空言女房は小言也
よし原へそば喰ひに行くきつい事
わらじの儘で川留めの咄し也
百さじきかと見れば隣の役者
いつきかしづかれて柳ばしはもて
近松斗りは作者の一本木
蝶々と千鳥を鶴が引きあはせ
只事と見えぬ樂屋の大さわぎ
素見うッかりひよんとなる代三分
合紙にからかさ落手いたし候
蛇のみやげ女房も赤い舌を出し
あばたでも同直段ゆゑうれ殘り
萬卒は得やすくかへ玉を出し

とんだやつ李下へ袋を持參する
八十九日にきすをもう釣に出る
まぎれ扇を遣つてる玄關番
天文をかんがみ女扇夜着をとき
神樂堂袴がないとまだはやり
はだしになつて立むかふ下手の鞠
素人の普請眞木わりなどが出る
神は歸らせ給ひけり三番叟
八百五町常体の晦日也
しつけそをぬいて禿はどうづかれ
あふれ盃つんぼうへころんでく
うなぎ屋を止めた咄しのおそろしさ
古椀をうつてあんころ餅にする
こんにやくやを構はれ土こねになる
田の畔の時分はけちなほこら也
大だわけ茶みせで腹をわるくする
女房の留主に出て居る火打箱
目を口にして呼出すの面白さ
芳このとうにたつたのを後家は買ひ
村の色おじやるべェかと莚さん

闇はあやなし持參嫁孕なり
九郎介へ白いゆもじで願ほごき
すたる物なし仲條へごせがされ
割海老にたこ婚禮にい丶肴
おもだ丶ぬ枕言葉はお手が付き
干すは夏ぬれるは秋の御製也
象の出た翌日まんしうの御拜領
どこか風吹樣で無い名歌也
大名のつぼんで通る花の山
本降になり御不斷に御召かへ
御立身さゑん場こつぱだらけ也
今朝の花見がぬれやうといらぬせわ
供奉の官人松の木のわきでぬれ
羽二重の腹を木綿で六月すれ
若死の鶴上下で料るなり
暑いはず花嫁小袖幕を打ち
仲國が行く道すがらさわぐ音
初めの姿引かへて禮參り
色事の願辨天へ座頭かけ
大相な庭籠さくらを植ゑて置き

お高ひ御用を女郎にたのまれる
外の木に泊る鶯げびるなり
見しや夫れともわかぬ間に嫁隱れ
德の有る本道は苗字がしれず
とくほんの藥禮丸い一分なり
母親は子ゆゑの月夜にもまよひ
京都でも不沙汰の門は横にふり
野がけ道すくもへ銀の首を入れ
席正しからずとまでの安見合
其時分ぐにや雲といふ太夫出來
面白い雪見は扇づかひなり
神木の寐鳥のさわぐおそろしさ
ひとり娘だとかへつて犬が言ひ
すもゝはやつてきなさッつろとじやすい
うぶきたひすゞめを二枚ほどたゝみ
大根が出たで盗人かぶじまひ
雛が膳米屋の隣さてこまり
歌がるたかいてとつてはしらすなり
とんだ花火をうれしがるおそろしさ
勘右衛門よしをからして鴽をたて

すまんまをたべさせ候と里へふみ
藪いもの見舞張子の虎をやり
尋ねわびいふくもぼろんじとかはり
軍に負けてめがねをば鼻へかけ
村ぶげん娘が迯げて芝居じやみ
つれ〴〵はいゝがまゐらせ候がきず
ほつ句の人倫ふぐの酒もつて來る
傾城及び百姓もくろふなり
羽團扇であふぎ馬さまきついもの
君命をそむいて奥で譽られる
あつかいが濟んでひなたへ二タ人出る
二階の窓にやごとなき盗みもの
てうちん屋やすい女郎はしらぬ也
せんべい屋斗照り降りなしにうれ
ねだられて戸棚へはいる大坂や
彌左衛門からゑんをきるてうちん屋
よく茶にも酔はぬものだと持遊びや
咄し聞きたさに築地の餅がうれ
遲松魚短き足で伊勢屋買ひ
酢だそうだしんぜ申せと女房おき

雪見とは馬鹿々々しいと信濃いひ
吸付けながらあい谷中でござります
ほれ薬佐渡から出るがいッちきゝ
朝寐ぼうかけ直を言つて起される
いたづらをしたか後家亭でからげられ
書かぬのを踏臺にする奥道者
藪から棒の出たとこは小ぐるす
鳥籠へ蟹を入れとくめたかうり
せりといふものが出來たとけつの民
そばの客かむ内ふたつ明けられる
千早振ばアさま正五九月來る
御尤様と御殿にこしかわら
地ごくのこう痲おく澤で土用干
跡くさらかしの友達親仁入れ
着込はい立て春屋は飯をくひ
ふげん様ぼんぷへむきのよい濟度
素見物かはせりや見事買ふ氣也
かるゐ澤絹三疋のごらをうち
夷講耳をすぼめて信濃くひ
また折もござりましやうとは半吉

かんじんのうまみは式部書かぬ也
千年も言おりになる放生會
名が折れてから名の高い杜若
法眼の屏風法眼明けて入
きつとしたかたみ古券に昆布そへ
するが町一ゑん是を領すなり
咲くや姫俗名お藤さまといひ
目の有さない紫衣の出る大法事
膝や手をはたいて翁かへるなり
むさし野で虫をあきなふ繁昌さ
不沙汰言譯もさせた名句也
旅日記八日目に付く杜若
聳とさは無言でかわづ經を聞き
追善に柳の枝を手向なり
亂拍子聞えぬほどのつよい降り
萬歳が袖にあまつて嫁はにげ
まだ若いからとゆゐ言きれい也
鎌倉で今道心を母尋ね
甲の座へ大屋のすわるあづき粥
醉覺え四十五人が申わけ

是で蚊もなくなりますと其角言ひ
初茸は後ロ姿を見せてうり
音羽の瀧と言きらず針が出る
鼎が歸り典藥で大笑ひ
三浦より姿海老屋ははねる也
曾我になる前春よひに梶原
ばせを葉へあらしのかゝる古跡なり
中央にたんざして居る美しさ
嫁の禮巳午の間にやつと出る
歌人の知らぬ夕暮にむす子行き
ちぎりくむんの木上下の大ふらち
織物は嫁歌までが上手なり
燒香の初筆上ミ下あたらしい
水姓の字をくり出して孔子付け
顏の墨嫁おちたかへ〳〵
善をせんとし振袖で三分也
色悪の跡のやつしは鍛冶屋也
袴着を夷待つてるけちなやつ
かたうどなしにおらんかいまでおかし
美しい尼二三人しやかまいり

百年跡に泣いた日に魚類也
女房はだんなをもしと付けておき
早い書出し傾城の暮の文
商賣に身を入れてから夜具が出來
金のわらじも有るだろうと豆腐屋
まッさをな顏踊子の病みあがり
引き物に見あき長與山と出る
身をしる雨がいつか止み後家作り
花かんざしをぬいて出る一ばん手
中の町忌中の札のないばかり
心中であらうと芥川で言ひ
ぬか袋目口いぎやうに動かせる
くわくよくに備へ師匠の花見也
ふッわふわのれんに螢來てじらし
太郎からべらぼうとなり川をこし
朝鮮垣に指をくむむすめ形
まだおまめかとは聞かぬにおとる也
具足のつくろひと歩行く前九年
木馬にて立がけをおふ舂米屋
結ひ直すたぼからさんびからす出る

夜伽のゐりへひィやりとへぎ生姜
あら面白からずの雪一分もなし
闇仕合ひ冬も蛙がないて居る
失禮なあいさつはおまへでもい丶
むす子の花見内を出る名のみ也
鑓かつぎ連れて家中は使者に出る
向ふより來る小てうちんそばや也
たま〳〵の芝居つうじにやたらき丶
まあう丶といひなせェなど正燈寺
振袖を着たすつぽんに引かへる
兩替屋六十四文はねのける
よろけほふだいにしておく野掛道
やけふこゐ三味せんひきがまぎらかし
千金の日を桃の木で子はおしみ
奥家老髪の毛の膏藥をつけ
着せかへて母おかしがる足のうら
惡たいの買喰ひ笞をあげてする
夫婦して雪打をするとんだ事
藥鑵西瓜をこきませる法事客
一の糸斗り付いてるはらひもの

乳が黒くなつてみのわへちつきよさせ
どッしどし來る足音が三分也
死はぐれ大日本と書いて見せ
卯ほど嫁も夜なべのひざを出し
さしつこの弓がけをかけて舟をこぎ
ねじめたがつてぺんぺこをならうやつ
雪の留守こたつで女房まふぐくひ
隱德をほどこすで下女い丶くめん
時は得がたし留守の內留守の內
雨戸にあひせんあひくろ丶やきもち
下女鴨をなんにすべいと錢でとり
一躰分じん二三人横に行き
門松にみそをしらせるしわい奴
大石の中にかるいしひとつあり
さい日の矢とりしりだのあたまだの
大日坊がいきてるとてびやうゐ
あかるんだうんさいで出るやす大屋
大男白ふんどしでぬるく見え
げい者どらをうつたのも百のうち
蓮堀に氣を通しやなど池の茶屋

毛ば立た三冊の秘書かゝりておき
にへゆよりひざくしたのはかいの國
あほうきうらせつしたのがはきゝなり
振袖のほまれは梅に時鳥
笹蟹の振舞膳をするゑて待ち
萬歳びつくり一休に出ッくはし
御稱美になま物の出るしゝん殿
奥樣は聞きお妾ははやくくひ
琴の音の止む日七種爪をとり
音のした池へ翁のかげうつり
折鶴に斗り息の音嫁は出し
ひィやりと子の筆をもぐ金屛風
爪の長いは琴よりも三味せん
先箱で出る助六はわり下水
思はずしらず貞室は一句出來
譽られる度持直す日傘
式日の手紙日付けの下へ賀し
櫻からさくらへこける面白さ
お妾は柳左久良をこきつかひ
ひいきのさたとして團扇嫁はかひ

夫れ見たかとつて太公盃を出し
たいこ持じゆずでおがんでたゝかるゝ
さァ登るべいと賴義御がいぢん
酔を鹽茶でさましたは十四日
山の芋のと大木戸のよつでいひ
草餅のひゞき冠が横たはり
麗かさ垣根のひたし物が出來
大學や撥山日向にそつかへり
十三日うたが長いと叱られる
白たへの中をかすかにふぐの聲
繪に書いておいてもすんだたんす也
二十つきではふか也と子の曰く
結納が來たと桐の木はつゝてる
茶びんの火かりにかゝるを下戸おさへ
素見物首數を見る不繁昌
丁寧にさかもりをする御膳のり
分地へは從五位のふくのやつを出し
母の雙六盤象牙ぬけている
おそろしい十七文字はあたご也
能く有る扇富士でないやつは鶴

草摺のうでしつけんの内へ入れ
きつい事俵が米のちるを出し
えしれない文を干しとく三丁目
うッかりとたいこ一分ではなをかみ
禿菊糸をきらせるとんだ聲
少長が死に奥家老耳ふさぎ
打拂ふほどにお内儀夜着の綿
色事に女房やきめうばんを入れ
べらぼうも有るものしるこ餅をしひ
伊勢で髮おき高縄では袖とめ
夕立に出るあどけない舟大工
あかんべいさせて目醫者は療治する
手や足でしいられたのは四天王
暑氣見舞丸づけを十いせやくれ
たゞくさを下女にうたせるおふがつを
すいくわで歸り女房おこすなり
ちとおしへやうかとか代る下手將棊
花角力取らふと天狗日待也
氣の毒さ家財ごふんて書いて居る
百鬼夜行をこしらへる雨やどり

お土産に是もなさいと飛車を出し
ふげん様一たびひぢりめんをしめ
白むくをぬいでゆかたで床へ來る
通俗の小便無用鳥居なり
古風なほれやう一心命なり
びりついてわれはわるかれ人よかれ
お祭りがいやさに美濃へ嫁入する
千金のあかりで式部夜なべなり
百のうはゞに駒引のあるおたか
たゝくとばちがあたるよと金屛風
暦見て机をなをす長閑やかさ
美しいうけで國からしばらくゥ
錦着る所存で紅葉わける也
伯父樣が常の座敷にして歸り
大相な竹箒出し帳をうり
なんとよごれはしまいかと翁いひ
羽子の子が松へとまると嫁はにげ
はね虫に妾まぶたをすはせてる
こしもとのいたづら狆を富士びたい
鶴に蔦こたつの上に二三さつ

嫁の灸もうしまいかのしまいかの
門松はさしに彌介を荷ふ也
たいまいを黑ちりめんで嫁つゝみ
嫁の指四五本にうごあいしらひ
たばこつぐ手へひイやりと三會目
かべちよろにおれがかりると野掛みち
上田の古着も大坂でひさはれ
十三日さゝッぱほどのなますなり
嫁のおもては白々と十三日
駒形をかけて茂兵衞を親仁見る
土器に下戸むすびめをとらへてる
下戸ならぬ男にこまる花のくれ
たてよこに内ちう歩行くいゝ女郎
酒呑みはまんぢうの子にしめられる
門松に蕪のこつふをくゝしつけ
疊さしあたまへさびたもめん針
三會日生れかはつた女郎出る
三の切のしゆかう仲光がはじめ
さいもんをかたらッしやいと童子いひ
市すぎの月が遣り手の顔へさし

眞木のぬけがらを買ひ染物をする
時まわりおじぎをしてはしんを切り
ばかへといつて笑はせるあふむ石
茶わんは承知だからうたは御めんよ
ながれのするゑのちうや出る柳原
上下が一度にわれる鉢かつぎ
のどやかさ空にくじらの聲がする
てんや野にあれど染まらぬ口をしさ
てんやくと局さゝやくおめでたさ
一町は俄にかはるからかさ屋
並んで居ても三分ほど高いなり
七本は素肌でうごく嫁の指
お夜咄桂馬香車は歸るなり
はづかしさ富士の裾野がひろく成り
此ぬしと書いた書籍を娘もち
うら富士の歌をぶこうへ書いて遣り
桐の木は村の娘とおないどし
むごい事よくに目のない所へ遣り
鳴いて行く下で飛魚いせ屋かひ
しやうかちの官女袴がじれッたい

市中菴の舊友笛老人の撰紙をあつめ、家内喜多留の秀題をかりてはたちよつの巻に繼ぐ、しかも川翁のれん葉、高名の叢草にして春陽に萠るが如し、予此道くらくお先眞平蒙ニ御免ヽ筆を折て爰に柳のはゞかりをこふ事しかり、

子　誠

俳風柳多留二十五篇終

俳風柳多留二十六篇

今や俳風盛んにて柳子之四方になびきなびかせしより、くさ〴〵の姿も此正風流に延臥題にかゝわらず、一句言葉廣く森羅萬象貴賤となく、かみはあめのみまご愛する姑、しもは賤が家の賑ひを御詠に知給ふも皆もるゝ事なく此風雅に止り、翁の樽之數廿四篇に滿て雪月花之盞を納んとし給ふを、猶長かれと諸連子てうしの替りめを和笛老人へすゝめて判を乞ひ、五々の篇よりことしも一つおさへてつぎ著す言を、四方の雅叟の筆を勞せんもむづかしく、頓て墨を費す者は

星運堂　菅裏

名のしれぬ花で伊兵衞は呼出され　松歌

花のまくそつと覗いて叱られる　儘成

千金の色の見えない不自由さ　鼠聲

船頭は無雅でおしへる都鳥　雨聲

きさらぎのそのもち月に西へ行き　鼠聲
桃林で蛤のなくのどやかさ　春駒
大へいに賣るは玄關の扇子箱　狐聲
かう向きなさいと花嫁をすわらせ　五連
孝行は霞と霧におやに逢ひ　鳳頭
生醉の餅の上を毛虫はひ　不醉
山吹を出す頭傘をかつぎ出し　狐聲
暮の嫁二棹二月下旬來る　松歌
あみださまにくいばゝアへ爪はじき　芋洗
みなと川菊の流れるおしい事　五連
かねこの十郎びんぼうらしくなし　狐聲
一字づつ傘屋で賣れるのどやかさ　春駒
かんしんへ劒のやうな口で賣り　錦鳥
代句だろうと九郎助の額をほめ　同
たいまいで御庭の雪の寸をとり　里泉
閙が敷春は來にけり豆をまき　柳水
すつぽんと鷺で赤子は喰はじめ　狐聲
七寶莊嚴したのを妾さし　雨譚
鹽引に弓矢たばさむいそがしさ　三交
法眼の世話であいたい替り出來　鳳頭

鶉聞き〳〵手あぶりをこしらへる　東李
頼豪の外は供物をかぢる也　春駒
生醉の突當るたび花がちり　鳳頭
ひからびた餅を萬歳内で喰ひ　尾上
奥方に異名を付ける切落し　五蝶
かんばつた諷御子孫も繁昌　雨譚
ねからよめませぬとこてゝほじり出し　紀鳥
不二の雪あてに川越し一分かり　蘇竹
雪見には馬鹿と氣のつく所まで　錦鳥
かんなくづ蛙と同氣相もとめ　文集
高うは御座りますと出る鳥と魚　三交
ぬかるみへ娘を入れて螢にげ　不醉
ふみつけにした看板を足袋屋出し　柳雨
二十四にたつてくんなとかのえ申　三交
月を仕廻つて天道に見放され　狐聲
女郎の手を引きやッたらに出り　紀鳥
引出しはすうい〳〵と何もなし　不醉
黒犬をきやんといはせて四つ手かけ　枡水
たッた十五兩でおすとあとげなさ　かてう
しほふきや天狗水茶屋にらんでる　儘成

たばこにしようぜと根津の文を出し　鼠聲
あんころを提げて來てもう出るな　窓梅
麥の後チずいきの中で又はじめ　三交
おめかけの威勢は股で風を切り　鳳頭
三階で姫君肌をぬいで居る　尾上
鳥籠の中に髮切虫が居る　三朝
けふも又留守でござると諸葛亮　完示
しんじつさ樒巻きで來る藥取り　樂子
一寸した雨を降らせる太神樂　尾上
そりや蛇と火繩でおどす野がけ道　東李
順の峯入知る人は花ばかり　蘇竹
花の朝寶永山を下女作り　里鳥
もう五年おそいと達磨首斗り　五蝶
女郎屋へ衣で來るは旦那寺　如雀
鍬だこの手で吹殼をおどらせる　錦鳥
古風なる男ふんどしあごでしめ　三朝
内にない物ではなしと女房いひ　儘成
豚を見る鼎なんとか言はいひ　如雀
御意に入るはづ奥様も柳ごし　川鳥
出合茶屋勿論すきやかゝり也　狐聲

銘のある石親分の門に置き　玉章
初の字は七十五聲ほどのうち　春駒
餅花を買ひにやらせて飯を喰ひ　尾上
信玄と道鬼相求めた軍師　如雀
片乳房握るが欲の出來はじめ　儘成
郭公聞き〳〵二タ人討ちに行き　鳳頭
ぬけて出る啌を息子は工風する　狐聲
藪にも功の者明智をころし　鳳頭
から傘と人が花見の中へ落ち　尾上
御いんきよと聲をからして喘す也　枡水
聞違ひあらとうとなの御馬也　鼠聲
本所に二三字京に一字なり　窓梅
禁酒だとおッしやりませと袴腰　門柳
風鈴の短冊讀める暑いこと　尾上
北に金南は絹で橋をかけ　湖水
雲長と宗祇和漢の髭をしみ　芹丈
歌枕だけ興津をば寐ずにたち　偶中
だアれかゞ居やすと歸るかねの禮　紀鳥
雷を這入り稻妻形にぬけ　鳳頭
船頭はへんてつもない松と椎　尾上

たま〳〵の上下供に貝杓子　門柳
袖形で書寐の貌の蠅を追ひ　霞朝
献立にふしを付けては子をねさせ　花丈
かうに成つたと夕飯をわすれてる　鼠聲
屋敷中やうこく忠が幅をする　尾上
馬狩りとてうかう觸れを廻す也　窓梅
螢籠そばに史記だの左傳だの　柳雨
かい名を鳥に聞かせて放す也　窓梅
人程にしぼつて入れる花の琴　尾上
放生會ぬくめた方を鷹は見ず　かてう
三井寺や比良を服紗に嫁直し　鼠聲
燭臺をかりる使に何事だ　三交
暮かゝる軒端見て居る美しさ　尾上
けんしきは花餝りにはから篦笥　蜃虹
苦肉の計略香ばこに小ゆび也　玉章
びんづらゆふたやつかいを二ッ人持ち　窓梅
玉菊へ手向けぼんのうぼだいなり　鼠聲
芥子の花一りん取れば二りん散り　尾上
わるくない足ごめは盃が出る　鳳頭
紫と鹿の子落合ふ中の町　不酔

桃から梅へ一トばんにぐだる也　霞朝
小菊一帖楯にして高楊枝　曙山
駒下駄で生捕を引く中の町　偶中
光陰を座頭の急ぐすばらしさ　窓梅
鳥籠のたかは二羽ぎり跡がたえ　矢正
罪でない虫を花よめころす也　東季
たゝかれて痛くないとて悲しがり　片岡
子を持てしるとはおそいおもひ付き　昔人
いッちいゝ事といゝまさかなどを出し　尾上
そんならしのび爪でもに嫁こまり　春駒
白むくのすみ末世迄落ちぬ也　窓梅
南朝は蘋でたばねた武者も出し　昔人
夏と秋利息のつかぬ金をかし　鳳頭
ひんがしの明り吹けす南風　蘇竹
さくらより鈨菊娘ねだる也　錦鳥
見たり見せたりで一兩十匁　尾上
鬼は留守かとせんたくに綱は聞き　蘇竹
瓜田よりふらちとうふへくづが入り　蜃虹
牛の刀で熊坂は料られる　狐聲
あなたは丑の御としかと吉次聞き　松歌

俗な繪合せ歌撰や榮之也　松歌
鳥の名も替り息子の氣も替はり　不醉
花曇り晝から桐の梅を見る　柳雨
銀ぎせるつばなでやにを通す也　尾上
い丶息子内の朝顏斗り見る　花丈
大そうな庭子錦の堺なみ　蘇竹
千兩の中へ通りをすッとつけ　五連
世をうしと悟つて耳を洗つてる　東鳥
おめかけの妹扇子の二本ざし　偶中
近付の方へ駈出す俄雨　五鳥
白い手で簾をかゞげる中の町　偶中
人面を亂して歸る花の雨　五鼠
六月は銘あり五月無銘賣り　門柳
五月は拵へ六月はつぶみ賣り　昔人
青樓のふた片手ではしめられず　不醉
惚藥二貼國府の中へ置き　如雀
灰吹へ一寸越川嫁は乘せ　五鼠
色々と作りつくして横にさし　錦鳥
口は燒いたか桑名へは一番手　丸水
夜や寒く白魚に出る佃島　窓梅

遠く遊ばずで伯父から所望され　矢正
遊山湯に行くは持たが病ひ也　片岡
仲麿はもろこし團子にて月見　孤雲
鷲の案内でひよ鳥をこえ給ひ　芋洗
三會目あした愚札を呈す也　矢正
神慮に叶ふ飯をくふ伊勢屋也　虎同
旦那は正阿彌供は七厘あみ　美德
盜人を捕らへ母親聲を下げ　錦鳥
柏にくるむと團子が餅に成り　如雀
景淸をつかまへに出る十七夜　孤雲
すゑ膳をきらひ息子は買喰し　竹苞
暑い事釣瓶ひとつに人だかり　里、家
そりや頭巻だと傘を押ッ付ける　東鳥
瓜田へ沓を入れに來る留守見廻ひ　山々
伊勢の留守床やみにする不屆さ　三交
すつぽんの名は飛込んだ時に付け　儘成
綸かけは藁の柄杓で水をかけ　同
乳母が尻はゝばりかねる枕蚊帳　東鳥
長うたへ妾拔折をはさむ也　鼠聲
春の式法事おはり嫁の禮　尾上

上下（うへした）に楊貴妃のある眞ッ盛り　同
嫁の禮おはるみじかに成て出る　窓梅
男の中の豆入りが幅をする　尾上
うしよをひけなどと葵の上の供　雨譚
禮帳に去年とやいはん硯箱　窓梅
碁が濟んで仕廻ふと杣はつんのめり　春駒
雪打に口をすくする花の主　尾上
らにしほになんぞと地下の歌學振り　蜃虹
蒲燒のすじ迄息子穴を言ひ　三朝
太右衛門は獅子太郎兵衛は牛を飼ひ　同
夕べから見えぬ茶わんに薺あり　手洗
又まりをつくかと醫者の弟子はじれ
慈悲な事あいつとあいつ二度に出し　尾上
どの子が目好き古市の踊也　隣狸
筆に手は付ず墨をば賣る所　尾上
ぱひ／＼儒者もゆるすなと始皇下知　雨譚
千代の春近く雲井へ登る也　門柳
難レ有さひくい枕は棚へ上げ　松歌
しやちほこは山と谷とに住まぬ也　東李
佛力で他人の馬にも踏まれず　如雀

繁昌さ開きに行かずに繪馬を見る　かてう
御立身魚に帆かけて乘つ付る　里鳥
千兩で染萬年へ參るなり　東李
紫で源氏を包むいゝ涼み　錦鳥
目が覺めて見れば座敷に琴斗り　里冢
丸いあたまがふたつある秋の暮　莚雪
西海の波にたゞよふ香包　片岡
りんとうの會席書へ札が落ち　湖水
貧學の燈りにならぬ春の雪　器水
甲の座に居るぬけがけの手習子　錦鳥
箸紙を細工はじめに嫁こさへ　矢正
姑が出ると手のちゃむ歌がるた　一德
またおたのしみだと杖で呼戻し　矢正
一日は施相六日はしつて付け　榮桂
兩方に正の字の付く御神號　窓梅
神德は御番組へも入り給ひ　かてう
御扇子と笏で雨天の御挨拶　鳳頭
四角な口を吹き閉ぢて風は凪ぎ　蘇竹
餘の山と違ひ子寶迄も持ち　門柳
他人根生むづかしく書いて出し　叶

藤ばかゝ野分けにひだを崩される　里鳥
法眼の請合ひで濟む御結納　文集
朝起きの鼻へ八重櫻か匂ひ　狐聲
どの子が目好き五月雨の名歌出來　隣狸
やつと雛やしたと神子は初ぶたい　竹二
日にはつた鈴で賑ふ神樂堂　川鳥
爪音で丈けに餘つた智惠を付け　同
御殿にも御寺にもなるよしの丸　三朝
竹賣をよけ〳〵鯖の御使者行き　柳雨
被など着てなまめいた見合也　一德
二つ三つ咄せば秋の暮近し　叶
白酒を雲の下からかへて來る　一德
看板に日月を出し星をさし　かてう
愛相に嫁は一口なぶられる　儘成
三尺の劍四百の元手なり　狐聲
いけしわい女めだなともふゑんじゆ　尾上
世帶道具が寄合ふと松がとれ　五連
彌生とさつきごたまぜの墳の浦　芋洗
はづかしく丸わたで來る伯父の內　狐聲
いたゞいてのんだ息子がいッちもて　柳雨

はやり色かつかちめいてむすこ着る　同
ふんどしもいらぬとむりにもらはれる　かてう
はてずるいやつと女房の櫛を借り　錦鳥
雛店へ素見のはずで娘行き　狐聲
狐にばかされ薄をしよつて來る　三交
身體髮膚とこなつて夜具が出來　松歌
こたつほど咄しの出來ぬ涼臺　矢正
李下の冠桃の木の蟬袋　春駒
講親のあるのはけちなやかた船　窓梅
老いぬれは土塲淨瑠理の茶など汲み　中薬
俄雨取まけゑェといふ身也　片岡
御婚禮おつしと言つて呵られる　孤雲
品川へはまり衣の櫛がきれ　三交
長半坡だにてう斗り二つ出る　曙山
七月下旬あァでおすこッでおす　芦舟
ひまな見世癸にも四十騎の軍　曙山
咗つきのかうべにやどるかよふ神　かてう
沐浴をして蘇生する暑い事　孤雲
御年貢につまり下駄やとてらへ賣り　松歌
貧僧を夢に見下女はかつがれる　東鳥

物置きの錠はぬかみそだらけ也　川鳥
名代に禿にすこし毛がはえる　儘成
腰よりはおれが立ぬと下女が宿　姫小
桐の木を切る頃娘ずいか明き　喜水
香を疵にして店賃が百安し　矢正
秋一は天上はれた御出合　孤雲
細の入る盗人でなしかきつばた　尾上
淺草は高し音羽はふとい猿　東鳥
草庵の返事に添る菊の花　尾上
月に又ござれと柴の戸をたてる　川鳥
けちな啼きごゑと賴政引しぼり　鼠聲
おめかけの歌書細長い箱へ入れ　尾上
看病のやうに寐釋迦の箱を置き　龜鳥
他領まで嫁取上げる歌がるた　芹丈
めりやすを黄色に染める練供養　窓梅
黄金も借貸しのある夏と秋　尾上
張立てのしやうじを破る色直し　門柳
出ぎらひさいふ振袖は聟を取り　兎圓
欲の無い形身手跡が貰ひたい　孤雲
不斷着へつめたく戻る御延引　春駒

跡はさみ箱がおめかけ不足也　丸龍
吉野から法名の散る暑い事　左笠
御地赤をぐつと茶に見る松葉色　春駒
山々嶽々を晴天十日見せ　門柳
けちな呉服屋しッかりと物を言ひ　同
さよ衣やぶつて五兩わきまへる　同
けふの上客とお針に蕎麥をしひ　枡水
じれッてえよの字廊下にあまる程　兎圓
一臘の繞くし卷の女房干し　龜鳥
年忘れ年忌と讀んでしかられる　春駒
蟬丸をとつさまといふ座頭の子　三交
櫻から女房に杉の釘を見せ　五鳥
長いしけばたり〳〵と柿が落ち　梅枝
のッきりがあんじられるとお仲言ひ　春駒
水鐵炮をつるべ打つ暑い事　柳雨
役者の法事石橋や道成寺　如雀
にぎやかさ役者とてうち〳〵する　三交
劔菱の大紋を着るにわかあめ　喜水
まゝ事の世帶崩しも泣別れ　玉章
鵜の豆腐家の娘貰つて居る　孤聲

すわり直されじやうだん〳〵　尾上
御てうあい石になつても又わられ　鳳頭
欲の有たけ開いてとぶ放し鳥　芋洗
美しいばかりの嫁二十七　偶中
雪の朝おのれ〳〵〳〵　我口
あんどんの柱かくしは茶漬見世　五蝶
才藏の向ふへ木藏ならぶ也　狐聲
食に餅嫌ふは雪の料理也　東鳥
いゝ子の振をしてかゝア二分にする　鼠聲
月迫に餅屋は團扇遣ひ也　不醉
嫁菜アかはッしやりませに道を聞き　柳雨
由兵衛を口の酢くなるほど譽める　鼠聲
やれつくな〳〵と火繩ふり廻し　錦鳥
でんぐり返しする傘を伊勢屋かし　鼠聲
虱にたとへかづのこでしかられる　同
世渡りもさま〳〵股をくゞる也　東李
あくぬきを締たので下女かんづかれ　不醉
役者附嫁どれ見せな〳〵　柳雨
隣へ嫁が來ると聞き病み出し　湖水
其名も月の色人を雨度買ひ　鳳頭

艶藏人も即言で落ちをとり　雨聲
汐を汲む邪魔と二色殘す也　窓梅
伽羅佛のあたりで桐の音を尋ね　狐聲
御延引花に一ト雨あつたやう　枡水
花色をしそうにぬぐ御延引　鳳頭
御ふばこへ根松の這入るうらゝかさ　春駒
萬歳の子に道を開くかきつばた　三朝
御幕をとると短冊へ人だかり　春駒
ひんの能い木のぼりをする花の幕　同
花の宴には早蕨の御重詰　松歌
櫻羹を重詰めにする花の宵　鳳頭
梅干や干瓜の邪魔其角する　窓梅
人の田へ水を引かせたのは其角　昔人
金屛風ことしはどれと御手あつさ　窓梅
打つ杖の下へはづれる父の慈悲　五連
夏の夜の碁に一手ふけ二手ふけ　尾上
ひらめの千聲より鰹の一ト聲　芹丈
角田川母がたづねるからと逃げ　三朝
毛を剃るとんだ大きな物に見え　同
下女が部屋大一座とはむごい事　芹丈

旅の留守別條たッた一つあり　不醉
人こそしらね賴政がむすめ也　三交
金と錢てんびんにした御縁日　かてう
雨舍りするに及ばぬありがたさ　尾上
片方は四百餘洲の目をさまし　窓梅
夢の番附孝靈の後チに出來　矢正
不二の歌自力で風になびきかね　不醉
通用のよび御寺號を御建立　杤水
觀音の力で文武勝利を得　昔人
琵琶の夢近江の守に成らせられ　同
重陽はなんにも立てぬ節句也　如雀
白川の名歌能因黑くなり　古柳
二タ所立る外山の金屏風　狸疊
立聞で末世へ殘る名歌也　文集
小式部は地利を功者に口ごたへ　雨聲
神前できの字を五つよんで聞き　窓梅
釋門はむかし武門のあつた所　三交
おもふ壺へは落させぬ師の御坊　如雀
夜なべ細工のてつぺんは駿河也　五鳥
敷しまですればこそわり納受也　里鳥

旅でない歌枕する春の宵　鳳頭
大和の櫻山城で伊勢はほめ　川鳥
御立身なまぐさい風門を吹き　かてう
舞鶴は空色に能い模樣也　文集
つきまとふ狐を放す國家老　かてう
山吹と違ひ見事な梅の花　尾上
一ト御殿稻妻のする花の朝　三交
月の疵直打をしたも名句也　矢正
追々に割込の來る初のひな　五連
御表のおふじは高い顏をする　尾上
糸ゆふのたつ日は嫁の帽子針　狸疊
間(あい)紙が足らず獻立引つぺがし　矢正
江の島はうい物といふ旅でなし　鳳頭
花よめは歯にきぬきせて笑ふ也　古柳
船番所越すうち藝子汗をふき　尾上
不孝の罪で鰯引く天の網　蘇竹
面白くない箸紙を女房くれ　文集
萬歲をならんで見なに姉こまり　窓梅
さアまけてくんなと櫛にほれて居る　東李
河東ぶし杖にすがつて隱居聞き　不醉

朱さゝあらそふ女房ふけて見え　かてう
てェ〳〵をしたらやらふに禿しれ　松歌
駒下駄で酒池肉林の中へ來る　不酔
目薬の看板眉は入らぬ事　雨譚
もうくける斗さゝがすたばこ入れ　鳳頭
又帯をかせかさ河岸の姉女郎　一徳
袂からちろりを出してくらはされ　鳳頭
足の木像を足袋屋は持つて居る　柳雨
目がさめてあじきなく喰ふ粟の飯　鼠聲
はらみ句で點とりに來る下女の宿　如雀
ひそ〳〵と繁昌をする出合茶屋　窓梅
色しやうがかけさりさてはおしの事　文集
桐に巣が出來て御家中あんご也　不酔
歌人は居ながら一チ城持ちこたへ　尾上
桃の花見ィ〳〵張飛引つかける　古柳
我夜具へ女郎を寐かすきつい事　狸聲
猫もあり狸もあるで嫁が來ず　蜃虹
吸口をぬくやうにして嫁は出し　竹苞
山形が組子花かんざしで出る　如雀
萬字屋は草分けらしい家名也　狐聲

いさかひをしィ〳〵碁打中が能し　朴水
三番叟共をならべて高砂や　蜃虹
鹿の書寐を埋むほど八重が散り　松歌
けちな呉服屋勝手から茶を運び　窓梅
御立身目出たくへりし虫の聲　不酔
五月やみあやめは本のさぐり題　春駒
すき通るから召たまふ緋の袴　五連
お妾はいづれの緒よりだかしらす　窓梅
瑠璃の櫻も咲きさうな所也　尾上
俄雨女房は梨子の花を出し　狸聲
歯はたゝぬはず神詠も岩ほ也　春駒
にくい事金をしゆもくでかき寄せる　尾上
何の事はねえ初會は御儀式　松歌
よしの山これより上の句はきかず　矢正
もうよからうと藪入を母おこし　門柳
あくる日の群集は聞いて來たの也　丸水
ぬひはくや鬧しい程しづか也　錦鳥
門徒宗の佛壇を三分で買ひ　狐聲
先生お目がさめたかなさ玄徳　松歌
忠臣は根づよく申す御諫言　東李

朝々きえる美しい不二の雪　尾上
大太刀をぬきそうにしてよしにする　同
糖ぶくろ二番煎じて母あらひ　柳雨
此糸で綴て六十帖にする　窓梅
鼻につかへる飯をくふはづかしさ　五鳥
見かけは光りかゞやくがからッぽう　不酔
目にはさやかに見えねども恥かしさ　花丈
玉の輿橋ちらし蒔繪なり　三朝
五月雨に下女のじれてる火打箱　藤枝
ざさ〳〵〳〵と猫の子に湯を浴せ　湯島
せいたやつ歩てかき立て叱られる　紀鳥
本尊の御名を其まゝ額に書き　鳳頭
源氏繪を蓮花へ書くと哀れ也　窓梅
法官に着るむらさきは殊勝也　尾上
御禊川一チ夜明けると法の聲　里鳥
錢金のあひだに光る彌陀如來　鼠聲
神國は人をだまさぬ琴の音　五連
顔にてりはの色もなくたつた山　尾上
遊女とはあンまりはでな化身也　同
手もつけず折るはけ高いかきつばた　同

椎が本秋は御法(のり)の船も見え　蘇竹
をしい事無常の風になびく也　文集
山では聞いてよみ野ではよんで聞き　蘇竹
勅使までほき〳〵とする孝の道　芹丈
法眼のすゝめ水干(すゐかん)急に出來　門柳
雛の乗物跡棒は乳母がかき　矢正
借金はぬけて外聞わるい春　尾上
朝歸り妹は物をいふ斗り　里家
深林(しんりん)人しらず竹の子を盗み　不背
紅葉から袖打ふつて聟歸り　春駒
相の山泣子が親をすぐす也　五蝶
柏餅椎と松とのあいをこぎ　三朝
盗人を地黄のような目に合はせ　一口
花の數なると冬爪は未だ安し　窓梅
村の嫁路や茗荷を掘つて來る　如雀
夢中に成るはず魂茶屋に置き　片岡
人別をめでたくぬけて名が替はり　錦鳥
蛇の出這入りに賑ふ六あみだ　かてう
しぶ皮をむいてひらりと猪牙へ乗り　枡水
竹村の伊勢あたしはい所でなし　狐聲

堂守は塔から落ちた大工也　川鳥
生酔の女房寐聲で禮を言ひ　憐至
おごろかれぬるにそろ〱客は迯げ　尾上
若松染の綿入れで禮の供　鼠聲
かみなりの內で買つてる子の太皷　狐聲
禿の力ものゝふを引きとめる　里蝶
小判のはしを連れて出る中の町　窓梅
だにほどな銀でお家樣寺參り　鳳頭
村使ぬれて正月ふれて來る　竹二
つらい事棹をにぎつてこいで居る　三朝
たばこ盆取上げられてつィと立ち　窓梅
ていねいに西瓜をくつて下びる也　鼠聲
柿盜人を呼生ける馬鹿な事　狐聲
あたり見廻はして汁粉へ下戶這入り　一德
不二みやげ舌はあつたりなかつたり　鼠童
酢とこんにやくは紅葉から歸る也　窓梅
おぼろ月壁へ立てかけ下女はぬり　蘇竹
お袋が出て神さびる神樂堂　春駒
眞わたで首を包まれるはづかしさ　不醉
めかけのは干しぶえのする土用干　鳳頭

俄雨子のある嫁と引合はせ　川鳥
ひんのよい根こぎは千代のためし也　春駒
渡し場の名に斗りいふおだやかさ　尾上
夕ぐれに一首けだかい心まち　同
鷄明に花の枕へたち給ふ　同
未だ二人あるをしつたか二度と來ず　同
たつ時に跡のにごらぬ湖水なり　窓梅
われ勝にあら玉を汲む江戶の春　枡水
住國にない色を織るから衣　尾上
伊勢物語在宿で書いて居る　同
かの所はこうかと笏で角田川　鳳頭
御延引すぐに雨中の花を題　春駒
年寄りの冷水でない美濃の瀧　同
五月雨の奥海に成り山に成り　尾上
百人で御機嫌をとる御延引　蜃虹
師は寒く弟子は涼しい名句也　尾上
鶴といふ字も舞つて居るのごやかさ　春駒
我としへ四字足したのが名句也　柳雨
をどり子にはまり切つたも一首入れ　尾上
四月朔日に腸をぬかせる珍らしさ　昔人

金の威光はこわい物縁に付け　中葉
書判の請取りを出す伊勢の御師　窓梅
すゝきのそばでてえ〳〵を家内する　門柳
そつとよと嫁梅漬を頼む也　紀鳥
見通しに居るのに汐干母案じ　錦鳥
おちこちのたづきに猿を連れて出る　窓梅
江の島へ嫁たしなみの鴛蒲團　蜃虹
ちんがらにしィ〳〵土用過ぎも干し　芹丈
つゥいついあゆみを渡り藝子乘り　尾上
ふる事を釆女の宮と木辻町　東鳥
いゝ日和ほど腹のたつ花の留守　東李
駒下駄だらけ連彈きの上りはな　尾上
すゑ賴母敷ない所へ櫻植ゑ　不醉
居續けの髪べつ甲で撫付ける　松歌
燈籠を賣つて息子は損をする　花丈
大男二人土俵で貰はれる　狐聲
櫻田のやしきから出るつくし賣　如雀
眞白な耳づくをよけ四つ手かけ　鳳頭
人だかり角木爪の障子也　雨譚
雪で見る書籍へ落つる水ッぱな　芋洗

五雨さる時は鼻毛をぐつとぬき　枡水
燒つぎ屋しかられ物の問屋也　五蝶
いゝ年で出合ひに通ふ尉と姥　窓梅
つみ草のはじりが來ると松がとれ　紀鳥
主人相しらずうろつく松の内　歌遊
三會目さつまに佐渡をあいしらひ　紀鳥
敷ぞめにほうり込まれたように見え　不醉
髭を撫でる丸山の三會目　紀鳥
珠數袋嫁のけいはくはじめ也　鼠聲
鵜が行いて鷹が又來る間のわるさ　かてう
遊藝を孔明一度用に立て　玉章
孔明は松も通はぬ琴を彈き　四連
席に鞍置いても指のさし人なし　五鳥
切手をわすれ瓦師の河岸を借り　不醉
春太夫ちやう場に成ると嫁は逃げ　湯島
逃げながら高まんをいふ一のもり　東長
黒木賣呼ぶとやんわりふり返り　錦鳥
三年でいろはを上る本望さ　如雀
庭の面はまだかわかぬに粘やのり　曙山
綱が居た跡へ蠟燭取りひろげ　雨譚

提灯におよばぬと仲國は出る　鳳頭
おじいにちッとかしなよと十五日　紀鳥
印傳を明けて橋二分で買ひ　鳳頭
一ッけん勝負丼をつきこぼし　曙山
七種に伊勢屋もとぼしかけを取り　蘇竹
乳を貰ふ内栗虫を抱いて居る　東長
手を出して足をいたゞいたは子房　紀鳥
暮の文てえげえあかんべいをされ　鼠弊
座頭の坊足袋屋の前でけつまづき　同
三會目隣あるきをせずに來る　尾上
ごみかしやせうと紙屋へ鮒屋いひ　窓梅
呉服屋で反古張を出す俄雨　鳳頭
寒が入りんしたとさ三文もなし　鼠弊
百人一首御の字のつく歌で苅り　窓梅
後の月見には野分けの巻を書き　尾上
花の無い春も賑ふ御本坊　窓梅
桃の宵興は雲井の調子なり　一徳
どこへ行く氣だが二條を逃げは逃げ　尾上
古今武總の建立は九品佛　蘇竹
古近江としらず彈いてるひんのよさ　如雀

奥様と車座に居るおつれ〳〵　尾上
國家老わッちがおもふまゝにせず　川鳥
さよ衣つれ〳〵とした返事也　窓梅
七月の節句は酒が無銘なり　かてう
船頭に紫衣でおぶさる運の能さ　枡水
品のよいたすきをかける御ぐし上げ　尾上
白石に先をとられる朝歸り　同
どこのだへとは失禮な金屏風　春駒
大勢を凉敷かへす見世開き　鳳頭
聲今さらにわづかなる嫁の琴　五連
月やどるらんで花嫁出にくがり　不醉
鴈がねのそばを白魚かけまはり　尾上
數ならぬとはむづかしい時鳥　是閑
喰物の小言も孔子いつて置き　雨譚
氏神は八幡と綱申上げ　同
功なり名とげて鱸やん〳〵　曙山
譽られるぬすみ柑子がころげ落ち　芋洗
江戸橋で道外を一ト人づつかゝへ　鳳頭
銘々にほめて引つこむ冬の月　川鳥
月見る月は此月のむづかしさ　窓梅

しやう根草娘をなぶるうらゝかさ　志夕
中の町そとはだかりはいゝ女郎　窓梅
からし味噌嫁のほめたが氣に當り　一德
たづねにくいのは小督より楊貴妃　三交
まゝ事のようなで賣れる南禪寺　隣狸
むづかしさ精進をして緣を切り　尾上
投出した六位のそばに大びしやく　柳雨
うたうたひ顏をしがめる禿菊　志夕
角田川是から舞の道はなし　不酔
寐入つたふりでまつてるも古風也　同
談義僧すしをつけるは手柄也　窓梅
おしめりがほしいと紺屋世事を言ひ　片岡
廿日過素顏亂鬢文を書き　玉章
因果な子だと賀の餅を里で喰ひ　錦鳥
重箱を隣へ見せて猫をかり　尾上
湊のごとく船がつく下手講師　中葉
鉢卷にあやまつて居る鰹賣　器水
納豆を春までのばす泉岳寺　窓梅
心中の前夜男のひざがぬれ　蘇竹
穴ばたの腰を卒都婆へかける也　狐聲

顏を見に四匁五分買つて吸ひ　花丈
畜生にやおとりましたと乳を貰ひ　五鳥
むぐらもち時々上へふみはづし　里鳥
おまんまのおかづ定紋割りで出し　同
つれ〴〵のまゝいが栗はゑみわれる　窓梅
琴を片寄せて隣の子をあやし　鼠聲
灸をするゑるも孝行の一つ也　門柳
ねん〳〵花の高名は臥龍梅　曙山
ほとゝぎす愚案の所へ珍魚來る　三朝
笈の歌外の鳥だとつゞられず　かてう
紙雛はちやつとで取れぬ所へ落ち　一德
負ふた子におしへわに口たゝかせる　柳雨
おひねりを投げて貰つて嫁拜み　窓梅
ほか目には蜜より甘い母と見せ　狐聲
公家の乳母けいあんをする黑木賣　里鳥
木ばさみも拾賣りにする中納言　柳雨
翌年の雪にはさくら炭を焚き　孤雲
禰宜の子のこしやくてうちて拜む也　松歌
秋の田を二百十日に生醉ひする　三交
まんぞくに王子を仕廻ふ大神樂　鳳頭

君が一日のなさけは惣仕舞　鼠聲
松の葉へ早蕨一本書いてやり　かてう
松根(しようこん)に上戸の供は大あくび　川鳥
里歸りぢゝイばゝアをまづ咄し　狐聲
嫁の供けちな小間物屋はご持ち　窓梅
水ざうすいといふ腹へ異見也　鼠聲
猫がはらんで一家中まゆにしわ　尾上
三分くらゐは不斷ありさうなてい　同
ごらでない四つ手麥わら細工つけ　鳳頭
本性を違へずいッちいゝへさし　窓梅
さう御座ろうと存じたと飛車を迯げ　柳雨
すみ〳〵で大工をそしる疊さし　芋洗
買ひぞめは輪飾りのある四つ手也　鼠聲
卒都婆下りませイ出ませイと六位　雨譚
ひつぷの雪見饂汁をくつて出る　尾上
生酔を藝子にたのみ寐かし付け　同
古今の難澁ぬり箸で小だたみ　儘成
一寸した船中をする茅場町　尾上
骨ぶとな源氏荷なひで水を汲み　偶中
姫はじめ萬歲時分はづれ也　かてう

ひんのよさごんすの塚へ手を合はせ　鼠聲
なまめいた院號のある下屋鋪　長故
大茶の湯中の下刻にやつと濟み　柳雨
同じ刻限に三人湯しがり　隣狸
しのぶずり召し傾城にみだれそめ　門柳
ひんのよい腕づくですむ御右筆　尾上
上品なをどり子の來る鐘供養　同
つかみ取りにはけいせいはいかぬ也　同
箱根山櫻は蒲子の通る頃　霞朝
ぼだいじゆへあつまつて啼く衣蟬　不酔
生園の極樂者を佐久間置き　窓梅
濟度のうちで大日は木綿もの　同
本膳にうまみを付けて國へたち　三交
玉のこしから引きおろす國家老　東李
おくさまの方には入らぬ筆のさや　尾上
商人のよききぬを着る御祭禮　竹苞
御年貢のからで初音のつゞみ出來　かてう
今以て綱へ手を出す御ゑん日　不酔
神國へ寺の言葉は過言なり　柳雨
稻妻をぐだ〳〵にする師の御坊　里家

濱荻を他國の名にて伊勢はよみ　窓梅
御立身紅白棟にひるがへし　尾上
京染にしては五の巻色のよさ　里鳥
おく様は甲乙なしの糸で彈き　尾上
笛の音に琴の調子もくるふ也　偶中
あくる日に幕の干上る御殘念　枡水
年よればぶしやう一字で返歌也　窓梅
梅山吹は文と武に手を取らせ　芋洗
釣がねは無銘面には銘があり　かてう
山もわる位勢の客をふり通し　川鳥
琴の身がまへで袴を嫁たゝみ　壽
長刀の流義を殘す白拍子　三交
十五日甲の座で見る大あばた　尾上
過分といふ禮豆腐屋はつに請け　春駒
三年の古疵屏風かさぬ也　窓梅
いびられに行くが女のさかり也　不酔
松竹で千里も祝す寅の月　三交
狂言につと冠の緒がゆるみ　偶中
御ゑらみの枝折にもなる紅葉也　蜃虹
歌によむ時はやさしい大江山　曙山

鳥がくれ行くほど曇り御見合せ　春駒
他人へは蜘としらぬが佛也　枡水
名の高さ五色にもれた唐衣　雨譚
ごつ〳〵と笑つて雜煮二膳出し　枡水
賑やかな事老筆のしわものび　蘇竹
去りにくいわけは櫻の返歌也　一徳
疊のうへの掎草は蕗茗荷　窓梅
けつかうな御天氣に嫁禮に出る　春駒
新藏を丸綿で出る嫁の雛　五連
御居間迄出る植木屋の歳暮也　尾上
山櫻しばられるのは手がら也　同
若草を白魚の喰ふうらゝかさ　蘇竹
十四日土藏のを出すいゝくらし　尾上
夫婦とげんじ三日目に客に來る　同
美しいすつとのかわを御てうあい　鼠聲
よひ花を見ながら水をくんで居る　尾上
きゃすのあさる所から御ひろひ　同
快晴さ筑波のふもと都鳥　門柳
牡丹花も程よくしめる二度の雨　尾上
彈き初めに嫁梅が枝はきつい事　柳雨

下げ髪へ薄のからむ芥川　鳳頭
琴の上毛虫が落てしばし止み　尾上
のどやかさ鍋がどれると釜が明き　同
御退出鬮れに鞠場の羽子がやみ　かてう
始皇帝今朝の地震をおもひ出し　柳雨
孝行は雪と氷で名が高し　同
朝起をしては見に行く八重櫻　五連
きのふの姿引かへて御慶也　鼠聲
無拍子な葬御笑ひ草に成り　不酔
嫁の來た春萬歳にきつい入り　鼠聲
琴の音にひらりとおりる文使　尾上
雨風で須磨の出船は手間がとれ　窓梅
栗の木の榎になつて丹波道　如雀
名は七つあつて女のかなめなし　蘇竹
面色筋をあらゝげて五両しめ　鳳頭
扱安く賣るなと枕紙にする　窓梅
どこへ出してもはづかしい嫁を取り　春駒
泥へ棒うたせて元の鞘へ入れ　古柳
しん中は世間にたッた二ヶ人也　尾上
身じまい部屋の噂にも金の事　鼠聲

麥わらと赤土たばねせなアくれ　兎園
下女が癪薮から坊主呼んで來る　尾上
口べにがさつぱり池の茶屋ではげ　三交
柏もちあんをくじつてしかられる　紀鳥
傘の柄もりのやうに下手に成り　花丈
山伏へよな／＼見廻ふ大天狗　左笠

俳風

柳多留二十六篇終

俳風 柳多留二十七篇

夫鷄旦に朝へ翁参りて歌をうたひ笛を吹を園柄奏と云、こや裏の上下をやわらぐるの節會にや、爰に叟あり和笛子と呼ぶ、よく歌のはしなる前句に高判の一の人を定め、二三よりすへ大尾迄の位有る人のこゝろをやわらぐる古例による者ならし、ことしも年の始よりの點句をつゞめて廿七篇の册となす言を奏す、

寛政九之暮に滿、十の春櫻木に花を咲す

弓と矢の外も戊亥を御守り　松歌
ものゝ具の身幅もふえて御凱陣　川鳥
船玉を住吉丸の中へ置き　鳳頭
神國の德には孝の數しれず　錦鳥
鏡山通りすがいに寄た歌　如雀
横笛に鈴虫の舞ふ神樂堂　麟至
平家をも川の名所の人が書き　窓梅
鋲打が續くと鳩は家根へ逃げ　鬼蔦

きつい事天ひッかりの放生會　狸聲
櫻町の院御馳走やくは嫁　かてう
氏神も一人はしれた四天王　暗山
振袖へ後見のつく男坂　錦鳥
御局が附き鳩のまたさせ申し　鼓音
野邊はみな亂筆になり時鳥　木印
雁つらを亂し柱箱へ嫁入れる　如雀
雛店へ昇殿をする能き買人　狐聲
食ごのみせぬと孝行しれぬ所　柳雨
見出される迄はほつても嫁いわず　錦鳥
山ふたつ雪と月とで唐へしれ　孤雲
はるゞゝ太義と奥様およろこび　松歌
源平に咲て貞女の名を殘し　里織
汐水がはねて紫しみが出來　山壽
浮艸へむだに深草通ひ詰め　三交
櫻色とは唐にないほめことば　春駒
たのもしい矢立の中へ櫻散り　鳳頭
松よりも櫻に近き嫁の禮　儘成
高野山むかし隱した歯を納め　喜水
むすんでもゝゝしゆすじれつたい　山壽

爰にても御出なさいと次郎左衛門　喜水
ばらりッと汐干は人を蒔いた樣　竹二
古市で大和廻りへ疵を付け　かてう
針めどを二ヶ人前づゝ嫁通し　鈴和
高き家に登りて大工餅を投げ　儘成
せい斗りとは母おやのおろか也　同
何事が出來たか通ふ里の母　喜水
美しい鬼が去られた跡へ來る　偶中
田舍町に作るが花の繁昌さ　木印
其ひざさ僣正壺のふたをする　如雀
又來ても老若男女二ヶ人あり　三交
御こたつを明て御登城召をかけ　京柳
夜の烏時の烏とで名を上る　窓梅
三日月の光り蛙はおそれ入り　有幸
實のならぬ花から歌の種が出來　錦鳥
ぬれ事は雨より外にない女　有幸
雪の松一枝靑い名句也　錦鳥
四たび目の風で牡丹の花は散り　萬仁
このしろの配膳をする屋敷守　窓梅
ごせめいた物さと妾おつこなし　木印

音に聞く鼓を禮者打詠め　喜竹
上下で配るひじきはのしを付け　春町
御持佛で稻妻のする門徒宗　鳳頭
三つ蒲團孝不孝あるぬり枕　東李
毛せんへ陣取をする嫁手がら　川鳥
愛相に嫁藪入に一首まけ　かてう
膳なかば新らしい顏一寸見せ　志夕
琴よりも足を引くのを暮に呼び　是樂
星の名をふたつ覺えるすゞみ臺　一德
いゝ息子内のおまんま斗くひ　器水
糸を卷くように花嫁餅をくひ　儘成
横の物竪にして嫁琴をやめ　窓梅
にッこりと重い返事の封を切り　萬仁
高砂をうたふは堅い醉ざまし　錦鳥
燒香は煙りをつまむように見え　有幸
母樣へまいる封じめ麥でつけ　川鳥
かき立て隣の嫁を待つて居る　萬仁
安産をしらせながらに鍬を借り　偶中
新造も新酒も人のさめ安し　來二
新造になる迄三度名が替はり　同

得しれぬ女新道の店へ越し　孤雲
挽割を貰ふ虚無僧わらぢ也　萬仁
四斗樽の水月に二度能く賣れる　糸柳
湯を出して足をいたゞくはたうふや　春駒
入聟の相談からす猫が聞き　偶中
詩の出來るたびに徳利がかるく成り　狐聲
鐺先で取る給金は下座見也　窓梅
我戀を人にしられる御祭禮　東李
上つてもいゝと格子でのたまはく　來二
端折る時片足少しづゝ持上げ　鬼蔦
蚊屋のこゑ鰹の邪魔をして通り　窓梅
孝行に乘れば靜な四つ手駕　鳳頭
細見で見ても香車の塲所は鐺　曙山
帆を上けるように首引負に成り　同
錦より篇をよろこぶ國の親　矢正
棒の手を馳走に見せる深代寺　錦鳥
歯に當る肴を遣り手嬉しがり　狐聲
はた持の名に八助はきつい事　矢正
柱から生れたやつが餅を喰ひ　子誠
病上り此通りだと腕まくり　松曉

女房は留守臺所の賑やかさ　鬼蔦
賑やかなすだれをおろす大中り　窓梅
大根の荒事をした事も書き　同
湯氣のたつ顔を鏡へ嫁うつし　來二
春の夜は櫻があるで直が落ず　錦鳥
年一つ寄てよろこぶ四十三　一徳
逆縁ながらと妹をのぞまれる　木印
目一ぱいお付けなせヱに嫁こまり　儘成
諏訪の池狐が馬をのせる也　片岡
原よし原で見るやうに嫁粧ひ　曙山
桐の木の杢で娘の年がしれ　喜水
流鏑馬の供辨當を袂で喰ひ　木印
三味線は琴より人がたんと逃げ　窓梅
お月さま見通しだよと母異見　同
柄杓おつとり大名に付て行き　鳳頭
足元を鞠塲で見るは下卑ぬ也　孤雲
夜討の無人口取りやめかけ出る　春駒
異見聞く袂に月の仕廻文　潮水
山吹は現金小菊掛けに成り　窓梅
返す書きわすれた義理を伸上り　錦鳥

瓜畑より不埒の出來る麥畠　狐聲
村持參顔迄いつそはたけ也　同
けちな柿だとしほ吹のまねをする　柳雨
ぼた餅にほうろくの入る十二日　鳳頭
前金に取るはず病氣よこね也　姫小
仕廻部屋うゐてん／＼の身の咄　志夕
物着星質を置きにく馬鹿な事　かてう
其もと亂れ御局が牛をもち　一徳
あらおめでたやめでたやと仲人賀し　かてう
廣さうな名でせまいのは乳母が池　一徳
明すの門へ少將は九十九夜　偶中
千代田から移す千歳の御山號　名葉
千金を日毎さづかる御神恩　矢正
筆道の外にも願ふちから石　錦鳥
白妙の中へ山鳥おりる也　窓梅
三箇國金箔のつく梅の花　三朝
兄弟の花で夫婦の名を上げる　雨聲
神木の松風通ふ琴の町　東鳥
こうゐきをせぬ市のたつ御立身　窓梅
菜斗りは二把にたばねた物語　曙山

元日の禮眠くない人が出る　一徳
書入よりよみ人のすごい時鳥　如雀
八つ橋の元祖むらさき衣也　水兒
芳禮と眞綿の間に白く見え　萬仁
御謠がすむと脣も細字也　竹二
冬の汁一字より二字ひんがよし　柳雨
ひんのよい藝者の並ぶ十二段　志夕
鹽引の中で皷の市も立ち　矢正
工商の上の座に置く鑓と鎌　三交
くだ物でいましめておく沓冠　窓梅
天下太平謠かとめかけきヽ　同
琴の音をおつ片付けて嫁の禮　雨聲
白魚がはねると古歌が一首減り　曙山
雪月花かけたで嫁は負にする　錦鳥
肩衣にぼうしを見せて緣を組み　狐聲
島を折る所で切戸を開いて行き　鳳頭
有りがたさ臥猪の跡に高枕　かてう
南海と東海瑠璃の左右也　竹二
齋日のあしたはきッとした群集　枡水
よい御手をさいふへ入れるおしい事　銀杏

神詠にこりて交ゑき船斗り　かてう
かり物の内へは入れど手から也　鳳頭
初子の日引きに行くとは面白し　芋先
國家老五百匁付けて猫を捨て　川鳥
哉ごめの名句狐の足をとめ　柳雨
左右には琴眞ン中はつゞみ也　かてう
御加増へ農具を持つた魚が來る　同
御院號おらもしらぬと花の山　三交
ぬれた桔梗へ山吹の花を出し　春駒
桃青が塚は尻から日があたり　如雀
七十夕不易にならぬ美しさ　蘇竹
菊作り帶に手紙を置きわすれ　川鳥
爪音に藪蚊を拂ひ〳〵聞き　鳳頭
入相をおつもりにする花の山　同
はま弓へ鴫居々々と聲をかけ　川鳥
ほとゝぎす口舌の腰を折て行き　霞朝
御てん山息子の連れに入だかり　鳳頭
はい水の陣をはつてる放し龜　湖水
盆暮は女竹男竹の先手後手　志夕
着て見やと母は口から髭がはえ　東鳥

八朔の傾城は季の違つたの　春駒
こわ色が聞たさきゃす嫁は彈き　かてう
糸道にはさみをかりる久しぶり　すゞめ
追込んだ匂ひ袋は蚊やり也　鳳頭
合戰の時は周倉手明き也　錦鳥
首斗りよそ行きで居る俄雨　榮桂
夜ッぴとい紅葉見るだと女房言ひ　儘成
能じよとはいゝ女かとたわけ者　芋洗
ごつこいごこい生捕た暮の嫁　如雀
引當ては五雨とこたつこしらへる　錦鳥
鮫が橋からこさらつく賣女出る　雨夕
涼臺みんな立たせて螢逃げ　蜃虹
孟宗が御袋は歯が丈ぶ也　如雀
ぬさ椭を取る時二つ手をふる分　儘成
牛の御前樣だとかけぬける也　如雀
竹箒立てると御供ばか歸り　東鳥
吉原の外聞になる意地を張り　五連
十團子詠めにならず喰へもせず　霞朝
婆酢がよかろうと浴衣でふいて居る　偶中
名を呼んで置いて行きやれは新しい　正徳

船の出るのをうどん屋へ觸れて行き　里鳥
美しいはずあたい三分也　鱗至
氣のわるい名句を千代は蚊屋で言ひ　東水
正洞寺ごふださいへばしれた事　狸聲
樹下の納涼團扇賣紙帳賣　柳雨
二度の團子で身代を粉なにする　如雀
男の狂亂紅葉の枝をもち　把菊
重箱をまだ文も見ず明けて見る　鬼蔦
夜具の臺誰に見せても長持さ　無太郎
都鳥つッかけきしに猪牙は行き　鳳頭
はつ旅は灸も支度の數に入り　片岡
うき船で篝火を焚く罪な事　柳雨
行きたけの合はぬを親の嬉しがり　虎同
切艾二度の節句にあぶれたの　松歌
顏疵にして五百兩持参金　龜鳥
子雀をねらふ鼠の恐しさ　柳雨
御所出だといつて石垣はやる也　川鳥
月雪じや學ぶが花じや學ばれず　里鳥
壁へくつ付て花嫁はしよる也　春駒
煤掃の日迄は顏を汚してる　窓梅

燒ほこり抔さぎえんをだます也　狐聲
異見云盡し母親手を合はせ　門柳
惚くさらかしにして置く內氣者　五連
高祖と項羽大そうな廻りくら　芹丈
引摺起しませうかと張飛じれ　青好
おばアさんのさと娘は立かける　紀鳥
淺間のぬけた跡かへと諏訪で聞き　雨聲
鵺よりも化鳥の多い吉田町　ふくべ
一ッ睡のうちに髮ゆひ江戸へ着き　狐聲
ぬき足で折りに行くのは寐入花　片岡
麥ばたけ夕べころんだ所迄　鬼蔦
山伏のあたまへ相撲灸をする　喜水
それさまアでかく御座ると輕井澤　ふくべ
大日は眞闇普賢は緋縮緬　如雀
象は獸店からとしつたふり　狸疊
にくい事鷄のそら音をはかる也　錦鳥
三味線が有るで近所に三筋町　里幟
寶ぶね鋸の刄の帆を上げる　鳳頭
肴屋にたいより目だつ二三本　川鳥
師匠への議者つくゑをしよわせられ　姬小

蕎麥好と見えて藪から坊主出る　蘇竹
磯草の蠟石となる暑い事　漣雅
桐の木をけほうに見せる御不勝手　喜水
驅ける内斗りは上るけちな凧　窓梅
若衆から野郎の錢を師匠取り　柳雨
山を見て來やとむいてる瓜の皮　春駒
柴垣へつないで笛をひつとゝめ　鳳頭
朝歸り女房は鐘を出た如し　錦鳥
雉子斗り世話のやけない桃太郎　すゞめ
灸てんの飛色になる金太郎　友呼
きつとした辻番草履買つてはき　柳雨
手のひらへ底豆を出す角兵衛獅子　すゞめ
へうたんや山から里へこひで出る　東鳥
頭ねつ足寒で四つ手は一分取り　かてう
ちんこへ火はねるといかけおどす也　雨夕
鼻息を考へめかけねだるなり　三交
天地の出合楊貴妃織女なり　鳳頭
花の山石にもたへぬ人だかり　一徳
紅白で男女のしれるのがけ道　窓梅
ひッそりと神酒を備へる師匠樣　丸龍

羽子のこの二つ三つ出るいゝ飾り　窓梅
筑紫から一度師匠へ御通ひ　三交
坂に押す車の休む御ゑん日　狐聲
川中で團扇でさます小豆粥　川鳥
繼母の讒言てうしの月見也　名葉
十二文串髮へさす初卯の日　門柳
惡方の出しそうな見世切りもぐさ　霞朝
こんどから一人で來なの面白さ　かてう
木か枝か葉かさぼてんはしれぬ也　丸龍
杉の葉の中からせなアよろけ出る　隣松
下卑た風鈴ゆげの立つ上で鳴り　蘇竹
德向の女房あたまを筆でかき　川鳥
髮ゆひは年の寄るほど締りかね　窓梅
しのふともいふべき所に蛸の足　蓮雪
佛御前はけころかとむごいやつ　狸聲
氣のつよい女髮ゆひ床で聞き　有俄
唐櫛にひらめの殘る煮賣みせ　鞠志
おきやアがれ馴染んで見れば泣上戸　花丈
みんな鈴ふり立て見る神樂堂　如雀
僧正を逆り溜め小便をする　姫小

ふとしきは豊島に立る宮柱　名葉
病上りある夜女房にしかられる　丸水
鍋の數かぶつて顔に火がもえる　姫小
嘸御草臥と殿様遠廻し　かてう
春三は花夏六には賓を上る　翀八
空にしられぬは五町の雪明り　丸水
賑やかな三夕とふろ月見也　窓梅
二分ありやなしやと地下の角田川　ふくへ
松の木の化けたを諾めてたがり　窓梅
年禮に禿は腕がぬけるやう　錦鳥
けいせいの涙で内のくらが漏り　器水
森の目を目當三廻り待合はせ　矢正
寶船出家侍諸あきんど　美徳
よくどしいやつが福茶に寐付けェず　和谷
色白なやつと連れだつ願解き　矢正
當分は汲人の多いはねつるべ　野暮
鉢うゑの松の木を出すいたい事　糸柳
なみ〳〵と無筆の入れる硯水　亭々
三笠山晒し搗てる人に聞き　東李
それのいた〳〵と嫁の前へ出し　春駒

元服に異見も交せてほめる也　錦鳥
竹の子は孝行薬は不孝也　同
大ゆかを明けてまつてる里の雛　窓梅
孝行はかぢつたすねをさすつてる　姫小
角物を琴柱に遣ふ材木屋　かてう
かんじやうな織姫を見るのがけ道　如雀
蛤が三升來たと嫁ふくれ　川鳥
とや切らんかくや切らんとつくね芋　來二
のろ〳〵としては居られぬ丑の月　かてう
こくせうになぞとほしがる御留川　喜水
かる燒ほどに帆の見える麗かさ　來二
吉原は重三茂兵衛は丸の内　春駒
たばこぼんから嬉しのは見付出し　鳳頭
しかられる側にしなびた唐の芋　柳雨
大釜の月代近所鳴り渡り　志夕
むじなめらなぞと女房は寄せ付けず　錦鳥
師匠さまなまこの表替をする　狐聲
薺賣りせなア突合ひせないやつ　如雀
そばがきへおろしを交せる輕井澤　木印
伊勢からも大小便の世話をやき　偶中

手入らずの芋を貰つて年を取り　錦鳥
しんぼうを母が見るので聟がもめ　かてう
頼政もあやめ抱くとは露しらず　三交
父見世に居ますにこまる朝歸り　狐聲
ぬかぬ太刀とは藤川でいゝ始め　鳳頭
草雙紙見料に嫁鶴を折り　錦鳥
春の野をせり賣りに出る櫻艸　如雀
夜具の損料で三分が物はあり　狐聲
若衆が坊主をしめたのは橋の上　高山
上の句はぬしおよみなんしともてる　春駒
糀の中に升屋とはきつい事　玉章
はづかしさ嫁しんの無い帯をしめ　柳雨
もし降らば芝居にしなと重へ詰め　門柳
しんがりを下戸があつめる花の山　里轍
通俗の釣りかんばんを目醫者出し　春駒
雛の菓子五臟六腑のように詰め　一鷺
袷をば鰹が爲に縛せられ　松歌
精進のなまこを鉢へ植ゑて置き　木印
火鉢へも白箸をうつ料理茶屋　かてう
ひらめをなめさせて肴屋寄り付かず　三交

鏡へうつる乳貰ひを呼返し　門柳
はづかしさ時候にもれた雛を出し　窓梅
鶴と龜とで蒲鉾をこしらへる　門柳
板じめを片袖見せるうらゝかさ　糸柳
門口へ師匠額堂ほどならべ　かてう
來る年も御講に目だつ緣遠さ　鳳頭
奥樣はなしと流石の草履取り　狸疊
神酒の名にいゝは木めんや七つ梅　里轍
てう〳〵の生醉なぶるのどやかさ　松歌
仕立屋のでつち茶丸の棒を喰ひ　錦鳥
花咲かせばゝァはつらがにくい也
鬼灯の音さと禿屁をかくし　孤雲
景物にすると四つ目を買つて居り　柳雨
藥研堀から來た乳母のじだらくさ　姫小
境内の櫻に息子用はなし　かてう
たいこ持狆のせげんで二分儲け　有峨
梅の花折つてかゝへを叩かれる　三朝
つれ〳〵に有るはすの無い大根也　窓梅
身ぶるひに花のこぼるゝ裸牛　蘇竹
けつこうな春と暮春に嫁はのべ　木印

我家の客わんでくう里がへり　埋草
高つきで首斗見える母のひな　川鳥
時鳥一ばん鑓をうつて來る　春駒
十三と十五の間で菊を脊負ひ　喜水
屋敷舂寺は廿ちの秋を見せ　竹二
花の敵を雪で打つ本望さ　如雀
土佐坊は月でも賴む程に書き　錦鳥
そりや狼煙だと落ちた物ひろつてく　春駒
まだだめかなどと膏藥べらをふき　くつわ
人同じからず花火の中を猪牙　姬小
歸りには世帶を仕廻ふ箯乘り　狐聲
すは鎌倉の大事ぞと仲人來る　錦鳥
印籠を見せ〳〵下の關をほめ　竹二
初がつを下女は目で見て鼻でかぎ　千慮
白雨に五六俵賣る舂米屋　狐聲
客が奴にされさうな江戶の張り　孤雲
熊坂の足へとまつてみィんみん　古柳
玉子とぢの鹽辛木曾で喰はせ　湖水
猫にかづける木娘の爪の跡　姬小
かのらしいやつが付き後家堀の內　柳雨

せき込んで奴の尻へ突當り　片岡
御建立橋は津島と玉津島　かてう
汐と諸共に御次へばヽァ引き　春駒
日本へ唐のむすめが矢の使　鳳頭
御ほうびの後は不用な緋の袴　錦鳥
田樂の御庭で出來るのどやかさ　三枝
人和にしかずと興風一首よみ　孤雲
夫婦別有り牛を牽き機を織り　松歌
姦妒の入るは風雅な四天王　如雀
御小僧と雛とくらべる奥御殿　川鳥
たばこぼん畔へ火繩をよけさせる　かてう
孝行の德は竹まで名が高し　川鳥
白なみにおどろき千鳥音を發し　かてう
押賣の佛比丘尼が二タ人出來　雨聲
呼戾す御番つゞらにたから船　柳雨
五分ほどもやッとよごれる嫁の箸　儘成
歌がるた嫁取つたのに下女さがし　糸柳
もつれ糸嫁へわたして目をこすり　竹二
腹帶を地藏の御月番にしめ　三枝
むらさき帽子口紅粉をうばふ也　門柳

瞽女の金手を握つては言延ばし　姫小
寐所に分地の出來るけちなばん　窓梅
荒世帯隣ではもう椀のおと　狐聲
雪は解るに女房は未だ解ず　窓梅
切落しむかいは首をたづねてる　東李
ちんころを帯ひろどけてすてに出る　同
請腰で女房のねれる神樂堂　同
梅の木を後家はふさ〳〵しく下げる　同
御縁日下向に雛を嫁そゝり　竹二
山形は蛙の聲を遠く聞き　矢正
一ト粒の豆をいのちと風車　風化
のがけの先達火繩をふつて來る　如雀
安玄關かご字磐じやく並べとく　錦鳥
地人のまつさ人參の鉛也　如雀
たゝかれるきせる禿はみがいてる　左櫻
あくたもくたも后だのばゝアだの　窓梅
縫箔屋廻しへ人が寄りたかり　錦鳥
源左衛門酒だとてうし貰ふ所　窓梅
寐所の相談をして餅を置き　千慮
喜三太は内へ呼込む猿廻し　喜水

切餅を宗旨違ひの樽へ詰め　狐聲
越後から羽根のはえてる獅子が出る　片岡
穴かしこ御堂一盃尻だらけ　和國
疊しくじよごんの多い十三日　同
仲人がひらくと花も開く也　錦鳥
梅の歌冠かたむけ開いて居る　高山
梅の花武道で一度名を上げる　錦鳥
山ざくら都の人に宿をかし　名葉
鐙迄御袖の屆くしほらしさ　川鳥
花の外小倉へ秋の御神詠　古柳
御先祖は手取尊躰能書也　錦鳥
鞭を目出たく二十五人召し　矢正
年號のほまれ寶と大伽藍　春駒
只も行かれぬが不沙汰の成始め　同
糸道のなくなるほどに世帯じみ　すゞめ
四五年の口をはたいて傘を借り　鬼蔦
四年たつても漏を置く不孝者　春駒
ぬれ事の二度目は那智の瀧を受け　銀杏
机より矢立はけちな玄關也　榮桂
さげ籠のふたにして行く肴臺　鳳頭

駒の頭へ手をかけて水ようし　矢正
燒繼ぎの御出入が出來下女不首尾　鬼蔦
摺鉢の鳴るは小まめな一人者　山壽
きすり人の來るをまち下女柏餅　柳雨
うなぎ賣女房をなぶり〳〵賣り　稻里
左樣では適と奥樣おいやがり　窓梅
梅が香を土產にする御祭禮　三枝
神樂から稻妻のする金屏風　左櫻
ひんのいゝ其日暮しは花の幕　窓梅
鋲打の駕にならぶうらゝかさ　鬼蔦
飛梅の愛宕から來る御緣日　埋草
太平の陣屋の上をほとゝぎす　鳳頭
鶯のこゑに子の日の手がゆるみ　芋洗
能く咲いた根本で銀のけむり立　稻里
折つたのは三河しよつたは芥川　春駒
まな板を打つ迄達磨琴を聞き　鳳頭
御延引ゑいやらやつと日がくれる　柳雨
花のちるたびかわらけはそれる也　卜長
座敷中嫁のはびこる暑い事　かてう
賑やかさたわしで鯉を洗ふ也　春駒

龍宮へ行くとなんぞかぞくれる　三交
眞中にしようと息子大がかり　錦鳥
白魚の火も其頭は物凄し　同
越後から雪のはだへを嫁は見せ　稻里
六片ずりの女郎だけ美しい　春駒
賣切つて日向をかへる櫻草　三交
手拭はぼうしを除て畔を行き　東李
新場から安針町へ鳩はとび　竹二
身にならぬようだと下戸の辛子味噌　素人
村の弟子けッそりとへるぬけ參り　松歌
暦をも尻から明ける閙しさ　儘成
功成名とげて櫻ひんぬかれ　曙山
撫牛の夢は敷きぞめ苦勞也　三朝
掘れば竹埋めようとすりや釜が出る　柳雨
もみぢにも松の位は二本限　三交
もみぢからむすこと聟の中は絶え　窓梅
いゝほよう片袖留るのがけ道　松歌
中ぬきはふられた客がはいて行き　糸柳
鳳凰も莚へ下りて箸を取り　矢正
ぼた餅の相談もちをつく時分　狐聲

雪ふり風間おもひ出すどらが事　和國
柿の木の賣買丸い金でする　隣狸
下戸の禮氷た芋をぐつとぬき　柳雨
腹とあたまの頭ぬけなはたから船　芋洗
逆相をやるのは母のはかり事　窓梅
通言はおやじの耳に逆ふ也　曙山
暮の嫁かけ取斗りほめて行き　器水
廻文の手に葉の中を鶴は舞ひ　竹二
御大ろく着かへる所に一搆へ　窓梅
松がえの隣へからむ町の春　錦鳥
あら玉に愛敬のある藝者來る　春駒
二ころときかぬは梅にほとゝぎす　東鳥
八重の櫻は人麿の御世話なし　松歌
わた入の十二ひとへを雛は召し　窓梅
ほの〳〵の巻ぞへに逢ふ花の留守　春駒
永日の時を期さぬはのむ禮者　かてう
賑やかさ鹽鰹にて目に青葉　窓梅
奥表やかましいはず桐紫檀　喜水
上下の罔雨毬をもつて迯げ　かてう
夜ぞふけにけりと下の句嫁仕廻ひ　片岡

今踏んだ雲で三島の雨舎り　芋洗
繪雙紙を嫁と娘がまたせとく　柳雨
三會目心あまりて夜が足らず　松歌
琴最中へ人間と傘が落ち　三交
日に燒けた嫁はめられる宇治の里　芋洗
段かつら空を見い〳〵突當り　窓梅
晝よりは夜る見た不二へ神酒を上げ　錦鳥
ひんのよい世渡り椎の實を拾ひ　三交
山門へ登つた汗を帆で拭ひ　川鳥
晝啼くと時鳥をものせぬ所　窓梅
まんぢうは鶴で茶飯は龜で喰ひ　三交
御てん山銀の扇に帆がうつり　錦鳥
海棠とさくら詩歌の花見也　鳳頭
金屏風ぬし有る所をしらぬ也　錦鳥
づぶぬれに成つてげん氣な時鳥　儘成
百へ入れたのは藪きゝなどでなし　柳雨
家根船のもく禮水馬しらぬ振り　矢正
十七で稲をはらませ名を殘し　かてう
草臥れた方から礎笑ひ出し　錦鳥
袖の上から取たのはこわくなし　春駒

細引のたらぬは嫁の手がら也　窓梅
花盛り旅立をするさらし賣　名葉
金杉の寅で息子は啌を吹き　東鳥
來ぬ人は花と風との間に見え　里鳥
くわくよくも魚鱗も今は臺にのせ　門柳
桐に實のやッたら出來るおめでたさ　鱗至
柏木と蓮生妾大手がら　里鳥
見臺をのけお枕をさせ申し　門柳
上品な符帳を付ける花の山　初春
紫を着てから內で年を取り　紀鳥
東帶へちいさく建てる金屏風　狸疉
御晝休で居續けをほつ立てる　孤雲
むらさきの暖簾をかける御祭禮　三朝
十五夜にふくべを切つて大さわぎ　如雀
桐の木へ妾は爪がたゝぬ也　三交
一日は清涼殿のむすめ守護　無太郎
ゆびへ紙卷くは保養の琴の爪　狸聲
望まれてのばした爪はひんがよし　春駒
花嫁ははたらく事にことをかき　曙山
しやんと着かへて花嫁は內に居る　龜鳥

ほとゝぎす手桶の箍のはねる音　丸龍
名代は袖から先へすわるなり　ふくべ
六角な火を兩方へとぼす也　虎同
科の次第を言立てふつり切り　如雀
年一つ藝子四五年かゝる也　丸水
逢ふ事の絕えて難義な坊主持ち　片岡
鳥臺を女房に脊負はせ笛を吹き　矢正
耳は馬つらは蛙で母こまり　川鳥
片身こそ今は仇なれ安鰹　三交
字餘りの鰹は伊勢屋喰はぬ也　狸聲
はしり大黑を布袋はくやしがり　川鳥
つら〳〵おもんみれば團ふのも損　三交
暮らし能く成つたは安いほとゝぎす　如雀
矢をひろつては木枕へ立てゝ出し　三交
行當りばつたりといふ下手の鞠　姫小
桶伏せのあたまで這入る市二日　無太郎
廿二三の子の尻も母ぬぐひ　如雀
豐後ぶし湯屋で語るはきつい事　榮桂
夜着をとん出し股引を語る也　三交
いゝ米屋よだれたらしが五六疋　東水

俄雨添乳に亭主遣はれる　松歌
どこぞへ落ちたらうと蚊屋疊んでる　錦鳥
盆前の拂ひは鼻であいしらひ　如雀
もういくつあがると雜煮間合はせ　五連
長くした首をちゞめる上はぞうり　一德
廿日過硯を買つてしかられる　ふくべ
乳母が鬼のろり〳〵とかくれんば　鞠枝
路次のかゝアを押分けて油賣り　亭々
東西々々にけちな子持也　千鶴
死は安く生はかたしは藪醫也　狐聲
鎌倉の松にふぐりのない御寺　同
かぶき見ながら人形のおもしろさ　吉川
居ずまいのわるいも女罪に成り　歌遊
てゝら一布も集に入りひんがよし　東李

俳風柳多留二十七篇終

俳風柳多留二十八篇

幸紅花荷のつてに申送り候、殘暑之刻彌〻其御地御店御はんたのよし賀し候、このかたむや〳〵の闕のさはりなく年々風雅行はれ、最上川のぼればくだす笛叟の點取に、象潟のうらみこひなき評は、かの藤の中將のたづね給ひし、あこやの松に木がくれなく候、ことしも道野邊の淸水流るゝ柳樽、櫻木に御のぼせと存候、御かへしに早々御越のほどねぎそろ以上、
扶桑に此道の盛んなるをしらさんと、遠〻羽陽の好人よりのふみを其儘廿八册めの糸口とし、はたかの地の連句を編のむすびとなすことを、菅裏がいふ、

ゆたかなるまつりごとをうく
十あまりひとつの年月の最中

ありがたきたまさか井戸で鮎を汲み　雨譚
千金を入れ萬年へ禮參り　三交

まこと名島と萬歳下に居る　雨夕
正月にいゝ御領地は二本松　一徳
後京極源氏にもれた虫を聞き　雨譚
中ほどへ定家女郎屋ほどならべ　松歌
しのぎの百本も出來る笠を召し　雨譚
奥様の御ぐしにとんび烏なし　かてう
袖かき合はせて又來春とたち　雨譚
玉の水枡で計つてわける也　志夕
門松のひつじ穂時分嫁の禮　交調
花の幕毛虫一つで座が崩れ　有幸
富士筑波左右に江戸の渡りぞめ　壽々女
文武の雨舍り貧朝持貧　雨譚
源平に咲分ける夜の耻かしさ　交調
公家の子といふが一年立つてしれ　孤雲
よる年を詠のてに葉に遣はれる　壽々女
寐るたッび家内へ嫁も暇乞　和國
七つ目の繪でお妾の年がしれ　素調
百へ入れたのは雀にならぬうち　柳雨
山々の眞ッ青になるほとゝぎす　湖水
籠まりの屛風へうつるいゝ棧敷　春駒

吉野丸吸物が出て艪かちり　鳳頭
新宅の柱に冬のしみる音　名葉
花嫁の手際秋の田苅る如し　雨夕
持つた嫁けふは藤だの桔梗だの　三交
庖丁をはずに遣はぬ京の夏　鳳頭
蒼朮を焚かぬ日鍾馗立てるなり　同
藝者の窓に松虫の走り也　陳々
新錢座鶴と鳳凰しりくらべ　虹朝
榎でもいけぬと嫁は松で切り　萬仁
夜や寒し衣や薄しにごり酒　虎同
留守番へ飯のありかと水滸傳　春駒
酢はこゝにあるよと夜伽替り合ひ　名葉
きうくつな物見垣根へ窓を付け　三交
鳥追は琴に合はせて彈き歩行き　鳳頭
十五からもう身を入れてなぶられる　かてう
淺黄より白むく遣り人きらふ也　霞朝
繪心のないは寐て居るくすり取り　狸疊
疊替調市は足をねめられる　有幸
べつ甲はどちらの道に女もの　ふくべ
牡丹餅ぐるみしてやつた口閉ぎ　かてう

牛若と名付けて局秘藏する　陳々
雁をいたその矢で化鳥射て落し　同
二箇國のうるほひになるいゝ花火　名葉
道行でいッち太義は長右衞門　魚角
中元の祝義大部屋かへと下女　かてう
美しさ裸で舟を持參なり　姫小
口からなんぞ出るやうに嫁笑ひ　柳雨
傾城の簞笥なんぞか有りはあり　同
唐木綿妾の幅も廣くなり　石斧
折鶴と羽子の子に嫁いきを出し　斧丈
牛さんあがれとは嫁にきん句也　東里
金屏風嫁の自筆でかりにやり　かてう
梅の花だんべいといはせるつもり　松歌
ほころびはひつぱり梅は丸くよみ　同
世間の嫁は手利きだの柔和だの　同
三味線を牛の引つぱる賑やかさ　糸柳
竹椽へごろをかけてるいゝ普請　雨譚
是は種々御丁寧と俵藤太　同
大人を見るに利ありはいゝ天氣　同
そんならいゝわさと閻寺の所化衆　同

はん臺の雪打拂ひ直き出來る　譚雅
なせきうくつに寐なんすえ畜生め　雨譚
茶ほうじへ姫のりと書き下げて置き　雨夕
あんころの催促ごみか致しましよ　有幸
ちつとづつ出る太股にけつまづき　糸柳
小便をたれ〳〵猿は臼を挽き　龜水
やす助言けつから金をくらわせろ　同
二日出の猪牙船宿のたから船　鳳頭
ぬか袋明けずにおきやと母の聲　芋洗
秋冷がつのつてけちな鹽さんま　志夕
茶を出して女房火入へ手をかざし　川鳥
けちな晩八疊敷に狸寐る　平口
宵はまち侘び夜中には腹がへり　姫小
小便に引窓へ出る高瀨乘り　風化
痳病の藥時ならざるをする　柳雨
又降たろう雷電に九紋龍　春駒
子を愛す顔は物ぐるわしく見え　尾上
にぎ〳〵をしてぬか袋嫁ごぼし　儘成
まづ桐を植る雛市へ亭主行き　蘇竹
山形を明店にする嫁を取り　糸柳

反古張りや似つらで螢追つかける　川鳥
相違あらざる自筆さと御殿持ち　曙山
見なさらばいやよと豆を嫁つゝみ　五鳥
母苦勞夕べも梅が三つへり　川鳥
目明き千人まつて居る古本屋　和國
花鳥風迄は異見で置きたれど　宜明
晦日にはきッと入るよと鍵を選り　一德
花相同じ松の內と名月　雨譚
やく年の三年前にめがね買ひ　丸龍
およしなんしと張肘で振りもぎる　百馬
八つ山おろしはせをやめさせて飯　雨譚
唐の助六韓信をくゞらせる　百馬
喰つみの海老賣店に殘つてる　狸汁
坂を上ると井戸綱やはま綱や　美德
新道のあたりから出る白柏子　萬二
尻も曲らぬを品川十夊　雨譚
夜道には先箱に成るけちないしや　護畔
藁くずにして行くけちな雨舍り　すゞめ
池の茶屋玉に疵なは惣がうか　矢正
下卑たがき餅屋の前でつるさかり　錦鳥

ふてた下女炭消壺にもたれてる　白花
物わすれするなと梅へ御神詠　谷秀
上野から見れば寶の山ふたつ　すゞめ
元日は夢と箒に用はなし　不醉
あどけない名札の見える日本橋　龜水
御祭禮嫁の新客一ト御殿　かてう
奥家老髮は時行のいさ薬也　龜水
藝者一組米で來るのごやかさ　雨譚
むらさきの鯉は濁らぬ橋の下　不醉
金の字が付くと屛風もかりられる　一德
鬧しさ根のない松を二本うゑ　糸柳
多辯な武士をとッしめる國家老　文集
しやうのうの匂袋を嫁こさへ　一德
交肴ほどに並べる御師の狀　交調
春永といふが油斷のはじめ也　名菜
糸道は御藏の間をながれ込み　龜水
さア御時宜々々々と乳を引放し　芋洗
人のおもて白々と加賀者する　雨譚
ゆかた着て出しなに筆の軸を切り　里笑
御虫干達磨の側に古今集　虻內

ぬかれせぬとはひんのいゝ花見也　枡水
たましゐを入れに玉もへ御出生　かてう
味方見ぐるしいも定家一首入れ　雨夕
乘返す時は一盃月がさし　かてう
山のこしどこかへこして濟戻し　名葉
雲井にまごふ白波ははかま也　不醉
法眼をいたみ入らせる仕合せさ　春駒
金銀の風さくらより匂ふ也　枡水
幕はよしかなと屛風を出しに行き　春駒
相馬公家小松菜などを引きに出る　三枝
卯の月は寐て卯月には立給ふ　春駒
なたまめのような桐油を弓にきせ　偶中
ひんのよい大食四人一座也　柳雨
色品もなく龜井戸の神樂堂　竹二
色も酒もすきだが鰹はきらひ　雨譚
下戸の盃へ生醉助言する　一德
物がたり疵のない夜の月で書き　三交
子規不二の素顏を見て歸り　喜水
松風へ横笛ひんのいゝしのび　木印
舊都の名歌八重櫻山櫻　如雀

山櫻よみ人しらぬ者はなし　錦鳥
旅をしぞ思はず廻るかきつばた　同
雨には烏帽子狩衣は月に遣り　門柳
空色を見合はせてぬぐ花の雨　孤雲
堪忍の折紙今に直が落ちず　錦鳥
せんをかうやうに吉野は堀へ着き　喜水
さァ牛も休みやと機を下り給ひ　雨聲
そこのきたまへ人々よ嫁の出端　如雀
山吹を出して實のある遊び也　狐聲
七月の節句にやつと窓を出し　錦鳥
座敷牢出したさに母放し鳥　一德
塗樽をふくべのよけるのがけ道　如雀
喰ひかけの芋忠盛へくださるゝ　同
唐の軍に音曲がふたつ出る　同
極彩色の大津繪を幕に呼び　松歌
貰つたり預けたりするいゝ天氣　糸柳
ゐり紙の吹きちる中で高いびき　門柳
九十夕を奴にする日賑やかさ　棠桂
駒下駄に勇みを付ける櫻也　かてう
餘所で着る夜具を息子は仕立てさせ　湖水

箸紙が出來たで息子くらひこみ　狸壘
唐草の柏ぁんには息子なり　曙山
ひよッ子が二羽つく籠の鳥三分　かてう
二十八歳で人間界へ出る　一徳
お職から遣手は嫁へ引合はせ　錦鳥
佛ともしらず一兩二分で置き　柳雨
追つかける方がみかんの皮をもち　器水
はだか嫁もつとも豊後名取り也　かてう
ぼた餅も里てくふのは角があり　錦鳥
暮に取る御鬮びつこか一眼か　中葉
けちな晩御免なんしがだらに來る　器水
日かげの豆のはぢけたへ四火をするゑ　門柳
門禮に鳥追ひ曲り形にひき　同
おとなしい息子俄にどらに成り　三交
目藥と鼻のあたりへ書いて置き　姫小
俄雨四つ手にのつて出來心　鳳頭
手拭を鍔にして居る御手廻り　有幸
煮たまヽで女房つき出す鰍汁　姫小
素一分はともに消えなん雪の朝　名葉
灸點を胡粉でおろすくろん坊　萬仁

知りもせぬ醫者を呼込むそつちうぼ　萬仁
太平の箒は時雨初がすみ　かてう
賑やかさ寶の山の花ざかり　蘇竹
白鳥の山田へ下りる夏と秋　鳳頭
春左近夏は右近が匂ふ也　三交
御虫干跡に四五枚いてうの葉　同
奥様は正風ていの御むつごと　芹丈
ひんのいヽ遊び手で取り鼻で利き　鳳頭
白いたつにして桐の下駄に非ず　霞朝
御しのびは鈴の鳴る塲へ蜘が下り　雨夕
月がけは弓張り鳥は矢のごとし　川鳥
ほとヽぎすぐッと末座で一人聞き　同
金銀の扇を遣ふ瑠璃の山　春駒
不二山は武鑑で見ても一つ也　錦鳥
我庵で見れば左右は月と花　雨夕
清水で飛ぶとぶたれる花の山　錦鳥
山櫻詩でほめられる花でなし　一徳
見聞する物にてに葉を翁つけ　かてう
當もなく三條通りをおぶい出し　三交
花よめにさしつめ望む後の月　梅子

嫁姑流義を名のるひんのよさ　十口
名物のふたつて宇治は夜をねせず　魚好
美しい捨物のある三保の松　喜水
涙の手しほむらさきの實ばえ也　芋洗
未來記の仕舞いろはを書めて置き　雨譚
夕顔を御ほふしやといふ樣な公家　延年
笠木からつふにあびせる久しぶり　雨譚
車引娘をひとり壻なくし　柳雨
にはとりを握り拳で呼んで居る　芋洗
山歸來まづかさばつた藥也　同
戸守に母の來て居る旅の留守　かてう
たいくつなもんだとかたひ川づかへ　同
ついぞ着ぬ物を大名箱へ入れ　孤雲
目に青葉切りて句のなき京の夏　ふくべ
六十のうちに虫けら五六疋　三交
お妾のゆびは裸で動く也　儘成
扇箱はづかしくない拂ひ物　孤雲
隣から戻つて雛をせつく也　枡水
座頭より返事拜聞いたし候　孤雲
野がけ道畔をゆづつて火を借りる　陳々

多葉粉入ほめて娘は帶へあて　柳雨
かき餅を嫁川止め明きへつめ　錦鳥
玄米女色お袋へ二人ぶち　儘成
しかられる手引座頭の足を拭き　孤雲
御饗應春の日ながくまだ暮れず　春駒
御本坊雛を飾つて見たい所　志夕
晝顏の花は式部が筆にもれ　ふくべ
蛤をつむ所九條あたりなり　孤雲
はづむのは姉うなるのは弟也　春駒
錠前に禿三つ四つ口をまげ　儘成
付てゆく母も一段聞きおぼえ　古柳
宿下り芝居の夢がさめたやう　志夕
しれぬはず番町樣と斗り書き　喜水
檢校の庭は女房のさし圖也　古柳
二三疋狐を午に買つて來る　柳雨
べつ甲はどちらの道に女もの　ふくべ
下屋鋪垣根をひたし物にする　かてう
うろたへて並べる將棊負けたやつ　汝呼
たる酒であるのに内義出す氣なし　同
歌がるた人づてならて下女取れず　川鳥

ひんのいゝふんぬきをする花の朝　鳳頭
舞の手も珠數と替はりし嵯峨の奥　柳雨
はな紙をおッこちさうに嫁は入れ　儘成
せつ羽つまつて金きせの嫁を呼び　古柳
鬼の留守せんたく嫁の水調子　志夕
嫁の顔數首に見える頃に逢ひ　霞朝
花の散るたんびに見える白いもの　友呼
雪の立居にもえ出る緋縮緬　蘇竹
むだな事初會にちッと上げやしよう　かてう
ばゝアの顔も二度來りや笑ふ也　姫小
大文字を雜巾で書く十三日　鳳頭
義太夫の本ふん付けたように書き　友呼
かけ向ひ尻をまくつて産の世話　鳳頭
大ひきずりの女房はひのえうし　同
藪入をのせてさんまを買つて居る　枡水
生醉はつぶれる時に見世を出し　孤雲
いざ寄つてあたり給へや亭主留守　柳雨
丸山の女郎和漢の味をしり　陳々
御ほうびの名は隱れなき簑と笠　名葉
御旅行は音に聞えた御出立　三交

御立身拍子木迄も加増する　萬仁
内心もぼさつで書いた物がたり　芹丈
有明も只有明も名歌なり　柳枝
出遣ひのやうにして行く十五日　鳳頭
八景を一つ抱きこむ源三位　同
紙びなは雨具を召た立姿　志夕
おく樣は正風ていのおむつごと　芹丈
みだれて今朝は御機嫌とおぐし上げ　蘇竹
石で手を詰めたは綱がはじめ也　鳳頭
柳櫻をこき交せて母しかり　霞朝
おめかけは二世と三世の間の物　同
一トまくを内所で咄す御代參　かてう
ふさ楊枝横に動かす耻かしさ　儘成
取ればとるのを愛相に嫁とらず　陳々
手や足を藥へさしとくいゝ日和　素調
連彈きは色氣付いたが笑ひ出し　枡水
歌はなし石屋がするは辭世也　丸龍
風呂敷の高低になる送膳　すゞめ
板の袋をかぶせとく御定杭　丸龍
米のぬけがらを疊屋搗いて居る　門柳

花咲かせぢゝイが來たと新造いひ　竹二
芋見ざる間にかしらを計りこみ　松歌
弱さうな周倉五月はじめ來る　春駒
秋の野すつたるかり着して女房出る　丸龍
お釜のはく／＼にならないは慈童　雨譚
逃げた跡仕内がみんな分る也　護畔
伊勢屋の生酔酒だか鰹だか　喜水
そこだよといわれて下女も一首取り　糸柳
山越につん逃げべいと輕井澤　狸疊
獅子の下あごで家根船飯を焚き　龜水
おいらん樣はどうじやなと淺ぎ洒落　竹馬
首斗りするのは安い入替はり　春駒
むしがれゐてんびん棒が太過ぎる　龜水
唐茄子を入れたで平が安く見え　雨夕
黒鯛をからしで旅の留守に喰ひ　霞朝
ゑんまの日調市二百と帳に付け　三交
お門違ひさとそろ／＼出來かゝり　譚雅
路次口の笑ひ歯入が出して居る　すゞめ
おしづまつての御祭も金屏風　孤雲
ひげなでて來たは大きなこけ衣　不酔

木のうごく度よみがへる暑氣見舞　かてう
その子が目つきまん中の子は三分　三朝
鹿島さまおあきなさるとばゝアなり　玉章
頭をば大家へ遣ふ料理人　矢正
村の花嫁びやう打のくらで來る　不酔
封の儘居つゞけにある母の文　矢正
村渡し二棹庄屋もどさせる　玉章
股引で角町河岸へあがるなり　雨夕
さアきめろ／＼と隅田の七つ過ぎ　芹丈
いろけない紅葉こんにやく土産也　玉章
京の廻廊へ江戸ものどさらおち　柳水
たすきがけの口上味噌こしで來る　狸汁
後生だとくどかれお竹こまる也　錦鳥
棒組曰く如才はねい旦那だよ　延年
もう取つて下さるなよとはゝはうけ　同
まさかの時にしちにおくよろいなり　同
瓦焼く釜はぶざまな口を明け　龜水
ゑんどう豆は飛色にはせて居る　虻内
いろは茶屋ぞくを引くには骨がおれ　同
おめかけの樣にや奥樣もちやがらず　同

芝居をかづけてむかしは女郎かひ　蚯内
廿五は欲心のない手を合はせ　鳳頭
夕立は帳にくはしい呉服店　平喜
供のからかさで娘の内が知れ　鼠聲
八つの耳ふり立て歸る手習子　窓梅
一つ身をうしろで合はすやかましさ　鳳頭
碁の客が來ぬでしッかり押がきゝ　三交
御詠歌に出るはかゝアのすがれなり　長故
みかきよしのつい立に鍔掛けて置き　雨夕
年玉のように辨慶投げてやり　交調
のびをした木魚を釣るす興福寺　丸龍
美しい狐男のまげを切り　龜水
十二銅づつの喰ひつみ湯屋は出し　かてう
家の居る所と外科殿をおしへ　雨讃
評判の俵としやれるにわか雨　同
月花で二度恥かしいのは娘　有幸
地守りは冬の年貢にたんと干し　交調
腹の灸點笑ひやむ迄はまち　枡水
角兵衛じしそばで小言をぬかすやう　龜水
分別はかうか湯殿は無分別　矢正

剃刀をへの字の穴へさして置き　龜水
新造の客眠いのにじれッたさ　枡水
やあゝ旦那といへば下女わたしかの　交調
大こくの外を目がけるわるいやつ　同
つみなくてはい所の月をつくだみる　同
其晩は片ねれに成る機の足　まゝ成
ふく水盆にかへり内々で入れ　同
かわらけでこつさに語る櫻艸　龜水
ほの／＼に明石も須磨も作立て　鳳頭
琴箱の花時分行く下やしき　玉章
あくびのふたを一本づつ公家衆持ち　まゝ成
眞綿で首をつゝまれるはづかしさ　不醉
めかけのは干しぶえのする土用干　鳳頭
けふも又留守でござると諸葛亮　完示
どこへ／＼と猫の子に湯をあびせ　湯島
荒にぞあれし喰ひつみへ嫁はじぎ　左滿
ぶる／＼物で名を殘す天王寺　春駒
へしに屠蘇預けて下戸はかけ廻り　紀鳥
市に行きむすこ疊をしよつて來る　青好
てこずるといふ傾城を淺黃買ひ　柳雨

あかるくかへり云譯はくらいなり　尾上
鯉の看板書いて出す向島　丸龍
虚無僧はまゐらせ候ではかどらず　同
逃げたら夫れでいゝわなと内侍とめ　雨譚
團子の物日をゐッとこなとしよはせ　春駒
それじやア吉原の道だ大たわけ　ふくべ
据風呂を垣根ごし呼ぶ組屋敷　雨譚
目出たいと目の出るやうは大違ひ　同
大わらひ道で下の句おもひ出し　杁水
雲をつゝんで十五本文を出し　喜水
、仕合せさ足を袋へ入れる也　孤雲
地黄のむ側に大根美しい　一徳
やッと寐やしたと剃刀かりて行き　杁水
雨こん／＼と地口行燈仕舞ひ　雨譚
白髪(はくはつ)の若者粉なを挽いて居る　狐聲
取替へて下女は鯨を片身買ひ　矢正
素見にもうとんせられるつらい事　雨夕
替玉さなぞと持参のおくり膳　梅子
もう娘花見に小豆飯を焚き　歌笑
三月と五月源氏の餅が出來　雨夕

からたちに成らず橘返咲き　柳雨
毛深くも吉事鍾馗をめかけうみ　姫小
御座敷かわゆひ馬とぞゝろぞろ　杁水
大老女まじないほどに片はづし　龜水
千切小掛にくゝつた青龍刀　狸汁
向ふから越すものゝ無い年の坂　孤雲
をしい武士印籠目貫帳の紐　丸龍
鳳凰が一日鷺に化けて出る　龜水
かわいらしいからと唐木屋を手水　雨譚
外にない進物夜具へのしを付け　松歌
癪が痛うおすも物日過の事　狸汁
番附で嫁おはぐろをにえ付かせ　柳雨
嫁のはぎ短しといへど百兩　雨譚
逃げて來た新造前をよく合はせ　素調
山吹を持つた大津繪暮餘り　孤雲
暮の嫁片足金を繼いで來る　雨夕
やうやく冷氣右手に葱あいしらひ　延年
琴爪をはづせばそとの人がちり　春駒
いくらだと正宗の直を開きは聞き　尾上
植ゑに出た田を見て通る玉のこし　川鳥

蜜柑をも蓮へあたらぬやうに投げ　如雀
十三夜だと仲國は栗毛なり　春駒
なまりぶし切るのに闇は未だ櫻　蓮鳥
黒猫をいぢり代脈ひッかゝれ　紀鳥
呉服屋の他行强力連れて出る　同
變な事斗りに他人の弓矢出し　三交
盃のならし白髪の嫁が出來　松歌
花盗人の肩さきを毛虫はひ　鼠聲
風車子もちの神が賣りはじめ　かてう
風呂鋪の模様はつひぞ見ない花　東鳥
馬鹿者もあると仕立屋居所なし　錦鳥
ぼた餅に暖簾を分けて付けてやり　川鳥
灌佛のゆびに成るまで伊勢屋待ち　窓梅
里遊とはおのしかと母文を出し　一徳
膳なかば欠落をするよわい酒　窓梅
吉祥天も住みさうな御山也　三交
松竹の御門をくゞるかんこ鳥　矢正
御菓子は水の濁らぬ所で出來　柏之
御意怖うない御門番身共也　泥鼠
たいがいな馳走等で庭を掃き　左満

東寺から歸ると御庭からッ掃き　泥有
二階へは膳の出て居る百人一首　春駒
門松に取附きすがり申入れ　雨譚
禪寺切つて歸るのは無一物　同
花の宵今道心の澤山さ　泥有
ほとゝぎすうかと指身へ筆の軸　春駒
のれんをかゝげ雪を見るごふく店　三交
神酒徳利一つこわして二つ買ひ　笠雫
鈴の音にまがきの花は咲揃ひ　錦鳥
御はらひへ柄を付けてもつ太神樂　雨夕
お布施をとられ和尚様飯を喰ひ　龜水
靑く日の裏から當たる田植笠　芋洗
書く度に股をひろげる文廻し　偶中
ありがたい御代は竈にたつ煙　柳枝
御所近く匂ふ名所の八重櫻　萬仁
芙蓉とは水ぎわのたつ御立身　春駒
江戸染も京染も入る百人一首　鳳頭
石山で須磨や明石の物あんじ　志夕
はんじやうさ薄はだしに見る斗り　春駒
十軒が十けんながら公家の宿　三交

四五日は雛に押される花の山　鳳頭
花の山御幕一ト重の取りしまり　春駒
虫干の序でに二日出して遣り　鳳頭
棧敷のはどれも跡月結た髮　同
七種に道具のたらぬ荒世帶　素調
雛分けに母繩を入れしかられる　川鳥
新宅の柱に冬のしみるおと　名葉
けいせいは長蛇の陣を敷いて待ち　虎同
海上へずらりと並ぶ平家方　霞朝
下手の鞠手の前足のふみ所　姫小
袖口の仕上げは二つ三つならし　三交
賀の餅は腰の强いが自慢也　陳々
美濃屋と近江屋緣組は相應し　志夕
留守番へ飯の有家と水滸傳　春駒
息杖のたんびに下女はくゝし上げ　友呼
福石を目のないくせに撫廻し　錦鳥
左官屋は戸袋斗藏造り　かてう
子の泣くに早乙女足をぬきかねる　風化
小便に下座を切つてる草履取　有幸
落頭ともにたつてく大一座　有幸

角兵衛じしまくを明けるが仕舞也　雨夕
茶屋の名を聞き／＼傘を引きたばね　鳳頭
秋ぬれた衣を夏の山で干し　矢正
加茂よりはやさしい奥の競馬也　鳳頭
名僧を握り若殿御誕生　かてう
蕗茗荷御國から來て芽を吹かせ　矢正
鐘を出て見れば江戸中傘をさし　春駒
月夜は作り時雨にはゐらむ也　三交
へんてつもなく三井寺の朝の鐘　雨夕
いづれへも通用の能い御山内　三交
かつを木をいかして繪馬の時鳥　雨譚
四つ前迄に蕣の卷が出來　雨夕
住の江につくと月落ち烏が啼き　名葉
のッ引のならぬ名歌で官女へり　錦鳥
孝靈五年すさまじいむぐらもち　丸龍
虫の音も賣買にする繁昌さ　かてう
脊中にも輿の付いた御馬也　二久
梅と梅との眞ン中が榊なり　雨夕
御飾りを見るのは下卑ぬ鍋覗き　同
ひんの能い入札鼻を當てにする　柳雨

席いまだ定らざるは初の雛　有幸
廣敷へ町駕で來る美しさ　霞朝
ばゝァ仲間でもさつまは大あたま　蘇竹
腕の灸までは殿樣氣が付かず　譚雅
袖を引切ると琴をば置いて逃げ　歌笑
齒のぬけためかけ當主の脚をなめ　同
雪や氷さへだつれど同じ孝　和谷
子を掘ると子を埋めるのを孝へ入れ　春駒
一門をしみ唐土へ三箱やり　丸龍
山鳥や啼く鹿も嫁手とらまへ　松歌
十三度嫁はこんがう力を出し　霞朝
女ッ切れの見世に居ぬいゝくらし　三交
先祖の山莊なくなしてありや／＼　芹丈
高つきのそッくり殘るいゝ棧敷　枡水
重ね着をする物でなし小夜衣　呉竹
京染にしても桔梗はじきにさめ　木印
近道をよくしつてるも下卑た物　雨譚
尻を引ッからげ驅出す名句也　宜明
物もふのあきれてかへるずるい内　同
歌がるた膝の下からほとゝぎす　偶中

耕して農具をさがす水の跡　名葉
譯が付雛迄よこす荒世帯　素調
無事な三めぐり早道へ二百入れ　柳雨
こんな笠よせと忠盛呵付け　雨夕
軍兵の不足付木で間に合はせ　柏之
身代が廻はると首が廻らねえ　護畔
しらぬが佛輿屋から市へ出し　雨夕
夜着の綿女房に内をせばめられ　笠雫
かうもり羽織を柳の下で買ひ　泥有
三十一年早く死にをしがられ　孤雲
たかる子へ愛相へんな面をする　龜水
安い花見立時けつをひつぱたき　雨夕
がんにうの入つた娘は聲がわり　狸汁
とッくりの間へ植ゑとくとうがらし　雨夕
たゞ廣くはき溜中を南瓜這ひ　同
内井戸で下女が返事がこんと言ひ　龜水
其下ですつぽん首をおやしてる　譚雅

大尾

穴も無いくせに面影をしむ也　雨夕

羽州山形連會

霞から秋風長いうそをつき
嫁の帶そばで苦にするあつい事
ぶりがれん知らぬに家中氣がつかず
からかさで盗人の來る菊の苗
生きた雛おがんでかへる鷄合せ
碁の客に勝手は將碁倒し也
手まへ免許の元信を庄屋掛け
風鈴を扇でならすあつい事
一下り讀むとたづねる母の聲
土用干し疊のうへの廻りみち
干瓢の結びは口の中でとけ
引越しの道具配料猫をだき
御十念質屋はしたに仕てわたし
女房の癪八朔の雪あたり
普賢の開帳冥加金として三分
蜆汁ていねいに下戸喰仕舞ひ
丸薬は手の筋なりにかけ廻り
生娘の氣でしかるのを下女笑ひ
美しくなるとかる石捨てられる

尻の毛がぁたまへ生える角兵衞獅子

二卷目

杉の葉をよけ〳〵糸をたぐり行く
簔一つ有るとやさしい名はたゝず
鐵炮のせんくす貰ふ妙國寺
大鳥毛其後ねからふり人なし
猫に取らせろと衆徒等も初手は言ひ
茶畑の茂りに葺も光つてる
獅子と蝶廿日あまりは中のよさ
俄雨水かけろんをおんながし
羽衣を見失ふまで口を明き
鳴子引く氣持で母は咳をする
柳櫻に生酔をこきまぜる
かきつばた切つて振袖しぼつてる
相の山神道流でせにをうけ
保昌もはかまのくせは直しかね
歩一つに二タ人三人立ちさわぎ
銚子から硯へしたむさむい晩
ゥ冠り女に着せて賣りひろめ
ごふはらさくごき落せば川が明き

おはぐろを下女公家悪のやうに付け
びいどろは心づかひのみやげなり
湯もどりの小ぞうをていしゆ左まへ
とんだ支離は奥山と花の色

再篇に追々諸州の點句を著さんことを思ふ、好人笛叟點秀逸あらば、表徳を印し送り給ふ事を願ふ、

俳風柳多留二十八篇終

俳風柳多留二十九篇

道叙

連歌に古式あり、俳も夫より出て、一巻の首尾、三句のわたり付てふことのありて、道にたゞ〳〵し、今の前句は一章に問答あつて、孝貞忠誠にかんじ、はたたはれたるには、冊子に向ふて獨り笑を催し氣を養ふべしと、古呉陵軒のぬし常にのたまひしを思ひ出して、雪成舎菅裏廿九編の口に口眞似して、たゞ世の雅君子に口のはたをつめられん事をおそる、

寛政十二算月見月

鶴瓶へひゞく月宮殿の舞　三交
粂題に鶴で當座ははさゝぎす　儘成
細布を開れ能因こまるなり　未學
箕はてにはを種々な物へ付け　亀水
筆二本岩と松とに捨てゝ置き　孤雲

室町と兩替町は餘所のうち　不醉
端午勢時代違ひの屯なり　川鳥
鯉をねらつて切様に鍾馗見え　雨譚
御太刀と御馬をもめた紙へ書き　交調
唐人は瓜と李を大事がり　雨譚
間はづれな楊枝鷹匠腰へさし　かてう
船子ども舞を覗いてしかられる　前田
瓜に茶をのませへちまと引つかへる　柳雨
おいらんの飛切鈴にかゝはらず　交調
かたい紙おくんなんしに間(あひ)をさせ　盤客
二タ人行き一ト人は親に憎まれる　すゞめ
腹を突出して鱠をやたら喰ひ　蝶々
白い巻ずるめ庚申こしらへる　雨譚
素人芝居ごやされる銅たらい　同
御詠歌はむかしふさいだ口を明け　喜水
湯風呂はひッそりと土佐節を語り　雨夕
惣菜を開いて向ふの人を呼び　名葉
迷ひ子を金でたいこがさがす也　交調
しつくすと庭へ出て見る料理番　喜水
鑓提げた向ふからしやうぶ〳〵　名葉

蛇の目をも汐の目にする大嵐　芋洗
素人の細工鉈だの木割だの　かてう
紅ゐの附木を出した大蛇賣　同
生酔を巻付けて來る下戸の首　丸龍
西瓜賣矢間を明けて覗かせる　柏我
脊を腹に替へるいせやのなまりぶし　雨夕
五文くりかけてあぎやうといやなやつ　柏我
鎌疵に腰押に來る村公事師　霞朝
洗濯の時は足駄を尻へはき　東長
足駄の追込いざりの手にはかせ　雨夕
大なんぎ荒打ふんごしがはづれ　有幸
ゆびでくておかねを汚す村芝居　丸龍
長局笑ひをとこのちゃれ髪　竹二
雨だれに切られたやうな聲を出し　鬼文
女郎はおけし惣髪は地もの也　頼丸
御産所をふき合はせずに御誕生　三交
千に一つは蝶々と美人なり　不醉
うらゝかさ六位の服を毛虫はひ　雨夕
逆水も白水に成る繁昌さ　錦鳥
千載に日陰の櫻一本いれ　かてう

御離縁の跡は猫またやしき也　かてう
野馬臺の通俗物を奥で書き　霞朝
鍋ぶたのうへに目に立つ茗荷の子　錦鳥
名句にはなれとはしらぬ樽拾ひ　不酔
九月咲くふじは十一日さかり　雨夕
松はつれないが櫻はつれがあり　錦鳥
呉服店一日藏がものを言ひ　同
鐵釘を直すに師匠骨を折り　三交
水の面にてる月浪を息子行き　不酔
延喜の代櫻の方へ毛虫坐し　雨夕
御二タ人は植木屋の出る百人一首　三交
木隠れの月はてに葉のねだり事　春駒
見はぐつて名句と成つたほとゝぎす　雨夕
十三の春十七の名を殘し　孤雲
雨やどりより大そうな水舍り　錦鳥
色紙の付くのは若い男竹　竹二
夕貌は官女山吹はおしやらく　雨譚
かたい紙鶴と金の札に成り　鬼文
外聞は萩で實義は女郎花　可候
紅葉植ゑべき社だに柳也　雨譚

橋中からをんなの仙人が出る　白志
非業の死でも御年の上頼政　雨譚
近江からふせりませうと美濃へ言ひ　雨夕
急度した相手で遊ぶ乳付の子　龜水
きめ所をきめて年增は靜なり　松歌
口をしくない虛無僧は立派也　柚路
下疳ではないと鼎の譯咄し　同
根上りの松といふ身で蛸歩行き　東鳥
かねて夜討と定めたる蕎麥の客　交調
ゑんまの冠のみ口を二本さし　龜水
歩をなくしはぢき將棊は法度也　雨譚
ぶたと心安くなつた藥取り　把菊
醬油樽分に過ぎたる纏一つ　儘成
顏へ出ぬ恪氣仲人もてあまし　喜報
君命をはづかしめざるのは相撲　春駒
立島の箱で賣つてる心太　雨夕
持參嫁鼻があぐらをかいて居る　同
見くびりなさんなと下女二百かし　喜水
淺妻に似たが三十二文なり　交調
女房の損料ていしゆ五兩取り　丸龍

口へ出た蜩見て嫁くはぬなり　枡水
けいせいのはだしよく〳〵腹が立ち　同
後の月盃の無いてうしなり　不酔
わるい奴ねぎをかやれとねちつてる　霞朝
妾の目見えおすき見はきつい事　文集
もう一首ねだると二位になる所　春駒
むらさきにぼんやりくもるいゝ屏風　呉竹
五十年綟子の團扇を顔へ當て　芋隣
明けろくを打つたで豆腐屋解せず　雨譚
印形で來るきつとした寒見廻ひ　雨夕
陰中の陽は和尚の緋の衣　芋洗
短冊にするゑられ御用世に傳へ　かてう
あざなは昌平本名は芋洗　雨夕
割込みに咲く蕣はいびつ也　名葉
お月さま次第と文をやたら出し　雨夕
いくじない形で聞き〳〵十三里　矢正
雪月にねぐらのもめる酉の月　かてう
白茄子の側で見付ける嫁の芋　川鳥
運の盡き俵に米を見付けられ　柳雨
鐵棒で御免の女郎送るなり　錦鳥

朱で假名を付けた大字へ人だかり　雨譚
矢車のやうに並べて鯵をやり　庵略
名の上を引裂かれるは負けたやつ　盤石
ばたアらばたら初會の上草履　雨譚
狠はなみだで出來る衣がへ　竹二
柄に手をかけねめ廻すと歯磨　龜水
人間にあたふべき衣は並木　雨夕
辻番の百ひろを出す放れ馬　東長
植木屋の燭臺半土おッぷせる　かてう
旅立のなりて白玉賣つて來る　雨夕
おッぱじけさうに菊豆馬へ付け　かてう
女房の我意を顯す煮た鰹　雨譚
見料に土手で西瓜を奢る也　同
あら身でも折紙の付く暮の嫁　呉竹
鶴の舞ふ度にゑぼしが動く也　錦鳥
紀にもかけずに名を替へた歌人也　窓海
悴に御問ひなされイざ是善卿　雨譚
針も心も眞直な釣人なり　盤谷
不二山にはつ雪の降る暑い事　晋風
八景でてりふりなしは三井の鐘　窓梅

三味線をじやんといはせに國を立ち　寛洲
甘い御意なめ過ぎて居る舌たるさ　芋洗
どう考へても山吹初手解せず　可候
御首尾よくさがれば嫁の旬はぬけ　把菊
一息ついて和田の原嫁はよみ　曙山
ひとりでに起て宿下りなぶられる　窓梅
かつら男をまつて居る仲の町　雨夕
近くば寄つて目でも見ろ三分也　仰山
あたりを拂つて三分が賣殘り　雨夕
たばこ盆うろぬく側につらい事　窓梅
稲妻をさせてふり向く仲の町　松歌
嫁ころり／＼仲人あん氣也　東鳥
ばちは袋に納まらぬいゝ藝者　盤谷
火鉢から出る幽靈はおもしろい　川鳥
大口舌膝立直したてなをし　廿梨
わたしかせいに成ると嫁燒初め　盤谷
ほいろのような月を芝居で下げる　丸龍
貝詰めは空腹のしたすき油　盤谷
見こし入道でいろはをおしへてる　春駒
芝居へやりやしたと母矢取也　喜水

はじまりを四五八首ほど乳母覺え　丸龍
まりこの喧嘩摺子木をやたら出し　庵略
あたまてん／＼足でする角兵衛じし　龜水
おきやがれこぶしたれにもころぶ也　同
雞とつがつて出來た角兵衛じし　三交
ぼた餅をこづく如くに持參され　雨譚
一生奉公かゝとにたこが出來　寛洲
かつら男が上ると下がるかつら姫　かてう
繁昌さ雛ども下りるせきがなし　矢正
笠がよう似たと言ふ人の無いを召し　窓梅
沖のかもめでは傳授にならぬ也　雨夕
すれ／＼な男女の交じる六歌仙　錦鳥
とめは申さぬが追剝がよとよみ　三交
名の高い姫は高尾をよせ付けず　窓梅
兄は腰簑弟は緋のはかま　可候
もみぢ亂れて品川へ流るめり　窓梅
冰は妙だと有常へ暑氣見廻ひ　雨譚
けいやくが濟むと玄徳から始め　柏之
生酔を家づとにする花の暮　可候
すゝきおひけりが息子の頭痛也　窓梅

いたい事あすこの袴炙の帶　柳雨
ぽッたりと散るは會式の櫻也　すゞめ
玉の盃底なきが眞間へ行　雨譚
毛延壽市で賣るのを書いて出し　同
おばあさんのは秋の田がよめぬ也　晋風
産んだ夢見て夜の長い里の母　東鳥
毛氈へお直り候へ鈴の音　鬼文
けんしきも肴も崩す三會目　かてう
牛若は大長刀に二度出合ひ　寛奴
俄雨上戸かけ込むしる粉もち　柏之
大的の後ロを通る風ぐるま　喜水
おそろしさ六文ぬけた首で越し　姫小
罪に成る珠數を持つてる鱸釣り　窓梅
釣船の茶飯しよう事無しに焚き　盤谷
もり替への內で喰へぬは女郎也　喜水
四十九で持つたていしゆは大ぐらひ　盤谷
引馬て大門を出るさんだ客　潭雅
庖丁で土手の閒地を打つて見せ　つばめ
新酒を上げますすと通ひをしめて來る　川鳥
下女ちろり白衣で出して呵られる　郷山

やきもちで下女鐵網の內へ寐せ　雨夕
眞ッくらな夜宮他國に無い神事　窓梅
ぬらくらとしては剃られぬ神事也　寛洲
箱の水蜘手に分るはんじやうさ　錦鳥
かすッかに月と口をよむけんさうじ　窓梅
かじかんだ手で竹のこの皮をむき　つばめ
鉢植の梅日當りを追廻し　雨夕
一曲輪秋來ぬと目にさやか也　姫小
一箱の主でも駕で入れぬ所　川鳥
鳥の名をふたつに分ける渡し守　窓梅
高い鼻低くしに來たせかひ坊　同
桃の枝かい敷ぶたのさし身也　柳雨
母へくつ付いて花嫁すわる也　雨夕
仲國が馬枝豆をふるまはれ　大喜
不器量に暮迄のばす大社　窓梅
木枕で翌を嬉散寐付けェず　漁川
人まねこまね八朔の更衣　雨譚
霜天にみち三角な雪が降り　柳雨
煮る芋をひとつ殘せと大卅日　雨夕
明日のうらは今日休みなり　同

引け過の廓下半の反吐のやう　やなぎ
ふり上げて待ぶせをするむぐらもち　花丈
輕業の年明國で柚に成り　矢正
賣れるほど飴屋は頬をふくらがし　すゞめ
くだり賣り水を五ッ合もつて來る　窓梅
こわくない化物を下女こしらへる　雨譚
虎の皮より恐ろしい緋ぢりめん　龜水
腰元の宿割膝でにおる也　かてう
閨女の折々さぼす石どうろ　玉章
湯豆腐はしきし田樂はたんざく　かてう
落葉の頃に橘くんじゆなり　錦鳥
敷しまをおり出す人のひんのよさ　矢正
梅の側春木町とは面白し　門柳
かんばつに天水を呼ぶ寶の井　玉章
松はぬらさず山吹はずぶぬらし　同
遠縁に結ぶむすめの持參金　雨夕
ちるらんよりもちりんすの面白さ　芹丈
牛馬も虎の匂ひをかいで居る　柳雨
手の有る女郎しよい投げや腹やぐら　門柳
湯殿から手を出して居る桃の枝　柳雨

赤とんぼもじかたぎぬに朱稍なり　雨夕
山の神闇手を投げる月見すぎ　玉章
齋日の土弓遠足よりもぬれ　竹二
聟が來てらんめんにするいもつなぎ　矢正
はやりいしやかごに手紙が二三通　同
奥樣のおひろいお下心なり　蘇竹
千代の春野邊に沓跡殘るなり　かてう
御法をば眞如の月がさえて書き　東李
且又は地下人のするうたまくら　柳雨
水の無い月に雨降る山は明き　矢正
下屋舗あさるきゞすに琴がやみ　川鳥
行暮れる頃に櫻の下へゆき　錦鳥
花の江戸だけに水迄枝が咲き　有幸
眞ッ直な雨にはぬれぬ時鳥　玉章
雪の日は文臺に乗る樽ひろひ　芹丈
二箇國のうるほひに成るいゝ花火　名葉
十返りも付けさせてうる御ゑん日　柳雨
蚊やの中千代は小首をかたむける　芹丈
友の手土產いゝ役者いゝ女郎　柳雨
十指(じつし)のゆびさす所いゝむすめ　霞朝

てうちんの影から禿ひよいと出る　錦鳥
おつかさん御手かへとよむ雪の朝　門柳
一つ此むすめの門に留駕籠　芹丈
物干じや日傘の實否分り兼ね　かてう
猫となり杓子と成るも孝の道　同
開運を女の願ふたこ薬師　芹丈
金をつかはぬごら者は在五なり　玉章
美しい若後家ほんの命取り　文集
二人寐の蚊やひろく成りあつくなり　魚角
しん道できれ〴〵に成る盃をごり　萬仁
他國から富士へ代參一度立ち　玉章
百に無い鏡を六歌仙へ入れ　三交
水繩で大工迯水追無くし　姫小
十月はぢまいをかせぐ大師さま　霞朝
軒端の梅は數百軒つゞくなり　門柳
法眼入來御次ぎ迄匂ふ也　石斧
下谷でも小鼻うごかす御ゑん日　霞朝
急な事始皇を爪ですくふ也　石斧
お蜘樣乞食仕立てに貝をする　萬仁
仕合はせな娘は母にあふばかり　文集

あゐ繪の伯袷より直が高し　玉章
ぬれた袖嫁がまくらの松で干し　萬仁
白むくの裏からきれる弱い客　三交
小姑に世事で片袖縫ひまける　かてう
白きを見れば夜ぞ更ける紋日也　三交
芳町で尻とり五文字いゝあんじ　文集
長歌のくんどくをする品の僧　同
お客とは女の枕言葉なり　芹丈
蜘一つ野中を歩行く有りがたさ　柳雨
お伊勢樣鋲打で賣る忠臣さ　玉章
日本に一つは橋の一里塚　錦鳥
青空へひつ付きさうに鶴は舞び　霞朝
十七八て名高いは雨と花　文玉
幕串があたつてをしい枝が散り　枡水
孝行は田町須田町向島　枡雨
日本は、鹿に鞍置馬鹿ばやし　三交
嫁ちよびと手を川に出し花に出し　枡水
辨當箱の大將の名を殘し　三交
摺子木の棒引客と禿する　玉章
大文字を書くが扇の要めなり　川鳥

これ切の棧敷茶屋から扇箱　かてう
面白い粘入三枚で三分　柳雨
ちう王はきやん玄宗はおむく好き　文集
籠の鳥三度目からは餌づく也　玉章
すきな事藝子染めたりはがしたり　柳可
甲に似せて水牛を下女はさし　同
鰐足の出るもことわり鮫が橋　紫菱
替りもの蔦の中から芭蕉出る　霞朝
衣の薄い漁父が出て言ひまかし　石斧
外に無い山おくらでも百一つ　東里
つる音に矢よりもはやく乘付ける　同
御立身ころはて鯛のあらをにる　玉章
妾かえと奥中で胸わるくする　同
紅白の姿を作るはづかしさ　文集
三ちうが一つ掛けたで養子也　雨夕
和漢の忠義たばこうり肴賣　柳雨
松のきざくを顯してりゐん狀　玉章
鋏虫庭籠の口へそうろ〱　三朝
御ひそうは足の八本無い斗り　東里
南州は牛北州は馬を越し　玉章

袖口へ徐家念佛をちッと出し　石斧
十露盤のお舟に乘せて調市引　霞朝
まぎれふんどしへ去狀そへて出し　石斧
させもせず仕もせず二人名をのこし　雨柳
青空を羽はうきで掃くのどやかさ　文集
御座敷でちるはきのふの御家づと　同
裾が淋しいとあやめは其常座　石斧
最明寺大きな木賃泊りする　三交
あくる日はいざこざ聞かん都鳥　玉章
強い暑氣付髮かく〱する　霞鳥
八雨の外は讀まずにひろいこみ　同
女房はけんのん性で尻を出し　東李
天と地の間を九里餘も登る也　雨夕
白水を脇へ流して菊をうゑ　霞朝
摺子木の棒引客と禿する　玉章
名の高い夜ばい立田の山を越し　三交
立つ時に雀大きな羽音させ　萬仁
釣臺の桐油で戻る御殘念　枡水
道成寺おらが地主と大家譽め　三朝
舟もよかろうとさしみで呑んで居る　枡水

初音をば聞た斗りのほとゝぎす　有幸
長崎と唐は江戸でも向ひ合ひ　萬仁
目が覺めて眠つた親を思出し　雨夕
十五夜の花たて御用取に來る　萬仁
不屆さ屛風を池の上へ立て　文集
むくれは金の下にある御家柄　雨夕
唐土はおろか天迄御手が知れ　枡水
鶯のまゝ子を一羽集に入れ　同
けんぎやうに成るに大坂かゝはらず　三交
傾城に緣の有る木を住寺うゑ　有幸
堺論濟んで初段に庄屋成り　玉章
跡へ廻しなさせき込む歌がるた　枡水
鳥籠へみかんを入れて口をしめ　雨夕
はやるやつ守木尊は千手也　文集
けいこ場のやうに板まへかけて置き　萬仁
柱までみち／＼われる嫁のへや　玉章
紅ゐは玉座紫御ひざもと　芹丈
辨天と天神の間(あい)かすむ也　霞朝
隨一の客ずい一の女郎なり　芹丈
松風を象牙でふせぐにくい事　霞朝

僧正の腹あしくする榎たけ　三朝
並の屛風へは冷ぞうめんを出し　枡水
宗任が生捕られたは春と知れ　石斧
人を茶にしたと梶原くやしがり　雨夕
いそがしさ鮒に正月ものを着せ　枡水
立ちそうにして又嘲す女客　かてう
雨舎り嫁はしよつたりおろしたり　石斧
はんれいは干物はうらぬ男なり　三交
割箸を片々無いと大笑ひ　三朝
朝日の利益新造の客を呼び　玉章
精進日女郎箪笥へ手を合はせ　同
すみの方からも手の出る三會目　雨夕
輕井澤織女も交る大一座　かてう
吉原の鐵炮四季にかゝはらず　三朝
堀の鶯聞いて來るねれた嫁　芹丈
有りがたさ御庭一ぱい江戸の町　雨夕
髭なでて來たは大きなこけ衣　不醉
後姿を見せぬのはさくや姫　雨夕
本望さ島と一箱目立つなり　文集
鳥籠の口鶴がおりしめる也　かてう

むかごつるはびこる二十餘年也　　三朝
ほの〴〵を讀まぬは不人相で寐る　　柳水
花のちるたッび小つまを大つかみ　　文集
わび言のそばでしほれるかきつばた　　柳水
木のうごく度よみがへる暑氣見廻ひ　　かてう
殘暑迄陣をはつてるいゝ質屋　　同
通ひ路に文や袖すりいゝ名也　　玉章
孝行も四つ手不孝も四つ手也　　雨夕
あかるい手書き四里四方書きちらし　　玉章
大あばた角兵衛に錢を入れたやつ　　雨夕
旅の氣休めは女房が大あばた　　同
唐の首三つ付いてる安花火　　三交
吉原も一度締めうりしたところ　　同
神鏡へ一羽々々にうつる也　　柳水
龜井戸のふぢ其時のふぢでなし　　矢正
あすありと思ひ吟ずる花の宵　　文集
田は稲荷畑は狐で名句也　　三交
耳に聲目に月斗り置いて行き　　霞朝
錢金もなる木繁花の御縁日　　矢正
よしの山藝者を一人捨てた所　　三交

浮舟で篝火を焚き蓮をほり　　雨夕
下りはで掘を出て來るやかた舟　　霞朝
ひざもとへひた〳〵と來る三會目　　同
龍宮の聟をも入れる厄拂ひ　　三交
うぐひすの冠を虫が着て光り　　同
毛氈をたゝむと階子ばッたばた　　柳水
どつかどうとうふの中へ下駄を入れ　　同
寺に無い釣鐘龜井町に出來　　三朝
土手を行く女房目尻が上つてる　　雨夕
出て行くもすさまじいねと雪の朝　　同
髮を結ふにも張かたを入れるなり　　三交
肥後米の俵をしめたやうに卷き　　かてう
折にふれ地下をうらやむ緋の袴　　錦鳥
春日の縁で結構な笠を召し　　芹丈
蜂もとんぼも名の高い勇士也　　かてう
入王の供は大かたなりあがり　　霞朝
盗人の兄嫁歌が上手なり　　芹丈
金銀を猪牙と響で捨てに行き　　三交
平家方末期の水の鹽からさ　　霞朝
二命をかけてめつからぬやうにする　　文集

恐悦さふきのはたけへ種を蒔き　同
梅つぼを出る六月の御献上　雨夕
御物入鶴のびつこが千羽出來　文集
神佛の外に燈明手がらなり　芹丈
一箇所はさくらの中に水車　かてう
木曾殿斗り山吹に實をならせ　雨夕
月に村雲花嫁に頭巾也　同
あいそうに福々しいと嫁を譽め　枡水
狐火を一月とぼす賑やかさ　霞朝
江戸風にお見えなんすとお針言ひ　芹丈
そのなれ初めは明店と下女が戀　同
歌仙で見ても下紐を相摸とき　三交
御吉例鬮から竹をさし上る　錦鳥
御安産あし邊に田鶴の鳴く時分　石斧
大雨後此松俄に垣が出來　雨夕
しけるはず雲のうへからたつの口　三交
春の日に抜參りする大ぞしま　三朝
とつときの御物見へみんな出し　霞朝
八景が嫁のふくさにちッと見え　三交
羽子の子で嫁左きゝ見付けられ　石斧

瓜畠狸はゑんりよなしに喰ひ　雨夕
行燈も戸ざさぬ土地の賑やかさ　同
息子には竹娘へは虎のくわし　不醉
生醉の前を合はせる草復取　石斧
牛房の次に書出しを又配り　三交
ほまれさは久しぶりにて人がぬれ　霞朝
頼光の寐間の笹がにおッかなし　芹丈
三月と五月のやうな壇の浦　同
五條ばし其頃何かしら拾ひ　雨夕
親のばち湯殿で當たる松の內　不醉
家老のはちと大ぶりな石を建て　霞朝
洗つたらとんだばく物手塚取り　同
ほころびた衣手にはく縫合はせ　錦鳥
いざさらば翁も酒がなると見え　玉章
御姿の歌書は枝折に撥を入れ　雨夕
はき溜の鶴鳥籠へせげん入れ　三交
毛氈のうへぬき足の見ともなさ　霞朝
半日かゝり餘所行きのあたま出來　文集
雪ころばしを息子するいたい事　霞朝
麥畠からびくをさげおよいでる　玉章

疊屋に有る古近江は直にならず　三交
奥様にお指折らせる川づかへ　霞朝
ほの〲の鏡うれしい顔うつり　三交
鋲打を黑棚にする花の山　かてう
兄弟を見に行く春の宿下り　三交
鳴物なしに諍出すどら息子　文集
女郎よりまだも鰹と女房言ひ　同
おさへた〲五兩で事が濟み　雨夕
餘寒去りかね仲の町そだを植ゑ　玉章
番がさと蛇の目あやしい茶屋の奥　かてう

芹丈追善　樂評　雨夕

てんねんと鳥も慈悲ある御山也　かてう
紫のゆかりはるりの伽藍なり　窓梅
くわん音と地藏百首に入らせられ　文集
切りかぶも掘れと僧正下知をなし　同
ほと丶ぎすよりも奥様お待かね　晋風
文殊より普賢ぼさつは乘りおくれ　一德
江戸染の色不可なりとのたまはく　三交
迷子の塚で名所がひとつふえ　同

・ノウシヤとはかんしんしたるはかり事　同
四角な文字の中でよむ三笠山　不酔
魚尾の黑子で姿斗り御てうあひ　文集
松と紅葉の眞ン中を花が散り　有幸
世を去つた翁朝日とうしろあひ　川烏
人丸を枕時計に奥でする　霞朝
御打身はいかゞさて〲い丶御歌　窓梅
入山に星じるし代金三歩　美德
威風りん〲と花かんざしが鳴り　蚍內
底ぬけの軍をしたは桶はざま　譚雅
じせいの側に勘當はうづくまり　かてう
海上で知盛ひとり口をき丶　有幸
寐むい眼とぶつてうづらとさし向ひ　鬼鄉
ざんねんさもう孝行はならぬ也　文集
精進のさかな朝夕た丶かれる　別井
源氏が寄つてかしましい御廣敷　霞朝
笑ひなんすから猶出來ぬと新造　枡水
入相の頃に鞠場は香るなり　有幸
箸紙も禿こはがるしんだ客　名葉
何も無いそうで干物をやく句　鬼鄉

くらへども其あじわひは入歯也　儘成
どこで落したとは無理な尋ねよう　三交
腹のいゝとんびこくうに高く舞ひ　龜水
時は今五つだもッと咄しねェ　英子
もうご戒やぶつて合はぬ百旦那　汐風
狸寐入りを狐來てゆり起し　泥有
傘に呑まれたやうなせまい路次　英子
金をしぞ思ひ引舟いせや借り　門柳
玉みがかざればせけん連れて來る　狸疊
細見に醬油の印だと御用　文集
上段によきをかまへて眞木を割り　蝶々
二つ三つ切る眞似をするちんこ切り　汐風
みかん籠霜よけをして苗を賣り　三交
さうじ下女たなびく蜘を手で拂ひ　英子
だいぶけつしると講中吸付ける　門柳

同　和笛評

物しづか公家衆のわらし稀な事　雨夕
釋尊は施主斗りでも五百人　矢正
御舞臺の側はしやうのう匂ふ也
家の寶となさばやと鍋德利　蝶々

大地へむだ指をさす京の釋迦　英子
增上寺空に知られた雪ばかり　丸龍
知恩院ふる日に建てた堂と見え　かてう
佛閣も櫻も奈良は匂ふなり　丸龍
ほとゝぎすよりは奥樣お待かね　晋風
唐で譽めるは雪の山雪の舟　一德
文臺の出るは風雅な手向也　枡水
忠臣は達磨の衣色を上げ　玉章
有がたい百首にばゝァふしを付け　鄕山
おぶはれた禮は其儘寺號也　矢正
山號は息子寺號は母を入れ　雨夕
ちゝぶ坂東西國を具へ入れ　窓梅
寶がふりますとみのや笠を出し　門柳
手ばしこくして呵られる金屛風　文集
ほの〴〵と芝居も內はからす飛び　門柳
事大そうにほころびるさよごろも　此內
水車龍の住むのは花の山　玉章
下屋敷竹の子時分花のうら　同
行水と晝寐の間にはしを懸け　同
もちつと下げてくれ給へとお留守居　雨譚

春なれや娘何かは知れずじれ　鬼郷
二三帖源氏虫賣持つて居る　三交
海上で知盛斗り口をきゝ　有幸
味噌をすれには重氏もこまる也　かてう
なから半じやくで仕廻つたは義仲　偶中
底ぬけの軍をしたは桶はざま　譚雅
母の千聲より親父の一こゑ　雨夕
藥喰見て居る顔のうつくしさ　文集
尻をたゝいて損をしたは秀郷　雨譚
お打身はいかゞ扱々いゝ御歌　窓梅
甘露梅へも山形のほしくだり　門柳
年々歳々玉菊は客をよび　霞朝
ひんの能い素見机のうへでする　狐聲
ほとゝぎすしごきの帶のこける頃　素調
どこで落したとは無理な尋よう　三交
早手廻しにかね親へぶちまける　文集
金言を聞き〳〵銀を廻してる　門柳
四十七つかへは鯉も無常なり　交調
茶器迄も所持でおいらんしゆらい負　霞朝
役者にしてもゆび折の牡若　三交

しらぬが佛お竹どん氣は無いか　雨夕
ふんばると籠いつぱいのきり〳〵す　同
ちゝイとばゝアこきませる彼岸中　郷山
手の內のほうしや斗りをお竹する　窓梅
月よりも息子が先へもれ出る　文集
物になる禿即席唫をつき　雨夕
腹のいゝとんびこくふに高く舞ひ　龜水
あねェは女郎弟は角兵衛獅子　雨夕
いゝかと思ひ尻ッぽを豕はふり　龜水
長髪へ鷺やかゝしを差して置き　交調
生けたごをおさへ助六にちて居る　かてう
無縁だと見え不斷着な石佛　矢正
腕香を契情の焚くまづい事　窓梅
そのつらでからしをかけと亭主言ひ　美德
寐むい眼とぶつてうづらと差向ひ　鬼郷
精進ものゝかなしさはのめぬ也　丸龍
小姑も芝居願はぐるになり　霞朝
心中に竹村札ひつぺがし　雨夕
もてぬやつすッくと立て帶をしめ　春駒
いゝ鳥が來たぞと松のうへで言ひ　有幸

引出して小鍋だてする飴細工　雨夕
長蘈をきけて淋しい肴臺　丸龍
花を見るつらかさ女房過言なり　春駒
中宿へ御用聞者に頼まれる　かてう
くらはせるやうに鏡でたぼを見る　有幸
上段によきをかまへて眞木を割り　蝶々
時は今五つだもつさ咄しねェ　英子
安上戸椀へきせるのらうをすげ　龜水
下座敷を六部は作り付けにする　美德
かるゐ澤太夫あかねの三つぶさん　狐聲
いやな男も來ようなど淺ぎいひ　同

催主　文集

誹風柳多留二十九篇終

誹風柳多留三十篇

寶暦七丑どしの頃より、川叟初て萬句合の催しありしより、年々日々のはんゐい言葉につくしがたく、一會の寄高二萬五千六百餘員に及しは、實に稀代の判者といつゝべし、其撰の秀句柳樽廿四編に滿、五々の編より廿九編までは和笛子の評なりしを、予又古翁の撰置れし句々にて三十編より撰編して、諸君の御求覽をこひねがふのみ、

文化元子年　花浴庵一口誌

物着星大たばに出る夜着ふさん
日は西へあつさは石に殘り居る
好色な男はけつく妻持たず
小便も此やしきではこらへる氣
まよい子の札あく筆ではんじかね
下手りよむ本は鼻からふしが付き

いんろうの中で目出たく毛がはえる
人間の巣立ち成るべし宮まゐり
親の目をがつしき乳母がせわでぬき
萬歳におくの岩戸も少し明き
ひとさかり危しいを喰ひ水を呑み
いとしやと云ひ〳〵直切る拂ひもの
晴天に井戸が笠着る下手の鞠
開山は廟所の内のいもがしら
損をするかたへうなづく若ざかり
三人できすならやう〳〵五六疋
元日の町はまばらに夜が明ける
空を見てさもくやしげに粘をすり
いにしへは某今は何もなし
釣がねも引巻きそうな長い文
情にてうかむ瀬もなき井戸の鮒
いん判のふくさで母は目をぬぐひ
となりさと鎌でおしへるはるがさき
いき出しの無い呑口はしやうなき
ほめながら合點のゆかぬ寶もの
子を持てやッぱり親の恩になり

大佛は衆生さいどの錢を化し
大判は財布へはいるものでなし
よし原の春ぼねの樣な中の町
立聞きの雪に足跡置いて行き
おとがいで額の筆法はねてほめ
書付の下には切れがありたがり
百石を敵に貰ふ向ふきず
殿の名を引摺つて行く跡押へ
間夫は首を拾つて蚊に喰はれ
浪風も相應にたつ男なり
釣だいもさられる時はひよろつかず
申し子は神と間夫するこゝろ
じれッたさ帶をしめれば紙が落ち
宮すゞめ爰にあらわれかしこに出
地謠も共に湯となる道成寺
釣好きは廣い海にて氣をつめる
かんしやくは折々貌に藝をさせ
夫さへ知らぬ所をいしやが知り
おくの手は鎌倉道を知つて居る
うかみ出る時乘物の供に醉ひ

人宿でまだ聞いて居るほとゝぎす
わたくしは〳〵とてにげッ尻
山高うしてたつとがるけんどん屋
大黒を盗んで手桶置いて來る
足おとで二つにわれるかげぼうし
うそと餅つく覺悟するとしの暮
附木屋は腕にまかせてぎッくぎく
穴を出て穴へ入りまた穴の世話
羽子の子をとりにおとなを借りに來る
日向むきいつもかはらぬ蠅たゝき
借金を傘でしのぐで片身ぬれ
びんぼうにして大黒はずいとくじ
おはぐろを付けて娘はやぼになり
說法の場でさへ欲のすわり所
しやくじやうも遣ひ樣にてどら如來
吸口で灯をいじり消す碁打客
藥師より杓子の利生はやまわり
神々の手のくぼほどな山おしき
日本ばし何里々々の名付おや
國々の理窟を泊める馬喰町

無いやつのくせに備へをでッかくし
門松は甲に似せて穴をほり
太子講うち氣な手合あらばこそ
松に降る雪は禮者の間ぬけさせ
見に來るも知れぬと顏にへげるほど
三寶は片足あげてうり付ける
御內義の名は細見にまだ消えず
作病もおなかゞへればまめるなり
井戸替への日數斗をかぞへて居
御はつにと斗り姑を楯にとり
關守も淋しい日にはもの咎め
掘出しといふ斷りは井戸茶わん
へそくりを子の雷につかまれる
遠山の裾に繪かきのもふけもの
のしになる蚫の貝のふたおもひ
子のやみに油をさしつかきたてつ
しまがらを見て反のまゝ眉へ當て
菅笠の紐があくびをちつとさせ
蚊やり火を給仕の盆で消して行き
見めよけりやするほどの事御意に入り

竹鑓は切落しても元の鑓
うら白が草ずりになる具足餅
夫婦旅晝は道づれ夜はなさけ
琴爪で灸のまわりをしらべさせ
其譯をかんでしまつてぶッつける
鶯がよければ籠に欲が出る
言ひにくい手をもちやくちやに畏まり
かついだはうそ手を引いて逃げた也
一のもり喰ふた樣なり鯨帶
紙入が胸につかへるおりこゞみ
さしがねで寐たり起きたり轉げたり
晝過の娘は琴の弟子をとり
口紅粉が時々殿の耳に付き
まッ黑に烏をつんだほしか舟
大判を一分に崩す餅むしろ
失念といつぱりつぱに生根なし
振袖を船にして行く勝きしやご
親ゆゑに違ふては出ぬ物狂ひ
子心にふしぎな男側に寐る
かんにんの床には棒が邪魔に也

羽に判の有るので骨が叩きよし
獵人の念佛は玉のそれた時
朝鮮で引きぞ煩ふ桔梗の根
仕送りが付くと御姿おんだされ
江の島のそうじは浪がほうき也
傾城も誠になればひれが落ち
女郎から樽同前の文を入れ
腹のたつ時は笑ひに念が入り
出る顏が居なりの顏へあてこすり
おはぐろが付かねば顏へしわをよせ
御亭主が留守で鰹を手負にし
料理人客に成る日は口が過ぎ
狩人の下手に村中棒がふり
火繩をばかわぬとたばこ身にならず
我戀は札錢出して顏を見る
請狀が濟むとかひたい物斗
樽酒が德じやとおもふたわけもの
殘る蚊のはかなく顏へ行當り
秋風の寒く吹消す宇治の夜
朝貌は酒の呑まれる花でなし

摺子木を市から市へ喰ひへらし
顔に火を焚いて祭の鍋の數
樹々染て寺を寺にはして置かず
二三間先から内の脈を見る
人に言ふ異見を聞いちや一人前
籠ごしのみやくは病の綱渡り
雲の帶ほどけて山はまッぱだか
色男いまだ大家に預けられ
舟ちんの外に菜ほど釣つて來る
虫の音にもう冬の氣が女房付き
片かげが付いて出かける涼舟
衣屋で見ても氣のうくひぢりめん
元日の規式に隙な汁のわん
身代はなくしまゐらせ候かしく
かしあげの砂は天地へ身をそがれ
切文を見て居る顔は顔でなし
芝居になるぜんぴやう宵にげじ〳〵
ふん切た事も知らせず四火をするゑ
取卷いて雪乞の句をよみなんし
叱つたり笑つたりして金をため

鷄もなけ鐘も鳴れ〳〵振られた夜
振袖の引込ちゑはむごい事
鶉から土間へ仲人指をさし
初陣の人から先へ見立てさせ
針仕事手のかるくなるほとゝぎす
大黑のすねをかじらぬ大三十日
雛店ではづかしそうに直切つてる
是程と言つてきせるの尻を出し
細見に素人は細く店をかり
御物見は皆とッときの顔斗
言立てにする裸身の美しさ
うしろ見にあやうく見える茶せん髮
掘出した佛を錢で又うづめ
大黑の住んだ一間は在家めき
入れ所も有るに乳の下やぼな事
負公事の方へ娘は行きたがり
傾城のりんきははさみざいく也
傾城を地者にするで地面うる
一ト夜に染めた紫は黄をうばふ
干うどん夜伽親わんにてくらひ

人別を日出度事でぬける也
ものゝけがよし町へ行くむすこづれ
内裏造營四分板さ小判なり
わるい道手が板べいを歩行く也
地紙うりがまんが過ぎて風をひき
天井を物置にするいしやの内
げん俗をする弟子を持つ松が岡
目と耳はいゝが口には錢がいり
翌日むすこ五六人居る髮結所
川立は川御姿は產んで死に
居眠を覺ます遣り手のせきばらひ
立膝でうつはかぢやの亭主也
十露盤で貰へば嫁もげびる也
物着星かたみを貰ふなさけなさ
ほころびる命を歌でぬい直し
谷ぐくで親にはなるゝようにぬき
色事の毛もない時に言名付け
車引咄をするにふしをつけ
毎日々々灸をばあしたにしよう
がらくたをつんで隣へおさづれる

細見にまでのけ物の樣に書き
あかるみへ出されぬ者を呼びたがり
月にうそ天にいつわりなきものを
下女かごの鳥だと文へ書きやあがり
人寄を百人すればひんがよし
氣いごくなあげまり四人隙に也
獨り乘る舟は思案の外を行き
持つたのでむすこ仲間をはづされる
口々に姿をにくむ御大病
後ロからかゞみの顏へ笑ひかけ
女房は此ごろ髭をそりならひ
ふみこたへ〳〵して舅死に
白むくを着てすみッこにかゝんでる
かうじやの内庭土のろうが見え
一チ月斗りけいこして寺を出る
ざつとした瀨戶物夜の市にうれ
鹿を追ふ獵師にたいこつきまさひ
いま〳〵しいふくの神は持參なり
面壁はかざり御門はかざりなし
四つ手駕まがる目當ての榎木也

生酔も祭の跡の賑やかし
髪がゆわれて餘の家へ又通ひ
月花も其内にある一とかまへ
ふの切れた傘やつとかしてくれ
おとで向内に針箱かゝみ立
這入てゝぞうさくをする乗物屋
文を書く側に淺黄はぶつたをれ
瀬戸物屋ほどがらつかす脩禪寺
さむがつて質屋の見世でだゝを言ひ
病人を取寄せて見るはやりいしや
つぶれ前せげんまで來るむごい事
尻引つからげ立向ふ下手のまり
大手は甘酒からめてはかるやき
道具屋にあるのはにげた具足也
大三十日儒者ひやうそくがあはぬ也
母をころすか嫁出すかとむすこせめ
出した文みんないきるといゝしまひ
嫁がのろい殺しまするとしうとやみ
まけをしみ骨と皮との馬を見せ
御殿山むなしく歸る所でなし

傾城の世話のないのがほとゝぎす
戀の盜みをさせぬからやみいだし
鍵はさみ箱で道具屋店をかへ
女房にこび付いて居るみぐるしさ
獨者死ぬとぬかみそまできらし
よせ本を三ッの糸にてとじる也
三味せんもね糸になつて流行る也
船べりへ吹殼はたくやす涼み
はつ鰹どッさり來るとげびる也
傘をさそならかすがのはきつい事
首などがぬい付てあるいゝ干物
はらみ句は世上へ知れて小町なし
武士をやめ百人の列に入り
ごみのする事を屆けるいそがしさ
簑の市斗は江戸をあてにせず
なら茶喰ひ〳〵品川をむすこきめ
八朔は百姓よりはくろうなり
調合がさつそく出來た夢を見る
ふんどしもいらぬとむりに貰はれる
通らねばならぬ所に禿居る

朔日の雪物さしでつもる也
交り廓一分うや／＼しく居り
船頭の足音を聞くいゝすゞみ
ゑり人で据風呂桶をかりにやり
ちよこ／＼と迯てかぢやの火にあたり
もつれ糸おへなくなると嫁にやり
竹馬の馬子は古着をうつて居る
鳥かごの木になつて居るくみやしき
きん句だに禿雪こん／＼と言ひ
返答はどうだといへば春の事
ひきながら三味せんはこぶすゝ掃
四人が皆がつ／＼と膳につき
うせ物を存せず湯から娘にげ
嫁よんで直をするどらは高が知れ
にしき繪と墨繪と行者持つて來る
三だん切て一ト切はさしみなり
よ火をすへやれとおんべい母がつき
ごうさらし日本の地へ二タ人出る
月の前かこち顔なるうれのこり
どこへでもくッついて出る馬鹿亭主

はな毛をのばし取膳でくつて居る
ちいさな腹が獅子の病み上り
内甲見ぬいて質屋かさぬ也
かやの聲かすかに聞いて雨やどり
にえきらぬ内に中屋の藏が見え
川へのめり落そうなが名木
青空がなくなつてから花はじやみ
ごぜがつらしよぞんが有つてはらぬ也
手ぶつてうかやに乳房を二つ三つ
不屆な智恵生酔に金をかり
精進けつさいをして去狀をとり
谷中への年始三日と當ゝて置き
おうにんは山と川との軍なり
扨珍らしいたいめんで傘はない
中の町傾城に威の付く所
うんざりさ男のそばに耳だらい
見定めるまではほつても嫁いはず
す一分はすけんにちッとひんがよし
歌のちんが餅だから詩は酒だろ
江南の花北國へ三年うゑ

鳥さしは一先づひさり笛を吹さ
ふられたらおこもく\と内を出る
市二日むすことうから仕切ごき
小まいかききせるをわすれ廻り道
御むかいは先づ嫁からと願つてる
衣桁にはいつぱいたんす何もなし
きのふまで白いやうじが黒く成り
惚れられるほどは殘して後家の髮
鈴の音をそこをよせる美しさ
よし原で雀といへば戀に成り
俄雨嫁をくづすに人だかり
こびり付いてゐるのと誘出しに來る
さゝもあがりますげにとしうといひ
杖にあごきけて木ちんを直切つてる
おやぢのつらが十ヲ有つて六づかしい
寺號とは大まちがいな紅葉なり
いゝ年をして傾城のじやみをこふ
いんごう最中玉だの丁子だの
顔はうつくしいがつらはにくい也
ざつとした婚禮仲人ひさり者

町人のげびは坐數へ藏をたて
名付たりあたりで姿がもうくもる
からの有樣に萬歳國をたち
ぶくく\として改める瀬戸物屋
兼好は毒だといふが呑めるやつ
見切らぬと果てしのつかぬ渡し守
めん服で居れば禿もこわくなし
春は姉夏はおとうと尾張町
研ぎすまし胴切にするちんこ切
眞ッ白にするので重い衣がへ
なぶられた腰元ちんをけしかける
內證へ入ると傾城あわれ也
三味せんで土手八町をつき直し
虫干のはなッぱりには嫁のもの
傾城の氣ばらしになる後ロ帶
立て居る樣に棧じきに角力取
ほめ言葉役者ひやく\物で居る
をしい事さられた年に舅死に
おはぐろに禿手なべをさげて來る
待人來らず大師へ參るなり

をしい事旨つんぼういせや也
結納を茶屋から申し訴人する
ちよッきり一寸した舟へむすこのり
にくい事御離縁の使者妾が兄
夕べにはきり翌には舟と言ひ
じやうはりが有つてせつない御椨上げ
琴二めん座敷の内を廻り道
うぶけな傾城知るよしが來てあげる
毒と書いてもすばらしい直段也
夏の月其夜半分はめて置き
長唄をまへびろにやめ廻ります
三年は男日でりの旅へたち
母をせびつて行くうちは人がよし
よし原へ夫婦して行くつぶれまへ
日にやけた男御用に何か聞き
浪間を分けて緣の無い寺へ行き
傾城の尾羽打からすいゝ男
砂をはたいて居る内に馬見えず
こじきかと思へば四つ手かりて居る
何宗か知らず和尚が雛をかひ

袋棚何も無いのでげびぬ也
傾城をかける斗りは京になし
娘でも居るかとまずい夜伽也
御内義が若衆になりて皆ンな惚れ
いゝ夢を見て粟の飯まづく成り
材木はもうかるものと遣手言ひ
御美しかつたそうだと後妻言ひ
二三俵あたまのわれる人がのみ
一チ時にきせるをはたく供ぞろへ
びいどろをさかさまにして嫁はしひ
から傘をかして泥坊よばりする
鮎ともろ共に踊子さびるなり
智恵の出るまではきせるを廻してる
肩ぬ氣で惣花を打それッきり
こび付いて居るのを御さい引出し
をしいたんすを傾城はあそばせる
乃ぶくらで芋をむくのが花の宵
大あせで天上人を相手どり
むす子のとうげは八月がむづかしい
金のなる木を駒下駄でながめてる

ことのはし後家へ小判のかたみわけ
にえきると四つ手はさけび〱かけ
どつからの文と內義にもぎ取られ
細見をいせやはとんとかへり見ず
夕立にさしかゝつてのむしんなり
けちな晩郞下ばッかり音がする
待針で手をやたらつくくけならひ
花色の褌をするどやのかゝ
後帯前へまわすと氣さん也
請出されからしりに乘る輕井澤
楠が來るとほうきを內侍立て
芋の親嫁にはゑごくあたるなり
きやく樣のうでが鳴るぞと輕井澤
お袋をくるみばかして來た紅葉
遠乘の供ひとりふえ二人ふえ
梅花を折て武士へ出し恥をかき
絽とちゞみ斗りおつゝく金屛風
せい人とむすこ此頃中たがひ
浪風を山にたゝせて名歌也
四民のいッち上に居てもてぬなり

鳥のない里で一ト聲繪馬が鳴き
あたら物ばい女にしたは高尾也
よしの勢しづか玉屋へ大一座
ふきぐみを舅はにがい顔で聞く
三つぶとんぼん女の及ぶとこでなし
笠紐の跡かと內義久しぶり
乘りつけぬそうで附木を駕へ入れ
よく見れば四つ五つある美しさ
馬付の花うりも來る雛まつり
傾城のたんす飯時あけるなり
床花をうらへ取こしもてるなり
ごふく店天命しつて女房もち
まッこうへかざし木具屋はへいで居る
きつとした形で死をしろとうり
よし原を一見しようとたわけ者
振は九よ留めは三ッよとてんがい屋
としよりの冷水うりははやらない
床もやみ歌がるた止む氣のおもさ
三太郎四五人でかしうけ出され
親ぢの耳へもれ出る月の事

女房とどちぐるつてるひやうたくれ
椎の實のからは袋へ入れてすて
色外に顯れ四火を止めにする
目の玉が十ヲづつよつてわるくいひ
今年程榎木をうゑて緣に付
湯島おろしにばち音も交つてる
盗人こんじやうあばたへ文を付け
はだか人形美しい嫁かざり
出ごうしをひつしよつて行くばかな形
堅いはず御門は石でねだは鐵
早いはず四つ手にひとり先ばらひ
杵やとみぞやしやうばいに似合はぬ名
けちな事素見とび込む水のおと
俄こもかぶりを其角こしらへる
うろたへて座頭に評をかくす也
こがね虫よりはだかむしむすこよび
千ごりを取る内衣うばいとり
かんどうをしても母親ゆすられる
ごふくやも女房の有るはげびる也
をごりさい中門やぶり〳〵

金屛風札をうるのでげびるなり
二つ三つ廻して鋒つかうなり
口を追て大へいになる九百兩
向ふのひとッの跡仕立屋アなり
歌がるたうばは十まいこみて入り
はまぐりは桃のみやこをふいたやう
わらびの中にいじの有る墓二つ
顏はさるからだはぶたで持參なり
十箇年ゆうよものびたむすめなり
名の高い材木や紀文とおくま
くらがへされてけがあつた妾が兄
こわいろのけいことなりでべらぼうめ
持參金せないとおもてざたになり
三會目には正躰をあらはせる
むりな事ひとり居なよと女房死に
男といふもの千日見ずに居る
すいりやうの通り八百屋のとうのいも
きまぐれな隱居としまにしやうといふ
女郎は付廻はし客はつけのぼせ
あゝらやうがましやと百ざでしやれる

山谷舟一寸さわるとあの世也
こんにやくをぬくと重づめ百ちがひ
一廻り一分餘につくわりに也
佛師屋をしても惡心はくへる也
一生けんめいの聲を出するゝふしん
京染も六十帖は美し〳〵
上天氣まくと三味せん先へやり
げきりんの樣な御顔がうれのこり
鈴の音にうまみのぬける御着帶
ありがたさ錫やるまいぞ〳〵
業にまかせて五畿內をそゝのかし
射落した跡はけだかい人だかり
どなただえそうは明かぬと花のるす
八千をのけて其餘は京で鳴き
二タ人へ二度に異見はじひなこと
殿までのちじよく刀を置いて立ち
米そうばゑぼしすおうでたつてゝる
しかたなく米屋かぶりにむすこする
辨當のふたへつくしで書いて見る
身うけがおとくと番頭さすが也

暮の文候べく候に書かぬなり
されども此人そうめんやたらくひ
三味せんを折る程のまじはりはなし
かんどうの內江戶中でかみをゆひ
いろは茶屋にて女郎をかいならひ
晝行けばかまはぬ歌はたつた山
やぼなあそびはたけがりに男まひ
ふりのあみ樣〳〵文をふるい出し
そッちへ行つてゐろとお袋金を出し
せき候はあら心なのものもらひ
けし坊主とう〳〵ゑらい國をとり
肴屋に一分の首をおとさせる
くたびれたそうで姿をあすしまひ
賴政は水たくさんなうたをよみ
火のきえたたとへにもれたにぎやかさ
中宿は上封して持つて來る
あてもなく煩ふ娘十八九
言葉たゝかひことをはり去り荷出る
よしの山引つきりもなくほめて置き
となりの椽の下でかうじをつくる

孫六はむこ引手にはよいかたな
乳の出る女房をあいた口へよび
用のあるなりで折ふしじやすい來る
勝にげでひんのいゝのは陶朱公
切落し火打を出すは八つ下り
二虎食をあらそひくつわ金もうけ
いさゝかな渡ししろうと舟をこぎ
から傘をぐる〳〵廻し直をつける
あらしの庭へ雪のふるおもしろさ
袋の弓の出ぬ樣に御注進
十五日の御ざんねんを十四日
江戸のはり三會目には中だるみ
門の戸へ大入と書く旅のるす
梶原は歌をよむのがめつけもの
友だちに寐るぞ歸れとひとりもの
御内義をつめりおどけにしてしまひ
貰つたかしてぼたもちにかごがあり
こんぴらの神酒をひらいてはぜを釣り
辨慶とあてたに干だらくりやあがり
うるさくは米かし桶と手紙來る

はたらいた僕傘もかり下駄もかり
角兵衛じしどこで死んだかげせぬ也
八まんの前をすた〳〵明智にげ
兵法を知らねばわるい目つき也
公家の長柄は八九寸上をさし
かはづの三郎大いそすけん也
たんすにもありんすといふふぜい也
むりなこと富の取れぬをはらを立ち
きおいの身あへてそこないやぶつてる
かどひしがあつていゝのは火打石
ひかへろ〳〵ともぐらもちねらひ
一つぶとんへぶつすわりいざを言ひ
文使むすこがるすではじまらず
赤ゑいてひッそりとするおやくゑん
二タ人ぶち妾こそぐり出だすなり
神風にもうこりはてゝうせぬなり
初がねの下女を御かみへおして出る
内くらへみつじに四十五人來る
うらはかへして中ぬりはにげる也
一チの寶ものはお竹のうけ状

寐た人をさじでおこすではやる也
御生國御寺の名までたん生寺
雛に牛をもちひぬてんま町
荒木をもしたゝかふんだ初衞門
米つきは箸をしごいてくいかゝり
いも神にほれられ娘直が下り
繪の樣に扇が谷を四五羽まひ
はやいこと五十三人手ぐりなり
むらさきの石のすゞりで書きのこし
地名をば其まゝにして花の山
大王を百姓にもつ御大ろく
仲人がなれば一萬二千兩
じゆん足のわがこくげんに鶴が岡
大黑の御宮は錢の出たのなり
ふり袖をまるめる側にいゝ男
ありがたさふだんの帶をしめて居る
根のはえたそゝう三十六丁目
ざらはれの入札になるつらい事
外ぼりをうめると四つ手まだはやり
六百九十ほどじごう若く見え

花のゑんもみぢの賀をもむすこ好き
おんみつを不二のふもとでつぼねいひ
空にならつて名月をへんがへる
合紙をしこたまあまし叱られる
ゆふ度に丈長をたつふたしなみ
殿にいわせて美しくしらんかほ
おッかなほしい札のある日本ばし
雙六とれいしの側に美しさ
そうめんの邪魔して洗ふ硯石
あやうさは花と芝居と首ッ引き
國みやげにと見たおしがうじやあがり
めづらしさきく一ト聲も百歩一
とうろうの跡は傾城八九なり
屛風たおれて御はつかと嫁はいひ
一本づかひの武士二きでおつちらし
いたづらにむこさそつてよわらせる
笑ふ門泥坊の來る市二日
そぞくとぶんごとなり同士べらぼうめ
いさぎよく白むくを着る五丁まち
片じまいむすこよッ程ちゑがつき

みゝなめすならとから手で下女は來る
ゐんしやうを玉屋はおもしろくつかひ
うそも少しはつきますとせげんいひ
よし町の尻を旦方までくらひ
亭主は三めぐり女房はうたぐり
すいこでん酒を呑んでは目をまわし
中條へごさいの女房つれて行き
片そぎの箱へ辻番手を入れる
切上げたたらいふんどしつけて置き
實あくをしあてゝ後の女房來る
桑の木の下で女房をめつけ出し
またおれだなどと切つてる番たばこ
御立身雨ふらぬ日もみのと笠
こわい物立ぎえのした鼠なり
人面じうしん油揚をねだり
七夕に無筆小よりをよつて居る
足代ロを引くと地主の無心なり
かわらけの錢跡へ來て下戸はらひ
居なじんで此頃は花ものをいひ
こび付て居て楠にるすといひ

いふもさら也ばん町でむごい下女
けんをけんとして上戸は呑んで居る
どうで見せねばならぬはをかくす也
女にあてられくわい氣がむづかしい
やッぱり鶴のよわひ程御もの入
御手かけの指十指よりこわい也
こぬ人を入れ百人につがうする
ふけい氣な顔を高尾がしても來る
子どもよゥからかさかして上げろなり
さッき見たはんにやびつだにあほう共
がくやのばくち鎌倉の諸大名
五六日ゐ樽のあかぬきつい下戸
おそろしき中條金をかすうわさ
あのにげるざまはとてうひ又名のり
はしごまで御むかひに出るけちなばん
つか〳〵と這入つて升を引つたくり
さかやきそつて髮ゆつてしちをおき
間男は此はしらだとくわん女いひ
下手のけん手水をかける樣に出し
女房にあきやるなよとたわけもの

あけすけでやるのが女房きついみそ
あぐらをばやはり〳〵旅見まひ
大たばにつまをとるのは中の町
ねぐるしのあしたひらめが大さがり
おし入で聞けば此ぞうりはだれだ
よし原は朝＝品川夜のみだ
うそつきの御師匠ばん三分なり
業平にされたははぢにならぬ也
ふだらくの岸うつ波をのりこえる
したく金來てはきだめを鶴は出る
唐土にないのは山の四方めん
開く時いなづまのするよい屛風

俳風柳多留三十篇終

近世文藝叢書第八終

山田清作
神戸龍治校

（近世文藝叢書第八奥附）

明治四十四年三月廿五日印刷
明治四十四年三月三十日發行

非賣品

編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者　早川純三郎

印刷者　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
國書刊行會第一工場